朝日真也の魔導科学入門

Dr.Cut

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朝日真也の魔導科学入門

【Ｎコード】
Ｎ９７２９Ｕ

【作者名】
Ｄｒ．Ｃｕｔ

【あらすじ】
人間嫌いの天才物理学者・朝日　真也。
ある日大型加速器の爆発事故に巻き込まれてしまった彼は、気が付くと見覚えのない図書館の真ん中あたりに座り込んでいた。
まあ、最近では誰でも一度は経験するくらいよくある話である。
お約束の様に彼を召喚したという魔法使いの美少女曰く、現在彼女の国は戦時中らしく、彼は敵国が召喚した異世界人達と殺し合いをしなくてはならないとかなんとか……。

「帰っていいか？」

途方に暮れる彼をよそに、ノリノリで命を狙ってくる、色々な異世界から召喚された魔人達。魔女と学者がバトる時、究極の“異文化交流”が幕を開ける。

物理学者と魔法使い。対極的な二人が送る、異世界バトロワＳＦ（サイエンス・ファンタジー）。

1.　この教科書を読まれる方に（前書き）

こんにちは、作者のＤｒ．Ｃｕｔです。
えーと、このお話は、“アプリの街”っていうサイトで書かせていただいていた同名携帯小説の加筆修正版となっております。
ちょっと訳ありで更新出来なくなってしまったので、ＷＥＢ小説に移植しようかな、なんて思ったりしてまして……。
その、そんなわけで、小説としてはちょっと読みにくかったり、色々と違和感があったりするかもしれません。
はい、可能な限り直したいんで、気がついた点などがありましたら、指摘してくださるとうれしいです。

1.　この教科書を読まれる方に

１９０３年、ライト兄弟は世界初の動力飛行装置を開発した。ライトフライヤーと名付けられたその機体は、５人の観客達が見守る中、５９秒間に渡って大空を駆け抜けた。古来より人類が目指した幻想が、また一つ実現された瞬間である。

１９６１年、旧ソビエト連邦は人類初の有人宇宙飛行に成功した。嘗ては神々の世界と呼ばれた天空に、人の身で足を踏み入れるという偉業。初めて地球の重力から開放された人類であるユーリイ・ガガーリンが手記にて述べた、“地球は青かった”という言葉はあまりにも有名に過ぎる。

１９６９年、アメリカのアポロ１１号が月に到達する。漆黒の天空にて一際美しく輝く白銀の天体。我々は遂にその場所へと降り立ったのである。月の大地に星条旗を立てた後、宇宙飛行士ニール・アームストロングは言った。“これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である”。ライトフライヤーが飛び立ってから、僅か６６年後の出来事であった。

さて、それでは現代に話を移そう。

この本を手に取った方であれば、おそらくは既によくご存知である事とは思われるが、どうも現在、月よりも遥か遠くに旅行する若者が急増している模様なのである。

漫画やゲーム、ライトノベルなどに顕著に記されている事実ではあるが、単衣に“異世界”と呼ばれる場所に召喚されたり迷い込んだり攫われたりする少年少女の数は、現在確認されているだけでも

年間約3桁を超え、我が国における少子高齢化を促進する一因となっているのではないかと懸念されている。

誤解の無い様に述べておくと、筆者としては彼らの挑戦を非難したり、突然彼らを拉致した“何者かの意思”や神、王族の方々に慰謝料や損害賠償を請求するべきだとかいう様な狭量な考え方を推すつもりは全く無い。

特に現代の安全かつ退屈な生活に飽き飽きした若者達には良い刺激になるであろうと思われ、心身の健やかな成長の助けになる事も少なからずあるだろうと考えられる為、健康にさえ気を付けてくれるのであれば、英雄になったり魔王を倒したりお転婆なお姫様と恋仲になったりする事に異論を唱えるつもりもまるで無い。

しかしながら一つだけ問題点を上げるとするのであれば、通常の場合、彼らは突発的かつ何の準備、心構えも無く見知らぬ土地を彷徨うという危険極まりない事態に陥ってしまうという事である。

確かに漫画やゲーム、ライトノベル等に見られる実例においては、多くの場合彼らには救いの手が差し伸べられるし、また彼ら自身も持ち前の勇気、知恵、そして何者かから与えられた超常現象レベルの特殊能力によって困難に立ち向かい、快適な生活と掛け替えのない仲間達を掴み取る事が出来るのだが、不運にもその様な幸運に恵まれる事無く無惨かつ華々しく散って逝った若者達も相当数いる事が予想され、突発的な事故としては航空機事故や落雷を悠に上回る危険度である事は否めない。

既に述べた様に、現代において若者は、いつなんとき月よりも遥かに遠い所に召喚されたり誘拐されたり何者かの意思によって時空の壁を飛び越えたりするか分からない状況にある。よって異世界に

対する正しい知識及び対処法が望まれる所であるという独断、もとい判断に基づき、筆者は本書を刊行する物であるとここで述べたい。

さて。異世界での生活においては文化や生活習慣、物理法則の違いなど様々な困難が想定されるだろうが、やはり一番の問題点となるのは魔法の存在であろうか。

多くの場合、異世界においては魔法、魔術、超能力及びそれに類似した力が存在し、また若者達も少なからずその恩恵を受ける事になるのではあるが、我々の世界において魔法を実用レベルで詳しく紹介した専門書の入手は困難であり、読者の方々がよくご存知であろう勇気溢れる若者達も知識の不足故に命に関わる様な重大な怪我を負う事が間々有るのは一般的によく知られた事実である。

よって筆者は、魔法に対する正しい知識は現代を生きる若者達にとって必要不可欠であると考え、魔導を論理的かつ体系的に理解する事が求められていると信じる。

以上の理由から基本的なコンセプトとして、本書は主に異世界や魔術を中心に扱う学問の一体系である“魔導科学”と呼ばれる分野を、とある青年の体験した事件、事故、及び異世界人との命を賭けた戦い等の情報を元に分かりやすく解説していき、異世界における魔導理論、問題点、及び厄介事等への対処法を詳しくかつ親しみやすく紹介する事を目的とする。

本書を読み終えた頃には、読者の方々も多くの人々が敬遠する魔導科学理論に対する苦手意識が和らいでいる事に気が付くだろう、などと一般的な教科書の前書きに使われる定番の文句をここに記し、筆者からの挨拶を締め括りたい。

さて、それでは始めるとしよう。
とある青年の経験した、
よくある数奇な物語を――。

2. 魔法使い　アルテミア・クラリスの序論

雷が雲ごと落っこちてきた。
部屋が閃光に包まれた瞬間、少女が感じたのは正にそんな感覚だった。

とにかく最悪な日の夜だったのだ。
彼女はその日、とにかく一日中酷い目に合い続けて、息をするのも億劫なくらいに疲れて、何もかもがどうしようもないくらいに嫌になって、だから自棄っぱちになって“ソレ”をした。
そんな正気じゃない事をしないと、彼女は正気を保てなかったのだ。

そう、それはただの八つ当たりだった。
彼女はただ癇癪を起こして、感情をどうする事も出来なくなって、ただただ自棄っぱちになって魔法円を書き殴って、思いっ切り魔力をぶち撒けただけ。

それがこんな結果になるなんて、一体誰が想像しただろう……。

本当に雷に撃たれたのかもしれない。
神経に流れた電流に脳が溶かされて、少女の意識は一瞬で真っ白になった。
劈く様な爆音は聴覚を潰して、五感なんて物はあった事すらも忘れた。
体中の神経が焼き切れて、脊髄を溶かされて掻き回された様な、恐怖を覚える程に強烈過ぎる負荷。

それは、世界の理を捻じ曲げた事への代償だったのか。
或いは、世界の理を冒涜した事に対する懲罰だったのか――。

許容量を超えた刺激に沸騰した彼女の頭では、理解出来なかった。
いや。その時の彼女には、そんな事を考えている余裕なんか無かったのだ。
限界を超えた疲労で混濁する意識と、それを遥かに上回る程の、確かな期待。
少女はストロボみたいに明滅する視界で、ただその壮絶な光景に目を奪われていた。

――星屑が流れている。

床に描かれた巨大な魔法円から次々と溢れ出す、粉末化した純金の様な微粒子。
世界の外から吹き抜ける気流に流されながら、ソレはまるで生き物の様にうねり、部屋を覆うベールとなって拡散してゆく。
幻の様に虚空に溶けゆく、黄金色のカーテン。
それはこの世界の理に適応出来なかった異界の物質が、砂粒よりも遥かに小さな最小単位にまで分解されて飛び散る最期の姿だ。
――異界から吹き抜ける、黄金の奔流。
世界が終わったと聞かされても納得してしまいそうなその光景は、少女の全身を苛む激痛を、否、彼女に自身の生存すらも忘れさせてしまう程に壮観だった。

烈風が頬を掠めた。
原初の煉獄を彷彿とさせる程に熱い、灼熱の息吹。

火龍にでも噛み付かれたかの様に鋭い、その熱は、しかし同時に生存の安堵も感じさせてくれる。
チクリと皮膚を刺激する、あまりにも強すぎる刺激。
痛感が生きている事の証明になるなんて、彼女はこの瞬間まで忘れていた。

だが。その絶景も決して長くは続かない。
永遠とも思える程の刹那の後、広い部屋は深夜の静寂を取り戻し始める。
突風に吹き飛ばされた無数の本が、まるで雹の様に視界を落ちていた。

少女の視線は、更に向こうに。
未だに燻る、灰白色の靄の奥へと向けられている。
先ほどまで何も無かった筈の、黄金の波源。
真紅の月光に照らされた魔法円の中心に、少女は今、確かにその人影を認めていた。

初めに目に映ったのは、初雪の様に白い装束。
髪は黒曜石の様に真っ黒で、同時に絹糸の様に艶やかだった。
月光を受けて、黒真珠みたいに煌めく瞳が、訝かる様に辺りを観察している。

この世界では見かける事が出来ぬ程に、あまりにも異質な、その風貌。
――瞬間。少女は、ソレが“そう”なんだと直感した。

「今晩は、異界の住人さん。

あたしは召喚主（サモナー）の、アルテミア・クラリス。
早速だけど、貴方の事を教えてくれない？」

溢れんばかりの万感を込めて、少女は彼に声を掛けた。
魔術を覚えたその日以来、ずっと待ち続けたその機会。
憧れ続けたその奇跡に、無垢な胸を踊らせながら。

――繰り返す。
それは、本当に最悪な日の夜の事だった……。

――――――

――――前日。

自宅の扉を蹴破った少女を出迎えたのは、この１０年ですっかり嗅ぎなれた芳香だった。

手紙でも認（したた）めていたのだろうか。
少々埃っぽく、薄暗いその部屋は、燻る様なインクの香りに満たされている。
尤も。この部屋に足を踏み入れた人間は、即座にその原因が手紙などでは無いと気付くだろう。
少女が帰省したこの部屋は、手紙を認（したた）めた程度で匂いが籠るには

広すぎる。

１０メートルはあるだろうか。

アーチ状に歪曲した天蓋は人の手など及ばぬ程の高さにあり、全面に繊細な技巧を尽くされたステンドグラスを嵌められている。

入口から見て向かいにある壁はあまりにも遠く、現在が深夜で薄暗いという事実を差し引いても、果てを確認する事は難しい。

ここまでくると、最早部屋というカテゴリーが適切かどうかすらも判断しかねる程である。

――人間が生活するには、あまりにも広すぎる空間。

存在そのものが不可思議さを醸すこの部屋ではあったが、しかしそれだけの領域にインクの匂いが籠っているというその事実は、見物人には更なる奇妙さを感じさせることだろう。

拡散するのが道理である匂いという物は、本来ならばこれほどの空間を満たし得ない筈だからである。

それこそ規格外の濃度か、或いは想定外の数の発生原でも存在しない限りは――。

結論から言えば、この場における真理は後者であった。

まるで巨人用に作られたかの様な、果てしない広間。

しかしその空間は、夥しい数の本に埋め尽くされていた。

辛うじて人が通れる程度の隙間を開けて、高層ビルの様な本棚達が、所狭しと鎮座している。

本棚に入り切らなかった溢れものは無造作に床に山積みにされ、採光窓から差し込む真紅の月光に、ただただ寂しげに照らされていた。

――図書館。

初めてこの部屋に訪れた者は、十人中十人がそう形容するだろう。

本来ならば訪問者に解放感を感じさせるであろうその大部屋は、しかし内包する物量の圧迫感からか、どこか閉鎖的な雰囲気を湛えていた。

少女はビルの合間を縫う様にして歩みを進める。

掃除の手など届ききる筈も無く、埃を被ったままになっている本棚達に、分厚いローブの裾が触れない様に気を払いながら――。

つばの広いトンガリ帽子が恨めしいが、ヒョイと首を曲げながら本棚の隙間を通るのは、この少女にとっては慣れた日常動作であった。

本の森を散策するかの様に歩んだ少女は、やがて少しだけ開けた一画で足を止めた。

まるで本棚が自ら避けたかの様にして設けられたその円形の領域には、この図書館には似合わぬ寝具や調理器具などの日用雑貨がポツポツと点在し、周囲に比べると僅かに生活感が感じられる。

申し訳程度に掃除がされた形跡があるところを見ると、どうやらここが、彼女の主な居住領域らしい。

少女は紅い唇をキュッと結びながら、領域の中央に設置されたベッドの前にまで歩みを進めた。無駄に嵩張るトンガリ帽子を徐(おもむろ)に掴み、ポンと床に投げ捨てる。綺麗な、真紅のショートヘアが、まるで同色の月明かりに溶けるかの様にフワリと舞った。

つばの広い帽子の下から現れた顔立ちは、深夜の図書館には似つかわしく無い程に幼かった。

歳の程は、おそらくは十代前半といったところだろうか。

黒尽くめな彼女のファッションとは対比するかの様な、透き通る様に白い肌には、年齢特有の瑞々しさが溢れていた。
月明かりの中に煌めく瞳は、翡翠の様に澄んだ翠色をしている。
少女自身の気の強さが現れているのか、少々釣り目がちな彼女の視線は、しかしこの夜は僅かな潤みを含んでいた。
それが少女生来の可憐さにある種の儚さを加味させ、見る者がいれば目を奪われずにはいられない程の、美しさとも可愛らしさともつかない魅力となって醸し出されている。

――尤も。この屋敷の住人は、今のところ彼女だけである。
幸か不幸か、彼女の姿を見咎める見物人はこの場には居なかった。
それを当然の事と知っている少女は、誰に遠慮する事も無く、分厚いローブを床へと脱ぎ散らかした。
素早くキャミソール1枚の姿になり、勢いよくベッドへとダイブする。
ぼふっ、と柔らかそうな音が響くと共に、月明かりの中には埃が躍った。
白い、細身の脚を、行儀悪くブンブンと振る。
黒革で編まれたブーツが、ボトリと床に転がった。
どうやら今の少女には、真面目に脱ぐのも億劫だった様だ。

枕へと顔を埋める少女。
キャミソールの内側に覗くその背中は、何かを堪える様に小刻みに震えていた。

「なによ……。
なんなのよ、もうっ！！」

良く通る彼女の声はヒステリックな色に染まり、図書館の中へと響き渡った。
駄々っ子の様に暴れ、少女の手足は布団を叩く。
バタバタというその動きに合わせ、埃が宙に舞って行く。

――さて。
事態が把握出来ないという感想を抱かれている方、挙手をして頂きたい。
正しい反応であると確信を持って断言しよう。

そろそろ状況を説明する必要性をひしひしと感じる頃合いである為、冒頭より本章の描写に中心的に現れているこの少女の素性を、この辺りで簡潔に述べておこうと思う。

少女、アルテミア・クラリスは、才能に満ち溢れた魔法使いであった。

僅か8歳にして抗魔術結界を修得し、10歳にして魔導師の称号を与えられた彼女は、15歳の今となっては、“銀の国”では並ぶ者の居ない大魔導としてその名を知られている。

彼女はそんな自身の才能に少なからず自信を持っていたし、それが過信で無い事も理解していた。
いや、才能という言葉だけでは足りまい。
何しろ少女にとって魔術とは、わざわざ学ぶべくも無い、幼少の頃から慣れ親しんだ日常生活の一部だったのだから――。

魔術大国である銀の国（このくに）では、貴族や王族、富裕層の平民達は皆一度は魔導研究所で修練をし、学問としての魔術の素養を植え付けられる。

それは教育水準的に大変素晴らしい事であるとお偉いさん貴族達は御高説なさるのだが、それでも魔術を学ぶ学生達は、誰でも一度は疑問に思うのだ。

――これ、将来何の役に立つのだろう、と。

当然である。何しろ魔導師として研究所に就職するのでも無い限り、魔導の知識なんて物は、普通は一生使い道が無い。敵国や魔獣と戦うのは専門の兵士や魔導師に任せればいいし、そもそも研究所で学ぶ様な高度な魔術なんか使えなくても、日常生活には何ら支障が無いからだ。

よって地道に修練をしたり、バカみたいな量の知識を詰め込んだりしても、実生活にはあまり役に立たなかったりする。

一般論として、小難しいだけの魔導を学ぶのは苦痛なのである。

しかしそれはあくまで一般論であって、必ずしも少女に適応出来る物では無かった。

何しろ歳を片手で表せる頃から、寒ければ布団を被るよりも火炎魔法で部屋を温め、運べない程の荷物には自分で動いてもらえと師匠に叩き込まれた彼女である。

少女にとって魔術とは、身体機能の一部。

それを行使する事は、二つの瞳が天空の星々を見せてくれる様に、或いは呼気が爽やかな大気を身体の中に運んでくれる様に、酷く当たり前の事だったのだ。

故に少女にとって、魔術とは自らの腕の延長と同義であり、それを呼吸するが如く行使出来る事は何物にも勝る誇りだった。
そして、だからこそ、先刻少女が引き起こした“事件”はまるで想定などしていなかった事故の様な出来事であり、彼女自身のプライドを傷付けて余りある物だったのである。

そう、話は数時間程前に遡る。
少女は国の威信を掛けた“ある儀式”を行う為に、人里離れた僻地へとその足を運んでいた。
百年に一度行われる、魔導師ならば誰もが憧れるその奇跡を担う為に――。

――――――

僻地の名称は、一等級霊地・ウルズの泉。
七色の聖水を湛えたその神秘の泉は、事実神話をそのまま実体化したかの様な神々しさを纏って彼女を出迎えた。

泉から朝靄の様に湧き出る朧げな燐光は、濃密な魔力（マナ）特有の煌きだ。
橙赤色（オレンジ）が所々桃色に変化するその霞は、嘗ては精霊の鱗粉であるとも信じられていたという。普段から見慣れている筈のその現象は、しかし研究所とは段違いの神々しさによって少女から言葉を奪い去った。
木漏れ日の向こうから聴こえる、心地の良い小鳥の囀り。
気分を落ち着かせる為に深呼吸をすると、爽やかな冬の薫りが、肺全体に染み渡っていく様に感じられた。

――始まりには最高の場所。

聖地の幻想的な景観に酔いながら、少女は自身の気持ちが加速度的に高揚していくのを感じていた。

少女は泉の畔に描いた魔法円の前に歩みを進めると、呼吸を整えながら眼を閉じた。

右腕を高く掲げ、深く深く集中する。

掲げられた手の甲には、少女の先天魔術（ギフト）を示す白銀の魔法円が誇らしげに輝いていた。

「命ず（ansur）」

気を抜くと際限無く高鳴ろうとする心臓を無理やりに落ち着かせながら、少女は詠唱を開始した。

神秘を担う語句を紡ぎ、意識を自己へと埋没させていく。

読み書きを正確に習得する以前から、何千、何万と無く繰り返して来た工程であった。

今となっては、少女は無意識にでも行える。

少女は自らの右腕に魔力を通わせた。

感じたのは、全身を電流の如く駆け巡る巨大なパルス。

神経が火傷する様なその熱さは、未だ嘗て経験した事が無い程の

魔力の猛りだ。
不可能は無いと確信した。
これ程までに濃密な、高純度の魔力。
奇跡を起こすには余りある。

少女の胸は、際限なく高揚を続けた。
底の見えない、大海の様な力の塊が、彼女の意識すらも攫わんと体内で暴れ狂う。
破裂しそうになる身体を押さえつけるべく、呼吸を落ち着け、更に意識を埋没させる。
自己の限界など忘却の彼方へと消し去る為に。

詠唱は歌うように紡がれる。
自らの精神を魔力へと融解させ、大気へと飽和させ、言霊を用いて精霊へと語りかける。
神秘への憧憬を廃棄し、高位の力への畏怖を破却し、意識を無意識へと落とし込む。

今はただ、身体機能の全てはこの奇跡を成すが為だけに――。

「――――っ！！」

少女が一際深く集中した瞬間、泉は強烈な閃光へと包まれた。

―――――

それが先刻起きた事件の発端である。
手応えはあった。失敗も、無かった。
彼女はそう確信している。

そう。やはり、儀式自体は完璧だった筈なのだ。
どう考えてもあんな、七色の泉が干上がって水溜りにランクダウンする様な大爆発など起こる筈が無かったのだ。

納得がいかない。
どうしても、認めたくない。

「……」

いや、まあ。認めたくは無い、が、客観的かつ丁寧に述べるのならば、儀式は成功したと断言するのは憚られるというか難しく、いや、どちらかと言えば、控え目に表現しても良くは無かったと言えなくも無くもあるような無いような……。

……簡潔に述べよう。
結果は目を覆いたくなる様な大災害であった。

原因は少女には不明であったのだが、結果として“銀の国”では3本の指に入るとまで言われた美しい泉は消滅し、大爆発の余波に

よって薙ぎ倒された木々は冬季の乾燥によって激しく炎上。衝撃波を浴びた小鳥は断末魔の悲鳴を上げながらボトボト落ちるわ、興奮した魔獣達が近隣の民家を襲い出すわで、あっという間に阿鼻叫喚の地獄絵図が出来上がってしまったのである。

事態を聞きつけてやって来た、
文部大臣・アスガルドの脂ぎった顔が頭を過る。

人間が怒りで血を噴ける生き物だったとは、少女は今日初めて知った。
どの様な魔術なのか非常に興味があると、ついつい感心して呟いてしまった程である。
……どうやら大臣にはそれが聞こえたらしく、そこから延々と説教が始まり、“貴様、絶対処分してやるからな!!”と、怒鳴りつけた嫌味な口調は今でも少女の頭の中でリフレインしている。
枕を布団に叩きつけて、それをなんとか吐き出そうと努力する。

次々と湧いてくる、怒りとも情けなさともつかない気持ち。
まるで濁ったコールタールが、脳にこびり付いて飽和していくみたいだった。

「なんでよ!!　バカ〜〜っ!!」

暴れても事態は好転しない事くらい、少女だって弁えている。
しかし今だけは、どうにかこのモヤモヤした気持ちを鎮める為に、

寝具達にはもう少しだけ埃を吐き出して貰おうと彼女は心に決めるのであった。

――――――

「はぁ……！！　ふぅ……」

暫く尺取虫の様に布団を転げ回っていた少女は、やがてパタリとその動きを止めた。

まるで糸の切れた人形である。

華奢な肩は激しく上下し、柔らかそうな紅い唇からは淡雪の様な吐息が漏れていく。

酸素不足を訴える肺を黙らせる為に、少女は何度も何度も呼吸を繰り返した。

乱れて、捲れたキャミソールの下に覗く、白い背中。

桜色に紅潮した肌には、ジットリと汗が滲んでいる。

「……」

むくり、と身体を起こす少女。

胡座をかく様な姿勢でベッドに座り込むと、火照った身体を冷ますかの様に、一度大きく息を吐いた。

「……何してんだろ、あたし」

先程までの醜態を気恥ずかしく思ったのか、少女は頬を染めながらそう零した。

チョコチョコと桜色の頬を掻いてから、バツが悪そうに頭を抱える。

散々暴れ回った事で、先程までのモヤモヤした気持ちは幾分楽になってはくれたものの、今はどうしようも無い虚しさだけが茹だった頭を占めていた。

「仕事……、しないと。

原因くらい調べとかなきゃ、文部(あいつ)大臣に何言われるか分かんないし……。

ソレって、面倒いし……」

軽く目頭を抑えながらそう零した少女は、息を整えるとその右腕を頭上に掲げた。

目を閉じて自己の内面に意識を向ける。

体内の集積器官から引き出された魔力が霊道を駆け抜け、右腕の周囲では僅かに空気の屈折率が変わった。

「舞え。wynn　踊れ。wynn　在るべき場所にeihwaz」

歌声の様に、神秘を担う語句を紡ぐ。

それだけでベッドの下に脱ぎ捨てられた帽子とローブは、まるで透明人形にでも羽織られたかの様に空中へと浮かび上がった。

次いで、静かに風がそよいだかと思うと、ソレらは踊るように空中を舞ってゆく。

果たして何所に飛んで行ったのだろうか。

漆黒の装束は、瞬く間に闇に溶けたかの様に見えなくなった。

「翼を与える。gyfu rad
蒼天を駆けよ」gyfu eoh

続いて少女が詠唱を行うと、部屋の奥の方からは無数の羽音が響いて来た。

複数の影がバサバサと羽ばたきながら、少女の方へと飛んで来る。

本棚の隙間を縫うように飛行するその影の正体は、少女が本の山から検索し、呼び寄せた魔導書であった。

いかにも重そうな専門書の数々が、まるでワタリガラスの様に、表紙を翼代りにして羽ばたいている。

常人ならば驚きに目を見張る様なその光景を、少女は特に何の感慨も無く横目で確認していた。

やがて本の鳥達は、掲げられた腕の上空を悠々と旋回したかと思うと、一冊づつ行儀よく少女の手元へと収まった。

飛んでいたとはいえ、本は本である。

手で掴めない程に分厚い専門書の重さに、一瞬だけバランスを崩しそうになった少女ではあったが、なんとかソレらを受け止めてベッドの上に放り出した。

“一級以上の霊地に於ける魔力（マナ）の流動とその利用”
“守護魔（ガーディアン）と原初世界の法則に関する発展的因果歪曲定理”
“魔人召喚時に於ける単体対象の永続的な抗魔術結界”

少女の手元に収まった魔導書の数々は、どれ一つをとっても、並

の魔術師では毛程も理解出来ない程の難物だろう。
だがその専門書に付着した数々の傷や汚れが、彼女がこれらをしっかりと活用しているという事実を示唆していた。
そしてそれ自体が、同時に彼女の魔導師としての卓越した才能を証明してもいる。
彼女は、それらを慣れた様子で用途別に並べ替えながら、適当に片付ける順番を決め――。

「あれ？」

見慣れない本が混ざっていた事を確認し、素っ頓狂な声を上げた。

“ソレ”は、見事なまでのパステルカラーをしていた。
可愛らしさなど欠片も無い、分厚い革表紙の専門書達の中にあって、余りにも場違いに過ぎる、ツヤツヤの表紙。
普段少女が読み慣れている活字よりも3倍強は大きな簡易文字で綴られ、極めつけにはあちこちに陳腐なイラストが散りばめられた“ソレ”は――、

「うわ……。
やっちゃった……」

タイトルをまじまじと確認した所で、少女は頭を抱えて呟いた。
……赤っ恥と言う他無い。
少女が取り違えたその本は、どこでどう間違えたのか、子供が寝

る前に母親に読んで貰うような児童書だったのである。

おそらく、まだ精神に乱れがあったのだろう、などと少女は解釈してみる。

だって、魔術は術者の精神に強く影響を受けるものだし、他に理由なんか考えようも無いし。

ソレを差し引いても、決して尚許容できるレベルのミスでは無いが……。

こんな初歩の飛行魔術まで失敗したなどと、大臣には疎か教え子達にも言えないな～、などと、あまりの情けなさに少女は苦笑した。

……でも、なんとなく開いてみたりする。

「なになに。

遠い遠いどこかの国では……」

もしかしたら少女は、わざとその本を手に取ったかの様に振る舞って、自身の失敗を無かった事にしたかったのかもしれない。

或いは彼女には、御伽噺を読んでくれる様な母親には縁が無かったからなのかもしれない。

理由は彼女自身にもよく分からなかったのだが――。

気が付くと少女は、無意識の内にその本の文章をつらつらと目で追っていた。

それは、どこか遠い世界のお話。

その世界の住人は、鋼鉄の翼で空を飛び、馬に倍する速度で大地を駆け抜け、天空の月にすらもその足跡を残すという。
少女もどこかで聞いた事のある、遠い遠い御伽噺――。

「バカみたい」

イラストだらけで殆ど文字の無いその本を流し読み、閉じた瞬間に懐いた感想がそれであった。

少女は魔導を知っている。

飛行魔術の媒体に鉄なんかを使うのは魔力の無駄使い以外の何物でも無いし、馬の倍の速さなんていうのは、“氷の国”の魔犬（ガルム）が全力を出しても難しい速度だ。
そんな事実を、少女は常識として当たり前の様に理解している。
その本の信憑性の無さなど、彼女は痛い程によく痛感している。

空想を楽しむのは自由だろう。
しかしそれは、魔導師である彼女が認めていい物では無いのである。

「……でも、もし。
もしも、これが本当だったら……」

馬鹿な妄言を吐き掛けた所で、少女は頭を振って下らない妄想を振り払った。

貴重な睡眠時間を無駄に浪費した事に軽い頭痛を覚えた彼女は、その妙に薄っぺらい戯言本を床へと投げ捨てると、もう一度だけ風魔法の呪文を詠唱した。

本は再び、まるで鳥の如く月灯りの下を飛び廻り、部屋の最果てへと消えて行く。

その様子を確認するまでも無く、少女は一番近くに置いた専門書へと手を掛けた。

「あーっ!!　もう、時間無駄にした!!
早くしないと今晩寝られないじゃない!!」

儀式の手順を本の内容と照らし合わせながら、少女のそんな嘆きが月灯りの中へと溶けていった。

3．　物理学者・朝日　真也の序論

退屈な講義の時間も終わりを告げ、青年はいつもの如く講堂から廊下へと足を向ける。

頬を掠める真冬の空気に顔面の神経が麻痺したかの様な錯覚を感じながらも、彼は窓から覗く曇り空を見上げて思考した。

この日本という島国の大部分は、気候区分的には温帯とかいうなんとも暖かそうな名前の地域に属しているらしい。しかも地球温暖化は刻一刻と深刻化しているらしく、近年はこの国も半亜熱帯化しているとかなんとかと、最近のニュースで騒がれていた事をふと思い出す。

しかしそれにも関わらず、身を切るこの真冬の空気は今年も変わらず刺す様に冷たく、外気に肌を晒す事を憂鬱にさせるのは一体どういった物理法則が働いているというのであろうか。

通常であれば、我ら日本人は温室効果ガスを排出した挙句ご丁寧に空気まで温めるという、ヒーターなる地球に対する拷問器具を心置きなく使用する事によって、この“暖冬”を温室でヌクヌクと乗り切るのだろう。

しかしながら地方大学のキャンパスであるこの場所は、どうやら暖房器具の設置は講堂だけで手一杯というほどに資金面での問題を抱えているらしく、一歩廊下に歩み出れば、隙間風として吹き込んだ外気がまるで河川敷を歩いているかの様な錯覚を齎してくれるという、なんとも素晴らしい環境が完成してしまっているという事実は最早ご愛嬌か。

いっその事、火事でも起きてくれないだろうか、などと不謹慎な発想が青年の頭を掠めたりする。

一時凌ぎとはいえ常夏の如く暖かくなりそうではあるし、その派手な酸化反応によって発生した二酸化炭素が少しでも地球温暖化を促進してくれるのであれば、この狂った寒さも多少なりとも“まし”になるに違いない。

なに。オンボロで隙間だらけの木造校舎は、それはそれはよく燃えてくれる事だろう、などと多少デンジャラスな方向に思考が走り出したところで、青年は一度深呼吸をして深く考え直してみる事にする。

冷静に考えると、校舎が無くなった場合には色々と面倒臭い事態が発生しそうな気がしないでも無いし、地球温暖化が進行すれば、今度は夏場に後悔する事が目に見えている。

それはそれで都合が悪い気がし始めた青年は、世間一般が騒ぐ地球温暖化の有害性に多少の猜疑心を挟みつつも、取り敢えずは地球を大切にしようと後ろ向きな決心を固めてみる事にするのであった。

ふと。そこまで思考したところで、先程講堂で見かけた女子のグループが、雑談をしながらこちらに向かって来る様子に目が留まった。

自分は厚手のジーンズでも十分に寒いというのに、脚を真っ赤にしながらもミニスカートを履き続けている彼女達の逞しさを尊敬し

つつ、青年は一刻も早く冷凍庫の様な廊下から抜け出そうと歩を速めるのであった。

――――――

暖房器具の稼働する室内に入ると、現代文明の素晴らしさを実感する。

青年は外気よりも大分暖められたその部屋の空気を肌で感じ、ホッとしたかの様に溜息を吐きながら辺りを見渡した。

部屋には誰もいない。

コンクリートの打ちっ放しの壁は、まるで覆い隠されるかの様に大量の数式が書かれた紙に埋れ、壁際の本棚には辞書よりも分厚い洋書が所狭しと鎮座している。

並べられたタイトルの数々からすると、どうやらここは物理学部の研究室であるらしい。

ならば青年は、部屋の主に何らかの用があって訪れた学生であると解釈するのが妥当だろうか。偏屈で知られるこの学部の教授に私用で会いに来たというのであれば、彼は割合変わり者の部類に入ると言えるのかもしれない。

しかしそれにしては、

青年の態度には些か違和感があった。

ノックも無く堂々と部屋に侵入して来た彼からは、部屋の主に対する敬意というか、敬いの気配というものが全く感じられないのである。

気怠そうに溜息などを吐きながら、差して広くも無い室内を我が物顔で闊歩して行く。

剰え彼は、部屋の奥にある教授の椅子へと無断で腰を下ろすと、デスクの上に脚を組んで踏ん反り返った。普通ならばどんな叱責が飛ぶかわからない振る舞いである。

そう。青年の腰掛けているデスクのプレートが、彼自身の名前を記してさえいなかったのであれば――。

――さて。

いいかげん読者の方々を置いてけぼりにしそうな状況が羅列され始めている為、この辺りで本章の冒頭から電波な思考を繰り返している彼の素性について簡潔に述べておこうと思う。

青年、朝日　真也は、才能に満ち溢れた物理学者であった。

僅か8歳にして相対性理論を理解し、12歳にして博士号を取得した彼は、17歳の今となっては、日本最年少の大学教授としてその名を知られている。

しかしながら彼の才能は、物理学者という職業を選択した彼にとっては幸運と言えたかもしれないが、同時に彼自身にとっては最大の不運とも言えた。

一言で言えば、才能が人間性を駆逐してしまったのである。

職業とは、自己の生き甲斐を形成する上で中々に重要な要素であると言われている。多くの人間は、理想的には、自己の性格ややりたい事、またどのような方面から誰の役に立ちたいのかなどを吟味しながら、自分の意思で将来の進路を決定していくのだろう。

しかし彼の場合は、そのステップが皆無であった。

幼少の頃より物理学の才能に秀でていた彼は、彼自身も含めて誰一人疑いの余地すらも無いままに、物理学者となる事が決定付けられていた。また彼自身も物理学という学問に少なからず楽しさを感じていた為に、自らがそういう進路に進む事に一切の猜疑心を挟む事も無かったのだ。

そこに社会に貢献しようだとか、人の役に立つ研究をしようなどという大それた大義名分が無くとも、誰一人として気にする者はいなかった。

結論として、彼は人々の生活に貢献する事の強いられる大学教授という職業に就いてから、ようやく自らが“人間嫌い”であるという事実に気が付いたのである。

人間は面白味が無い、と彼は考えている。日々教科書の中身を反芻するだけの、機械の如き単純作業を求める社会。ソレを形成している社会人達は、正直何が面白くて余生を浪費しているのか理解し難いと彼は感じてしまうのだ。

その社会に育てられた次世代も、面白味に欠けるという点では劣らないだろう。均一であれ、従順であれ、されど既存の社会を脅かさない程度に創造的であれと教育された若者達は、結果として思考能力というモノを奪われた状態で社会に放りだされてしまう。

そしてなお残念な事に、この社会は若者に夢を懐かせる程、彼らに

優しくは無いらしい。
師よ喜べ。貴方の社会は、貴方が死ぬまで安泰(たいくつ)だ。

物理の研究は面白いと、彼は純粋にそう思う。宇宙の最果てでも変わらずに成立する、美しい数字で綴(ことば)られた至高の芸術。エネルギーと質量の等価性を理解した幼き日の憧憬を忘れる事が出来る程、彼は歳を重ねてはいなかった。
自らの叡智が偉大なる先人達の思想を超え、新たな真理を見い出した時の高揚は、彼の心に静かな戦慄を与えてくれた。

だが、人に貢献するのは面白く無いのだ。
自らの至った神秘が彼らの様な退屈な人間達の利益になるのかと考えると、彼はどうしようもない嫌悪感に苛まれる。それは、ある種の我儘なのかもしれない。しかし彼は、その我儘を我儘として納得し、諦めるには余りにも若すぎた。

遣り場の無い憂鬱を感じた青年は、一度大きく息を吐いて気持ちを落ち着かせる。微かに暗くなった視界を誤魔化すかの様に、彼はデスクにある黒表紙の本を手前に蹴り寄せた。

「？」

黒い革表紙の本を開き掛けたところで、彼の行動はけたたましいノックの音に遮られた。
――来客だろうか。
時間帯からすれば学生の可能性が高いのではあるが、取り敢えずは職務に見合った体裁を整えようと、彼はデスクから脚を下ろして

姿勢を正した。

「どうぞ」

デスクから軽く土埃を払い、適当に整頓しながら返事を返す。散らばった書類を束ねた瞬間、扉はまるで跳ねるかの様に開け放たれ、挙動不審な女が研究室へと侵入してきた。

クリクリとした大きな目と、背中まである黒髪が印象的な、大人しそうなイメージの学生である。アホ毛、というのだろうか？　頭頂部では、一部の黒髪が万有引力の法則に打ち勝っている。真也はその女を、いつも自分の講義を最前列で聴いている真面目な学生の一人であったと思ったが、名前まで記憶してはいなかった。

「名前と用件を簡潔に述べてくれ。
私は今、気分が優れない」

背もたれに身体を預け、腕を組みながら偉そうに告げる17歳。
彼は“今”と言ったが、それは正確な表現では無いだろう。
人間とは立場や場面によって異なる態度や言葉遣いが求められる生き物であるが、彼には態々(わざわざ)他人の為に同じ意味の語句を複数記憶して脳容積を無駄に浪費するなんていう文化は、理解し難い苦痛として感じられるのである。
つまりは今現在の様に、他人の為に自らの時間と労力を空費しなくてはならない状況においては、彼は“常に”気分が優れないのだ。

最も、彼も自身の立場を保つ為にはそれが必要不可欠であり、また若輩の身で反感を持たれる事なく人の上に立つ為には人並み以上の一般教養が求められる事くらいは理解していたので、日常の職務に於いては、全力で私情を殺して“教授”であろうと努める事に異

議は無いのではあったが……。

女は真也が名前を尋ねると、少しだけ不機嫌そうに眉を寄せた。
しかしそれも一瞬で、次の瞬間には寂しそうに肩を落としていた。

「すみません、相川（あいかわ）　愛（あい）です。
えーと、先程の講義の問題を解いたので、採点していただきたいんですけど……」

「……？」

三日連続で母親に素麺（そうめん）を出された小学生の様なその表情の意味が、この時の彼には理解出来なかった。
しかし、実は真也が彼女に名前を尋ねるのは今月これが6回目であり、同様にしてほとほと人の名前を覚えない彼が、一部からは一般教養に欠ける非常識人間であるという反感を既に存分に買っているという事実を知ったら、彼はどういう反応をしたのであろうか……。

「そうか。多分解けて無いから、明日の授業の時にでも持って来てくれ」

そんな周囲の評価など知る由も無く、真也は女生徒の胸元に抱えられたレポートの枚数を目で数えながらそんな指示を淡々と告げた。
女生徒はアホ毛をピョコピョコと跳ねさせながら、パタパタと慌てている。

「き、教授！！　せめて見てから判断していただけないでしょうか！！」

「仮想粒子の質量を実数領域に限定した覚えは無い。
場合分けが完璧であるなら、レポート3枚では収まらないさ」

女生徒の反論を一蹴してそう告げる偏屈教授。
その手は既に先程開きかけた本に指を滑り込ませている。
女生徒は、呆気に取られた様子でポカン口を開けて固まっていた。
ほにゃんと項垂れながら、頭を抱える様な仕草で下を向く。
おっとりとした彼女の雰囲気と相俟って、その仕草は随分と可愛らしいのだが、青年の視線は本に向けられていた為に意味を成さなかった。

「あう～……、引っ掛け問題だったんですか？
道理で教授の問題にしては簡単すぎると思ったんですよー」

「引っ掛け問題なんてのはこの世には存在しないそうだ。“不勉強故の勘違いを作成者のせいにするとは何事か”と、前に同僚が熱弁していたな。
……それに、私はそこまで難しい問題を出しているつもりは無いぞ？」

「えーっ。去年の期末で平均点19点のテスト作って、学長に大目玉食らったって聞きましたけどー？」

厭味な禿げ頭の説教を思い出して、真也は眉間に皺を寄せた。
因みにこの大学では、講師が本試験の半分の時間で解ききれる問題というのが期末試験の難易度の目安となっている。学長に唾を飛ばされて怒鳴られながら、“あんたの大学が三流なだけだろ”などと呟いた彼のぼやきを、聞いた者がいたのかどうかは不明である。

話はここまでだ、とでも言う様に背凭れに体重を預け、本を両手で構えた真也は、目の前の女生徒が何やら不穏な動きをしている事に気が付いた。

レポートと荷物を抱えながら、チョコチョコという表現がピッタリな足取りでデスクへと近付いて来る。

次に、無言で真也の表情をチラチラと伺いながら、デスクの上に教科書やノート、筆記用具等を並べ始めた。

「……何をしている？」

しばらくその様子を伺っていた真也は、女生徒が壁際から自分用の椅子をヨイショヨイショと引き摺って来るのを見て、抑揚の無い声でそう聞いた。

ニッコリと微笑みながら、ペコリとお辞儀をする女生徒。

「えーと、さっきの講義で分からない所があったんで、教えていただこうかな、って。

お時間、よろしいでしょうか？」

ダメですか？　なんて柔らかそうな頬を掻きながら首を傾げる。

なにやら順番が逆なのは天然なのか、それとも暇を見越しての抗議の意味が込められているのかは判断しかねる所である。

「……どこだ？」

立場上、教えを請われれば断る訳にはいかない青年は、先程の“退屈な講義”の続きをしなくてはならない事に若干の憂鬱を感じな

がらも、読もうとした本を床に置いて椅子を引くのであった。

――――――

「ありがとうございました！！
スゴくよくわかりました！！」

窓から差し込む明かりが茜色に変わり始めた頃、女生徒は漸く気が済んだのか、筆記用具をペンケースにしまいだした。
慌ただしく、カチャカチャと、蛍光ペンを1本しまってはシャープペンを3本落っことすという様な手際で片付けていく。
一瞬だけペンケースの中身が見えて、何故シャープペンが１０本も必要なのかという素朴な疑問が湧いた真也ではあったが、せっかく途切れてくれた会話を再開させる事にも抵抗があったので口に出す事は自重した。

ピンクのクリアケースをひっくり返し、中身の教科書を盛大に床にぶち撒ける女生徒。
流石に見かねた真也が手伝おうかと手を伸ばした所、彼女はあたふたと挙動不審な動きでそれを制止したので、手持ち無沙汰ながらも彼は、彼女の残念な手際を観察しているしかなかった。
……冷静に考えると、女性の鞄の中身に男が触れるというのは何かと問題なのかもしれないと、空いた時間で生徒の思考に対する推論を立てる物理学部教授。
そこまで適当な仮説を構築した所で、真也の頭には女生徒の思考に対してある疑問が浮上した。

「……何でオレなんだ？」

「へ？」

「失言だった。
何故態々私に教わりに来たのかと聞いた」

咄嗟に地に戻ってしまった口調を静かに言い直すと、真也は自らの感じた疑問を女生徒へと投げかけた。
何しろ、彼は自らの性質をよく理解している。
最良の選手が最良の監督になれる訳では無いとある種のスポーツでは言われている様に、真也もまた、人に物を教える事には酷く不向きな性格の持ち主であったのだ。
……いや、冗談抜きで。おそらく今日の講義に出席していた生徒の中にさえも、物を教えるという技術のみに焦点を当てれば、彼よりも優秀な人材などいくらでもいるだろうと自負する程の腕前である。
それにも関わらず、目の前の女生徒が態々自分に教えを請いに来るというメリットが、彼には思い付かなかったのだ。

真也の問いに対して、女生徒は少しだけ思案する様な仕草を見せていた。
そして次の瞬間には、バツが悪そうに目を伏せて、俯いた。

「……すまん、忘れてくれ」

女生徒の様子が気になった真也は、よくよく考えると、今の質問がかなり高圧的な意味合いにも取れる事に気が付いて訂正した。それに冷静に考えると、生徒が講師に教えを請うのは当然であると言えなくも無い。

真也が軽く溜め息を吐きながら目線を逸らそうとした時に、彼は自分を見つめる女生徒の視線に気が付いた。

「……朝日教授に教えて頂きたかったんです」

「……は？」

言葉の意味が理解出来ず、真也はポカンとしながら疑問符を飛ばした。

彼には、彼女の言葉の意味が理解できなかったのだ。

なにしろ彼自身は、それには何のメリットも無い事を痛いほどに実感している。

ならば彼女が自分に教えて欲しいと思う理由など、どこにもあろう筈は無い。

そのどうしようもない矛盾を解決する手段を見出せなかった彼は、暫しの間硬直するしかなかった。

女生徒は、ただ真っ直ぐな視線を向けている。

「だって教授。そんなに若いのに教授で、“素粒子の魔法使い”なんて呼ばれてて、ホントにスゴイ人じゃないですか！！　わたし、スゴく尊敬してるんです！！」

女生徒は一際高く声を上げながら、ハッキリとそう口にした。

青年を見つめる茶褐色の瞳からは、偽り無く憧憬の念が見てとれる。

――そんな彼女を見た青年は、まるで肺を圧し潰される様な圧迫感を感じた。

「……へ？　あれ！？　い、いえ。えーと、その……。
し、失礼します！！　また宜しくお願いします！！」

真也の顔色を観察した女生徒は、それだけを慌ただしく告げると、まるで台風の如く部屋から去って行った。途中でコードに2回程躓いて、金属製の扉に頭を打ち付けて行った。果たしてよっぽど慌てていたのか、それとも普段からああなのか。

「……ネームバリューを過信すると、真実を見失うぞ？」

室内に無遠慮に吹き込む冷気。
開けっ放しにされた扉を閉めようと立ち上がりながら、真也はそんな呟きを誰にともなく零していた。

――買い被りである、と彼は思う。

尊敬していると彼女は言った。
誰かの為になりたかった訳でも無く、ただ我が儘に生きて来ただけの自分に対して、彼女は尊敬していると言ってくれた。
自分は彼女が思っている程立派な人間では無いと自覚しており、尚且つ並べての人間を嫌っている青年にとって、彼女の様な教え子を見る事は、どうしようも無く心苦しく感じられる。

「オレだけは尊敬するなって話だよ。
オレは、人間なんか尊敬しちゃいないんだからな」

外界へと繋がるその鉄板を固く閉じながら、自嘲気味にそう付け加える。
先も無く、愚かで、酷く退屈な世界を呪いながら。

――未来は明るい物では無いという。

複雑化し過ぎた経済は僅かな軋みで暗期に入り、増えすぎた人口は世界各地に歪みを生み、貪欲な経済成長に痛め付けられた環境は既に虫の息である。

人類は彼が嘗て信じていたよりもずっと愚かで、遥かに我が儘な生き物であるという事実を、今の彼はよくよく理解している。

彼に“こんな人類にならば貢献する価値は無い”と判断させたファクターの一つである。

彼自身は、それでもいいと思っていた。

だって他人がどうなろうと、どんなにおぞましい絆で繋がっていようと、自分には一切関係の無い事ではないか。自分も我儘な人類の一員であるかと思うと嫌悪感も感じるが、それで罪悪感を感じる価値が有る程、人類は上等な存在では無いと彼は感じている。

人に対する興味を無くした彼には、

狭い研究室と酷い退屈だけが残った。

「……っ」

先程よりも更に視界が暗くなったのを感じた彼は、理由の無い疲労を感じながら自らのデスクへと座り直した。まるで振り払うかの様に、先程の黒表紙の本を床から持ち上げて、開く。

タイトルは、“世界の黒魔術とその儀式”。

彼が読み始めたその本は、天才の名を欲しいままにしている物理学者には到底似つかわしく無い異物であるかの様に思われる。

しかし、彼にもある程度の言い分はあった。
近年、人間というモノに心底愛想を尽かし始めた彼は、人類史のある地点において、一度は“人間外のモノ”として扱われた存在に興味を持ち始めていたのだ。
彼らがどういった経緯で“そういったモノ”にでっち上げられたのかには、ケースバイケースで様々な理由があったのだろう。
しかしながら“そういったモノ”として扱われていたからには、もしかしたら、彼らは自分が嫌悪する人間とは違う“何か”を持ち合わせていたのではなかろうか、と。
真也は、そういった自分の理解の外にある存在に、一縷の期待感の様なものを感じていた。

「なになに、ここより遠い異国には……」

適当な興味を持ちながら、適当に字面を追う。
のめり込み過ぎる事も無く、特に感慨を覚える事も無く、それでもせめて暇潰し程度にはなればと期待しながら――。

――それは、遠い昔のお話。

そのカテゴリーに分類される存在は、呪文一つで火炎を放ち、無生物に命を吹き込み、異界から悪魔すらも召喚してみせるという。
嘗ては遠く実在していたとされる、遠い遠い神秘の担い手――。

「……バカか、オレは」

禍々しい黒表紙の洋書を半分ほど流し読みした所で、青年はポツリとそう零した。

青年は、科学を知っている。

火炎とは燃焼反応であるから可燃性物質が無ければ成立しないし、異界から悪魔を召喚するなんていうのは、原子論、及びエネルギー保存則に反する重大な“ルール違反”であるという事実を、青年はよくよく理解している。その本の信憑性の無さを、青年は痛い程によく痛感している。

「……末期だな」

憂鬱な気分で付け加える。

天才発明家、トーマス・アルバ・エジソンは、晩年には心霊研究に打ち込んだ事で知られている。もしや彼の発明王も、自分と同じ様に人間に対する愛想という物を尽かしていたのではあるまいか、などと取り留めの無い思考が彼の頭を過る。

そうだとするのであれば、自分は歴史的な天才の晩年と同じ境地にまで至ったと、少しばかり誇らしい気持ちになる反面、現在の自分の年齢を思い出して酷く鬱になるのを彼は感じた。

一度自分の脳年齢を測ってみようか、などと思い至り、脳トレは科学的根拠無しとしたイギリスの研究チームの統計などがなんとなく頭を過ぎったりする。

「……さてと」

一度大きく深呼吸をすると、真也はデスクから適当なペンを手に取り、その本の適当なページに記されていた適当な図形を一つ選び、適当に自らの左掌へと書き込んだ。

「魔術、か。これで火炙りにされた時代があったっていうんだから、人類は大分賢くなった方なのかもな」

皮肉気に呟きながら、青年は後日の実験予定表へと目を通し始めた。

4. 国家事業規模の大魔術の使用結果が芳しく無かったという事実の原因に関して

“その儀式”は、奇跡と称されるに価する神秘であった。
――セトル・セトラの儀。
それは１００年に１度行われる、“魔法使いの祭典”である。

世界には６つの国が存在していた。
果てのない平原（ヴィーグリード）を中心として放射状に存在するのは、世界の覇権を競う６大国。

“屈強なる武術王国”・武の国（ウォルヘイム）
“余命無き死霊国家”・死の国（ネクロガルド）
“崇高なる選民共和国”・天の国（ソルヘイム）
“光無き地底都市同盟”・地の国（ノームズアシュ）
“獰猛なる氷河帝国”・氷の国（フィンブルエンプ）
そして“白銀の魔術大国”・銀の国（プラティヘイム）

虹の橋（ビフレスト）と呼ばれる休戦協定のお陰で、表立って争う事はあまり無かったものの、水面下では着々と軍備を拡張し、その国力を競い合ってきた。
自らの軍事力を誇示し、国家の優位性を示す為ならば如何なる手段でも用い、互いに侵略の期を伺いつつ牽制し合ってきたのだ。

人々はそれを冷戦と呼ぶ。
太古の昔。もう誰も発端を知らないくらいの大昔から続いてきた、この世界を覆う冷たい呪い。

止めたい人は多いのかもしれない。
だが、もう止められないのだろう。
少女はそう諦観している。
例え争う原因を忘れてしまったとしても、明確な理由を知る人間がいなくなってしまったとしても、敵国から自国を守る為には軍備を整えなくてはならない。
それはきっと、どこの世界でも共通のルールなのだ。

軍備の拡張、とは述べたが、実は6大国にとってこれは中々にネックだった。
何しろ軍備の拡張には技術革新が不可欠であり、異なる知識や文化と交流する事によって発展していくのが技術というものの特性である。
存在する6つの大国が全て冷戦状態であり、国交という物がほぼ皆無な状態では、各国の望める技術革新など多寡が知れている。戦況が均衡状態になるには、そう時間は要らなかったのだ。
6大国は、他国を侵略する為には自国以外の技術が必要であるという、矛盾した事実を知る事となった。

均衡は長く続いたという。
国々は世界中に間諜を送り込んだり、様々な裏工作を行ったりと努力したらしいが、それでも一つの国だけが飛び抜けた発展を見せる事は無かった。
戦況は硬直し、行動は凍結し、偶然が敵国に味方する事を恐れる日々が長く長く続いた。

当時の人間達がどう思っていたのか。
それはもう想像するしかない。

ただ少女には一つだけ、確信に近い直感があった。
彼らもきっと、今を生きる人間達と同じ様に、少しでも他国に遅れをとれば国が滅ぼされるという事実に恐怖していたのだろう。

――だからこの国は、こんな儀式を生み出したのだ。

儀式の根幹は、単純な発想だった。
本当に、まるで子供の空想みたいに単純な発想。
つまりはこの世界の知識だけでは他国に勝てないというのなら、我々とは無関係の、全く別の世界から協力者を呼び出せばいいのではないか、と。

結論を述べる。
セトル・セトラの儀とは、この世界とは全く理の違う異世界から魔人を呼び寄せる大魔術なのである。

異世界には様々な可能性があるという。
この世界の様に魔術が発達した世界もあれば、人々が不死の秘術を生み出した世界など、異世界には凡そ人間が考え得る全ての可能性があり得るのだ。
つまりこの儀式は、本来ならば決して交わり得ないそういった別世界の人間を連れて来て、その条理を外れた知識を借りて自国での技術開発に当たらせようという、バカみたいに高度な召喚術なのである。
それは、魔術大国である“銀の国”が誇る最大級の技術の結晶だった。

異世界より召喚された魔人は“守護魔（ガーディアン）”と呼ばれる。多くの場合、彼らが齎す技術は、国の常識を根本から破壊してしまう程に強力だ。“不死鳥の羽ペン”による“アダマス鉱の自由加工”など、少女が現在この国で常識として使用している技術も、殆どは過去の守護魔達が伝えた物であると言われている。

……惜しむらくは、人間の考える事など皆同じだったという事だろうか。

独自に編み出したのか、情報が漏れたのかは分からない。

ただ分かるのは、少女の住む“銀の国”に続いて、他の５大国も期を同じくしてその儀式を成立させたらしいという事である。

その折、儀式の乱用による経済の混乱を恐れたのか、守護魔を呼び出す際には期日を決め、６大国が同時に儀式を行う事、なんていう盟約を結んだらしいのだから、なんとも本末転倒な話というかなんと言うか……。

その辺りの歴史には、少女もさして興味は無い。

重要な点は、たった一つ。

太古の昔に成立したその召喚術は１００年に１度の周期で行われており、今年が丁度、前回の召喚から数えての１００年目に当たるという事だけである。

異界から魔人を呼び出し、その知識と力を得る禁呪。

常識外の力を傘下に置く、世界の行方を賭けた大儀式――。

少女はそれを夢見て来た。

何しろ、世界を変える程の大魔術である。

“異界から魔人を召喚する”。

それがどんなに出鱈目な事なのか、魔導師である少女には恐ろしいくらいによく理解出来ていた。

それを担う事は当代最高の魔法使いの証明であり、魔導師としては最高の名誉である。

その生い立ち故に正当な評価を受ける事が稀であった少女にとっては、それは世界を見返すまたと無いチャンスであったのだ。

……それに。

正直に言うと、少女は魔人そのものにも少しは興味があった。

異世界とはどんな所なのか。

“その人”はどんな風に暮らして来たのか。

自分とどういう所が違っていて、そしてどういう所が同じなのか。

異世界からの訪問者が運んで来るであろう異国の風は、他国との交流という文化がほぼ皆無なこの世界に生きる少女の心を、子供の様な好奇心を懐かずにはいられない程に興奮させたのである。

詰まるところその儀式は、少女にとっては最大の名誉であり、同時に人生最高の一大イベントになる筈だった。

今まで自分を不当に扱ってきた連中を一気に見返し、唸らせてやれるくらいの最強のチャンスだったのである。

だからこそ、絶対にヘマなどする訳にはいかなかったのだが……。

――――――

蒼い太陽は地平線の彼方へと消え失せた。
群青の空は真紅の夕月によって塗り替えられ、深緑の大地に美しい黄昏時を演出している。
しかし今は広大な天空を支配しているその満月も、間も無くその輝きを弱め、辺りはいつもの如く漆黒の闇へと包まれるのだろう。
人にして人ならざる、神秘の担い手が支配する刻限が訪れる。

「まったく、なんて日よ！！」

茜色の夕月が差し込むお屋敷に、真紅の少女が帰省した。
昨夜よりもなお力強く、装飾の欠けた大扉を蹴破って、ド派手に靴音を反響させながら広大な図書館を闊歩する。右腕からは空気が震える程の魔力がもうもうと立ち昇り、周囲には陽炎までもが生まれていた。漆黒のローブや帽子には所々焦げ目が付き、着衣は不自然に乱れている。

――さて。
昨日にも増して機嫌が悪く、最早トロールかドラゴンの如き近寄り難さを醸し出している少女ではあるが、取り敢えずは一度、本日彼女の身に起きた出来事の数々をダイジェストでお浚いしておく事にしよう。

この日の少女、アルテミア・クラリスは最悪だった。

昨日の夜に、空が青くなるまで調べ物をしていたのが祟ったのだろう。
失敗したとはいえ大儀式による疲労も蓄積していた少女は、それこそまるで息を引き取ったかの様に深く眠り、ピクリとも動かぬま

まに起床予定時刻を大幅に超えて惰眠を貪ってしまった。
彼女は国一番の魔導師である。
つまりは魔導研究所のトップとして魔導師達の模範となり、同時に講師として見習い達に魔術の指導をしなければならない立場にあるワケなのだが――。
いつもならば彼女をけたたましく起こしてくれる筈の起床鳥（グリンカムビ）もまるで用を成さず、講師が朝一の修練をすっぽかすという大失態を演じてしまった。

跳ねる様にベッドから飛び出した少女は、いつもよりも遥かに高い太陽に向かって奇声を発しながら屋敷の立っている“最果ての丘”を全速力で駆け降り、爽やかな笑顔を向けてくる門番に睨みを返しながら王都の正門へと飛び込んだ。
疲労と空腹と睡眠不足に加えた呼吸困難で凄まじい形相になりながら、息つく間も無く目的地を目指して走りに走り続けたのだ。
大慌てで魔導研究所（ヴァルスキャルグ）へと全力疾走する途中、街ですれちがう人々から遅めの出勤に対しての冷やかしを受け続け、３回程揉め事を起こしているうちに時刻は結局お昼を過ぎてしまったのではあるが……。
でも、まあ。過ぎた事を悔やんでも仕方がない。
なんとかギリギリでランチタイムに間に合った事を良しとした少女は、朝食をかねて昼食を摂ろうと自室に向かった。

ところが自室の前で待ち構えていたのは、朝の修練に出席する筈だった“真面目な”見習い魔導師達。
彼らはどうやら、彼女に昼休みを利用しての個別指導を依頼しに来ていたらしく、また彼女としても、講師という立場に加えて朝の修練をすっぽかした手前断る訳にもいかなかった。
結局その“真面目過ぎる”見習い魔導師達は、適当に基礎の反復

をさせたくらいでは満足せず、個々の“先天魔術（ギフト）”に対する指導から始まり、しまいには“複合魔導呪詛（バインド）”の応用や“始祖の炎帝（ムスペルヘイム）”なんていう大魔術の練習をこなすまで満足しなかった。

それはもう、最早嫌がらせと言って良いレベルの真面目さであった。

半分焦土になった修練場の片付けが終わった頃には昼休みも殆ど終わっており、彼女は結局何も口にしないまま魔導研究所の一日分の激務を、僅か半日でこなさなくてはならなくなった。

並の魔導師ならば、過労死しかねない仕事量である。

それでも、やはり少女は国一番の魔導師であった。

眠気と空腹感に唸りながらも持ち前の才覚を発揮し、半ば無我の境地にまで至りながら、なんとか定時までに全ての仕事に片を付ける事に成功したのである。やることを終えたという事実に爽やかな達成感を覚えた少女は、帰る前にシャワーでも浴びて行こうかと湯浴み場に向かった。

既に殆どの職員が使った後らしく、脱衣所の床が大洪水だったのが少々残念ではあったが、自らの体型に少々コンプレックスのある少女である。

濡れた床の不快感よりも、誰かに裸身を見られる心配が無いという事実に対する細やかな安堵の方が勝り、意気揚々と暑苦しいローブを籠へと突っ込んだ。

――その時である。

ローブのポケットに入っていた報告書がビショビショの床に落ち、あっという間に解読不能な落書きへと変わっていったのは……。

その様子を確認した時、彼女は漸く昨日の儀式に対する大臣達への報告をし忘れていた事に気が付いて青褪めた。

大急ぎでローブを被り直し、走り出した少女。

無駄にだだっ広い事で有名な魔導研究所（ヴァルスキャルグ）から王宮までの渡り廊下を、着衣の乱れも気にせずに全速力で駆け抜けた。あちこち捲れた恥ずかしい格好を部下達に笑われ、死にたくなる様な羞恥心を抑え込みながら謁見の間に滑り込んだ彼女を出迎えたのは、文部大臣アスガルドからの大目玉。

“貴様は国を滅ぼすつもりか！！”

などという怒号から始まり、お偉いさん貴族特有の嫌味をネチネチと延々浴びせかける髭親父。しまいにはその汚らしい姿を王族の視界に入れるなとか、そんな焦げ臭いローブで王宮に入るくらいなら裸で来いなどという高慢嫌味セクハラ発言を連発しだし、お説教は他の大臣が止めに入るまで一刻程も続いた。

なんとか場が収まり、漸く儀式失敗の原因を報告する段階まで漕ぎ着けた少女。しかし実は、報告する内容など別にこれといっては無かったのである。一晩調べてもなんだかシックリこなかったし、誤魔化しながら書いた報告書は水没してしまったし、仕方が無いので内容は至ってシンプルに、

“失敗の原因は不明です。
いえ、まったくもって分かりません”

髭親父がタコになった瞬間であった。
テカった額に青筋をビキビキと浮き出させ、嫌味全開で罵声を浴びせかける文部大臣の姿を、少女は取り敢えず記憶から抹消しようと努力している。
正直、覚えておくのは精神衛生上よろしくない、と彼女は思う。

そんな出来事があった後、頭に血が登ったアスガルドが彼女に下した処分は自宅謹慎。原因が分かるまで一歩たりとも家から出るな、などという無知、無茶、無駄な訳のわからない指示をお出しになった。今頃このお屋敷の周りには、彼女の監視の為に大量の使い魔達が飛び回っている事だろう。

「バカ!?　あいつ、バカなの!?　原因が分からないのが問題なのに、魔導研究所から隔離してナニさせるつもりなのよ!!」

少女の批判はもっともな気がしないでもない。

しかしながら、年齢というのはそれだけで批判要素になる物なのである。

年端もいかない少女に国家最重要の儀式を任せた挙句におじゃんにされた事で責任を問われる文部大臣は、取り敢えずは何らかの処分を下しておかなくては示しが付かないと判断したのだろう。

また一番の問題点は、儀式に見合う程の超一級の霊地なんかそう見つかる訳も無く、先日の失敗によって“銀の国”は今回の儀式への不参加がほぼ確定してしまったという事実であり、それが彼女に実利を求めるよりも処分を与えるべきであるという判断を大臣達が下す一因ともなったのだが……。

そんな彼らの思惑など、一介の魔導師に過ぎない彼女には知る由も無い事柄であった。

「あーっ!!　もうっ!!　ムカつく～～っっ!!!!」

床に積まれた本の山を投げ飛ばし、本棚に蹴りを入れて派手に倒す少女。豪快な音は一時のみ彼女の胸に心地良く響くが、次の瞬間には怒りとそれを上回る虚しさだけが込み上げる。

そんな普通では無い精神状態にあった少女は、自らが無意識に行っているそのアクションに気が付かなかった。

物に八つ当たりを繰り返す少女の右腕の周囲では、収束した魔力によって微かに空気が震え出す。空間に放たれた熱量は彼女を中心に陽炎を浮かび上がらせて、部屋に差し込む真紅の月光をグニャリと歪めて見せた。やがて彼女がその右腕を高く掲げた頃には、彼女の頭上では自身の3倍程も直径のある巨大な火球が形成され、辺り全てを灰燼に消さんと唸りを上げていた。

――火炎魔法・始祖の炎帝（ムスペルヘイム）

「……あっ！！」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

火球は無意識に形成されたとは思えない程の安定性を誇り、最早キャンセル不可能な工程にまで辿り着いている。慌てて周囲を見回す少女。今だけは、やたらと本（可燃物）の多い自分の屋敷が恨めしい。適当な場所が見つからなかった少女は、とっさにその右腕を天蓋のステンドグラスへと向けた。

瞬間、天空に向けて駆け抜ける業火球。

この大花火によって発生した衝撃波は、夕食時の王都を一時騒然とさせたという――。

――――――

「やっちゃった……」

すっかり風通しの良くなったお屋敷。
天蓋に空いた大穴から覗く満月を見上げながら、少女はガックリと肩を落とした。

自宅謹慎中に自宅に大穴。
何がしたいのか自分でも分からなくなる程の愚行である。
いや。そもそも謹慎の定義とは反省しながら慎んで屋敷に閉じ籠もる事を言うのであって、その意味ではど派手に自宅を開放した少女の行為など、最早謹慎でも何でも無い訳ではあるが……。

「まったく、つくづくなんて日よ……」

大きく溜息を吐く。
なんだか一気に力の抜けた少女は、自らが蹴り倒した本棚を背凭れにして、床によっこいしょと座り込んだ。
穴を通して外から吹き込む夜風が、虚しいくらいに心地いい。

「？」

――ボトリ、と。帽子の上に何かが落ちてきたのを感じて、少女はその目を丸くした。
本では無いだろう。もっとズッシリとしていて、柔らかい何かだ。

帽子のつばに手を伸ばす少女。
降って来た異物を摘み上げて、目の前に持って来る。
妙に草臥(くたび)れた感じのソレを、まじまじと確認する。

ソレは、黒焦げになった使い魔の死体であった。
おそらくは先程の大魔術にでも巻き込まれたのだろう。
宝石の様な翼がウェルダンに焼けて、ブスブスと煙を放っている。
まあ、一流の魔導師たる少女である。
今更、使い魔の死体を見たくらいで悲鳴を上げる程、か弱い精神を持ち合わせている訳でも無いのだが……。
しかし。その使い魔の原型を想像したところで、少女の血の気はサーッと引いた。

使い魔とは、この世界に広く普及した情報伝達手段の一つである。
好みの生物を然るべき魔術によって調教した物で、魔術大国である“銀の国”では子供でも一匹は飼っている程にポピュラーなものだ。
少女も複数保有しているし、街を歩けば数件は使い魔ショップを見かける事も出来る。

しかし一口に使い魔とは言っても、その格は様々であった。一番低位なのは使い捨ての虫の様な物で、これらは単一のメッセージを伝えるとすぐに自然へと帰ってしまう。
もう少しランクが上がると蝙蝠や梟となり、これらは情報を伝えるだけでなく、飼育者の目や耳として遠隔地の光景を伝える事も出来る優れものだ。大抵の魔導師が扱うのはこのランクであり、それは少女自身も例外では無い。
更にランクが上がると王侯貴族が使う様な、家一軒に相当する程に馬鹿高い物になり、ここまで来ると、最早実用性よりも見栄の意

味合いの方が強い。
言わば、ブランド品と同じ感覚である。
貴族とは、常に見栄を張らなくては生きていけない生き物なのだ。

「……」

――さて、ところで先日。
少女は行きつけの使い魔ショップにて、目の前の消し炭がかな～り豪華なケースに入って売られていた様な記憶が、なんだか物凄く鮮明に目の前に浮かぶ。
スゴいのがあるなー、なんて思って、その時はつい０の数を数えたりもしてみたのだが、正確な数値を思い返そうとした少女の脳は自己防衛本能にストップをかけられた。
ブランドの鞄を破損した場合、加害者は普通何をするのか、なんて素朴な疑問が浮かんだ所で、同時に脳が理解した解答を、取り敢えず少女は理性の奥底へと追いやった。

「ふ……ふふふっ……ふふふふふふっ！！」

目を伏せて、ドス黒いオーラを辺りに撒き散らしながら笑みを浮かべる少女。その目は全く笑っていない。並の魔術師ならば向かい合っただけで卒倒しそうな程に邪悪な魔力を立ち上らせながら、少女は低い笑いを漏らし続けていた。

まったく。なんで王族の方々は、たかが謹慎の監視にこんな高い使い魔を使わせるかなー、なんて、誰にともなく不満混じりの疑問が湧いてみたりする。
やがて少女の表情から笑みは消え、その控えめな胸いっぱいに空気が満たされた。

「……やってやろうじゃないっっ！！」

何かが吹っ切れたかの様に立ち上がり、吠える少女。ここまで不運が続くと、最早怖い物など無いのだろう。今日は何か行動を起こす度に被害が拡大していく厄日である事など気にも止めず、少女は右腕を掲げて魔力を回した。

「命ず(ansur)！！」

神秘を担う語句を紡ぐ。

少女の右腕からは、視認できる程に膨大な魔力が立ち昇った。

歪む空間に立ち込める、幻の様な力の気流。

辺りに存在する本棚の群はガタガタと揺れ始め、床に積まれた本のページは捲れ返った。

「動け(rad)、動け(rad)、禁域(eihwaz)を避けよ。
走れ(eoh)、走れ(eoh)、協力(eolh)し、尊守せよ。
命ず(ansur)。領土譲渡(ing)を完遂(othel)せよ」

半ば自棄っぱちになりながら呪文を詠唱していく少女。

言霊が一字紡がれる毎に本棚は壁際へと滑り、本は宙を舞いながら少女から遠ざかって行く。

暫くしてガタガタという物音が収まる頃には、部屋には少女を中心として簡単な運動が出来るくらいのスペースが出来上がっていた。

「翼を与える(gyfu rad)。
蒼天を駆けよ(gyfu eoh)」

次いで少女が飛行魔術の呪文を詠唱すると、部屋の奥の方から無数の薬瓶が回転しながら宙を舞い、少女を取り囲む様に空中に静止

した。

少女はそれぞれの銘柄を適当に確認しながら、品定めするかの様に調合する順番を決めていく。

「よかった、マンドレイクは足りてる。

じゃあ、あとは床に魔法円を描いてからエーテルと降魔聖水を調合して、抗魔術結界と霊道（サーキット）の構築をヴァナヘイムの術式で仕上げてから因果律歪曲の複合魔導呪詛（バインド）を……。

……フン、見てなさい。

最強の魔法使いが誰なのか、思いっきり思い知らせてやるんだから！！」

そう意気込んだ少女のセリフは、果たして本気だったのか自棄（やけ）だったのか。

今から少女が行おうとしている儀式は、成功するわけが無い。

少しでも魔導の知識がある人間ならばそう理解するだろう。

“守護魔”と呼ばれる異世界人の召喚は、超一級の霊地を用いて初めて成立する物である。霊地でも無いような適当な場所、しかもそれを自宅で行おうなんていうのは、最早無茶を通り越して冗談とすらも思えまい。

しかし半ば自暴自棄に陥っている少女には、そんな事に気を配るだけの精神的余裕すらも存在してはいなかった。つまりは、無駄だと分かっていても何かをしないと気が済まない様な気分であったのだ。

薬の調合を始めた時に、少女は無数の使い魔が大穴の外からこちらを伺っている様子に気が付いた。先程の手痛い出費の事もあって

か、ギャーギャーというその不気味な鳴き声が、まるで自身の無駄な行動を嘲笑しているかの様に感じられる。
少女はプッツンしそうになった。

「……なによ。
家から出てないんだから、ナニしようとあたしの勝手でしょっ！？」

一度薬壺を掻き回す手を止め、右手に魔力を流す少女。
土魔法の呪文を詠唱しながら、パチンと指を鳴らす。
室内に反響する指の音が聞こえなくなる頃には、先程少女の開けた大穴は跡形も無く消え失せていた――。

5.　人間が一日に感じる不幸という概念に対するＰＥＴＷＨＡＣ的解釈を考慮

とある地方の学園都市。
その郊外にひっそりと佇む、コンクリート製の地味な建物。傍目から見れば、それはどこかの建設会社の物置の様にも映るだろう。

しかし見物人がそういった先入観と共にその建物に足を踏み入れたのであれば、次の瞬間には内部に設置された数多の機械と資料の数に言葉を失う事は間違い無い。
実はその建物は、地下の巨大実験施設へと繋がる出入り口なのである。

レプトン衝突型主線形加速器。
リニアコライダーとも呼ばれる、電子と陽電子を加速・衝突させる事によって一時的に宇宙初期の超高エネルギー状態を再現する物理実験装置。
それがこの施設に製作された器具であった。

線形加速器、と言えば、前時代的で小規模な装置と考える方も多いだろう。確かにこれまで、事実として高エネルギー加速器と言えばＣＥＲＮのＬＨＣに代表される様な環型が主流であった。

しかし近年の加速器の超高エネルギー化に伴い、物理学者達は従来の環型加速器では、現段階以上に粒子の速度を上げるのはコスト面から難しいと判断し始めた。速度が大きくなるにつれて、シンクロトロン放射によるエネルギーロスが桁外れに増大する為である。

“これ以上のエネルギーを環型加速器で実現しようとするのなら

ば、地球の外周に加速器を作らなくてはならない”、などという冗談も有るくらいであり、つまり近年では、ＬＨＣを超える高エネルギー粒子衝突実験を可能にする加速器は、現実的には線形でなくてはならないという見解が大多数の物理学者達の総意を占めている。

加速器設計の国際協力チームが世界中で研究を進めている、そんな最新鋭の物理実験装置。

この学園都市の地下２０メートルに存在するのは、そのうちの一つであった。

街を貫き、遥か西へと伸びる地下トンネルは全長約４５ｋｍにも及び、３５０００台近い超伝導空洞が衝突時には理論上１８ＴｅＶ付近のエネルギーを実現する怪物マシンである。

そんな巨大装置の入り口。

殺風景な倉庫の如きその建物に、足を踏み入れる一つの影。

未だ皺一つ無いその幼い顔立ちは、ともすればその施設の正体を知らずに興味本位で忍び込んだ学生とも解釈されかねないだろう。

しかしその青年が放つ気怠そうなオーラは、未知の建物の内部に興味を踊らせた子供の物とは到底思えず、また彼の身を包む純白の装束は、彼がその若輩に過ぎる年齢とは無関係に自然界の神秘を司る聖職にある者である事を示唆していた。

「……」

いかにも不機嫌そうな態度で、ふてぶてしく建物に入ってきた青年。電子機器がこれでもかと備え付けられた部屋に侵入し、まるで何かを物色するかの様に辺りを見回している。

そこはかとない不快感が見受けられる双眸が、ホワイトボードの前のデスクに留まる。

そこに丸めてあったタオルを発見し、彼は安堵したかの様に溜息を吐いた。悴(かじか)んだ手でそれをとって、ゴシゴシと頭や顔を拭き始める。

青年の髪は、何故かバケツでもひっくり返したかの様にグッショリと濡れ、物理学者のトレードマークである白衣からは、黒いインナーが透けて見えていた。

――さて。

なにやら散々な様子の青年ではあるが、取り敢えずは一度、今朝より彼の身に起きた出来事の数々をダイジェストでお浚いしておくとしよう。

この日の青年、朝日　真也は最悪だった。

彼は今朝、何故かいつもよりも不自然に清々しい気分と共にレム睡眠域から現実世界へとその意識を引き戻された。睡眠中に見ていた物語は、覚えている限りでは大して素晴らしい物でも無く、どちらかと言えば悪夢に分類される類のモノであったので、目が覚めたのはまあいい。と、彼は思っている。

だがそこで、夢物語のエンディングテーマとしてすっかりお馴染みになった例の電子機器が生み出す雑音を未だに聞いていないという事実に気が付いて、彼は奇妙な不安感に襲われた。

枕元の定位置にて時を刻んでいる筈の、文明の利器の代表選手を

見上げてみた青年。
その精密機械が起床予定時刻の丁度5分前に燃料を使い果たしていたという事実を観測し、寝起きの為にエンジンのかからない彼の脳細胞は凍りついた。

熱力学の第二法則は正しかったと確信する。
永久機関は作れない。

朝食を摂らず、身嗜みも気にせずに家を飛び出した青年は、この施設へと向かう道中で突然の豪雨へと見舞われた。雪や霙（みぞれ）でないだけましであった、と、青年はなるべく前向きな解釈をするように努めている。
しかしながら真冬の雨は想像以上に彼の体温を奪い、持ち前の聡明な判断力を鈍らせた。

氷が混じっていないのが不思議なくらい冷たい雨の中、信号という信号には全て引っ掛かり、ふと隣を走り去って行ったタクシーに乗ろうと右手をジーンズのポケットに忍び込ませた時には、財布と携帯を家に置き忘れて公共交通機関は疎か同僚にすらも頼れないという新事実を発見してしまった。

一文無しで昼食をどうしようか、などと肩を落として思考する彼の隣を通り過ぎる大型バス。その巨体と自分の間に大きな水溜りができているのを確認した彼は、既にこれ以上濡れ様がないという程にグッショリと濡れた身体で反射的に後方へと飛び退いた。
2歩下がった所にあったのは凍結した路面。
早朝に、近くの団地に住むお婆さんが打ち水をしたらしい。

壮大に足を滑らせながら前方の水溜りへと滑走し、顔面を地に打ち付けながら泥水を啜るという漫画みたいなアクションをこなしてみた青年であった。

“地球温暖化を促進させなくては。一刻も早く”

口に入った泥を吐き出しながら、彼は恨み言の様なスローガンを誰にとも無く呟いた。

「まったく、なんて日だよ……」

白衣を脱いで、シャツの下から身体を拭く青年。

捲られたインナーの下から覗く体には、脂肪の少ない肌に薄っすらと腹筋の形が浮き出ている。

線の細い顔立ちで、ともすれば中性的とも形容されそうな容姿の彼ではあったが、日頃から田舎道を徒歩通勤している為か、その身体は割と健康的だった。

髪の水分を拭き取り、八つ当たりするかの様にジーンズに付いた泥を擦り落とす。

あまりにも連続して降りかかりすぎた災いの数々にどうしても納得がいかず、彼は自らの運勢という物に対して科学的な見地から推察しようと、凍り付いた思考に冷静さを求めてみる。

「ふむ……」

不運について考察を始めた青年は、不意に以前読んだ科学啓蒙書の筆者が提唱していたＰＥＴＷＨＡＣという概念を思い出した。

ＰＥＴＷＨＡＣ（Ｐｏｐｕｌａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｅｖｅｎｔｓ　Ｔｈａｔ　Ｗｏｒｌｄ　Ｈａｖｅ　Ａｐｐｅａｒｅｄ　Ｃｏｉｎｃｉｄｅｎｔａｌ）とは、日本語に言い換えるのであれば、“本来は偶然に過ぎないのに何か関係がある様に見える事象の集合体”の事である。

例えばある日、とある主婦が、夫が免許証を忘れたまま会社に出勤した事に気付いたとしよう。彼女はすぐさま夫の携帯に電話をしたが、繋がらない。仕方ないので彼女は、免許証をエプロンのポケットに入れて、夫が帰って来てから渡す事に決めたとする。

その日の午後、病院から掛かってきた電話を取った彼女は青褪めた。午後2時半頃に夫が事故に会い、先程息を引き取ったと言われたからだ。彼女はその報告にショックを受け、エプロンのポケットに入れていた免許証の夫の写真を見て涙を流したとする。

さて、もしもここで免許証番号の下４桁が１４３０。つまりは夫が事故に会った時刻と一致していたりした場合、彼女は血が凍りついた様な驚きを味わう事になるのだろう。

この話は十分に不幸な運命の範疇に入るとは思われるが、あえて感情を捨てて批判するとすれば、これは果たしてそれほど数奇な確率なのであろうか？

例えば今回のケースであれば、免許証番号の下４桁が夫の亡くなった時刻である午後３時２０分を示していたとしたら彼女はもっと驚いただろうし、また夫が事故に会ったのが４月３０日であったとしても彼女は驚きを得る事が出来たかもしれない。

また免許証番号は１２桁あるので、赤斜線で区切られた中四桁が事故の時刻を示していてもよかった筈であるし、その数字が０１３

0であったりしたならば、彼女は自分が免許証を発見してから約1時間30分後に夫が事故に会った事に因果を感じたかもしれない。

この様に、本来は人間の死亡時刻とは何の相関性もあり得ない免許証番号などという数字の羅列であっても、受け取り手が拡大解釈を繰り返す事によって何らかの関連性がある様に感じられる事があるというのがPETWHACという概念のあらましである。この集合は、人間の解釈の仕方によって無限に増え続ける。

占いは信じている人にしか効果が無いとは良く言ったものだ。なにしろ、信じていない者は“数奇な出来事”の集合を無理矢理広げたりする事は稀であり、結果としてPETWHACの規模は小さくなるのだから。

「……」

さて、それでは彼自身が本日経験した不運という物が、果たしてどういった確率で起こる物なのだろうかという事を考えてみよう。

例えばそう、目覚まし時計の電池切れである。

今回は起床予定時刻の5分前に電池が切れていたが、別に時計が止まるのは50分前でもよければ5時間前でも結果は変わらなかっただろう。目覚ましをセットする時刻を1時間程間違えていたとしても今朝と同じ結果に至っただろうし、もっと言えば二度寝やアラームスイッチの押し忘れも今日と同じ結果を齎すファクターになり得ただろう。

その後巻き込まれた豪雨にしても、一体年間のべ何百万人の日本人が同じ状況に陥るというのか。特に今朝の自分の様に天気予報を見る時間も無かったのであれば、傘を持たずにその渦中に放り出さ

れる確率も高まろう。
財布や携帯にしても同様だ。
またそういった差して珍しくも無い偶然の重なりを“不運”として認識してしまえば、注意散漫になって氷に足を取られる事もあるだろうし、今日の自分が“不運である”という認識は更にＰＥＴＷＨＡＣの規模を拡大させるという悪循環を生むだろう。

「はぁ……」

一度大きく息を吐きながら、冷静に戻った頭で、先程までの自己の短絡的思考を反省してみる。

そう。結局は、この程度の不幸が連続する事など大して珍しい事象でも無いのである。
これらの現象には、何の連続性もありはしない。
否、自分でその発生確率を悪い方向に跳ね上げたとすらも言える。

厄日やら不運やらが根拠も無く思考回路に上るあたり、やはり自分もまだまだ未熟だな、などと、彼は眉間に指を当てる様な仕草をしながら自嘲した。

「……？」

その時彼は、自らの手の臭いに違和感を覚えて目を丸くした。青年の掌からは、なにやらまるで雨上がりの農村地帯の様な臭気が漂っていたのだ。

目線を、ゆっくりとタオルに移す。

よくよく見ると、そのタオルはまるでペスト患者の様にあちこちを真っ黒な斑点に覆われ、全体的にジットリと湿っていた。丁寧に述べるのであれば、あまり清潔であるとは言い難い。

偶々手にとったタオルがカビの温床になっている確率にＰＥＴＷＨＡＣ的解釈を求めようとした青年は、先程ソレで顔を拭いた事を思い出して取り合えず床へと叩き付けた。いい音が響き渡る。小走りでシャワールームへと向かいながら、タオルを放置した職員には後で苦情を訴えてやろうと心のメモに予定を書き記す彼であった。

――――――

お湯で洗い流した黒髪を白い布で脱水しながら、青年は再び精密機械の並ぶ部屋へと足を運ぶ。

因みに現在使っている布は、仮眠室に積んであったシーツを勝手に拝借した物である。清潔な布がそれ意外に見つからなかったのだから仕方ない、と、彼は自分に言い聞かせてみる。なに、熱めのお湯で洗ったのだから、きっと直ぐに乾いてくれるに違いない。

「それにしても……、
職員はどこに行ったんだ？」

誰もいない部屋を見回しながら、ポツリとそんな呟きを零す青年。頭が冷静に戻るにつれて、今度は実験の予定時刻を過ぎているのに誰も現場にいないという事実が彼を焦らせていく。

高エネルギー加速器を用いた粒子衝突実験。
宇宙初期の原初の火の玉、ビッグバンのエネルギー状態を再現するこの実験は、成功すれば質量の発生機構やダークマターの正体に迫れる可能性を秘めており、また極小のブラックホールを生み出す事によって余剰次元を確認出来る可能性もある。
そして本日、真也は素粒子論の専門家の一人としてこの場に呼ばれていたのである。

彼は、職員の行方について何か手掛かりが残されてはいないかと、湯冷めしそうな身体に鞭を打って辺りを見回した。

「……？」

ふと、実験装置の気圧計に目が留まった。
装置に近づき、目を細めて数値を読み取る。
その値を理解した瞬間、彼は大きな失望感と脱力感に襲われた。

一度目を閉じ、大きく深呼吸をしてから、もう一度だけ視線を装置へと向ける。

しかしそんな事で目の前の精密機械が仕事をやり直すなんて事はある筈も無く、やはり目を閉じる前と同じ数値を示しているのであった。

「……成る程な、これは駄目だ」

状況を察して呟く。

装置の示している気圧は、一週間排気していた割には異常な程に高かったのだ。
排気系統のトラブルか、はたまた装置のどこかに亀裂でも走っているのか。まあ大型加速器が故障する事など、世界的に見てもよくある話である。
どちらにせよ、研究所の職員達はこのトラブルを解決する為に加速器の点検でもしに地下に降りているのだろうと彼は解釈した。

「まったく、実験が中止になったなら一言連絡でも……。ってしたんだろうな。オレのミスだ。
まあ、なんにしても、装置の点検をするなら電源くらい切ってけって話だよな」

適当に愚痴を零しながら、操作パネルにあるスイッチを落とす真也。地下への入り口に掛かっているヘルメットを被り、階段前の扉へと手を伸ばす。
その瞬間、なんとなくドアノブに掛けた左手の平が目に入った。

「……。
はぁ……」

憂鬱そうに、更に大きな溜息を吐く。
彼の掌には、昨日描いた落書きが、未だにはっきりと残っていたからである。

「やれやれ。
まさか適当に取ったペンが油性だったとはな。

全く、つくづくなんて日だよ……」

袖で手を隠しながら、重苦しい扉を開く。

彼は何の疑問も危機感も持つ事無く、奈落に続く様な地下への階段へと消えていった。

再び無人となったコントロールルーム。

そこには、加速器が稼働している事を示す赤ランプだけが、煌煌と光を放っていた――。

6. レプトン衝突型主線形超高エネルギー加速器及び未開拓超一級霊地と新作

「よし、完成」

準備を始めてから数刻の後。

少女の足元に描き出されたのは巨大にして複雑な魔法円であった。

９９の真円が連なる図形は神々しい光を放ち、まるで天空に輝く太陽の様な情景を連想させる。さらにそれら９９の円は、全て個別の魔法円としての内部図形を有している。無数のエニュール文字から成立する複合（バインド）魔導呪詛は、最早文字というよりも前衛芸術に近い域の美を体現し、少女独自のアレンジが加えられた霊道（サーキット）は、それ自体が既に精霊級魔術に匹敵する程の魔力を循環させている。

並の魔導師ならば、例え１０人で描こうとも、同じ物を作るのに３日は要するだろう。

魔法円全体を、再び万遍無く眺める少女。

円には寸分の乱れも無いか。エニュール文字は狂い無く結合されて所定の位置に納まっているか等を最終確認していく。魔力の循環は充分なので、取り敢えず円に綻びは無いだろうと見当をつけながら。

――さて。

本書は“魔導科学”の参考書ではあるものの、このあたりで一度、伝統的な魔導理論の基礎的な定義を軽く紹介しておくことも大切であろうと考える。

科学的な定義は後述するとして、先ずは用語の魔導における意味を確認しておこう。

“魔力”。
魔導においてそれは星の活力であり、精霊の力の源であると定義されている。

現在最も普及した魔導理論である“精霊根源説”によると、この世界の森羅万象は四大精霊によって引き起こされており、彼らはそれぞれ火、氷、土、風の４つの属性を司るとされている。
彼らは星の活力を得る事で力を増し、様々な現象を引き起こすが、彼ら自身が一定時間内に自力で取り込める魔力量には限界がある。
魔術師とは、彼らの活力の摂取を手伝う人間の事を指す。

つまり極論して言えば、魔術師とは精霊に食事を与える給仕なのである。魔術師は精霊に活力を与える代わりに、一時的に彼らの力の一部を借り受けてそれを行使する。
それが、現代の魔導理論が語る魔術の姿だ。

話を魔法円に移そう。
魔力とは星の活力である事は既に述べたが、それは星の中にじっと蓄えられている訳ではない。もっと能動的で、常に対流している物なのだ。

大海を泳ぐ魚が、そのイメージにはピタリと嵌まるだろう。魔力は世界中を常に回遊（流動）していて、大地の局所から浸み出してはまた別の所から星の中へと戻って行く。この魔力の出入り口を霊脈と呼び、霊脈を保有する土地を霊地と呼ぶ。

察しが付いた方も居るだろう。
魔力を魚に例えるのならば、魔法円は網だ。世界中を流動する魔

力を図形によって捕縛し、蓄える装置。しかしこれが魚取りの網と違う所は、適切なエニュール文字で“色付け”さえすれば、捕獲した時点で調理まで完了してくれる優れものであるという所だろうか。

「う～ん……」

さて、そんな自身の描き上げた図形と睨めっこをしつつ、眉間に皺を作りながらウンウンと唸る少女。その表情は真剣そのものなのだが、彼女の容姿で顎に手を当てながら考え込む仕草は妙に可愛らしかったりする。

無論、真面目に魔術の準備を行っている彼女にそんな事を言おうものなら、その人物は即座に消し炭にされる可能性が高いのだが……。

しかしながら少女は、自らの描いた図形に何か釈然としない物を感じていた。

何かがおかしいは気するのだ。

しかし少女には、何がおかしいのかがよく分からない。

妙な違和感が、まるで魚の骨の如く胸の奥に突っかかっている。

「抗魔術結界……、は完璧だし、複合魔導呪詛（バインド）はちゃんと隙間も無いし……。

――って、気のせい気のせい。

まっ、あたしに限って描き損じなんかあるわけないしね」

難しい所だけを一通り確認した少女は、目に付く限り一切の間違いが無かった事を確認すると、最終的にはそんな結論を下した。本日失敗続きであるとは思えない自信家ぶりであった。

少女は自己に意識を埋没させ、体内の集積器官から全身へと魔力を回していく。神経の隙間から漏れ出した魔力は、少女の身体を包み込むかの様に辺りに燐光を浮かび上がらせる。充分に集中が高まったのを確認した少女は、言霊を紡ぐ為に、ゆっくりとその胸に空気を満たした。

――――――

細長い通路に、コツコツという足音だけが反響する。息が白い。肺から漏れ出した水蒸気が空気中へと霧散して行くその様子は、妙に心休まるものがあると、青年はらしくも無くそんな情緒を感じている自分に苦笑した。

複雑な機器が伸びる地下通路という物は、まるで幼い頃に夢見た秘密基地の様にも感じられる。地下と言えども開放的と形容出来そうな程に長い通路。直線状だと言うのに、長すぎて果てを視認する事は出来ない。その場所をたった一人で歩いくという状況もまた、彼に落ち着いた高揚感を感じさせる一因となっていた。

朝日　真也は、全長４５ｋｍに及ぶ地下通路を歩いていた。装置を点検しているであろう、施設の研究者達に合流する為である。先ずは彼らに連絡が出来なかった事を一言詫び、その後は彼らからの指示を仰ごうと頭の中で予行演習を繰り返す。研究者達からの非難を想像すると軽く鬱になりそうな彼ではあったが、深呼吸をした時に鼻腔に感じた機械の匂いは、彼の気分を僅かながらも落ち着かせた。

「――――？」

その時、彼の視線に一つの扉が飛び込んで来た。周りの壁と同化するかの様に地味な色で塗られたそれは、地上へと繋がる出口の一つである。

加速器の設置されているこの通路は、そのあまりの長さ故に、約２ｋｍ毎に中継点が設けられている。その内の一つが目の前にあるという事は、つまり彼は、入り口から約２ｋｍの距離を歩いて来たという証明になるのだが……、しかしそんな事実に気が付いて彼は奇妙な焦燥感の様な物を覚えた。

彼は２ｋｍもの距離を歩いた。しかしここに至るまで、彼は職員は疎かその痕跡すらも確認してはいない。否、冷静に考えると、今自分がしているのはどうしようもない愚行なのではあるまいか、という疑念が湧いて来る。

彼は研究者達が、既に問題の箇所に当たりを付けていると考えた。それ故に、地下に降りて点検をしているのだろう、と。しかしよくよく考えてみると、それが装置の始点に近い場所であるとは限らないのではあるまいか。鍵が掛かっていなかったからといって勝手に地下へと降りて来たのは、あまりにも短絡的思考に過ぎたのではあるまいか。

「……いや、もう少しだ。

あと１ブロックだけ先に進んでみよう。

それで誰もいなければ、一度地上に出ればいい」

青年は、心のどこかで人に会う事を避けていたのかもしれない。あるいは今朝の災難を思い出して、未だ大雨の降り続いているであろう地上に出る事を躊躇したのかもしれない。どちらにせよ彼は、そんな呟きと共に、自らの運命を決定付ける決断をしてしまった。

彼は地上に戻る扉から離れ、再び薄暗い地下通路にその足音を反響させ始めた。

――――――

「命ず（ansur）」

鈴の様な声が、広大な図書館の静寂を打ち破った。
辺りに立ち込める燐光は少女の全身を幻想的にライトアップし、魔力の猛りは奔流となって魔法円を中心に渦を巻く。
妖しく可憐なその姿は、さながら嵐に踊る妖精だ。
魔法円は問題無く、かつ正常に起動している。

「……って、アレ？」

ふと、次の言霊を紡ごうとした少女の顔に疑問符が浮かんだ。
その動きが停止する。
魔力の流れは現状を維持したまま、その目線だけを魔法円へと向ける。

「そういえば、なんで？」

少女は異常を感じていた。

魔法円の起動は完璧で、一切の異常が見られない。

――否。現状を考えるのであれば、それ自体がそもそも見過ごせない異常であると言えた。

守護魔召喚の魔法円を正常に起動する為には、一級を越える格を持つ霊地が必要とされるのは常識である。つまりは起動する筈が無いのだ。正常かつ完璧な筈が無いのだ。少なくとも、高々自宅程度の土地では――。

「うーん……。

まっ、こんな事もあるか」

しかし少女は、不幸続きでいつもの冷静さを欠いていた為か、そんな事は気にも留めずに儀式を再開する事にした。続きの言霊を告げる。集中を極限まで高める事により、辺りの光景はもう見えなくなる。何か間違いがあったとしても、もう見えなくなる。

少女は月灯りを浴び、自らの根源に精神を帰結させながら、再びゆっくりとその口を開いた。

――――――

「！？」

歩く事で若干ハイになり始めた青年の意識を現実に引き戻したのは、劈く様なブザーの騒音であった。一瞬、まるで心臓に冷水でも突っ込まれたかの様な錯覚に陥る。そして次の瞬間、目の前に表示されている赤ランプを確認して血までもが凍り付いた。

――加速器が起動したのだ。

明らかに異常が発生している装置を用いて、何者かが無謀にも実験を開始しようとしているのだと、その瞬間に青年は悟る。

「正気か！？　バカ！！」

慌てて辺りを見回す。
確認出来る位置に出口は無い。
前方と後方、どちらの出口の方が近いのか。
自分は、どちらに避難するべきなのか。

「こっちだ――！！」

中継点を見つけてから、もう随分と歩いた気がする。それに前方に行けば、こちらに向かって来た職員と合流出来る可能性もある。そう判断した青年は、自らの進行方向に向けて全力疾走するという決断を下した。

青年の背後約１５０ｍ。
先程の中継点が、物陰からションボリと、去り行く彼の後ろ姿を見守っていた……。

―――――

「隻眼の賢人、アルフォズール。perth mannazansuz
我が魂脈を汝に捧ぐ。uruz geofu peorth
尊き神族に栄光を。nauthiz sigel
黄昏の日に福音を。nauthiz ken othila
我、汝が槍と成りて、共に運命に立ち向かわん」geofu thurisaz tir Eihwaz thel wyrd

少女の口が言霊を紡ぐ。
静かな響きを含んだそれは、精霊へと語り掛ける神秘の言葉だ。
精神を魔力に融和させ、無意識へと落とし込む事により、集中はある種狂気じみた域にまで達する。
身体中の知覚は過敏になり、身体に触れる空気の粘性までもが敏感に感じられる様になっていく。

早鐘を打ち始める心臓。
許容量を超えた信号に、身体中の神経が感電する。
今朝方より溜った疲労が恨めしい。
更に意識を埋没させる事によって、少女は自己の限界を無視する。
ここに至れば最早精神は無に帰すべしと、少女は更に続きの言霊を告げた。

「我は因果を放棄する。nyd hagalaz perth
我は運命を否定する。nyd hagalaz othel
汝が統べる永世の死霊。tir algiz ash
その一端を預かり受けたい」nyd algiz isa

―――――

「グッ……！？」

何かに足を取られ、不可解な姿勢で床へと減り込む青年。全力疾走していた為に満足に受け身を取る事が出来ず、顔面に床の痕がくっきりと付く。ヘルメットは遥か前方に飛んで行った。立ち上がろうとして足が動かない事に気が付き、何事だろうかと自らの足元を見た彼は絶句した。

この施設の床はリノリウムである。

イメージ的には学校の廊下と、病院の通路を足して2で割った様な材質の物だろうか。しかし青年の足元に存在する部分には、何故か、どういう訳なのか、緑色の通路に灰色のラインがパックリと入っていた。

所謂ひび割れである。

彼の左足は、その床の隙間に完璧に挟まっていた。

何でこんな所に亀裂が走っているのだろうか、などとボケた疑問が頭を過ぎった所で、彼はそもそも自分が何故ここに居るのかを思い出して青褪めた。“亀裂”というのは、今この場では一番不吉な単語ではないのか。

彼は、ゆっくりと、その目線を赤い装置の方向へと向けた。

「……」

一度、目線を足に戻す。

深呼吸をして一旦落ち着き、慌てない様に気を付けながら、再び装置へと目線を向ける。

そこにある“ソレ”が間違い無く確認出来たので、取りあえず落ち着いて、肺一杯に空気を満たす。

地下通路に断末魔の絶叫が響いた――。

――――――

「来たれ、汝が僕。rad ansur tir
無限の平野を埋め尽くす、不敗の戦士を我が下に――」teiwazhagal othel teiwazsowelu thorn

少女の詠唱が完了する。
暴虐的なまでの魔力が空間に飽和する。

――――――

「ふっ！！　っの！！」

青年が床を蹴る。

亀裂が広がる事も恐れずに、全力で足を抜こうともがき続ける。

――――――

さて、運命とは客観的に見れば無きにも等しき物ではあるが、その渦中にてソレを主観的に観測している限りは、なかなかに因果を齎す原因には思い至らない物であるから皮肉であろう。

――誰が知ろうか。

聡明な彼が、この日に限って実験の開始時刻を聞き間違えており、実際にはその1時間も前に実験施設へと到着してしまっていた事を。

――誰が知ろうか。

優秀な彼女が、この日に限って魔道の初歩であるエニュール文字を5箇所も書き間違えており、魔法円の魔力集積能力が未知の領域へと到達していた事を。

――誰が知ろうか。

加速器の電源と間違えて切られた気圧計が、時間通りに到着した研究者達に要らぬ誤解を与えてしまっていた事を。

――誰が知ろうか。

見落とされていた未知の霊脈が、少女が魔法円を描いた床の丁度真下から、想定外の魔力を提供していた事を。

異なるブレーンに存在する二つの場、二つの座標のエネルギー状態はこの瞬間、あらゆる奇跡、あらゆる解釈をもって――、

「!?　何だ!?」

「へ!?　なに!?」

偶然にも、一致した――。

7. 問題無く会話が成立しているという問題に対する疑問点の提起と言語の理

魔法円から放たれた橙赤色の閃光は、世界から色を奪い去った。
正面では雷が雲ごと落っこちてきたかの様な爆音が鳴り響き、この世界の理に適応出来なかった異界の物質は、黄金の砂塵と化して虚無へと帰っていく。

サラサラと、まるで砂城が涼風に攫われるかの様に。
妖精の鱗粉が、夕焼の空に拡散していくかの様に。

一瞬だけ少女の瞳に映ったその光景は、この世の果てを見ている様に綺麗すぎて、息を呑まずには居られなかった。

瞬間。少女の全身に走ったのは、電流。

――熱い。
許容量を超えた負荷が掛って、全身の神経が悲鳴を上げているのがわかる。
感電した脊髄は爆発して、その衝撃で漂白される頭の中。
一瞬、脳が溶けてしまったのかと思った。
全身の力が一気に抜けていく感覚に、気が狂いそうになる。
意識してもいないのに、背筋は痙攣したみたいにガクガクと震え始めた。
何度も持って行かれそうになる意識を無理矢理に繋ぎ止めて、腰砕けになりそうな身体を気力だけで支える。

もう少し。

せめてもう少しだけ、意識を保ちたい。
頭が真っ白になるような混乱も、今だけは忘れる事にする。
少女はただ、この瞬間を一秒でも長く記憶していたかったのだ。

やがて、ゆっくりと熱は牽いていく。
穏やかな火照りが残る身体に、冬夜の空気が心地良く染み渡る。
破裂しそうに脈打つ心臓と、激しく酸素を求める肺が憎らしかった。
全身の痙攣は暫く収まりそうには思えなかったけれど、少女は気力だけで健在を示そうと努めた。

だって、チラチラと明滅する視界では、もう霞が晴れ始めている。
期待にその小さな胸を膨らませた少女は、初めて見る異世界からの訪問者に、無様な姿など見せたくは無かったのだ。

――――――

視覚が戻ったその瞬間、朝日　真也を襲ったのは言語を忘れる程の異常事態だった。彼にしてみれば、まず何に対して驚けばいいのかが分からない。その頭は酷く混乱していて、遂に自分はボケたのではないか、などと自身の年齢を忘れた疑問を持ってしまった程である。ドロドロになった頭の中は、まるで遠心分離器に掛けられた培養細胞だ。

落ち着いて、一度状況を整理してみよう。
努めて冷静を演じながら、彼は錆び付いた思考をゆっくりと回し始める。

痺れたような脳を覚醒させ、記憶を辿る。
今日の出来事を順次思い返していくと、自分は確か実験施設に居た筈だ、と、彼は割と確信を持ってそう考える事が出来た。それより後の記憶は存在しないし、何より左の足首には、灰色の亀裂に挟まれた時の圧迫感が未だにリアルに残っているからである。

だがそうだとすると、この状況は一体どう説明されるべきであると言うのだろうか。

今の彼の視界には、無数の本だけが映っている。
視界の端から端まで、見渡す限りの本、本、本、本の海。彼が居るのは、どうやら少しだけ開けた区画の様で、一番近い本棚からも少しは距離があるのだが、離れているのに視界を埋め尽くせる程に大量の本が存在しているという事実が、彼により一層の不気味さを感じさせた。それらを収納している本棚は、冷静に考えると、どう見ても縮尺がおかしい。

１０メートルはあろうか。
月灯りに照らされた本棚はまるで高層ビルの様で、中には遥か天井付近にまで到達している物もある。
あれでは、一番上の本を活用するのはまず不可能だろう。
何しろ、利便性が悪すぎてあまりにも意味が無い。
ならば、誰が何の目的で生み出したモニュメントだと言うのだろうか。
やはりこれも、彼の理解の範疇を超えてしまう。

分析するほどに理解不能な状況に、彼の困惑は増してゆく。
全てを放棄したくなる感情を論理で封殺し、少しでも現実的な解

釈を探そうと、彼はガタつく神経細胞（ニューロン）をフル回転させて考え続けた。

「……」

――そう。一番あり得そうな可能性として、ここは図書館ではないのだろうか。頭上を見上げると、意匠を凝らされた天蓋のステンドグラスはアカデミックな高級感を醸し出しているし、遠目にしか確認は出来ないものの、本の山には長い年月を経て酸化した紙独特の色合いを持つ古書も混じっている様に見える。

……利便性には難があるが、おそらくはどこか、歴史のある大図書館なのだろう。

さて。しかしそうなると、次は何故自分がここに居るのかという疑問へと至る。少なくとも、彼の記憶にはこんな場所は存在しない。つまり自らこの場所に足を運んだという可能性は、（彼自身が密かに解離性障害や夢遊病等を患っていたので無い限り）却下していいだろう。何者かによって連れ去られたと考えるのが自然である。

もう一度、天蓋を見上げる。

ステンドグラスから視線を逸らすと、部屋の上部にはガラス張りの小窓の様な物が幾つも見受けられた。そこから覗く空は暗く、星々が白銀（プラチナ）の装飾品の如く瞬いている。その様子から彼は、自分が拉致されてから、少なくとも１０時間以上は経過しているだろうと予測した。加えて視界に入る星の数とその鮮明さから、ここは相当な僻地であろうとも当たりをつける。

まあ。現時点では、あくまでも推論の域を出ない仮説には違いな

いのではあるが……。

朝日　真也は、自らの推論に確証を持つ事は出来なかった。思いつく限りで一通り現状を分析してはみたものの、今は全てに於いて圧倒的に情報が不足していたのである。根拠も無く推論だけで結論に至るのは、科学者としては愚の骨頂であると彼は信じていた。今はただ、少しでも深く辺りを観察して、情報というピースを掻き集める事が最重要課題であると考えていたのだ。

さて、それでは思考の材料となり得る存在が他にあるのかというと――、

「……ハロウィンならもう終わったぞ？」

彼は、自身の目前に立ち尽くしている“ソレ”へと声を掛けた。先程から妙に気になって気になって仕方が無かった“ソレ”は、彼には自分よりも僅かばかり年下の少女の様にも見えた。しかしその格好は、つい無意識に考察を後回しにしてしまったという事実が示唆する様に、非常に奇抜な物であった。

少女がさも当然の様な顔で着込んでいるのは、まるで鴉みたいに真っ黒なローブである。頭をすっぽりと覆っているのは、もう“いかにも”な感じのトンガリ帽子。しかも、その下から見える髪は赤かった。林檎よりも、なお一層鮮やかな真紅である。

……生物学的に考えて、まさか地毛ではあるまい。

染めていると解釈するのが妥当だろう。

「……」

彼の問いに、少女は答えなかった。

彼の足元を見つめるのは、熱に浮かされたかの様に上気した顔。

御伽噺から抜け出して来たかの様な可愛らしい顔立ちの彼女は、今にもとろけてしまいそうな表情で、床の一点をジッと見つめている。

激しく上下するその肩からは、必死に呼吸を整えている様子が見てとれた。

――不意に、目線が交錯した。

カラーコンタクトでも入れているのか、宝石の様に綺麗な、翠色の瞳が青年の方へと向けられる。気が強そうなその視線は、まるで何かを堪えるかの様に潤んでおり、見つめられると不覚にも身体の芯を加熱される様な錯覚を覚えた。花弁（はなびら）の様に紅い唇から断続的に漏れる白い吐息は、彼女の押し殺す様な呼吸音と重なって妙に生々しく感じられる。こちらの声など、まるで聞こえてはいない様子である。

青年は少女の呼吸が整う迄、ついその様子に見入ってしまった。

放心しかけている彼をよそに、やがて目を閉じながら大きく深呼吸をした少女。少しは落ち着きを取り戻したのか、コホンと一度咳払いをする。彼女は見るからに具合が悪そうではあったが、フラつく身体を気丈に支え、仕切り直すかの様に起伏の控えめな胸を張った。

「……っ！！」

少女の容姿に目を奪われていた青年は、状況を冷静に分析し直して冷や水を浴びた様な緊張感を覚えた。先程までの自らの思考を思い出して、多少の羞恥とそれを遥かに上回る程の自己嫌悪が頭を埋め尽くす。

――考えるまでも無い。

自分が拉致された場所に都合よく佇んでいる彼女は、おそらく、と言うか間違いなく今回の事件の重要参考人だろう。彼女が何者なのかは現時点では断定不能だが、この事態について何らかの情報を持っている可能性は極めて高い。

なら今は、彼女の容姿などに意識を割いている暇など一切無い筈ではないか。

持ち前の学者頭で意識を凍らせた真也は、少女の言葉を一言一句聞き逃すまいと神経を集中させた。

全ては、理解。

状況を正確かつ完璧に把握し、最善の行動を選択してゆく為に――。

……どこで間違えたのだろうか。

少女はやがて、ようやくその可愛らしい口元を動かし――、

「今晩は、異界の住人さん。
あたしは召喚主（サモナー）のアルテミア・クラリス。
早速だけど、貴方の事を教えてくれない？」

「……」

理解……、出来なかった。
あまりにも理解不能な単語の羅列すぎて、聡明な筈の彼の処理能力は一瞬にして限界値を振り切った。
このままでは毒伝播にやられると思った彼は、取りあえず一度、思考を強制終了して再起動を試みる事にした。

「……」

再起動後、正常に終了されなかった彼の精神はプログラムの再構築に失敗したようだ。崩壊したデータがバグを量産し、とうとう暴走を始める。下手をするとハードディスクのバックアップデータまで失われそうな勢いで、集積回路はオーバーヒートした。

あの少女は、ナニを言い出しているのだろうか。アレだろうか。
あの少女には、精神病的な妄想癖でもあるのだろうか。それともア

レだ。実は今のはペルシャ語か何かで、ソレを自分の耳が聞き間違えただけなのであろうか。そうだ。きっとそうだ。何故か日本語に聞こえる外国語などザラにあるではないか。もしくはアレだ。今のが日本語であったと仮定するのならば、きっと方言がキツすぎて聞き取れなかったんだろう。そうだ。そうに違いない。おそらく“異界の住人”とか聞こえた単語は、“（この村）以外の住民”と言ったのを、イントネーションの違い故に聞き間違えただけなのだ。いや、ホント。だって、そうとでも考えないと説明が付かない。

――と。そこまで思考した彼の脳は、何か重要な単語をスルーした気がした。

“精神病の異常者”

この単語は、この状況を説明するキーワードになり得る物ではないのか。

模造刀の様に鈍い閃きを得た青年の頭脳は、その唯一のとっかかりを元にして考察を開始した。

例えばそう、こういうケースはどうだろうか。

亀裂に足を挟まれた自分は、なんとか自力で脱出する事に成功したとする。

その後、最寄りの中継点から地上へと避難した。

そこにいたのが、その“異常者”。経緯は不明だが、その逞しい妄想力を行使すれば、人間一人を誘拐する動機くらいにはなり得る

のかもしれない。おそらく、自分はその異常者に連れ去られたのだろう。自分にその時の記憶が無いのは、まさか拉致される時に薬でも嗅がされたからなのか。

――彼は少女の言葉を、もう一度詳しく分析する。

・異界の住人
・召喚主
・貴方の事

少なくとも、彼にはそう聞こえた。

これが正しかったとすると、妄想の内容にはある程度の推測が成り立つだろう。

つまり彼女は、こちらを異界の存在であると考えている。“召喚主”という単語から察するに、自分は彼女に召喚された存在という事になっている筈だ。

「……」

……いや、これは無理があるだろう。

彼は小さく首を振った。

真也の容姿はどこからどう観察しても明らかにホモサピエンスであるし、路上に居た人間をいきなり異界の存在であると考える可能性は、いくら異常者でもそう高くは無いだろう。

ならばもっとあり得そうな仮説は、

“犯人は、地上に逃げた真也を悪魔召喚用の生贄として拉致した。

丁度今儀式が終わり、この少女は生贄の身体に悪魔が降臨していると考えている”

こんな所ではないのだろうか。

なるほど。確かにこれならば、少女の格好や床の絵画にも完璧な説明がつく。

つまりこの少女は、黒魔術にでも異常にのめり込んでしまった残念な子なのだろう。

真也はそう結論付けた。

「……」

さて。しかしながらそうなると、この少女は今回の拉致事件の加害者であるという事になるのだろうか？　目の前の少女の体格では、男一人を担いで誘拐など出来る訳が無いので、おそらくは複数犯の内の一人であると考えられる。立場は主犯か、或いはただの構成員か。状況は前者を、彼女自身の年齢は後者の仮説をそれぞれ支持してはいるが、現時点では犯人が複数犯であるという事以外は分からない。

視線を再び少女に送る真也。

少女は訝しむ様な目線を投げかけながら、“どうかしたの？”などという問いを発している。おそらくは、先程の誇大妄想的かつ電波的な質問に対する返答が無い事を怪しんでいるのだろう。どうかしているのは明らかにそっちだと言うのに……。

自分は、果たして生きて帰れるのだろうか。

生贄にされたという事は、自分はやはりこの少女に食べられてし

まう運命にあるのだろうか。
……“世界の黒魔術とその儀式”。もっとちゃんと読んでおくべきだったのだろうか。
……いや、まあ。絶望が深まっただけな可能性が高いワケではあるが。
真也の思考は堂々巡りを繰り返していた。

――繰り返す。
根拠も無く推論のみで結論に至るのは、科学者としては愚の骨頂である。

――――――

さて。そんな真也の不穏な思考など露と知らず、また知り得る余地も無い少女は、好奇心に満ちた眼差しで自らの呼び出した“魔人”を観察していた。魔導師特有の、未知の存在に対する好奇心が彼女の胸を高鳴らせる。まるで新しく覚えた魔術を初めて使う時の様な、知的な興奮に満ちた思考で、少女は初めて見る自らの守護魔を深く深く観察していた。

彼が纏っているのは、処女雪を思わせる程に真っ白な装束だった。その丈は妙に長く、（座り込んでいる為にはっきりとは分からないが）立ち上がったら彼の膝くらいには届くかもしれない。上着というよりは、外套と表現した方が正しい様な服である。
彼はその長衣を、前のボタンは留めずに羽織っていた。内側から覗く、ラフな印象を受ける黒いシャツが、上着の白と強いコントラ

ストになっている。見た事も無い様な彼の服装は、それだけで彼がこの世界の外から来た存在である事を証明するのに充分な材料となっていた。

目線を上げて、彼の顔をよく見てみる。

先ず目を引くのは、その黒真珠みたいに真っ黒な瞳だろう。微かな憂いを含んだ双眸が、絹糸の様な黒髪と相俟って不思議な印象を与えている。髪も瞳も真っ黒なんていう人間は、少女はあまり見た事が無かった。でも、悪い印象では無い。珍しいけれど、とても綺麗な色をしていると思う。

彼の目線は鋭かった。

まるでナイフの様に、あるいは翼竜の牙の様に、触れた物全てを切り裂く様な洞察眼。それは魔導師という職業にある少女には見慣れた目線であり、同時に使い慣れた視線でもあった。彼女はそれだけで、彼が自分と相通じる世界を知っている存在だという事を直感する。

彼はどの様な世界から来た人なのだろう？

少女は、まるで夢を見る様に思いを馳せた。

守護魔はそれぞれ、皆異なった異世界から召喚されるという。

例えば薬の調合技術が発達した世界や、龍よりも強力な魔獣を手懐けた世界など、彼らが元々住んでいた世界には、おおよそ人間が考え得る全てのバリエーションがあり得るのだ。守護魔が常理の外の存在と称えられる所以はここにある。この世界に無い知識や技術という物は、それ自体が黄金よりも価値がある宝物（ほうもつ）だ。

早く、その声を聞かせて欲しい。

未知に触れる悦びを待ちきれない。

少女の小さな胸は、果てのない好奇心ともどかしさで押し潰され

そうになっていた。

「……？」

――と。少しばかり思考が暴走を始めた所で、少女は奇妙な不安感に苛まれた。

冷静になって、その理由を探ってみる。

幸か不幸か、原因は直ぐに分かった。

少女は、既に二度ほど彼に声を掛けた。

自分が何者なのかも教えたし、それでも彼が何も言わないので、気遣いの言葉も投げかけてみたつもりである。そう、少なくとも少女は、青年に“話し掛けて”いるのである。

それにも関わらず、少女は彼の声を聞いていない。少なくとも、少女には聞こえていなかったのだ。彼は少女の存在を無視するかの様に視線を落としたまま、まるで苦痛を堪えているかの様に眉間に皺を寄せて、微動だにせず座り込んでいる。

もしや、何か彼の気分を害する様な事でもしてしまったのだろうか？

少女の疑念は募っていく。

……と。そこまで思考したところで、少女は何か重要な単語をスルーした気がした。

“苦痛を堪えている”。

これはもしや、彼の現在の状態をそのまま表現した物なのではないだろうか。

冷静に頭を冷やしながら、少女は先程までの儀式を反芻してみた。
先ず、場所は見ての通りに自宅である。少女の知る限り、霊地としての格は五級に届くかどうかというところだろうか。簡潔に述べれば、普通の土地である。
次に彼女自身のコンディションは、まあ最悪だったと思う。
何しろ、昨日の今日で連続して行った儀式だ。
魔力の使い過ぎで疲労はピークを通り越しているし、睡眠も栄養も絶望的に足りていない。本音を言えば、今すぐにでも柔らかいベッドに倒れ込みたいくらいである。
使用した魔法円、には、なんだか多少の違和感があった気がした。
ソレが何かは分からなかったけど、何か嫌な予感はしたのである。
……只の勘だと言う事無かれ。一流の魔導師たる彼女の勘なのである。
普通なら、到底無視していい様な物では無い。

「……」

儀式の内容を思い返していくに連れて、少女の顔からはサーッと血の気が引いていった。
背筋に、イヤな汗が、滴る。

そう。要するに、今回の儀式は儀式とも呼べない程に不手際続きであったのだ。彼に異常が有ればそれは当然であり、どちらかと言

うと、寧ろ異常が無い方が異常だとすらも思えてくる。

もう一度、彼を見る。

氷の様な双眼と、再び視線が交錯した。感情があまり顔に出ない性質(たち)なのか、彼はずっとポーカーフェイスだったが、その目線からは怒りと不安がやんわりと伝わって来ている様な気がする。

つまり、彼をそういう精神状態にする様な異常が発生しているという事なのだろう。

少女はそう分析した。

――言語。

それは前提となる一般常識が共通項として存在して、初めて会話を成立させ得るコミュニケーションツールである。

常識に一切の共通部分を見出だす事が出来ない二人がそれを使用した場合、待つのは時間なる貴重な資源の浪費という悲劇のみである為、ここから暫しの間ご鑑賞に耐えない凄惨な光景が続く事をご辛抱頂きたい。

「大丈夫？　もしかして、どこか調子とか悪いの？」

「――――？

いや、体調は問題無いな。

……強いて言うなら、気分が最悪なくらいだ」

「……気分が悪い？

もしかして脳に障害でも出てるんじゃ――。
ねえ、大丈夫なの!?　頭とか痛くない!?
自分の世界の事はちゃんと思い出せる!?」

「……。
これで、聞き間違いの可能性も消えた訳か……。
ああ、全く問題は無い。
むしろ、イタいのは君の頭の方だろう」

「あたしの頭……？
ああ、召喚時のアレの事ね。
大丈夫。確かにちょっとキツかったけど、もう大分治ったから」

「……治ってない事が証明されたな」

「大丈夫よ。
本当に、ちょっと疲れてるだけだから。
そういう貴方こそ、本当に身体には異常が無いの？
気分が悪かったりとか、記憶が無くなってたりとかしてない？」

「……お陰様で気分は最悪だし、拉致される前後の記憶も飛んでいるんだが」

「じゃあ異常あるじゃない!!
ちょっと!!　隠さなくていいから正直に言ってよ!!
自分が何者だとか、元の世界がどんな所だったかとか、ちゃんと全部思い出せるの!?」

「元の世界というからには今の世界があるのかとか、どう考えても君の方が異常だろうとかツッコミ所がありすぎるが……。

……それを正直に言っても仕方がないんだろうな。
いいだろう。
そこまでオレの素性が知りたいのなら教えてやる。
オレは朝日　真也。
大学で素粒子論を研究している物理学者だ」

「……へ？
大……ぶつ……？」

「……オレのどこが大仏に見えるんだ？
朝日　真也。物理学者だと言っている。
いいか、落ち着いて聞いてくれ。
オレは君が呼び出そうとしたモノじゃないし、そんなモノは何所にもいない。
君の儀式には、何の意味も無かったんだ」

「……は？
ま、待ちなさいよ！！　じゃあナニ！？
あんたは自分が守護魔じゃ無いって言いたいわけ！？」

「守護魔？
ああ、成る程。君はそれを呼ぼうとしたのか。
……ご覧の通りさ。オレはそんなモノとはまるで無関係だ。
納得してくれたか？」

「出来るわけ無いでしょ！！
あんたが守護魔じゃ無いんなら、あんたは何所からどうやって涌いてきたっていうのよ！？」

「オレをここに連れて来たのは君たちだろう。

オレがどうやってここに来たのかなら、君たちの方が詳しいんじゃないのか？」

「じゃあんたが？　そうじゃないのっ！！
逆に守護魔じゃないって言うんなら、あんたは一体何者だっていうのよ！？」

「朝日　真也。
物理学者だと言っているじゃないか」

「だぁれがそんな意味不明な単語を聞いたのよっ！？
あんた！！　召喚時に頭でもぶつけてどうにかなったんじゃないの！？」

「……なっ！！
ちょっと待て！！　どうりで頭がボンヤリすると思ったら――！！
オレは気を失ってる間にそんなに強く頭をぶつけていたのか！？
ナニしてくれてるんだ！！　幾ら生贄だからってぞんざいに扱いすぎだろう！！」

「バッカじゃないの！？　知らないわよそんな事！！
大体！！　せっかくあたしが気遣ってあげてるってのに、あんたはナニをさっきから意味のわかんない事ばっか言ってるわけ！？」

「ふん。貴重な体験だな。
なにしろここ数年、オレにバカなんて言える人間はいなかった。
まあ使う分には構わないが……。
その単語を使う時は、相手を見てからにするべきだな。
オレみたいな物理学者（専門家）相手に使うのは、自らの愚かさを露呈する事になるぞ？」

「あたしがその魔導師（専門家）よ！！
大体、バカにバカって言ってナニが悪わけ！？
トロールの方がまだ物分りがいいってもんよ、このバカ！！」

「……さっきからバカの一つ覚えみたいにバカバカと。
いいか。こういうのはな、バカって言う方がバカなんだ！！」

「あっ。今5回バカって言った。
ほ～ら、やっぱりあんたがバカじゃない。
バカって言った方がバカなんでしょ？」

「君も今4回言ったぞ！！　累計すれば8回だ！！
大体、オレがさっき言ったバカの内2回はただの――」

「はい、6回目。
そうやって直ぐにムキになるのが、バカのバカたる所以っていうかさ～」

「子供か君はっ！！
ああ、そうか成る程な。確かに、君はまだまだ十分に子供だった。
ムキになって相手をしたオレは、まあ確かにバカだったかもしれないな。
子供は子供らしく、こんな時間まで夜更かししてないで、さっさと布団に入って寝ろっ！！」

「はあ！？　あたしの何所をどう見たら子供だっていうのよ！？
大体、あたしが子供だって言うんならあんただって――」

……カオスであった。

“聡明な”彼らの意思疎通は、最早小学生の口喧嘩レベルにまで退化しているという事実を、果たして彼ら自身は理解しているのだろうか。

手持ちの前提に一切の共通項が存在しない彼らは、お互いの間に存在する致命的なズレに全く気付けない。

「いいか!?　とにかくオレは!!　君の呼ぼうとしたモノとは全然!!　全く!!　これっぽっちも関係の無い!!　まともな人間だ!!」

わかったなら、さっさとオレを解放――」

「出来るわけないでしょっ!?
あんたみたいなまともじゃないやつ――」

「何一つまともじゃない君がそれを――!!
……って、待て。今何て言った?」

それは、果たして彼らを哀れんだ何者かからの天啓だったのか。

青年は、漸くその“違和感”に気が付いた様だ。

少女に向けられる表情が、突然蒼白な物へと切り替わる。

「――――?
なんて言ったって、あんたみたいなのを野放しにしとくわけには――」

「……待て！！　もっとゆっくり話してくれ！！」

目を丸くし、思案する様にして答えた少女。
おそらく、自分が何かおかしな事でも口走ったと思ったのだろう。
彼はその声を遮りながら、怖気を含んだ声で復唱を催促した。

「だ～か～ら～、あんたみたいに常識の無い奴を――」

「な……！？」

――そして、凍りついた。
困惑に溶解されていた脳細胞が活動を止め、色を抜かれたままに冷凍される。
少女が次に何と言ったかなど、青年には理解できない。
否。そんな事に余分な意識を割いている余裕など彼には無かったのだ。
少女の体現したその現象は、彼にとってそれ程までに不可解な物だったのである。

――発声と口唇が一致していない。

それが、彼に未曾有の困惑を与えた違和感の正体であった。
青年の見る限り、少女の言葉は、まるで洋画の日本語吹き替え版の様に声と口の動きがバラバラに見えたのである。

――最新鋭の翻訳機でも使っているのだろうか。
いや、有り得まい。

言語の性質上、如何に優れた翻訳機であろうとも話し手が一文を発声し終わるまでは翻訳など開始出来ない筈だ。
目の前の少女の様に自らの声を完全に日本語に置換するなんていうのは、技術云々の問題では無く原理的に不可能なのである。
困惑した彼の思考は、背筋に這い回る悪寒と共にその答えを弾き出した。

「……単刀直入に聞きたい。
この場所がどこの国のどこなのか、簡潔に教えて欲しい」

青年は、少女の口元から目を離さずにそう質ねた。
少女の言葉を、一言一句聞き逃さない為である。
彼は漸く、今の自分が先の想定よりも遥かに異常な事態に巻き込まれている事を理解し始めていた。

少女は、一瞬だけ口籠った様に見えた。
突然の問いに、彼女も困惑しているのだろう。
いや。もしかしたら、気を悪くしたのかもしれない。
出会って僅か数分ではあるが、少なくとも彼は、彼女と自分の相性はおそらく最悪の部類に入るであろう事を十二分に自覚していた。
――だが。最悪、真面目に答えなくてもいい。
何か意味のある単語を話してくれるのであれば、まだ考察の余地はある。
少女の口元から淡雪の様な吐息が漏れた。
それが溜息だったと気付くのに要した時間は、1秒。
その意味については考察する事なく、真也は少女の言葉だけに意識を集中させる。

やがて、少女はその花弁の様な唇を開き――、

「ここは、あたしの家。
“銀の国”一番の魔法使い、アルテミア・クラリスの自宅よ」

はっきりと、口唇と一致しない声でそう告げた。

8. 異世界の少女の体格から見る異世界人に対する分類学的仮説及び異次元生

その後の少女による状況の説明は、青年の思考回路をブッ飛ばすのに十分に足る程の破壊力を誇っていた。

彼の、まるでホイホイに掛かった黒害虫みたいに動きが鈍くなった思考では上手く理解する事が出来なかったものの、取り敢えずは分かった範囲で無理矢理にでも少女の話を要約するとするのならば、どうやらこの場所は彼が元居た世界とは全然、全く、究極的に別の世界に存在しているらしく、魔法なんていう冗談みたいな物がごく一般的に浸透している国らしい。

また、少女はどうやら本物の魔法使いらしく、なんらかの目的があって、彼女にとって異世界人であるところの彼を召喚術によって呼び寄せたとかなんとか……。

「冗談……だよな？」

取り敢えず、頬を抓ってみた青年。

足りないと思ったのか、拳を作って思いっ切り殴り付けてみる。

視界に星が飛んだ。果たして痛みで夢と現実の区別が付くというのは本当なのかという疑問が衝撃の後になって浮かんだが、もしも嘘であったのならば、初めにこの仮説を提唱した人間には同じ痛みを味合わせてやらないと気が済まないと彼は思う。

揺れた脳を覚醒させる為に、目線を床に落としながら2、3回頭を振ってみる。

何故かあちらこちらが煤けた床には、少女曰く“守護魔の召喚陣

”が薄っすらとした燐光を放っていた。

ふと。彼は燐光に紛れるかの様にして一冊の本が落ちているのを見つけた。

けして分厚いとは言えないその本は、一見すると海外のペーパーバックの様にも見える。

所々に焦げ目が付き、ページは全体的に反り返っていた。

真也は、なんとなくその本を手に取ってみた。

煤を払い、ページの反りを膝で伸ばしながら、まじまじとタイトルを確認する。

“超簡単・自宅で出来る火炎魔法”

「……」

悪夢の様なタイトルに頭痛を覚えながら、真也は反射的に目を擦った。

しかし見た事も無い筈の文字で綴られたその題名は、彼には確かにそう読む事が出来た。

――まるで見た事の無い文字の筈なのに、である。

暫く魂の抜けた様な顔でそれと睨めっこしていた彼だったが、取り敢えずは中身を確認してみようと、興味と恐怖の赴くままにページを開いてみた。

“火炎魔法とは四大精霊の内の一体、火の元素を司る精霊の力を借りて行う神秘の総称であり、その性質は彼の者の精神を反映した

――”

書いてある事は意味不明だったが、どうやら中身も言語としては問題なく読むことが出来るらしかった。

「なんで読めるんだ？」

「当たり前じゃない。
あたしが読めるんだから」

戸惑っている青年の様子をジッと観察していた少女は、彼の疑問にさも当然であるかの如くそう答えた。答えを聞いても腑に落ちない様子の青年。少女は更に補足する。

「守護魔はね、召喚された時点で召喚主と知識を共有するのよ。つまり言葉とか、文字とか、そういう必要最低限の知識は、あたしの知識が補間する事になってるってわけ」

得意気に語る少女の口唇と一致しない声を聞きながら、青年はその意味するところに頭を捻っていた。

詳しい事は分からないが――要するに彼女の頭と自分の頭には何らかの回線の様な物が繋がっていて、それで情報をやり取りしている、という事なのだろうか？

……害とか、副作用とか、無いのだろうか。

原理も理屈も意味不明ではあったものの、深く考えると寒気がしそうだったので、真也はあまり気にせずに次の疑問に移る事にした。

「……君から見て、オレは今どう話している？」

あくまでも少女の言葉を鵜呑みにするのなら、という条件付きではあるが。

真也がこの世界の言葉を理解できている理由は、この少女の知識を借りているからなのだという。彼女が日本語を話している様に聞こえるのも、原理は不明だが、彼女の言葉を彼女の知識を用いて翻訳して聞いているからなのだ、と。

だがそうなると、今度は自分自身に対しての疑問が湧くというものだ。

少女は小首を傾げている。

恐らくは、今の質問の意図を図り兼ねたのだろう。

真也は補足した。

「オレには君の口唇と発声が一致していない様に見えているんだ。おそらく君は君の世界の言葉を話しているのだろうが――。オレにはそれが、オレの世界の言葉として聞こえている。じゃあ、オレは今何語を話しているんだ？君にも、オレの口と声はバラバラに見えているのか？」

「ああ、そんなこと。大丈夫。ちゃんとあたし達の世界の言葉を話せてるし、口と声もピッタリ一致してるから」

「……」

“それは大丈夫じゃない”。

真也はガックリと項垂れながら頭を抱えた。

もしも少女の言葉が本当なら、真也は今日本語を話しているつもりであって日本語を話せていない、という事ではないか。これでは“知識の共有”とやらをなんとかしない限り、今すぐ元の世界に帰ったとしても支障が出るだろう。

まあ。実はこれが壮大なるドッキリ番組であり、現在の彼の醜態がカメラに収められているという可能性も、未だに彼は捨てきれなかったわけではあるが……。

「……なによその目。

大体、あんたもあたし達の言葉を話せた方が都合がいいでしょ？もしもあんたが自分の世界の言葉なんか使ってたら、あんたの言葉が分かるのはあたしだけじゃない」

少女は、特に悪びれた様子も無くそう語る。

確かにそれにも一理あるかもしれないが――。

彼にしてみれば、この世界の他の人間と意思疎通を図る必要性があると考えるだけ憂鬱にしかならなかった。

「……」

……本当に、どうでもいい事ではあるが。

彼女は最初、彼の事を“貴方”と呼んでくれていた筈である。

しかしどうやら先程の口論以降、呼称を“あんた”で固定するつもりでいるらしい。

ニュアンスの違いまで捉えて翻訳してしまうこのシステムが、なおいっそう彼には不気味であった。

「それじゃ、次はこっちの番ね。

あたしにも、あんたの事を教えてくれない？」

頭を抱えたまま眼を伏せていた真也。気が付くと、目の前には少女の顔があった。彼女は腰を曲げ、覗き込む様な姿勢で彼の顔を見つめている。まるで悪戯を思いついた子供の様に細められたその瞳は、どこか楽しげに感じられた。

「教えるって、何を？」

「別に。なんでもいいよ？
あんたの世界がどんな所だったとか、どんな特殊な技術が発達してたとか、あとはあんた自身の特技とか、特殊能力とか――」

息のかかりそうな距離から発せられる、嬉々とした少女の言葉。
真也は目を丸くしながら、腕を組んで暫し思案していた。
こういう質問は、何でもいいというのが一番困る物なのだが……。
さて――、

Q.　世界がどんな所だったか？
――太陽系第三惑星、地球。
７０億人にイジメられている可哀想な星。
……却下だろう。

Q.　どんな特殊な技術が発達していたか？
――パッと思い付くのは、コンピューターネットワークだろうか。
家で椅子に座りながら遠隔地の人々との情報のやり取りを可能にした偉大なる発明品であり、引きこもりとニートの産みの親である。
……これも却下だろう。

Q．　真也自身の特技や特殊能力。
――これはなんとかなりそうであった。
何しろ真也の特技は、“物理学”。この一点に尽きると言ってもいい。
さて、それではこの自らの世界が誇る叡智をどう説明したものだろうか。
真也は辺りを見回して、暫し具体例を逡巡した。

「そうだな。先程も言ったと思うが、オレは物理学者なんだ。
さて。それでは物理学とは、具体的に何が出来るかというと言うとだな……。
――あの本棚を見てくれるか？」

不意に、真也は少女の背後に存在する一際高い本棚を指差した。
少女はつられる様に、好奇心に満ちた眼差しを彼の指先へと向ける。
その目からは、異世界の人間が披露するであろう神秘への期待がありありと伺えた。
そんな彼女を視界の端に納めつつ、真也は自信に満ちた声で言葉を繋いだ。

「仮にあの本棚の高さが１０ｍ、この星の重力加速度を地球と同じ９．８ｍ／ｓ＾２とした場合、あの天辺から落ちた本が地面に着くまで約１．４秒かかる」

「……」

この星の空気抵抗係数がいくつか分からなかった為、そこは省略して計算した。
平方根も面倒なので、重力加速度を１０ｍ／ｓ＾２として計算したおまけ付きである。
反応が無いので、何となく、真也は少女の背中にその視線を移した。
彼女の小さな背中は、何故か、全く微動だにしていなかった。
……まるで、何かの化石の様である。

「……」

嫌な、沈黙だけが、やたらと煩かった。

「ねえ……」

「ん？」

やがて少女は顔を伏せたまま、ユラリと振り返った。
その肩は、何故かワナワナと震えている。
――そんなに感動してくれたのだろうか？
真也は感心した様に、満足気にウンウンと頷いていた。
やがて、少女は口を開き――、

「……だから、ナニ？」

「……」

少女の声は震えていた。

それはもう、主要動が到着する前の初期微動の如く、妙に静かで嫌な震えであった。

真也は腕を組みながら、無言でその声を聞いていた。

少女の肩が上がり、肺一杯の空気が満たされていくその様子を、ただただ静かに観察していた。

「なぁにが“約1．4秒かかる”よっ!!
高い所から物落としたら、地面に落ちるのは当たり前でしょぉがっ!!」

「待て待て待てちょっと落ち着け!!
かのアイザック・ニュートンはその単純な事実からだな――」

「どこの暇人よ!!　そいつ!!」

「暇人とはなんだ!!
彼がニュートン力学を完成させなければ、現代の物理学は――」

「だから!!　なんの役に立つのよ!?　それはッ!!
ちょっと!!　なんか他に、もっと凄い事出来ないの!?」

「仕方ないだろ!!
大体、君の言う通り“魔力”なんて力が存在するんなら、この世界の物理法則はオレの世界とはまるで違うじゃないか!!

全部の数値を一から調べ直さなきゃならないし、そもそもオレの知ってる物理法則がこの世界でも成り立っているか分からないんだ！！」

「待ちなさいよ！！　じゃあナニ！？　さっきのアレ、意味ない上に間違いかもしれないっていうの！？　信じられない！！　ナニよそれーっ！！」

「君には知的好奇心という概念が無いのか！？」

爆発したかの様に捲し立てる少女と、それを全力でいなす青年。広大な図書館に罵詈雑言の嵐が巻き起こり、心なしか室温は2℃程も上昇した。

2人は一歩も引かずに口撃を打ち合い、それはお互いの息が切れて深呼吸が必要になるまで続いた。

「……はぁ！！　ふぅ……！！　ね……、ねえ……」

「な……、なんだ……？」

肩で息をしながら、少女は苦し気に声を発した。

青年も、額に汗を浮かばせながら返答する。

「あんたさ。もしかして……、物凄い役立たず？」

「……。
……まあ、否定はしない」

真也は嘆息する。
何しろ、物理法則が違う世界なのだ。定数なんか重力加速度から測り直さなくてはならないし、“ゲージ理論”などの現代物理学はおろか、そもそも“光速度不変の原理”や“慣性の法則”などの常識的な定理がちゃんと機能しているのかも疑わしいのである。
――要約すれば。
彼の持つ知識はソクラテスの時代にまで退化せざるを得ない、という事であった。

「どうするのよ!!
あたしが何の為にあんたを呼んだと思ってるの!?
あんたがそんなんじゃ、あっという間に他国の連中に殺されてお終いじゃない!!」

「……は？　殺される？」

不吉極まりない単語を聞いた気がして、真也は反射的に目を見開いた。
その行動は、意図せず少女の容姿をより詳しく彼の意識へと伝える。
柔らかそうな、彼の世界では見かける事も無い、真紅の髪。
翡翠色の大きな瞳は人間離れして美しく、少女自身の内心の強さを現すかの様に真っ直ぐにこちらを見つめている。
皺や染みとは無縁の瑞々しい肌は、まるで透き通る様に真っ白で、先程の口論の余韻が残っているのか仄かに桜色に色付いていた。

――彼は、その動きを止めずにはいられなかった。
呼吸すらも忘れ、少女の容姿にただ見入る。
どうしても聞きたい、聞かなくてはならない疑問が、彼の頭を埋め尽くしていたからである。

「う……。
……な、なによ。
言いたい事があるんなら、はっきりと言いなさいよ!!」

青年の視線に気が付いた少女は、居心地が悪そうにしながらも語調を強めた。
その言葉に言質を取った青年。
彼女は、言いたい事は言えと言う。
つまり、“この疑問”を口にしてもいいという事なのだろう。
彼は、そう解釈した。

真也は、視線を少女の顔から２０。程下げた。
ローブに包まれた身体の一部を深く深く観察し、自らの脳に去来した命題を知識を用いて肉付けした。

――収束進化という言葉がある。

これは祖先の異なる生物が、類似の環境に生きる事によって似た形質を持つ様になる事例を指し示す用語であり、例えば哺乳類なのに鳥類の様な翼を持つ蝙蝠。または哺乳類なのに魚類と見分けの付かないクジラやイルカがその代表例となる。
要するに、裏を返せば例え人間でなくとも人間と類似の環境で進化した生物がいた場合、その生物は人間と似た形質を持つ様に進化

する可能性もある事を示唆する生物学用語なのではあるが、彼の持った疑問は詰まるところこの言葉に集約され――、

「まさか君、哺乳類じゃないのか？」

……少々さびしい少女の胸部を見詰めながら、青年は真顔でそう言った。

一瞬、ポカンと口を開けた少女。

青年の言葉の意味が理解出来なかったのか、少し逡巡する。

その間約3秒。

直後、少女の目は吊り上がった。

雪の様に白い肌は見る見る内に薬缶の様に紅潮し、花弁の様な唇はわなわなと震え出した。

「……ど」

「……ど？」

謎の呟きを漏らしながら、少女は右腕を大きく掲げた。

右手の甲に描かれた刺青の様な紋様は赤い閃光を放ち、周辺では陽炎が立ち昇る。

彼はそんな彼女の様子を、先程の謎の言葉について推察しながら見つめ続けた。

やがて彼は、思い至ったかの様に手を打った。

「ドラム――」

「どういう意味よ！！　ド変態！！」

巨大な火球が、青年の身体を呑み込んだ。

――――――

「……やっちゃった」

すっかり色の消えた右手の魔法円を見つめ、少女はそんな嘆きを零した。

この場合、漢字を当てるとすれば“殺っちゃった”が正しいだろう。

まるで焼夷弾でも落とされたかの様に立ち昇る粉塵と、燃えながら宙に踊る書物。それらが今起きた惨劇の全てを物語っていた。

――火炎魔法・“始祖の炎帝（ムスペルヘイム）”。

“帝霊級魔術”に分類されるこの大魔法は、別名“焼夷の紅炎”とも呼ばれている。ただでさえ四属性の中で最も攻撃力が高いとされている火属性の、さらにその上位魔法というだけあり、その威力たるや完全に発動させれば火龍（サラマンダー）のブレスを上回る火力にまで至るという軍用魔術である。

当然その魔力の消費量もバカにはならず、また修練場を頻繁に焦土に変える危険魔法である事でも魔導師連中の間では有名であり、簡潔かつ端的に表現するのであれば、間違っても自宅でたった一人を相手に使用する様なレベルの魔術では無いという事である。

――癇癪持ち。
少女はそれが自分の悪い癖だと自覚してはいたが、同時に最早治らない天命の様な物であるとも諦観しているのであった。

「散らかっちゃった。
まったく、つくづくなんて日よ……」

ガックリと項垂れながら、少女は大きくため息を吐いた。
――今更になってだが、僅かに罪悪感は湧いて来る。
いくら失礼で役立たずでどうしようもない変人だったからと言って、何も焼き殺す事は無かったのではないか。
いや、まあ。殺ってしまったものは仕方ないのではあるが……。

さて、死体をどう片付けたものか。
きっとこの塵のカーテンの向こうには、先程の高級使い魔の仲間入りを果たした、ウェルダンなアレの亡骸が――、

「……成る程な。
これでドッキリの可能性も消えたわけか」

「……へ？」

少女は、つい間抜けな声を上げてしまった。
視線を上げて、声の聞こえた方を見る。
粉塵が漸く治まったかと思うと、その向こうからは、先程と全く変わらない様子で座り込む青年の姿が現れた。その服には焦げ目一

つ無く、彼を中心とした床は、そこだけがまるで切り抜かれたかの様に一切の被害を免れている。
ハッと口元を抑えた少女。
まるで何かを思い出したかの様に、猫の様な双眸をなお見開いた。
そして次の瞬間には、バツが悪そうに明後日の方向へとそれを逸らした。

「……そうだった。
あんた、ヘッポコでも一応守護魔だもんね。
魔法は効かないんだ」

「……詳しく事情を聞きたいな。
オレを爆破した理由も含めて」

不満気な気配を隠そうともせず、青年は少女をジロリと睨み付けながらそう言った。
爆破された理由に気が付かない辺り、彼はかなりの大物である。

「……なによ、自業自得じゃない。
ま。あんたが守護魔だってはっきりしただけ儲けもの、って事にしとくけど……。
あんたさ。左手に魔法円が焼き付いてるでしょ？」

少女に指摘され、青年はハタと自らの左手を確認してみた。
ふと、掌へと視線を落とすと、先程までは先日自分で描いた落書きと重なっていて気が付かなかったが、確かに床の図形を縮小コピーした様な図形が描かれ、橙赤色の燐光を放っていた。

「簡単に言うとね。ソレがあんたの存在を補正して、この世界の理が適応されないようにしてるのよ。あんたの世界には魔法なんか無

かったんでしょ？　守護魔は、守護魔が元々居た世界の理でしか傷付かないってわけ」

少女の説明を聞くなり、青年はあからさまに表情を歪めた。
誰がどう見ても、一発でそれと分かる苦悶の表情である。
彼にしてみれば、落書きが物理法則を歪める世界なんていうのは悪い冗談でしか無いのだろう。

だがそれは、決して少女の言葉に否定的であるという意味では無かった。
彼女の説明は、確かに、彼が先程から感じていた矛盾に一つの解答を示していたからである。

――何故、自分が生きていられるのか。

先程の考察からも明らかな様に、この世界の物理法則は真也のいた時空とはまるで異なっているのだろう。だが真也の身体は、そもそも彼の世界の物理法則によって形成された物なのである。

例えば重力が地球の１０倍の星で生存出来る人間はいないだろうし、電磁気力が強い相互作用よりも強い世界に行った人間は、陽子や中性子の単位までバラバラに飛び散ってしまうだろう。
人間とは、地球上での生活を前提として進化してきた生命体なのだ。
宇宙空間や他の惑星に行くのでさえ大げさな宇宙服を必要とするのに、それが物理法則の違う異世界に飛ばされたりした場合、その結果は言わずとも明らかだろう。
つまり物理法則の違うこの世界において真也が生存していられる

という事実は、そのまま彼の存在を維持する何らかの要素が存在している事を示しているのである。

「ま。取りあえず、それが消えたらあんた死ぬから。精々頑張って守りなさい」

落書きが生命維持装置であるという事実に悪夢の様な頭痛を感じながらも、取り敢えずは少女の言葉を“仮説”として受け入れておこうと、真也は深く嘆息するのであった。

――――――

「……で？」

少しの沈黙が続いた後、青年は仕切り直すかの様に口を開いた。その声は低く、怒りとも不安ともつかない重さを含んでいる。

「……で、ってなにが？」

「わかるだろう？」

頭上にクエスチョンマークを浮かべながら、少女は聞き返した。青年は目を閉じ、眉間に皺を寄せながら付け加える。

「オレがどういう状況にあるのかは、まあ大体理解した。……仮定の話だけどな。だが、どうしてオレがこんな状況になっているのかがまるでわからない。

一つ目、何の為にオレを呼んだ？
二つ目、オレはいつ元の世界に帰れる？
三つ目、殺されるってどういう意味だ？
肝心な事を、君はまだ何一つ説明してないじゃないか」

「ああ、それはね……」

何かを言おうとした瞬間、少女の動きが停止した。
彼女は気分が悪そうに呻きながら、ゆっくりと自分の額に手を当てた。
よろよろと、千鳥足で三歩下がる。
まるで貧血でも起こしたかの様な青い顔で、身体からはフラリと力が抜け、ぺたりと床にへたり込んだ。

「大丈夫か？」

「ごめん、ちょっと限界っぽい……。
流石にさっきの魔法でキャパ超えちゃったみたい。
悪いけど、その説明はまた明日でもいい……？」

青い顔で床にへばりながら、俯きがちに自らの不調を訴える少女。
翡翠の瞳は微かに潤んで、上目遣いに青年を覗いている。
――無理も無い事である。
先日の失敗に、魔道研究所の激務。睡眠と栄養の不足に、先程の大儀式。終いには2度に及ぶ帝霊級魔術の発動となれば、最早人間が体験していい負荷では無い。気力でなんとか意識を保ってはいたものの、身体の方はとうに限界を通り越していたのだろう。
立ち上がる事も億劫であった少女は、ベッドの方に移動して来てもらう事にした。
既にオーバーワークで熱を持っている神経に鞭を打って魔力を流

し、辛うじて飛行魔術を発動する。
ベッドはまるでホバークラフトの様に、床から数ミリだけ浮き上がって少女の目の前に滑って来た。

「冗談……、だよな？」

堪らないのは真也である。
彼の立場からすれば、つまり彼女は、自分を勝手に拉致した挙句にろくな弁明も無く放置しようとしているのだ。しかもその理由となった疲労の最後の一押しが先程の殺人未遂であるというのならば、最早怒り以外の感情を抱く方が難しい。

そんな彼の言葉を無視しながら、少女はサッサと就寝の支度を始めていた。少女の異様を際立たせていたつば広の帽子と、厚手のローブを床に脱ぎ捨てる。
ローブの下に着込んでいたのは、少女の肌と溶け合うかの様に白いインナーだった。少し短いワンピース丈のキャミソールであり、少女の太腿を申し訳程度に隠している。肩口や首回り、背中の部分は大胆に開いており、少女の白磁の様な肌が艶やかに覗いていた。
どこまでも白いその出で立ちには、彼女のトレードマークの真紅の髪がとても良く映えていた。

「……おい」

少し語調が荒くなった青年の声を意識に登らせる余裕は無く、少女は足に纏わり付くブーツを踵を踏む様にして脱ぎ散らかした。黒革で編まれたその履物は、耐久性という意味では申し分無いのではあるが、少女にはその通気性の悪さが普段から甚だ不満であった。
ついでに、妙に足が疲れるのもいただけない。ベッドに倒れこみながら、少女はニーソックスも足先だけで脱ぎ捨てた。

「おーい……」

段々と声に覇気が無くなって来た青年をよそに、少女はいそいそとベッドへ潜り込んだ。真冬の夜気に冷やされて、それは少し冷んやりとしていたけれど、酷使しすぎて火照った身体には何よりも安らぐ安息の感触であった。聞こえて来る声に背を向ける様にして、少女は呼吸を鎮めながら目を閉じた。

「……」

真也はその様子を見ながら、ただただ途方に暮れていた。
先程から何度か声をかけた。
でも、反応は無い。
では、途方に暮れる以外にやる事は無いだろう。
彼は、まるで諦めたかの様に溜息を吐いた。

「……わかった、説明は明日でいい。
それで？　オレは今日、何所に寝ればいいんだ？」

「……へ？
ん……。
そんなの、どこでも……いいじゃない。
すきなトコで、寝なさいよ……」

今回の質問には、なんとか答えてくれた様である。
呂律の回らない、舌ったらずな声色が、気怠そうな背中から返さ

れる。
真也はその声を聞いて、やれやれといった様子で肩を竦めた。

靴を脱ぐ青年。
少女に負けず劣らず気怠そうな雰囲気を醸し出しながら、いそいそと少女の隣へと潜り込む。枕は少女が抱え込んでいた為に、布団の一部を丸めてそこに頭を乗せることにした。布団を被った時には、まるで苺の様ないい匂いが、フワリと彼の鼻腔を刺激した。

「まったく。こっちは起きたばっかりで、全然眠くなんかないんだけどな。
まあ、時差ボケを治す為だと思って我慢するよ」

「……ん。
あんた……。
にゃに、いってるのか……。
ぜんぜん、わかんない……」

もう意識が半分ほど眠っているのだろう。
少女は、やけに近くから聞こえる青年の声を、特に何の疑問も持たずに聞き流――、

「……って!?
ちょっと待ったぁーーーっ!!」

……せなかった。
大慌てで近場にあった布団と枕を抱え込めるだけ抱え込み、脱兎

の如くベッドの端へと飛び退く少女。陶器の様に白い肌は耳まで真っ赤に染まり、その人差し指は青年に向けられてワナワナと震えていた。

「……どうした？」

「ど、どぉしたじゃないでしょっ！？　な、ナニをあんたはっ！！　さも当たり前の様にあたしの隣に潜り込んでるのよっ！？」

「？　“好きな所に寝ろ”、と言われたんだが」

「あ、ああ、あたしのベッドはダメに決まってるじゃない！！　あ、あんたっ！！　あんたの世界には、デリカシーって概念が無いわけ！？」

目を白黒させながら、火でも着いたかの様に大騒ぎする少女。その様子を、真也は心底不思議そうな顔で見つめていた。少女としてはその態度がまるで理解出来なかったのではあるが……。

ただ、何となく物凄く不穏な気配だけは感じていた。

やがて彼は、相変わらずのポーカーフェイスで口を開き――。

「何を言っている？　この状況で、どこにデリカシーなんて概念が関与するんだ？」

「は……？」

――固まった。

あまりにもぶっ飛んだセリフすぎて、少女の頭は一瞬で真っ白に

なった。
突き出した人差し指をどう引っ込めるのかも忘れて、少女はまるで埴輪の様に硬直してしまった。
青年は、淡々と補足する。

「あのな、考えてもみろ。
確かに外見は多少似通ってるかもしれないが……。
ここが物理法則の違う別世界だって言うんなら、オレ達は完全に別種の生命体じゃないか。
それともこの世界では、ゴリラやチンパンジー相手にもデリカシーを論じるのか？」

「う……。そ、それは……」

当たり前の様にそんな分析をかます白衣の青年。
その言わんとする事をなんとなく理解した少女は、次の瞬間には凄まじい葛藤に苛まれる事になった。

ここは、怒る所なのだろうか？
いや、でも。怒るとしたら、一体何に対して怒ればいいんだろう。
彼の言葉は、理屈的には、まあ間違ってないと言えなくもない気がする。
と、いうか、正しい。
確かにコイツが異世界人だって言うのなら、コイツは自分とは違う生き物なワケで……。
……いや、違う。一番の問題はそんなコトじゃ無くて、コイツの見た目が、どう見ても“人間の男”にしか見えない事で、しかも、なんか、贔屓目に見なくてもちょっといいんじゃないかな～なんて

思ってしまう様な外見の生き物だって言う事でってイヤイヤそうじゃ無い。コイツは自分とは違う生き物なんだから、仮にも年頃の娘である自分が同じベッドで寝るとかマジあり得ない――ってあれ？　イヤイヤそうじゃ無い！！　そうじゃ無いの！！　ってか何でコイツは、初対面の女の子と同じベッドに入って平然としてるワケ！？　コイツの世界って、そういう概念が無いの！？　いや、まあ、無いのなら仕方ない――ワケ無い！！　ここは自分たちの世界なんだから、やっぱりこいつもこっちの常識に倣うべきで、男の子と女の子は別々に寝るのが当たり前ですよ～って教えてやるべきで、いや、でもコイツには、そもそも女の子だって思われて無い様な気が……ってちょっと待った。ソレ、何かちょっと悔しくない？　コイツが全然そんなコトを意識して無いのに、自分だけが“そういうコト”を考えてる、とかって思われるのは、何か物凄く悔しい事なんじゃないだろうか？　うん。悔しい。その上コイツに“ほう。この世界ではサルを相手にそういうコトを考えるのが常識なのか。それとも君だけか？　いや、大した嗜好の持ち主みたいだな”なんて言われたら、多分、発狂する。――あ、ヤバい。なんか、自分でもマジでナニするか分からない。多分、コイツを殺して自分も死ぬ。

「……」

自問自答の果てに思考が暴走状態に突入した少女は、やがて真っ赤に紅潮した顔を隠す様に目を伏せながら、おずおずと口を開いた。

「……よね」

「……ん？」

「そ、そうよね～！？

き、　気にする方が、おかしいのよ、ね！？

い、いい、いいわ。
す、すすっ、好きな所で寝なさいよ！！」

震えた声でそう喚き散らした少女は、錆びたゼンマイ人形の様にギクシャクとした動きで布団を引きずったかと思うと、青年の隣へパッタリと戻った。
カチンコチンに身体を強張らせながら、チラリと、視線を隣に送ってみる。
隣に寝そべる黒髪の彼は、何の動揺も見せないポーカーフェイスのまま、天蓋のステンドグラスを物珍しそうに見つめていた

少女は、青年から目を逸した。
クルリと彼に背を向けて、ドクドクと脈打つ心臓の音が聞こえない様に、ベッドの端まで身体をズラした。
彼との間に開いた布団の隙間から、冷たい冷気が吹き込んだけれど、それを寒いと感じる余裕なんか彼女には既に無かった。
火が出そうに熱い顔を、なんとなく布団に埋めてみる。

「それはよかった。
この寒さの中、床なんかに寝たら凍死しかねないからな」

少女の背後からは、全く変わらない彼の声色が響いてきた。
多分、こいつは本当に何とも思っていないのだろう。
少女には心底からそう感じられ、色々な意味で精神力を消耗する羽目になった。

やたらと熱を帯びてしまう顔が、悔しい。
自分の心臓を殺したくなったのは、少女にとってこれが初めての経験だった。
隣から伝わって来る彼の体温からなんとか意識を逸らそうと、少

女はなんとなく今日の出来事を思い返してみる。
すると、“その事実”に思い至って、脳が溶けた。

――今日、シャワー浴びてない。

ドクン、と、耳の奥で心音が聞こえた。
頭の中がとろけそうなくらい真っ白になって、一瞬で自分がどこに居るのかも分からなくなる。取り敢えず少女は、殆ど反射的に、ベッドから落ちそうな程端にまで身体を寄せていた。

今からでも、浴びた方がいいのだろうか？
いや、多分、無理。今シャワーなんか浴びたら、間違い無く途中で倒れる。でも、浴びないと、それはそれで恥ずかしくて死ぬ。少女は頭がおかしくなりそうな羞恥の中、自分にそんな思いをさせている元凶を、取り敢えず心の中で１００回ほど罵倒してみるのだった。

少女の頭は、既に半分以上パニックに陥っていた。
異常な量のアルコールが血液に融解したみたいに、赤い視界がグワングワンと回り出す。
取り敢えず、何か別の事を考えなくては、と思った。
そうしないと、秒単位で脳細胞が死んでいってる気がしたのだ。

“別の事”。
知能指数が恐ろしい事になり始めた頭をフル回転させて、少女は必死に、何か別の事を考える。
――と、その瞬間。少女は何か重要な事を忘れている気がした。

「……名前」

「は？」

ポツリと、呟く。

青年には背を向けたまま、呼吸を殺す様にして、少女は独り言の様な声で続きを言った。

「……あんたの、名前。

まだ、ちゃんと聞いてなかったでしょ？

あんた、変な奴だけど……。

いつまでも“あんた”じゃ具合が悪いじゃない」

「……朝日　真也。

まったく、勝手に拉致した割には随分な言い草だな」

「あさ……しん？

……長いから、シンでいい？」

「たった6音節だ。

さっきから君のヒアリングには問題があるとしか思えない」

相変わらず不遜な真也の返答を聞いて、少女は頭の中でカチン、という音を聞いた。聞き取れなかったのは彼の名前が聞き慣れない発音であった為なのだが、どうやら彼はそんな事はお構い無しらしい。どうも彼とは、永久に性格が合わない運命にあるようだ。少女は、一度仕返しでもしてやらないと気が済まないと思った。

「……ちょっと。

そういうあんたはあたしの名前、ちゃんと覚えてるんでしょうね

？」

青年の方に向き直りながら、胡乱気な瞳でジロリと睨む少女。
青年は一度、流し見るかの様に横目でその視線を受けたが、直ぐにまた天蓋の装飾の鑑賞へと戻った。

「悪いが、偉人の名前以外は3音節以上覚えられた試しが無いんだ。……長いから、アルでいいよな」

「ほら、みなさいよ。
あんただって人の事言えないじゃない」

フフン、と、小馬鹿にした様な、勝ち誇った様な声色で言ってやる。
今の台詞に妙な引っかかりを感じながらも、漸く言い負かした事に多少の満足感を感じながら、少女はようやくその目を細めた。
スッキリしたのだろう。
少女はゆっくりと、その翠の瞳を閉じようとし――、

そこで、気が付いた。

何時の間にか、自分は彼に触れる程近くに寄っている。
シャワーは、浴びてない。
そう考えると顔から火が出そうで、そんな自分でも分かるくらい真っ赤な顔は彼の方を向いていて――。

「……？
どうしたんだ？　アル。
眠いんじゃなかったのか？」

そしてこのデリカシーの欠片も無い男は、そんな、誰にも呼ばれた事がないような、馴れ馴れしい呼び方をして、ちょっといいかな～、とか思ってしまった綺麗な顔が、吐息が掛かる程近くからそんな自分を見つめていて――！！

「あ……」

何かが、ショートした。

頭の中が焼け付いた様な感覚がした途端、視界が急速にブラックアウトしていく。

「……ん？

ああ、やっぱり寝るんだな。

それじゃ、お休み」

そんな間の抜けた声を聞いた瞬間。

少女の“最悪な日”の記憶は、そこでプッツリと途絶えたのだった――。

9. 一般人が忌避する異国の風習及び武の国が誇る長距離移動手段の最大積載

すみません、ちょっぴり更新が遅れちゃいました……。
はい、なんとか毎日更新できるように頑張りますので、ちょくちょく読んでいただけると幸いです。

9．　一般人が忌避する異国の風習及び武の国が誇る長距離移動手段の最大積載量

その王宮は、数多の刀剣に覆われていた。
白磁の壁を覆う鋼の装飾は、嘗ての名将達が使用した愛刀、愛槍の数々である。
飾り方に武器としての序列は見られない。
この国では、強者が振るえば数打ちの安刀でもそれは即ち“名刀”であり、敗れれば如何なる宝剣であろうとも凡百の駄剣へと堕する。
勇者達の栄華を刻んだその隔壁は、それ自体がこの国の在り方を象徴しているかの様だった。

“屈強なる武術王国”・武の国（ウォルヘイム）。
赤道を挟んで“銀の国”の南に隣接するこの国は、その二つ名が示す通りの勇猛なる戦士の王国としてその名を世界に知られている。
無数の闘技場が立ち並ぶ王都の中心に位置する白磁の塔は、王都内でも一際荘厳な“中央闘技場”と一繋がりになり、月に何度か行われる御前試合の度に剣戟の音を天高く木霊させるという。
数多の武具により装飾された、傍目には無骨にさえ映りかねないその“王宮”は、しかし抜身の刀剣の様な存在感でもって王族の威光を全国民へと知らしめていた。

風が外壁に吹き付けた。
果ての無い平野（ヴィーグリード）より吹き抜けたその突風は正門を過ぎ、中央闘技場を抜け、白塗りの王塔を駆け上がる。
眼下の城下町を見下ろす窓辺を揺らしながら、不屈の戦士を統べる象徴たるその偉容に、異国の調を響かせるかの様に――。

風は王族の象徴たる塔を渦巻く様に駆け上り、最上階のバルコニ

ーへと吹き込んだ。
湿り気と燭台の熱気を含んだ空気が、夜の香りを天上の舞台へと運び込む。
バルコニーに佇む美貌の天女の、宝石の様に煌めくブロンドの髪を、真紅の月明かりの中に靡かせる為に。

「……嫌な天気」

突風で乱れた長髪を揃えながら、彼女は不快そうに夜空を見上げていた。
塔の上空では激しく雲が流動していく。
浮雲は疾風に急かされるかの様に流れ、天空の月を隠しては、次の瞬間には飽きたかの様に去ってゆく。
それは、彼女には情緒を含んだ天気の移ろいなどでは無く、人の不安を煽る悪性の変化である様に思えた。

――おそらく。この日の彼女は、風の香りから既に何かを感じていたのだろう。
まるで真紅の満月に同調された様に、彼女の不安は奇しくも的中する事になる。

三度、月が浮雲の隙間から顔を出した時である。
群青の鳥が、一羽。漆黒の夜空より舞い降りた。
鳥は月明かりを目印に塔の上空を旋回したかと思うと、やがて純白のドレスに惹かれた様にその翼を傾ける。
羽音を聞いた女が人差し指を夜空へと掲げると、鳥はそれを留まり木とするかの様にかぎ爪を引っ掛け、嫋やかな彼女の腕の上へと軽やかに降り立った。
――使い魔。魔術師が遠隔地の情報を得る為に用いる、この世界に広く普及した情報伝達技術の一つである。

怖じ気無く静かに身を寄せる鳥の姿からは、調教した術者の卓越した技量が伺われた。

「ご苦労様。
早速ですが、貴女の見た事を教えてくれませんか？」

女は一言だけそう告げると、役目を果たした使い魔を労う様に頭を撫でた。主人の下に帰還した安堵からか、眠そうに目を細める群青の鳥。やがて女の指先がぼんやりと燐光を放ったかと思うと、青い使い魔はゆっくりとその瞳を閉じた。
主人である女も目を閉じる。
意識を指先へと集中させると、彼女の視界は先刻鳥が見て来た光景へと時空を駆けた。
彼女の瞼の裏では、遥か隣国での風景が鮮明に再現され始める。

明かり一つ見られない、闇の地平が広がっている。
辺りを包む静寂から察するに、街からは少しばかり離れた場所らしい。
漆黒の草本が眼下に流れ行くのを眺めながら、使い魔の視界は丘の頂上へと疾走してゆく。
頂上には巨大な建造物が聳えていた。
あまりにも大きく、しかし精緻な意匠を凝らされたその知識の倉庫は、初見ではまさか人が住んでいるなどとは思われないだろう。
――紛れも無く、“彼女”の住家である。

使い魔の視界は、壁伝いに上昇を続ける。
金属製の柱を旋回しながら空へと向かい、真紅の月明かりの中を青い翼が飛翔する。
図書館の上空には、複数の使い魔と思しき生物が飛び回っていた。

視界に映る限りでは、どれ一つとして安物は無い。
おそらくは、王侯や貴族という地位にある者達が放った物だろう。
黒煙の空に浮かぶ真紅の月に、翼のシルエットだけが幾つも浮かんでいる。

――好都合だ。

使い魔と視界をリンクさせながら、女は小さな微笑を零した。
“彼女”とて、一流の魔導師なのだ。
通常なら、例えこちらが使い魔を用いていようとも魔力の香りだけで監視の目に気付いてしまうだろう。
だがこれだけの数が飛び回っていれば、いくら“彼女”と言えどもこちらの気配に気付ける筈が――、

「――――っ！？」

ハッ、と。女は息を飲んだ。

使い魔の視界が天蓋のステンドグラスを見下ろした瞬間、視界を覆い尽くす程に巨大な火球が、屋敷の天井を突き破って天空へと放たれたからである。
視界を借りている青い鳥は、ギリギリで翼を捻ってそれを躱していた。
しかし発生した衝撃波までは免れる事が出来ず、余波によって視界が、脳が揺れる。
上下が反転し、落ちて行く世界。
そこで女は、気絶した使い魔達がボトボトと落ちて、黒焦げにな

った一体が屋敷の穴へと吸い込まれていく地獄絵図を見た――。

――――――

突如、視界が切り替わった。
場所は依然として件の図書館である。
天蓋のステンドグラスの上に、横たわる様な視界で映像の続きは流れ始めた。
視界が、ヨロヨロと立ち上がる。
微妙に焦点の合わないその映像を確認し、女は先程の衝撃波によって自らの使い魔も気を失っていた事を理解した。

「……」

言葉に……、窮した。

先程の魔術は、少なく見積もっても“龍霊級”。
下手をすれば“帝霊級”にまで届きかねない大魔術だろう。
何故“彼女”は、ソレを自宅なんかで使ったのだろうか。
監視に気付いた、という事はあるまい。
それなら、ピンポイントで鳥一羽を撃ち落とす魔術などいくらでもあるからだ。
つまり“彼女”は、特に何の意味も無く、超威力の大魔術を使って自分の家を破壊したのである。

「……」

やはり……。理解、出来ない。

どういう思考過程を経れば、自らの屋敷を大魔術で破壊しようなんていう結論に至るのだろうか。

自らの理解の外にある存在に、女は空恐ろしい物を感じていた……。

彼女の思考が迷走しているうちに、視界は屋敷の内部を映していた。

使い魔は天蓋の隣に空いた採光窓の一つから、薄暗い図書館の内部を観察している。

――屋敷の内部では旋風が吹き荒れていた。

灼熱の大気が渦を巻き、橙赤色の閃光が全てを飲み込んでいく。

間接的な視界でも目が眩む様な、世界から色を奪う程に強烈な発光。

それが治まった瞬間。

彼女の視界には、“その存在”が映し出された。

総身に纏うは、処女雪の様に白い装束。

髪の色は冬の夜空の様に黒く、そして瞳もその形容には漏れない。

感情の機微が伺い難い、冷静な面構えをした“その存在”は、見違えようも無い異世界からの訪問者であった。

「そんな！？」

常軌を逸した事態に、女は思わず声を上げた。
“彼女”が今回の儀式でミスを犯したという話は、当然の如く女の耳にも入っていた。
つまり女は、それで“彼女”が召喚主になる可能性はもう排除されたものだと思っていたのである。
否。それは彼女だけではあるまい。
おそらくは他国の大魔導達も、皆そう思っていたに違いないのである。

――しかし、実際はどうだろうか。
他国の召喚主達に遅れること、数日。
“銀の国”は他の5大国を出し抜く形で、約定反故もギリギリのタイミングで儀式を行っていた。そして、あろう事か。どうやら、それは間違いなく成功してしまった様なのである。

驚くべき誤算。
いや、不幸中の幸いというべきか。
念には念を入れて使い魔を放っておいた結果、女は過つ事無く、この事態を把握する事が出来たのである。目の前の事実に歯噛みしながらも、彼女の内心は、なるべく冷静を装って対応策を考え始めていた。

もういいだろう。
そう思って、女が視界の接続を切ろうかと思った瞬間――、

「へ――――？
ど、どうしてですかぁああっ！？」

……何故か。

“彼女”が自らの守護魔に向けて放った“帝霊級魔術”の余波によって、使い魔の視界は再度昏倒した。

――――――

「……」

視界が自らの双眸へと返却された。

女は、言葉を失っている。

あまりの事態に唖然として、どうコメントすればいいのか分からないといった様子だ。

「……ご苦労様。

……。

……本当に、苦労をかけました、ね」

取り敢えず女は、自らの使い魔をもう一度丁寧に労う事にした。

コチョコチョと頭を撫でてやると、群青の鳥は気持ち良さそうに目を細め、愛くるしくクークーと鳴く。

その仕草にささくれ立った心が鎮まるのを感じながら、女はあくまでも優雅に嘆息した。

鳥を巣箱へと返してやる。

鳥（彼女）も、今回ばかりは危うく黒焦げになるところであったのだ。

噂以上に破天荒な“銀の国の大魔導”の人格に思いを馳せて、女は目眩にも似た頭痛を覚える。

脳裏に過るのは先程の儀式と、“彼女”の召喚した“白の守護魔”の姿――。

「……アルテミア。
本当に、バカな子」

憎々し気に、真紅の少女の名を呟く。
それは果たしてどの様な感情からだったのか。
白いドレスの天女は、苦々しげにその端正な顔立ちを歪めていた。
一度だけ、夜空に浮かぶ真紅の月を眺める。
忌々しい物を見る様にソレを睨み付けた後、彼女はまるで安息を求めるかの様に、静かに自室の中へと歩み入った。

――――――

室内に取り付けられたシャンデリアの灯りは、女の風貌を一層鮮明に暴き出した。
細身な彼女の総身を包んでいるのは、穢れ一つ見当たらない純白のドレスである。
縫い付けられた宝石も少なく、飾り気の無い仕立てのそれは、しかし彼女自身の雰囲気と相俟って侵しがたい高貴さを醸している。
――否。むしろ無意味に飾り立てないその作りこそが、彼女の清楚な美しさを一層際立たせていると言えるだろう。
腰まで届くブロンドの長髪が、灯りの中で金砂を散りばめた様な煌めきを帯びている。
髪質が、あまりにも軽やかだからなのか。
触れる事すら躊躇われる程に美しいそれが、彼女が歩みを進める度にフワリと舞う。

前髪は、鳥の羽を模した髪留めに留められていた。
更めて見ると、その下に覗く顔立ちは驚くほどに若い。
おそらくは十代後半から、二十代前半。少女から淑女へと変わったばかりという年齢だろうか。
しかし彼女の醸し出す凛とした雰囲気と気品からは、年齢以上に大人びた印象を受ける。
利発そうな彼女の瞳に見据えられた者は、どんな美丈夫でも自らの器量不足を悟り、声を掛ける事すら諦めるだろう。

人目を避け得ぬ程の美貌の女は、後ろ手にバルコニーの扉を閉めながら刀剣の飾られる室内を一瞥した。
切れ長で怜悧な印象を受ける双眸が、白を基調に整えられた自室の中を優美に見回す。

回廊へと続く扉の前に見覚えのある鎧姿を認め、彼女は静かにその目を留めた。
女とは別の意味で人目を惹く、深碧の鎧の上からでも分かる程に、鍛え上げられた筋肉。
熊とでも素手で渡り合えそうな程に体格のいい大男が、黙したままに扉に寄りかかっている。
果たして、どれほど前からそうしていたのだろうか。
筋骨隆々の大男は、飽きた様に青い短髪を掻き上げながら、只々静かに佇んでいた。

「来ていたのですか」

顔色一つ変えずに、女は彼に声を掛けた。
決して大声とは言えないその音色は、しかし人に聞き逃す事を許さないだけの気品を備えている。

女は男から一定の距離を取りながら、壁に飾られた刀剣の前へと歩みを進めた。
目線は、男から外れない。
女は摺り足の様な動作で壁へと滑り、そこに掛かった長柄の曲刀へと手を添えると、男の腰元に視線を落とした。
――男は、自らの腰に帯びた短刀に手を添えている。
それを静かに視認した女は、無駄も躊躇も一切見せず、壁の刀を全力で抜き放った。

「フッ……！！」

女は風の様な速さで男の懐へと踏み込んだ。
蝋燭に照らされた私室には、舞い散る様な黄金の残滓が残される。
常人には視認すら困難な速度にて放たれた切っ先は、必滅の風迅となりて男の喉元へと駆け抜ける。

――反響する、鋼の音。

鎧の男は、女の剣戟を正面から短刀で受けていた。
女の踏み込みの速度に完全に合わせて身体を引き、剣速を純粋な刃の速さのみに変えて見切りながらの受太刀。
打ち合った剣を挟む様に、二人の視線は静かに交錯する。

「……っ！！」

鍔迫り合った短刀を左に受け流し、下段から逆袈裟に切り上げる女。女性らしい細さを残した身体で、しかし全身の筋肉を用いて振り出される両手は、長刀を疾風（はやて）の速度で切り返す。
――“防がれる”。
剣戟を放つ直前、彼女は予期した。

女の予見と寸分違わず。男は受け流された身体の勢いをそのまま回転力に繋げ、上段からの振り下ろしで女の動きを制そうと動く。

女の口元が、僅かに緩んだ。それは自らの読みが当たった事に対する細やかなる愉悦か、或いは死合いの静かな高揚か。それを吟味する余裕のある者はこの場にはいない。

女は男の振り下ろしへのカウンターを狙い、短刀の動きを切っ先のみで僅かに左へと逸らすと、抉じ開けた死角から男の腕下へと滑り込んだ。

一切間断の無い、流水の如き身の熟しで、男の攻撃線を紙一重で躱しながら白いドレスが彼の背後へと流動する。

そして、間髪入れずに男の後ろ首へと放たれる斬撃。

見物人がいれば死神の鎌を幻視する程に鮮やかに、女の曲刀は容赦無く閃いた。

「……ッ！！」

瞬間、女の動きは停止した。

敵を仕留めたから、では無い。

男の首は、まだ繋がっている。

女の長刀は、男の首に添えられたままその動きを止めていた。

「……」

女の胸元には、短刀の先が当てられている。

彼女に背後に滑り込まれた瞬間、男が逆手に持ち替え、背後に向かって振り出した刃である。どちらかが1歩でも深く踏み込めば命を取れるその距離にて、2つの人影はピタリとその動きを止めていた。

「流石ですね、ネプト」

先に口を開いたのは女であった。
刀をゆっくりと引き、構えを解きながら、自らの剣舞を凌いだ男へと惜しみの無い賛辞を贈る。

「……。
はぁ……」

対する男は、目を伏せながら小さく溜息を吐いていた。
全身から死合いの緊張を解きながら、やれやれといった様子で肩を竦めている。

「ウェヌス……。
この挨拶、もう少しなんとかならねぇのか」

隠しようも無いくらい、疲れた声。
ネプトと呼ばれた大男は、青い短髪をグリグリと掻きながら、心底辟易した様子でそう問うた。

「気にしないで下さい。
貴方ほどの腕なら直ぐに慣れます」

対してウェヌスと呼ばれた女は、凛とした雰囲気を微塵も乱さずに、あくまでも当たり前の様にそう答えた。取り敢えず、男の言葉は否定していない。どうやら彼女は、先程の剣戟を本当に“挨拶”で済ませるつもりらしい。
男は、海よりも深く嘆息した。

――“屈強なる武術王国”・武の国（ウォルヘイム）。
この国において強さとは美徳であり、習慣であり、即ち義務である。
男が先日、女から受けた説明はその様なものであった。
彼女によると、この国では出会った瞬間に刃を交えないという行為は“お前とは切り結ぶ価値も無い”という意味になり、身分の高い者相手には侮辱行為に当たるのだという。
男は決して、戦闘に慣れていないという訳では無かったが……。
しかし彼は、この国で生まれ育った国民というワケでも無かった。
つまりは、ここまで戦闘民族丸出しな風習にはそうそう慣れる物では無かったのである。

「さて。しかし、こんな夜中にどうしたのですか？
何か急ぎの案件でも？」

刀を優雅に壁に戻しながら、女は平然とそう尋ねる。
――急ぎの案件かもしれないのなら、何故斬りかかる前に聞かないのだろうか。
この国の文化に軽い頭痛を覚えながらも、彼女からは（彼の知る、常識的な）返答は望めない事を理解していた為、男は口に出す事は自重した。
取り敢えず一呼吸置き、簡潔に訪問の理由を説明する。

「あのな。普通吹っ飛んで来るだろ。
仮にも姫様が、こんな夜中に素っ頓狂な声で叫んでりゃな」

先ほど響いた彼女の声を思い出した男は、軽く肩を竦めながら言った。

ついでにその後に行われた仕打ちも含めると、常人ならば最早鬱になってもいた仕方ない程のストレスであろうに……。

律儀な男は、どこか達観した様な、或いは諦観した様な雰囲気でそう言うに留めていた。

一つ、言えるのは。

取り敢えず、男の目の前に居る彼女はそういう人物だという事である。

武の国第一王女、ウェヌサリア・クリスティー。

武の国最強の魔法使いであり、同時に武術王国の王族に恥じない剣の技量を誇る彼女こそは、男の知る限り“武の国”の王族唯一の子息に当たる人物であった。

補足すると、国王、王妃の両名が崩御した現在となっては、この国では宰相殿と並んで最も尊守されるべき地位にあるお方である。

そんな彼女が夜中に悲鳴を上げていれば、（如何に彼女が強くとも）臣下の一人や二人が飛んで来るのは当然の事といえるだろう。

尤も。普段は凛とした雰囲気を崩さない彼女が、バルコニーで小鳥の頭を撫でながら少女の様に狼狽えている姿は微笑ましく、駆けつけた臣下達は皆呆れ顔で詰め所に帰り、残った男もついつい吹き出してしまったのだが……。

「素っ頓狂とはなんですか。

私だって、たまには取り乱す事くらいあります」

ウェヌスはからかう様な男の言い方に不満気に答えた。

愛嬌で飾らない顔立ちは王族たる威厳を存分に醸し出しており、臣下の間では目を合わせただけで相手を萎縮させる程の美貌の持ち

主である事で有名である。
しかしこの大男の目には、どうにもその、微かに膨らんだ彼女の頬が拗ねている様にしか見えず、少女の様なその仕草に可愛らしさを感じずにはいられなかったりするのだが。
男は、微かにその口元を緩ませていた。

「な、何を笑っているのですか？」

「いや、笑ってねーよ。
……顔だけは、な」

「尚悪いではないですか！！」

澄んだ声を荒げながら、お姫様は端正な顔立ちを赤らめて怒る。
男はそんな彼女をやれやれと宥めながら、静かに事情の説明を促した。

「……いいでしょう。
時間もありませんので、今回ばかりは不問にします。
ですが……。次からは、本当に対応を考えますからね？」

女は未だ納得がいかない様子ではあったが、余程切羽詰まった事情が有るのか、渋々ながらも追求の手を緩めた。
小さく咳払いをしながら、簡潔に狼狽の理由を説明する。

「“銀の国”の大魔導が、白の守護魔を召喚しました」

――男の表情が、険しくなった。

守護魔。
男は、既にその名称についての十分な説明を受けていた。
国の技術を発展させる為に召喚された魔人。常識の枠を外れた知識や能力を持つ、異世界からの訪問者。そしてソレを相手に、自分が何をしなくてはならないのかも――。

「そいつ、強ぇのか？」

故に男は、ただ一言だけ問うに留まった。
既に彼女と主従の契約を結んでいる彼である。
一度役割を決めた以上、彼が差し当たって必要とするのはその一点だけであった。

狩猟に出る肉食獣の様なその眼光を受けて、王女は一瞬だけ言葉を詰まらせた。
瞼の内で再生されるのは、“彼女”が呼び出した純白の長衣を羽織った青年の姿である。
矮躯というわけでは無いが、戦士としては細すぎる腕。
遠目にしか確認は出来なかったが、ほっそりと長い指には豆一つ無いだろう。
明らかに戦闘向きに鍛えられた身体では無いのに、その中性的な顔立ちには傷一つ無い。
何より、その佇まいには隙が有りすぎる。

幼少の頃より剣を握ってきた女の勘は、何度思い返しても一つの結論だけを示していた。
言葉に詰まったのは、決して敵の戦闘能力を測りかねたからでは無い。

ただ。その事実を目の前の彼に告げるのが憚られたのである。
女は一度息を呑むと、やがて吐露するかの様に口を開いた。

「確かな事は分かりません。
しかし――。私の見立てでは、おそらく直接的な戦闘能力は皆無です」

――相手は“守護魔”である。
よって、自分の常識をそのまま当て嵌めるのは不適かもしれない。
女はそういった意味で断定は避けたものの、一切の脅威を感じなかった自分の印象を素直に彼に告げた。
男は、辟易した様な顔で溜息を吐いた。

「……らしくねーな、ウェヌス。
お前、雑魚を殺すのは嫌いなんじゃなかったのか？」

「……」

男の言葉に、ウェヌスは閉口した。
――武の国は、勇猛なる戦士の国である。
この国では強者に挑む事こそが美徳であり、弱者を嬲る事は何物にも勝る恥であるという意識が国民性の根底に根深く息付いている。
そして王女たる彼女の持ち合わせる行司は、その模範とも言うべき物であった。
彼女は、弱者に剣を向ける事を何よりも嫌う。
挑まれれば応えもするが、自分から喧嘩を吹っかけるのは、やはり彼女にとっては最大の汚点となるのである。
それは他ならぬ彼女自身が既に了承済みの事実であり、契約の際に男が尊守しようと決した方針でもあった。

彼と主従の誓いを結ぶに当たり、王女は敵国の強者を共に討ちたいという名目を掲げた。
彼女は、自分が掲げたのがそんな、どこまでも単純で分かりやすい名目だったからこそ、彼が迷わず剣を預けてくれたのだとも理解している。
そして、この。“抵抗する力の無い者を斬り捨てろ”という命が、自らに信を置いてくれた彼の意思を裏切る物である、とも。

――それでも。
例え彼に失望されたとしても、王女には“彼女”を野放しにしておく事だけは出来なかった。
何としても、“彼女”にだけはこの手で引導を渡さなくてはならないと理解していた。
ウェヌスは、暫し俯いたままに次の言葉を探していた。

王女の私室の窓枠は、吹き荒ぶ孟風によってガタガタと揺れていた。
一迅の突風がガラス戸を揺らし、無意味に長い時間を掛けながら通り過ぎてゆく。
王女は、相も変わらずに目を伏せたままである。
青い従者は風の雑音が収まるまで待ち、何かを思案するかの様に小さく息を吐いた。
小さな、聞こえないくらい小さな溜息の音が、風の音に混じって灯りに溶ける。

「……悪いな。何の話だっけ？」

とぼけた様な声。

突如として掛けられたその言葉に、ウェヌスは目を丸くしながら顔を上げた。
男は少々辟易した様子で、丸太の様に筋肉の盛り上がった腕で青髪を掻き上げている。
次いで分かり難い含み笑いをしながら、静かにその口を開いた。

「俺、頭悪ぃんだわ。
えーと、なんだ。
確か隣で、何か強そうなヤツが出て来たって話だったか？
――そりゃ是非手合わせ願いたいな。
会ってみて万が一見込みが外れてても、まあその時はその時だろ」

ウェヌスは、今度こそ呆気にとられた様子でポカンと男を見上げていた。
放心していたのは、果たして3秒程度だったろうか。
彼女は漸く彼の意図する所に気が付いた様子で、プイと顔を背けた。
目を奪う程に美しい、ブロンドの髪が、照れる様に虚空に靡く。

「……ネプト。
下手な嘘なんか、貴方には似合いません」

不機嫌そうな声色。
しかし男から背けた口元には小さな笑みを浮かべながら、女はそう嘯いた。
男は、面倒臭そうに明後日の方向を見ながら腕を組んでいる。
だがあまりにも不器用なその佇まいからは、自らの主の全てを尊守しようという鉄の意思が見て取れた。

――この状況でそんな態度を示せた彼は、未だにこの王女様の性

格を把握し切れていなかったのだろう。

「……は？」

ブワッ、と。突如として、室内には猛風が巻き起こった。
部屋を照らす“消えない蝋燭”の灯りがチラチラと明滅し、シャンデリアそのものまでもが落ちそうな程にユラユラと揺れる。それがバルコニーへと続く扉から吹き込んだ外気によるものだという事実に気付いた時、男はその意味を理解する事を諦めた。
開け放たれたガラス戸の外に見えるバルコニーには、王女の金髪が月明かりの中で舞っている。

「ありがとうございます。
お陰で、私も決心がつきました」

轟々と吹き荒ぶ風の中に、王女の声が凛と響く。
どうやら礼を言われているらしいと判断する男。
その顔からは、彼女の行動が理解出来ずに魂が抜けていた。
そんな彼に目をやる事も無く、ウェヌスは自らの髪留めを外して魔力を流した。
鳥の羽を模したその髪飾りは、月灯りの中にキラキラとした燐光を放ち、彼女が何らかの魔術を行使している事を周囲に知らせる。

――瞬間。響いたのは、劈く様な異形の鳴き声。
真紅の月光を切り裂きながら、その“翼”は彼女の前へと飛来した。

「……おい、ウェヌス。
ちょっと待て、まさか！？」

「ありがとうございます。
やはり貴方に相談して良かった。
さて、そうと決まればやるべき事は一つでしょう。
幸いこれだけの追い風。夜を徹して飛べば、明日（あす）の昼には着く筈です」

「……」

――されてない。
少なくとも、今すぐこの寒空を飛ぼうなんて相談は、男は一切された覚えが無い。
なのに、あのお姫様は、なんか白薔薇の様に可憐な笑顔を向けながら、さもそうするのが当然である様に男の方を見つめている。
……それは、もう。信頼しきった眼差しで。
そして、尚悪い事に。
男は、この状態の彼女には何を言っても都合の良いフィルター越しにしか声が通らない事を、既に十分に理解してしまっていた。

「はぁ～……」

小さな、聞こえないくらい小さな溜息。
悲しきかな。従者とは主の方針には異を唱える事が出来ない生き物なのである。
結論から言うと、男は観念した。
観念して、寒気が吹き荒ぶバルコニーへと歩みを進めた。
そして既に王女が飛び乗っている“翼”へと、自らもその筋肉の鎧を纏った脚を掛けた。
些細な、ごく些細な疑問を持ちながら――。

「こいつ、俺を乗せても飛べるのか？」

「問題ありません。
“彼女”は私に似て、自らの限界に挑戦したがる性質の持ち主ですから」

「待てぇっ！！　お前に似てるって、それ空飛ぶ生き物として一番危険――あああああアアアアァァァッッッ！！！！」

男が鎧と同じくらい青褪めていたという事実を、彼女は知らない。
流れ行く雲よりもなお速く、純白の姫と蒼の戦士は漆黒の夜空へと消えて行った。
絶叫しながら“翼”に捕まる、男の左掌。
全てを包み込む様に大きく、年季の入った剣胼胝（けんだこ）が見られるその中心には、白衣の青年と同じ橙赤色の魔法円が輝いていた――。

１０．　アイアイ★こらむ？　魔力ってな～に？（前書き）

注）アイアイ★こらむは電波系楽屋落ちコーナーです。真面目な方、まともな方、あるいは毒電波に対する耐性が無い方などが読まれますと、精神とかに何らかの異常をきたす可能性がありますのでご注意下さい。

10．　アイアイ★こらむ？　魔力ってな～に？

「こんにちはーっ！！
ついにやってきました、アイアイ★こらむ！！
只今から、このページは皆さんご存じのこのわたし、相川　愛が占拠しちゃいました！！」

「……」

「はい、それじゃあ、早速盛り上がってイッてみましょーっ！！

……。

……あの、教授。どうしたんですか？何でそんな、コーヒーゼリーだと思って頬張ったらモズクだった時みたいな顔で固まってるんですか？」

「……。

何だ、コレは……？」

「……へ？
あっ、まだ説明してなかったですか？
えーと。ここは、教科書とか参考書ではお馴染みのお役立ち豆知識コーナー、コラムをイメージして作った、わたしの占有空間なんで

す。

その～、皆さんいいかげん気付いてると思うんですけどこの話、

“ぶっちゃけ用語が意味不明！！”

――じゃないですか。

そこでわたしが、読者の皆さんの気持ちを代弁して、教授に色々質問していこうっていうコンセプトなんです」

「初めにオレが読者の気持ちを代弁しよう。

……お前、誰だっけ？」

「うぅ……。

ひっ、非道いです、教授。

冷たいです、教授！！

わたし、仮にも教授の教え子ですよ？

教授よりちょっぴり年上の、勉強熱心な女の子ですよ？普通なら、ヒロイン候補Ｎｏ．１ですよ！？」

「……成る程な。

取り敢えず、ここが何でもありの人外魔境だという事だけは理解した。

……それで？

なんでお前みたいなチョイ役に、専用コーナーなんかが設けられてるんだ？」

「そ、それは勿論、わたしが教授の優秀な教え子で、チョイ役にしとくには勿体無いって、作者さんが分かってくれたからに決まってるじゃないですか！！」

注）彼女の出番は、本当は冒頭の一回だけの予定でした。でもでも、書いてる内に、なんだか妙な親近感が湧いてきちゃいまして……。

報われない感じ、とか？

えーと、可哀想なので、無理矢理出番を作っちゃいました。本編とは関係ないんで、読み飛ばして頂いても構わないです（＾―＾；）。

「……今、なんか聞こえなかったか？」

「き、気のせいですよ、教授！！

気にしちゃダメですよ！！

きっと、悪い妖精さんが鼻歌とか歌っただけですよー！！」

「……まあ、そこまで言うなら気にしないが。

だがな。質問って、結局オレは何を答えればいいんだ？　なんかサブタイに、魔力がどうのこうのって書いてあるが……」

「はい！！　ズバリ、それが今回のテーマになっちゃってます！！

魔力を“何か不思議な力”とかで終わらせちゃったらただの“Ｆ（ファンタジー）”！！　朝マガはＳＦ（サイエンス・ファンタジー）なんですから、しっかりそれっぽい理論をで

っち上げないとダメなんです！！」

「……ＳＦってそういう意味だっけ？」

「いえ、多分間違えてます。
ちょっとおバカな作者さんが、ＳＦのＦをファンタジーだと勘違いしてｐｌｏｔ作っちゃったのが全ての元凶です。ぶっちゃけ、もう後には引けなくなってる感じなんです。

……はい、楽屋落ちでした。
すみませんでした。
教授は気にしないで下さい！！」

「大丈夫なのか、このノリ。
ここ、携帯小説じゃないんだぞ？
こんなふざけたコーナーがある話、“なろう”じゃきっとウチくらいだぞ？」

――――――

「はい！！　それじゃあ本題にいってみましょう！！
教授。早速ですけど、そもそも魔力ってなんなんでしょうか？」

「……知らん」

「へ？」

「知るわけが無いだろう。
オレは物理学者だぞ？
暇潰しに魔術の本くらいは読んだこともあるが、そういったオカルトは完全に専門外だ。
そんな事はアルにでも聞いてくれ」

「ダメですよ、教授。
なんとかして解明しないと、このコーナーの存在意義が危ぶまれます。
それにこのお話は、一応魔導“科学”っていうタイトルが付いてるんですから、ちゃんとＳＦっぽい解釈も付けないとダメじゃないですか」

「うちの場合、ＳＦのＦはファンタジーだろ？
律儀に拘る必要も無いとは思うが……。

まあ、仕方ない。
それならば、適当なところから推論を立てるとするか」

「はい、教授！！
久しぶりの講義をお願いします！！」

「結構。

魔力……。

まあ、力（りょく）って付いてるくらいなんだから力（ちから）なんだろう。

それでは基本的なところから確認するが、そもそも物理学における“力”とはなんだ？」

「はい！！　ズバリ、パワーです！！」

「……聞かなかった事にしてやる。

いいか、物理学において“力”の定義とは、“物体を変形させたり運動の状態を変えたりする原因となるもの”とされている」

「えーと、はい。

高校の教科書の初めに書いてあるあの定義ですね？」

「そうだな。

抗力、張力、電力、磁力、まあ一口に力と言っても様々な種類があるのは知っての通りだと思うが……、

さて、しかし現代物理学においては、自然界に存在する全ての力は、突き詰めればたった４種類のみで説明出来るとされている」

「魅力と、体力と、知力と、あとは財力でしたっけ？」

「……その四つがどうやって“物体を変形させたり運動の状態を変えたりする原因”になるんだ？」

「はい！！　まず魅力は……」

「いい！！　説明しなくていい！！

……次に進もう。

いいか、４つの力とは、重力、電磁気力、強い相互作用、弱い相互作用のことだ。電気力と磁気力はかつては別物とされていたが、現在では同じものだという事が分かっている」

「……へ？

あの、重力以外あんまり見かけないんですけど。

本当にそれだけなんですか？」

「そうだな、では何か力の例を上げてみてくれ」

「財力！！」

「……物理的な力で頼む」

「えーと、抗力とか、ですか？」

「それならいいだろう。
抗力とは物体に力を加えた時に、物体から押し返される力の事だったな？
さて。それでは、そもそもこの抗力とはどこから来るのかを考えてみよう」

「えーと。押し返す力ですから、壁とか机の中から、ですよね？」

「そうだな、つまりは物体の中からだ。
ところで全宇宙の物質は、全て原子という基本単位から構成されている。
つまりは膨大な数の原子どうしが結合する事によって物体を形作っている訳だ。
さて。それでは、物体を構成する力とはなんだ？」

「あっ。なんか昔、化学で習ったような気がします。たしか、えーと、電子がどうとか……」

「そうだ。
全宇宙のほぼ全ての物質は、原子が持つ電子や陽子が電気的に引き合う事で結合していると言えるな。
つまり、抗力の元は電磁気力だ。

手が壁に減り込んだり、足が地面に埋まっていったりしないのは、壁や地面を構成する原子が持つ電子が、手や足の電子と反発しているから、とも言える」

「うー……。
ちょっと混乱してきました……。
え、えーと、つまり。わたし達が普段言ってる“力”っていうのは、その四つのどれかが化けてる物、ってことなんですか？」

「そういう解釈でもいいだろう。
……だが、まあ。そう難しく考える必要も無いと思うけどな。
この話は“魔導”科学っていうタイトルがついてるくらいだし、オレもそこまで深く“科学”について触れるつもりは無い」

「……。
（十分重いんですけど……）」

「さて。ではいよいよ、魔力の正体について考察してみよう。
魔力も“力”である以上は、上記の四つの力のどれかに分類されると考えるのが自然である。
可能性を探る為に、先ずは現在までに判明している魔力の性質を列挙してみよう。

・星の内部から出てくる。
・図形を描くと集積できる。
・“濃密”になると“視認”できる。

・精霊の餌になる。
・使うと火が起きる（射程１０m以上？）。
・使うと物が飛ぶ。

……カオスだな」

「えーと、要約すると……。
濃密で、中から出てきて、熱い、美味しい物……、
あれ？　食べ物なんですか？」

「……まあ、アレだ。
一つ一つ検証していこう。
先ず、魔力は明らかにマクロな世界で働いているという点に注目する。強い相互作用と弱い相互作用は原子核のようなミクロな世界でしか顕著な働きを見せない力だからな。我々の世界の常識に則るのであれば、この時点で、魔力の正体は重力か電磁気力のどちらかであると言えるだろう。
……まあ、集まったり火を起こしたりしている時点で重力ではありえまいから、残るは電磁気力しか無いのだが」

「む～……。
ちょっといいですか？
重力は知ってますし、電磁気力……っていうのが電気とか磁気の力、っていうのはなんとか分かるんですけど……。
その、強いとか弱いとかいうのは何なんですか？」

「そうだな。

あまり馴染みの無い力かもしれないので、ここで簡単に説明しておく事にする。

先ず強い相互作用とは、原子核を作る力の事だ。
原子核が陽子と中性子から構成されている事は知っているだろう？
しかし陽子同士は、正電荷を持っている為にお互いに反発する。それならば、原子核として原子の中央に固まっているのはおかしい。
クーロン力による反発で、原子核は崩壊してしまう筈だ。つまり、原子核が原子核として存在する為には、クーロン力に逆らって陽子と中性子を固める程の強い力が無くてはならない。
これを強い相互作用と呼び、詳しい説明は省略するが、原子核の様な狭い領域でしか働かない力だ。

――というか、強い相互作用が原子核の外にまで働くのなら、全原子の原子核は次々に固まって団子になってしまうから、まあ原子内でしか働かない力だというのは納得してもらえると思う。
よってこれは、我々が普段目にする事はまず無い力だ」

「えーと、陽子と陽子がプラスとプラスだから、お互いに反発して、だからソレをくっつける為には、もっと強い力でギュッと固めなくちゃならなくて……。
なんとなく分かったような、分からないような……」

「まあ、なんとなくでいい。
因みに余談ではあるが、素粒子物理学の世界では、力とは究極的にはゲージ粒子の交換によって生じるものであるとされ、強い相互作用は中間子の交換によって媒介されるのだが、実は中間子自体がゲージ粒子なのでは無く、クオーク同士を結びつけて中間子を構成し

ているグルオンこそが強い相互作用の源であるとここでは述べておこう」

「……。

……へ？」

「さて、次に弱い相互作用であるが、これはβ崩壊を起こす力だ。これは簡単に言うと、原子の種類を変える力であり、中性子を陽子と電子、及び反ニュートリノに変えるβ^－崩壊と、陽子が中性子と陽電子、及びニュートリノに変わるβ^＋崩壊がある。参考までにそれぞれの式を記しておくと、

β^－崩壊：

$n^0 = p^+ + e^- + \bar{\nu}^0$

β^＋崩壊：

$p^+ = n^0 + e^+ + \nu^0$

まあ、これも陽子とか中性子とかのスケールでの話であるから、当然我々が普段目にする事はまず無い。因みにウィークボゾンによって媒介される力である。

また参考までに述べておくが、電磁気力は光子（フォトン）によって媒介され、重力は重力子（グラビトン）によって媒介されるとされている。

まあ、グラビトンは現時点ではまだ見つかってはいないのではあるがな」

「……」

「……どうした？
何故、そんな釈迦みたいな目でオレを見る？」

「あのー……」

「ん？」

「今回って、たしか“魔力”に関する講義でしたよね？」

「だから魔“力”に関する考察を続けているんだろう？まあ、要するに、取り敢えずこの2つの相互作用は魔力の正体では無いだろうという事だ。
核力については理解出来たか？」

「……。
（や、ヤブヘビでした……）」

「理解出来たなら続けよう。
さて、魔力が電磁気力であるとするのならば、その性質の幾つかに説明を付ける事ができる。
例えば“見える”という性質についてだが、見えるというのは光が我々の網膜上で像を結び、それを脳が認識した時に初めて起こる現象だ。

光とは電磁波であり、電磁気力を媒介する素粒子とは光子であるから、魔力が見えるというのは、少々強引ではあるが一応のところ納得できる。
光は熱源から発生するものであるから、星の内部にマグマでもあれば十分に“星の内部から出る”し、本文中に記された“星”というのが恒星であるとすればなお無理が無い。それに、太陽電池の様な器具を用いれば“集める”事も出来るだろう。
……まあこの場合、魔力の正体は電磁波だという事になるが」

「えーと。それじゃあ、魔力っていうのは光で、魔術っていうのは太陽光発電みたいなものなんですか？」

「魔力が純粋な電磁波だというのならばそれでいいのかもしれないな。
精霊の餌になる……というのは精霊とやらを実際に見てみなければ分からないが、そいつらが葉緑体でも持っていれば解決できるし、エネルギーを十分に高めれば、空気をプラズマ化して球電を作る事も出来るかもしれない。火炎魔法の火球がプラズマの球である、というなら多少は納得だしな」

「ほへ～、なるほど～……。

……あれ？　ちょっと待って下さい。
一番最後の、“使うと物が飛ぶ”っていう性質はどうなるんですか？
懐中電灯の光を浴びて吹っ飛ぶ本とか、ちょっと見た事無いんですけど……」

「“光で物は動かない”。
なるほど、君はそう主張するわけだな。
いい事を教えてやろう。
実は光の圧力を推進力に変える道具が、既に開発されている。
ずばり、ソーラーセイルだ」

「ソーラーセイル？
なんか、ポケ○ンの必殺技みたいな名前ですけど……」

「安心しろ。
草タイプ最強の技とは無関係だ。
そうだな。先ず初めに述べておくと、セイルというのは帆の事なんだ」

「帆……？
ヨットとかのアレですか？」

「そうだ。
だがここでポイントとなるのはだな、ヨットは空気分子の運動量を受けて水上を駈けるが、ソーラーセイルは太陽光の運動量で宇宙を翔けるという点だ」

「太陽光の……運動量、ですか？
なんか、あんまり聞かない言葉ですけど……」

「まあ、光子には静止質量が無いからな。
高校で習う運動量といえば質量と速度の積であるから、確かに質量の無い粒子が運動量を持つというのは不可思議に感じるかもしれない。
だがアインシュタインの光量子仮説以降、光がｈｖ／ｃ（ｈ：プランク定数、ｖ：振動数、ｃ：光速度）の運動量を持つという予想はコンプトン効果の実験によって裏付けられている」

「……。

……へ？

コンプ……なんですか？」

「まあここでは、光にはごく僅かではあるが、物を動かす力があるとだけ覚えておけば十分だろう。

なんにせよ、魔力が純粋な光子の塊だった場合、本とか服とかの物体を飛ばすには、ソーラーセイルの原理が一番単純だろうと思っただけの話だ」

「光……、ですか……」

「ああ、光だ。

よし、それでは計算してみよう。
アルは本を飛ばしていたが、ここでは話を簡単にする為に、本を空中に浮かせる際に必要な光量を算出する事にする。
さて、ここで質問だが、物体を空中に静止させる為にはどうすればいい？」

「はい！！　持つとか吊るすとか、とにかく重力に負けない何かで固定するといいと思います！！
えーと、確か。物体に働く力の総和が０になった時に物体が静止する、って教科書に載ってた気がします！！」

「古典力学的に言えばそうだ。
以下、話を簡略化する為にその解釈で進める。
今考えるのは重力のみであるから、光が鉛直方向に本に加える力が重力と釣り合った瞬間、本はめでたく空中に浮ける事になる。
ここでは仮に、アルが飛ばした本の重さを４００ｇ、ページの面積を０．０２５ｍ＾２としておこう。
本は表紙を翼代わりにして飛んでいたというのだから、おそらくはページが開かれた状態で浮いたと考えられる為、光を受ける事のできる面積は倍の０．０５ｍ＾２となる。４００ｇの物体に働く重力の大きさは約４Ｎであるから、０．０５ｍ＾２の面積に働く光圧が４Ｎを超えれば本は宙に浮く事ができる筈だ」

「……？

はい……？」

「光圧の大きさは、放射が物体に完全に吸収される場合には、エネルギー流束密度を光速で割った値になる。本を飛ばす時の光の仕事率を求める為にはエネルギー流束密度に面積をかければいいから、エネルギー流束密度が分かれば仕事率も算出出来る計算だ。

エネルギー流束密度をｐ、光速をｃ、本が光を受ける面積をＳとすると、

ｐ？Ｓ／ｃ＝４．０（Ｎ）という式が成り立ち、

ｐ＝４．０×３．０×１０＾８／５．０×１０＾－２

＝２．４×１０＾１０（Ｗ／ｍ＾２）となる。

これに本の面積をかけると、

２．４×１０＾１０×５．０×１０＾－２＝１．２×１０＾９（Ｗ）

つまり、４００ｇの本を浮かせる為に必要な光の仕事率は１２億Ｗとなる。

……って、待て。

１２億Ｗだと？」

「じゅうにおく……わっと？」

「……大体予想はしていたが、これはまた凄まじい数値が出たものだな。そうなると、たった一冊の本を飛ばす時に起きる問題は……。

……って、どうした？
なぜ、そんな死んだ魚の様な目をしている？
まあ、確かに衝撃的な数値ではあるが……」

「衝撃的なのは、魔法の解説で数式使う教授の頭だと思うんですけど……」

「……なんか言ったか？」

「い、いえ、何でもないです！！
そ、それよりですね、その、１２億ワットって、具体的にはどの位の数値なんですか？
えーと、すごく大きいっていうのは何となく分かるんですけど……」

「……地球での太陽光のエネルギー流束密度が１３７０（Ｗ／ｍ＾２）だから、その８７５９１０倍の明るさの光が必要だ、って言えば分かるか？
スタングレネード８５０００発分の光量で、日本の総電力量の１００分の１に当たる」

「きゃーっ！！
たった一冊の本を飛ばすだけで大惨事に！？」

「こんなモノを見たら人間なんか即失神するし、本なんか飛ぶどこ

ろか燃え尽きるだろうな。

……いや、待て、

これだけでは終わらない。

これは、単に本を浮かせる為に必要な光量に過ぎなかった筈だ。仮に本が鉛直方向に対して４５。傾いた状態で、面に垂直に光を浴び続けるとしても、これを飛ばすには上記の計算の少なくとも3倍以上のエネルギー流束密度が……、

いや、まだだ。

本文によると、本は鳥の様に“羽ばたきながら”飛んでいたというではないか。羽ばたくとは本を閉じる動きに他ならないから、ページが受ける光子数が減ってしまい、かえって飛ばし難くなる。

これだけでも無駄なエネルギーを使っているっていうのに、更に“少女の上を旋回”してから“少女の手元に収まった”って言ってるぞ。

ソーラーセイルは原理的に光源から遠ざかる方向にしか進めない筈だから、旋回できたっていう事は、スタングレネードの８５０００倍の明るさの光源が、可燃物だらけのあの屋敷の中を動き回ったっていうのか？

いや、８５０００倍ではまだ足りない。ソーラーセイルは通常、宇宙空間にて使用されているが、あの部屋には明らかに空気があった。当然光は拡散されるから、ロスした分を補う為には更に眩しい光源が必要になるし、そもそも今計算したのは本のページが受ける光の強さに過ぎないから、光源ではさらに想像を絶する程の明るさが……」

「む、無茶苦茶じゃないですか～っ！！

考えれば考える程、本なんか自力で取りに行った方が楽ですよ～っ！？」

「……流石にコレは無いだろう。
と、すると、アルはどうやって本を飛ばしたんだ？
太陽電池で発電でもして、電磁石の生み出した磁界の中をリニアモーターカーみたいに飛ばしたのか？
いや、そうなると本や服にも仕掛けをしなくてはならないし、何よりあの馬鹿デカい家全体に磁界を作るとしたら、それはそれで物凄い電力を食うだろう。やっぱり自力で取りに行った方が楽だ」

「はい！！　質問です！！
そもそも、あの世界に電磁石なんてあるんでしょうか！？」

「知らん。だが、他に説明のしようも無いだろう。
大体、上記の全ての条件を満たす力など、少なくとも我々の宇宙には――、

……待てよ。よく考えるとオレは、魔力の重要な性質を一つ見逃していないか？」

「……へ？　あっ！！」

教授には効かない！！
（教授の時空には無い）

「……」

「……」

「……なるほど、そういう事か。
ならば魔力とは、我々の宇宙に存在する４つの力とはそもそも違う力であると考えた方が良さそうだな」

「スゴいです、教授！！
流石です、教授！！
道路標識とか制限速度とか、全部無視して突っ走った挙句、着いてみたら目的地も間違えてるなんて、きっとなかなか出来る事じゃないです！！」

「そう言うな。
試行錯誤は科学の醍醐味だろう。

さて、だがそういう事ならば話は速い。
魔力を第五の力であると仮定して、それを媒介する素粒子を仮に霊子（フォン）とでもしておこう。以下はその上での仮説を述べるとする」

「霊子？
えーと、それを仮定すると、魔法が上手く説明出来るんですか？」

「……いや、あまり上手くはない。
新粒子の仮定っていうのはな、素粒子物理学においてはある意味“反則”なんだ。
新粒子さえ仮定してしまえば、どんな自然現象でも説明出来てしまうからな」

「……へ？
それって、便利なんじゃないですか？」

「便利だが“オッカムの剃刀”に抵触するんだ。
湯川秀樹博士の中間子論が初期に敬遠されたこと然り、彼のヴォルフガング・パウリは中間子論を思い付いた学生の論文を、“辻褄合わせに勝手な粒子を生み出すな”と言って却下したなんて噂もあるくらいでな。
今回は明らかにオレ達の住む時空には無い力であると明言されている為に、遠慮無く新粒子として仮定させてもらうが、実験で実証するまでは文字通り幻想（ファントム）にすぎない。
……まあ、エーテルみたいな物だと思って聞いてくれ」

「えーと、要するに、
“自信無いから、あんまり信じすぎるなよ”
――って事ですか？」

「……まあ、平たく言えばそういう事だ。

さて。ここでは取り敢えず、魔力を用いて本を浮かせる事を考えたい。
先ほどの考察より、物体を質量の無い粒子で浮かせるのは非常に困難である事が分かった。魔力という“力”を媒介する以上、霊子はゲージ粒子であり、ゲージ粒子には質量が無いから、やはり魔力を直接用いて物体を浮遊させるのは困難であると予想できる。

よってここでは、あえて逆転の発想で行こう。
つまり魔力が重力と釣り合う程の力を生み出しているのではなく、魔力が重力の方を弱めていると考えてはどうだろうか？」

「じゅ、重力キャンセル装置！！
なんか、いきなりＳＦっぽいお話が出てきました！！」

「まあ、確かにＳＦっぽい理論である事は否めないが……。
だが、そこまで突拍子の無い話でも無いだろう。
素粒子物理学では、重力は重力子の交換によって生じると考えられているが、霊子にこの重力子の交換を阻害する働きがあるとすれば重力は弱くなる筈だ。

魔力の働いた物体には霊子が蓄えられ、重力子を吐き出さなくなるのかもしれない。
仮想霊子で満たされた場を仮に“魔力場”とした場合、強い魔力場では重力子の交換が鈍くなるのかもしれない。
或いは弱い相互作用の様に、重力子を何か別の粒子へと崩壊させてしまう働きが、魔力にはあるのかもしれない。

現時点ではどれも仮説の範疇を出ないが、そういった新粒子がこの

世界に存在するとすれば、物体を浮遊させる魔術も或いは可能となるかもしれないというだけの話だ」

「えーと、よく分からないんですけど。つまり今回の結論は……」

「うむ」

“魔力とは、この世界固有のゲージ粒子・霊子（ファントモン）によって媒介される第五の力である。
飛行魔術の際には、なんらかの方法によって重力子の交換を阻害し、重力を弱める働きをしていると考えられる”

「まあ、こんな所で手を打ってくれ。
火炎魔法などのメカニズムについては、機会があれば考察しよう」

「あう～……。
異世界ファンタジーの解説とは思えないですよ～……」

――――――

「はい！！　それでは今回のアイアイ★こらむはここまでです！！
なんだか物凄く電波な内容になってる気がします！！
ぶっちゃけ1ミリも理解不能です！！」

「……いや、お前はわからなきゃ駄目だろう。
一応、オレの教え子じゃなかったのか？」

「あう～……、それはそうなんですけど……。
教授のお話、完全に作者のキャパを超えちゃってるんですよ～……。
作者も絶対わかってないです」

「……？
よく分からんが、オレがおかしいのか？」

「はい！！　ぶっちゃけて白状しますと、朝マガの理論とか計算とかは、全部相方の理科マニアに丸投げしちゃってるんです！！
一応作者も目を通したりはしてますけど、全然理解出来ないんで殆どコピペ状態で……。
そ、そんなわけで、作者に質問とかしても、絶対なんにも分からないですよ？」

「……。
（誰に言ってるんだ？）

まあ、それはいいとしてだ。
終わったっていう事は、オレはもう帰ってもいいんだよな？」

「……。
（じと～～……）」

「……なんだ、そのあからさまなジト目は」

「……べつに、何でもないです。
ただ、帰るって、アルちゃんの家に帰るって事なんだろうな～、って」

「？
いや、帰れるものなら地球に帰りたいが、流れ的にそれは無理だろうしな。
……何か、含むところでもあるのか？」

「――――っ！！
あ、あるに決まってるじゃないですか！！
教授、自分の行動を忘れたとは言わせませんよ！？
なんなんですか！？
なんで初対面の女の子に、あんなにセクハラしまくってるんですか！？
なんでわたしには何もしないんですか～っ！！」

「待て待て待て待て、ちょっと待て落ち着け！！
何を言ってるかがサッパリ分からんが、とにかく先ず前提を確認し

たい。
そもそも、女の子の定義とはなんだ？」

「……普通に、子供の女性の事じゃないんですか？」

「そうだ。
そして女性というのは、ホモサピエンスの雌性体にのみ使用される単語であったはずだろう。
あそこは異世界なんだから、アルはホモサピエンスではあり得ない。
つまり、アルは女の子でも何でもないじゃないか」

「む～……」

「……どうした？」

「その割には教授、アルなんて愛称で呼んでるじゃないですか。
名前が覚えられないから、って言ってましたけど……。
教授、わたしの名前を言ってみて下さい！！」

「えーと、相……、あい……」

「相川　愛です！！
中学の時のあだ名はアイアイでした！！

尻尾の長いお猿さんでした！！」

「あーっ！！　分かった、分かったよ！！
覚えりゃいいんだろ！？

えーと、それじゃあ……、
……愛？」

「はう……！！」

「……どうした？」

「も、もう一度、言ってもらっても、よろしいでしょうか」

「――？　愛？」

「も、もうちょっと、囁くような感じでお願いします！！」

「……。
愛……」

「はう……っ！！」

「……大丈夫か？　頭」

「だ、大丈夫です！！
い、いえ、ちょっとダメですけど、やっぱり大丈夫です！！
で、でもでも、やっぱり今は講義なので、ちゃんと相川って呼んで下さい！！
そ、それでは、サヨナラです！！」

「……覚えてたらな。
（それが何度も呼ばせたヤツのセリフか？）」

１０．　アイアイ★こらむ？　魔力ってな～に？（後書き）

えーと、その……。
いかがでしたでしょうか。
た、たまにはこういうノリもいいですよね？　ね！？

はい。今更ですけど、読者の皆さんの反応にちょっぴり不安を覚えちゃったりしてます。もしかしてコレ以降、ついに愛想を尽かされてユニークアクセス数がパッタリ、なんてことは……。

……。

は、はい、やめましょう。嫌な想像はやめましょう。
えーと、取り敢えず、折角他国のお姫様とか出ましたし、折角のバトロワ設定だったりしますし、次の１０話くらいでバトルとか入れてみたいな～と思ってます。
いえ、あんまりバトルとか書いたこと無いんで、文章力にそこはかとない不安を感じたりもしてるんですけど……。
と、とにかく、これからも朝マガをよろしくお願いします！！

11．異次元生命体が起床時に示す習性の観察と生物史における味覚の重要性

起床鳥（グリンカムビ）の鳴き声が、本の海に木霊した。
数多の真円が連なる、前衛芸術の様な紋様が描かれた床。
その上に設置された、足元の魔法円とは不釣り合いなくらいに家庭的なベッドの上。

「ん……」

天蓋の小窓から差し込む青白い日差しをその身に浴びて、真紅の少女は小さな呻き声を漏らした。
寝起きで上手く開かない目を擦りながら、うーん、と大きく伸びをする。
可愛らしくも欠伸などを零しつつ、少女はゆっくりとその上体をベッドから起こした。

「ふぁ……。
……うん、よく寝た」

爽やかな冬朝の空気に細やかな幸せを感じながら、そんな自己分析を誰にともなく呟いてみる。
まだ少しだけ霞が掛かった頭で、少女はゆるゆると辺りを見回した。
――辺りには、見慣れた朝の景色が広がっている。
少々埃っぽくて、本の山に埋もれた、いつも通りの図書館であった。
……いや、まあ。焦げたりとか倒れたりとか吹き飛んだりとか、

よく見ると多少の違和感があったりするけれど、概ねいつも通りの光景だと言っていいだろう。
“断熱黄銅”でコーティングされた床は天蓋から差し込む蒼い朝日を反射していつも通りの清々しい景色を演出しているし、ベッドの隣に視線を移すと、脱ぎ散らかしたローブや帽子が、律儀にも昨夜のままで片付けて貰える時を待っていた。

「……」

脱ぎっぱなしの衣服を見て、何かを思い出した様子の少女。
なんとなく首筋に手を這わせると、少しだけベトつく感触が指先に絡み付いた。

「……ん、汗かいてる。
昨日、シャワー浴び忘れてたっけ」

どことなく、鈍い口調で呟く。
おそらく彼女は、あまり朝が得意な方ではないのだろう。
昨夜汗を流さずに就寝した事は思い出したようだが、その緩慢な動作からは、何故シャワーも浴びられない程に疲労困憊であったのかというその原因にまで意識が行っている様子は伺えない。
取り敢えず今の少女の頭を占めているのは、あり得ない程に物臭な就寝をしてしまった事に対する自己嫌悪と、一刻も早くその不快な汗を洗い流したいという衝動だけであった。

嫋やかな素足を、ゆっくりとベッドから下ろす。

指先が床に触れると、断熱金属特有の穏やかな冷たさが血管の中から登って来た。
少女は、フラつく身体で立ち上がる。
……と、瞬間。何故かズシリとした違和感を感じた。
まるで、全身の骨が鉛にでもなってしまったかの様な錯覚。
ハチミツの中を動いているかの様な、不自然な重さがのし掛かってくる。
不思議に思って肩を回すと、腕の神経が火傷したみたいに火照っているのが分かった。

「あれ……？
昨日、何かしたっけ？」

熟睡した筈なのに抜けない疲労に違和感を覚えたのか、少女は顎に手を当てて3秒程思案してみる事にした。
何かものすごく大事な、いや、致命的な事項を忘れている様な気がしたのである。

「うーん。何だったかな～……」

あちこちに散らばる瓦礫の山。
倒れた本棚に、不自然にも消し炭になった書物。
それらが何故か無性に気になって、なんとか昨夜の記憶を呼び起こそうと頑張ってみたのだが……。
どうしてなのか、まるで脳に霞でも掛かったかの様に思い出す事ができなかった。

そう。まるで、無意識が“思い出すな”とブレーキでも掛けているかの様に――。

「なんてね」

そこまで考えたところで、少女は小さく首を振った。

「気のせい気のせい。
あたしが思い出せない事なんて、どうせ大した事じゃないんだから」

まあ、気になることは気になるのだが、思い出せないのだから仕方ない。
少女は取り敢えず、その違和感を暫く放置しておこうという方針で納得した。
……物事とは大抵、放置すると悪い方向に転がって行く物なのではあるが。
とにかくこの時の少女にとっては、全身に纏わりつく不快な汗を洗い流す事こそが最優先事項だったのである。

少女の指が、キャミソールの紐を肩から外す。
ふぁさっ、という軽い音を立てながら、彼女の身体を包んでいた薄手の布地は簡単に床へと落ちた。一糸纏わぬ白磁の様な肌に、トレードマークの真紅の髪が美しいコントラストを描く。

「舞え。wynn 踊れ。wynn 在るべき場所に。eihwaz」

最早習慣の域にまで達した呪文を詠唱する。
ベッドの隣で少女の声を聞いた忠実(衣類)なる僕達は、満を辞して部屋の最果てへの帰還を許された。

彼らのダンスを横目で確認しつつ、少女はベッドから１０歩ほど前方に歩みを進める。
素足のまま白銀の床を探る様に歩み、足から伝わる床の温度が一気に下がった場所で歩みを止め、右腕を高く掲げた。
「形態変化（raidho）。伸長成長（beork）。汝の腹に火を贈る（cen）」
再度、少女が呪文を詠唱した時である。
ドクン、と、空間そのものが脈を拍った。
部屋の輪郭が歪む。
初めてその現象を見た者がいたとしたら酒の飲み過ぎや目の錯覚を疑う様な、視覚に違和感を抱かせる程の遠近の変動を伴って、部屋が形状を変えていく。
少女を中心とした床はペッコリと埋没を始め、金属製のタイルがすり鉢状に凹んでいった。
床の変化に伴って、天井の一部も変形を始めた。
植物がその蔦を伸長させる様に、白銀のチューブが少女の頭上へと降りて来る。
陽光に眩しく煌めくそれは、少女の髪に触れようかという高さにまで降下したかと思うと、先端がまるで向日葵の花の様に拡がった。
「求める（nied）。水よ（hagal）、降り注げ（lagu）」
――パチンッ、と指を鳴らす。
それが合図だったのだろう。
白銀の向日葵は、その花弁から銀糸の様な雨を降らせ始めた。
雨中へと手を差し伸べ、温度を確かめてみる少女。
指先から伝わって来る、芯が溶けるかの様な心地良さに、彼女は

ついつい息を漏らした。

「う〜ん……。

何か忘れてるような、何も忘れてないような……。

思い出せない事は大した事じゃ無い、ってよく言うけど。

……昔から、そういう事に限って大惨事を引き起こしたりするって言うし」

夜気に冷やされた指先を温めながら、呟いてみる。

次瞬、少女は胸に引っかかる小さな違和感を振り払うかの様にブンブンと首を振った。

もう一度腕に魔力を流し、シャワーの勢いを強める。

床で弾けた温水は朝靄の様に空気中へと拡散し、水の香りが朝の図書館に立ち込めていった。

冷えた身体を慣らす為に湯雨を掬って首筋に掛けると、柔らかい熱が身体を芯から温めてゆくのが分かる。

――ホッとする。

透明な水滴は少女の首筋から小ぶりな乳房へと滴り、彼女の体温に馴染みながら下腹部まで、肌理細かくも白い肌を伝ってゆく。

年齢特有の、瑞々しい少女の肌に、幾筋かの透明な線が描かれた。

徐々に身体が温まり、紅色が艶を増してゆく唇からは、細やかな安息によって吐息が漏れてゆく。

――やはり、先ほどから感じている不安は只の杞憂だったのだろう。

穏やかな朝の幸せを感じている少女は、今度は確信を持ってそう思い直す事が出来た。

心地のいい温水をチャプチャプと肌に救いながら、少女はうんうんと頷いた。

「すごいな。
どんな仕掛けになってるんだ？」

「ん？　シャワー（コレ）のコト？
この家はね、場所によって使われてる魔法金属の種類が違うの。
例えばここの“アダマス鉱”は、魔力を流せばある程度の成形が可能だから、その性質を利用して……へ？」

――なにか。
少女は、背後で聞き覚えのある声を聞いた気がした。

穏やかな朝の安らぎが、一瞬にして氷点下にまでその温度を下げる。
先ほどまで蕩けた様な顔でシャワーを浴びていた少女は、一瞬で何かの化石みたいに全身の筋肉を硬直させていた。
初めに思ったのが、“誰だろうか”。
……無論、そんなボケた思考は瞬時に脳内で即殺された。
――空耳、幻聴、夢、幻。
それらの希望的な、そして魅力的な仮説が次々に生まれてゆくが、産声を上げるとほぼ同時に、瞬く間に脳内で惨殺死体へと変貌していく。
色々な解釈に努めようと頑張る彼女の努力を嘲笑うかの様に、脳内では昨夜自分が何をしたのか、いや、何をしてしまったのかが悪夢の様にフラッシュバックを始めていた。

そこに至って漸く、少女は自分が“思い出せなかった”のでは無く“思い出したくなかった”のだという事実に気が付いた。
……主に、メルトダウンしそうな精神を保護する為に。

ギギギ……、と。少女はまるで錆びたブリキ人形みたいな動きで背後へと振り向いた。
その表情はまるで能面の様に固まり、思考という物を一切感じない。
きっと、半ば無意識だったのだろう。

「――随分と遅いお目覚めだな。
いや。もしかすると……。
アル。君は夜行性なのか？」

「……なっ！？」

少女が振り向いた先には、当然の如くアイツが居た。
本の山をソファー代わりにして座りながら、黒表紙の魔導書に眉間に皺を寄せて読み入っている。
――いや、読み入っていた。
アイツは少女が振り向くなり、本から顔を上げて少女と視線を交えてきた。
そして、アイツが居るのは、角度としては約４５。程上方。
……丁度、少女の全身がよく観察できる位置である。

「……“な”？」

何のつもりか。
アイツは不思議そうに首を傾げると、咄嗟に少女が上げてしまった驚声を反芻していた。
思案顔で顎に手を当てて、ブツブツと呟きながら何かを考え込んでいる。
やがて、まるで意を得たかの様にパンっと手を打った。

「ああ、なるほどな。この世界の朝の挨拶か。
流石に慣用句までは翻訳されないんだな。
……返した方がいいのか？」

「な！！　なな！！　なっ！！　な！？」

なんか、バカみたいな事を言い出した、アレ。
バカになりそうなくらい真っ白になった少女の頭では、アレが何を言っているのかはよく分からなかったけれど、取り敢えず、あのバカがナニか物凄くバカみたいな解釈をして納得している事だけは理解した。
――顔から火が出る、とはこういう状態の事を言うのだろうか。
いや。いっそのこと、本当に火とか出てくれないだろうか。
できれば、魔術じゃないヤツ。それでコイツ焼き殺すから。なんて、自分でもよく分からない願望が少女の脳内で暴れ狂う。
少女は湯温のコントロールをする余裕も無くなったのか、背後のシャワーにはグツグツという沸騰音が混じり始めていた。

そんな少女の心境など意にも介さず、アイツはコホンと咳払いをした。
なんか、右手を上げながら、少女に笑顔を向けている。
アイツが向けて来たその顔は、こんな笑顔も出来たのか、と少女がつい感心してしまう程に、本当に爽やかな笑顔だった。

「それじゃあ改めて。アル、“な”」
「なにを人の裸ジロジロ見てんのよっ！！
このドスケベ変態っっっ！！」

――とある日の朝一番。
爽やかな笑顔は熱湯に焼かれた。

――――――

「ヒリヒリする……」

感触は金属製。しかし光沢の無い、乳白色の、謎の物資にて作製されたダイニングテーブル。その席の背凭れに体重を預けながら、朝日　真也は苦痛の声を漏らした。
線の細い、涼やかな彼の顔立ちは、今では見るも無残に腫れ上がってしまっている。
彼は少女から手渡された“氷の魔法円”とやらが描かれた氷嚢で顔面を冷やしつつ、悲痛な声で呻いていた。

「……なによ。あんたが悪いんでしょ？
べ、別に、あんたなんかに見られて、も。
なんとも、思わないけど……。
い、いきなり声とか掛けられたら、驚くじゃない！！」

対する少女、アルテミア・クラリスは、トレードマークな赤髪を白いタオルで脱水しつつ、不満気な顔でそう答えた。
湯上りの為に艶っぽく染まった唇はへの字に結ばれ、紅潮した顔は普段に輪を掛けた仏頂面である。
そんな、妙に不機嫌そうな、それでいて悪びれた様子の見られない少女に内心では僅かな非難を浴びせつつ、真也は小さく息を洩らした。

「アル……」

顔面に押し付けていた袋を除けつつ、真也は少女に恨めしそうな視線を投げた。
少女は完全に明後日の方向を眺めながら、右腕を掲げて何かを唱えている。
それが終わると彼女の正面ではキラキラとした燐光が舞い、床がモコモコと盛り上がって少女の腰くらいの高さの火山型になった。
――無視されている様なので、真也は言葉を続けた。

「……話が違うぞ。
オレに魔法は効かないんじゃなかったのか？」

「第一工程まではね。
さっきのは第二工程だもん」

少女は指を鳴らしながら、目線も遣らずにそう答えた。
彼女の手元には、人間の頭が丸ごと入りそうな大きさの大釜が飛行してくる。
釜はクルクルと少女の腕の周りを旋回したかと思うと、上昇気流にでも乗ったかの様にフワリと浮かび上がり、火山の頂点へと設置された。

……何をしているのか気にはなったが、今は関係が無いので真也は先を促した。

「要するにね。純粋な魔術は無効化出来るけど、魔術で熱した水にはもう魔力が関係しないから有効ってわけ。

あんたの世界にも熱くらいはあったんでしょ？

“守護魔は守護魔が元々居た世界の理でしか傷つかない”。

逆に言うと、魔術運用の工程を増やして、“魔力無し”で守護魔が元々居た世界の理を再現すれば、傷つけるのは可能だってコト」

――ナニかの目玉。知らない生物の爪。顔のついた根っこ。

他にも何やらワケの分からない材料や液体を次々と釜に突っ込みながら、少女はそんな事実を伝えてくれた。

“ｃｅｎ”、という掛け声と同時に、火山の火口からは強い熱が発生し、大釜が火に晒される。

真也はその様子をあまり気にしない様に努めて、少女の説明を吟味しながら溜息を吐いた。

「なるほどな……。

つまり、殴られりゃ痛いし刺されりゃ死ぬってわけか。

まあ、昨日の内に大体分かってたけどな……」

「？」

余りにも疲弊し切ったかの様な、青年の声。

少女は小首を傾げている。

熟睡している少女に7度顔面を強打され、ベッドから蹴り落とされた挙句、寝るのを諦めて極寒の図書館で一晩中書物を読み漁っていた彼の徒労を彼女は知らない。

「……まあ、なんだ。
もし次があるのなら、オレの寝床は別に作ってもらうとしてだ。
取り敢えず、先ずは昨日の質問に答えてもらおうか」

「うーん……、もうちょっと待って。
それは今日、王宮で大臣が説明すると思うから」

釜の中身を竹箒みたいな道具で掻き回しつつ、少女はそんな答えを返した。
その様子を眺めながら、青年は小さく溜息を吐いて凝り固まった首を軽く回す。
――余談ではあるが。
釜の内容物はドロドロに溶け合い、今ではブスブスという煙を噴き上げる深緑色の粘液へと変貌していた。
何故だろうか。
辺りには、なんかザリガニの水槽みたいな臭気が充満し始めている。

「……わかった。今はそれで納得しておいてやる。
だが、それならせめてこれくらいは答えてくれ。
オレは、いつになったら元の世界に帰れるんだ？」

立ち込める強烈な臭気に渋面になりながら、真也は何とかそう尋ねた。
疲労と憔悴の色が濃い目線が、静かに少女へと向けられる。
少女は人差し指を口元に当てながら、何かを思案するような仕草をしていた。

鍋を掻き回す手が止まり、漸くその視線が真也へと向けられる。
彼には、少女の口元には小さな微笑が浮かんだ様に見えた。

「ゴメン。多分、帰れない」

――ゴポッ、と、鍋から煙が燻った。
緑色の粘液からは、紫色の瘴気がグツグツと沸き立っている。
真也には少女の佇まいが、昔読んだおとぎ話に出てくる、“子供を攫って食べる悪い魔女”の挿絵と酷く重なって見えていた。

――――――

「……。

……冗談、だよな？」

痛々しい長さの沈黙を経て、朝日　真也は重い口を開いた。
彼には同情する。
今の彼の心境は、いきなり見知らぬ国に攫われた拉致被害者のそれと変わらないだろう。
彼の涼やかなポーカーフェイスは、今に限っては見る者の憐れを誘う雰囲気を醸し出していた。
流石に、悪いと思ったのだろうか。
少女は、ちょっと気まずそうな表情になってアタフタしていた。

「え？　いや……。

えーと……、ね？
別に、絶対に帰れないって決まったわけじゃないのよ。
ただ、元の世界に帰った守護魔の前例が無いってだけで……。
いいじゃない別に。
あんたの実力次第じゃ、この世界では地位も名誉も思いのままなんだし……」

「生憎と、地位（その二つ）と名誉だけはとっくに手に入れた身だ。
……欲しくもなかったがな」

明らかに取り繕っている少女の言葉に、真也は不満を隠そうともせずにそう呟いた。
地雷を踏んだと思ったのだろう。
少女は“あはは、そうなんだ～。”なんて明らかに笑って誤魔化しながら、釜の中身を銀の器へと注ぎ込んでいった。

「……？」

無論、真也は納得したワケでは無かったが……。
しかし、ふとした疑問が浮かんだので彼は追及の手を緩めた。
器に緑の粘液を流し込んでいる少女。
……先ほどから努めてスルーしてはいたのだが、彼女は一体何をしているのだろうか？

真也は最初、彼女が作っているのは火傷につける傷薬であると解釈していたのだ。少女は自らを魔法使いであると名乗っていたし、また真也の常識から言っても、魔女が薬を作るというのは非常にイメージに符合するからである。

その基本的な解釈は、今の少女の行動を見ても変化してはいない。
していないのだが……。
それなら、何故２つの器に盛り付ける必要があるのだろうか。
少女は粘液を銀の皿らしき物に移すと、パチンと指を鳴らした。
次いでソレらの淵をトンっ、と押すと、二枚の銀の器は滑らかに空中を滑り、真也の目の前とその向かいの席に停止した。

「はい。冷めないうちにどうぞ」

……そして、こんなわけのわからない事を言う。
これではまるで、少女はこの産業廃棄物みたいな汚泥を、人体の正門たる口の中に入れろと言っているみたいではないか。

「……アル？」

抑揚の無い声が響く。
それは彼自身が、自分はこんな声も出せたのか、と、驚く程に低い声であった。
真也の目線の先には、１年間放置した学校のプールみたいな色の粘液がある。
ゴポゴポと、紫色の煙が絶え間無く、まるで毒の沼みたいに噴き出している。
不意に、ソレを吸い込んでしまった時には、強烈なアンモニア臭で頭痛が起きた。
――少々、誤解があったのかもしれない。
真也は記憶を整理しながら、たった今聞こえた謎の怪音波に対す

る仮説を必死になって練り上げた。

1．誤訳。
2．幻聴。
3．ただの鳴き声。

……3、だろうか。
1の可能性も捨てきれないが、この中だと、3の仮説が最も妥当では無いのだろうか。

「……？」

そんな真也の様子を、胡乱気な視線で見つめる少女。
ハッと口元に手を当てて、何かに気が付いた様な仕草でパンッと手を打った。
集中する様な仕草をしながら指を鳴らす。
――やはりこの物体には、何か別の用途があるのだろう。
真也は納得して頷いた。

「ゴメン、スプーン忘れてた。
来たれ（raidho）。
はい、これでいいでしょ」

「……」

カラン、という金属音が響いた。

真也の目の前には、何やらスゴク見覚えのある形の道具が飛んでくる。
少女は同じく自分の手元にも飛ばしたソレを手に取ると、ゆっくりとその粘液を掬い――。

小さな口に、流し込んだ。

「……」

――確定した。
カルチャーショック、とは、こういう物のコトを言うのだろうか。
否、そんなモノではあり得ない。
これはカルチャーでは無くバイオロジーの問題である。
敢えて言うなら、そう。“バイオロジカルショック”である。
そして、彼はこの時。漸くその事実の真の意味を思い知った。
つまりは、彼女が“異生物”であるというその意味を――。
天才物理学者、朝日　真也は、この瞬間様々な疑問に嵐の如く脳内を蹂躙される事になった。

――コレ、美味いのだろうか。
――否。美味い不味い以前の問題として、自分はこの世界の物を口にしても問題は無いのだろうか。

――仮に問題が無いとして、ある種の生物は人間にとっての毒物を主食とする様に、彼女達の主食が人体に有害である可能性は無いのだろうか。

どれ一つを取っても結論は出ない。

だが、どれ一つとして安全性を保証してくれる要素は無い。

否。通常、見知らぬ土地に訪れた旅行者は現地の食べ物には気を付けて当然なのだ。

しかもここが本当に異世界だと言うのなら、その警戒度は更に引き上げて然るべきだろう。

――そう。こんなモノは、食べられない。

少なくとも、それが人間としての常識的な反応である。

常識的には、間違いなくそれが正しい反応である。

だが――。

「く……」

思い出していただきたい。

朝日　真也は、実験の日の朝に朝食を摂り忘れていたという事実を。

彼は累計して半日以上もの間、食事はおろか水すらも一切口にしてはいなかったのである。

そんな彼に、曲がりなりにも“食事”として出された物を無碍にするだけの気力が、果たして残っているのだろうか。

真也は、少女を観察する。

「うーん……。
ちょっと、お塩入れ過ぎちゃったかな……？」

彼女はそんな事を呟きながら、プルンとした唇に銀色のスプーンを運んでいる。
小さな右手が傾くと、スプーンの中身は、トロリとその小さな口に滑り込んで行った。
――コクリ、と飲み込む。
白い喉元が小さく動き、彼女の口腔にあった食物が体内へと流れた事を知らせる。
少女は美しい真紅の髪を耳の後ろへと寄せながら、スプーンを再び食器へと沈めた。

「……？」

――食器に添えられた手が止まった。
不思議に思って視線を上げると、少女の目がこちらへと向けられている。
細められた翡翠の瞳と、視線が交錯する。
少女の口元には、ゾクッとするほど可愛らしい微笑が浮かんでいた。

「どうしたの？
冷めると美味しくないよ？」

紅い唇が、そう告げる。
真也はその鈴の様な声を聞いて、一度目を閉じた。
目を閉じて、冷静に状況を分析し直した。

――素直に言おう。
彼女は、非常に可憐である。

本質的に異種生命体であろう彼女を主観的にそう形容するのは些か問題なのだろうが、それを差し引いても、客観的に判断して、彼女の容姿は類い稀な程に魅力的だと断言できるだろう。
いや。仮に彼女がアイドルや女優で、これが映画の撮影か何かであったと説明されても、今の青年ならば信じてしまうかもしれない。
そして、目の前にあるのはそんな彼女が作った“手料理”なのである。
あんなにも可愛らしい彼女が自分の為に振る舞ってくれた朝食であり、そして他ならぬ彼女自身が、それを問題無く口にしているのである。

「……」

気が付くと青年は、スプーンを銀の皿へと沈ませていた。
感触を努めて意識しない様に気を付けながら、変わった色の“スープ”を掬い上げる。
――彼は思う。
もしかしたら、この“料理”は自分が思っている程酷くはないのかもしれない、と。

例えばそう、地球にも変わった風味を持つ食物は数多く存在していたではないか。
日本で言えば納豆が有名どころであるし、西洋で言えばチーズなどがそれに当たるだろう。

本質的に、人間とは初めて口にする料理には警戒心を抱くものなのである。

恐らくは、ラーメンやカレーライス、そしてコーラ等が一般に浸透するまでには、多くの人々がそれらを敬遠したのではあるまいか。

――あんなにも美味なモノにも関わらず、である。

そう。多くの場合、食わず嫌いは人生の損なのである。

それに、せっかく異世界とやらに訪れたのだ。

旅先で現地の料理を口にしないのも不粋というものだろう。

彼はそう思考した。

真也は息を止め、ゆっくりと、スプーン一杯分のソレを自らの口腔に流し込んだ。

「……」

――味覚。

その神秘の知覚の、生物史における重要性を否定する科学者はいない。

生物史において、味覚とは本来、食物の摂食可能性を判断する為に発達してきた知覚であるとされている。例えば人類史において、ある個体が腐敗した肉を摂取したとしよう。もしもその個体がソレを口にした結果“不快だ”と判断出来る味覚を持ち合わせていたのならばソレを吐き出すだろうが、もしも“美味だ”と感じ得る味覚を持っていたとしたら、その肉を腐敗物とは気付かずに食べ続けてしまう。そういった個体は、おそらくは感染症で命を落としたに違

いない。

つまるところ我々が現在、食物の美味い不味いを判断出来得る知覚を持ち合わせているという“奇跡”は、長い長い生物進化の過程において成された自然選択の一つの成果なのである。

――さて。そしてこの知覚は現代においては人々が食事という行為を楽しむ為に非常に重要であり、その素晴らしさを否定する人間はおそらくいないだろう。安全な食物を不自由無く手に入れる事が出来る立場にある我々は、日々の食事をより素晴らしく、そして美味な物にする努力に余念が無い。

“新しい料理の発見は、新しい星の発見よりも人類の幸福に貢献する”

フランスの美食家、ブリア・サヴァランが述べたこの言葉は、人類の味覚に対する賞賛と、美食に対する飽くなき羨望を最も簡潔に表した格言の一つであると言えよう。

さて。この様に、味覚とは本質的に人類にとって極めて重要な知覚であり、また人生を幸福にする上では欠かせない付加要素になり得る存在であるのだが、果たしてその認識が全ての時空において等しく適応出来る物であるか否か、という点を検証した前例は未だ無く、詰まるところ彼のこの一口は、人類の叡智の有効範囲を規定する程の哲学的な意味合いを持ち合わせた偉大なる、そして最も勇気ある挑戦の一つであるといえなくもなくもないとは必ずしも言い切れるような言い切れ無いような……。

――簡潔に述べよう。

「ウッぼヲ”エゲエエエエイイイアアアッツ?:?」

……青年は、初めて味覚の存在を呪った。

12.　魔力の蓄積によるアダマス鉱の体積及び強度の可変性を確かめる為の不

本の山を抜けた青年を出迎えたのは、見渡す限りの深緑の大地だった。
芝の香りが緩やかに漂う、広い広い天然の大地。
青々とした草本が、吹き抜ける風に揺らされて、心地のいい音色を奏でている。
高い高い群青の空には、遮る雲は一つも無い。
クークーという鳴き声を響かせて、豆粒みたいな鳥達が、時折空を駈けてゆく。
その内の一羽を目で追うと、眩い太陽の輝きに目が留まった。
青年の記憶よりも数段小さい太陽が、青白い閃光で世界を照らしている。

「驚いた……。
ここって、本当に異世界だったんだな」

見たことも無いくらい蒼い太陽に目を丸くしながら、朝日　真也は掠れた声でそう零した。
美しい景観に驚嘆すべきその顔は何故か蒼白で、まるで死人か病人の様なオーラを醸し出している。感情があまり顔に出ない質の彼にとっては、それは許容量を超えた不調の訴えであると言るだろう。

……原因は語るまでもないが、敢えて語る。
先ほどの汚泥である。

彼がこの世界にて初めて口にした、緑色の粘液。少女が生み出したその産業廃棄物は、僅か一撃で真也の意識を虚空へと吹き飛ばした。ネットリとした感触が絡み付く度に全身がガクガクと痙攣し、

味蕾が泣いて赦しを乞う幻影が脳内で明滅する程の地獄の具現。風味を鼻に逃がした瞬間には、あまりの刺激臭に走馬灯が見えた程だ。

無我の境地に至り、脳内で無尽蔵に生産されたエンドルフィンが半分悟りを開き始めた頃、魔女の毒液をなんとか胃まで押し込んだ真也。だが、涙目で顔を上げた瞬間に彼が見つけたのは、怪訝そうな表情で自分を見つめる少女の目線だった。

“言っとくけど。せっかくあたしが作った料理を残したりしたら、明日からご飯抜きだから”

ニコリ、と、妖精の様な微笑みで妖怪の様な事を告げた少女。

結局彼女は、有言実行で真也に“魔女のスープ・禁止薬物仕立て”を一滴残らず完食させた。

そう。あのヒトの頭部が入りそうな大釜の中身を、（二人でとはいえ）一滴残らず、である。

結果として今、彼は胃の中からこみ上げる地獄の瘴気に精神を蝕まれているのであった。

先程の青年の呟き、“本当に異世界だったんだな”には、未知の景観に対する感動のみで無く、“君、本当に異生物だったんだな”という不満と侮蔑が暗に込められていたりする。

そんな彼の心情を敏感に悟ったのだろうか。

少女はキッと、睨み付ける様な視線を青年に向けていた。

「……なによ。

あたしの料理、そんなに酷くなかったでしょ？

まったく。あんたの世界の人間って、普段何食べて生きてるのよ」

「そうだな……」

少女の問いに、真也は無意識に昨日の食事へと思いを馳せてみた。

・朝：卵掛けご飯。

・昼：菓子パン。

・夜：カップ麺。

……健康的とは言い難いが、まあ独身物理学者の食生活など、概してこんなものである。

たまに大学の食堂に行く事もあったが、真也は人混みというものが好きにはなれなかった。

なにしろ多勢の他人と一緒に食事など、考えただけでも飯が不味くなる。

結果として彼は、上記のお手軽メニューに冷凍食品とデパートのお惣菜でローテーションという、なんとも残念な食生活を送って来たのだった。

いや、まあ。

何故か、偶に弁当を差し入れにくる物好きなアホ毛もいた気がしたが……。

真也は、名前までは思い出せなかった。

何にせよ、今の彼にはそれが飽食であったとすらも思えた。

少女の様子を観察した限りだと、おそらくは先程の物体は、この世界の人間にとってはごく一般的な食事なのだろう。しかしちょっと考えてみれば、ライオンの食事をシマウマが摂取出来ないのは当然の事であって、どうやらこの世界の人間の食料は、自分の身体にはそぐわないらしいと彼は分析した。

おそらく、地球人（ホモサピエンス）とは必要な栄養素や身体の構造そのものが異っているに違いない。

「……」

さて。だがそうなると、この世界で真也がまともな食事にありつく事は絶望的だと判断せざるを得ないだろう。日本にいない生物の餌がスーパーに売っていない様に、この世界にいない生物の真也が摂取できる食料が一般に販売されているとは考え難い。

通常、人間が水のみで存命可能なのは1～2ヶ月が限度と言われている。肥満体型の人間ならばそれ以上も可能なのだろうが、不幸にして真也には余分な脂肪の蓄えはない。もしも今後も暫くはこの世界で過ごしていかなくてはならないと仮定した場合、栄養摂取という観点からすれば、彼はどうしようもない絶望感に打ち拉がれるしか無いのであった。

「この世界には、乗り物とかは無いのか？」

蒼白な顔で歩みを進めながら、真紅の少女へと次の問いを投げる。

少女は軽く肩を竦めてみせた。

「あるよ？

……でもね、あの家でそんなの飼えると思う？」

「……」

真也の意を汲んだ様な、少々先回りした答え。

その一言で、彼はこの世界における“乗り物”という概念をなんとなく察した。

おそらくは“動力機関”というものが開発されておらず、移動手段と言えば牛や馬なんていうレベルの世界なのだろう。

……せっかく“魔力”なんていう、不可思議な第五の“力”が存在しているのにも関わらず、それを用いて生活を改善しようという精神が全く見られない、“堕落”を許さない人々の情念に感心の意などを示しつつ、真也は死の軍行中の亡者の様な表情で溜息を吐く。

「はぁ……。大したもんだな。

異世界人を拉致出来るクセに、この世界はそんなに技術レベルが低かったのか？

恐れいったよ。これはまた、随分と方向性の偏った進化を遂げてきたんだな。

てか君。せめてお得意の魔術とやらで、何か移動に使えるのは無いのか？

例えば高速移動とか、瞬間移動とか……」

「あってもあんたには使えないでしょうが！！

大体ね！！　そんな大魔術を通勤に使える“先天魔術（ギフト）”持ってるのは、“氷の国”の暴君女くらいよ！！

いいから、文句言わずに歩くのっ！！」

いい加減怒気を孕み始めた少女の声を聞き流し、真也は大きく溜め息を吐いた。

ゴポッ、と。胃から込み上げた瘴気が鼻に抜けて、意識が遠退く。

一瞬だけ花畑が見えた様な気がしたが、気力だけでなんとか昏倒は思い留まる。

彼の目線の先には、街と思しき光の塊が緑の大地にポッカリと浮かんでいた。

目算、約２ｋｍ。

体内に蓄積した“毒”に侵された彼には、それがフルマラソンよりも遥かに果てしない距離に思えてしまう。

――乗り物、あったらよかったのになぁ。

真也は半ば現実逃避気味に、ブツブツとそう呟き続けるのであった。

―――――

結論から言うと、距離は２ｋｍどころではなかった。

街の周りに張り巡らされた、防壁らしき金属の壁。

それがあまりにも、馬鹿馬鹿しいくらいに大きすぎて、実際よりもずっと近くに見えていただけの話だったのである。

思い出すのは、東京都心のオフィス街だろうか。或いは、ニューヨーク州マンハッタンの摩天楼でもいい。ともかくとして真也の視界を覆うこの白銀の壁は、その向こうにそういった物がまるごと入っていても全く見えないだろうとすら思える程の、それこそ破格の巨大さを誇っていた。

具体的な比喩を出すのならば、万里の長城がオモチャに見えるくらいである。

……もしも少女の家が丘の上に立地しておらず、ここまでの道程が下り坂でなかったとしたら、彼は途中で力尽きていたに違いない。

真也は、フラつく足取りで正門へと歩みを進める。

白銀の防壁は、近づくごとになお一層の威圧感をもって彼を出迎えた。

門の中から吹き抜ける風に、街の熱気や人々の息遣いを確かに感じることができる。

その活気に急かされたかの様に、真也は門の敷居へと足を向けた。

周囲を軽く見物しながら、跳ね橋を超えて街に入ろうと足をかける。

――瞬間。近づいてきたのは、ガチャガチャという鋼の音。
不思議に思った真也が顔を上げると、時代錯誤な鎧姿が、ロングソードを構えて目の前に立ちはだかっていた。
どうやら、門番らしい。
真也の白衣が珍しいのか、門番は随分と訝しそうな視線を投げかけてきたが、少女が2~3言何かを話したかと思うと恭しく頭を垂れて道を譲ってくれた。
……余談だが。爽やかな笑顔に白い歯が光る、近年稀に見る程の好青年だった。

門の中には材質不明の石畳が続いていた。
路の両サイドに続く建物の群れは、一見すると石造りに見えるが、しかし良く見ると金属製である事が分かる。
様式も少々変わっており、全体像は中世ヨーロッパ風な印象を受けるのだが、細部を見るとやはり地球の物とは全く異なっているのが見て取れた。
――おそらく、この通りは商店街なのだろう。
殆ど全ての建物が看板を掲げ、人々は活気に満ちた様子で客引きをしている。
好奇心の赴くままに、真也は適当な店の看板を一つ読んでみたのだったが……。
オシャレな趣の、喫茶店風のその店の名は“ポーションバー・マーニ”。
結局、何の店なのかわからなかった。

車が無い事が影響しているのだろう。
まるで路全体を埋め尽くすかの様に、大通りには様々な人々が行き交っている。

子連れの母親、恰幅のいい老人、真也と同じ年頃の青年達。
皆が皆、一度は真也の異質な風貌に目を留めるが、隣にいる少女の姿を確認すると即座に道を譲り、会釈をしながらすれ違っていく。
いかにも柄の悪そうな坊主頭の男が頭を垂れた時には、流石の真也も目を丸くした。

「大したものだな」

感心した様子で、彼は呟いた。

先程の門番の、恭しい礼が思い出される。
この世界の警備体制など勿論知らない真也ではあったが、見るからに“異質な”服装の自分をやすやすと通す門番などいない事くらいは、物理学者の彼にも容易に想像がついた。
つまりそれを可能にした彼女には、それだけの知名度があるという事なのだろう。

「フン。当たり前じゃない。
言ったでしょ？　あたしは国一番の魔導師だって」

真也の目線を受けた真紅の少女は、自慢気に薄い胸を張っていた。

会話を続けている間にも、彼女が通る度に通行人がざわめいている。
まるで彼女を知らない人間など、この街には居ないとでも賛同するかの様に。
自分たちに向けられる視線と声が、真也にはまるで彼女を喝采している様に聞こえていた。

「ふむ……」

不意に、真也の頭には疑問が湧いた。
昨日からのやり取りで、彼は自分がこの少女との意思疎通が可能であるという事は理解している。そしてそれは、少女によると、彼が彼女の知識を借りているからなのだという。

だが。
それなら、この世界の他の人間の声はどの様に聞こえるのだろうか。
幸か不幸か先程の門番とは会話をせずに済んでしまったし、このあたりで一度意思疎通の可能性を確かめておくのもいいだろう。
彼は、軽い好奇心と共にそう思案した。

耳を澄ます。
意識を道行く人々の雑談へと向ける。
さて。果たしてその内容は――。

「うわっ、見ろよ。
アルテミア所長が男と歩いてるぞ」

「はぁ？　なにをバカな……って、うおっ！！
ま、マジだ、信じられねー！！
捕まえた男を鹿に変えて、犬の餌にするのが趣味だって噂じゃなかったのか？
よ、よし！！　お前、行って真偽を確かめてこい！！」

「どこの罰ゲームだよ！！
それで火達磨にされたヤツが何人いると……、

ヒッ!?　や、ヤバイ!!　こっち見たぞ!!」

「男?　雄性型のモンスターの間違いじゃないの?
ほら。あの娘、男なんか実験材料としか見てないって噂だし」

「どうせ儀式に使う生贄かなんかでしょ。
うわー……。あの人可哀想……」

「ママ。あのおにいちゃん、たべられちゃうの?」

「シッ、見ちゃいけません!!」

「……。

……アル?」

理解した。
全てを、問題無く理解する事が出来た。
なるほど。確かに彼女の知名度は、文句無しに凄まじいものがあるのだろう。
……危険物として。

少女へと目線を送る。
少女はフッ、と息を吐いていた。
口元が三日月型に緩んでいる。
右腕を、高く高く掲げている。

「命ず（ansur）！！」

少女が声を張り上げた瞬間である。
突如、民衆は脱兎の如く走り出した。
母親は子供を抱え込み、老人は杖を放り出して風を追い越し、若者は悲鳴を上げながら手近な店へと駆け込んでゆく。
――半径、およそ５ｍ。
一瞬にして取り巻きが消滅していた。

「ナニよヒトを怪獣みたいにっっ！！
あたしが誰かと並んで歩いてるのがそんなに不思議！？
誰が天変地異よ！？　だれが最終戦争（ラグナロク）よ！？　だぁれが惑星直列よっ！！　文句があるヤツは面と向かって言ってみなさいよバカーッ！！」

噴火したかの様な大音声が響いた。
フーッ、フーッ、と。体毛があったら逆立てそうな勢いで喚き散らす少女。
目を合わせる勇者はいない。
人の消えた大通りに、閑古鳥が鳴いている。

「……」

癇癪玉を落とした少女の様子を見て、真也が思い出したのは昨夜の初対面であった。
……成程。普段からあの暴れっぷりであったなら、民衆のこの態度もまあ納得だというものだろう。

自らを拉致した少女の怪獣ぶりを深く心に刻みつつ、彼は深々と嘆息した。

瞬間――。

「うっ……」

ゴポッ、と。忘れてかけていたあの瘴気が、胃の中で再燃した。

完全に気を抜いていた所での不意打ちであった為、急所を抉られたかの様に視界が一気に暗くなる。偏頭痛を起こし始めた頭を支え、真也はヨロヨロと、力無く道端にへばり込んだ。

……少女が、なんか人でも殺しそうな形相で睨み付けている。

「……どうしたの？」

「……いや、さっきの汚泥が」

「あたしの、料理が、ナニ？」

「……」

――殺される。

これ以上彼女の機嫌を損ねたら、間違いなくこの場で殺される。

半ば動物的な本能でそれを察した真也は、取り敢えずは暫し無言で項垂れる事にした。

「痛……っ」

硬い衝撃が、頭部に走った。
一瞬、殴られたのかと錯覚した真也。
だが、次瞬。目の前にボトリと落ちた小袋を確認して、どうやらソレを投げつけられたらしいと理解した。
ドチャリと石畳の上に転がった袋には、イヌとネコを足して2で割った様な動物のイラストが縫い付けてある。

「財布（ソレ）、貸しとく。
あたしは王宮に話をつけて来るから、あんたはその間、薬でもなんでも買って飲んでなさい。
終わったら、広場の噴水の前で待ってる事。
……無駄遣いは許さないからね？
あ～っ、もう！！　どいつもこいつもっ！！」

少女は癇癪を起こしながらそうまくし立てると、街の奥の方へズンズンと歩いて行った。
その後、彼女と等間隔で戻って来る人集り。

「……気遣いありがとう。
だが、それなら気付いてくれ」

小さくなっていくトンガリ帽子を眺めながら、真也はガックリと項垂れた。
――そう。少女は気付くべきだったのだ。
この世界の“食料”が摂取出来ないなら、おそらくは“薬”を摂取しようとも、彼は全く同じ末路を辿るだろうという事に……。

真也が大きく溜息を吐いたその瞬間――。

「おやおや、大丈夫かえ？」

彼の背後からは、皺がれた声が掛けられた。

――――――

顔を顰めざるを得ないほどに渋いその液体には、しかし想像よりも幾分ましな風味があった。あれ程身体を蝕んでいた瘴気がスーッと治まり、ミントの様な爽やかな芳香が鼻から抜ける。

――吐き気が風に溶けるかの様に消え失せて、爽快感が全身を満たす。

その嘗て無い程の気分の良さに、真也は目を丸くした。

「どうじゃ？　騙されてみるもんじゃろ？」

液体を真也へと手渡した老人は、剽軽に笑いながら“ん？　ん？”と真也に同意を促した。

真也は仕方なくといった表情で、肺の空気を吐き出しながら首を縦に振った。

――遡るは３０分ほど前である。

項垂れていた真也に話し掛けたこの老人は、それはもういかにもといった風貌の浮浪者だった。

ツギハギだらけのローブは薄汚れ、あちこちに染みが着いていたし、黒ずんだ白髪はイエティみたいに伸び放題で、雑草みたいな口髭は顎鬚と繋がって喉を覆っていた。
何らかの事故に会ったのかもしれない。
左眼は黒い眼帯に覆われていて、残る右目は鮮血の様な緋色をしている。
……それだけ人相が悪くなる要素を揃えているというのに、どことなく朗らかな印象を与える表情ができるのだから、まあ中々に稀有な顔立ちをしているとも言えるかもしれない。

無論。真也は初め、老人を相手になどしなかった。
浮浪者の相手をするだけの精神的余裕など無かったし、なによりこの老人の酒臭い息が、只でさえ限界値を突破しそうな真也の吐き気に追い討ちを掛けて来たからである。
……いや、もう。ホント風呂に入っていないとか歯を磨いていないとかいうレベルでは無く、全身の体液が酒で出来ているとしか思えない様な臭いだったのだ。
しかし真也が無視をしようとも、老人は後からグイグイとついて来た。

“これこれ、ちょいとお待ちよ”
“そう急ぐでない、若いの”

しまいには真也に走る気力が無いのをいい事に肩を組み始めたので、彼はとうとう観念して老人の話を聞く事にしたのである。
そして老人が謎の薬を手渡して来たのが、丁度5分ほど前。
無論。この世界の食物の危険性を身を持って熟知している真也は、当然の如くソレを飲む事を躊躇していた。
だが、待ち合わせの噴水の淵に座った所で老人が――。
“仕方ないのぉ。一人で飲めんのなら、口移しでもしてやろうか

ぇ？〟

……なんて恐ろしい事を言い出したのでとうとう観念し、今に至る。

まあ。結果としてソレは功を奏した様なので文句は無いのだが。

老人は暫しの間満足げに、青年の仏頂面をニヤニヤと覗き込んでいた。

傍らから立ち上る、頭痛を覚える程の酒の臭いに顔を顰め、青年はプイと顔を逸らす。

「……まあ、とにかく助かりましたよ。

まさかこんなに効く薬だとは思わなかったもので」

すっかり体調が回復した真也は、伸びをしながら無愛想な礼をした。

彼にしてみれば、この世界でも摂取可能な物質が存在したという事実の意味する所は大きい。そういった意味で、本音を言えばこの老人には感謝してもしたりないくらいではあったのだが――。

先程の人々の雑談から、彼は自分が異世界人である事は、どうやら一般には知られていないらしいという事が分かってもいた。

よって内心の感激を面には出さずに、そう言うだけに留めるべきだと判断したのである。

真也が一息ついてから視線を上げると、老人は好々爺めいた表情で彼の顔を覗き込んでいた。

剽軽な声で笑いながら、スッと右手を差し出している。

「いやいや、礼を言うのはこっちの方じゃよ。

なにせ、大事な大事なお客様じゃからのぉ」

「……は？」

不思議に思って、真也は視線を落とした。

老人の右手は、まるで何かを要求するかの様に、スッと彼の前へと差し出されている。

「１００フェオじゃ」

……そして、ナニか聞いた事も無い単語を口にした。

察するに、この国の通貨の単位だろうか。

「……爺さん。あんた、薬屋なんスか？」

「いやいや、わしゃ魔荷屋（まにや）じゃよ」

「魔荷屋？」

「まあ、何でも屋みたいなもんだと思っとくれ」

「……」

老人の説明はイマイチ要領を得なかったが……。

取り敢えず真也は、何やら薬を売りつけられたらしいという事だけは理解した。

ボロを着た灼眼の老人は、気さくな笑みで彼を見詰めている。

――真也は、冷静に状況を分析した。

まず自分に薬を手渡した老人は、曰く“魔荷屋”を生業としているらしい。
自分は、その老人から貰った薬を飲んだ。
そして事後承諾ながら、老人は今その代金を要求している。

さて。ところで今彼の手元にある財布は、少女から薬を買う目的で借り受けた物である。
確か、無駄遣いはするなと釘を刺されはしたが……。
しかし、まあ。ソレが胃薬ならば、彼女が承諾した内容と十分に合致するだろう。
購入する分には問題など無い。
ただ、薬をこの老人から買っただけだと考えればいいのである。

「どうぞ」

真也は少女から借りた財布を老人に手渡した。
まあ、問題は無いだろうと彼は思う。
確かに薬はよく効いたのだし、それ以上に、本来この老人には感謝をしてもし足りないくらいなのだ。
老人はホクホク顔で財布から１００フェオを抜くと、“まいどあり”なんてセリフを吐きながら財布を真也の手に戻し、悠々と去って行った。

「ふぅ……」

老人の後ろ姿が見えなくなった頃、真也は暇を潰す様に周りを見回していた。

どうやらこの噴水のある広場は、街の住民の憩いの場となっているらしい。

子供達は無邪気に広場を駆け回り、母親と思しき女性達は、ベンチや噴水の淵に腰を降ろして雑談に興じている。

――背後の噴水からは、涼やかな水の音が響いてくる。

乾いた空気を潤すその気配が、彼には只々心地よく感じられた。

こうして座り込んでいると、まるで休日の公園にでもいるかの様で、ここが異世界だというのが冗談だった様にすらも思えてくる。

……尤も。民衆の王道ＲＰＧみたいな服装に目を瞑れば、という条件付きではあるが。

真也が見た限りだと、どうやらこの広場は街のほぼ中心部に立地している様であった。

防壁の正門から続く、商店の立ち並ぶ大通りと、現在真也の背後に見えている巨大建築との丁度中間に位置している、町人達の社交の場。

切り立った山を背にしている巨大建築（あれ）が、少女の言っていた王宮なのだろうか。

その隣には、文字盤が２０まである時計塔が聳えている。

視線を下に戻すと、噴水広場の出入り口には一体の像が立っていた。

ブロンズ像、にしては光沢があり過ぎ、色が白すぎる、白銀の彫像。

靡いたマントと大きな帽子が印象的なソレの、モデルは果たして国王か、はたまたこの広場を作った金持ちか誰かなのか。

さて。その像の造りを遠目に眺めたところで……。

「……！？

待てよ？　そんなバカな！！」

真也の目が、突如として科学者の物に切り替わった。

――――――

待ち合わせの広場にて目当ての人物を発見し、アルテミア・クラリスは言葉を失った。

最初、彼女が感じていたのは不安だった。

待ち合わせに指定した噴水の広場に来てみると、何故かものすごい数の人集りが出来ていたからである。

もしかしたら、誰かが大道芸でもやっているのかもしれない。

“彼”を探すのは少々手間かもしれないな、などと思いつつ、彼女は“彼”を見つけようと人混みに分け入っていった。

次に、少女はそれが杞憂であった事を知った。

まるで、大道芸を見ているかの様な人集り。

しかしいつもの如く皆が“譲ってくれた”道を通って前に行くと、その中心に居たのが、あろう事か“彼”だったからである。

「……」

そして現在。彼女は言葉を失っている。

目の前で、何故か人々の注目を集めている、“彼”。

ホント。何故かは知らないけど、彼はなんだかよく分からない事をしていたのである。

「……フム。
これ程の強度の材質をどうやって……」

“彼”は、像の前に居た。
物珍しそうにアダマス像を撫でては、たまに確かめるかの様にコンコンと叩く。マントをめくろうと頑張ったり、髭を触ってあまつさえ引っこ抜こうと努力したりしている。
やがて人集りに気付いた彼は、一番近場に居た老人と何やら話をし始めた。
老人は困惑した様子だったが、彼はまるで気にした様子が無い。
やがて彼は半ば強引に老人の杖をひったくると、像の前にまで戻って来た。
そしてその杖を、大根切りよろしく大上段へと振り上げる。
……それは、もう。今にも全てを粉砕せんと言わんばかりに。

「……って！！」

考えるよりも先に、身体が動いていた。
臨界点を超えた少女の思考は、理性が結論を下すよりもなお速く足を動かし、小さな体を空中へと跳ね上げた。

――――――

「何を……」

聞き覚えのある声を聞いた気がして、青年は振り向いた。
瞬間。彼の瞳に映ったのは、視界の全てを覆う黒い、黒い布。

真っ黒な塊が何かを叫びながら、ものすごい速さで空中を飛んで来るのが見える。
彼は一度、不思議そうに首を傾げた。

「やってるのよバカーーーっ！！」

「へぶっっ……！！？？」

少女の華麗な飛び蹴りを右面に受けて、青年は交通事故みたいにぶっ飛んだ。
涼やかな顔は疑問符を浮かべたままに９０。傾き、地面を這う様に滑っていく。
――そして響く、ズザーッ、という摩擦音。
魔導師にあるまじきその威力に、辺りからは拍手喝采が巻き起こった。

「あ、アル！？
待て、ちょっと待て！！
いきなり何してくれてるんだ！！」

「何してくれてるんだはこっちのセリフよ！！
ナニ！？　何であんたはユミル様の像をぶん殴ってるわけ！？
なんかこの人に恨みでもあんの！？」

「そっちこそ、何の恨みがあっていきなり飛び……いや待て待て待て待て！！
ちょっと待て一回落ち着こう！！」

腫れた頬を摩りながら少女を非難する真也。

しかし彼女が追撃の用意を始めたので、必死で宥める事に徹し始めた。

スッと立ち上がり、ズンズンと像の方に歩み寄る。

「オレはこの像を調べてたんだ!!
これ、相当強度が高い金属で出来てるだろ!?
どうやって削ったのか考えてたんだよ!!」

像の髭を指差しながら、彼は少女に弁明した。

――そう。この像の材質は、物理学者たる彼でも見た事が無い程に強い金属だったのである。

勿論はっきりとした数値は分からなかったが、それでも、間違いなく青銅よりは強度が上だと彼は断言できた。

しかし像の造形は、材質の異常な強度にも関わらず非常に精緻に富んだものであった。

驚くべきは紙の様に薄いマントは靡いた様な形で固定され、髭の一本一本までもが針の様な細さで独立に切り離されている点である。

無論。鋳型を用いて鋳造しただけでは毛細な構造を一本一本分離するのはほぼ不可能なので、おそらくは概形を作成後に削ったのだろうが……。

現代科学の粋を用いても、ここまで細かく研磨するのは至難の技だろう。

「……削る?
何でそんな面倒臭いことしなきゃならないのよ?」

少女は、心底不思議そうに首を傾げていた。

「それじゃあ、やっぱり熱で溶かしたのか?

それとも、薬品を使えば変質する素材だとか……」

「だ～か～ら～。
何でそんな面倒臭い事しなきゃならないのよ」

少女は、またも首を傾げている。
今回は真也も同様であった。
削らず、溶かさず、強い金属を微細に加工する技術。
そんな夢の様な方法があるのだろうか？

「……まさかナイフで切り出した、とか言わないよな？」

真也の問いには溜息を返し、少女はローブの懐に手を忍ばせると、一枚の羽根を取り出した。
オレンジ色に輝くその繊維塊には、根元にインクの様な物が付着している。
所謂、“羽根ペン”と呼ばれる代物であった。
少女は地面にしゃがみ込むと、そのペンで石畳に円を描いた。
内部にちょこちょこと文字を書き込み、立ち上がって2～3歩下がる。
最後にオレンジの羽根を円の方に翳すと、石畳から燐光が舞い散った。

「解放（jara）」

「なっ！？」

――そして、真也は驚きに目を瞠った。
少女が呪文を唱えたその瞬間、ドクン、と、石畳が生き物の様に脈を打ったからである。

舞い散る燐光に祝福されたかの様に波打った石畳は、まるでベーキングパウダーを混ぜられた生地の様に盛り上がりを見せたかと思うと、次瞬には噴火する様な勢いで天へと突き抜け、オベリスクの様な棘柱となってその形状を固定した。

――少女の描いた、たった一つの落書き。

たったそれだけの行為によって、広場の路面は物理法則的に異常な変化を遂げていた。

「……分かった？

この街の物は建造物も、そこら辺の像も、みんな“アダマス鉱”っていう金属で出来てるの。

アダマス鉱は魔力を吸収すると縮んで、放出すると膨らむっていう性質があってね。

この“不死鳥の羽根ペン”には、魔力を魔法金属から解放する能力があるの。

だから、あとは術式とコントロール次第。

適切な図形さえ描き込めば、アダマス鉱は自在に変形可能ってわけ」

「……」

その説明を聞いて、彼が思い出したのは今朝のシャワーだった。

少女の唱えた呪文によって自在に変形し、伸縮した天井と床。

つまりはコレが、この世界では主流な“金属加工技術”だとでも言うのだろうか？

――バカげている。

真也は地面に膝を着いて座り込むと、たった今生まれた銀の棘をペタペタと触り、その感触をじっくりと確かめながら思考した。

――少なくとも金属加工技術に関して言えば、この世界は地球よりも上だ。

真也は言葉を失っていた。
しかしその目線だけは、まるでオモチャ売り場に立ち寄った子供の様に少女の持つペンへと注がれている。
嫌な予感を感じたのだろう。
少女は身震いしていた。
胡乱気な視線が、真也へと向けられる。

「……なによ」

「一本くれ」

「はぁ！？」

少女はあからさまに眉を顰めたが、真也はそんな事など一切気にせずに詰め寄った。
彼の涼やかな双眸は子供の様にキラキラと輝き、無邪気な筈なのに何故か危機感しか与えないという器用な雰囲気を醸している。
――そう。
この時の少女には未だよく分かっていなかったものの、彼は生粋の物理学者なのである。
未知の現象には、興味を抱かずにはいられない性分なのだ。

「頼む！！　アル、この通りだ！！
物理学者たるオレには、世界の神秘を解明する義務があるんだ！！」

「知らないわよそんなの！！」

「そこをなんとか!!
一本!!　一本だけでいいんだ!!
それ以上は何も求めないから!!」

「きゃっ!?　ちょ、どこ触って……は、放してよ!!
いい？　このペンは、王宮お抱えの彫像技師か、師範クラス以上の魔導師しか持っちゃいけ…な……い」

無論。少女は懇願する彼の要求を一蹴した。
否。一蹴“しようとした”、のだが……。
瞬間。現在の自分たちの構図に思い至って、少女はナニか薄ら寒い物を感じてしまった。
簡潔に述べると、跳び蹴りされて頬を赤く腫らした青年が、地面に張り付き、涙目で瞳をキラキラとさせながら、少女の脚に縋りついている状態である。
無論、真也が集めた取り巻きは先程のままで。
と、いうか。なんか騒ぎを聞いたのか、どう見ても明らかに人数が増えている様な気がする。

少女は、耳を澄ましてみた。

「おい。コレどうしたんだ？」

「痴話喧嘩らしいぞ？
さっき、アルテミア所長があの男に跳び蹴りかましたって」

「うわー、魔術も無しで鉄拳制裁かよ。
相当キてるな、今日は。

……で？　あの男を公衆の面前で、地べたに這わせて謝らせてるって？」

「うん。何したのか知らないけどさ。
所長、まだ許さないみたいだよ」

「ひーっ、エゲツねえーーっ」

「そもそも、あの人何者？」

「知らないけど、結構親密な関係なんじゃない？
さっき一緒に門潜ってるの見たもん」

「えーっ、マジ！？
所長、やっぱりSだったんだ」

「……」

背筋に、イヤな汗が、滴った。

「……ちょっと、シン？
ねえ、お願いちょっと立って？」

取り巻きの根も葉もない推測を聞いて、少女は真っ赤になりなが

ら目を伏せた。
青年は全く気付いた様子も無く、なおも深々と地面に張り付いている。
聞こえて無いのだろうか。
プライドとか、無いのだろうか。
少女は心の中で彼を詰る。

「頼む！！　そこをなんとか！！
……あっ、そうだ。
よし。これならどうだ。
もしも君がソレをくれるなら、代わりに一つだけ何でも言う事を聞こう。
手料理を残さず食えって言われても逆らわないし、もしもシャワーの時に……」

「わーーーっ！！　わーーーっ！？
ちょっ、シンッ！！　ストップストップ！！
――ってかそれ以上言ったらマジでキレるから！！」

一層騒がしくなり始めた雑踏を意識から排除して、少女は青年を引っ張り上げた。
おおー、などとわけの分からない歓声が聞こえたので、取り敢えず右手を掲げる少女。
取り巻きは蜘蛛の子を散らした様に去っていった。

「……くれるのか？
ありがとう。君ならそう言ってくれると――待て待て待て待て！！
何で拳を――へブッ！？」

「やるかバカァァアアアッ！！」

青年の顔が、左右対象に腫れた。

１３．　現代に普及したとある装身具の一般的な使用目的は異世界に於いても共通

その場所を訪れた者は、詩人であろうと言葉を失う。
それが銀の国最大の魔導研究所、ヴァルスキャルグを形容する際に最も頻繁に使用される比喩であった。
蒼い陽光を反射する外壁に、５４０の大扉が連なる偉容。
高層の渡り廊下によって王宮と一繋がりになったその白銀の館は、晴天時には遥か隣国からも見える程に眩く輝くといわれている。
その天上の巨大建造物の内部。
あまりにも対照的な色彩に身を包んだ男女が、研究所から王宮へと続く渡り廊下を歩いていた。

「アル。気持ちは変わらないか？」

「しつこい！！
コレは人にあげられる様なものじゃないって、何回言ったら分かるのよ！！」

広場での騒動からここに至るまでの長い道程。
彼らはずっと、それはもうず～っと、無限ループの如くこんなやり取りを続けていた。
真也は少女の持つ羽根ペンを、相も変わらず虎視眈々と狙っている。
涼やかな印象を受ける科学者の双眸は、あの手この手で少女を懐柔しようという意思に余念が無かった。
だが彼の懇願を受けて尚、真紅の少女には一切の譲歩を見せる気配が無い。

いや。彼女には譲歩を見せる権利が無かった、と言った方が正確だろうか。

事実、先程から少女が何度も何度も繰り返し真也にしている説明は、正しくその様なものだったのである。

――不死鳥の羽根ペン。

遡るは千年ほどの昔。かつて銀の国が召喚した守護魔の一人が開発した技術の一つであると伝え聞くこの魔装は、現在では材料から製造工程に至るまでその全てが国家機密に指定されている。

現在国内に流通している数は合計しても１００には至らず、使用権を公式に認められている人数は更にその半分にも満たないというレアアイテムであった。

少女曰く、所持及び使用の権利を得る為には魔導において師範級以上の実力を示すか、もしくは一定階級以上の貴族位を取得すること、または国王から直々の承諾を取り付けるなどの手続きが必要であるという。

重要なのは、いくら少女が高位の魔導師であるとはいえ、認められているのは所持及び使用の権利のみであり、そこには他人に譲渡する権利が含まれないという点である。

流石に真也とて、先ほどから繰り返されているその説明を理解してはいたのだが……。

しかし生粋の物理学者たる彼にとって、彼女の見せた現象はダメと言われて諦めきれる様な物では無かったらしい。

真也は、顎に手を当てて何かを思案している。

「……君の言い分は分かった。

つまりその国王様とやらを説得すれば、オレがそれを貰っても構わないわけだな。

確か今から王宮に挨拶に行くんだろ？
じゃあその時にでも……」

ブツブツと、何やら不穏な計略を練り始めている天才物理学者殿。
赤髪の魔法少女は、呆れた様に首を振っていた。

「無理よ。この国の王座には、国王なんかいないんだから」

「は？」

真也は目を丸くした。
――王座に国王がいない。
先ほどまでの少女の口ぶりからすると、この国には国王自体が居ない、という意味ではなさそうだが……。

「病気かなんかなのか？」

国王が王座に座れない理由として、真也は最もあり得そうな仮説を口にした。
少女はバツが悪そうな顔でソッポを向きながら、うんざりした様にため息を吐いている。

「……うん。ある意味病気ね」

「……」

はぐらかした様な口調。
そんな少女の様子から、真也は国王の容体について思いを馳せた。
――余程の、おそらくは動けない程の重病。
或いは精神疾患や、隔離が必要な伝染病の類なのかもしれない。

成程。仮にも一国の王ともあろう人物がその様な状態なら、確かに無闇矢鱈と言いふらすのは憚られるというものだろう。

もしかしたら、これから会う大臣様とやらに箝口令を敷かれているのかもしれない。

「穏やかじゃないな……」

少女の態度に腑に落ちない何かを感じながらも、彼は詳しく追求する事はしなかった。

渡り廊下は相当な高さにあるらしく、通路の両側に設けられた窓からは眼下の街が一望出来た。

ゲームか何かの街をそのまま再現したかの様な、地球とはまるで異質な息遣いが感じられる、異邦の首都。街を取り囲む防壁よりも更に高いこの場所から見ると、真也にはソレがミニチュアの玩具の様に見えた。

建物の配置を、誰かが指定しているのだろうか。

それぞれの建物が織り成す繋がりや、合間を血管の様に走る石畳みには、意図的にそう仕上げられたかの様な規則性を見出す事が出来る。

まるで、街そのものが巨大な地上絵にでもなっているかの様だ。

視線を街から上げると、世界を包む群青の空が先程までよりもずっと近くに感じられた。

大気の海は地平線の彼方にて深緑の丘と交わり、境目も朧に肥沃な大地と溶け合っている。

防壁の外に見えるあの建造物は、少女の館だろうか。

霞んだ丘の天辺には、ぼんやりとした影が浮かんでいた。

長い長い渡り廊下を歩む時間は、景観に見入っていた青年にはそう退屈なものでも無かった。

街と反対側の窓からは断崖絶壁しか見えないことに、細やかな落胆と設計士の意図に対する壮大なる疑問を残しつつ、目前に巨大なホールが現れた事で彼は通路の終着を知る。

魔導研究所とは大分趣の異なった調度品で飾られたその空間の気配から、彼は自分が王宮に入ったのだと理解した。

プラネタリウムができそうな程に広大なホールの床は、靴が埋まりそうな程に毛の長い赤絨毯に覆われていた。歴史を感じるドーム型の天蓋には絵画が掛けられ、誰だかわからない叔父様方が、一目で美化されたと分かるタッチで描かれている。

――そんな権力の毒を感じる豪奢な空間において、権力（そんなもの）は求める時点で下賤だとでも嘲笑するかの様に、その存在はドームの中央に設置されていた。

高さは、軽く１０メートル程。

奈良の大仏もかくやという大きさに造られたソレは、室内に置くにはあまりにも大きすぎる人型の像である。

マントは靡いた形で固定され、つばの広い帽子に隠されたその顔は伺えない。

立派な髭が生えている事から、辛うじて性別が男だと分かる程度。

広場でも見かけたアダマス像は、先程の数十倍の存在感を伴って白い青年を威嚇した。

「またこの像か。

えーと、誰だっけ？

確か、ユ……、ゆ……」

「ユミル様。

大昔に生きた、創世の大魔導」

澄んだ声色が聞こえて、真也は隣にいる少女へと目をやった。
真紅の少女の翡翠の瞳は、嫌悪とも憧憬ともつかない強い色を浮かべながら、ただ真っ直ぐに巨大な像を見詰めている。
首を捻る真也に、少女は静かに続けた。

「あたし達の世界に、初めて文明が生まれた頃の話なんだけどね。
今でこそ6つの国に分かれちゃってるけど、その頃には国は1つしか無かったんだって。
で。そのたった1つの国を創り、治めたのがこのユミル様。
最初にして最強の魔法使いだったって言われてる人なの」

「……成る程な。
それじゃ、顔が帽子で見えないっていうのもその辺りが原因なのか？
世界征服なんかしたもんだから、死後に嫌われて顔を消されたとか……」

揶揄する様な真也の声。
少女は、首を横に振った。

「それ以前の問題よ。
だってこの人は、死ぬまで一度も、誰にも顔を見せた事が無かったって言われてるんだから」

「……どこの怪人二十面相だ」

真也は、湿気た煎餅でも噛んだ様な顔で溜息を吐いた。
――辟易した理由は2つ。
“国一番の魔法使い”だという少女。

広場での跳び蹴りから、彼女はどうやらこの人物に並々ならぬ憧れを抱いているらしいと感じてしまった事と、その理由がどうしようも無いくらいの絵空事なのだろうと察してしまった事である。

例えば、そう。人類史においても、大昔には素晴らしい方々が登場したものではないか。

曰く水面を歩いただの海を割っただの、雷を落としただの終いには幽体離脱して空を飛んだり、死んでから3日後に生き返ったり……。

往々にして、口伝の歴史とは“神話”へと誇張されるモノなのである。

確かに少女の言う通り、この人物は実在したのかもしれない。

世界征服を成し遂げたというのも、まあ、あり得なくは無いだろう。

だがおそらく、少女が想像している様な人物ではなかった筈である。

……と、いうか。どう考えてもあり得ないだろう。

王様の仕事とは、即ち人前に立つことなのだ。

誰にも顔を見せない怪しいオヤジが、どうやって行政を行っていたと言うのだろうか。

まるで中二病患者を見るかの様な、呆れきった視線を向けている真也。

ソレに気が付いたのか、少女は自嘲気味にフッと笑っていた。

「別にあたしも、伝承をそのまま信じてる訳じゃないのよ。

だって、本当だったらもう人間じゃないレベルだもん。

曰く、人類が発見し得る魔術は全部使えたとか、見ただけで人が殺せるとか、果ては“神霊級魔術”の行使から不死身だったなんていう逸話まであるし……」

儚気な笑みを浮かべながら、少女はそう答えた。
きっと少女自身、それは“無かった”事実だと分かっているのだろう。
あり得なかった物語なのだと、現実として納得しているのだろう。
――だが。
その上で彼女は、“でもね”と付け加えた。

「でもあたしは、それでもこの人は“そうだった”んだって思いたいの。
どう考えても夢物語だけど、それでも、昔はこういうスゴイ人がいたんだって。
だからあたしも、頑張って魔導師を続けてれば、いつかはこの人に並べるんだ、ってね。
……だって、さ。
そこまで出来る様になれば、あたしが“一番”だって、誰も文句なんかつけられないでしょ？」

苦笑とも取れる微笑を浮かべ、はにかみながらも少女はそう言い切った。
透き通った翡翠の瞳には、自信と理想が浮かんでいる。
それはおそらく、幼い頃に彼女が夢見た、物語の“彼”に対する憧憬なのだろう。

「……」

――だが、真也には。
そんな真っ直ぐな彼女の視線が、何故か泣いている様にしか見え

なかった。

「ん……？」

何かおかしなモノを見た気がして、真也は咄嗟に瞬きをした。
霞んだ目を誤魔化すかの様に、ゴシゴシと擦る。
擦って、もう一度目を開けた時には、先の幻覚はとうに消え失せていた。
目の前にいる少女は、一切の悲観を感じない、力強い眼差しで像を見上げている。
――やはり、只の錯覚だったのだろう。
真也はそれきり、今見た幻影は気にしない事にした。

「あ……」

ふと。少女の視線を追う様に像へと目を流した時、真也は“その事実”に気が付いた。
目の前に佇む可憐な少女と、その視線の先にある巨像には、よく見ると奇妙な共通点があったのである。
顎に手を当てて、3秒ほど思案してみる。
幸か不幸か、真也は直ぐにとある結論へと至った。

「そうか。
ああなるほど、そういう事だったんだな」

少女の格好をまじまじと見つめながら、真也は意を得たかの様に手を叩いた。

そう。よく見ると、彼女の纏うローブと帽子はあの像にそっくりなのである。
おそらく、彼女のこの怪しげな風貌は、伝説の魔法使いへのリスペクトから来ているものなのだろう。
真也はそう納得して、小さくふむふむと頷いた。

「……」

……直ぐに、これが地雷だったと気付く事になる。
真也がそう呟いた瞬間。少女の醸し出す空気は、何故かハリセンボンもかくやという程に刺々しいものになってしまったのだ。

「……“そういう事”？
ねえ、シン。
“そういう事”って、どういう事？」

――底冷えしそうな声が聞こえた。
先程までの真っ直ぐな瞳は、一体どこに行ってしまったのだろう。
目を伏せた少女からは、なんかドス黒いオーラが漂って来ている。
本能的恐怖を感じた真也は、反射的に3歩くらい後退ってしまった。

「……ねえ。まさかとは思うけどさ。
あんた、あたしが好き好んでこんな野暮ったい格好してるとでも、思ってた？」

「あー……。その、なんだ？」

一瞬、“違うのか？”と口に出そうになったが、広場での飛び蹴りがフラッシュバックしたので彼は思い留まった。
今の彼女は、水銀レバーが作動した時限爆弾だ。
ちょっとでも揺らすと爆発する。
……尤も。５ｃｍ程上昇した彼女の肩を見る限り、なんか手遅れっぽいのではあるが。

「冗談じゃないわよっ！！
あたしはこの格好を“してる”んじゃなくて、この格好以外“出来ない”の！！
この人が決めた風習のせいでね、銀の国の大魔導は、特別な事情が無い限り、自宅以外じゃこのローブもっ、帽子もっ、一切抜いじゃいけない規則になってるのっ！！　夏場でもよ！？
あーっ、もうっ！！　こんな悪しき風習は、いつか絶対！！　あたしの手で根絶してやるんだから～～っっ！！」

耳が痛くなる程の大声で喚き散らす少女の姿に、多大な後悔と多少の同情を覚える真也であった。
とりあえず、この国に四季があるらしいという情報が手に入っただけで儲けものだろう、などと、真也はなるべく前向きな解釈に努めてみる。
なるほど。この国は温帯なのかもしれない。

暫しの間喚き散らした少女は、乱れた呼吸をフーッ、フーッっと整えると、目の前の大扉を指差して移動を促した。
少女はこちらには目もくれずにズンズンと進んで行く。
――全く。彼女は、何故怒っているのだろうか。
真也は、小さく溜息を吐いた。

「似合ってると思うけどな」

少女の後ろ姿に目を向けながら、聞こえないくらいに小さく呟く。

頭髪にしておくにはあまりにもしなやかで、鮮烈な印象を受ける真紅の髪。

地味な印象を受けるローブや帽子でも、華奢な彼女の身体を包むと童話の中からそのまま抜け出して来たかの様な、ある種幻想的な魅力となって見る者を惹きつける。

客観的に見れば、という条件付きではあるものの。

真也は、彼女の（容姿の）可憐さだけは素直に認めていた。

「……っ」

彼の声が聞こえたらしい。

少女は一度足を止め、顔を伏せながらゆっくりと振り向いた。

つばの広い帽子に阻まれているので、その表情は上手く伺えない。

ただ真也には、少女の肩が何かを堪える様に震えている事が分かった。

少女は――、

「……ありがと。

全っ然嬉しくないっっ！！」

……刺々しく睨み付けながら、そう吐き捨てた。

世界の覇権を争うは、始祖より別れし６大国。

“屈強なる武術王国”・武の国（ウォルヘイム）
“余命無き死霊国家”・死の国（ネクロガルド）
“崇高なる選民共和国”・天の国（ソルヘイム）
“光無き地底都市同盟”・地の国（ノームズアシュ）
“獰猛なる氷河帝国”・氷の国（フィンブルエンプ）
そして“白銀の魔術大国”・銀の国（プラティヘイム）

志向性を完全に異にする思想、技術を持つ６つの国は、しかしその国力においては全くの互角。
故に侵せず、侵されず、太古の昔より目立った戦火も無く、しかしいつかは矛を交えるべく、今日まで緊張に満ちた平和を保って来た。

――人々は、それを冷戦と呼ぶ。
いずれ狙うは世界の覇権。
ならば今は兵を強くし、原野を開拓し、魔獣を手懐け、敵国を焼き払う為の知恵を付けるべし。

知恵を求めよ。
力を求めよ。
新たなる技術を求めよ。
内を嗾け産み出させ、

内で足らねば外に求めよ。

協力は是なるか？
無論、否である。
我々は忘れない。
あの平野での屈辱を。
あの丘での裏切りを。

交易は是なるか？
無論、否である。
我々は忘れない。
かの者の非業なる最期を。
かの者の卑劣なる嘲笑を。

非情なる利用は是なるか？
是、しかし否である。
彼らもまた忘れまい。
我らの暗鬱たる歴史を。
彼らは最早信じまい。
我らも最早信じまい。

異国は全て敵国なり。
我らが求めに誰が応ずる？
彼等が求めに誰が応ずる？
外へ知恵を求むる事の、果たして何と無為なる事か。

――否々、我らには力がある。奇跡がある。
太古の昔より受け継がれし、叡智を得る為の神秘がある。

内で足らねば外に求めよ。
外で足らねば更に外へ。
世界の枠組みすらも越え、更なる叡智を呼び寄せよ。

彼等はいずれ訪れる。
定められしは百年に一度。
常理の外に在りし彼らは、常理を超えた力を齎す。
武具を、戦術を、真理を、砦を、彼らは我らに恵み与える。

いつか戦火を交える日に、
憎き敵国の悪しき者共、
その腑を抉る為に――。

――――――

蒼い陽光に照らされた、荘厳な聖堂だった。
床には無機質なタイルが敷き詰められ、水面の様に差し込む光を反射している。
入口の大扉から伸びる赤絨毯。
煌びやかな金糸で縁取りされたその毛並が、涼やかなタイルの海を真っ二つに割っている。
聖堂の周囲を取り囲む様にして並べられた豪奢な椅子も、今は使用する人間が見当たらない。
赤絨毯の先に安置された空っぽな王座だけが、採光窓から差し込む陽光に、只々寂しげな光を帯びていた。

「なるほど」

“謁見の間”と呼ばれたその広間へと招かれ、一通りの説明を受けた朝日　真也は肩を竦めた。

曰く。彼が呼ばれたこの“銀の国”は現在まで5つもの国と冷戦状態を保っており、敵国を打倒する為の新技術や知識を欲している。

しかし国内だけで賄える技術革新には限度があり、自己成長は最早均衡状態にある。

よって新たな知恵を得る為に、百年に一回くらい、異世界から適当な人間を連れてきて技術革新に使っている。

……他にも長々と何やら小難しい用語や歴史などを語られはしたが、真也が受けた説明の要点はそんなところであった。

兵器、戦術、工業製品、或いは医療技術や学問でも良い。とにかくこの国はそういった技術革新を期待していて、真也には地球（もとの世界）の知識を使って国の発展に役立って貰いたいのだという。

簡潔に述べると、“かなりの長期滞在がほぼ確定の拉致被害者”。

それが、今の真也の立場であった。

一方的に拉致された挙句、帰れない。

これでは溜息以外何も出まい。

「いやいや、魔人殿。お会いできて光栄ですなあ。

実は先日“無能な小娘”が儀式を台無しにしてくれまして、全くどう取り繕ったものかと途方に暮れておったところなのです。

いやいや。我々にとって、貴方様は正しく“救世主”！！

よくぞ我らが“銀の国”にお越しくださいました。

いやぁ、もう感謝してもしきれませんなぁ」

アスガルド文部大臣と名乗った中年の男は、真也に今回の事件のあらましを伝え終わると、ニヤついた笑みで激励の建前を並べ立てた。

肥えた太った腹を包み込む、品が無いくらい宝石で装飾された正装が、オーバーリアクションの度にキラキラと光って目に痛い。
脂ぎった彼の額に何故か強烈な既視感を感じたのが気なったが、今は大して重要な事でも無いのでスルーしつつ、真也はもう一度深々とした溜息を零した。

“付き合っていられない”

自らの呼ばれた理由を理解し、真也が覚えた唯一の感想がそれだった。

冷戦――それ自体は、まあ結構だろう。
基本的に、朝日　真也は戦争を否定しない。
彼は争いを嫌悪する平和主義者でもなければ、国家間和平を溺愛する博愛主義者でも無く、また偉そうに講釈を垂れる程のモラリストでもなければ、同時に暴力を憎む正義漢でもありはしないからである。
それはここが異世界だから、というワケでも無い。
彼は例え、この国どころか日本が冷戦状態だろうが熱戦状態だろうが、極論世界征服を企てようが滅亡しようが、そもそもそれ自体に興味など抱かない。
物理学という単一の学問にのみ秀で、その世界に埋没する事にアイデンティティーを確立した彼にとって、文部大臣が述べた様な人間同士のいざこざなどは、正に興味を抱くに値しない些末事でしかないからだ。
彼は、それらの事象に関心を持つ事が無い。
関心を持たないから、やるなら自分に関係の無い、どこか別のと

ころでやってほしいとしか思えない。

――面倒な事この上ないな。

故に、彼らがよりにもよって自分を引き当ててしまったというその事実に、真也はソレ以外の念を抱く事は出来なかった。

冷戦？　勝手に続けてくれればいいさ。好きにしていいから、関係の無いオレを巻き込むな。オレ以外の地球人なら、好きに拉致してくれても構わないから。何しろ７０億超。吐き気がする程の数が居るんだ。何割か減っても種の存続に支障は無いだろうさ。ついでならガツッと２０億くらい拉致して、最前線で使ってやってくれ。地球も大分住みやすい環境に改善されるだろう。だから、オレを巻き込むな。連れてくるなら、オレ以外の誰か暇なヤツにしれくれ。

……本音を言うと、真也の内心はそんな感じだったのである。

「おや？　あまり乗り気ではありませんのかな？」

「……いえ。あまりに大きな話故、少々整理が追い付いておらぬだけです」

尤も。比較的常識を欠いた人間性を育んだ彼にも、ここで内心をぶちまけても状況が好転しない事を悟る程度の分別はある。

朝日　真也は現状を割り切り、受け入れる事が出来る程に枯れてはいなかったが、同時に損得勘定が出来ない程に幼い精神の持ち主でも無かった。

ここでこの大臣様に逆上しても自らの首を絞める結果にしかならない事くらい、彼は重々理解している。

故に彼もまた、心にも無い建前を用いて返答する事にした。

「この国に協力する事自体は、まあ吝かではありませんよ。

それで？　私はどれくらいの間、この国に滞在すればよいのでしょうか？」

「それは貴方様が気になさるべき事ではありませんなぁ。いやいや。貴方様は、心行くまでこの国に滞在してくだされば良いのです。
然るべき地位と報酬の用意も御座いますしな」

幾重にも含みのある真也の問いに、アスガルドは目に浮かぶ憐憫の色を微かに強めながらそう答えた。
――成程、おとなしく地球に帰してくれるつもりはないらしい。
まあ攫われた理由が理由なので、当然と言えば当然ではあるのだが……。
暗に終身労働を示唆された真也は、再び小さく肩を竦めた。

「……」

――地位。報酬。ハッキリと言えば、彼はそんな物に興味など無い。
この世界での地位も、金も、決して地球に持ち越せる物ではあり得ないからである。
故に今の真也が必要としている情報は、取り分けて三つだけだった。

・帰る方法はあるのか。
・あるとしたら、その方法は何か。
・その方法は真也個人で成し得る物なのか、或いは複数の協力者が必要な規模の物なのか。

まあ。この大臣様がそんな“都合の悪い情報”を教えてくれると

も、彼には到底思えなかったのではあるが……。
――カマを掛けるだけなら、タダだろう。
真也は思考の温度を静かに下げ、頷く様な仕草を見せながら思案した。

「……感服致しましたよ。随分とお心が広いのですね。
しかし――。私の様な部外者を、そう簡単に信用しても良い物なのでしょうか？」

「ほう。それはまた、どうしてですかな？」

お互いに、建前しか存在しない会話。
それは真也自身が最も嫌う人間関係の煩わしさではあったものの、今はそんな個人の主義を優先して良い状況では無い。
ピクリと眉を動かしたアスガルドを正面から見据えつつ、真也は感情の無い声で先を続けた。

「誤解なさらないでください。
別段、私に反意があるだとか、不満があるなどという訳では無いのです。
しかし、私は昨夜この世界に訪れたばかりの人間ですからね。
反意などは勿論御座いませんが、同様にして愛国心や忠誠心といった物も、当然ながら未だ皆無です」

ほう、というアスガルドの相槌。
真也は軽く周囲を見回し、僅かに間を取ってから続けた。

「以下はあくまでも仮定の話として聞いて頂きたい。
もしも私が、大臣様の仰るところの“悪しき敵国”の方に魅力を感じる様な蛮族であった場合には如何なされますでしょうか？

あり得ない、とは言い切れませんよ？

我々の世界の例を見ましても、特定の生物の肉を食べる、などという些細な行為が相当な精神的苦痛に繋がる方々もおるのです。

これは、決して善悪や優劣の問題ではありません。

単純な文化の違いで、避けがたい齟齬であり、つまり異文化の人間を雇用するとはそういう事なのです。

繰り返しになりますが、現時点で私に反意は御座いません。寧ろ見ず知らずの敵国に比すれば、この銀の国の方が遥かに私にとっては安泰でしょう。

しかし――。これから先も、ずっとそうだと、果たして誰に言い切れますでしょうか？

この国では当たり前の、どんな些細な出来事から、私がどんな感情を抱くのか。

現時点では、私自信を含めて、それは誰も分からないのです」

真也は朗々と、あくまでも客観を装ってその可能性を仮定した。

言葉を選んで、なるべく礼を失しない様に気を付けながら。

口調が挑戦的にも思えるのは、無闇に謙る（へりくだ）必要も無いという彼の意思表示である。

何しろ今の真也の立場は、“協力者”。

つまりは、“対等”である筈なのだから。

真也の述べる極端な、しかし“否定し得ない可能性”の話を聞き、アスガルドは目を細めながら鼻を鳴らした。

「確かに、貴方様の仰る通りでしょう。

我々とて貴方様には最大限の礼を持って対応する所存ではありますが、確かに、その可能性は否定しきれますまい。

さて、しかし……。

それでは貴方様は、一体我々にどうしろと仰るのですかな？」

「難しい話では御座いません」

愚か者を見下す様な、或いは揶揄するかの様な大臣の視線。
それを正面から受けながら、真也はわざと不敵な笑みを作り、続けた。

「反意を翻した守護魔は、最早貴国にとって害悪でしかありません。国をあげれば処分も容易でしょうが、しかし守護魔が未知の技術を持つ存在である以上、正面から排除を行っては予想外の損害を被る可能性も否定はしきれないでしょう。
そこで、です。
いざという時に備えて、最低限守護魔を元の世界に“召還”する方法くらいは用意するべきではありませんでしょうか？
どの文化の人間にとっても、郷愁の念というのは中々に根強い物らしいですからね。
“処分”ならば闘争にもなりますでしょうが、“召還”ならば抵抗される事無く守護魔をこの世界から排除できる可能性が高いと考えます。
この世界に置く期間も定め、一定以上の利益を齎した暁には元の世界に戻すと餌を与えておけば、反意を削ぐ事にも繋がるでしょう。
異世界人を運用するに当たっては、“召還”の方法を明示する事こそが効率を上げる為の要であると私は考えるのです。
万が一未だ召還の方法が存在せぬのであれば、一刻も早くそれを確立する事こそが肝要かと……」

静かに、あくまでも現状を客観的な言葉で分析しながら、真也はそう言い切った。
言葉の裏には彼自身の意思が含まれている事は明白であったが、しかし一切の主観を交えずに語られた科学者の分析は、聞き手に相応の説得力を感じさせた事だろう。

アスガルドが気を付けていなければ分からない程に顔を強張らせ、蔑む様に眉を顰めたのは、果たしてそれが理由だったのか。
ニタリ、と、アスガルドは嫌味な笑みを張り付けながら、口を開いた。

「中々のご弁舌ですなぁ。
確かに、貴方様の仰る事も一理ありますでしょう。
しかし――そんな必要は、どこにも無いのですよ」

先ほどまでとは、明らかに異なる大臣の声色。
真也は微かに瞳の温度を下げ、とぼける様に首を傾げて見せた。

「何故でしょうか？
確かに私に反意は御座いませんが、しかし万が一という事もあります。
与える餌は効果的な物にするべきであると思われるのですが……」

「いえ。ですから、そもそも余計な餌などを与える必要が無いのですよ」

あくまでも、第三者視点を装った分析を続ける真也。
アスガルドは尚もニタニタと不気味な笑みを零しながら、真也の隣へと顎を突き付けた。

「……」

真也の隣には、黒いローブに身を包んだ少女が居る。
彼をこの世界に呼び出した赤髪の少女は、謁見の間に入ってから一通りの説明が終わるまで一切の言葉を発さずに、気配を潜める様にして彼の傍に寄り添っていたのである。

大臣から話の水を向けられていると悟り、少女は気が進まない様子で溜息を吐きながら、ここに来て初めて口を開いた。

「……シン。ナニか勘違いしてるみたいだけどさ。
あんたの立場、そんなに余裕があるモノじゃないから」

呆れた様な、或いはどこか諦めた様な声でそう言いながら、少女は真也の左手を指さした。

つられる様にして、真也は自身の左手に視線を落とす。

掌には橙赤色に輝く魔法円が浮かんでいた。

聖堂の採光窓から差し込む陽光の中に、淡い燐光をキラキラと吐き出している。

――それを見た瞬間。

何故か、彼の背筋には底知れない悪寒の様な物が走り抜けた。

「待て……」

――左手の、魔法円。

それの果たしている役割について、真也は既に少女から説明を受けている。

この魔法円は、例えるのならそう、“宇宙服”である。

物理法則の違うこの世界に於いて、別世界の物理法則に従って形成された彼が生命活動を維持する為の、必要不可欠な生命維持装置だ。

ほんの僅かでも環境が変化しただけで致命的なダメージを受ける人間という生き物が、決定的に物理（環境）法則の異なるこの世界で存在する為に必要な、生きている限り死守しなくてはならない生命線。

だが……。

彼女は昨日の晩、果たして何と言っていたのか――？

“ま。取りあえず、それが消えたらあんた死ぬから。精々頑張って守りなさい”。

真也の脳裏に、昨夜聞いた少女の言葉がフラッシュバックする。
その一言が現状へと連結し、たった一つの事実を示唆して組み合わさってゆく。
――消えたら、死ぬ。
――消すだけで、死ぬ。
まさか？　いや、まさか。
そんな事が、そんな、バカな事が……。
だが――。
あの大臣は、今何と言った？
餌（召還する）を与える必要が無い？
何故か。それは召還せずとも、損害無く守護魔を排除できるからでは無いのか。
いや、だが……。
もう何千年と異世界人を拉致し続けている彼らが、そんな単純な保険も掛けていないだろうか――？

「まさか……？」

「……うん」

瞬く間に青褪めた真也に向けて、少女はバツが悪そうに頭を抱えながら、続けた。

「その魔法円ね、維持してるのはあたしなの。
つまりあたしが魔力をストップしたら、その時点であんたはお陀

仏ってわけ」

「――――ッ」

――血の気が引いた。

一瞬、彼の視界が幻視したのは、グチャグチャに腐った自分の左手。

幼い頃に見た、重度の放射線被曝を負った患者の写真が脳裏を掠める。

新陳代謝が止まり、新しい皮膚が生まれる事無く、ボロボロに崩れて酷い有様だった。

アレはあくまでも被曝であり、他人事。自分とは無関係だと言ってしまえばそれまでだが……。

今回、死に様の悲惨さで言えば真也とて退けは取らないだろう。

身体を構成する分子が結合を止め、無秩序な化合物を作り、グズグズに混ざって無意味な肉塊へと変貌していく自分の身体。

溶解した皮膚からは血が噴き出し、細胞が剥離してゆく強烈な苦痛を伴いながら、瞬く間に人間じゃ無い物に変わっていく、自分の最期。

死体は残らないだろう。

物理法則の差異によっては、原子単位にまでバラバラに分解され、最終的には大気中に飛び散ってしまうに違いない。

――“協力者”などと、よく言えたものだ。

真也は、内心で悪態を吐いた。

――これでは実質、奴隷や捕虜と変わるまい。

「ハハハ、お分かり頂けたようですなぁ。

いやいや。“生存本能”という物は、どこの文化の人間にとっても中々に根強い物らしいですからな。
貴方様がご心配なさらずとも、損害を防ぎ反意を削ぐ為の手段は十分に講じておるのです」

文部大臣は高らかに嗤い声を上げると、満足気に少女の言葉を引き受けた。
細められた瞳は愚か者を揶揄する様な侮蔑に緩み、上擦り気味の声色からは勝ち誇った様な態度がありありと伺える。
――それで、真也は気が付いた。
おそらくはこの世界の貴族に当たるであろうこの男は、口でどんなに建前を並べようとも、芯の部分では異世界人たる真也を卑賤なる者として卑下しているのだろう。
そして、事実自分が圧倒的優位に立っているからこそ、その態度を本気で隠そうとは思っていない。
“この男は、生理的に受け付けない”。
真也は立場を自覚すると共に、アスガルド文部大臣を自分が最も嫌悪する人種の一つとしてはっきりと理解した。
尤も、今の真也はそんな事をおくびに出せる様な立場では勿論無いのだが……。

「いやぁ。我々とて、勿論そのような真似はしたくないのですぞ？何しろ貴方様には、是非とも貴方様の世界の技術を伝えて頂かねば、我々の方も困りますからなぁ。
……無論。貴方様が非協力的ならばその限りでは御座いませんが。
いえ、なに。貴方様風に言うのなら、あくまでも仮定の話ですからなぁ。
ハハハ。まあ、相応の地位の用意も御座いますので、それで納得して頂ければ幸いです」

「……聞かせて頂きましょう。
まあ、立場が立場ですからね。
あまり期待もしてはおりませんが……」

つい皮肉な口調になりながら、真也はそう答えて溜息を吐いた。
アスガルドは特に意に介した様子も無く、コホンと咳払いをしてから続けた。

「今代の守護魔・アサヒ　シンヤ殿。
貴殿には今より、我が国における“特務教諭”の地位を保証しましょう。
報酬は、まあ一先ずは魔導師範格と同等。
後は働きに応じて応相談という所でいかがでしょうか？」

「特務教諭？」

聞いたことも無い単語に、真也はコクリと首を傾げた。
アスガルドは一々説明するのも億劫なのか、真紅の少女へと目をやっている。

「“特務教諭”は、魔導研究所（ヴァルスキャルグ）における役職の一つよ。
確か、万が一異国からの亡命者が出た時に、ソレを受け入れる為に設けられた役職、だったかな？
まあ、あたしが知ってる限りじゃ、もうかれこれ６０年は空席になってる幽霊職だけど……」

憂鬱そうに溜息を吐きながら、少女は面倒臭そ～に説明を初めた。
未だに疑問符を浮かべている真也の視線。

それが職務の詳細を聞いているものだと気が付き、少女は条文を思い返す様な仕草をしながら続きを告げた。

「確か職務は――主に、専門分野での研究と開発。
それと、見習い魔導師達への講習を週に何回か。
あとは……、暇な時間は学生として修練に出る権利とかもあった筈だけど？」

「待て、それって……」

朝日　真也は硬直した。

――翻訳。
物理学者としての研究。
教授としての学生への講義。
あと、暇な時には他の講義の見学等。

「……」

……頭痛がした。
なんだろうか。この、まるで海外旅行でレストランに入って、適当に注文したら全部和食だった時みたいな遣る瀬無さは。
彼は思った。
ソレ、昨日までの自分の仕事と何が違うのか、と。
真也はあまりにも強烈な脱力感に襲われ、もう本日何度目になるかもわからない溜息を吐いた。
ガックリと肩を落とすと、目に付いたのは高級感溢れる赤絨毯。

……おかしい。
元の世界ではお目に掛かった事も無い様なソレが、何故かボロ校舎の木造廊下にしか見えない。

「さて、他には何か要望や質問などありますかな？
最も、要望は我々が応じ得るものに限らせていただきますがね。
ハッハッハッ……」

耳障りな高笑いをかましつつ、話を終わらせようとするアスガルド。
その嫌味な視線を受けて、漸く彼は先程の既視感が何だったのかを理解した。
……なんの事は無い。
この文部大臣様とやらは、真也が良く知る人物と同類に属する生き物だったのである。
そう。あの、嫌味な学長（ハゲ頭）と――。

「……」

一気に新鮮味が無くなった異世界ライフにげんなりしつつ、真也は再度息を吐いた。
……要望など、帰らせて欲しい以外にはあるワケが無い。
それが却下されると分かっている以上、これについて考える事には一切意味が無いくらいだ。帰還の為の交渉を行う手もあるが、それは時期尚早だと言わざるを得ないだろう。
質問――まあ、聞きたい事は山ほどあるが意味は無いだろう。

何しろこの大臣様とやらは、先程から細かい説明は全て少女に任せている。
それならば、細かい事は追い追い少女に直接聞いた方が、遥かに手間が省けるというものだろう。
……というか、正直。
もうこれ以上、この生物と会話を続けていたく無い。

「……」

無い、のだが……。
逆に、この大臣様にしか聞けない質問があるような気も――。

「ふむ……」

真也は、アスガルドの全身を観察した。
体型は、典型的なメタボ。服にはジャラジャラとした宝石が付いて、中々に悪どい政治をしている事が伺える。脂ぎった顔には立派に整えられた口髭が生えていて、頭には完璧に整髪された黒髪が“乗って”いた。

「ん――――？」

その時。
ふと、真也の頭には疑問が浮かんだ。

彼の視界に入った“ソレ”。
その装身具の使用目的は、一般的には3つに大別されるという。

一つ目は、装飾品として。

例を上げるとすれば、俳優がドラマ撮影で使う場合や、女性がオシャレの一環として使用する場合がコレに当たるだろう。往々にして“その部位”は、短期間では目指す外観へと至れない事が多い為、そういった場合は“ソレ”を使用するのが手っ取り早い解決法となるのである。

二つ目は、正装としての役割りだ。

古来、特にヨーロッパではノミやシラミが流行した過去があり、当時は“その部位”を短く刈り込むのが主流であったという。当時の音楽家達の肖像画において、“その部位”が奇抜かつ一様に見えるのは、彼らが皆“ソレ”を使用していたからである。その名残として、現在でも裁判官などは“ソレ”を正装として使用する習慣があるという。

三つ目は、最早語る間でも無いので省略する。

しかしながら近年では、この使用目的は“ソレ”自体の金額の高さと“隠さない”ファッションの普及により、衰退傾向にあるという。

さて。ところで真也が持った疑問とは、つまるところ“ソレ”についての些細な好奇心に集約され――。

「……（ブルッ）」

傍らの少女が不自然な身震いをしていた事を、彼は知らない。

真也は真顔のまま、じっと大臣の頭部に目を向けた。

「この世界でも、やはりハゲは隠すものなのでしょうか？」

「「……」」

――空気が、凍った。

「……どういう、意味、ですかな？」

ピキ、と、脂ぎった額に青筋が走った。

慇懃な笑みが引きつったのは、多分少女の気のせいじゃ無いだろう。

しかし白衣の彼は、そういった他人の感情には非常識なまでに無関心であった。

「いえ、大した事では無いのですが……。

大臣様が現在頭に乗せている装飾品は、我々の世界では“カツラ”と呼ばれておりまして、主に男性型脱毛症を隠蔽する為のツールとして使用されています。

さて、そこで私の質問なのですが。

この世界でも、やはり薄毛は隠すべき対象なのでしょうか？

大臣様の頭にあるその装身具を、我々の世界の“カツラ”と同じ

意味で解釈して良いのか、些か判断しかねる所でして……」

――ふと。真也は、左肩に何かが触れているのに気が付いた。
視線を向けると、少女が小さな右手を肩に乗せ、トントンと真也の意識を引いている。
……視線を彼女の顔に移すと、なんか物凄い形相で睨んでいた。
猫の様な瞳が見開かれて、“これ以上刺激するな”と無言で訴えている。

「は……ハハハッ！！
お、面白い事を気に掛けるお方ですな、貴方は。
まあ、確かに、我々の世界にも薄毛を隠す人間は居ると聞きます。
いえ、私にはとんと無縁な話ではありますけどな。
貴方様の言葉は翻訳されているのですから、貴方様の言うそのツールは、そりゃぁ我々の世界でも“カツラ”と呼ばれているでしょう。
いえ、ホント。私には無縁な話でありますけどな」

“そうですか、分かりました”
アスガルドの返答を聞いて、真也は視線を前方へと戻した。
小さく頷いて、再び視線を大臣と交える。
……いや、視線はもう少し上に向いている。

――カツラ。
現代においてその材質は人毛、もしくはポリエチレンなどの人工毛であるという。
という事は、“アレ”はやはり人毛なのだろうか。それとも実はポリエチレンに近い素材か、或いはポリエチレンそのものが、既に

この世界には存在しているとでもいうのだろうか。好奇心に歯止めが聞かない真也は、次の爆弾を投下した。

「もしよろしければ、大臣様が頭に乗せているその“カツラ”を、一度外して見せては頂けませんでしょうか。
私と致しましては、それが我々の世界の“カツラ”と同じ材質の物なのかを、是非とも確かめた……ァァアアアアア゛」

――左肩に、激痛が走った。
涙目で視線をやると、少女が肩を砕かんばかりの握力で、ミシミシと肩甲骨を握り締めている。それはもう、万力もかくやという力加減で。
立ち昇る魔力のせいだろうか。
少女の周りでは、明らかに空気が震えている。

「ハハハハハっ！！
本当に面白いお方だ。
さて、質問は以上で宜しいですかな。
ああ、宜しいですか。
それではこれより４日は、準備期間としての休暇を与えましょう。
その間に、この国の風紀や常識などを、是非とも、くれぐれも、しっかりと学んでおいて頂きたい。
それではまたいつか、機会があれば」

「待って下さい。
まだ謎が……たたたた。
待て、砕ける！！　砕けるって！！」

「失礼いたしました、大臣様。
このバカには国の礼儀作法を一から叩き込んでおきますので、ど

うか先程のご無礼はお忘れ頂くようお願い致します」

軽やかに礼をしてローブを翻すと、少女は青年の白衣を握り締め、引き摺る様にしながら“謁見の間”を後にした。

「無礼？
アルテミア・クラリスよ、無礼とは一体何の事だ？
まさか貴様も、ワシの頭に“ナニか”が乗っていると、本気でそう思っているのか？　ん？」

「……っ」

少女は答えず、華奢な肩をプルプルと震わせながら去って行った。
大扉が閉じられる様を、にこやかな笑みで見守るアスガルド。
握り締められたその拳からは、赤い雫がポタポタと滴っていた――。

１３．　現代に普及したとある装身具の一般的な使用目的は異世界に於いても共通

すみません。なんだか、ちょっとづつ一章ごとの文章量が無駄に増えてきちゃってる気がします。だいたい、一万文字を目安に書くように心がけてるんですけど……。はい。携帯小説だと、一章がせいぜい１０００とか２０００文字なんで、長い文を書きなれていないと結構キツイです。

えーと。あと、なぜかコメントに制限が掛ってたことに気がついたので直しておきました。

はい。感想、アドバイス、誤字脱字などなど、気軽に書きこんで頂けると嬉しいです。

１４．　とある物理学者の科学者とはかくあるべしという信念の合理性を考察せよ

――固定観念。

それは、人間が思考に纏う一種の鎧であると形容する事が出来る。

人間とは、成長に伴って相応の社会的責任と人間関係の円滑さを求められる生き物である。人は独りでは生きていけない、などという文言が疑う余地の無い真理として一般に広く扱われている事からも察しがつく様に、我々は幼少の頃より、無意識の内に“常識”と呼ばれる定型句をなぞる事で極力周囲の人間達との差異を無くし、無個性かつ無根拠な事項を真理として扱うことで自らを保護することこそが正当である、という概念の刷り込みを受けている。

つまりは周囲の人間から社会的立場を護り、同時に自らの精神を守る手段として、人間は思考に常識と言う名の鎧を纏う事によって成長してゆくのである。

これは中々に強固で、堅固で、そして重厚な防具だ。

――教えられた通り、聞かされた通りに行動すれば間違いが起きない。

――今まで皆そうして生きて来たのだから、それに倣う事こそが最良にして最善の選択である。

ある意味では消極的とさえ取れるこの考え方は、しかし歳を重ねる毎に分厚く、そして頑強になってゆく、中々に便利で甘美な武装である。

だが。忘れてはいけない真理が一つ、ある。

鎧の強度とは即ち装甲の質と厚さに比例し、そしてその二つを兼ね備えた鎧とは、通常の場合は重鈍で、そして行動を束縛する重りにもなり得る物だという事である。

固定観念という鎧を身に纏い、身じろぎせずに周囲からの批判に備える姿勢とは、即ち思考を放棄するという行為に他ならない。

それは端的に言えば、自分がどう思い、どう理解したのかでは無く、ただ皆がそう思うという事実のみを根拠として真理とする、あまりにも盲目的な崇拝行為ではなかろうか。

そこには崇高なる好奇心などは勿論無く、同時に面白みなどという概念も一つたりとてありはしない。

活動の放棄とは、思考にとって即ち腐敗に等しいのだと、朝日真也は予(かね)てよりそう強く認識していた。

物理学の世界にも、その前例には暇(いとま)が無い

光の波動性に最期まで疑念を抱いていたアイザック・ニュートンに、宇宙膨張に猜疑心を持ち宇宙項を付け足したアルバート・アインシュタイン。彼らの“失敗”は、確か当時常識とされていた事柄を無意識に真理と思い込んでしまうという、ある種の固定観念による物では無かったのか。

言い方を変える。

つまりは例え彼らの様な、歴史に名を残す程の天才達であろうとも、歳と共に固くなった頭は思考を蝕み、麻痺させ、掴み取れた筈の真理を指の隙間から零してしまうという事なのである。

故に朝日　真也は、固定観念という単語を何物にも増して恐れ、同時に深く嫌悪していた。

特に昨夜、“自分が居るのは地球以外にありえない”という自己が無意識の内に持ち合わせていた先入観をまざまざと認識させられた彼は、尚更に未確認の常識をこの世界にも適応し得る“真理”であると断言する事は憚られたのである。

――結論を述べる。
良くも悪くも生粋の物理学者であった彼は、こう考えていたのである。
例えどう見ても明らかにカツラにしか見えなかったとしても、実際にこの手で確かめてみるその瞬間までは、決してソレをカツラだと断定するべきでは無い、と――。

――――――

「バ・カ・な・の！？」

王宮から正門へと伸びる大通り。
様々な種類の人間が行き交う、活気あふれる商店街を歩きながら、アルテミア・クラリスは白い青年を詰問していた。
人目を憚らぬ大声ではあるのだが、こんな状態の少女と目を合わせる様な猛者はこの街には存在しない。
大通りを埋める様な人混みが、少女が歩む度にモーゼの十戒の如く割れてゆく。

「あんた、マジで底なしのバカなんじゃないの！？
なぁにが”ハゲは隠すモノなのでしょうか”よ！！
アンタの首から上は全部飾り！？
隠してるんだから隠すべきモノに決まってるじゃない！！
あいつの機嫌が悪くなると、とばっちり食うのは魔導師(あたし)達なんだからね！？」

がぁーっと、真紅の少女は王宮を出てからこっち、ずっと激高しっぱなしであった。

掴みかからんばかりの剣幕で目を爛々と輝かせ、白い青年を睨みつけている。
その獲物を狙うライオンの様な雰囲気を飄々と受け流しつつ、しかし標的となった彼は疑問符を浮かべていた。

「？　何でそんな事が言い切れるんだよ。
ここは異世界なんだろ？
アレが隠ぺいなのかファッションなのか、見ただけじゃよく分からないじゃないか。
じゃあ実際に本人に聞いてみないと……」

「隠ぺいかもしれないなら何で本人に聞くのよぉ～っ！！」

あまりにもすっ飛んだ彼の返答に、少女は顔を赤らめて怒りを顕にした。
下唇をキュッと噛み締め、細い肩をワナワナと震わせながら目を伏せる。

――そんな少女を心底不思議そうに見ながら、真也はコクリと首を傾げたりしている。
それはとぼけでも誤魔化しでもなんでも無く、純粋に少女の不満が理解出来ないといった体であった。
“常識を破壊するのが科学者である”。
……彼の持論など、勿論少女には知る由も無い事柄であった。

「はぁ……。
本当に、あんたってさ……」

とうとう、常識を前提に話をする事にすら嫌気が差してしまったのだろうか。

少女はまるで疲れた様に、ガックリとその肩を落としてしまっていた。

昨夜から彼に振り回されっぱなしだな～、なんていう自己分析をしたりして、これからの先行きにそこはかとない不安を覚えたりしてみる。

少女は未だ詳しく説明をしていなかったが――。

通常、各国において守護魔は“異国民”という立場で民衆に認識されるのが普通なのである。

いくら魔導が広く普及したこの世界とはいえ、流石に“異世界人”を呼び出すのは何かと物議を醸す可能性が高いらしく、一部の人間を除いては事実を歪曲した形で伝える事が世界の定石として罷り通っているのだ。

真也が“特務教諭”という地位を与えられたのも、実はこの辺りが理由である。

これも魔術大国である“銀の国”だからこその地位であり、他国ではそれぞれの国柄に合った地位を守護魔に与える事で民衆の目を誤魔化しているという。

兎にも角にもそういった経緯があり、この青年にはこれから先何があっても“異国からの亡命者”として振る舞って貰わねば困るのだが……、

何しろ、少女もここまで反りが合わない相手であるとは思わなかったのだ。

――守護魔はよく、“常理の外”の存在だと賞される。

それは別世界の技術という常識外の知識を持ち、この世界の理では傷一つ付かない存在であるが故の称号だ。

少女とて、勿論それは望むところであったのだが……。

まさかそれが脳内にまで適応される真理だったとは、彼女には完

全に誤算であった。
少女は疲れた様に肩を落とし、小さく首を振ってから、切り替える様にして口を開いた。

「いい？
とにかく、これからはあたしの言う事をちゃんと聞いて、ダメって言ったことはやっちゃダメだからね？」

「郷に入っては郷に従えか。
まあ、それは当然そうするべきなのだろうが……。
そういう君も、さっきは笑ってなかったか？」

「もしも笑ってたら？
あたしまであいつに説教される羽目になってたから怒ってるのよっ？」

「……八つ当たりじゃないか」

キッと睨みつけてくる少女の視線を受け流しながら、真也も何か疲れた様に溜息を吐いて空を見上げた。
そろそろ正午を過ぎた頃だろうか。
青白く輝く太陽が白銀の街を真上から照らし出し、ここが異世界であるという事実を否応無しに彼に自覚させる。
隣から聞こえる少女の支離滅裂なお説教を聞き流しながら、彼は自分の置かれた状況を整理し、自らが取るべき行動について思索を巡らせていた。

――自分は、これからどうなるのだろうか。

真也の思索が纏めた最重要項目は、差し当たってはソレであった。

昨夜少女に召喚されたという事実を聞かされた時には、彼にはまだ希望があった。

この少女が何らかの目的があって自分を呼び寄せたのなら、その目的如何によっては、まだ交渉の余地が残されているからである。

話が通じるのならば、そのうち帰還を承諾してもらう事も、まあ不可能ではないだろう。

事実、彼が初めに立てたプランはその様な物であった。

だが現在では、彼はそれがほぼ不可能な状況にある事を理解してしまっている。

何故ならば前提として、交渉とは対等な立場同士にある者が行う行為だからだ。

この少女に命を握られている現状では、彼はどう足掻いたところで、この世界の人間に逆らう事など出来ないのである。

逆に言えば、この少女さえ味方につければなんとかなりそう、という意味でもあるのだが……。

現時点でその条件を当てにするのは、彼には少々現実逃避気味な選択肢である様に思われた。

帰還に当たっては、この世界の人間の手は一切借りられないと考えてほぼ間違いは無い。

と、なると、である。

やはり、なんとか自力で帰る方法を探すしか無いのだろうか？

異世界に行く方法に関する研究でのノーベル賞受賞者が居ない点から鑑みるに、それも中々に困難な方法だという事は推測できる。

しかしこうして自分が呼びだされている以上、それは決して不可能な事ではない筈なのである。

この世界には“魔力”なんていう未知の力が存在しているのだし、それに真也は、そもそも一流の物理学者だ。
魔術という学問を学んでいけば、地球に帰る方法だって自力で開発する事も可能なんじゃなかろうか？

「……」

真也は、小さく首を振った。
――おそらく、ダメだろう。
何しろ少女曰く、彼女自身は一流の魔法使いだという話なのである。
魔術とやらを異世界人の真也が扱えるのか否かは未だ不明ではあるものの、しかし仮に扱えたとしても、この少女の目を盗んで研究が出来るとは到底思えない。
帰る方法を研究している事がバレてしまったとしたら、この世界の人間たる少女は、全力でソレを阻止しに掛る事だろう。
と、なれば。結局は自力での帰還も、この少女に逆らえない以上は実現不可能な選択肢である。

……いっそのこと、諦めてこの世界に移住するのはどうだろうか。
何しろ、命を握られているという点さえ除けば、今の彼の立場は元の世界と大して変わる物では無いのである。
中途の研究を放り出さざるを得ない無念はあるものの、この世界自体が既に興味深い現象に溢れているし、学者として飽きる事は無い筈なのだ。
ならば彼はこの世界に場所を移そうと、肩書きを大学教授から特務教諭とやらに変えようとも、今まで通りに世界を計算し、余生を空費していけばいい。
確かに命を握られて扱き使われるのには反感を感じない事も無いが、しかし人間が悍ましいのはどこの世界でも同じだろう。

それに生きていくための糧を餌扱き使われるのも、資本主義ならどの社会でもある意味では似たような物である。

――なんだ。形が明確になっただけで、何一つ変わったモノなど無いではないか。

ライフラインに少々不安が無い事も無いが、しかし接種できる食物もある様だし、生きていく分には何とかなりそうでもある。

ならば自分はもう帰還など綺麗さっぱり諦めて、この世界に永住する事を考えた方が遥かに前向きで健全だというモノだろう。

「……ダメだろうな」

そこまで考え、真也は自嘲気味に呟いた。

――そう、ダメなのである。

ハッキリとした理由は分からないものの、この時の朝日　真也は、確かに“帰りたい”と感じてしまっていた。

人間を嫌悪し、狭い研究室に閉じ籠る事を選んだ彼が、しかし何故か今、元の世界に帰りたいのだと強く思ってしまっているのである。

それは果たして彼自身が分析した郷愁の念によるものなのか、或いは何か他の理由からなのか。

彼自身、それはよく分からなかった。

胸の奥に消えない違和感の様なモノがつっかえたまま、自身の感情が不確かなまま、真也は無言で門を潜っていった。

「……って。

ちょっと、シン！！」

「……ん？」

腕を引っ張られる感覚に、青年は思考を中断した。
チラリと振り向くと、この事態の元凶たる赤髪の少女が、そのしなやかな手で彼の白衣を掴んでいる。
どうやら走って追って来たらしい。
少女の肩は、少々リズミカルに揺れていた。

「ん、じゃないでしょ！？
あんた、ボーッとしたままどこまで歩いてくつもりなのよ！！」

「どこって、商店街の寝具屋に……。
……あれ？」

キッと睨み付ける、少女の視線。
我に帰った真也は、ごく自然に自らの居場所を見回した。
――見たところ、正門前商店街を抜けた門の外の様である。
太陽が頂点を過ぎた為に防壁の影となったその場所は、彼が朝方に見た時とはまた違った趣を呈している。
門番の好青年だけが、朝と変わらぬ定位置にて爽やかな微笑を浮かべていた。

「あ……」

「あ、じゃない！！」

少女の怒声を聞いて、真也は漸く自らのやらかした事を理解した。
3秒程思案し、そもそも何故こんな事になっているのかを分析し直してみる。

“取り敢えず、先ずは商店街でも見ていかない？
あんたの分の生活用品とか買わなくちゃいけないし……。
ほら、布団とかさ”

魔導研究所を出る時に少女と話しあった結果、本日の行動として決定したのがそれであった。
勿論彼も、この提案には異議など有る筈も無く、少女に連れられて早速商店街の寝具店へと向かっていた筈だったのだが……。
どうやら思考しているうちに、呆然と商店街を通り越して門を潜ってしまったらしい。

「すまない、ボーッとしていた」

「見ればわかるわよ！！」

恐らく、何度も呼びかけていたのだろう。
形の良い頬を微かに膨らませて、少女は刺々しくも睨んでいる。
段々慣れてきた少女の罵倒を聞き流しつつ、真也は静かに自己分析してみた。
……おそらく昨夜睡眠を取らなかった疲労が、見えない所で溜まっているのだろう、などと彼は考えてみる。
2~3日の徹夜程度で思考に異常が起きる様な柔な生活を送ってきたつもりは無いが、それでも異世界に攫われたという事実は、おそらく想像以上に自己の精神に負担をかけていたのだろう、と。

きっと、つまらぬ感傷に浸ってしまった事もそれが原因に違いない。

真也は胸の奥に僅かな引っかかりを感じながらも、先程の妙な感情はもう忘れる事にした。

彼の目の前では、少女が自前の吊り目をさらに吊り上げながらこちらを睨んでいる。

どうやってこの小さな怪獣さんを宥めようか、などと思案しつつ、そんな少女のネコの様な瞳を見た彼は、不意に忘れかけていたある物を思い出した。

「あ、そうだ」

その事を思い出した彼は、小さく手を叩きながら白衣のポケットに手を忍ばせ、ヒョイと“ソレ”を少女の前へと差し出した。

手のひらサイズ。

イヌとネコを足して2で割った様な生物の絵が縫い付けられた、可愛らしい袋である。

「あ、あたしのお財布。

そういえばアンタに貸したままだったっけ」

少女も思い出したのだろう。

キョトンと目を丸くしてから頷いて、ゆっくりと、ソレを手で持ち上げた。

「……」

――そして。何故か、固まった。
財布を持ち上げるなり、少女はまるで瞬間冷凍されたハツカネズミの様にその動きを停止させ、暫し放心状態で自身の手元を見詰めていた。

一度、ゆっくりと、青年の掌へと財布を戻す。

もう一度、ゆっくりと持ち上げて、やっぱり納得がいかないな～という様な顔で眉根を潜め、首を傾げてみたり財布を振ってみたりしている。
そんな少女を見ながら、真也は繁々と頷いていた。

「さっきは助かったよ。
いや、まあ、原因が原因なんだがな。
それでも一応礼は言っておこう。ありがとう」

「……」

真也の謝辞を気にも留めずに、少女はゆっくりと紐を緩めていた。
袋の口をカパっと開け、スゴスゴと中身を確認していたりする。

「……シン。
怒らないから、正直に言って？」

「……？　ああ」

「ナニ、買ったの……？」

「……は？」

少女の問いが理解出来ず、真也は目を丸くした。
何か自分は、おかしな物でも買ってしまったのだろうか？　などと一瞬だけ不安になった彼は、すぐさま記憶を呼び起こし、一通り問題が無い事を確認してから、正直に答える事にした。

「何って、胃薬だが……」

「……いくらしたの？」

「確か、１００フェオって言ってたか？」

「ひゃ、１００フェオ！？」

真也が平然と答えた瞬間である。
少女の顔が、驚愕に染まった。
一気に色の消えた顔は急速に青くなり、更にそれに倍する速度で真っ赤に変わっていく。

「ふざけないでよ！！
胃薬なんて、高くても精々１０フェオくらいでしょ！？
あんた、一体どこでそんなに吹っ掛けられたわけ！？」

「？　いや、どこって魔荷屋とかいう爺さんだが。
まあ、もう見るからに酔っ払いの浮浪者だったんだが、薬売りつけるなりどこかに……」

「はぁ！？　ちょっと！！
何でそんな怪しいヤツから買った薬をホイホイ飲めるのよっ！！
アンタはっ！？
信じられないどういう神経してるわけ！？」

まるで怪獣みたいに吠えながら、少女は青年の胸ぐらを掴んでブンブンと振りまわした。
そのやたらと迫力のある表情を見て、怒りや困惑よりも先に、何か自分がとんでもない事をやらかしたらしい、という事だけは察する青年。
彼は少女を宥めながら、淡々と口を開いた。

「……参考までに聞くが。
１００フェオって、どの位の金額なんだ？」

「……その財布に入ってたのが１３２フェオ８０ヴァ―ス、って言ったら分かってくれる？」

「……下にもう一つ単位があったのか」

成程、と、真也は納得して頷いた。
簡単に考えて、フェオとやらがドルと同じくらいの相場だったとすると、１００フェオは約８０００円。ユーロと同じくらいだったとしたら１１５００円程度の支払いをした計算になるのだろうか。
この国の物価が分からない為に単純な比較は出来ない真也ではあったが、成る程、確かに胃薬一回分の値段にしては破格と言わざるを得無いだろう、などと、彼は独りで納得していた。
真也が思案しているうちに、少女は大地を揺るがす様な怒気を纏いながら、門を離れて丘の方へと足を向けていた。

「？　どこに行くんだ？」

「家に帰るのよ！！
どうせ残ったお金じゃ布団も買えないんだから、今日はもう終わり！！
アンタなんか、床でも外でも、どこでも好きな所で凍えてればいいのよ！！
勿論、あたしのベッド以外でねっ！！」

不機嫌にそう吐き捨てながら、少女は丘へと向かって行く。
それはどうやら、彼が平然と金をぼったくられた事に対する怒りのみで無く、昨晩から堪りに堪った不満が爆発した態度の様であった。

「ちょっと待ってくれ。
確かにみすみす金を取られたのは悪かったと思うが……。
金額の上限を指定しなかった君にも落ち度はあるんじゃないか？
オレはこの街へ来たのも初めてなんだから、胃薬の相場なんか知るわけが無いだろう」

真也はあまり反省の色も見せず、淡々とそう弁明する。
ソレを聞いた少女は、ピタリとその足を止めて、ゆっくりと振り返った。
表情は、帽子のつばに隠れて伺えない。
しかし怒りに震えた小さな肩は、彼女の沸点を超えた感情を明確に示唆していた。

「胃薬も買えない程バカなやつだとは思わなかったのよ！！
うん、確かにあたしが悪いのかもね！！
アンタみたいなバカに、一瞬でもお財布を渡すなんて、正気じゃなかったわっ！！」

「なに……！？」

見下す様な視線で、少女は青年を罵倒した。
今の言い草には、流石に青年もカチンと来たらしい。
そもそも、不満があるのは少女だけでは無い。
否。不満という点についてのみ言えば、いきなり異世界に攫われ

た挙句に命の危険に晒されている彼も、全く負けてはいないのである。

「元はと言えば、君がオレをこの世界に攫って来たのが原因だろう!!

5大国との冷戦？　世界の覇権？　知るかそんな物!!

不満があるのなら、初めからオレなんか呼ぶなっていうんだ!!」

声を荒げて青年が答える。

少女は、背筋が冷える程に冷ややかな視線を返した。

「勘違いしないでくれる？

あたしが呼ぼうとしたのは、もっと頭が良くって物分りのいい、あたしの役に立ってくれる守護魔なの。アンタみたいな常識知らずの役立たずが出てくるって知ってたら、あんな大変な思いしてまで儀式なんかしてないわよ!!」

吐き捨てる様な、少女の返答。

青年の表情は怒りに歪んだ。

無表情な印象は崩れていないものの、しかし顰められたその細い眉からは、彼も内心に堪え難い怒りを堪えている事が伺える。

彼は大袈裟に肩を竦め、両掌を見せながら鼻を鳴らした。

「ああ、そうか。オレは要らないか。それは何よりだな。

それならもう一回、儀式でもなんでもやって、もっと上等な“協力者”でも拉致してくればいいだろう!!　尤も、短気な君の事だ!!　何度やっても同じ事の繰り返しだとは思うがなぁ!!」

「〜〜〜っ!!」

青年が声を震わせ、そう言い切った瞬間である。
不意に、少女の動きが止まった。
帽子の下に覗く紅い唇はワナワナと震え、肩には必要以上の力が込められている事が見て取れる。
両腕は棒みたいに真っ直ぐに下げられ、拳は音が出そうなくらい強く握られていた。
今にも殴りかかって来そうな様相の少女。
感情の昂ぶりによってコントロール出来なくなった魔力が空気中に漏れ、淡い燐光を発しながら景色を歪め――。

「……そう。
それもいいかもね」

その一言で、丘の気温が5℃下がった。

「……へ？」

呆けた様な真也の声。
彼は、少女から伝わって来ていた怒気の熱が急速引いていくのを感じていた。
まるで、沸点を超えた感情が一周して氷点下になった様な錯覚。
彼女の気配が大気を侵食して、空間を凍らせていく様な光景を幻視する。
――その凍えそうに冷えた空気の中で。
真也は、今の一言が言ってはならない事だったのだと理解した。

「おい……」

底冷えする様な恐怖を覚えた。

少女の右腕が静かに掲げられ、燐光を帯びた指先が、彼の左手に在る魔法円を指し示している。

その意味するところを理解し、真也の背筋には冷たい汗が滴った。

鈍い筈の彼の心音が、ドクンドクンと異常な程に脈を打ち始めていた。

「待て……」

「何で？

もう一回儀式すればいいだけの話でしょ？

じゃあ、アンタなんかもう要らないじゃない」

驚く程冷たい声色が、目の前の少女から響いて来る。

その冷淡な魔術師の空気が風に乗って首筋を撫で、断頭台に立たされているかの様な死の匂いが彼の全身を苛んだ。

――殺される。

彼はそう直感した。

それは元の世界に居た時には感じた事の無い程の、首筋に刃物を添えられるよりも遥かにリアルな、あまりにも直接的な死の恐怖である。

例え元の世界で誰かの怒りを買ったとしても、彼は決してここまでの恐怖を感じる事は無かっただろう。

彼の世界に於いては、当たり前の事だが、人を殺すには殺すしか無いからだ。

人間を正面から殺そうと思ったら、相応の道具を用意して、相応の覚悟と共にソレを用いなくてはならない。そこには、まだ救済の余地がある。逃亡の余地がある。どんなに絶望的だろうと、まだ助かるかもしれないという期待がある。

抵抗も許さずに息の根を止めるなんていうのは、正に死神にしか出来ない芸当だろう。

そういった意味で言えば、青年にとって、この少女こそは正に死神であった。

なにしろこの少女には、それが出来てしまうのだ。

例え真也に魔法が効かないとしても、少女に凶器を所持している様子が無いとしても、そんな事実は何の救いにもなりはしないのである。

彼女はもっと直接的に青年の命を握っていて、ソレを容易く握り潰せるのだから――。

少女にとって、きっとそれは簡単だろう。

青年の左手は、言わば彼らにとっての保険なのだ。それを使用する事が、刺殺や銃殺よりも難しい筈が無い。握られている青年の心臓（いのち）は、それこそほんの少し少女が手を加えるだけで潰されるだろう。

少女にとって、青年を殺すには殺す必要すら無い。もしも、本当に少しでも長く生きたいと思っていたのならば、彼はこの少女にだけは、絶対に逆らってはならなかったのだ――。

「アル……、冗談、だよな？
あの大臣様だって、オレには残って貰わなきゃ困るって言ってたじゃないか。
君の一存でオレを殺すなんて、それはいくらなんでも……」

「……」

少女は、何も答えなかった。
答える代わりに、腕の周囲で空気の屈折率が変わる。
大気が、震え始めた。
それが収束し始めた魔力の波動なのだと、彼は理性では無く本能で理解した。
――自分の人生を終わらせる、最期の燐光。
少女は無言のまま周囲の魔力を掻き集め、そのまま――。

「召喚から一日と経たず、もう廃棄ですか。
まあ、それが貴女程度の術者の限界でしょう。
身の程を知って自ら舞台を降りようという決断は、正しい選択であると賞します」

「――――――！！」

――二人は、その呼吸を止めた。
凛とした声が丘から響き、既にこれ以上無い程に凍てついていた

空気が、絶対零度にまでその温度を下げる。

――振り向いた。

青年と少女は沸騰しかけていた自らの意識すらも忘れ、咄嗟に声の方へと跳ねる様に身構えていた。

過剰反応、では無い。

一秒でも遅ければ斬殺されるという、予感というにはあまりにも確かな直感があった。

背筋に触れる刃物の冷たさは、決して錯覚なんかでは無いだろう。

事実。声の主にとってその距離は、獲物の背筋に刃を当てているも同然なのだから――。

――風が吹いた。

街の方角から吹いたその旋風は、深緑の草本をシャラリと揺らしつつ、涼やかに丘を駆け上がる。

その先。

青年と少女から１０歩程の距離を隔てて佇む彼女の姿を、透き通る様に鮮明な群青の空に映えさせる為に。

清流の様に澄み渡った、白薔薇の微笑。

丘を覆う深緑の草本に浮かぶ様に、純白のドレスが靡いている。

「不思議な事もあるものですね。

まさか、探すまでも無く貴女に会えるとは思いませんでした」

鈴の様な声が響いた。
見る者全ての目を奪う、金砂の髪が風に揺れる。
息を呑む程の美貌の女性は、その怜悧な視線を静かに細めながら、眼下に佇む少女を見据えていた。

「ウェヌス――」

少女が、呟く様に女の名前を零す。
その声に含まれているのは、少女が青年に見せたモノとはそもそもを異にした色であった。
――驚嘆。悲哀。憤怒。絶望。
その全てを内包し、そして混ぜ合わせたかの様な、正に掛け値の無い負の感情。
翡翠の瞳は震える様に、しかし怯むことなく正面から、白い女の姿を射抜いていた。
少女の視線を受けてなお、女は涼しげに口元を緩めている。
清楚な顔立ちに零れる様な笑みを浮かべ、あくまでも優雅に頷いて見せた。

「さて。私が自ら出向いた意味、ですが……。
アルテミア。貴女ならば、もう分かっていますね？」

しなやかな女の右手が、ダンスの様な流麗さで横へと差し出された。
細い指先は、しかし何かを指し示す様に。
彼女の所作には、まるで刑罰を決する神の使いが、罪人の行く末を暗示するかの様な重さと神々しさがあった。
――つられて、真也は女の指先を目で追った。

その段になって、彼は初めて、そこに佇むもう一つの影に気が付いた。

女の隣には、男が居た。

大海の様な青い甲冑を身に纏った、岩の様な体躯。

本来見落とす事などあり得ぬであろう大男は、しかし事実岩の様に、ここに至るまで一言も声を発さずに、気配を殺してそこに立っていた。

「ウェヌス、話は終わりか？」

女が優美に頷いたのを確認し、男は腰から一振りの剣を抜き放った。

下げられた二本の内の、一本。

銘も飾りも有りはしない、ウェヌスと呼ばれた女の傍にはあまりにも似つかわしくないその剣を手に取り、力も込めずに空へと掲げた。

――何かが刺さる音がした。

「……へ？」

漏れたのは、あまりにも間抜けな声。
――それは、どういう手品だったのか。
視線を落とした青年の足元には、男の持っていた剣と非常に良く似たモノが突き刺さっていた。子供の頃から知っていた筈なのに、一度も自身の目では見た事の無い、あまりにも無骨なその鉄屑。
一振りの短剣が、まるで大地から生えたかの様に、サックリと緑の絨毯から伸びている。
地面に突き刺さった、その鋼。
――それが。
彼の目には、何故か自身の墓標の様にしか見えなかった。

「……反応なし、か。
こりゃ予想以下だな」

落胆した様な男の声。
青年が剣から視線を移すと、男の手は既に空になっていた。掲げられた腕も何時の間にか降ろされていて、獣の様な眼光だけが、はっきりとこちらの生命(いのち)を射抜いている。その時になって、彼は漸く、あの男が何をしたのかを理解した。

――投げたのだ。

何の工夫も、種も無く、ただ持っていた剣をこちらへと投げ渡し

ただけ。
何の他意も殺意も持たずに、只々剣を投げ渡しただけなのである。
その事実に気が付いて、彼の全身に流れる血液は凍りついた。

――なんの事は無い。
今彼の足元に剣を投げたあの男は、その剣で真也を串刺しにする事も出来た筈なのである。
“物を投げる”。
そんな些細な、ごく普通の動作でさえ、あの男が行えば人間を殺す行為になる。
そしてソレを理解してしまった彼は、同時にその怪物が剣を投げ渡した意味に絶望した。

「おい、白いの。
さっさと剣を取れ。
一滴でも俺に血を流させたら、お前の勝ちにしてやるよ」

正面から獲物を見据える、青い鎧の獣の声。
低く響いた無色の音が、しかし真也には、あまりにも現実離れした恐ろしさを伴って響いた――。

――――――

「……待て。
待て待て待て待てちょっと待て!!
何がどうなってるのかをちょっと整理させてくれ!!
あんた達は何所の誰で、何でオレがそんな意味不明な事をしなく

ちゃならないんだ！？」

青年は、狼狽しながら誰何の声を発した。
涼やかな彼の双眸は、しかし今だけは白黒と慌ただしく泳いでいる。
その様子を、果たしてどのように取ったのか。
純白の衣装を纏った女性は、目を丸くしながら口元に手をやっていた。

「失礼しました。
初対面の方に対して名乗らないなどと、私はどうかしていた様です」

フワリ、という擬音が似合いそうな所作。
女は、この場にあまりにも不似合いな礼をして見せた。
正直、真也には彼女が何を考えているのか全く読めなかったのではあるが――。
しかし彼女が何かを言おうとしている事に気が付いて、彼は思考を中断した。

「私は武の国（ウォルヘイム）の第一王女、ウェヌサリア・クリスティーです。
その左手の魔法円。
貴方はそこのアルテミア・クラリスに呼ばれた異界の方とお見受けしますが、それは間違いがありませんね？」

「……不本意だけどな」

不機嫌そうな少女の顔を横目で眺めながら、真也は本当に嫌そうにそう答えた。
否定しなかったのは、その意義を感じなかったからである。

質問の形を取ってはいるが、ウェヌサリアと名乗った女にはかなりの確証があるのだと、その声色がハッキリと明示していたのだ。
だからこそ、真也は誤魔化さず、正直に返答した。

「不本意、ですか。
成程。確かに、異界の方々の抱く感情は概してそのようなものであると聞き及んでおります。
加えて彼女程度の術師に使役されるとなっては、まあ不満があるのも当然でしたね。
さて。この度は我々の世界にまでご足労いただいた事、全ての民に代わって心より感謝いたしましょう。
失礼ですが、貴方のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「――――？　朝日　真也。
姓が朝日で、名前が真也、です。
一応、学者をやってますが……」

礼儀正しい女の問いに、今度は真也も目を丸くした。
初見の殺気に気圧されたものの、何やら、彼女は随分と話の分かる様子だったからである。
何のつもりだろうか、などと彼は訝しみもしたが……。
よく考えると、彼女達は自分を殺すなどと一言も言っていないという事実に気が付いて彼は納得した。
内心でホッとしつつ、繁々と女の表情を伺ってみる。
彼が見たことも無い程の美貌の女性は、見た者全てが忠誠を誓わずにはいられない様な、正に女神の笑みを零しながら、まるで歌でも歌う様に口を開いた。

「さて、シンヤさん。

それでは挨拶も済んだことですし、是非とも速やかに死んでは頂けませんか――？」

「なるほど。それはまた随分とシンプルな用件ですね。
まあ、それくらいならば前向きに検討――出来るか！！」

見惚れずにはいられない程の美貌についつい騙され掛けた真也は、しかしその内容を理解した瞬間に全力で首を振った。
なんの事は無い。今のは、もうまごう事無き抹殺宣言である。
目の前の女性は、その容姿とはあまりにも不似合いなセリフを平然と零しながら、真也の拒否を心底不思議そうに眺めて首を傾げている。
……いや。何故そこで首を傾げるのか。
真也は彼女の思考回路がどうなっているのか知りたいような、或いは知るのが怖いような、とても不思議な気分になってみたりする。

「……」

壮大なる謎を胸に秘めたまま、ゆっくりと視線を隣に移す。
女の傍らに佇んでいた大男は、真也の疲れた視線を受けながら、その意図するところを察したように肩を竦めて辟易していた。

「……諦めろ。
うちのお姫様は……、まあアレだ。
ちょっと変わった環境で育ってててな。
挨拶と斬り合いは同じ意味なんだよ」

「……」

――どんな環境だ、それは。
彼のツッコミを代弁出来る人物はこの場にはいない。
男は面倒臭そうに腕を組んだ。

「ま、安心しな。
俺も素人相手に、本気で斬りかかる趣味はねぇからよ」

言葉を失う青年を見据えながら、男はそう嘯いた。
その表情には見るからにやる気が無く、先刻感じた様な強烈な殺気は伝わって来ない。
その様子から、もしかしたら彼はまともな常識を持ち合わせているのかもしれない、と青年は静かに期待した。

「……」

青年は顎に手を当てて思案し、頷く。
成程。良く考えたらこの男は、もう既に一回、こちらを殺す機会を逃しているではないか。
そう。もしもこの男が本気で真也を殺すつもりだったなら、投げた剣でそのまま真也を貫けばよかったのである。
だが、この男はそれをしなかった。
それは、“殺意無し”を証明する状況証拠には十分になり得る代物だ。
それに先に彼が述べた、“変わった環境で育った”という見解は、自身がまともな環境で育っていなくては述べられない物ではないのだろうか？

「……」

一縷の期待と共に、彼は状況を再分析した。

――先程あの男は、一滴でも血を流させたらこちらの勝ちでいいと言ってくれた。
それはきっと、この剣で斬り合えという意味なのだろうが……。
しかし彼が隣のお姫様に振り回されているだけなのだとしたら、まだ望みはあるかもしれない。
もしかしたらわざと負けて、自分を助けてくれるつもりでいるのかもしれないのである。
真也が前向きな解釈に努めていると、男はわかり難い笑みを見せながら口を開き――。

「記念に初撃くらいは打たせてやるよ。
ああ。言っとくが、その後はなるべく動くなよ？
万が一急所外れたら、死ぬ時苦しいぜ」

「……」

……理解した。
なるほど。この場にまともな人間なんて、初めから一人もいなかったのである。

「おいおい。なぁにしけた面してやがんだよ。
お前だって、いつかはこうなるって分かってたんだろ？
それが偶々今日で、相手が俺だったってだけの話だ。
……ま、男らしく観念するんだな」

放心する真也を慰める様にそう言いながら、男はヒラヒラとその左手を振ってみせた。
掌には、橙赤色の魔法円がチラついている。
物理法則を歪曲する、この世界が誇る魔導の奇跡。
その事実を認識したところで、青年の顔は驚愕に染まった。

「まさか……。あんたもか？」

真也の問いに、男は溜息の様な笑みを零した。
それは、果たして肯定だったのか。
彼は自らの腰に残ったもう一本の短刀に手を掛け、金属音を鳴らしながら引き抜いた。

「待て――。待ってくれ！！
あんたがオレと同じ立場なら、何でこんな事をする必要がある！？
言っておくが、オレにはあんたに危害を加える意思なんか無い！！
いや、そもそも……」

真也の声は、短刀による風切り音に遮られた。
剣風は矢切の様な残響を残し、丘に渦巻く風の流れを僅かに変える。

「……最後だ。
剣を取って向かって来い。

やらないなら俺からいくぜ？」

「……っ」

空気が、張り詰める。

剥き出しの殺気に呼吸器を圧迫され、真也は吐き気すらも覚えた。

胃酸の濃度が急速に高まり、喉が抉れる様な胸焼けが、真也の神経を犯していく。

――殺す気だ。

青年は、静かにそう直感する。

説得は、おそらく無意味だろう。

無駄な力を入れず、まるで掌と一体化したかの様な自然さで握られた短刀。

一体どれ程剣を振るってくれれば、あんな握り方が出来る様になるのか。

男にとって、それを振り下ろすのは呼吸となんら変わりないに違いない。

弁明や口上など、口にする間も無くあの短刀に両断されることだろう。

――それに、である。

仮に、万が一この男に戦意が無いとしても、そんな物は何の救いにもなりはしないのだ。

彼が真也と同じ立場であるのなら、隣のそう女が命じる以上、彼は決して逆らう事なんか出来ないのだから――。

「……」

剣の柄に手を掛けながら、青年の顔は絶望に染まった。

――勝負になどならないだろう。

彼は、本能でそう理解した。

この剣を抜けば、朝日　真也は一瞬で殺される。

男は、もしかしたら、宣言通りに一撃くらいは打たせてくれるかもしれない。

だが。それで終わりだ。

正面切っての喧嘩も殆どしたことの無い真也は、次の瞬間には一息で急所を突かれて絶命することだろう。

この男は、それこそ真也が死んだ事にも気が付かない程に、華麗且つ速やかに彼の息の根を止めてくれるに違いない。

「……」

――コレを抜けば、死ぬ。

だが抜かなくとも、恐らくその結果は同じだろう。

余命を宣告されたかの様な、絶望的な悪寒が、青年の脳を麻痺させていた。

確実に助からないと分かる高さから突き落とされた様な、毒を呷ったかの様な寒気と共に、思考を殆ど停止させながら、真也は剣の

柄へと力を込め――。

「その目を差し出せ、愚かなる賢者（nyd peorth hagal ash）」

「――――――！！」

瞬間。少女の声が、最果ての丘へと響き渡った。
膨大な魔力が、全員の虚を突いて爆弾の様に空へと炸裂する。
魔力によって強められた光は一瞬にして太陽の数倍に至る明るさの閃光を生み出し、門の外を白一色に染め上げた。

「閃光魔法（目眩まし）！？
まさか、魔術を行使している気配なんてどこにも……！！」

驚愕の声は女の物だ。
それは視界を奪われた事に対する動揺か、或いは自らを出し抜いた少女の手腕に驚嘆したからなのか。

「シン、こっち！！　走って！！」

――腕が、引かれるのを感じた。
何も見えない闇の中で、青年は少女の声だけを頼りに足を動かす。
転んでいる暇なんて無い。息をしている時間すらも惜しい。
安定感の無い草の大地を、青年は思考を放棄して全速力で駆け抜けた。

「ネプト、追撃を！！」

「分かってる！！」

青年には何も見えない。

視界という最重要の知覚が消えた分、他の感覚は信じられない程に鋭敏になり、特に聴覚は嘗て経験した事が無い程に過敏になっていた。

――だからだろう。

青年の耳は、本来聞こえない筈のその音を拾っていた。

（風を切る、音……？）

「ギ……ッ！？」

――左腕に熱を感じた。

まるで、焼鏝でも押し当てられたかの様な錯覚。

皮の中を抉るナニカの感触が、あまりにも生々しく彼の精神を侵食する。

――足が、止まりそうになる。

これ以上は動けない。せめて自分の腕がどうなっているのかを確認するまでは、これ以上は一歩も走れない。激痛と焦燥に、青年の足は縺れそうになった。

「グ……ッ、ア゛！！」

――走れない。

走れない、筈なのに。

右腕に感じる少女の手は暖かくて、そして一生懸命に力が込めら

れていた。
体温が、伝わって来る。
それを意識していると、青年の脚は何故か勝手に動いてくれていた。

少しすると、足から伝わる感触が変わった。
柔らかかった地面の感触は、やがて乾いた音を響かせ始め、直ぐに硬い石畳の物へと遷移する。

「衛兵、敵襲！！
ぼさっとしてないで、さっさと門閉めて！！」

感じるのはただ、激痛と灼熱。
苦痛しか無い真っ暗な世界に、少女の声だけが篝火の様に響いていた――。

――――――

「……しくじったか」

色を取り戻した丘。
獲物を貫いた筈の自らの短刀が地面に果てているのを視認し、青い大男は息を漏らした。
その顔には、微かにバツが悪そうな色が浮かんでいる。

「言い訳をしないのですね」

獲物を逃した従者を叱責する事も無く、女はあくまでも優雅に告

げた。
女の美貌には、しかし細やかな微笑が浮かんでいる。
まるで、彼は言い訳をしてもいい程の仕事をした、とでも言うかの様に――。
そして事実。女は本心からそう思っていた。
男の行った追撃は、その実十分に常理を外れた物だったからである。

「音だけを頼りに投げたにしては、十分に過ぎる精度です」

顔に浮かぶ笑みを深めながら、女は静かに彼を労った。
漸く完全に戻った視界で、地に落ちた短刀と、ソレを投げた男を交互に見比べながら――。

視界が奪われたその一瞬。感覚を鋭敏にしたのは青年だけでは無かった。
いや。感覚を研ぎ澄ませたという点で言えば、戦闘に慣れている大男は、寧ろ青年に増して上手く感覚器を使いこなしたと言えるだろう。
――地を踏む獲物の足音。
――押し殺した呼吸音。
それらを人間離れした聴覚で聞き届け、そしてそれだけを頼りに、男はその短刀を投合していたのである。
ならば急所を外したとはいえ、その絶技は賞賛を受けて然るべきものだっただろう。
例え命を奪うまで至らなくとも、その短刀に血を付けたのは十分

な達人芸であると言える。

「……」

しかしそれでも尚、男は釈然としない表情を浮かべていた。

――だが。寧ろ男にとって、それは当然である。

何しろ彼は、短刀が青年の心臓を貫いたのを確かに“見た”のだから。

虚勢では無い。

視界を奪われて物理的な意味で青年を捉える事は叶わなかったが、それでも彼は間違いなく、自らの短刀が敵を貫いた像を脳裏に浮かべたのである。

瞼の内に仕留めた像が映ったならば、短刀は間違いなく獲物の心臓を貫いていなければならない。

現実とズレる像を幻視する程、彼の重ねてきた鍛錬は自堕落では無いのだ。

彼にとって、この世界が“そう”でさえなかったのならば――。

「いや、俺の落ち度だ。

――ったく、まだまだ修行不足だな」

しかしソレを分かって尚、男は一切の弁明をしなかった。

――未だに慣れない、この世界の“理”。

そんな事実（こと）は、いざ戦闘になれば何の斟酌もされないと十分に理解しているからである。

「んで、どうするんだ？

あいつら防壁の中に篭っちまったぞ？

まさか向こうから出てくる事もねぇだろうしよ、なんか作戦でもあるのか？」

「おかしな事を聞くのですね。
分かり切った事でしょう」

眼前に聳える、山の様な高さの防壁。
難攻不落としか形容出来ないその威容を視界に収めつつ、ウェヌスは不敵な笑みを浮かべながら言い放った。

「無論、正面突破です――！！」

「やっぱりな……」

爛々と燃える彼女の瞳から目を逸らしながら、男は海よりも深い溜息を吐いた。
――彼は、もう知っている。
このお姫様に頭を使った作戦を要求しようなどという前提が、そもそも根本から間違っているのだ、と。
男の美貌の雇い主は、思慮深そうな容姿をしながら、その実一つ以上の事を考える事が極端に苦手な気質の持ち主であった……。

「わかってると思うけどよ、あの嬢ちゃんはそこそこ手馴れてたぜ？」

「そのようですね。
……確かに、彼女も一応は“大魔導”でした」

ウェヌスは少女の機微を思い返しながら、静かに分析した。
――先の魔術は、彼女をもってしても発動の瞬間まで魔力の波を一切感じ取れなかった。
おそらくは自分達が会話をしている間に、こちらが気付けない程にゆっくりと、魔力をその腕に流していたのだろう。今のが彼女の“先天魔術（ギフト）”でないとすれば、その術式構築の手腕は尋常ではない。

「……」

未知数とも言える、“彼女”の実力。
防壁の中へと籠った、敵。
それら全てを理解した上で尚、彼女は小さく頷いて見せた。

「彼女が全力で挑んで来るのであれば、万に一つくらいは私に手傷を負わせることもあるかもしれません。
彼女は私にとって、近年稀に見る難敵と言って良いでしょう。
――そんな相手の本拠地を、正面から打ち破る。
ええ、考えただけでも心が踊るではありませんか――！！」

「……」

……男が呆れて頭を抱えていた事に、彼女はついぞ気が付かなかった。

１４．　とある物理学者の科学者とはかくあるべしという信念の合理性を考察する

えーと。そんなわけで、次回から戦闘パート突入です。
……はい。やっぱり書きなれてないと、バトルってすごく難しいです。
なんとか飽きないような文章にしたいなー、なんて思ったり、やっぱり長くなってきてるなー、なんて落ち込んだり……。
その、そんなわけで、ちょっとドタバタするかもですけど、ここから先も読んで頂けるとうれしいです！！

15.　刃物による裂傷の適切な処置に対する世界観と常識及び体構造の相違に

青年は暗闇の中を駈けていた。

瞼の開閉に意味は無く、彼の眼球に映る景色は何も無い。自身の眼球が潰れたのか、それとも太陽が消えてしまったのか。否、実はとうに死んでいて、精神だけが未だに世界を逃げ惑っているのか。

それすらも、分からない。

そのいずれも彼は経験した事が無いのだから、そも証明する術など持ち得ないだろう。

――そう、彼は経験した事など無かったのだ。

彼の手はあんなに野蛮な鉄屑に触れた事など一度も無いし、増してやそれで斬り合えと言われた経験などある筈も無い。

肉を抉る刃の感触も知らなければ、傷口から体内を侵す、焼鏝を押し当てられた様な熱も知らない。

あまりにも異常な事態。

あまりにも異常な恐怖。

それ故に知覚は麻痺し、思考は飽和し、彼の意識は赤黒い闇の中へと沈んでいった。

確かに感じる物、分かる事は一つだけ。

自らの手を引く緩やかな体温。

一生懸命に右手を引く、小さな柔らかい手の感触。

それだけを頼りに、彼は漆黒の荒野を駆け抜けていた。

身体は既に限界を訴えていた。
心臓は破裂しそうな程に早鐘を拍ち、左腕から流れるヌメリ、とした生温かさが、まるで腐食毒の様に、ジクジクと彼の精神を犯していく。

轟々とした耳鳴りは止まない。
皮を削がれ、肉を抉られた左腕は秒単位で熱を増し、死の恐怖で茹だった脳を沸騰させてゆく。

――だが、彼の足は止まらない。

立ち止まると、またあの風切り音が聞こえて来る。
止まったら今度こそ致命傷を負わされる事は分かりきっていたし、何よりこの小さな手が自分を引いている以上は、音を上げる事など出来る筈もなかった。

少し力を込めれば折れてしまいそうな、青年に比べてあまりにも細い手。柔らかい肌には汗が滲み、指先から感じる鼓動は青年の動悸よりも更に早く脈を打っている。
それでもなお、少女は精一杯の力で青年の手を取り、上がった息を押し殺しながら彼を先導していた。

――たったそれだけの行為。
ただ触れ合っているだけの手の平。
だというのに何故か、青年はたったそれだけの事に、心臓を温められる様な錯覚を覚えていた。

「シン？　そこに座って？」

果たしてどれ程の距離を走ったのか。
既に数キロも駈けた様に感じられるし、実は１００メートルにも満たないのかもしれない。
視界を奪われた彼にそれは分からなかったが、突き飛ばされる様にして座らされた場所には確かに椅子らしき物があり、この闇の中にも自分以外の物体が存在した事に安堵した。

背後からは水音が聞こえる。
雨でも降っているのか、規則性のある音響は湿り気のある冷風を運び、熱病に侵された様な彼の脳を申し訳程度に冷ましてくれた。

「――――っ？」

青年は、息を呑む様な音を聞いた。
熱を持った傷口にヒタリ、という指先の感触を感じた後、左腕から何かが破れる音が聞こえてきた。

「ちょっと待て、何を……」

「動かないで？
傷口洗うから、ちょっと染みるけど我慢して？」

「は？　染みるって……グッ？」

彼の疑問には答えを返さず、少女は彼の腕に何かをかけてきた。
神経に痺れる様な違和感を感じ、激痛が脳を漂白する。

しかし、傷口から伝わる刺す様な冷たさが、熱せられたフライパンみたいになった腕を、多少なりとも冷却してくれた。

腕にかけられたものが、目が覚める程に冷たかったからだろうか。麻痺していた彼の眼球は、漸くその機能を取り戻し始めた。過剰な閃光により分解されきった色素が標準値に戻り、網膜がその機能を取り戻していく。

「――――」

ぼんやりとした視界。

未だに虚ろなその世界の中に、朧げながらもその姿はあった。真っ黒な影と、その下に覗く真紅の色彩。

「……アル？」

名前を呼ぶ。

少女は、まるで案じる様に青年の様子を伺っていた。未だに呼吸が整わないのか、その細い肩は激しく上下を繰り返し、紅潮した頬には一筋の汗が線を描いている。

――少女の容姿は、改めて見ると、呼吸も忘れて見入ってしまう程に可憐であった。

翡翠の様な翠の瞳は微かに潤んでおり、痛ましそうに、或いは案じる様に青年の左腕へと向けられている。

「――って、待て？」

その視線の意味を理解した瞬間、青年の思考は吹き飛んだ。

少女の視線を追い、咄嗟に左腕へと視線を落とす。
悪夢の様な激痛と、夢だと思いたい様な刃の感触に魘されながら――。

――真っ赤だった。

科学者たる彼を象徴する、純白の装束。
それは上腕の中頃でパックリと裂けて、毒々しい色のペンキをだらしなく吐き出している。
肘から下には、最早白衣という名称も当てはまらないだろう。布地が吸い切れなかった血糊はベタベタと垂れ流され、傷口に触れる少女の手は、赤黒い彩色で妖しくテカッていた。

「う……」

強烈な吐き気に言葉を失う青年。
見たことも無い程の出血量に、貧血に似た目眩を覚える。果たして傷はどれ程深いのか。抉られた傷口の酷さを想像すると寒気すらも覚えた。

それ以上自らの傷を見ていられなかったのか。
青年は、大きく息を吸いながら視線を上げた。
視線の先には真紅の少女。
彼女は傷を観察しながら、ホッとしたかの様に息を吐いていた。

「よかった。
傷、そんなに深くない」

心底安心した様に、穏やかな微笑を浮かべる少女。
そのあり得ない言葉に、青年は耳の奥で金属音を聞いた。

「深くない？　そんなわけが無いだろう？
動脈くらいは切れてるぞ？　これ？」

「ちょ、ちょっと落ち着いてよ？
血が沢山出てるからそう見えるだけで、傷自体は、全然大した事ないんだから……」

「大した事ない傷から大量出血なんかするものか？
人体構造に対する冒涜だぞ？　それは」

狼狽し、声を荒げる青年。
しかしそれも、無理は無い事だろう。
生物学の世界では、重要な器官ほど内側に守られるのが常識なのだ。血管も同様で、一部の例外を除いては、大量出血する様な血管は皮下の相当に深い所にしか存在しない。この出血量ならば上腕の半分くらいは切断されているだろうに、それを“大した事が無い”などと言われては、彼が激昂するのも当然だと言える。

青年は証拠を見せ付けるかの様に腕を突き出しながら、問題の傷口に視線を落とした。

「……って、あれ？」

間抜けな声が漏れた。

大男に斬られた、グロテスクな肉の裂け目。

よくよく見てみると、その幅は５ｃｍにも満たなかったのだ。

深さも大した事は無いようで、腕の半分どころか、パックリという表現を使えるかも怪しいくらいの規模でしかない。端的に言うと、ただのかすり傷である。

「アル。傷を治す魔法でも使ってくれたのか？」

あまりにも拍子抜けな傷の大きさ。

それがあまりにも信じられなかったからか、青年は目の前の少女が何らかの治療を施してくれた可能性に思い至った。

少女は、呆れた様に眉を潜めている。

「そんな複雑な魔術使う暇なんか無かったし、そもそもあんたには効かないじゃない。

……そういうあんたこそ、本当はあたしをからかってるんじゃないの？

あんたの世界の人間って、実はちょっと切っただけで大出血する習性があるとか……」

「……」

青年は首を傾げるしかなかった。
体構造の異なるであろう、この世界の人間を比較対象にする事など出来ないし、そもそも彼は、よくよく考えると人体のどこを切ればどの位の出血をするのが一般的か、などという知識を正確には持ち合わせてはいなかったからである。

……取り敢えず分かるのは、少女が言うような習性を持つ生き物は、どこの世界でも真っ先に自然選択の犠牲になるであろうという事実だけであった。

「まあ、それじゃあこの傷は初めからこうだったって事か……。
……ん？」

納得しかけた所で、青年は再び首を傾げた。
傷はそんなに深くない。
しかし少女の口振りからして、なんらかの治療を施した訳ではないのだろう。
それはいい。
それはいいのだが……。

「アル。それじゃ、さっき腕に掛けたのは何だったんだ？」

青年は小さな疑問を口にした。
少女は、傷の治療をした訳ではないらしい。
それでは、果たして先程の刺す様な激痛は何によって齎された物なのだろうか。

「何って、傷口を洗っただけだけど。

ほら、そこの水で」

平然と答えながら、少女は青年の背後を指差した。
背後からは水音が聞こえて来る。
振り向く青年。
彼は、じっくりとそのオブジェを観察した。

それは、街のほぼ中心部に位置する噴水だった。
彼は今になって気付いたが、どうやら少女が彼を連れて来たその場所は、先刻待ち合わせに使った噴水の広場だったらしい。

どのような原理なのか。
巨大なウェディングケーキの様な形に造型されたその装飾は、滝の様に止めど無く水を噴き出し、辺りに雨音を響かせながら下部のプールへと水を溜めている。

「……」

……滅多に掃除されないのだろう。
貯水槽には苔らしき物が生え、枯れ草みたいな物がポツポツと浮かんでいる。楠んだ水の表面には、アメンボみたいな生き物が、軽快にピョコピョコと跳ねていた。

「……傷口を洗ってくれたのか？」

「うん」

「……この水で？」

「……？　うん」

青年はその水を、恐る恐る手で掬ってみた。

一応のところ透明と呼べるその液体は、低い気温の為なのか驚く程に冷たく、何故か少しペトペトとしていた。

砂埃だろうか。水を落とした掌には、謎のざらつきが残っている。

「……」

彼は、静かに、息を吸った。

「何をしてくれてるんだ？　君は？

こんな物傷口にかけたら病気になるだろうっ？」

「へ？　だ、だって、傷は洗わないと危ないし……。

それに、どうせ守護魔はこの世界の感染症になんか罹らないんだからいいじゃない？」

「感染症に罹らないならば何の為に洗ったんだ？

そもそも、洗浄するのは傷口に着いた砂やゴミを落とす為だろう？　ゴミだらけの水を掛けるとか、何がしたいんだ君はっ？」

「仕方ないでしょ？

他に傷を洗える所なんて、王宮か魔導研究所くらいしか知らないし……。
そ、それに……。
あたし、誰かの傷を手当てするなんて初めてなんだから？」

「待て？　今の発言は問題だぞ？
この街の民衆の君への怯え方は尋常じゃないじゃないか？？直ぐに癇癪起こして人を焼き殺そうとするくせに、自分で被害者の手当てをした事がないっていうのか？」

「失礼な事言わないでよ？
人を魔術で吹き飛ばすなんて、精々1日に1回くらいなんだから？」

「日課じゃないか？
どこの大怪獣だ？　君は？
それともアレか？　君には壊す機能しか無いのか？
創造とか修復っていう概念が遺伝子レベルで欠如してるんじゃないのか？」

「な……っ？
ひ、人が折角心配して手当てしてあげたっていうのに、あんた何様なわけ？
大体、元はと言えばあんたが門の外になんか出るからこんな事になったんでしょ？
自業自得じゃない？」

「あんなのが出てくるって知ってたら、誰がのこのこ門の外になんか出るか？
君の説明不足にも責任はあるし、元はと言えば君がオレを拉致し

たのが原因だろう？」

「あんたなんかを呼ぼうとした訳じゃないって言ってるでしょ？　あんたこそ守護魔なら、あのくらい躱して、あんな連中くらい返り討ちにしてみなさいよ？」

「どんな理屈だ？　大体、あんな化け物の相手を出来るのは怪獣くらいだろう？　君こそ怪獣なんだから、あんな大男は鼻息一つで吹き飛ばしてみせろ？」

「な、なんですって～～っっ？」

再三の様に不毛な口論を始める二人。

真昼間の広場に悪口雑言の対人結界が出来上がり、雑談に興じていた母親達は泣き出した子供を連れて去って行く。街の中心たる憩いの場は、あっという間に無人の荒野へと変わり果てた。

噴水のポチャポチャという音までもが何故か神経を逆撫でしている様な錯覚を引き起こし、沸騰した二人の脳にガソリンをぶっ掛ける。

彼らの口論は、例の如くお互いの息が切れるまで続いた。

「はぁ……、はぁ……」

「はぁ……、ふう……」

暫く揉めていた二人ではあったが、やがてどちらからとも無く矛を収めた。おそらく、口論などしている場合では無いという事実に

気が付いた為だろう。
少しばかり自覚が遅かったようだが、二人は静かに目を閉じながら、同時に大きく息を吐いた。

「……今はこんな事してる場合じゃなかったな。
それで、あいつらは何者なんだ？
なんか、武の国がどうのこうのって言ってたが……」

青年の言葉に小さく同意の意志を示す少女。
切り替える様に呼吸を整え、不機嫌そうに表情を曇らせた。

「何者もなにも、あいつが自分で言ってた通りよ。あの女はウェヌサリア・クリスティー。武装姫（ワルキューレ）の異名を持つ、武の国の大魔導。
隣に居た大男は知らないけど……、多分あいつが呼んだっていう守護魔で間違い無いと思う。

まったく……。
召喚主になったとは聞いてたけど、まさかあんたを呼んだ翌日に攻め込んで来るなんてね。ホント、あいつどこまで暇なんだろ」

飽きれたとでも言わんばかりに、溜息混じりに少女は語る。その口調はいつもにも増して棘があり、内心の嫌悪感が滲み出ていた。
どんな遺恨があるのか。
少女は女の行動を納得しているようだったが、青年には余計に謎が深まっただけであった。

「……分からないな。
武の国って言えば、確か敵国だろう？
いや、オレがこの国を発展させる為に呼ばれたならば、敵国の人間がオレを殺そうとするのは当然なんだろうが……。

それにしたって、お姫様がわざわざ呼んだ“協力者”と一緒に、オレを殺す為だけに単身この国に乗り込んで来たっていうのか？」

青年はどうにも納得がいかない様子である。

少女は小さく溜息を返しながら返答した。

「そっか。そこら辺の常識も、この世界とあんたの世界じゃ違うんだ……。

いい？　この世界の国境は虹の橋（ビフレスト）って呼ばれててね、説明するとちょっと複雑なんだけど……。

簡単に言うと、大人数での越境が難しいのよ。

だから軍隊なんか滅多な事じゃ送れないし、あんたを殺す為に刺客を送り込むとしたら、必然的に少数精鋭にならざるを得ないの。

でもほら、あんたに魔法は効かないでしょ？

それに召喚主だって一流の魔術師なんだから、相応の戦力を送らないと、そもそも刺客になんかなり得ないじゃない」

「成る程な……」

青年は顎に手を当て、思案する。

国一番の魔法使いだという少女。

この世界での戦闘がどういう概念なのかを未だに把握しきれていない彼ではあったが、それでも目の前の彼女が相当な戦力であろう事は理解できていた。

……何しろ、癇癪を起こしただけで火球を生み出す生き物である。

ここが地球であれば真の意味での百獣の王になれるだろうし、青年も魔術が効かないという特性が無ければ、間違い無く昨夜の段階で

消し炭にされていた事だろう。

「……なんか、失礼な解釈してない？
今は気にしないであげるけど……。

とにかく、召喚主は普通は一流の魔法使いがなるものだから、刺客も相当の魔法使いじゃないと意味がないって事。けど守護魔には魔法が効かないんだから、魔術師を単騎で送っても勝ち目が無い。

つまりね、敵国の守護魔を殺す為には、自国の召喚主と守護魔を送るのがこの世界のセオリーなの。
常理の外には常理の外を。
他国の守護魔は自国の守護魔をもって打倒するべし、ってね」

少女の言葉に、青年は先程の2人組を思い出した。
成る程、あの大男は相当の手練れらしかったし、その上魔法が効かないとなれば、確かにこの世界の人間にはお手上げなのかもしれない。

万が一、真也が大男を止める事が出来る程に戦闘に長けていたとしても、あのお姫様が少女と同格の魔法使いならば、彼女が少女を討つ事で結果として守護魔を殺す事が出来る……筈である。
真也には確証が無かったものの、自らの左手の魔法円を維持しているのが少女である以上、その可能性は限りなく高いと思われた。

「……ん？」

一通り納得したところで、再びハタと首を傾げる。

「でもそれって、かなりの博打だよな。
失敗すれば、貴重な協力者どころか強力な戦力まで失う事になる。
増してや、さっきのは第一王女様なんだろ？　やっぱり自分から攻め込んで来るなんて思えないし、さっきの理屈なら、あの大男だけをこの国に送り込んでも良い筈じゃないか」

否、むしろそれこそが当然の判断だと思われた。召喚主が魔法円を維持しなければ守護魔は生存できないのであれば、召喚主を敵国に送り込むなんていうのは自殺行為以外の何物でも無い。
増して守護魔とは、協力者の名を借りた奴隷の様なものである。死ぬ気で敵と相討って来い、などと言われても断れる立場には無いのだから、敵国の守護魔を殺させる事を躊躇する理由も無いだろう。

少女は顎に手を当てて、何かを思い返す様な仕草をしていた。

「確かに、そういう手段を使う国も多いみたい。
だから、ウェヌス本人が乗り込んで来たっていう事は……。

――きっと、自信があるんだと思う。
単身で乗り込んでも、あたし達なんか敵じゃないっていう。
まあ、最も武の国（あのくに）は強さが全てって感じの変態国家だから、あたし達の相手を守護魔だけにやらせるっていうのは、王族として許されないのかもしれないけど……」

“嘗めてくれるじゃない”、と、少女は心底不快そうに舌打ちをした。その様子から真也は、どうやら少女が先程のお姫様に並々ならぬ嫌悪感を抱いているらしい事を再認識する。
――いや、敵国の王族を毛嫌いするのは当然なのかもしれないが、

それにしても彼には、少女の敵意は少々行き過ぎているように感じられたのだ。

真也は、話を変えるように腕を組んだ。

「まあ、ともかくとして、あいつらはオレを殺したがってるって事だな……。

それで、これからどうするんだ？

あんなのがいるならおいそれと街の外になんか出られないし、そもそもあいつらが街に乗り込んで来たらアウトだ。人混みの中で襲われたら逃げようが無いぞ？」

やれやれ、といった様子で質ねる青年。

そんな彼に対して、少女は得意気な笑みを浮かべていた。

「あの防壁が見えないの？

アレは最高純度のアダマス鉱で、よっぽどの事をされない限りは破られる事なんかまず無いの。

まあ、壁は壁だから絶対に破れないってわけじゃ無いんだけど、あんなの無理して破ったって、疲れきったところを王宮魔術団に囲まれる。

まっ、要するにね。よっぽどのバカでもない限りは、たった2人でこの街に攻め込んで来たりは――」

青年は、少女の言葉を最後まで聞く事は出来なかった。

耳を潰す、劈く様な鐘の音。

それが辺り一帯の音を津波の様に飲み込み、少女の声など跡形も無く掻き消したからである。

『敵襲？　敵襲？　敵は防壁を破り、正門前商店街に侵入？　王宮魔術団は、即刻出撃準備を整えよ？
繰り返す？　王宮魔術団は、即刻出撃準備を整えよ？』

果たしてどういう原理なのか。
メガホンで拡張されたような声が天高く響き渡り、それで青年は、今の鐘の音が警鐘であったという事実を知った。

「……アル」

「……何？」

小さく、溜息を吐く。

「どうやら、よっぽどのバカだったみたいなんだが……」

「……」

言葉を失う少女。
その目は伏せられ、右手は飽きれ切った様に頭を抱えていた。

「……アル。
一応確認しておくが、さっきの言葉に間違いは無いんだよな？
あいつらは疲れ切ってて、今頃王宮魔術団とやらに囲まれてるん

だよな？」

淡々と、少女に言質を求める青年。
彼女は乾いた声で笑いながら、苦笑としか形容出来ない表情を浮かべていた。

「えーと、ゴメン。
まさか、こんなに速く防壁破れる生き物がいるなんて思ってなくてさ」

「……ああ、それで？」

「その……、多分、あいつらもちょっとは疲れてると思うし、今頃、詰所に居る警備兵とかに囲まれてるとは思うんだけど、多分ウェヌスなら1人で片付けちゃうし、王宮魔術団も“出撃準備”って言ってたから、隊列組むのにちょっと時間掛かると思うし……」

「……？
ああ、だから？」

「……」

少女は黙った。
言い難そうに、ごにょごにょと何かを口籠る。
少しした後、誤魔化す様な笑みを浮かべながら頬を掻いた。

「あはは……。
その、ホントにゴメン。
多分、あいつらここまで来ると思う」

「……」

固まった。

青年は言葉を失い固まった。

その表情は能面の様に色を無くし、顔色は末期ガン患者も真っ青なくらい青くなってゆく。彼の右手は無意識に左腕を掴み、両肩はプルプルと震えていた。

「ふざけ……」

青年が何かを言おうとした瞬間、正門の方から響き渡った爆音が彼の声を遮った。それが何らかの戦闘による物だと悟り、彼の脳内は一瞬にして漂白される。

少女はそれをどう感じたのか。

先程までの、年相応な表情は成りを潜め、敵を見据える魔術師の顔付きで正門の方角を眺めていた。

「跳躍（raidho）」

少女が何かを唱える。

瞬間、少女の足元では旋風が渦を巻いた。

瞬きの内に彼女の身体は一枚の羽根と同程度の重力しか受けなくなり、跳躍は小さな身体を数メートルも跳ね上げる。

少女はそれこそまるで妖精の様に、止めど無く水を吐き出す噴水の上へと降り立った。

「思考と記憶、二対の翼。（ansur hugi ᛗ nninn peorth wyn jara）
我が両肩で世界を語れ」

それはどの様な魔術なのか。
右腕に収束した魔力は少女を中心に燐光を撒き散らし、噴水をオレンジ色の靄で覆っていき――、

「賢者の高座（フリズスキャルグ）」

銘の詠唱と共に、その全てが拡散した。

少女の意識は街中へと四散し、同時に王都の全ての場所を覆っていく。街中に流れる魔力の波。その葉脈に走る水の如きか細い変化を、自らの魔力の波動によって寸分違わず把握する。

――位置は正門前に限定。建物、地脈、大気を満たす魔力の波動。変化の無い無機物は除外。魔力の乱れが見られる生命体に条件を限定。該当数３４５。内、総量が平均値に満たない存在を除外。火、氷、風、土。単純な四大元素の波動を消去。音を拾い、魔力の波を視覚化し、無関係なノイズをトリミング。

砂場に紛れた、たった一本の針を拾い上げる――。

「見つけた」

少女は微笑を浮かべた。
彼女が見つめるのは遥か正門。
建物の陰になって見えない筈のその場所に、彼女は確かに敵の姿を認めていた。
その波動にピントを合わせ、外さない様に気を払いながら、少女は軽やかに噴水から飛び降りる。

「見つけたって、あいつらを？」

「正確にはウェヌスの魔力だけだけどね。
取り敢えず、あんたはあの大男を抑えて。
ウェヌスだけなら互角に戦えるけど、守護魔が出て来たら、魔術師じゃどうしようもないから」

「……は？」

青年の、空気が凍った。

自分があの大男を抑える。
彼自身そんな光景は想像出来なかったし、そもそもあの男がその気になれば、青年など視界に入った瞬間に殺せるのだ。

即ちあの大男を抑えるというのは、遠回しに死ねと言っているのと変わらない。

「……別に倒せ、とは言ってないわよ。
あんたじゃアレには敵わないって分かってるから。
暫くしたら王宮魔術団も来ると思うから、それまで時間を稼いでくれればいいの」

淡々と告げるその口調とは裏腹に、少女の面持ちは渋かった。内心では、それがどれ程無茶な注文か分かっている為だろう。
しかしそれしか生き残る術は無いと、その翠の瞳が告げていた。

門を見据える少女。
目線はそのままに、懐から何かを取り出した。
楠んだ色の、古ぼけた羊皮紙。

何らかの設計図の様な物が描かれたそれを、少女は青年へと手渡した。

「王宮の隣に時計塔が見えるでしょ？
ソレは、その中の見取り図。
この街で一番高いあの建物ならこの街全体を見渡せるし、内部が入り組んでるから上手く立ち回れば撒けると思う。無茶だって分かってるけど、なんとか持ち堪えて」

少女に言われて、時計塔を見上げる。
文字盤に数字が２０まで描かれたその塔は、まるで下界を見下ろす高座の様に聳えていた。
位置は丁度、王宮の真隣。
成る程、何かがあっても直ぐに王宮魔術団とやらに助けを求められる位置であると、青年は少女の気配りに感心した。

「いい？　戦え、なんていう贅沢は言わない。
あんたは何とかあの大男の注意を引き付けて、王宮から魔術団が出てくるまで逃げ切る事だけを考えて」

おびき寄せる作戦なのだろうか。
少女はそれだけを告げると、慌ただしく街の奥の方へと駆けていった。

「……穏やかじゃないな」

正門前からは、未だに戦闘の音が響いている。
無人となった広場。
青年は、誰にとも無くそんな呟きを零していた。

一一一一一

門番の青年から敵襲の知らせを受け、いざ正門前に辿り着いた警備兵達は絶句した。

――銀の国王都・シルヴェルサイト。

白銀の都たるその街を取り囲む防壁は強固にして絶対。龍種の爪や牙でも傷一つ付かず、帝霊級魔術の一撃ですらも跳ね返す。

故にその壁は何者にも破壊する事など能わず、外界と内界を隔絶するが如きその偉容は、それこそ魔術大国・銀の国の絶大なる国力を示している。

――そう信じて疑わなかった彼らには、目の前の光景が到底信じられなかったのである。

断っておくが、防壁には傷一つ無い。

鏡の様な美しさを誇る壁面も、天に届く様なその高さも、何一つ変わらずにそこにある。

違うのはただ一つ、小さな穴がある事だけだ。

辛うじて人が通れる程度の大きさの穴が、まるでそこだけ絵でも描かれたかの様に、ポッカリと外界へ繋がっている。

不可解だったのは、その穴の空き方である。

警備兵達も、それが破壊による傷跡であったのならば納得したに違いない。いかに強固な防壁と言えども、所詮は壁に過ぎないのだから、衝撃を与え続ければいずれは壊れるのは道理であって、もし

も破片が散らばり、壁面に燁が入り、粉塵が舞っている様な惨状であったのならば、単純に敵が防壁を打ち破るだけの魔術行使をしたに過ぎないと流しただろう。もしそうでさえあったのならば、そんな出鱈目の後で消耗し切っているであろう侵入者を捕らえるのは容易く、そんな相手を恐れる兵などいる筈も無かっただろう。

――だが、その穴は違っていた。

穴の周囲には火炎魔法の後に残る焦げ目も無ければ、衝撃を与えられた壁に入るべき燁も無い。それどころか、そこには穴の部分を埋めていたであろう防壁の破片すらも存在してはいなかったのである。その穴は、まるで初めからそうであったかの様に、芸術的なまでの自然さでただそこにあった。

「貴方達が警備兵ですか。
門番の方に呼びに行かせたのですが、随分と時間が掛かったのですね」

穴の隣に居た女が言う。
息を呑まずにはいられない程の美貌の女性は、隣の従者らしき男に寄り添う様にして立ち、その翠色の瞳をやって来た警備兵達へと向けていた。
その優雅な佇まいは、ともすればこちらが侵入者なのではないかと勘違いさせられる程である。

“何をしているのか”

兵士の問いに、女はあくまでも上品に頷いた。

「ええ、貴方達を待っていました。
折角訪れたのです。彼女との闘いの最中に手出しをされても興醒めですから」

――女に剣が向けられる。
今の発言をどう取ったのか、警備兵達は皆一様に息を呑み、張り詰めた空気で女の挙動を伺った。
女はあくまで涼し気に、空手のまま兵の敵意を受け流している。

「ネプト、下がっていて下さい。
彼女と矛を交える前に、少しだけ肩慣らしがしたいのです。
ええ、助力は無用ですよ。
この街ならば、私は十二分に“先天魔術（ギフト）”を発揮する事が出来ますから」

何のつもりなのか。
女は武装していた従者を下がらせると、あろう事か素手のまま、総鎧を着込んだ兵士達と対峙した。武器を所持している素振りは無く、罠を張っている様子も無い。
しかしそれにしては、余裕のある女の言動はあまりにも不可解であった。

――彼女の右手は、まるで撫でる様に防壁へと触れている。

「無駄とは思いますが、初めに断っておきましょう。戦闘の意思が無い方は退却なさって下さい。
邪魔だてしないのであれば、私とて手荒な真似はいたしません」

相手の身を案じる様な視線。
その余りにも場違いな態度が合図になったのか、警備兵の一人が、女の眼前へと特攻した。

女が纏う純白のドレスに向けて、槍状のロングソードが伸びる。
剣戟は峰打ち。しかしその速度に慈悲は無く、まともに受ければ肋骨の数本が折れる事は必定だろう。
仮に万が一躱す事が出来たとしても、これ程までに装備差があっては女に勝ち目などあるまい。結末など、女が警備兵に囲まれた時点で決まっていたのだ。

――だからこそ、その光景は異常だった。

“……？”

その様を見ていた警備兵から、疑問の声が上がる。
突進した兵士は、何故か劈く様な悲鳴を上げながら崩れ落ちていたのだ。
鎧の破片はまるで水飛沫のように飛び散り、糸が切れた人形の様に膝を折った兵士は、痙攣しながら地べたへと蹲る。幸か不幸か、ヘルムで隠されたその表情は伺えない。しかし覆面の下のその顔は、苦痛と驚愕で歪んでいるであろう事は明らかだった。

「この程度ですか。
流石はひ弱な魔術師の国ですね。
仮にも衛兵がこの程度の腕前では、国の戦力も知れるというものです」

――異常だった。
一体どこから取り出したのか。
先の瞬間まで確かに空手だった彼女の手には、刃渡り1メートルを超える両手剣が収まっている。総鎧を砕き、重装備の上からでもダメージを与える為に開発された破壊剣。バスター・ソードと呼ばれる武具であった。

腹部の鎧を砕かれ、呻く兵士。
その姿から正面の警備兵達へと視線を移し、女は凛とした声で告げた。

「戦意の無い者は武器を下げなさい。
私が刃を交えたいのは、この国では1人だけです」

怜悧な視線が、その場に居た全ての人間を震え上がらせた。

――――

「……ったく、無茶苦茶しやがって。
仮にも姫様なんだからよ、露払いは従者に任せるってわけにゃいかねぇのか？」

民衆は建物の中にでも逃げ込んだのだろう。
真昼間だというのに人通りの絶えた商店街を闊歩しながら、男は純白の姫にそう切り出した。

「仕方ないではありませんか。
たまには実戦をしないと感が鈍るのです。
ええ、その意味では、彼らの相手は大変意義のある肩慣らしになりました」

凛とした、淀みの無い声。
思慮深い女神を思わせる威厳と共に、女はそう返答した。

……もっとも、男は納得していない様子で表情を曇らせている。
この二日の経験から、彼女の行動原理をとてもよく理解していた為だろう。

「……それだけか？」

「この街は魔術の発動が楽なので、つい試してみたく……。
……コ、コホン。
いえ、敵地における自らの能力の把握は、時として何ものにも優先すべき事ですから。はい、先ほどの戦闘は必要な行為であったと考えています」

「……」

口籠りながら返答する女の言い分に、男は呆れた様に溜息を吐いた。

なんの事は無い。
要するにこのお姫様は、ちょっと面白そうな街であった為に、つい つい力を入れてはしゃぎ過ぎたと仰るのだ。

……普段娯楽という物に、あまり関心の無い彼女である。
それくらいの事で楽しめるのであれば、それはそれで一行に構わないのではあるが、たったそれだけの理由で手加減を知らない彼女にボコボコにされた兵士達には、今更ながら同情を禁じ得ない男であった。

「先に剣を向けてきたのは彼方ではありませんか。
ええ、あの程度の腕で私の前に立つ方が悪いのです。それに、命までは取っていないのですから、敵国の兵士に対する扱いとしては十分に過ぎるでしょう」

男は肩を竦める。
どうやら彼女には、目の前に立つ者には取り敢えず斬りかかる癖があるらしい。

そんな彼の反応を、彼女はどう思ったのか。
切れ長の視線が少しキツくなったのを感じ取って、男は話題を切り替える事にした。

「しっかし、何度見ても不思議なもんだな。
確か、さっきのがお前の魔術なんだろ？
……いや、そりゃこの世界に魔法とかが普通にあるのは知ってるけどよ、それにしたって一瞬であんな馬鹿デカイ剣出すのは、流石に神がかってるっつーか化け物じみてるっつーか……」

「いえ、流石に私も、通常の魔術を扱おうと思えば詠唱や術式の構

築は必要になるでしょう。
しかし先程のものは別です。アレは私の“先天魔術（ギフト）”ですから」

「先天魔術？」

「はい」

誇るでもなく、当然の様に告げる女。
彼女は簡単に、先天魔術について彼に語った。

――魔術師の身体は、一つの神秘を成す為に存在する。嘗て魔術が一部の人間にのみ知られ、秘匿されていた頃の選民思想から生まれたこの格言は、今では魔導師達の誇りを示す不文律として定着している。

魔導において魔術とは、世界を流動する魔力（マナ）を捕縛し、精霊へと与える見返りとして彼らの力を借り受けるものと説明されている。呪文の詠唱や術式の構築は、言わば彼らに自らの指示を告げる為の手段なのである。

だが、そういった手順を必要とし、学習によって習得される魔術とは別に、大抵の人間には初めから行使出来る魔術がたった一つだけ存在する。
それはこの世に生まれ出る以前に精霊から与えられた贈り物であり、人が扱う魔術の正しいカタチだ。
何しろ魔術師の身体とは、その“一つの神秘を成し遂げる為だけに存在する”のだから。

……言ってしまえば、通常扱われる魔術とは正規の使用方以外で

魔力を使うから手順が必要なのであって、初めから定められた魔術を行使する分には、わざわざ言霊や術式を用いて命じなくても精霊達は応じてくれるのである。

故に、先天魔術（ギフト）。

それは魔術師達に与えられた、唯一無二にして最大の切り札であった。

「そうですね……。

誰でも一つだけ持っている、一番楽に使用出来る魔術の事だとでも思っていて下さい。ともかくとして大魔導クラスの魔術戦では、大抵の場合この“先天魔術（ギフト）”の差が勝敗を分けます」

「成る程な。俺の世界にゃそんなモンねぇから、まあよく分かんねぇな」

男はそんな、分かったのか分からないのかよく分からない様な返事を返していた。

会話をしている内に、彼らは街の中心部へと辿り着いていた。広場には噴水が作られ、人気の無い領域に寂し気な雨音を響かせている。

白い青年が座っていたのだろう。

正門から続く血痕は噴水の淵へと続き、貯水槽の隣に血溜まりを作っていた。

「血痕は左の道に続いてるな。

……よし、そんじゃ行くか」

「左、ですか……」

石畳に残された赤い道標を見据える男。

そんな彼の言葉に、女は腑に落ちない様子で顎に手をやった。

「なんか気になる事でもあんのか？」

小さく頷く女。

確かめる様な仕草で、空中に手を這わせる。

「先程から広域の感知魔術が行使されています。

私の魔力が捕捉されたので、こちらも逆探知を試みたのですが……。

どうやら、術者は右手の道へと向かったらしいのです」

「ふん……」

男は腕を組んだ。

傷を負っているであろう白い青年と、それと逆方向に向かった真紅の少女。その意味を思案するかの様に――。

「どう見る？」

警戒する様な男の問いに、女は暫し思案した。

敵が二手に別れた理由。

あっさりと行えた逆探知に、それをされても尚隠そうともしない魔力の波動。

「彼女は私を誘っていると見るべきでしょうね。
おそらくは自らの守護魔では貴方に敵わないと悟り、貴方と私を引き離して私だけを仕留める、という魂胆なのでしょう。
……私だけならば相手になるとでも思っているのでしょうね。ええ、嘗められたものです」

不愉快そうな口調で、しかし口元には不敵な笑みを浮かべつつ、女は右手の道を見据えた。
男はそれ以上の問いを重ねない。
既に女の返答など分かりきっているからである。

「無論、受けて立ちます。
貴方は守護魔を追ってください」

女はそれだけを言い残し、まるで台風の様に、真紅の少女がいるであろう道筋を追って行った。

１５．　刃物による裂傷の適切な処置に対する世界観と常識及び体構造の相違に

さ、流石は超有名小説サイト……。
さっきアクセス解析っていうのをやってみたら、たった１４話なのに携帯小説時代のＰＶ数を超えちゃってました。
はい、もっと面白いお話が書けるように頑張りたいです！！
次回もよろしくおねがいします！！

16.　異なる道徳意識を持つ社会における悪徳商法はその社会において悪徳に非ず

朝日　真也は違和感を感じていた。

出血量に対して、あまりにも拍子抜けに過ぎた傷のサイズ。生まれてこの方、重傷になどとんと縁の無かった彼である。経験の足りなさ故に、断言する為には些か自信が持てなかったものの、それでも5センチ程度の裂傷では、刃が肉を抉る熱さや骨を削るおぞましさを感じさせるには役不足であろう事くらいは十分に理解出来ていた。

その矛盾した事実に納得がいかなかった青年は、いくつかの仮説を組み立ててみる事にした。

パッと思い付いたのは3つ。

この星の気圧が地球に比べて極端に低く、多少の傷でも大量出血を起こす物理条件が整っているのか、あるいは男の剣に何らかの細工がしてあったのか。

――それともこの傷は、本当はもっと深かったのか。

常識で考えればどれを取ってもあり得ないだろう。

いくら物理法則の補正が掛かっているとはいえ、流石に代謝に必要な酸素（げんそ）までもが不足していれば生命活動など維持出来る筈も無いだろうし、男の剣に出血毒が塗られていたとしても、傷口の明確な悪化も無く大量出血が起こるのは不自然に過ぎる。三つ目の仮説に至っては、最早妄想だとしか言えないだろう。

常識的にあり得ない事実。

常識的にあり得ない現象。

しかし今、そのあり得ない仮定は確信へと変わりつつあった。

――傷が、塞がっている。

先程５センチ程あった傷は、今では３センチ程度にまでその幅を減じ、裂けた肉も細胞同士を接合し始めている。瘡蓋が無いのにも関わらず傷の修復は急速に進み、出血はとうに止まっていた。

青年は思案する。

刃物による裂傷とはこうも早く治癒されるものだったのか、それとも自分が気付いていないだけで、この時空では人間の細胞分裂が地球の数倍の速度で進行でもしているのか。

後者だった場合、自分は地球の数倍の速さで老け衰えていく事になるのだろうか。

そうだとすれば普段の数倍の速度で食事を摂取し、数倍多く風呂に入らなくては健康的な生活は送れないに違いない、などと自らの笑えない想像に苦笑しつつ、青年は自らの左腕を眺め続けていた。

「ふぅ……」

二階の窓から無人の通りを確認して、青年は押し殺した溜息を吐いた。

場所は時計塔ではない。

広場よりも少しだけ街の奥にある、寂れた“魔装屋”である。

遡るは半刻程前。

少女に取り残された青年は、取り敢えずは少女が向かった右の道とは反対方向へと逃げる事にした。大男を引き付けるという役割であれば少女と同じ方向に行っては意味が無いし、正門に向かっては彼らと鉢合わせするからである。

結果として彼が逃げる方角は初めからかなり限定されており、そこには彼の意思が介在する余地など無かったのだが、それ自体はまあ問題では無かったと彼は思っている。

問題が起こったのはその後だ。

暫く走って息が切れた頃、手近な壁に寄り掛かって呼吸を整えていた彼は、自分が導火線をぶら下げながら走っていた事に気が付いたのである。

石畳をペイントし、点々と続く赤い道標。

自らの左腕から滴ったそれを確認した時に、彼は先ず止血をしなければ、例え時計塔に逃げ込んだとしても直ぐに追手に居場所がバレるという事実を理解した。

……そこまでは、まだ良かったのである。

幸いにして追っ手に追いつかれる前に事態を把握出来たのだから、即座に対処すればまだ間に合うわけで、それ自体はまだ致命的な事象では無かったと言えるだろう。

しかしその後の出来事には、彼は本当に困り果てた。

彼は取り敢えず、最低限血が落ちないように工夫しなければならなかったのだが、何しろ白衣からして既に血塗れの身である。白衣を脱いで腕に巻いてみたり、被せる様に覆ってみたりと色々努力はしてみたものの、どうしても滴り落ちる血液を完全に隠す事は出来

なかったのだ。仕方ないので彼は、適当な建物にでも入って、そこで布を調達しようという結論に至った。

……だが、そこからがまた一苦労だった。

何しろ、街には既に警鐘が響いた後である。

大抵の住民は鍵を掛けて家に閉じ籠っているし、たまに玄関の扉を開けてくれる人がいたとしても、血塗れの彼を見るなり顔を青くして隠れてしまう。

結果として彼は、導火線に火がついたまま街中を亡者の如く彷徨う羽目になったのだった。

幸か不幸か目ぼしい場所を探している内に血は止まってくれたのだが、そこで偶然見つけたのがこの店、“魔装屋・ギル”の看板だったのである。

そこが何の店なのかを知らない彼ではあったものの、少女が例の“不死鳥の羽根ペン”を魔装であると説明していた経緯もあり、また何らかの武器があるに越した事は無い状況である事も感じていた為に、彼は取り敢えずは中を見てみようと思い至ったのだった。

――最も、殆どの人間が家に閉じ籠っているこの状況にも関わらず、何故か営業中であったこの店の商売根性には流石の青年も呆れ返った。

店も商店街からは大分外れた場所に立地している様だし、もしかしたら人目が無い方が都合のいいモノでも扱っているのかもしれない、などと、彼は異世界における違法業種になんとなく思いを馳せる羽目になってしまった。

「……」

そして、話は現在に至る。
外の通りには相変わらずまったくと言っていいほど人気が無い。
ガラス張りの窓からは時計塔が大きく見えており、血痕を残さなければ、何とか大男の目を盗んで辿り着けそうな距離ではある。

それで安心したのか。青年は窓枠から離れ、店の中に売られている物を適当に物色し始めた。
倉庫みたいな店の中には剣や盾、杖からハンマーまで、ＲＰＧの武器屋みたいな道具が数多く揃えられている。
彼にとっては物珍しい品ばかりであったものの、強いて気になる点を挙げるとすれば、大抵どの道具にも摩訶不可思議な模様が描かれており、魔法の威力向上や発動の簡易化などの売り文句が付いている事だろうか。

「……」

――余談ではあるが、先程から店主らしき中年の男が、訝し気な目線でチラチラと青年を観察している。無理も無い事だろう。あんな警鐘が鳴り響いた後に、こんな“異質な”格好の若者が血だらけで飛び込んで来たら、普通は騒ぎの原因であると推測するのが妥当である。

最も、店主の男もそんな危なそうな人物に声を掛ける勇気など無いらしく、また当の青年も他者の視線という物にはほとほと無関心であった為、重苦しい雰囲気の店内には無言の緊張感が漂うだけに留まっているのだが……。

「ふむ……」

店主の視線など完全に無視しつつ、適当なナイフを見繕う青年。
魔法云々は抜きにして、これならば、純粋な武器としては自分でもなんとか扱えるだろう、などと希望的観測を抱いてみる。
……そんなバカみたいな思考をしたところで、彼は自分のバカさ加減に苦笑した。

考えなしにも程があるだろう。彼は自嘲する。
何しろこんなナイフなど、先程見た男の剣に比べればオモチャも同然ではないか。否、そもそも自分は、先程男に立派な剣を渡されてさえ、それを抜けば殺されると直感したのでは無かったか。
ならば、こんなナイフ一本で何ができるだろうか。
あんな怪物に向かっていった所で、結末は先の予想と何一つ変わらないに違いない。

あまりの不甲斐なさと絶望感に、青年は深く溜息をついた。
溜息を吐きながら、純白の女と交戦しているであろう真紅の少女へと思いを馳せる。

少女は、相手が女一人であれば互角に戦えると言っていた。それが事実かどうかは彼には判断できないものの、昨夜から繰り返し見せられている彼女の魔法を見る限り、彼女の魔法使いとしての実力だけは信じてもいいに違いないと彼は考えている。

何しろ、あれ程の爆発を起こせる少女である。
上手くいけば少女があのお姫様を打ち破り、大男を降伏させてくれる可能性もあるだろう。
いや、仮にそれが少女一人では難しかったとしても、もしかした

ら王宮魔術団とやらが彼女に加勢して、あのお姫様を捕らえてくれるかもしれない。

余りにも楽観的な予測。
余りにも都合のいい解釈。
しかし今の青年には、それが酷く魅力的な仮説であるかのように感じられた。

「……」

無意識がその仮説を支持する。
――それがいいだろう。
彼は心の中で頷く。

何しろこうしている間にも、もしかしたら王宮魔術団とやらが、あの大男を何とかしてくれているかもしれないのだ。いや、もしかしたら、本当はあの2人組はとっくに街から帰っていて、こうして隠れている必要性すら無くなっているのかもしれない。そこまでは期待出来ずとも、こうして隠れていれば、そのうち勝手に事態は解決するのではあるまいか。

心臓の奥に、冷たい違和感を感じる。
しかし彼は、ここに隠れている事を最善と考え始めている自分が居る事に気が付いた。

「いやいや、それはよくないじゃろうて。

人間、いざという時は諦めも肝要とは思わんかえ？」

「――――？」

突然、背後から嗄れ声が聞こえた。

青年は反射的にナイフを構え、その人物に向けながら飛び退く。

声の先には――、

「ほほほ、まさか声を掛けただけで刃物を向けられるとは、流石のわしも思わなんだなぁ。

全く、最近の若者は堪え性が無いと聞くが。

こんな年寄りの命、わざわざ取るまでも無いだろうに」

「……」

予想外の人物の登場に唖然とする青年。

ナイフを向けられたその人物は、冗談めかす様にしてそんな答えを返してくる。左目には眼帯。伸び放題の白髪と酒の体液を持つ、イエティみたいな姿の老人である。

「……魔荷屋の爺さんか。

今忙しいんで、金をせびるなら後にして貰ってもいいっスか？」

気付かれ無い程短く、青年はホッとしたかの様に息を吐いた。

その後直ぐに嫌悪感を剥き出しにし、ギロリと睨み付けてみる。

そんな彼の目を見ているのか、そもそも老眼で見えていないのか。

老人は暢気に顎を掻いている。

「ほうほう、随分と嫌われたものじゃなぁ。
お前さんとは一度商売をしただけの仲の筈なんじゃが……。さてさて、わしは何か悪い事でもしたのかのぉ。いやいや寂しいことじゃて」

「……心当たりが無いとでも言うのか？」

悪びれた様子も無く、飄々とした体で語りかける老人。
青年は冷たい目線を送りながら付け加えた。
ナイフは未だに老人に向けられている。

「相場の十倍以上で薬を売り付ける行為が、あんたの基準じゃ悪事とは言わないっていうのか？
あんたのせいで、オレがあの後どんな目に合ったと……」

そう。そもそも、この老人に騙された事がケチの付き始めだったのだ。
この老人のせいで少女には処分されかけた。
この老人のせいで門の外長時間留まる羽目になり、結果としてあの2人組と鉢合わせる羽目になった。

……無論、半分以上は八つ当たりである。
彼自身ソレは良く理解してはいたものの、とにかく今は、八つ当たりでも誰かに感情をぶつけなくては気が済まない気分であったのだ。

「あれまぁ、もうバレてしまったのかえのぉ。
いやいや困った。それは本当に困ったなぁ」

しかし青年の非難も何処吹く風。
老人は、あくまで好々爺めいた笑みで彼の糾弾を聞き流している。
暖簾に腕押し、糠に釘。彼の睨みなどまるで堪えていない様子である。
そして、とぼけた様に口を開いた。

「しかしのぉ、それがそんなに悪い事かえ？
一応のぉ、それが魔荷屋（わし）の仕事なんじゃが」

老人は、再び聞き慣れない業種の名を持ち出した。
そこに謝意は全く感じられず、声色は言外にソレが当然であるかの様な雰囲気を孕んでいる。
青年は腕を組んで思案した。
先程は何でも屋みたいな物だと語っていたが、老人の言葉を聞く限り、どうにもそれだけでは無い様に感じられたのだ。

「……爺さん。そもそも、魔荷屋って何なんだ？」

広場で訊ねた事と全く同じ質問を繰り返してみる。
老人は髭を触りながら、まるで何かを思い出す様に天井を見上げていた。

「時にお前さんは、マニの卵というお話を知っておるかえ？」

「……」

そして、全く違う話を持ち出した。
話が飛ぶ事と長い事は、歳を重ねた人間の悪い癖である。

勿論そんな話を知るワケが無いので、真也は小さく首を振る。
困惑する青年の視線を無視しながら、老人は勿体ぶった口調で語り始めた。

――マニの卵。

それは昔、とある田舎町に住んでいた、マニという名の少女のお話である。

ある日マニは、母親に頼まれて大きな街へと出掛けた。夕飯に使う筈のフワフワ鳥の卵が割れてしまい、急遽買い出しに行かなくてはならなくなったからである。

「いいかい、寄り道しないで、真っ直ぐに帰ってくるんだよ」

母親は、マニにそう言付けた。

ガラナおじさんの店で籠いっぱいのフワフワ鳥の卵を買い、大荷物をヨイショヨイショと引き摺りながら、マニは家へと歩いていた。勿論言付け通りに、寄り道せずに真っ直ぐに、である。

しかし家への道を歩いていると、街から出るところで、立派な服を来た執事のおじさんが、籠いっぱいのピョンピョン鳥の卵を抱えて困っているのを見つけた。

「どうしたんですか？」

マニは訊ねた。

「そのフワフワ鳥の卵と、このピョンピョン鳥の卵を交換してくれ

ないか？」

おじさんはマニを見るなり目を丸くして、突然頭を下げてお願いをした。

話を聞くと、おじさんは随分と我儘な婦人の家に仕えているらしく、その婦人は、今日はピョンピョン鳥の卵が食べたいと言っていたらしい。

でもおじさんは、安い安いフワフワ鳥の卵よりも、ちょっと高いピョンピョン鳥の卵の方が美味しい事を知っていたので、気を利かせてピョンピョン鳥の卵を買って来てしまったというのだ。

どうしてもフワフワ鳥の卵が食べたかった婦人は、おじさんにフワフワ鳥の卵を買うまで帰って来るな、と言ったらしいが、店に行くと、今日はもう売り切れてしまっていたという。

マニはピョンピョン鳥の卵の方がフワフワ鳥の卵よりも美味しい事を知っていたので、喜んで籠を交換する事にした。

――後はその繰り返しである。

異国の商人さんからはマウマウ鳥の卵を。

病気のお医者さんからはゴロゴロ鳥の卵を。

お忍びで街に来ていた王子様からはヤムヤム鳥の卵をそれぞれ交換してもらい、マニの持つ卵はどんどん豪華な物になっていく。

そして最後。

日が落ち掛けた頃に彼女が出会ったのは、今にも倒れそうな程にヨボヨボの、魔法使いのお爺さんだった。お爺さんは大きなジャガイモみたいな卵を抱えて、道の真ん中でグスグスと泣いていた。

「どうしたんですか？」

マニは尋ねた。

話を聞いてみると、お爺さんのお弟子さんが病気になって、ソレを治す薬を作るにはヤムヤム鳥の卵が沢山必要らしい。でも、ヤムヤム鳥の卵はスゴく高いので、お爺さんにはとてもとても買えないという。

マニは、少し迷った。

ヤムヤム鳥の卵はすごく高くて、すごく美味しい事を知っていたし、お爺さんはいかにも貧乏そうで、卵を渡しても何もくれないと思ったからだ。

でも泣き崩れているお爺さんが可哀想になってきたマニは、ちょっと迷ったけれど、お爺さんにヤムヤム鳥の卵を全部あげる事にした。

お爺さんはわんわん泣きながら、何度も何度もマニにお礼を言って、最後に予言するみたいにこう言った。

「運が良いのは良い事だ。
でも優しい事は、それよりももっと良い事だ。
優しい君は、きっと誰よりも幸せになるだろう」

“こんな物しか無いが、受け取ってくれ”

そう言ってお爺さんがヤムヤム鳥の卵の代わりに彼女に渡したのは、ゴツゴツしていて不格好な、とてもじゃないけど食べられなさそうな卵だった。それでも彼女は、その卵を大事に大事に持って帰

った。
お母さんには怒られてしまったけれど、それでも彼女は、卵を大事に大事に持っていた。

毎日毎日卵を枕元に置いて眺め続けたマニだったが、ある日の朝目覚めると、その卵が孵っている事に気が付いた。卵から孵った何かは、緑色の尻尾をチョコンと出して、マニの布団のお腹の辺りに潜り込んでいた。バサッと布団を放り投げて、お腹の辺りをまじまじと見たマニ。

そこには、緑の鱗に大きな角を持つ、羽付きのトカゲみたいな生き物がいた。真ん丸な瞳でマニを見詰め、ソレは嬉しそうにキュルキュルと鳴いていた。
それは龍の卵だったのである。

三年後、大きく育ったその龍は、月に一回だけ卵を産むようになった。殆ど卵を産まない事で知られる龍だけど、彼女の育てた龍だけは、月に一回必ず卵を産んでくれる。
龍の卵はスゴく価値があるので、それでマニの家は大層なお金持ちになり、マニはいつまでも幸せに暮らしました。

お終い――。

「よくある話だな……」

無駄に長い上に中盤から既にオチが読めた童話に辟易しつつ、真也は腕を組みながら詰まらなそうに呟いた。
察するに、異世界版わらしべ長者とでもいう所だろうか。成る程、きっとどこの国や異世界でも、探せば似たような話が一つくらいは

見つかるに違いない。

「それで、その話がどうしたんだ？
オレはあんたの悪徳商法について聞いたんだが」

老人を見据える胡乱気な視線。
老人は眠る様に、ただコクコクと頷いた。

「それでも何も、それが全てじゃよ。
マニは人々が必要な物を、必要な時に売り付けたから、最後には大金持ちになったんじゃろ？
それと同じでな、魔荷屋というのは……。
まあ客が一番欲しい物を、一番欲しい時に売ってやる商売なんじゃよ」

「……待て。
今のってそういう話だったのか？」

「ほほほ、解釈は人それぞれじゃよ。
でもまぁ、考えてもみなさいな。
あの時のお前さんには、あの薬は相場の十倍くらいの価値があったのではないかな？」

「……」

――要約。
困っている人の前に突然現れて、散々足元を見て値を吊り上げた挙句、弱った人間から大金をぼったくる商売。

「……最低の商いだな」

真也は、もはや溜息も出ないという様子で頭を抱えた。力無く悪態をついてみる。

……何故よりにもよって、自分はそんな爺さんから薬を買ってしまったのだろうか。先刻の自らの浅虜さがイヤになり、彼は自分自身に蹴りを入れたくなった。

「……ん？」

――その時である。

彼は不意に、背筋にゾクリとした悪寒を感じた。

冷静になって、自らの状況を分析してみる。

よくよく考えると、今の自分は、先程よりも遥かに“困った状況”に居るのではないか。

「……」

目の前に居るのは、“魔荷屋”の爺さん。

人の足元を見るのが大好きな外道である。

そしてその爺さんが、今この場に居るということは……。

「……爺さん、まさかと思うが」

「ほほほ、気が付いたかえ？

まあ、そういう事さのぉ」

寒気がした。

まるで毒蛇に背中を舐め回されたかの様な、蛞蝓が全身を這うか

の様な悪寒に身震いする。
老人は、あくまでも飄々とした体で微笑んでいる。

「商談があるんじゃが……」

「断る？」

間髪入れずに走り出す青年。
とにかく先ずはこの場から逃れようと、脱兎の如く店の出口へと駆け抜ける。全ては保身。目の前の毛むくじゃらのハイエナに、骨をしゃぶられないようにする為に――。

「これこれ、お待ちよ。
年寄りの話は最後まで聞くものじゃて」

ガバッ、と、逃げようとする真也に背後から抱きつく老人。
日本酒を頭から被った様な体臭を直で吸い、青年は胃袋を口から吐きそうになる。彼が振り払おうと藻掻いたところ、老人は何故かグリグリと頬ずりをし始めた為、彼の不快感は少女の汚泥に匹敵するレベルにまで上昇した。
青年は、声にならない悲鳴を上げている。

「分かった、分かったよ？
話だけ聞いてやるからとっとと離れろっ？」

突き飛ばす様に腕を突き出す。
青年はとうとう、観念したかの様に足を止めた。
精神的に余程堪えたのだろう。
彼はガックリと項垂れながら、髭を擦り付けられた顔を白衣の袖でゴシゴシと拭いている。

……ふと見ると、白衣の袖はあっという間に真っ黒になっていた。

「ほうほう、そうかそうか。
こんな老いぼれの話を聞いてくれるか。
いやいや、どうして、最近の若者も捨てたものではないのぉ」

「……」

色々と言ってやりたい事はあったが、長くなりそうなので口に出す事は自重した。

「さぁて、それじゃあ商談じゃが……。
ふむふむ、お前さん、どうやら武器を欲しがっとると見える。それも魔獣退治でもする時に使う様な、大層な物を欲しがっとるようじゃのぉ」

「……」

青年は答えない。
老人の言葉は自明の理だからである。
何しろここは魔装屋だ。そこで血塗れの人間が武器を物色しながら外を警戒していれば、誰でも大まかな状況は把握できるという物だろう。

彼がそんな事を考えていると、老人はボロボロの服の下から革製のウェストポーチの様な物を取り出した。ポーチは見た目に反して重いらしく、老人が商品棚の上にソレを置くと、硬い金属音が狭い店内に反響した。

「さてさて、しかしそれは困ったのぉ。

わしも一応武器は扱っておるが、なんせ店舗も無しにこの身一つで商売しとるもんでなぁ。
生憎と手持ちはここに入っとる物だけなんじゃよ。
いやいや、お前さんの希望に沿う物があるといいのじゃがのぉ」

中身を見せる老人。
ポーチの中にはナイフや護符。鉱石や数珠に、何に使うのか分からない様な三日月型の小物などがビッシリと入っていた。
用途が分からない道具はどうせ直ぐには使いこなせないのだから、ソレは初めから使えない物なのだと諦めて、取り敢えずは役に立ちそうな物を探してみる青年。

「……」

……余談だが、自分の店の中で商売をされているのにも関わらず、店主らしき男は顔色一つ変えない。もしやこの店は、普段から何らかの取引が横行している無法地帯なのではあるまいか、などと先程の不安が青年の中で再燃していたりする。

「……って、ちょっと待て？」

一通り中身を確かめた途端、青年はその中に見覚えのある道具を認めて声を荒げた。
――そんな筈が無い。
青年は何度も否定しようと目を擦り、しかし何度見てもそうだとしか思えない道具の存在に驚愕する。

オレンジ色の燐光を放つ、フワフワとした繊維塊。

一度見ただけでそれが起こす現象の虜になり、とうとう手にする事が叶わなかった神秘の器具。

「おやおや、しまったのぉ。
無くしたと思っとったら、こんな所にあったのかえなぁ。すまんが、今のは見なかった事にしてくれんか？」

ぽりぽりと頬を掻きながら、老人はソレを服のポケットへとしまい込んだ。
明後日の方向を見ながら苦笑する老人。
その緋色の瞳が、青年には“深く追求するな”と告げている様に感じられた。

「……」

だが、当然見なかった事になどするになどいくまい。今のは紛れも無く、少女が広場で使用した、“不死鳥の羽根ペン”と呼ばれる魔装ではなかったか。

「……どこで手に入れた？」

問う声に抑揚は無い。
しかし凪の水面（みなも）の様に静かなソレは、水面下に渦の様な思考の流動を伴った物だった。

「ほほほ、そう勘繰る事もあるまい。
この歳まで生きとるとなぁ、変わったモンなど幾らでも手に入るもんじゃて」

まるで誤魔化すかの様な返答。

明確な回答では無いが、青年にとってはそれでも構わない。
初めからこの老人に、まともな答えなど期待してはいないからだ。
今の彼にとって重要なのは、自分が追われているという現状と、
自分の目の前に“ソレ”が存在するという事実のみである。

彼が思い出すのは、広場で少女が見せたあの現象と、その結果と
して生まれた聳える様な金属の柱。

手に触れた感触を思い出す。
確かにあの柱は金属だった。
青年の力では曲げられないし、傷付けられない程の強度を持つ金
属の刺棘。
だが拳を作って叩いてみると、石畳みと柱とでは、明らかに発す
る音が違っていたのだ。

ソレがどういう事なのか。
否、あの柱の成型が物理的にどういう意味を持つ現象であるのか。
もしも物理学の基本である“あの法則”がこの時空でも成り立つの
ならば、自ずとその答えは導きだせる。

「……」

――仮に、“あの法則”が成り立つと仮定しよう。
成り立つとすると、どうなるのか。
自分が逃げようとしていたのは、塔だ。
目の前の窓から見える、聳える様な金属の塔。
“この街は全て、アダマス鉱という金属で出来ている”。少女は
そう言っていた。
ならば、あの塔とて例外では無いだろう。

手元にある唯一の道具は、少女が渡してくれた塔の内部の見取図。

「――――？」

その瞬間、彼の脳裏に雷光が閃いた。

無意識下の機能が演算処理を始め、視覚化出来る程のイメージがたった一つの解を導き出す。

――未来を見る。

その解答の結果として発生する現象が、寸分違わず彼の瞼裏で再生（リプライ）される。

彼は確信した。

その解答ならば、足止めどころか十二分に男と戦う事が出来ると、彼の唯一の計算（さいのう）はそう確信した。

否、戦う必要すら無いだろう。

何故なら彼は、そういう解答を導き出したのだ。

「そいつを売ってくれ」

氷の様に静かな声。

気が付くと彼は、目の前の老人にそう頼んでいた。

老人は目を丸くした後、まるで探る様にその灼眼を細める。業火の様な朱い瞳が、青年の中身（しこう）を真っ直ぐに射抜いていた。

老人は感情の読めない表情のまま、ポケットからその魔装を取り出した。

「ほうほう、コレがお気に入りか。

でもなぁ、コレは売り物じゃぁないんじゃがなぁ。何しろ、まぁ

貴重な品じゃからのぉ。それともナニかね？　お前さんは、わしがコレを売ってもいいと思えるだけの金が払えるとでもいうのかえ？」

飄々とした口調。
しかしその声色には、明らかに青年を試す様な意味合いが込められている。

「……」

青年は目を逸らさず、ただ息を飲んだ。

――払えるわけが無い。

納得し、常識的にそう理解する。
彼は少女に財布を借りなければ胃薬すらも買えなかったし、そもそもこの世界の通貨など一文たりとも所持してはいないのだ。

しかも目の前に居るのは、その胃薬ですらも相場の１０倍で売り付けるような性悪爺さんである。これ程までに貴重な品であれば、それこそどんな金額を吹っ掛けられるか想像も出来ない。無論、自分にソレを譲る可能性など皆無だろう。

「……ああ」

ニヤリ、とした声。
しかしそれを理解した上で、真也は首を縦に振っていた。
口元には小さな微笑が浮かんでいる。

「売ってもいいと思えるかどうかはあんた次第だが……、オレはあんたが満足出来る額を払えると思うぞ」

堂々と告げる青年。
老人は“ほう”と小さく頷いている。
訝しげなその目線を受けて、彼は更に付け加えた。

「あんたには言ってなかったけどな、実はオレ、魔導研究所で“特務教諭”をやってるんだ。ある程度の額ならば国に話をつけてやれるし、そうだな……。あんたが望むのなら、研究費を多少流してやってもいい」

「……」

老人は押し黙った。
青年の言葉は、当然にしてハッタリの塊である。
真也は特務教諭とやらにそんな権限があるのかも知らないし、そもそも未だ働いてすらもいない。
国に交渉を持ちかける術も知らなければ、自由になる研究費の額など知る由も無い。

――しかし職務の内容が大学講師と酷似している以上、権威や地位も似た様なものだろうと彼は予想していた。
そもそも守護魔が初めから他国に狙われる立場であり、尚且つ特務教諭が他国から来た亡命者を受け入れる為にある職であるのならば、身を守る為に使った金は“必要経費”である。

老人は何かを思案している。
髭を引っ張る様に触りながら、値踏みする様な目線で青年を射抜いている。その様はまるで、死者の心臓に蓄えられた善行の重さを測る裁定者（オシリス）のようであった。

「機転はなかなか。ブラフはそこそこ。しかしどうにも片手落ち、か。
……まあ偏ってはいるが、ギリギリ合格点かのぉ」
「……は？」
老人は、何かよく分からない評価を下していた。
眉を顰める青年。
老人は、再び笑みを作る。
「ほほほ、こっちの話じゃよ。
さてさて、しかし国に話をつけてやるとは、また大きく出たものじゃのぉ。まあ、確かにそれならば良い額が出そうなもんじゃが……。
さて、しかしどうしたもんかのぉ。
お前さんが、本当にそんな立場に居るという証拠でもあるのかぇ？　いやいや、どうにも疑り深い性分でのぉ。頭金無し、担保無し、おまけに今にも命まで無くしそうな若者を、果たしてどう信じていいのやら……」
「何をいまさら」
老人の言葉に、真也は大袈裟に肩を竦めて見せた。
「オレに薬を飲ませた時の事を忘れてないか？
あんたの商売は事後承諾の後払いだろう。
ならば先ずはオレがそいつを使って状況を改善し、その後に金を払うのが筋な筈だ。
……そもそも、そいつはかなりの希少品だと聞いている。
そっちこそ、ソレが偽物じゃないという証拠がどこにある？」

不敵な笑みを浮べつつ、真也は言い切った。
彼の言葉には、言外に試す様な雰囲気が伺える。
涼やかな黒い瞳が、静かに圧力を掛けていた。

老人は小さくその口元を緩めた。
それは呆れたような、或いは愉快そうな、どう理解すればいいのか判断しかねる表情であった。

「……まぁ、いいかのぉ。
乗り掛けた船じゃし、ちょっとくらいは、お前さんの甘言に乗ってやるのも悪くはないか。
しかしまぁ、お国に睨まれると怖いからのぉ。
そうさなぁ。お前さんが特務教諭なら、給金の三回分で手を打つが、どうかね？」

「……は？
その程度でいいのか？」

――給金の三回分。
思ったよりも格安な額に面食らった真也ではあったものの、ありがたい話なので二つ返事で頷いた。
まあ、きっと、特務教諭とやらの給料は相当に高額なのだろう。
余裕が無かった為か、この時の彼はその程度の解釈をしただけで、深く考えることはしなかった。

「ほほほ。
今の約束、ゆめゆめ忘れるでないぞ？」

老人は静かな声でそう告げると、青年にその道具を手渡して扉へ

と向かった。
振り返らずに去って行く灰色の後ろ姿。
ツギハギのボロで着飾ったその背中は、青年の目には何故か楽しげに映っていた。

「……まさか、本当に飲むとはな」

青年は老人が消えた扉を見据えながら、まるで独り言の様にそう零した。

老人の言った通りである。
頭金無し、担保無し、おまけにこっちは素性すらもはっきりとしないのだ。
本来、あんな商談が成立するワケが無い。

それにも関わらず、あの老人は商談に応じた。
まるで青年が金を払う事を確信しているかの様に、殆ど二つ返事で取引に応じたのだ。
それは果たして、彼が特務教諭である事を知っていたが故なのか、或いは――。

「……」

――否、それだけでは無い。そもそもあの老人は、初めて出会った瞬間から、こちらの状況を不気味な程に把握してはいなかったか。

「……魔荷屋、か」

虚空に老人の職名を復唱する。

もしも老人の説明を信じるのであれば、それは誰がいつ、何に困っているのかを知っていなくては成り立たない商売の筈である。
それこそまさに、人の運命を司る死神の様に――。

背中に滴る嫌な汗を感じながら、青年は自らが手に入れた唯一の武器を眺め続けた。

「……まあ、それは今考える事じゃないな」

切り替える様に、頭を振る。
そう。今脅威に感じるべきは灰色の老人では無く、青い猟犬だ。

眼差しは遥か時計塔に。
感情を論理で封殺し、黒い瞳を科学者特有の洞察眼に変え、集中は脳の要点だけを活性化させて余分を眠らせる。

「さて、実験開始といくか」

一呼吸吐いた後、青年は口元に微笑を浮べながら行動を開始した。

――――

広場から少し奥へと進んだ住宅地。
一際高いお屋敷の天井へとよじ登り、少女は正門前にて行われた戦闘の一部始終を把握していた。

無論、屋根に登ったのは視野を広げる為では無い。
遮蔽物となる建物の多い街中では、それこそ王宮や時計塔レベルの建造物へでも登らなければ正門の様子など見える筈も無いし、そもそも今の彼女にとっては、“その敵”を見るのに視覚など必要としないからだ。

――“賢人の高座（フリズスキャルグ）”

特霊級魔術に分類されるこの感知魔術は、自らの持つ霊道を針として外界の魔力の波を検出し、定められた範囲の現象を遠隔地から掌握する魔術である。

それは言わば“魔力視”とでも形容出来る術式であり、眼球が物体に反射した光を見るのと同様に、生物が乱した魔力変化の小さな波を視覚化して理解する業であった。

無論、それは並大抵の集中力で出来る事では無い。
生物はその殆ど全てが魔力に対して何らかの影響を与えているし、そもそも世界を満たす魔力は常に流動している物なのだ。
その中からたった一つの波動だけを検出するなんていうのは、まるで大海を回遊する無数の稚魚からたった一匹を針で射抜くかの様な、狂気としか呼べないレベルの集中力を必要とする。

並の魔導師では5分ともたない程の極限状態（トランス）。
しかし少女はその集中力を、広場で銘を詠唱した瞬間から奇跡的に維持し続けていた。
――否、その実それは奇跡などでは無い。
彼女にとって、それはあくまで必然である。
この程度の感知魔術の持続で音を上げるなど、国一番の魔導師たる彼女自身のプライドが許さない。
少女はその異常をまるで通常の如く体現し、ただ静かに自らの“

敵”を観察していた。

「……っ」

その結果として手に入れた情報。
取り囲んだ兵士達を圧倒した敵の“先天魔術”の理。
それを認識した所で、少女は音が鳴る程に奥歯を噛み締めた。

――少女は武装姫（ワルキューレ）の噂を聞いていた。
曰く、鈍の金属片で名刀を断つ。
曰く、皿一枚で猛将の槍を防ぎ切る。
曰く、彼女が触れた刀剣は女神の加護を受け、通常の戦闘では決して刃がこぼれる事が無い。

少女は、上記の二つは武装姫本人の技量による物だと思っていた。
世界には模造刀で龍の鱗を裂く猛者も居るというし、彼女はかの“武術王国”の王族に位置する人物である。武術の練度が神域に至っていようと、それ自体は驚くに値しない。

よって少女は、武装姫の“先天魔術”は“武具の洗練”であると考えていた。火属性の魔法で刀剣を鍛え直しているのか、あるいは土属性の魔法を纏わせて、武具の強度と殺傷力を高めているのか。

いずれにせよ少女は、既存の武器の性能を飛躍的に向上させ、近接の直接戦闘を優位に運ぶ能力が敵の“先天魔術”だと信じて疑わなかったのだ。
そう。少なくとも、つい先程までは――。

「――――っ？」

思い返して、少女は再び歯噛みした。

武具の洗練。
女神の加護。
そんな物は大嘘だ。

何しろあの女には、その“先天魔術”を発揮するのに武器を用意する必要など全く無い。
事実彼女は手ぶらでこの街へと侵入して来たし、そもそも彼女は衛兵に刃を突き出されるその瞬間まで、武器など一切所持してはいなかったのだから。

敵が魔術を行使し、衛兵を薙ぎ払ったのは一瞬。
本来視認出来ない筈のその攻防を“魔力の目”で見ていた彼女には、それを目前で見ていた兵士達よりもなおハッキリと、敵が行った行動の全てが伝わっていた。

あの一瞬、アダマスの防壁には女の手から不定量の魔力が流れ込んでいた。属性は不明。現象は土に、波動は火に類似。結論として分かるのは、ソレを受けた防壁が、まるで飴細工の様に変形して大剣を形作ったという事実のみである。

――そう。
彼女の“先天魔術”は、武器を洗練する事などでは無い。意味も用途も異なる、本来武具となり得ない金属を一息で加工し、希代の武装へと仕上げる魔術。
彼女は六国最強の“武器製作者（ウェポンクラフター）”なのである。

「まったく、何が“清楚可憐な白薔薇の姫”よ。
魔術も武術も性格も、猪突猛進な猪女じゃない」

悪態をつきながら状況を整理する。
敵の魔術が金属の加工であるとするのならば、それはおそらく武具だけに留まらないだろう。
防壁が破られたのは道理だ。
あの女は無駄な破壊などする必要が無く、ただ剣を作る様に、壁を穴に“加工する”だけでいいのだから。

石畳から建物、オブジェに至るまで、その全てがアダマス鉱（金属）で出来ているこの街に逃げたのは、彼女にとって失策だったとしか言えないだろう。今更になって、少女は自らの判断を呪っていた。

「しかもやっぱりっていうか、呆れたっていうか。
魔術を使ったのは武器作成だけで、あとは全部ただの剣術って……。あいつ、本当に大魔導なわけ？　口より先に手が出るヤツは、ホントこの道向いてないんだってば……」

止まらない溜息。
どこかで青年の反論が聞こえた気がしたが気にせずに、少女は誰にとも無く愚痴を零す。

――近付かれては負ける。

敵を観察した彼女の直感は、ただそうとだけ告げていた。

魔術戦ならば、まだ分があるだろう。
敵がどんな魔術を使おうとも少女ならば対応出来るだろうし、そもそも並の魔術では、少女の“抗魔術結界”を突破する事が出来ない。加えて通常の魔術戦であれば、少女も自らの“先天魔術（ギフト）”を十全に発揮出来る。

「……」

だが、剣はダメだ。
少女が魔力を収束し、言霊を唱え終えるまでに約1秒。最速詠唱でそれだけの時間を要するのだから、敵に確実な負傷を負わせるには、確実に3秒以上の詠唱時間が必要になるだろう。無論、あの敵が剣を振り下ろすには余りある時間である。

根本的に間合いの噛み合わない両者。
故に彼女達2人の戦闘とは、いかに少女が間合いの外から女を迎撃するか。或いはいかに女が間合いを詰め、少女に武具の一撃を叩き込むかという距離の取り合いになる。
ソレが少女が導き出し、そして敵も了解しているであろう事実だった。

「そっか。まあそうよね。
いいじゃない、分かりやすくて」

少女の口元が緩んだ。
無限の武器を持つ敵。
衛兵を剣術でねじ伏せるその技量。
まるで、その全てを揶揄するかの様に。

――近付かれては負ける。

先刻直感し、確定事項となったその事実は、しかし決して恥じるべき事などでは無い。少女は魔術師であって、そもそも魔術師とは前線で殴り合う存在では無いからだ。魔術師とは、敵が手も足も出せない程の距離を保ちながら、敵の戦意その物を吹き飛ばす程の“魔法（きせき）”を紡ぐ者の事を指す。そして魔術大国たる“銀の国”最強の魔法使いである彼女は、正（まさ）しくその最たる者なのだから――。

少女はローブの懐へと手を忍ばせると、一つの小道具を取り出した。

形状は三日月型。

伸ばせば人間の橈骨と同程度の長さになるであろうソレは、鏡の様な光沢を持った白銀のアクセサリーである。

今、この局面で取り出された道具。

その用途は説明するまでも無いだろう。

これこそが彼女が魔導師として扱う事を選び、その半身と決した“魔装”であった。

――魔装。

それはその名の通りに、魔法の発動を補助する装備品の事である。杖、剣、槍、斧。或いは筆記具や衣服なんていう場合もある。魔導師によってその種別は様々だ。

魔導師はそれぞれが己の先天魔術や特性を理解し、自らに最も合った道具を自らの一部として選択する。それぞれが長い修練の時間を経て、自らと呼吸を共にするに相応しい相棒を探していくのだ。

故に魔装は先天魔術（ギフト）と並び、魔導師の個性を特徴付ける要素の最たる物である。

そして、少女が選んだのは――。

「命ず（ansur）」

左手に三日月を握り、解放の呪文を短く唱える。

魔力を放出した金属は急速にその形状を伸長、膨張させ、武具たる本来の姿へと戻っていく。

――弓だった。

鏡面の様に磨かれた弓身が、蒼い陽光を受けて幻様に煌めいている。エラス鋼と聖銀を混合する事によって紡がれた弦は伸縮性に富み、更に内蔵魔力量の調節によって腕力の弱い者でも十分に過ぎる運動量を矢へと伝える。ミスリルの矢は魔力の蓄積能力に優れ、超遠距離へ魔術の爆撃を叩き込むだろう。

それが彼女の半身。

剣など交える暇も無く、遥か遠方より敵を仕留める月神の長弓。

銀の国（プラティヘイム）の大魔導、アルテミア・クラリスのシンボルたる魔装であった。

「火よ（cen）」

詠唱に伴い、魔法金属の矢が赤熱する。

自らの標的を魔力によって捕捉し、少女はその銀鎚を宙（ソラ）へと解き放った――。

17. 一般の人々にとって興味の無い事象や理解の無い現象に対する実験は多

男がその場所を発見したのは偶然だった。

人気の消えた住宅地に、まるで紛れるかの様に佇むボロ屋。二階建ての寂れた店は、入り口に“魔装屋・ギル”と書かれた看板を下げていた。

この国で育った人間では無く、増してやこの世界の人間ですら無い男である。それが何の店なのかなど完全に理解の外ではあったが、そこが只ならぬ状況に陥っている事だけは一目で把握できた。

理由は単純である。

第一に、二階の窓は全て吹き飛んでいる。

第二に、店の前の石畳には、斧やナイフといった物騒な道具が山ほど突き刺さっている。

第三に、真新しい血痕が、店から石畳へと続いている。

そのあまりにも酷い崩壊の跡は、初見ではここは初めから廃墟だったのではないか、と男に錯覚させた程であった。

――それが間違いだった事に気付くのに、そう時間は掛からなかった。

ガタガタに歪み、半開きのまま固定された扉を蹴破って店内に入った瞬間、警戒しながら様子を窺っていた男を出迎えたのは、まるで樹木の様に乱立する銀の柱と、ボロボロに破壊された商品棚だったのだ。店主らしき中年の男が、店の隅の方でガタガタと震えていた。

舌打ちしながら、男は状況を分析した。

この店は、おそらく白い青年に襲われたのだろう。
現場の状況証拠から、男はそう確信する。
命を狙われ、男に対抗する手段も無く、敵は相当に焦っていたに違いない。おそらくは、武器を調達する目的でここに強盗にでも入ったのだろう。

散らばっている商品らしき武具。
石畳に残された血痕。
何らかの魔術でも使われたのか、無秩序に立ち並ぶ無数の柱。
これらから判断するに、強盗に入った青年はここで店主の魔具による抵抗に合い、傷が開いたか新たに傷を負ったかをして退散したというところだろうか。
少なくとも、男はそう理解した。

――ならば、この惨状は自分の責任である。
先程門の外で仕留められなかったのだから、錯乱した青年が何かをしたとしたら、それは全て自分の責任なのだ。男は店主を起き上がらせ、深々と頭を下げた。

男は店主に、手持ちの金を財布ごと渡してやった。
国交の無い武の国の通貨が、この国の通貨と両替可能であるとは思えなかったものの、それでも男は何かをしなくては気が済まなかったのである。そして何より、ここでこの惨状を見なかった事にしては、主である“彼女”の顔に泥を塗る事になる。

男には、それだけは出来なかった。

外に散らばっていた商品を粗方店の中に運び終えた後、男は意を決して導火線を辿り始めた。

一度は途切れた道標であったが、今度ばかりは途切れる前にヤツに追い付く。これ以上ヤツが何かをしでかす前に、一太刀の下にあの白装束を切り伏せる。男は使命感にも似た焦燥感と共に、白銀の石畳を猟犬の如く駆け抜けた。

「……」

そして彼は今、導火線の終着点にいる。

場所は時計塔の前。

青年の姿は未だ見えないが、血痕が建物の内部へと続いている以上、ここが目的地である事に疑いの余地は無かった。

内部へと足を踏み入れる。

時計塔は図書館も兼ねているのか、内には古めかしい専門書が所狭しと並べられていた。

強いインクの薫りが鼻腔を満たし、まるで青年の血臭を紛らわすかの様に、男の五感を麻痺させる。

螺旋状の階段を登る。

魔術大国故の装飾なのか。

階段や壁、柱には、所々に円形の図形が描かれて、ぼんやりとした燐光を放っていた。

その周囲には、血塗れの手形が無数に付着している。

それらを無視しながら、男は血痕を辿り歩みを進めた。
入り組んだ通路に、曲がりくねった階段。
それらに方向感覚を失いそうになりながらも、男はただ血の跡だけを頼りに先へと進んで行く。

どれ程の距離を歩いたのか。
どれ程の階層を登り、降りたのか。
それすらもアヤフヤなまま、やがて彼は開けた場所へと辿り着いた。
本棚が無く、天井から蒼い光が差し込む部屋。
四方に窓が設置され、その前に置かれたソファーが陽光に照らされている、光のテラス。
時計塔の断面に匹敵する広さを持ち、開放的な視界から眼下の街を一望出来る、最高層の展望台。

「遅かったじゃないか。
オレは待たされるのは好きじゃないんだがな」

あちこちに円い図形の描かれた、落書きだらけの空間。
その一番奥。
壁際のソファーに腰掛けて、白い青年はオレンジの羽根を指先に遊んでいた。

一一一一一

老人から武器を手に入れた後、青年が初めに行ったのは必要な全ての“常識”を再検証する事だった。

手始めとして彼は、先ず早速店の床で羽根ペンの能力を試してみる事にした。老人の様子からしてそれが偽物であるとは思えなかったものの、それでも一応のところ、動作を確認しておく必要性を感じたからである。

店主が訝しむ様な目線を投げかけ続けていたが気にせずに、青年は広場で少女が描いた図形を努めて正確に再現し、また少女の発音までもなるべく真似て言霊を呟いてみることにした。

……結論から述べると、結果は無残であった。

何度か図形を試し描きし、発音も変えて何度も何度も挑戦してみたものの、床には何の変化も起きなかったのである。もしやこの建物はアダマス鉱とやらではないのではないか、などとまだ希望のある仮説を考案しつつ、彼は一縷の望みを託しながら、床中に魔法円を描いて描いて描きまくった。

店中を落書きだらけにされた店主の目が血走り始めた頃、彼は漸く、その道具が偽物であるという可能性を受け入れた。疲れた腕を休ませる為に、腕を屈伸したり手を開閉してみたりした青年。

――その時である。彼は、少女が石畳を変形させた時には、確か羽根ペンを魔法円へと翳しながら呪文を唱えていたという事実を思い出した。

駄目元で、試しに羽根ペンを床に翳しながら詠唱を行ってみた青

年。

……結果、床中にビッシリと描かれた魔法円は一斉に燐光のエフェクトを放ち、店内は一瞬にして崩壊したのであった。

まるで化け物を見た様な顔をした後、徐々に化け物の様な顔つきに変わっていった店主の反応が気ががりではあったものの、既に学者モードに突入していた青年は、そんな些細な事など気にも留めずに次の行動を開始した。

商品棚に置いてあったメジャーの様な道具を手に取り、二階の窓から一階へと垂らす。目盛りには“ラド”とかいう聞いた事もない単位が使われていたものの、取り敢えずは地面から二階の窓枠までの高さを知る事が出来た。

そして青年は、店の中にある物を抱え込めるだけ抱え込み、一つづつ、静かに、窓から外へと落としていった。

時計塔には秒針が無かったが、運良く店内に掛け時計を発見した為、それで落下時間の平均を求める事には成功したのだ。

商品を粗方落とし終え、求めた数値を羊皮紙の裏に記入し終わった頃、青年は背後に妙な気配を感じたので振り返ってみた。

そこに居たのは、鬼の様な形相をした店主。

柱の森を悪戦苦闘しながら通過し、不安定な体勢になりながらも、何故か手斧の様な物を大きく振りかぶっていた。

……店主の行動は意味不明であったものの、その様子から重要な事項を思い出した青年。取り合えず無言でその斧を引っ手繰ってみることにした。そして自らが生やした柱のあちこちを力任せに殴り付け、再び羊皮紙に何かの数値を記入していった。

最後に斧を床へと打ち付けると、流石に限界が来たのか、斧の刃はポロリと折れてしまった。

漸く気が済んだのか。

ボロボロに崩壊し、殆ど廃墟となった店を出ようと出口へと向かった青年。そんな彼の頬を掠め、鈍く光るナニかが壁へと突き刺さった。

――ナイフだった。

振り返ると店主が、聳えた柱の隙間から、肩をガクガクと震わせながら次の刃物を投げようと構えている。

……店主が何をしようとしているのか、青年には本当によく分からなかった。

だが取り敢えずはその行動のお陰で、彼は最後の布石を思い付く事ができた。

治りかけの傷口に手を当てる。

くっつきかけた細胞同士の隙間に指を入れて、力任せにグイっと広げる。視界が白くなるような痛みの後に、再び例の赤いモノが、体内からジクジクと噴き出して来る感覚を彼は感じた。皮膚の中に指を入れて、更に広げる。自分の口から自分のものとは思えない声が出て、床には真っ赤なペイントがベッタリと施されていった。

店主はその様子を呆然と見ていたが、やがて顔を青くして目を逸

らし、最後には怯える様にガタガタと震えるだけになっていた。

……繰り返すが、青年には店主の考えている事がよく分からなかった。

否、分からなかったし、そもそも興味が無かった。

今の彼にとって、重要なのはただ一点だけだったのである。

――これで、導火線には再び火が着いた。

男は血の跡を辿り、いずれ自分へと追い付くだろう。彼はそう信じ、時計塔へとその足を速めた。

――――

そして今、状況は彼の意図した物となっている。

場所は時計塔の最上部。

街中を見渡せるその高座において、彼は自らの命を狙う猟犬と対峙していた。

「遅かったじゃないか。

オレは待たされるのは好きじゃないんだがな」

白い青年は、男に向かって不遜に言い捨てる。

いつもと変わらぬポーカーフェイス。

内心を悟られぬように、努めて淡々とした声色で彼は語り掛けた。

「なぁに、臆病なキツネがチョロチョロ逃げ回りやがるからよ。ちょいとばかり追い詰めるのが手間だったんだ」

それに対し、男は軽口で返答する。

甲冑の音を高く響かせながら、まるで大地を踏みしめる様に、ゆっくりと前方に歩を進めて来る。

獲物を狙う猟犬の眼光が、青年の心情を見抜こうと白く細められていた。

「――――？」

――不意に、その足が止まる。

男の眼光はなお一層鋭くなり、まるで白い青年を正面から射抜いているかの様な印象を与えた。

「観念した……って顔じゃねぇよな。一丁前に罠でも張ってやがんのか？」

「……やれやれ、おかしな事を言うんだな」

大袈裟に肩を竦めながらの返答。

青年はいかにも辟易した面持ちで、男が何を言っているのか分からないといった口調で言葉を返した。

（勿論、張っているに決まっているだろう）

口には出さずに、彼は内心にて苦笑する。

古来より、人間が猛獣と戦う手段は罠か猟銃と相場が決まっている。

素手でライオンと向かい合おうとするのは、人間でない身体能力をもっている者か、人間並の知性を持ち合わせていないモノの愚行だろう。

――故に、彼は男とは正面から戦わない。

“領域”まで目測、残り3歩。

男にその距離を歩ませる事が出来れば、その瞬間に運命が決する事を彼は知っているからである。

「たしか一撃だけ打たせてくれるんだろう？

だが見ての通り、オレは今武器を持っていない。

出来れば剣を貸して欲しいんだが……」

特に意味が無く、興味も無い問い。

だがこの場においては、問うという行為そのものに意味がある。

今の彼は、例えその内容にさしたる興味が無くとも、目の前の男と会話を続ける事で時間を稼ぐ算段でいたのである。

「おかしな事を言ってんのはお前だ。

生憎と今日は、さっきお前に渡した物以上の剣なんか持ってねぇしよ、それに……」

青年の思惑を知ってか知らずか。

男は腕を組み、眉を顰めながら――、

「てめぇにはもう、一撃打つだけの資格もねぇ？」

殺気を漲らせながら吐き捨てた。
果たして何があったのか。
男の貌からは、初見よりも強い殺意が感じられる。
多くの人間を斬り捨てたであろう、剣の達人が放つ殺気。それは実質、死神の鎌と変わらない。通常の精神を持つ現代人であれば、向かい合っただけで筋肉の痙攣を起こし、失禁しても不思議が無い程の迫力がそこにはあった。

「……」

だがそれは、青年にとって考察するにも値しない要素（ファクター）だ。彼は思考の余分を排除し、必要な能力のみに意識を傾けている。

――2歩。
男が足を進めたのを視認し、カウンターを一つ回す。

「やれやれ、そんなにオレを殺したいか。
まあ、敵国の協力者の首を狙うのは当然なんだろうが……。
でも一つだけ聞かせてくれ。
それはあんたの意思か？
それとも、あのお姫様に命令されて仕方なくか？」

「ばぁか、そんなモンどっちもだよ」

形式だけの質問に、律儀にも返答する男。
しかし、その殺気は微塵も収まる気配が無い。
青年の手に汗が滲む。
命を狙う集中が時間と共に研ぎ澄まされていくのを、青年は肌で感じていた。

「俺は生憎と育ちが悪いもんでな、主の真っ当な敬い方なんか知らねぇし、口の利き方もなってねぇだろうよ。
でもな、従者(おれ)は主には逆らわない。
あいつがそうしろっていうんなら、それがいつだって俺の意思だ」

「……分からないな。
心酔するのはあんたの勝手だが、あのお姫様だって完璧って訳じゃないだろう。
それでもあんたは、どんな命令を貰ったとしても、その主様とやらには絶対服従だっていうのか？」

「そうだ」

言いながら、男が腰の短剣に手を掛けた。
――まだ早い。
青年は内心で舌打ちし、会話を続ける術を模索する。

男は、あのお姫様の意思に従うという。
成る程、従者としては立派な態度なのだろうが、それを認めては会話が終わってしまう。
ならば、論破だ。
論破を試みるのがここでの正しい選択に違い無い。
青年は思案し、分析する。

その結果、例え男が腹を立てようと関係は無い。
男は、この話題に関しては決着を付けるまでは自分を殺さない筈だ。
思想の不足を指摘されたまま敵を斬り伏せては、返す言葉が無かったと公言する様な物なのだから。
青年は打算を重ねながら、男の言動に意識を研ぎ澄ます。
男は、大きく溜息を吐きながら口を開いた。
「分かんねぇのはてめぇだ。
あいつはどう見ても完璧なんかじゃねぇし、そもそも、いつでも正しい完璧な主なんかいる訳がねぇだろ」
青年は小さく頷く。
彼はあのお姫様の人間性など知らないし、そもそも大して興味など持っていなかったが、それでも“完璧な指導者”などというものが幻想の類である事は理解していた。
「……その通りだろうな。
確かに、完璧な指導者などいないだろう。
だからこそあんたの、指導者に絶対服従などというスタンスは良くない。不可解な指示には疑問を持って問い質したり、間違った命令にはそれを指摘できたりする従者、っていうのも中々素晴らしいと――」
言いかけて、青年は息を飲んだ。
男の感情には、一切の変化が見られなかったからだ。
主君の不足を指摘し、男自身の在り方への疑問まで投げ掛けたというのに、男は微動だにしないまま青年を見据えている。

「だからどうした？」

男は肩を竦めながら答える。

青年の言い分を全て認め、肯定した上で、しかし男は、それを斟酌するに値しない物であるとして切り捨てた。

「あのな。主が正しいか間違ってるか、なんてのはな、俺にとっちゃどうだっていい事なんだよ。

――ってか、そもそも意味がねぇ。

主ってのは、いつだって正しいもんなんだからよ」

「……？」

青年は首を傾げた。

男は、青年の言い分を認めている。

自身の主君は完璧ではないし、そもそも完璧な主君などいないという事を事実として認めている。

だがそれならば、主はいつでも正しいというのはどういう意味なのか。

矛盾した思想。

矛盾した定義。

それは、青年の意図からは完全に外れる思考であった。

「分かんねぇヤツだな。

オレはな、間違った判断なんかねぇって言ってんだよ。

あるのは一つ。

上手くいったかいかなかったかだけだ。

政治なんてのはな、どんな無茶な手段だって上手くいく時もあり

ゃ、万全を期したのに失敗する事もある。
だったら間違いなんかねぇだろ。
指導者なんてのは、好き勝手やりゃいいんだよ。
もし、万が一それが上手くいかなかったら、そりゃたまたま、それを実行する従者の力が足りなかっただけの話だ」

「……」

青年は言葉を失った。
要するにこの男は、どんな指示や命令でも“正しい物”として扱うし、そもそも絶対に間違いだと言える判断など無いと言っているのである。

例えば仮に、青年自身の価値観に置き換えてみよう。
物理学の世界では、答えは常に一つである。
誰が観測しても林檎は地球へと落ちていくし、真空中の光は、常に秒速３０万ｋｍで駆け抜ける。

だが、その結論に至る方法は一つではあるまい。
単純な方程式の解を積み重ねて証明していく方法もあれば、直接手で触り、実験を繰り返す事で積み上げる方法もある。
そしてそれは、万物に共通の真理だ。
例え答えや目的が一つであろうとも、そこに至る手段は一つでは無い。逆に言えばそれが目的へと向かう方法である以上、どのような方法を用いたとしても、難易度の差こそあれ目的へと到達出来る。

だからこの男は、自らの主を後押しする。
どのような手段にも目的を達成する可能性があるのならば、自ら

の主の判断を疑いも無く信じて、例えそれが非効率的な物であっても、上手くいく様に全力を尽くす。

よって、主の判断に間違いなど無い。

あるのはただ、たまたまその結果が上手くいったかどうかと、臣下にそれを実行するだけの力があったかだけ。だったら臣下のすべき事は、ただ愚直に主を信じ、その意思が通る様に尽力するだけである。

――それが、この男の考え方であった。

「全ての道はローマへと通ず、か。

言いたい事は分からんでもないが……。

あんたがどんな社会で育ったのかは知らんが、まったく溜息が出る程の忠義者だな」

“それでも、より良い手段を模索した方が明らかに近道だろうに”と、青年は実際に大きな溜息を吐きながら付け加えた。

「知らねぇよ。

生憎と、俺は命令の善し悪しを判断出来るほど頭良くねぇんだ。

出来るのはただ、一回誓った事を、バカみたいに最期まで張り通す事だけだ？」

――1歩。

男は眼光の鋭さを増し、“領域”へと1メートル足らずの場所へと足を掛ける。

（踏み込め。踏み込め）

会話を続ける手段を忘れ、青年はただ男の行動を願う。

あと1歩。
そのたった1歩の距離を残しつつ、男は短剣に手を添えている。
男が近付いて斬りつけてくるなら良し。あの場から投獄してくれればアウト。青年は、全身の筋肉が硬直していく様な錯覚を覚えていた。

（踏み込め、踏み込め）

心の中で繰り返す。男の思考は理解した。説得は不能だろう。ならば会話を続けて時間を稼ぐか、もしくは男が無意識のうちにあと1歩だけ、その足を前に踏み出すような偶然が起きないか。

（踏み出せ、踏み出せ）

なおも繰り返す。あと1歩。自分を直接斬りつける為には踏み出さなくてはならない。ならば早くその足を――。

「……おしゃべりは終わりか？
そりゃ残念だな。そんじゃ、手早く終わらせるぜ？」

青年の祈りが通じたのか。
男はその右足を、まるで擦る様に前方へと動かし――、

「――――っ？」

突如、2メートル程後ろに飛び退いていた。

「は……？」

青年の困惑した声が響く。

男の理解出来ない行動に、彼は唐突にその双眸を見開く。

そして次の瞬間、まるで彼の視界を横切るかの様に、紅い何かが飛来して来ていた。赤色の飛行体は高速で空中を駆け、たった今まで男が立っていた床へと命中する。

「――――っ？」

咄嗟に目を覆った。

紅いモノが爆ぜる。

まるでクラッカーの様な軽い残響を残しつつ、赤色の球体は床に触れるなり火花を伴って四散した。

想定外の現象に、青年は疑問符を飛ばす。

彼の視線の先では、その想定外の現象が今でも確かに起きていた。

――床が溶けている。

アダマスの床は赤い球体が当った部分で確かに溶解し、燻る様に黒煙を噴き上げていた。

それは、どの様な現象だったのか。

一体誰が、何をした結果なのか。

青年はついぞ、自力でそれを理解する事は出来なかった。

「何者だ？」

男が紅球の飛来した方向へと振り向く。

獣の様な眼光が、明確な殺意を込めて突然の闖入者に向けられている。

青年は、その視線を追うかの様に、展望台の窓枠へと目を移した。

「チッ、勘だけはいいでやんの。

さっさと死んでくれよな～、面倒くせ」

甲高い声が響く。

声変わり前の子供に特有のアルト。

第三の魔人は赤い髪を靡かせて、ニヤついた笑みを浮かべながら窓枠へと腰掛けていた。

――――

視線の先には少年が居た。

細身の身体を包むのは、ボロボロに破けた迷彩服。

燃え立つ様な髪は赤銅。少年自身の口調と合間って、それは彼の刺々しい雰囲気を増している。

背中に背負った長い筒。パッと見ではバズーカ砲の様にも見えるその道具や、腰元に備え付けられたホルスターがまるで軍隊出身者の様な印象を与え、青年には、それらが少年の物騒な気配を尚も強めている様に思えた。

何よりも目を引くのは、赤髪の間から覗く耳である。まるで犬の

様な形状のフサフサの耳が、稜(そば)だつ様にして頭の上部に付いている。
それはまるで、ゲームの世界の獣人が、そのまま具現化したかの様な姿であった。

「何のイタズラだ？　ガキ」

男が少年へと問う。
静かなその声色は低く、相手の年齢など斟酌せずに殺気を向けているのは明らかである。
――いや、それは違うだろう。
躱したから良かったものの、もしも咄嗟に避けてさえいなければ、男は溶けた床と同じ末路を辿っていたのだ。
それをしたのが年端もいかない少年で無かったのならば、男は躊躇い無くその刃を向けていたに違いない。

人間を向かい合っただけで硬直させる殺気。
男の低い声を受けて尚、少年はカラカラと笑っていた。

「イタズラも何もねぇだろ～？
ほら、なんかお前ら楽しそうな事してるしょ～、見てたら交ぜて貰いたくなったってやつ？　おれっち、一応その為に呼ばれたみたいだし～？」

間伸びした口調で言いながら、少年は小さくその左手を見せた。
橙赤色に輝く紋様。
その場の二人が等しく持つその図形が、少年の掌にもボンヤリと光っている。

――最早語るまでもあるまい。
この少年こそが、第三の大国により召喚された守護魔なのである。

「……。
はぁ……」

ニヤニヤと笑う少年に向けて、男は本当に怠そうに溜息を吐いていた。

「……無差別とは聞いてたが。
ド素人の次はこんなガキだとはな……。
――ったく。俺は本当に、こんな奴らと殺し合いしなきゃなんねぇのか？」

独り言のような声。
男はやる気がなさそうに頭を掻きながら、辟易した様子で少年へと目をやった。

「……おい、ガキ。
さっきのは見逃してやるからよ、今のうちに逃げとけ。
俺もガキを斬る趣味はねぇし、ウェヌス（あいつ）が何も言わねぇうちは、まあ見逃してやるから」

「そう、それ？
いいね～、分かってんじゃん？
おれっちが文句言いてぇのは正にソレなんだよ～？」

少年はニンマリと破顔し、我が意を得たりと手を叩きながら男の言葉を囃したてた。僅かに眉を顰める男。そんな彼の様子を気にも止めず、少年は更に言葉を繋げた。

「さっきっから聞いてたけどな～。オマエ何なの？　なぁにが主様には絶対服従です、だよ？　ヒャヒャヒャッ？　マジ笑い死ぬ？　いい歳してどこのドMだよって感じでさぁ？　口煩く命令してくるだけのヤツなんざ、さっさと殺してやんのが世の為だろ？」

「……」

男は黙った。

しかし、纏う殺気は一層濃くなっていく。

――相手は子供である。

本来ならば、男は何を言われようと腹を立てる事は無いだろう。

事実として男は、今も一切腹を立ててはいない。

だが、それと生存を容認する事は全く別の問題だ。

何しろ目の前の少年は異世界から呼ばれた魔人であり、敵国の協力者であり、男にとっていずれは殺さなくてはならない敵なのである。

先程、男は見逃してもいいと言った。それは正確に表現するのであれば、本来ならばここで殺さなくてはならないが、特別に今回は殺さないでやってもいいという意味である。

ならば相手がそれを拒否する限り、わざわざ生かして帰す理由はどこにも無い。

男は、黙したままに少年を睨み付けた。

「――最後だ。
命が惜しけりゃ家に帰れ。
大人しくするんなら、今日のところは見逃してやる」

「は～っ？　バッカじゃねぇのぉ？
それ、脅してるつもり？
分っかんねぇなぁ、それじゃまるで、オマエがおれっちより強ぇみて～じゃん。
そっちこそ、命乞いでもすりゃあちょっとは楽に殺してやるぜ？」

男の最期通告。
それを挑発的に跳ね除け、少年は窓枠から床へと降り立った。男を睨みつつ、少年は腰のホルスターに下げられていた“武器”を男へと突き付ける。

「……なんだそりゃ？」

男が疑問の声を上げる。
青年もその様子を無言で観察しながら、その顔にやはり疑問符を浮かべていた。

――それは、奇怪な武器だった。
いや、武器と形容していいのかすらも怪しい。
少年が右手に構えた道具。
それは、彼らが知る武器の形状からはあまりにもかけ離れた物だったのだ。

形状だけで言えば、最も近いのはバズーカや無反動砲だろうか。
無骨な金属製の筒は中空で、もしも少年が爆薬や砲弾を詰めてそ

れを使用したとしたら、辛うじて武器としては役に立つのかもしれない。

だがそれも、もしもの話だ。

現実はそう上手くはいかないだろう。

何しろ、小さ過ぎる。

腰のホルスターに収まっていたという事実が示す様に、サイズは精々拳銃か、はたまたドライヤー程度しかない。拳大くらいの口径の筒は真に中空で、中には弾丸も爆薬も装填されておらず、こちら側から覗くと少年の服がはっきりと見えている。

否、それも当然だろうか。もしもこれが無反動砲だとしたら、砲身に当たる部位がごっそりと抜け落ちている事になる。当然弾丸を装填する場所など無いし、そもそも肩に掛けられない大きさならば、無反動砲はその構造上カウンターウェイトが射手を直撃する。それでは自滅だ。

空っぽの筒を構え、強気に男を挑発する少年。

それはまるで、オモチャの拳銃でごっこ遊びをしている子供の様にも見えた。

「まっ、知らねぇよな。

うん、仕方ない仕方ない。

よしよし、そんじゃ動くなよ？

教えてやるから動くなよ～？」

少年はニヤニヤと笑いながら男を見ている。

男はその様を、ただ黙したままに睨んでいた。

……無理もあるまい。
おそらく男の世界には、それと形状の類似する道具すらも存在してはいなかったのだろう。
初めて目にする空っぽの筒が殺傷力を持とうなどと、まさか想像しよう筈も無い。

男の油断を悟ったのか。
少年は口元を悪鬼の様に吊り上げ、その“銃口”を男の青い鎧へと向け――、

「あばよ。
くたばれ、青ゴリラ？」

空っぽの筈の小砲は、男に向かって火を吹いた。

――――

その戦いは戦争だった。

比喩では無い。
もしも我々が戦争を大量の武器、或いは相当の戦力を投入し、夷敵を殲滅する事を目的とする行為と定義するのであれば、彼女達の戦闘はその全ての事項を問題無く満たすことだろう。

「やあああああ？」

鋼の音が反響する。
純白の姫はもう何発目になるか分からない流星を、上段に構えた

ブロードソードで左後方へと受け流した。風切り音が遠ざかり、流星の軌道を変えた大剣が曲がる。彼女が製作した希代の名剣は、自らを破壊せんと駆けて来た飛来物の威力を受け流しきれずに、まるで飴細工の様に湾曲していた。

無理も無い事である。

いかな名剣・名刀であろうとも、それが金属製である以上、金属の持つ性質から逃れる事は出来ない。少女が放つ流星は、その実灼熱の業火を纏った爆弾だったのだ。

「――――っ？」

形を失った大剣を放り捨て、石畳から次の武器を構築する武装姫。自らに向けて放たれた残り5発の流星を、広刃の短刀を二本生み出し、縦横無尽に振り回す事によって後方へと弾く。3発弾いた段階で右翼は用を成さなくなった。刀身の消えた右剣を投げつけて4発目の軌道を逸らし、最後の1発を溶けかけの左翼で叩き落とす。

「はっ……、はぁ……」

自らの剣舞にて流星群を防ぎ切った戦姫。

未だ無傷なままのその顔に、しかし余裕の色は見られない。

背筋に滴る冷たい汗を感じながら、彼女はただ、静かに敵の戦力を把握していた。

――敵の魔装は弓矢であった。

本来は射出に相応の力を要し、少女の細腕では満足な威力が発揮出来ない筈の遠隔武器。

否、そもそも弓矢とは、本質的に集団運用を前提とする兵装であ

る。実戦である程に当てる事が難しく、また刀剣や槍程の殺傷力の無い弓という武器は、何十、何百という射手が同時に矢を放ち、矢の雨を降らせる事によって初めて敵の軍団を殲滅する事が可能となるのだ。

その意味では射手がたった一人の現状など、彼女(ウェヌス)程の使い手の前では何の脅威にもなりはしない。

しかしそれは、あくまでも敵が常識内の存在であった場合に限られる。魔導師たる少女が扱っては、弓矢は最早、全く異なる意味を持つ兵器へと変貌していたのである。

女の周囲は抉られていた。

矢には果たして、どれ程の魔力が込められていたのか。

強力な火属性の魔法を纏った矢は大地を抉る爆薬となり、アダマスの石畳を粉砕している。

クレーター状の穴が空き、変形した大地はまるで空襲跡の様で、灰白色の煙をブスブスと燻らせている。直撃すれば人間など容易く爆散するその威力を再認識し、彼女は更に神経を研ぎ澄ました。

『銀の流星(hagalaz)、天の雷(thurisaz)、我が怨敵を火(hagal)で囲め(cen)』

「――――？」

数十メートルの先から響く声に、戦姫は再び空を仰ぐ。

彼方より迫る羽の音。赤銀の流星群は群青の空に白い尾を引き、陽光に煌きながら天を翔けていた。

目算、１４撃。

その全てが標的の魔力を感知し、目標物に向かって落下していく、必殺の威力を持った追尾魔弾――？

「……」

――それを前にして、しかし彼女は楽しげな微笑を浮かべていた。

自らに迫る数多の死。

これだけの数の遠隔魔術が直撃しては、一個中隊であろうとも大打撃を受けるだろう。

通常、単騎でその着弾点に立つ人間が原形を留める術など無い。

否、だからこそ、彼女はそれを防ぐ事に愉悦を感じるのである。

彼女（ウェヌス）もまた大魔導。ならばこそ、敵の魔術を防げぬ道理などありはしない――。

フレアを纏って迫る銀閃。

全てを焼き尽くし、粉砕するであろう死の軍団を前にして、彼女は気合いと共に、石畳からそれを上回る大軍団を編成する。

「はあああああ？」

銀の柱が天へと5本。

振り上げた腕に握られた鉄塊は戦斧に変わり、礫（つぶて）は投げられる直前に姿を変えてダガーになる。

天高く放たれるモーニングスター。2つの流星を粉砕したそれは空中で5本の連節棍（フレイル）へと分かれ、宙を円形に薙ぎ払った。

その猛攻をすり抜けた3本の火矢。

1発であろうと直撃すれば標的を焼き尽くすその業火は、彼女に触れる遥か手前で4枚の盾に阻まれる。

――14撃。

絶対の崩壊を齎す筈のその全ては、しかし絶対の防御を誇る武具の山によって空中で果てた。

「フ……ッ」

女の口元が綻んだ。

それは死の雨を散らした自らの能力に対してか、または自らにそこまでの力を出させる好敵手の技量に対してか。

それすらも曖昧なままに、女は自らの敵に向けて心底楽しげに声を掛けた。

「この程度ですか？

そんなか弱い武装では、私には傷一つ付ける事は叶いませんよ」

手元には新たに長槍を構え、武装姫は矢の発射元を目指して駆け出した。

―――

標的からの挑発の声は、真紅の少女を身震いさせた。

場所は純白の姫から１００メートル程の距離を隔てた、王宮に程近い建物の陰。自らの攻撃が全て弾かれた事を魔術によって感知し、彼女は小さく舌打ちをした。

――敵は、化け物だった。

少女が放った矢の総数は既に２９。
本来であればたった一矢であろうとも標的を焼き、中型の魔獣すらも絶命させる筈の遠隔魔術を既に２９度、あの女は無傷なままに弾いて見せたのだ。

様子見のつもりで放った5本は、弾くまでもなく躱された。
次は弦の戻りを加速して、初撃よりも遥かに高威力化した火矢を１０本。しかしそれも、先刻剣舞によって叩き落とされた。
今の１４本に至っては、その全ての矢に“狼霊級魔術”相当の炎を纏わせて、内3本は死角から迫るように計算して放ったのだ。
それを無傷で防ぎ切るなんていうのは、ソレは手練れとか達人とかいう以前に、最早人間では無い。

傷を負う気配すら無い敵。
これだけの牽制を掛けながら逃走しようとも、一行に開く気配の無い標的との距離。
少女はここにきて、自らの失策に焦りを感じていた。

無限に装備を用意出来る敵と違い、少女の武器には球数制限があるのだ。
残矢数は、現時点で２７。
既に手持ちの矢を半分以上を使い切った計算である。

少女とて大魔導だ。その気になれば、石畳から即席の矢を生み出す事くらいは出来るだろう。しかしそんな物では現行の矢を上回るだけの威力など望むべくも無いし、そもそも調達に時間が掛かり過

ぎる。
敵のように一瞬で武器（や）を作製する手段が無い以上、その時間はそのまま彼我の距離を埋める事になり、自らの首を絞める結果になるのは間違いない。
つまり少女は、なんとしてもこの27発の矢で敵を仕留めるしか無いのである。

「……ま、今更文句言っても仕方ないんだけどね。
でも……、アレ本当に人間なわけ？
なんかヤバい魔獣とか、変なのが混血で入ってるんじゃないの？」

軽口を叩きつつ、少女は弦に次の矢をつがえた。
集中の限界（タイムリミット）が迫る感知魔術と、ジリジリと差を縮めて来る敵。その二つに精神力を削がれ、額には微かな汗を浮かべながら――。

――手はある。

少女は冷静に首肯し、肯定する。

ここは少女の本拠地であるし、そもそも少女は、自身があの敵に劣っているとは微塵も感じていない。
作戦という程でも無いが、この27の矢を放てば、必ず敵を業火に包むという確証が確かにあるのだ。

勝負は一度。
必殺の炎を用いて、武器の山を吹き飛ばす――？

「結界構築。 othel 霊道舗装。 daeg
我が怨敵を、火に包め hagal cen」

更に強く魔力を込め、少女は文字通り矢継ぎ早に矢を繰り出した。

――――

自らの標的に向かって駆けながら、女はその煌きに目が眩んだ。

頭上に広がる群青の空。
蒼い太陽が支配するその天空を切り裂いて、再び銀糸の流星群が迫って来る。
その数を目算した瞬間に、女は不覚にも背筋が寒くなるのを感じた。

「多い……？」

女の顔に焦りの色が浮かぶ。
天空より飛来する風切り音。
その総数は２６。
それも込められた魔力の総量は、これまでなどとは比較にならない。
一本一本が誇る熱量、実に前回の５割増し。
それは一個大隊を相手にするかの様な、あるいは竜種の討伐に派遣された軍隊が使用するかの様な、正しく規格外の魔術行使であった。

小さく息を飲む音。

金糸の髪を背中に鋤き、翠の瞳は真っ直ぐに空を見上げている。

「……いいでしょう」

女は心底愉快そうに微笑った。

白薔薇に例えられるその笑みは慎ましくも大輪に咲き誇り、見る者全てを虜にする程に眩い。

「分かりました。

決着を付けよう、という事なのですね」

小さく首肯し、天を見据える。

迫る魔弾の雨。

無数の弾丸が強烈なフレアと共に飛翔する様は、まるで空そのものが燃えているかのようである。

そのあまりにも絶望的な破壊力。

標的に絶対の消滅を齎す死の軍勢を前にして――、

「ええ、いいでしょう。

異存も不足もありません。

無論、受けて立ちます？」

女を中心として展開される光のエフェクト。

こちらもこれまでの比では無かった。

最早剣舞で防げる数では無いと思ったのか、彼女を中心として無数の金属塊が乱立していく。

刃渡り５メートルの剣が１０本。天を切り裂く様に伸長するその様は正に鋼の大樹だ。

その隙間を枝葉の様に走る捕縛鎖はそれこそ無数。

武具の城の主たる彼女の前には、厚さ１メートルを超える鏡面の

盾が生まれた。

――3秒。

その瞬き程の時間の後に、彼我の優劣は決定するだろう。

武器の城が敵の軍勢を打ち破るか、或いは敵の炎がこの身を焼くか。いずれにせよ、これだけの死力を用いた魔術の行使。実質、勝負はこの激突で決定する。

――2秒。

純白の姫君は、漸く敵の勢力を完全に把握した。

敵の総勢26。

敵にも焦りがあったのか、内5本は軌道を外れて命中しない。よって実数は21。

その魔力量を、こちらの防壁が防ぎ切る可能性は――、

――1秒。

「――――っ？」

激突する二つの金属軍。

鋼の森を、銀の炎が蹂躙する。

鋼の城が、銀の兵団を粉砕する。

発生する熱量が火龍の息吹なら、崩壊の音は獣の咆哮だ。

通り一帯の色は消え、絶え間の無い爆撃音は音という音を奪い去る。

「く……」

その中心あって、彼女は瞬き一つせずに戦況の把握に努めていた。神経を研ぎ澄まし、聞こえない筈の音を聞き、見えない筈の軍勢の激突をその目で見る。絶え間ない雷鳴。永遠と思える程の攻防はその実、刹那か。集中は時間の感覚を忘れさせ、人には把握出来ない程に僅かな歪みを無意識に把握させる。

衝撃の数はここに至るまでに１５。

迫る魔弾は残り６発。

１７発目で構えた盾が軋んだ。

それは即ち、自らの前面に存在する鋼の森が消滅した事を示している。残る矢、４本。何もせずとも汗が滲む灼熱の大気の中、彼女は矢が盾を削る音だけを聞いていた。

「――――っ？」

３、２――、砕けた。

彼女を守る最後の防壁、鏡の盾が、２０本目の矢を受けて塵芥に粉砕していく。

残る矢、１本。

しかしその１本は、当たれば確実に絶命する死の魔弾――？

当たれば死ぬ。盾を失い、無防備となった標的は抵抗する事も出来ず、脳漿まで沸騰させて霧散することだろう。それが城を失った主の運命だ。

そう。それが彼女でさえなかったのならば――、

「やあああああああ？」

純白の姫は右手に魔力を収束させ、再び魔術を使用した。武器作製は彼女の先天魔術である。故に詠唱も術式も必要としない。その手に触れる金属があれば、彼女の手は瞬時に武器へと加工する。

そして今、彼女の手元には金属がある。

たった今砕け、破片となって飛び散っていく盾の欠片が――、

「――――っ？」

――金属音が、一際高くなった。

盾の欠片から生み出した短剣。

刃渡り２０ｃｍ程のその小さな刃は、主を貫かんと駆けて来た鏃に当てられ、ほんの僅かだけその進行方向を左へとずらす。

爆音が響き渡る。

最後の魔弾がその魔力を炸裂させ、周囲を巻き込んで空間ごと焼却していく。その一撃。少女が必殺を期して放ったであろうその魔弾が果てる断末魔を、彼女は自らの背後に聞いていた。

「はぁ……、はぁ……」

爆風が緩やかに外気を運び、熱を持った彼女の身体を仄かに冷ま

す。
——勝った。
女は確信し、乱れた息を整えながら首肯した。
彼女は未だ無傷のままそこにあり、少女の火矢は一撃たりとも彼女の肌に触れぬままにその役目を終えたのだ。

互いが死力を尽くした魔術行使。
全力を尽くし、必殺を期した攻防。
ならばそこで完全なる敗北を喫した以上、敵に戦意など残ろう筈も無いだろう。

「私の勝ち、ですね。
アルテミア・クラリス。大人しく降伏して下さい。
貴女が敗北を認め、守護魔を処分するというのなら、私とて命までは取りません」

自らの声を聞いているであろう敵に向けて、彼女は凛とした声でそう告げた。
告げながら、意識は自らの行っている魔術、逆探知の術式へと向ける。

「……」

——変化は、無い。
敵は王宮の前。時計塔の隣にて不動。
これ以上移動する気配も無ければ、感知魔術を切って逆探知を止

める気配も、逃亡する気配すらも無い。

それをウェヌスは、武器の補充。
敵の戦闘を続行するという意志だと理解した。
時計塔と王宮の中間地点。
全力で駆ければ１５秒とかからないその場所。
敵がいる地点を怜悧な視線で見詰めつつ、女はその両脚に溜を作った。

「いいでしょう。
貴女が続けるというのなら、私は――」

――その時である。
駆け出そうとした瞬間。
白銀の地面を踏みしめ、蹴ろうとしたその刹那。
自らの足元が目に入り、女は言葉を失った。

視線を落とした先。
自らの足元に当たる位置から感じる想定外の魔力の奔流に、彼女の思考が完全に凍り付く。

彼女の足元には魔法円が描かれていた。
先ほどまで何の変哲も無かった石畳。
そこには彼女を中心とする円が通りの幅一杯に描かれ、既にその術式を完了させていたのだ。

「そんな、いつ……」

“あり得ない”。

彼女は戦慄し、背筋を震わせる。
少女と自分との距離は、未だお互いが視認出来ない程に離れている。そして行われたのは、あれだけの攻防。あの嵐の様な鋼の激突の中にあって、一体いつ、こんな物が描かれたのか。
そこまで思考した時に、彼女はその図形の起点となっているモノを見た。

――矢である。

先ほど放たれた矢の内の一部。
不可解に軌道を外し、彼女へと命中しなかった5本の矢は、その実彼女に向けて放たれた物では無かった。

目的はただ一つ。
彼女の周囲に結界を張る為の“杭”となり、彼女に気付かれない内に即席の魔法円を組み上げる事である。

軌道を外れた5本の矢は、それ自体が領域を構築する布石となり、女の周囲に強力な魔力を循環させていたのだ。

『強欲なる者（feohmannaz）。無力な英雄（peorth?tir）。
暗き洞穴（hagal）にて灰燼（otherl）に帰せ』

遠方から届く少女の声。
魔力の逆探知によって流れ込むその声に、女は少女の姿を幻視した。膨大な魔力を腕の周囲に収束させ、歌うように詠唱しながら、勝利を確信して微笑むその姿を――。

「待――っ」

『火龍の火炎弾（ファーヴニル）？』

魔術式に収束する炎の魔力。

火山噴火を思わせる熱量の爆発が、たった一つの人形（ヒトガタ）に向かって殺到する。

最終戦争（ラグナロク）を思わせる炎の宴。

火龍の咆哮が、女を足元から飲み込んだ。

18.　地球とは全く異なる技術体系が進歩した異世界出身の少年が扱う未知の

――守護魔。

様々な可能性を持つ異世界から召喚される彼らは、その常識外の知恵や能力故に“常理の外の存在”と称される。この世界の理では傷一つ付ける事が叶わない彼らは、言わば存在そのものが反則な魔人なのである。

朝日　真也は先刻、謁見の間にて確かにそう説明された。

そして、それはきっと正しいのだろう。

彼はその瞬間に、はっきりとそう確信した。

何故なら彼の目前で行われているその戦闘は、正に常識破りを競う戦いであったのだから――。

「オラよっと？」

軽快な掛け声とともに少年は引き金を引く。

小砲より放たれる“弾丸”は無数。

その全てが一撃で敵を絶命させる死の権化となりて、青い鎧に向けて疾駆する。

「クッ……？」

対する男は、ただひたすらに床を転がっていた。

それはもう何度めになるか分からない回避行動である。男は金属が擦れ合う耳障りな音を残しながら床を這い、少年が放つ弾丸を寸での所で躱しつつ体勢を整える隙を模索する。

「おっ、頑張るね～。

おうし、そんじゃ次いくぞ」

「――――っ？」

だが、雨の様に降り注ぐ弾丸がそんな事を許さない。男が片膝を着いた瞬間には頭上、脇腹、右膝へと攻撃が迫り、手を着いた瞬間には的確にその腕を？ぎにくる。

結果として男は、崩れた体勢を満足に整える事も、息をつく事すらも許されず、硬い床を無様に転げ回る以外に手を与えられなかった。

「なんだ、アレ……」

青年は、遂に耐え切れずに声を漏らした。

驚嘆に満ちたその瞳は、しかし決して少年の技量に対して向けられた物では無い。

否、自分より幾分年下の少年が、あの化け物じみた大男を防戦一方にしているという事実も、確かに彼にとっては驚くべき事象ではあったが、それはそこまで注視するべき問題では無かった。驚嘆すべきはその手段と、それを可能としている少年の武器だったのである。

小砲は絶え間なく火を吹き続ける。比喩では無い。少年が携えたその武器は、言葉通りの意味で“火を吹いて”いた。無反動砲と思われたその武器は、その実敵を焼き殺す火炎放射器だったのである。

――火炎放射器。

人類の歴史上、その武器が戦場でメインとなる事は多くなかった。

主な理由としては殺傷力が銃器に劣り、射程があまりにもお粗末であった事が挙げられる。火炎放射器が戦闘に使われたのは、専ら閉所の敵を炙り出す作戦か、もしくは酸欠による敵の窒息死を目的とした場合、或いは通常の弾薬が効果を発揮しにくい対戦車戦くらいな物だったのである。

特に問題となったのは、その安全性であった。

火炎放射器はその構造上、使用者は必ず燃料パックを装備していなくてはならない。当然である。炎とは物質が燃焼する際に発生する現象であり、つまりは燃える物が無くては火炎放射器は火炎放射器たり得ないからだ。実際の所、火炎放射器とは可燃物のガスや液体のジェット噴射を浴びせる道具であると説明する事が出来る。

そして、反応対象を選ばないのが化学反応という物の特性だ。

殺し、殺されるのが戦場での唯一のルールであるのならば、それは火炎放射器を持つ兵士にも例外無く適応されるだろう。結果として、実戦では敵の銃弾が装備者の燃焼パックを破る事が間々あったのだ。そうなれば炎は容赦無く装備者の身を焼き、無様に踊る火達磨へと変貌させる。構造上、直立して無防備な状態での使用しか出来ないという欠点もあり、その様な理由から火炎放射器は戦場にて華となる事は稀であったのだ。

そう。少なくともそれが地球の歴史であり、青年の知る常識である。

そして、だからこそ、少年の武器はあまりにも異様だった。

「オラオラ、休んでっと丸焼けだぞ〜？
ヒヒヒッ？　踊れ踊れ〜っ？」

少年の武器は火炎放射器である。
炎を射出している点から考えて、それは間違い無いと言えるだろう。しかし彼のそれは、火炎放射器という定義に従いながらも、致命的なまでに青年の知る常識とは乖離していたのだ。

それもその筈である。
少年が放つ火炎は、その実何かが燃えている訳では無いのだ。少年の筒は“中空”である。それは先程青年が観察した瞬間から、一切揺るがない事実としてそこにある。だが少年の持つその武器は、一切の可燃物を放射していないにも関わらず、無尽蔵とも言える炎の弾丸を放ち続けていた。その時間、既に半刻以上。小砲は、休む事無く火を吹き続けている。

その余りにも出鱈目な理。
あり得ない筈の物理現象を目にした青年は、目を科学者特有の洞察眼へと変え、事態を理解しようと錆び付いた脳に喝を入れた。

「……」

青年は思考し、記憶した“常識”を静かに引っ張り出す。
――炎。
炎とは、プラズマの一種である。
そしてプラズマというのは、確か物質の三態には属さない第四の形態の事ではなかったか。

固体を温めれば液体に変わる事は小学生でも知っている。液体を

更に温め続ければそれは蒸発・沸騰し、気体となって大気中へと霧散していくのも常識だろう。では、果たして気体をさらに熱し続けたらどうなるか。

分子間の結合がほぼ無くなり、バラバラの分子だけが飛び散っているのが気体の状態である。しかしこの分子が更に熱を受け続けると、やがて気体分子は分子ですらもいられなくなってしまう。電子が原子核の電場を振り切って飛び出し、イオンになった原子とごちゃ混ぜになった状態で不規則に飛び回る“雲”として振舞う様になるのだ。この第四の状態の事を、我々はプラズマと呼んでいる。

先程青年は、少年の筒は“中空”だと考えた。
しかしここが大気中である以上、中空とは真空を意味しない。例え空っぽな筒の中でさえも、そこには必ず、空気という“気体”が存在しなくてはならないのだ。

無限の炎を射出する中空の筒。
無限の弾丸を生み出しつつ、しかし弾丸を要し無い火炎銃。
その矛盾した事象を体現するその道具の正体は、つまり――。

（――プラズマ砲。
空気をプラズマ化し、炎として射出する、可燃物を要しない火炎放射器――？）

青年はそう分析した。
分析しておきながら、その余りにも常識外れな常識に唖然とする。

何故なら、プラズマとは本質的にコントロール出来ない物なのだ。
正電荷を持つ原子核と負電荷を持つ電子が混在したプラズマという物は、全体としては電気的に中性になる。よって雲状物質を動かす上で最も現実的な、電場を作って目的の場所に誘導するという手法が成り立たない。

しかもプラズマは、大気中においては直ぐにエネルギーを放出してプラズマでなくなってしまう為に、射出しても標的に到達するまでプラズマ状態を維持する事が非常に難しいのだ。
現代の地球において、未だに実用的なプラズマ兵器の開発に成功したという話を聞かないのはこれが理由である。

――だが、少年の武器は違った。
不定形の筈のプラズマは完全な球形を保って、視認すらも困難な速度で空中を駆けている。
正確な形を保ったままに宙を移動するその様は、つまりはあのプラズマが指向性を持っているという証拠に他ならない。

青年には、その原理は分からない。
それが地球に無い技術である以上、そも青年にそれを理解する術は無いだろう。ただ、彼には1つだけ断言出来る事実があった。
あの少年の世界の住人は、おそらくプラズマを自在にコントロールする術を会得している――。

「――――っ？」

男の頭を狙った炎の弾丸。

紅炎は囀る様な残響を残しながら、獲物の脳漿を沸かさんと光のテラスを疾駆する。男は首を思い切り捻り、寸での所で火球を躱した。男の青髪が僅かに焼かれ、焦げ臭い臭気が展望台に漂う。

「チッ……？」

弾丸を躱し切れなくなってきたという事実に焦りを感じたのか、男はその精悍な顔を微かに顰める。それも無理が無い事だろうか。何しろ、男が少年に髪を焼かれるのは、初撃以来の事であったのだ。

――初撃。

少年の武器より不意討ちの様に放たれた弾丸を、男は咄嗟に転がる様にして回避していた。それは先程、少年が自らに向かって放った謎の光球を思い出したからか、はたまた男の戦闘経験が敵の武装を飛び道具だと悟ったが故か。

青年にそれは判断出来なかったものの、結果として、少年の火炎弾は男の前髪を僅かに焦がす程度に留まったのだ。

しかしそれは、あまりにも長いダンスの始まりに過ぎなかった。

青年には、その時は男の行動が最善の物に見えたのだが、少年は男に崩した体勢を整える機会を与えなかったのだ。

初撃から現在に至るまで、既に半刻以上もの間、男は立ち上がる事すらも許されずに防戦を続けている――。

「ク……ッ？

……のガキ？」

このままではジリ貧だと悟ったのか。

突如として男は、まるで勝負に出るかの様に、床を踏み抜かんばかりの勢いでその両脚を天に振りかざした。

「らぁぁあああ？」

うつ伏せになりながらも、無理な体勢で地を蹴る男。
まるで地を滑る様に、青い鎧姿は低く移動する。
手前に飛来する三発を、彼はそのまま伏せて躱していた。

「――――っ？」

そこに前方から迫る次弾。頭部を直撃するであろうその軌道を、右に転がって回避する。黒い銃口が男を追いかける。地に伏した男を焼き殺そうと、火龍の口は獲物の肉へと追いすがる。男はその軌道、その着弾点を現在までの少年の狙いから予測し――、

「うぉぉおおおお？」

四肢の全てを使ってその巨体を、弾丸を飛び越すべく空中へと跳ね上げた。
青い鎧を掠める3撃の火炎弾。
それはしかし、的を正面から捉える事など決して叶わず、紙一重でニアミスしながら標的を離れていく。

「――――っ？」

――鎧の音が木霊した。

無理な体勢で飛んだ為か。

満足に受け身も取れず、身体を部屋の壁へと強く打ち付ける男。
鎧から伝わる衝撃が余りにも強かった為か。建物の壁が2、3枚の板に割れて、砂糖菓子のようにボロリと欠け落ちた。

「……」

だが、それは必要な代償だったに違いない。
黙したままに息を整える男の体躯をその目で見て、青年は確かにそう確信する。
結果として今、男の両脚は床板を踏み締めているからだ。
全身の軽い打撲と引き換えに、男は少年の炎を直に浴びる事が無いままに、半刻ぶりに少年と対峙する事が許されたのだ。男は少年を睨む様に見据えながら、勝負を仕切り直すかの様に背を伸ばし――、

「おうおう、よ～く頑張れたじゃねえか。
いや、感心だね～っ？
よっ、大将？　お国一？」

――嵌められた。
少年の声を聞きながら、男はそう確信して舌打ちした。

男が立ち上がったその場所は、部屋の角だったのだ。
左右に一切の逃げ場が無い、飛び道具を相手にしては正に棺桶とも呼べる領域である。
少年はわざと躱しやすい場所を作って弾丸を放ち、男が足場と引き換えに逃げ場を失う様に仕向けていたのだ。

少年は勝利を確信したのか、ニヤリとその口元を緩めている。
対する男は、憎々し気に少年を睨む事しか出来ない。
この瞬間、二人の魔人の視線は、全く異なる色合いを持って交錯していた。

（決まり……か？）

状況は既に詰んでいる。
素人である青年にも理解出来る程に、それはあまりにも明白であった。

三方を壁に囲まれ、唯一空いた正面からは火炎が放たれようとしている状況。
この戦いは、少年が引き金を引けばそれで終わるだろう。
少年がその指を、ほんの数センチ手前に動かすだけで、男は断末魔を上げながら絶命するに違いない。少年が殺すと明言している以上、それはもう、既に決定された未来である。

男は何も言わない。
岩の様に黙したままに、ただ目の前の少年を、自らの命を終わらせる死神の姿をその獣の様な眼光で射抜き――、

「……」

――その右手を、腰元に携えた短刀に掛けた。

「は？　オマエ、何してんの？」

少年は嘲る様に問い掛ける。
なんという苦し紛れか。
おそらく少年の目には、それが男が打開策を持たないが故の無意味な動作に映ったのだろう。

「……？」

だが、それを見ていた青年の解釈は少々違っていた。
あの男なら殺し得る。
それを悟り、白い青年は戦慄する。

彼が思い出すのは、正門前であの男と初めて対峙した時の事件である。あの時は、確かに彼が意識を緩めていたという理由もあっただろう。
だがソレを差し引いても、あの男はあの時、間違いなく人間が目で追えない速度で剣を投げつけてきたのである。

そう。男の投合は、一撃に限り銃弾を上回る殺傷力を発揮する。
少年と男の距離は、奇しくも先刻と同じ１０歩。男ならば、十分に少年を串刺しにし得る距離である。

「へ～……。あっ、そう。
ま、いいんじゃね？
そんじゃ、やるだけやってみろよ」

少年はあくまでも軽薄に言い捨てる。
しかし彼も、内心では男の殺気が高まっていくのを感じているのだろう。余裕に満ちていたその表情は、微かに険しくなっていた。
余りにも対照的な蒼赫（そうかく）の風貌を持つ両者の間には、言い知れない緊張感が漂い始めている。

――青年は分析する。
この勝負、おそらくは少年に分があるだろう。

速度だけならば、おそらく男の投合は少年を上回る。プラズマの弾丸が一般的な銃弾に比して遅いという事もあるが、武人たるあの男は、呼吸の合わせ方があまりにも上手いのだ。
それを鑑みるに、男の投合は少年よりも間違いなく“早く”なるだろう。

だが、注視するべき要素が1つだけある。
今回男は、その短刀を鞘に収めたままなのだ。
男の剣戟は、確かに驚嘆すべき速度である。しかしそれでも、剣を引き抜いてから狙いを定め、その上投げるという動作を考えた場合には、既に狙いを定めて引き金に指を掛けている少年には到底及ばないだろう。
……つまり男がこの勝負で少年に勝とうと思ったら、彼は初めから剣を抜いた状態で構えていなければならなかったのだ。
良くて相打ち。
10回中8回は少年が勝つであろう、余りにもハンデのある早撃ち勝負。

「ハッ？」

少年もそれは悟ったのか。
小馬鹿にする様に鼻をならし、男をねぶる様に見据えている。
何も言わず、ただ愉悦だけにその幼い瞳を踊らせたまま――、
少年は、静かにその引き金を引いた。

「――――は？」

驚愕の声は、誰の物だったか。

「らあああああああっ？」

雄叫びが陽光に反響する。
擦れた金属が鍔鳴りを残し、居合いの一撃が天へと迸る。
その軌道は射手たる少年ではなく、炎の魔弾に向かって放たれていた。蒼い空間に残る、あまりにも鮮やかな白銀の残像。その常識外れな斬撃は、まるで敵の常識をねじ伏せるかの様に、少年の炎を

真っ二つに“切り裂いた”。

「な……」

ポカン、と、口を開けて固まる青年。

「――んだそりゃっ？」

驚愕に目を見開き、叫ぶ少年。

全く温度の違う彼らの反応は、その実全く同じ感情から生まれた物である。

無理もあるまい。

放たれし弾丸はプラズマ。

全てを焼却し、燃焼する高速の雲。

数千度の熱量を誇り、形という物を持たない、本来御し得る可能性など皆無な存在。

それを“斬る”などという行為を、果たしてどこの誰か想像し得ようか。

「悪いな、ガキ。お前がさんざっぱら無駄撃ちするもんだからよ。目が慣れちまった」

抜き放った短刀を肩に叩きながら、男は平然とそんなデタラメな事を言い放った。その表情には一切の動揺が見られず、今の行動が紛れも無く狙って行われたものである事を示唆している。

「テメェ……」

驚愕に目を見張る少年。
悪夢の様なその光景を目の当たりにし、しかし彼は小さくその首を振ってから再び銃口を構えた。

「はっ、なぁにが慣れちまっただよ。
――んなマグレが、そう何度もあって堪るか？」

激昂する少年。
小砲は再び弾丸を放った。
狙いは男の眉間。
見えているからこそ標的が恐怖を覚える、本能を脅すヘッドショット――？

「シッ？」

だが、通じない。
男はそれを、さも当たり前の様に切り捨てていた。
切られた炎は原型を失って四散し、散り散りになって虚空へと溶けていく。
少年の銃を異様と形容するのであれば、男の対処方は最早異常であると言えた。

少年は驚愕している。
獣の耳は稜立つ様にピョコピョコと動き、その赤髪は威嚇する様に逆立てられている。
だが、未だにその手は火炎銃から離れない。

それを確認したのか、男は悠然と口を開いた。

「まだ続けるのか？
いいぜ。なら、お前の気が済むまで付き合ってやる？」

「ほざけよ、デカブツ。
おれっちの気が済む時は、テメェの身体が燃えた時だっ？」

その声が合図になり、少年は狂った様に銃を乱射し始めた。炎の弾丸は結合し、最早巨大な壁となって青い鎧を飲み込もうと迫る。
対する男はその全てに剣を合わせ、まるで削岩機の様に炎の弾幕を削っていく。炎の咆哮が雷鳴ならば、男の剣舞は荒れ狂う暴風である。二人の魔人が乱舞するその光景は、正に嵐そのものだった。

「はっ、らあ？」

掛け声と共に剣を振るう男。
どの様な感情からか。
青年には、その口元が僅かに綻んで見えた。

「ク……、のぉっ？　は？　はっ？
ははは、ヒャハハハハッ？」

嘲笑と共に引き金を引く少年。
どの様な心情からか。
彼は、心底楽し気に高笑いをしていた。

際限無く増殖していく弾幕と、際限無く高まっていく剣戟。雷鳴

は部屋を包みこみ、閃光は二つの人形（ヒトガタ）を覆っていく。
世界の常識をねじ伏せんと乱舞する二人の魔人の戦闘は、白衣の青年に溜息を吐かせた。

――成る程。
どうやら、あの連中は二人で戦う事に決めたらしい。
青年は半ば呆然としながら、静かにそう分析する。

「……」

呆れながら小さく頷く。
なるほど。化け物同士で殺し合ってくれる分には、こちらとしては一向に構わないだろう。折角の実験が御破算になるのは心苦しいが、それでも命に代える程に価値のある物でもあるまい。いや、いい事だ。そもそも青年は、こんな物騒な事など柄では無かったのだ。あの連中が勝手に潰し合ってくれる分には、青年には何の不都合も無い。いやいや、本当に何と都合のいい事か。

現状に対して前向きな解釈をした彼は、取り敢えず王宮にでも避難してみようかと思い至った。王宮魔術団とやらがどんな連中なのかはよく知らないが、それでもこの連中の場所を教えれば、何らかの手は講じてくれるに違いないからだ。
そうだ。少々イカれているあの二匹は取り敢えず放置して、自分は安全圏から鑑賞でもしていよう。
そう考えながら、彼は立ち上がろうとその両脚に力を込め――、

「？」

何かが、彼の頭上を掠めた。

青年の視界の外を通過したその飛行物体は、彼の頭上で“チリッ”という軽い音を立てて、背後の壁へと突進した。

何となく、振り返る。

何故か無性に気になって、彼は自分の背後をゆっくりと観察してみる。

壁には、何故か椅子の脚みたいな物が突き刺さっていた。そしてその隣の壁は、濃硫酸でも被ったのか、何故かドロドロに溶解していた。

「……」

もう一度、怪物達の方向へと振り返る。

意味が分からなかったので、なるべく分かりやすい疑問符を浮かべながら、何故か変な物を投げて来た魔人達へと視線を送る。

「おい……」

唸るような低い声。

男の右手には短剣が握られていた。

左手はナニカを投げた後みたいに下げられていて、脚の欠けたソファーがその足下に転がっている。

「……」

睨みつけるような視線。
少年の手には、例の火炎銃。
しかしその銃口は、何故か、青い男では無く白い青年を向いている。
彼らは何かを言いたげな形相で、何故か戦闘を一時中断したまま、ジッと青年の方を睨んでいた。

「……白いの。
てめえ、ナニ逃げようとしてやがんだ？」

青い男が言う。
獣の様な眼光が、ギロリとこちらを睨んでいる。

「ケケケッ、そのと～り。
テメエはそこで、おれっちの勇姿を黙って見てりゃいいんだよ？
？ああ、安心しな。このゴリラ焼いた後にゃ、直ぐにテメエも殺してやるから」

赤い少年が言う。
獣の様な耳が、ピョコピョコと楽し気に跳ねている。

「……」

青年は、観念した。
成る程。どうやら彼らは、勝手に喧嘩をおっ始めたくせに、青年を逃がすのは少々気に食わないらしい。
優先度は目の前の敵程では無い様だが、それが終わったら、取り

敢えずは青年も殺しておく算段でいるようだ。

「……穏やかじゃないな」

白い青年は肩を竦め、心底疲れた顔でそう零した。

―――――

そして少女は弓を下げた。

時計塔に程近い、人気の絶えた通りの真ん中。

正午を過ぎた陽の光が王宮に遮られ、涼やかな木陰となっているその場所で、少女は自らの魔術が敵を焼いた手応えを感じ取った。

「ふぅ……」

緊張の糸が切れた様に、小さく息を吐きだす。

全力で走りながら弓を引いていたからだろう。

酷使し続けた肺から漏れた空気は、それこそまるで火が着いたかの様に熱かった。

ローブの袖で軽く汗を拭いながら、少女はぐったりと地面に座り込む。年頃の女子としては少々行儀が悪いかもしれないが、今だけは仕方ないのだと、彼女は自分に言い聞かせてみるのだった。

自身の限界を超えた感知魔術の継続と、人の限界を超えた体力を持つ“アレ”との鬼ごっこ。

昨夜から持ち越された身体の怠さも加算されて、彼女の疲労は既にピークを通り越そうとしていたのである。

「……」

呼吸を整えながら、少女は遥か前方の空をその瞳に映す。

冬晴れの空には、相変わらず雲は一つも無い。今しがた行使した大魔術による黒煙だけが、ポッカリと群青の海に浮かんでいた。菫（スミレ）畑に紛れ込んだ黒薔薇の様な色彩の変化をその双眸に納め、少女は漸く、自らがあの敵に勝利した事を実感する。

「あたしの勝ち。

空っぽなあんたの頭でも、流石にあたしの方が強いって理解出来たでしょ」

もう聞いていないであろう敵に向けて、少女は独り言の様に呟いた。瞳に見られるほんの僅かな翳りの色は、目線の先にある黒煙が映っただけだろうか。

宝石の様な翠の瞳は、最後まで何も語りはしなかった。

「さて……」

少女は右手を空中へと這わせながら、意識を黒煙の方向へと集中させた。龍霊級火炎魔法の直撃を受けた、自らの敵の姿を確認する為である。

無論、敵とて大魔導である。“抗魔術結界”などこの国に入った瞬間から張っていただろうし、そんな常備用の結界でも、あの炎を３秒くらいは防げただろう。大火傷を負って戦闘不能なのは間違い無いだろうが、それでも一命は取り留めている可能性が高い。

どちらにせよ、少女が手の掛かる“アイツ”を助けてあげる為には、取り敢えずは純白の姫にあの大男を処分させるしか無いのだ。
或いはそこまでいかなくとも、最低限あの大男が“アイツ”を襲わない様に命令させなくてはならない。
……少女本人、何であんな役立たずでムカつく奴の為にそこまでしなくてはならないのか甚だ疑問ではあったものの、勝手に呼び出したのは事実だし、それに怪我をさせてしまった負い目もちょっぴり感じてはいるし、ちょっとくらいなら助けてあげてもいいかな、などという気分になっていた。

銘の詠唱と共に、視界は少女の身体を離れて疾走する。
魔力の波が４原色の景色を創り上げ、少女の双眸に火元の光景を伝播させる。
さて、火達磨になったであろう敵の容体は――、

「……ウソでしょ？」

瞬間、少女はその顔を強張らせていた。
自らが認識した事実。視覚として感じられるその光景が、まるで信じられないとでも言わんばかりに。

黒煙の中には卵があった。
直径は、軽く少女の身長の倍くらい。
金属製の卵形の物体が、まるで奇妙なオブジェの様に、大通りの真ん中に安置されている。

背筋に嫌な汗を感じつつ、少女は緩やかに思考を回した。
少女はこんな物を用意した記憶は無い。
あの場所に、あんな物があった記憶は無い。
つまり、アレを用意したのは――、

『私に手傷を負わせた事は賞賛します。
しかし、所詮はそこまで。
いくら心得の無い貴女でも、流石にもう実力差が分かったのではありませんか？』

針として用いた霊道が、凛とした声を捕捉した。
白銀の卵に皹が入り、怪鳥（グリフォン）の雛が孵る様にその正面が砕け散る。
極限の機能美とはある種の芸術だ。厚さが少女の身長程はあろうかというその殻は、内部に何層もの隙間が設けられており、彼女はついその微細な断熱構造に感嘆してしまった。
その防御。完成品たるその芸術を惜しみなく破壊し、純白の姫はその健在な姿を陽光の下に晒した。

生還を果たし、陽光を眩しがる様に腕を掲げる武装姫。
辛うじて見られる負傷は、赤熱した金属に触れたであろうその右手に軽い火傷がある程度。ドレスには焦げ跡一つ見当たらず、彼女を象徴する金糸の髪は、未だに目を奪う美しさで彼女の魅力を装飾している。戦姫は疲労も憔悴も一切見せぬまま、未だに現実離れした美しさでそこに居た。

『終わり、ですか？？
……分かりました。
それならば、遠慮無く決着を着けさせて貰いましょう』

「――――？」

敵の声が少女に届く。

あれ程の大魔術の直撃を浴び、なおもさしたる傷を負わぬ美貌の怪物が、少女にその処刑を宣告する。

勝利宣言から一転、窮地に立たされる少女。

その表情は、あまりにも予想外の現実に色を失っていた。

「……」

――いや、違う。

予想外だと考えたところで、少女は自らの思考に頭を振った。

本当は、分かっていたのだ。

万全を機した一撃。

必殺を期した魔術行使。

それを用いてもなお、あの敵ならば防ぎ得るかもしれない。否、防ぐ可能性があるだろう。

そんなことは、少女は半ば無意識に察していたのだ。

だからこそ、彼女は矢を1本残した。
先ほど少女が放った矢は26。
27本中26本。
必殺を期すと言いながら、その実敵が防ぎ切る可能性を捨て切れず、彼女は最後の攻撃手段をその手に残していた。

ならば、慌てる必要など無い。
手持ちの矢はたった1本。
だが、慌てる必要も焦る必要も無いのだ。
何故なら、少女はまだ切り札を残している。
少女を大魔導たらしめている必殺の大魔法を、少女はまだ使用していない。

万物全てを焼き払う究極の一。
例えあの敵であろうと、否、この世界の存在である以上防ぐ事など叶わない炎の奥義。
“精霊級魔術”。
放てば、勝負はそれで決するに違いない。
問題は、間に合うかどうか――。

純白の敵が駆けて来る。
数秒足らずで彼女の姿は少女の視界へと入り、更に数秒で剣の間合いへと漆黒の衣を捉えるだろう。魔術の発動に必要な時間との比較。
――結果は、ギリギリ。
それこそまるでコインを投げて占うかの様な、あまりにもギリギリなタイミング。

「その鎚（tir）、常に赤熱し（thorn）、数多の邪悪（hagalaz）を打ち払う（ken）」

だが、やるしか無い。
間に合うか、では無く間に合わせなくてはならない。敵に勝利する手段は、最早それしか残されてはいないのだから――。

「高き雄峰(geofu)は虚無(sowelu)の谷に。
世界蛇(geofu)には最期の神罰(sigel)を――」

敵が現れた。
曲がり角から飛び出す純白のドレス。
到底走るには向かないその出で立ちで、しかし戦姫は常識外の速度で間合いを詰めて来る。
目算、残り6秒。
詠唱完了まで、残り――、

――――

灼熱の業火にその身を包まれた瞬間、女は一度死を覚悟した。
世界を覆い尽くす、圧倒的な炎の奔流。
それは正に伝説の火龍を彷彿とさせる程の、大魔導たる少女に相応しい威力の大魔術だったと言えるだろう。
それを不意打ちに近い形で食らっては、いかな大魔導(ウェヌス)と言えども戦闘不能は免れまい。
彼女がそれを防ぎ切れた理由はただ1つ。足元から炎が噴き出した瞬間、一切の無駄が無い動作で熱防壁を組み上げる事が出来たからである。

それは単(ひとえ)に彼女自身、あの少女が放つ最後の猛攻が、あの程度で終わる筈が無いと無意識に感じ取っていたからであった。

「終わり、ですか？？
――分かりました。
それならば、遠慮無く決着を着けさせて貰いましょう」

認めるには多少癪な理由ではあったが、まあ敵の最後の攻撃を防ぎ切った事に変わりは無い。
姫は高らかに勝利を謳い、どこまでも優雅に、そして軽やかにその歩みを進めた。
その口元には、自らの絶対の勝利を確信したが故の笑みが見られる。
彼女が闊歩するその様は、正に王族の凱旋のようであった。

「――――っ？」

だがその波動を感じた瞬間、彼女の凱旋は突如として逃避行へと変貌した。

（精霊級魔術？）

それは先刻の流星群を遥かに上回る悪寒であった。
感じるのは、最早吐き気を覚える程の魔力の収束。
敵が放とうとしている正真正銘の切り札に、女の全身は総毛立った。

――精霊級魔術。

それは精霊の力を借りて行使するという魔術の定義の中にあって、精霊の力を全て持ち出して行使するとされている魔術の名称である。

有象無象の魔術が精霊の力を一部しか借り受けないのに対して、精霊１体分の力を丸ごと使用して放つ、最高ランクの大魔法。このランクに分類される魔術は、無数の銘が存在する魔術の中にあって、各属性に１つづつの計４種類しか無い。

それは正に、魔導の頂天に位置する４大魔術なのである。

身震いしながらも、女は更に思考した。

これまでに敵が放った魔術の属性を鑑みるに、自らに向けられたその種別はおそらく火だろう。少女が放とうとしているのはおそらく、ただでさえ４大元素の中で最も攻撃力が高いとされる火属性の、更にその頂点に位置する大魔術。それが果たしてどれ程の威力を誇るのか。そんな物は、最早考えるだけ愚かしい。

ならば、ここで立ち止まるなど愚の骨頂だ。ソレを防げる盾や結界など、この世界にはあろう筈も無いのだから。

純白の姫は、疾走しながら距離を測る。

彼我の距離、凡そ１０秒弱。

敵の詠唱完了までの時間、“精霊級”であるのならば最低３０秒以上――、

――違う。そんな筈が無い。

敵が今それを使おうとしている以上、それはつまり間に合うかもしれない時間の筈だ。

曲がり角から飛び出した瞬間、女の視界は真紅の少女の姿を捉えた。闇を纏うかのような漆黒のローブに、遠方からでも目立つトンガリ帽子。その全身は妖精の如く燐光に包まれ、規格外の魔力がその細腕に流れている事を示している。赤熱した鏃は白いドレスに。解放の瞬間を今か今かと待ち望んでいる。

白いドレスが黒いローブに疾走する。
赤熱した鏃が放たれるに先んずるべく、回避も防御も度外視して、女は真紅の少女へと間合いを詰める。

残り、6歩。
敵影までの最後の距離を駆け抜けながら、戦姫はその剣を振り上げた。必勝を期し、その銀弓ごと少女の腕を粉砕せんと、白銀の剣戟が陽光に閃き――、

「死せる朋友(wyn geofu wynn)、愛する者には祝福を与えん(inguz)」

少女の詠唱が完了する。
自らに向けて迫る剣戟。
瞬きの後に自らを斬り伏せるであろうその銀閃を前にして、なおも瞬きすらもせずに彼女は自らの標的を見つめ、ソレを灰燼に帰さんと魔力の奔流は荒れ狂い――、

“彼女”は勝利を確信して微笑んだ。

一一一一一

雷鳴は止まない。
炎の弾幕はその実無限なのだろう。
故に少年は、自らの炎が敵を焼き尽くすまで止まらない。止まる時は死ぬ時だと言わんばかりに、遠雷は尚も果てしなく鳴り響く。

暴風は止まない。
炎が無限なのだとしたら、対する剣舞もまた無限であった。男の剣戟は敵を斬り伏せるまで止まらない。否、それは当然だろう。男の剣舞が暴風である以上、それが雷鳴より前に止まる事などあり得ない。

「――のヤロ？　好い加減くたばりやがれ？」

少年の放つ火炎弾は、再度炎の壁となって青い男を飲み込もうとしていた。絶え間なく続く連続砲撃。炎とは、本質的に形が無い物だ。常識で考えるのならば、無形の炎を有形の剣が防ぎ切る道理など有りはしない。

「ガキ？　お前こそ好い加減諦めやがれ？
こっちは後がつかえてんだ？」

だが、常識とは更なる常識によって塗り替えられる定めにある物だ。男の剣戟は、近寄る炎をただ一つの例外も無く斬り捨てていく。

少年の炎が空気から生成される物である事が災いしたのか。火炎銃が空気を弾丸としている以上、炎は空気が無くては存在し得ない。男の剣戟に遅れた空気は隙間、つまりは真空を作り出し、風切り音を残しながら炎を両断していく。彼の剣は、文字通り空を切っていたのである。

2人の魔人の戦闘は、なおも激しさを増してゆく。

お互いを認め、お互いを障害として認識し、なおも敵の存在を自らの常識（ルール）で塗り潰さんと、戦闘はどこまでも楽し気に加速していく。

「……」

その戦い。

見る者の目を奪い、圧倒するであろう2つの世界の衝突を目にしつつ、どこまでも複雑そうに表情を歪ませる見物人がいた。

“白の守護魔”、朝日　真也である。

彼は初め、自分が感じているのは恐怖だと思っていた。何しろ目の前の魔人達が人間離れした戦いを繰り広げれば繰り広げる程に、生き残った方が自分の命を狙って来るという現実が、逃れられない死刑宣告として彼に突きつけられるのだ。胃の辺りに感じる黒い重さも、その恐怖という感情から生まれた物に違いないと彼は考えていた。

だが彼は、今ではそれが違う感情も含んだ物だったという事実に気が付き始めている。

際限無く加速する人外の戦いと、塗り替え続けられる世界の常識。

その渦中に居る2つの人形（ヒトガタ）は、どこまでも必死そうに、しかしどこか楽し気に、お互いの命を取り合っている。
その様子を眺めながら、彼は自分が思いもしない感傷に囚われている事に気が付いたのだ。

――自分は、何をやっているのか。

目の前にいる2人の魔人は、自分と同じ境遇にある人間であるという。それぞれが別々の可能性を持つ異世界で育ち、運命の悪戯によってこの場に巡り合わせただけの、“ただの”異界の人間。
ならば、状況はイーブンの筈だ。彼らと自分に差は無い筈だ。それにも関わらず、自分とこの2人の間に存在するこれだけの格差は何なのか。

「……」

本当は、分かっていた。
彼らが歩んで来たであろう人生と、自分が歩んで来た人生。
彼らの世界の環境と、自分の世界の環境。
それらが余りにもかけ離れていて、自分はたまたま、争いなんか殆ど経験せずに済む世界で育っただけの話だ。少なくとも青年の世界では、争いの無い平和な世界は“良い世界”だと信じられていたし、実際そう教育されてきた。ならば彼は、荒事に向かない世界の出身だったという事実を誇りこそすれ、負い目に感じる理由など無いだろう。

そう。無い筈だ。

もし彼が少年の様に、あの歳でも強力な武器を扱わされる世界の出身であったのならば、あの2人を横から狙い撃つ事も出来たかもしれない。或いはもしも男と同じ様に、圧倒的な剣の技量を身に付ける事が出来る世界の出身であったのならば、敵を正面から迎え撃つ事も出来たかもしれない。

全てはもしもの話。
あり得ない仮定。
無い物ねだりな情けない願望。
実際には、そんな事実は無い。
そんな都合のいい現実は無い。
青年には戦闘の経験も無ければ、青年の世界では、敵と戦う術をまともに教えられる事も無い。
戦う手段など、彼には初めから無い。
この場において彼らに対抗する力など、青年の世界の人間にはあろう筈も無い。

「……」

――違う。

一瞬、強い感情が彼の頭を掠めた。
沈んだ脳内に赤い色が明滅していく。
――そう、違う。
彼らは彼らの世界からやって来て、彼ら自身の常識を用いて戦っているだけだ。だが、彼らの間に優劣は無いだろう。剣を振るう男がその力を誇るのならば、対する少年の技術もまた、甲乙付けがたい程に優れた力なのである。

ならば、優劣などあるまい。
様々な可能性を持つという異世界。
しかしそれらは只あるだけで、それぞれに優劣などあろう筈も無い。
そしてそれは、青年の住む世界にも言える事である筈だ。例え直接彼らと戦う術が無くとも、正面から戦えば瞬殺される様な脆弱な生き物であったとしても、それが彼の世界が他の世界に劣っているという理由になどなりはしない。

――武器はある。
否、初めから武器はあったのだ。
勿論、こんな小さな羽根ペンなどでは無い。
もっと、ずっと。遥かに強力で、あまりにも身近にあったから武器だと思えなかった力。
武器にするにはあまりにも当たり前だった、彼の世界が誇る常識。
ならば、恐れる必要など無い。
怯える理由などありはしない。
何故なら青年にとって、積み重ねて来た生涯を通して、自分に誇れる物があるとしたら、ただその一点のみだったのだから――。

男が少年へと踏み込んだ。
剣戟は神速で閃き、少年の腹部へと駆け抜ける。
対する少年は上体を反らし、男の剣を躱しながら銃口を敵の顎へと向ける。

そう。奇しくも青年が意図していた、正にその“領域”の上で――。

青年はずっと見ていた。
彼はずっと待っていた。
2人の魔人が戦っている内に、偶然その“領域”へと足を踏み入れるその瞬間を。

二人の魔人が必殺を期したその瞬間、

「解放（jara）」

青年は、終わりのセリフを口にした。

う～ん……。ちょっと文章が携帯小説っぽくなっちゃった気がしますね～。

……はい。やっぱり戦闘パートって、ちょっぴり書くのが難しいです。

もっとかっこいい文章を書く才能があればいいんですけど。

い、いえ。無いものねだりはよくないですよね？

はい、改善できるように頑張りたいです。

えーと、もしかしたら、明日は更新が難しいかもしれません。

その、本当に私事でアレなんですけど……。

と、とにかく！！　暇を見てチョコチョコ書いていきますので、これからもよろしくおねがいします！！

１９．　質量保存の法則の成立を確認する為に行ったとある物理学者の少々強引

す、すみませ～んっ？
なんだか、大分間が空いちゃいました？
えーと、その、ただでさえ纏まらなくて苦労してたところに合宿とかが重なっちゃったりしまして……。
と、とにかく、なんとか書き終わったのでＵＰさせていただきました。
はい？　これからもよろしくお願いします？

19. 質量保存の法則の成立を確認する為に行ったとある物理学者の少々強引な実験

勝負を決める斬撃。
生死を別つ銃撃。
必滅の意思と共に放たれようとした両者の攻撃は、不意打ちの様に視界を覆った星屑によって停止した。

二人の魔人が目を見開く。
困惑と動揺を内包し、思考を奪われた両者の視線。
互いに戦闘の意思は緩めぬままに、彼らは自らの周囲に目をやった。

――部屋が、光っている。

まるで妖精の鱗粉を散りばめたかの様な、世界を覆うオレンジ色のエフェクト。それは部屋中に描かれた魔法円から放たれた物だった。その源、目算２３個。その全てが淡い燐光を吹き出し、二人の魔人を足元から包み込んでいる。

「……？」

瞬間、男は理解した。
これは何らかの魔術の行使。純白の姫が扱う魔術を幾度も見てきた彼は、その燐光が魔術の発現に特有の現象であると理解していた。

「……？」

瞬間、少年は把握した。
この世界に特有の力、魔術。しかしそれはこの世界の理でしか無く、他の世界の理に従う守護魔（じぶん）には効かない。ならば無視しても構わない筈だ。無視して男を焼き殺すのが最善の行動の筈だ。
――少なくともこんな、吐き気がする程の悪寒を感じる理由など無い筈だ。

彼らは了解し、それ故に当惑する。

そして二人はその姿を見た。
自分達に向けられる視線。
白装束の青年が手元にオレンジ色の羽根を構え、涼やかな微笑を浮かべているその姿を――。

「解放（jara）」

条文を読む様な透明感。
しかし淡々としながらも良く通るその声が波紋した瞬間、世界はその在り方を根本から変えていた。

「な……」

男が驚愕に目を見開く。
青い眼光が、視界を遮る影を認める。

「に……？」

少年が驚嘆に目を瞠る。

赤い瞳が、その光景を映し出す。

――部屋が、脈を打っている。

まるで酒の飲み過ぎや目の錯覚を疑う様な、余りにも異常な遠近の変動。それは空間その物が、常理を外れたその理に耐え切れぬと叫ぶ悲鳴であり、異常な現象を正常の如く体現しようとした代償であった。

そして、部屋（せかい）は2人の魔人に牙を剥く。

領域が彼らの存在を拒絶するかの様にその形状を変え、歪曲された常識が異界の法則を滅ぼさんと殺到する。

彼らを襲うは白銀の槍。

部屋（せかい）全てがその形を変え、床板（だいち）全てがその在り方を放棄し、怨敵を滅ぼすべき形に変化し射出されていく。

――不死鳥の羽根ペン

彼の手に入れたその魔装の能力は、物質からの魔力の解放である。そして魔力の放出に伴ってその体積を増大させるのが、アダマス鉱という金属の性質だ。物理的に考えれば、当然増加した体積は余裕のある空間を埋める様に働くのだろう。そして床や壁として使われている金属には、膨張した体積を逃がす方向など1つしか無い。

結果として最も単純な術式で魔力を解放されたアダマス鉱は、自然に上部へと伸長する槍へと変化するのである。それがこの場においては、“領域”に佇む2人魔人へと殺到する刺殺武器として作用

していた。

視界を覆う程の槍の軍勢。

その現象を見た事が無い存在には、それは常識外の悪夢としか形容出来まい。人間の殺傷という次元に合わせれば処刑具に相当するであろう、戦闘に使うには余りにもオーバーキルなその現象。だとすれば、それを向けられた存在が人間である以上、生き延びる術など常識の上ではありはしない。

――だがこの場は、そも常識外の存在が跋扈する魔窟。

ならばこそ、仮に有り得ぬ現象が体現されるというのであれば、更に有り得ぬ現象がそれを打ち破るのは道理である。

「らぁあああああっっ？」

高く成り響く金属音。

既に金属から武器を作製する魔術を知っていた男は、放たれた槍と比してもなお最速かつシンプルに対処した。空間に乱舞する、粉雪を思わせる槍の破片。男は自らに向かう槍へと尽く刃を合わせ、振り翳す短刀で鋼の森を粉砕していく。

――なんという化け物だろうか。

観察していた青年は戦慄する。

全方位、３６０。から同時に浴びせられる無数の槍撃。それらに全く臆する事無く、男はそれこそ全ての穂先を研磨する様に、自らを襲う槍を完膚無きまでに打ち砕いていた。

「……うぉっと？？あぶねっ？」

そして少年は回避に徹していた。

体躯の小ささを利用して槍を掴み、ほんの僅かな隙間に身体を差し込む事による転身。それは文字通り滑らかな槍の表面を転がる様に流動し、服を破られながらも直撃を避けていく。その余りにも身軽な身のこなしは、少年に体重がある事に疑いを持つ程であった。

男とはまるで異なる対処法。しかしながら少年も、槍の攻撃を躱しているという点を較べれば男と遜色は無い。必滅の領域に居ながら、やはり無傷。この少年の技量もまた、やはり男とは違った意味で怪物染みている。

守備に徹する男と、回避に徹する少年。

異なる世界が生んだ異なる魔人達は、全く異なる方法ながら、同じ脅威を防ぎ切ってみせた。

「白いの、お前……」

自らの周りに聳え立つ槍の森。

その現象の意味を、男はどう解釈したのか。

自らの周りに存在する槍の先端部分だけを一通り斬り伏せると、彼は障害物の隙間から忌々し気に青年を見据えた。

「ヒヒヒッ、そっかそっか。
テメェ、そんなに先に死にてぇかよ？」

少年は、怒りも顕に白い青年を睨んでいる。
無理も無い事だろう。青年は殺し合いの興を奪っただけで無く、今の一瞬で少年の命まで取りに来たのだ。全身を槍の柱に囲まれ、殆ど身動きが取れない体勢の少年。自身がそんな無様な醜態を晒しているという事実が、一層の起爆剤となって少年の怒りを燃え上がらせる。

興が乗ってきた戦闘を中断した、どうでもいい獲物。遥かに強い筈の自分に、無様を晒させた雑魚。そしてその雑魚が持つ、理解しようも無い攻撃手段。それは少年にとって、まるで折角の大物を釣り上げようとした瞬間に見た事も無い稚魚が糸を食い千切ったかの様な、青年の存在自体が許せなくなる類いの怒りであったのだ。

「ならお望み通りにしてやらぁ？」

烈火の如く咆哮する少年。槍の隙間から腕を伸ばし、檻の外の白衣に火炎銃を向けた。少年は思う。青年の表情に変化は無いが、内心は恐怖と絶望に染まっているに違いないと。
何しろ青年は、少年の隣の大男とは違う。直接戦闘の技量が無く、増してや一般的な武器すらも所持している様子が無いあの青年にとって、少年に火炎銃を向けられるのは死刑宣告に等しい筈だ。青年はそれこそ何の抵抗も出来ないままに、あっという間に消炭となってその生涯を終えることだろう。

怒りと愉悦。相反する二つの感情に歪んだ笑み。
少年は容赦無く引き金を引いた。
放たれるは主の感情を具現化した死の魔弾。

火炎弾が標的に確実な死を齎すべく疾駆する。
炎は十分な威力と速度を伴って空中を駆け、標的たる青年へと迫り――、

「解放（jara）」

――新たに生まれた白銀の柱に阻まれた。

「クッ……ノヤロォオオオ？」

少年が火炎を放つ。
怒りに任せて引き金を引き、標的を焼く為だけに自らの破壊衝動を指先に込め続ける。

「解放（jara）。解放（jara）。解放（jara）。解放……」

だが、その全ては次々に出現する白銀の柱によって妨害され、主の志を果たす事無く消滅していった。圧倒的な火力。しかしそれをもってしても柱の数本を溶解させるに留まり、青年の身体を焼くには至らない。

少年はその事実に顔を歪ませる。
だが、それは当然の理である。
少年の放つ火炎は、確かに十分に恐ろしい凶器であろう。それが

人体に触れようものなら、掠っただけでも、その全身を黒焦げにして余りあるに違いない。

だがそれでも、火球が高速で駆けている以上、物体に触れている時間はそう長くは無いのだ。人間相手ならば十分な火力となるかもしれないが、しかし相手が金属の塊となると、少々話は違ってくる。

一般的な金属の融点は高くはない。

鉛ならば３２８℃。亜鉛ならば４２０℃。スズであれば僅か２３２℃で融解してしまう。当然、融点が１５３６℃の鉄や、３４００℃を超えるタングステンなど、比較的熱に強い金属も多く存在するだろうが、しかしそれでも、一般的な物でも温度が１万℃を超えるプラズマが相手では、それが十分な密度を持っていた場合話にならない。

アダマス鉱の融点など知る由も無い青年ではあったものの、少年の火炎を直接受けては、本来それが溶ける以外の結末を迎えるなど有り得ないであろう事だけは承知していた。

だが、そこには１つ落とし穴がある。

物質の融点とは、ソレを超える温源に触れた瞬間、即座に融解が始まる温度を意味する訳では無いのだ。融点とは、“物質そのものの温度”がソレに至って、漸く融解が始まる温度の事を言うのである。

例え融点の低いインジウムだろうと、ひいては金属という、比熱が低いという特徴を持つカテゴリーの存在であろうとも、一瞬熱源に触れた程度であれば、それが融解に十分な温度に達する事は難しいだろう。一般的に物質の融解には時間がかかるのはこの為である。

人体相手ならば、少年の炎は十分な威力を発揮するのかもしれない。もしかしたら、触れた瞬間に人間が感電死する程の電圧が、あ

の空気には掛っているのかもしれない。
だがそれでも、それはあくまで人体が相手の場合の話だ。物質を溶かすという現象を考えた場合には、少年の火球はあまりにも接触時間が短すぎる。そして何より、少年の火炎銃がアダマス鉱相手にはその表面を溶かす程度の威力しか持たない事は、先刻既に実証済みである――。

物理学者たる青年は、その事実を既に見抜いていた。牢獄の様な無数の柱に囲まれながらも、依然として自らを攻撃し得る、恐るべき飛び道具を持つ少年。しかしこの金属の柱こそが、ソレに対する絶対の防護壁になり得るであろう事を彼は熟知していた。だからこそ、２人が争っている間に急いで床に描き加えたのだ。２人の魔人と自分の間を遮る位置に、２０を超える白銀の盾を。

鳴り響く雷鳴と連続するエフェクト。
柱の隙間から放たれる炎の弾丸は、幾重にも連なった棘によって霧散していく。自らの炎ではその盾を破れない事に、果たして少年は気が付いているのだろうか。否、気が付いたからこそ、その事実が更なるガソリンとなって少年の怒りを燃え上がらせるのである。少年の炎は標的を変え、尚も際限無く、自らの敵を焼き殺すべく増殖してゆく。

――風切り音が響いた。

無限に続くと思われた攻防が、その第三の音源によって漸く小休止の気配を見せる。

「……やってくれたじゃねぇか」

低い声が聞こえた。
その主は語るまでもあるまい。
青い鎧の大男、ネプトである。
彼は刃の音で2人戦闘を中断させつつ、細めた眼光で白い青年を射抜いていた。

「まさかお前にこんな隠し球があったとはな。
ったく、まんまと嵌められたもんだぜ。
……で、次はどうするんだ？
何のつもりか知らねぇけどな、こんなもんじゃ、俺には5分の足止めにもならねぇんだよ？」

言いながら、男は手近な槍を1本斬り捨てて見せた。柱は鋼が成る高い音を響かせながら、まるで断面から滑る様にして床へと落ちる。宣言通り、もしも男がその気になれば、彼は5分もしないうちに全ての柱を斬り伏せて青年の下に追いすがるだろう。切り倒された柱は、そのまま青年の運命を暗示している様であった。

だというのに――、

「……だろうな。
いや。というか、まさかあんたが脱出に5分も掛かるとは思わなかった。今の情報は、オレにとっては寧ろ僥倖だ」

青年は、あくまでも不敵に言い捨てていた。

5分後の死刑宣告を受けて尚、顔色一つ変える様子の無いポーカーフェイス。
白い学者は涼しげに、訝しげな男の視線を受け流す。
そして大袈裟に肩を竦めながら続きを告げた。

「ネ……、ネプ……。
……まあネプ助でいいか。
あんた、今その柱を平然と斬り捨てたよな。
それが出来た事について、あんたは何の疑問も持たなかったのか？」

「……は？」

顔を顰める青い男。
あんまりな呼び名を聞いた気がしたが聞き流し、彼は青年の言葉に頭を捻っていた。

確かに男は、たった今金属の柱を斬った。否、5分と待たずに青年を斬れる証明として、邪魔な障害を排除して見せたのだ。
アダマス鉱は強い金属である。王都の防壁に使われているという事実から考えても、それは試さなくても明らかな前提だろう。それを刀剣で切断する事は、確かに容易では無いかもしれない。
だが、決して不可能という訳でも無いだろう。否、そもそも剣として相応の強度を持つ金属なのだから、刃よりも柔らかい物が斬れない道理が……。

（……？？“柔らかい”？）

不吉な予感が、背筋に走った気がした。
それが何なのかを理解するより前に、青年は更に続きを述べる。

「“質量保存の法則”というのがあってな。
これは、まあ。例えばそこの床板だが、これはどんなに形を変えたり捏ねたりしてみても、その重さは変形前と変わらないという、ある意味当たり前の定理なんだが……。
さて、だがこの法則をこの場に当て嵌めると、些か不都合が生じる。例えば床板を変形させたその柱。仮にそいつが元の3倍の体積になっているとしよう。しかしそれでも変形前から総重量が不変だとすると、その密度は3分の1に減少しなくては計算が合わない。つまりな、膨張後のアダマス鉱はスカスカだって事だ」

「何が言いてぇんだ？」

勿体ぶった青年の口調に、男は業を煮やしたかの様に続きを促す。

「分からないか？」

青年はあくまでも不敵に微笑んでいた。
それは科学の天才に特有の、人が計算によって未来を垣間見た瞬間に見せる忍び笑いであった。

「よく見るんだ。
お前達の周りに生えている槍だが、それはどこから伸びている？」

「どこってそりゃ……」

言われて、男は槍の元を辿り始めた。
柱、床板、天井の張り、そして壁。

それらはあらゆる場所からその体積を奪い、そして槍として成立していた。そう、絶対の強度が要求される、“柱”や“床”からである。

「……おい、白いの。
まさかお前――」

悪寒が走った。
2人の魔人は柱の森に囲まれている。
彼らがそこを抜け出すまで、確かに5分も掛からないだろう。だが、逆を言えばそれは5分くらいは時間を要するという意味である。
そして白い青年が意図する事とは――。

「正気かテメェはぁぁぁあああ？」

「解放（jara）」

男の叫び声を遮るかの様に、青年はその言葉を口にした。構えた羽根ペンは遥か下に。この時計塔の基部に当たるであろう部分に向けられている。
それは男と少年が立っている領域の裏側、つまりは階下の天井に描かれた魔法円すらも発光させた。

――そして崩壊が始まった。
この時計塔に描かれた全ての魔法円。
男がこの階層に至るまでに見かけた全ての図形が階下で発光し、槍として突き抜ける事によりその密度を下げていく。柱という柱がその強度を失い、断末魔の悲鳴を上げながらひしゃげていく。

世界が崩壊する。
柱という柱が生涯最期の奇声を上げ、床板（だいち）は裂けて奈落へと崩落していく。空間は自重を支え切れずに崩れ落ち、瞬く間にその存在意義を無くしていく。

――爆破解体（インプロージョン）。
建物の要所となる部位をピンポイントで破壊する事により、自重を利用して建造物を破壊する技術。物理と化学の粋を結集した、彼の世界が誇る叡智の一つであり、最小限の力で狙った現象を引き起こす破壊の芸術。この世界の常識を用いたその再現こそが、彼の用意した切り札だったのだ。

異なる世界から呼ばれた2人の魔人。
彼らは白い青年の振りかざす理、万有引力の法則に従い、遥かな高層から奈落の底へと吸い込まれて行った。

――――

「――――？」

銀弓に向けて放たれる剣戟。
勝負を決するべく鋼の大剣を振り下ろそうとしたその刹那、純白の姫は強烈な悪寒に身震いした。全力で逸る足を止め、反射的に後方へと飛び退く。無論、全力疾走の勢いは咄嗟には殺し切れずに、彼女は尻餅を着く様な体勢で派手に地面を滑った。

「クッ……？」

――しまった。

ウェヌスは自らの判断を呪って歯噛みした。

目前に居る敵は今にも大魔術を放たんとその弓を引き絞っている。

それは言わば、既に鎌を振りかぶった死神だ。そんな相手を前にして尻餅を着くなどという行為が、果たして自殺行為で無くてなんと言おう。

何故か行ってしまった反射。

本能が訴えた危機回避。

自らが身に付けたその第六感が、彼女にはこの時ばかりは疎ましく思えた。

だが、もう取り返しがつかない。

真紅の少女は、意気揚々と愚かな獲物に狙いを定め……。

「……？」

視線を上げる。

いつまでも来ない衝撃を訝しんで顔を上げると、真紅の少女もまた、魔術を中断して後方へと飛び退いていた。そして粟を食った様な蒼白な表情をしながら、何故か上方を見上げている。それはもう、異次元生命体でも見たかの様な、心底驚嘆した様子でポカン口を開けながら――。

（好機……？）

ウェヌスは思案する。

敵の誤判断によって勝利を納める筈だった少女は何故か放心しており、彼女必殺の魔装たる弓は無造作に地面に向けられている。それは無防備とかどうとかいう以前に、最早正気とは思えない程の呆

然っぷりであった。もしも今女が剣戟を放ったとしたら、それだけで勝負は決するに違いない。

……不意打ちに近いのが不本意ではあるが、そもそも果たし合いの最中に放心するなど、相手に対する侮辱でしか無い。

女は立ち上がり、僅かに重心を落とした。

今の少女が相手ならば、全力での剣戟など必要無い。

魔装たる弓を破壊するだけで、十分な無力化が可能だろう。

純白の姫は静かに頷くと、下段にその大剣を構え――、

何故か、巨大な壁にその視界を遮られた。

「……は？」

固まった。

余りにも異常な事態故に、少女の放心を非難していた彼女自身が放心して硬直する。何故こんな所に壁が出来たのか、目の前の壁はどこから来たのか、など、訳の分からない困惑は彼女の脳内を無遠慮に蹂躙していった。純白の姫は半ば無意識に、先程見た少女の視線の先へと目をやった。

「……」

そこには、時計塔があった。

正門付近からもその慨形を伺えた、王都周囲の防壁よりも更に高い時間の支配者。どんな曰くがあるのか、歴史を感じるその偉容は

異国民たる彼女にも十分な造形美を感じさせ、空けられた窓から覗く内装からは知識の倉庫たる重厚さも感じられる。それはまさに、魔術大国たる銀の国の学研の象徴であると形容出来るだろう。

しかし今、ソレには何故か大きな皹が入っていた。

柱という柱、壁という壁に亀裂が入り、節々から粉塵を撒き散らしている。その悠久建築の上部の壁に空いた大穴を確認し、どうやら目の前の銀壁は、あの時計塔から降ってきた物らしい事を彼女は理解した。

「……」

頭痛のする頭で、少し考えてみる。

皹の入った柱。

砕けて落ちた巨大な壁。

隙間から巻き起こる粉塵と、パキパキという軽い音。

では、次に起こる現象は――、

そこまで思考した直後である。

時計塔が咆哮した。

金属が軋む音を天高く木霊させながら、その形が徐々に大きくなってゆく。否、その形が一気に歪み、陰影を変化させながら徐々に近付いて来る。銀の国が誇る高層建築は、その文字盤の部分から真っ二つに裂けて、ゆっくりと彼女達の方向へ傾いて来ていた。

「は……？」

意味が分からない。
ワケが分からない。
分からないので、女は取り敢えず、少女と自分の間に存在する壁を蹴り飛ばしてみることにした。
女は異国民である。この国の常識をあまり知らなかった彼女は、この国の国民であり、つまりはこの状況をより良く理解しているであろう少女に、これが何事なのかを説明してもらいたかったのだ。
壁は元から不安定だったのか。少し力を込めて蹴ると、思ったよりも簡単に倒れてくれた。壁の向こうに視線をやると、先程と何ら変わらずに放心している少女。壁が倒れた事に気付いたのか、ゆっくりとこちらに向き直る。翡翠の瞳と視線が交錯する。

「……」

“知らない。コレ、知らない。
逃げよう。ね、早く逃げよ？”

潤んだ瞳が、無言のままにそう語っている気がした。

「……」

純白の姫は小さく頷いた。
目線を塔に戻し、両手を力強く大剣に添える。
重心を深く下げつつ、倒壊して来る塔を正面から見据える。

「……ウェヌス。

あんた、ナニしてんの？」

ポカンした少女の声。
その色はあからさまに困惑している。
姫は、その口元に微笑を浮かべていた。

「無論、迎撃の準備です」

「はぁ？」

奇声を上げて呆れる少女。
しかしそんな事は気にも留めずに、女は続きの言葉を告げようと口を開いた。

「ええ、分かっていますとも。
こんなに都合良く塔が倒れて来るなんて、そんな事がまさか偶然の筈がありません。
きっとこれは、何者かが私に与えた試練なのです。
――つまり、アレを斬れと」

陶酔し切った声色で姫は語る。
天下の大バカを見る様な少女の視線は、完全に彼女の視界の外にあった。

「分かっていますとも。
丁度、一度くらいは塔を斬ってみたいと思っていたところです。
その最初の一つがあの様な大物とは想像もしませんでしたが、相手

にとって不足はありません。
ええ、腕が鳴るというものではありませんか」

少女は唖然として固まっている。
暫し呆然と目の前の姫（バカ）を見つめていたが、やがて我に帰ったかの様にその肩を震わせた。

「あんたどこまでバカなわけ？
あんな塔、“帝霊級魔術”でも壊せるかどうか分からないっていうのに、そんな剣一本で何が出来るっていうのよ？」

「愚かなのは貴女の方です。
伝説に謳われる達人は、嘗て剣一本で“山の根”すらも斬り落としたという話ではありませんか。
それに比べれば、あんな塔など物の比ではありません」

「ウソ？　それ絶対ウソだから？
――ってか１００歩譲ってもただのお伽噺だから？」

「ええ。確かに私も、幼い頃には嘘かもしれないと思った事もありました。城の近くの山を1週間ほど掘ってみた事もありましたが、結局根など見つかりませんでしたから。
ですが、成長した今では思うのです。
――きっと彼（か）の達人が斬ったからこそ、山には根が無いのだと」

「だ～か～ら～っ？
山には初めから根なんか一本たりとも無いし？　そんな物を斬ったヤツなんか初めっから1人もいないんだってばっ？
というかそもそも？　1万歩譲って塔（アレ）が斬れるとしてもっ？　その剣じゃ全然刃渡りが足りて無いのっっ？」

「そんな事は些細な問題です。
第一、既に逃げられません」

「……は？」

言われて、少女は気が付いた。
目前に迫る白銀の瓦礫。
竹の様に真っ二つに割れた塔から生まれたその壁は、今では空を覆う様に視界を隠して彼女の目前へと迫っている。
考えてみると、確かに、今から走って逃げ切れる範囲は須らくあの瓦礫に圧殺されるだろう。
どうやら姫（バカ）に気を取られている間に、少女まで逃げ遅れたらしい。
その事実に気が付いた瞬間、少女は全身の血の気がサーっと引いていくのを感じた。

「……ウェヌス。
ちょっとこっち来なさい速く？」

――走った。
少女は全力で姫の元へと走り、その手を無理矢理に引っ張って瓦礫の雨から逃れようとローブの裾を翻す。

「な……？
あ、アルテミア？
何をするんですか放しなさい？
あの位置じゃないと折角のイメージが……」

「それはイメージじゃなくてただの妄想？
いいからあんたも、全力であたしが逃げるのに協力しなさいっていうのよ？」

「に、逃げる？
待ちなさい？　貴女はともかくとして、何故私まで逃げなくてはならないのですか？　体力も士気も万全だというのに――」

「頭の中が万全じゃ無いからに決まってるでしょ？
大体あんたこそ、今からじゃもう間に合わないじゃない？」

「く……。
む、無念です。
ですが、これは決して逃亡ではありません。
次こそは……、次こそは必ずあの塔を……？」

「次なんかあって堪るかバカぁぁあああ？」

駆け出した瞬間に襲い来る瓦礫の雨。
少女は咄嗟に自らの周囲に飛行魔術の結界を展開し、降り注ぐ崩落の速度を全力で軽減させてゆく。
それを補助するは純白の姫。
迫る瓦礫が速度を落とした瞬間、直接その手で触れることによりその形状を変化、成形させ、即席の屋根を創り上げて道を切り開く。

土砂崩れを思わせる空間の消滅。
その渦中に晒された2人の大魔導は、自らの魔術と技の全てを嵐の様に行使し続け、命からがら安全圏へと避難する事に成功した。

―――――

「はぁ……、はぁ……」

「ふぅ……、ふぅ……」

天変地異の様な災害の中を、2人の人影は奇跡的に生還した。彼女達は崩落した瓦礫の山を見つめながら、地べたにへたり込んで呼吸を整えている。

「なんで、いきなり……、はぁ、塔なんかが、倒れて来るのよ?」

「老朽化……、していた…のでは……ありませんか? 流石は、魔導師の、国ですね。古い物に固執するのは……、貴女達の悪い癖です」

「な……?

?確か…に…、あの塔は……古いけど?

それでも…立派な…王都のシンボルの一つだったのよ? あ……あんたこそ、ゼェ……あの塔になんかしてくれたんじゃ…ないでしょうね?」

「ぬ、濡れ衣です……。

大体、貴女は……、ハァ…いつまで私の手を握っているつもりなんですか?」

「は……?」

言われて気が付いた。

少女の手は、女の手を引いた瞬間からずっと彼女と繋ぎっぱなしだったという事実に。
しかも脱出の際に揉み合ったのが原因なのか、手の握り方は微妙にズレて、今では指と指が絡み合う様な形で握られている。
……それはもう、まるで恋人同士がデートする時の様な握り方で。

「きゃぁぁあああ？
さ、触るな脳筋女あああっっっ？」

「なっ？　ま、待ちなさい？
先に手を握って来たのは貴女ではありませんか？
大体、の、脳の筋肉なんて、いくら私でもそう簡単に鍛えられるわけが……」

「本気で脳に筋肉があるって思ってるバカが、脳筋じゃなくてなんだって言うのよ？」

瓦礫の山を背にしながら、息つく間も無く口論を繰り広げる2人。
過剰な運動によって異常分泌されたアドレナリンが脳を興奮状態にさせ、顔が真っ赤になる程のヒステリーが彼女達の精神に去来する。
……先程までの戦闘と同様、これはこれで熾烈な戦争と言えたかもしれない。

「脳筋脳筋と何なのですか貴女は？
大体筋肉なら、例え脳の中にでも無いよりあった方が良いに決まっています？
まったく。そんな事だから、貴女の体はそんなに貧相なのです？」

「だ、誰のどこが貧相だって言うのよ？
大体、あんただって自慢出来る程大きくないじゃないっ？」

「だ、誰がそんな下劣で低俗な話をしたのですか？
私は、あくまで戦士としての体格の話をしたのであってですね…
…。
大体、いくら私でも、流石に貴女よりは――」
「はぁ？　ナニしれっとウソ吐いてるのよ？
あんたのはどうせ殆ど大胸筋でしょ？」
「な……っ？
ど、どこまで失礼なのですか？　貴女はっ？
いいでしょう、ここまで侮辱されては、流石の私も――」
その言葉を言い終わる前に、純白の姫はその口を閉ざした。長年に渡って鍛え上げた戦士としての直感が、自らに向けられる第三の視線を感じ取ったからである。
「――何者ですか？」
振り向いた。
声に含まれるのは俄かな緊張。
気配を辿り、彼女は空を見据える様にその目線を上へと向けた。
「――――？」
瞬間、その場の空気は凍りついた。
彼女の目線の先にある人影。
真っ二つに裂け、内部構造が剥き出しになった元時計塔の最上階

に佇む白い姿。
ソレを見た瞬間、この惨状が人為的に引き起こされた物である可能性に思い至ったからである。

「……。
ウソ……」

呆然とした言葉は少女の物である。
その声は酷く空っぽで、それは今の彼女の頭の中をそっくりそのまま表している様であった。
彼女の表情は唖然として、バカみたいに開けた口を閉める方法すらも忘れている。

――無理も無い事だろう。
元時計塔の最上階に見える、少女にとって見覚えのある姿。しかし彼女が認識している現状は、何一つとして許容出来る物では無かったのである。

彼女の放つ筈だった最後の一手は瓦礫の山に阻まれた上、危うく潰されて真っ平らな平面人間になるところだった。恨めしげに見上げた塔の先には何故か見覚えのある白い人影があって、アイツの手には、信じ難い事に“あの”羽根ペンが握られている。オマケにあやって平然とこちらを見下ろしているという事は、この惨状はアイツの仕業だとでもいうのだろうか。更に極めつけは、アイツを追っていた筈の“青の守護魔”の姿が一切見えないという事である。

という事は、信じ難い事だけど、アイツはつまり――。

悠久の歴史が砕かれた瓦礫の山。
その隣から天の祭壇を見上げつつ、2人の大魔導は風に靡く白衣に目を奪われていた。

――――

「――以上の実験結果より、この時空に於いても質量保存の法則は成立すると考えられる。
証明終了（Q.E.D）」

広さが半分になった展望台。
見晴らしが良くなったテラスから眼下に生まれた瓦礫の山を見下ろして、朝日　真也は実験の終わりを宣言した。相変わらずのポーカーフェイスながら、その口元には僅かな微笑が浮かんでいる。

――爆破解体（インプロージョン）。
彼の世界が誇る破壊の芸術。
そうは言っても、今回彼の行った行為は相当に乱暴な物であった。

通常、現代の爆破解体とは綿密な計算と下準備を経て、要所要所を完璧な順番で破壊してゆく事によって成立する。そこには全ての柱を内側に向かって爆破し、周囲に被害が出ない様にする気配りも含まれるのが常識である。

だが今回、彼にはそんな余裕など与えられなかった。
彼の手元には案内図紛いの見取り図しか無かったし、アダマス鉱とやらがどの程度の膨張率でどの程度強度を下げるかといった、具

体的な数値も知らなかったからだ。それどころか標的を確実に罠に嵌める為には、彼自身が倒壊させる建物の内部に陣取っていなくてはならないという足枷もあった。

故に今回の彼の解体方は、不本意ながらも非常に単純な物にせざるをえなかった。自らが陣取る位置と反対の、建物の半分だけに魔法円を描き込み準備をする。後は領域を別つ位置に柱の森を乱立させ、やって来た敵を足止めしつつ、その強度が下がった位置から床が割れる様に計算すればいい。つまりそれは、人類初期の爆破解体の様な、倒れるに任せるという乱暴な破壊方法に他ならなかった。通行人が“殆ど”いない位置に上手く倒れたのは、割と奇跡の部類に入ると言えただろう。

予想以上に上手くいった破壊の経過と、死の恐怖からの解放。そして柱の破壊に爆弾を要しなかったが故の、可能となった間近での崩壊の観測。

そのどれもが想像以上に刺激的で、そして感情を揺さぶるに値する物だった。

――故に、彼はその口元を緩めたのかもしれない。

「解放（jara）」

階段は瓦礫と化してしまったので、彼は下界に降りるべく再び魔装を使用した。

少女が使ったのを真似ているだけなので、棘や柱しか生やす事の出来ない彼ではあるが、彼にしてみればそれだけでも活用法は無限にある様に思われた。

床の裂け目に図形を3つ。角度をつけて描く事で、柱を下界への架け橋に変える。青年は世界を見下ろしながら、悠然とその橋を降りて行った。

その半ば。視界の高度が半分程に下がったところで、青年は橋の終点付近に見覚えのある人影を認めて眉を動かした。まさかこんな場所に居るとは思っていなかった為に見落としていたものの、よく見ると確かに、黒いローブと白いドレスが瓦礫の隣に並んでいる。

2人の様子は明らかに険悪であり、次の瞬間には戦闘を開始してもおかしく無い様な雰囲気であった。否、それはある意味では青年の予想通りではあるのだが……。流石に少女の手に握られている武器が弓だという事実を認識した時には、彼は溜息を吐かずにはいられなかった。

……なんの事はない。

白い女の得物が何かは知らないが、まさか弓よりも近距離戦に向かない武器という事は無いだろう。2人の距離が少女にとって最悪の間合いだという事は、流石の青年にでも見て取れた。

「あー……。まあ、なんだ。

取り敢えずだな、落ち着いて聞いて欲しい」

青年は歩みを進めながら、努めて淡々とした口調で声を発する。ポカン口を開けている少女と、目を丸くしている女を軽く交互に見据えつつ、白いドレスに目を留めて彼は言葉を繋げた。

「見ての通りだ、お姫様。

あんたの呼び出した魔人とやらは、たった今オレが仕留めた。まあ、あんたが続けるって言うなら仕方ないが……。これ以上の戦闘は、お互いに無意味だとは思わないか？」

青年の声が聞こえたのだろう。純白の姫はハッと息を飲むと、漸

く我に帰った様子でその宝物の様な目を見開いた。青年の言葉をどう理解したのか。その端正な顔立ちは、青年には僅かに歪んで見えた。

「……面白い事を言うのですね。
そんな結末はあり得ないでしょう」

「あり得ない？　何故そんな事が言い切れる？」

青年は言葉を交わしながら橋を下る。
白い女と青年との距離は、既にお互いの表情がはっきりと視認出来る程に近付いていた。
女を真っ直ぐ見据えつつ、青年は更に畳み掛ける。

「そう不思議がる事でも無いだろう。
あんたが良く知っている通り、守護魔（オレ）は常理の外の存在だ。あんたが知らない武器の1つや2つ、持っていても何もおかしくは無いさ」

言いながら、青年はこれ見よがしに手元の羽根を見せ付けた。漂う魔力が燐光を放ち、青年の白衣を青空に映えさせている。オレンジ色の繊維塊は、まるで自己主張するかの様に風に靡いていた。

「コレは次元歪曲装置（ベンディング・ディメンション）と言ってな。オレの世界では伝統的な兵器の一つなんだが……。
まあ詳しい説明は省略するが、空間そのものを押し潰す道具だとでも思ってくれ」

「下手な嘘ですね」

迷いの見られない視線で姫は言う。
しかし青年は、その澄んだ声に、ほんの僅かな虚勢の色が見られる事を敏感に感じ取っていた。
否。虚勢が入っていない筈が無いと、彼の推測は明確に語っていたのである。

女の言う通り、真也の言葉は虚言である。
この羽ペンの能力は物質に蓄えられた魔力の開放に過ぎないし、そもそも彼の世界に存在する道具では無い。空間を押し潰すなんていうＳＦ理論が大嘘ならば、使用前に魔法円を描いて下準備をする必要があるなんていう前提など、彼は仄めかしてすらもいない。

だが青年は、或いはそれでも誤魔化せると考えていた。何しろ彼は、少女が羽根（それ）ペンを国家機密だと言っていた事を覚えている。敵国の姫が、その原理や正確な形状まで知っている可能性は皆無だろうと考えていたのだ。

「この世界じゃ勝手が違ったからな。
先ほどは破壊力が大きくなってしまって、つい塔の半分を消し飛ばす羽目になったが……。
まあそれでも、もう大分慣れたからな。次はあんたの周囲だけを押し潰せるが、どうする？」

「……ハッタリです」

青年は橋の終点に着く。
終着点より白銀の大地へと降り立ち、青年は姫を正面から見据えて向かい合った。未だに訝しむ様な表情をしている彼女に向けて、不敵な笑みを浮かべながら彼は続ける。

「オレがわざわざ降りて来た意味が分からないか？」

「……」

女は今度こそ閉口した。

その怜悧な瞳には、疑念と同時に困惑が潜んでいる。

青年と彼女の距離は約５歩。

彼女ならば一息で剣を創り上げ、次の瞬間には斬り伏せ得る距離である。ならば当然、彼女は勝利を確信して微笑むべき立場にあるだろう。

だが女は、それでも尚、疑念を完全に払拭する事が出来なかった。

何しろ青年は、自らその距離へと歩み寄ったのである。

戦闘に慣れた女の常識で考えるのであれば、ソレが彼にとって不利な距離である筈が無い。

――女の理性が、僅かな違和感を警告する。

彼女が青年を斬り伏せるまで二呼吸。

もしもあの羽根が彼の説明通りの兵器であり、それが一呼吸で発動し得る物だとしたら――。

「……」

嫌な想像が頭を過る。

自分達の、直ぐ隣に見える瓦礫の山。

それが彼女には、底知れぬ不気味さを醸す墓標の様に感じられた。

目の前の青年は、戦士では無い。
それだけは断定していいだろう。
ならばこの間合いがどんなに危険な距離なのか、それを彼が理解していない可能性もあるだろうし、そんな人間があの武人（ネブト）を倒す可能性など皆無だろう。
だが果たして、その常識を常理の外の存在である守護魔に当て嵌めてもいいものなのだろうか――。

確信する事が出来ない。
安直な判断を理性が拒絶する。
彼女から立ち込める空気は、それこそ秒単位で張り詰めていった。

「……」

――緊迫した両者の睨み合いは、カチンッ、カチンッ、という、謎の金属音によって終わりを告げた。

女の顔に疑問符が浮かぶ。青年もその予想外の雑音に、不快そう眉を潜めている。放心していた少女でさえも、その音を合図に我に帰ったらしかった。
瓦礫の山に響き渡る、規則的な鐘の音。
それを訝るかの様に、三人の視線は、ほぼ同時に音の方へと向けられた。

「――のポンコツ？
これくらいで壊れてんじゃねーよっ？」

息を飲む声。
その存在を確認した瞬間、三者三様な驚きが場に溢れた。女は警戒心を顕にし、少女はその姿をまじまじと観察し、青年は、まるで幽霊でも見たかの様な顔で硬直している。

音源には少年が居た。
まるで犬の様な耳を付けた、迷彩服を纏った赤髪の少年。彼は銃口のひしゃげた火炎銃をカチカチと鳴らしながら、癇癪を起こす様にしてソレを瓦礫へと叩き付けていた。

「……驚いたな。
一体どんな手品を使ったんだ？」

青年は咳払いをしてから淡々と尋ねた。
彼の目からは困惑と、僅かな恐怖。そして何故か、好奇心の様な感情も見て取れる。

だが、それも当然だろうか。
彼はこの中で唯一、少年が塔の最上階に居たのを確認している。通常、建物の崩落に巻き込まれるという事は、実質その瞬間に居合わせた階から突き落とされるのに等しいのだ。あの高さの塔の最上階から落下すれば、生身の人間が生き延びる可能性など皆無だろう。どの様な手で生き延びたのか。それは何の虚飾も無く、青年にとっては確かに興味に値する事だったのである。

「――あぁ！？」

しかしそんな青年の思考など知る筈も無い少年は、今の言葉を挑発と取ったらしかった。まるで睨み付ける様にして視線を上げる。瓦礫の山に胡座をかいて座り込み、憤怒に歪む灼眼で青年を射抜く。

「手品ぁ？
テメェと一緒にするんじゃねーよ？
こんなビックリ芸でおれっちの獲物横取りしやがってよぉ？　死ぬ覚悟は出来てんだろぉなあ？　あぁ？」

火の出るような少年の罵声。
青年はそれを、溜息一つで受け流した。
青年にしてみれば少年の感情など理解出来なかったし、そもそも理解するつもりも無かったからである。
元から他人になど興味の無い青年である。
獲物の横取りなどという理由で非難を浴びせたところで、感情の籠もった返答を期待するのは酷という物だろう。

受け取り手に届かない非難。
だが少年の罵声に対して、それを向けられた青年よりも尚顕著な反応を見せる人物が居た。

「待って下さい。
今、貴方は“獲物”と言いましたか？
それは一体、誰の事を指しているのでしょうか」

純白の姫、ウェヌスである。
彼女は切れ長の瞳を僅かに細めながら、空気が冷える様な視線を少年へと向けていた。

「――ん？

うお？　誰かと思えば、さっき壁に穴空けてくれた美人のネェちゃんじゃねぇか。
いや～、お陰様で侵入楽だったぜ～？
ひょ～っ？　いい女だとは思ってたけど、近くで見るとハンパね～？　こう、グッとくるっつーか、ソソルっつーか」

「質問に答えなさい？
貴方の言う獲物とは、一体誰の事なのですか？」

下品な賛辞と舐める様な視線。
そんな少年の態度に不快感を覚えたのか、ウェヌスは語調をやや強めて返答を促した。

少年は口笛を吹きながら肩を竦めている。
そして女の身体をねぶる様に観察したかと思うと、ニヤニヤとした笑みを浮かべながら口を開いた。

「あ～、多分あんたの思ってる通りじゃね？
ほら、さっきあんたとベタベタしてた、あの青いの。アレなぁ、その白いののせいで、今頃この瓦礫の下で煎餅だよ。ヒヒヒッ、ざま～ねぇの。
ったく、本当はおれっちが直接殺してやるつもりだったんだぜ？
いや～、残念無念。ま、でもさ、とりあえず結果オーライってコトで」

「……」

瓦礫の下に埋まったという、青い従者。
少年はソレを、まるで笑い話の様に、心底楽し気にケラケラと語る。女は少年のその態度に、並々ならぬ不快感を感じている自分に

気が付いた。

そして次に少年が発した一言により、その感情はあらゆる色が塗り潰される事になる。

「まっ。どっちにしてもさ、どうせアイツはもう生きちゃいね～だろ。

――ってわけでさ、ネェちゃん。

折角だし、ほら。おれっちに乗り換えない？」

「は……？」

女は目を点にした。

暫しの間、何を言われたのか分からないという表情で硬直する。

しかしそんな彼女を気にも留めず、少年は更に続けた。

「いや～、おれっちもさ。今の“ご主人様”にゃ、チョイとこりごりなわけよ。いや、良い女なんだよ？　良い女なんだけどな～、ど～も性格に難ありっつ～か、まあ、アレな感じなわけよ。ほら、あんた美人じゃね？　おれっちとしては、どうせ呼ばれるんなら、あんたみたいな女だったら文句無かったのにな～、なんて思うわけよ」

「ふ、ふざけないで下さい？

何故武の国の王族であるこの私が、名も知らぬ敵国民の貴方を登用しなくてはならないのですか？」

視線の温度が更に下がる。

女はその銀細工の様な声色を微かに荒げ、叱責する様にそう言い捨てた。

「う～ん。トーヨーってのはちょいと違うんだけどな～。ヒヒヒッ？　ま、見た目通りの真面目ちゃんってコトかね～。……んあ、名前だっけ？　そういやネエちゃん、名前なんての？」

「あ、貴方の様な下賤かつ下劣な方に、名乗る名など有りません？　だ、大体。名を尋ねる時は、自分から名乗るべきだと教わらなかったのですか？」

「ん～。ゲセンとかゲレツとか、おれっちイマイチ馴染みが無いわけよ。まっ、細かいこたぁ気にすんな。あんましお固いと、折角の胸まで固くなるぜ？　元から大してね～んだからさ。資源は大切にしろよ～？」

ケラケラと笑いながら、少年はあくまでも軽い口調で語る。しかしその視線は、変わらず女の全身をジロジロと眺め回していた。その纏わり付く様な視線に、純白の姫は全身を穢されているかの様な不快感を覚えて身震いする。

「そ～いうワケで～。おれっち、ネェちゃんが偉ぶってもあんまし気にしないから安心しなって。

ヒヒヒッ？　どうにもおれっち、昔っから良い女には目が無いわけよ。ど～せあんなデカブツじゃ、布団の中でもあんたを満足させられなかっただろ？　ほら、おれっちならそこら辺、チョイとは分かってるつもりだし～？」

「……」

女は、暫し黙って少年の言葉を聞いていた。

もしかしたら冗談かもしれない。

いや、冗談でも不愉快な事には違い無いが、それでも謝罪するのならば、まだ赦してもいいかもしれない。それだけを期待し、女はただ肩を震わせていたのだ。

だが、それにも限界があった。

「貴方は……」

「……ん？」

元から、大して気が長くは無い彼女である。

増してや世俗の穢れなど知らず、直向きに鍛錬を積んで来た彼女にとっては、目の前の少年の言動は何一つ許容出来る物では無かったのだ。

――今はただ、自らの誇りを穢すあの舌を、一刻も早く斬り落としたい。

純白の姫は、生涯でも数える程しか感じた事の無い、強い怒りに沸点を超えた。

「――貴方は、どこまで私達を侮辱すれば気が済むのですかっ？」

怒号と共に彼女の身体は流動した。

流れる様な動作で白銀の大地へと手を這わせ、光のエフェクトが大気中へと発散される。

瞬きの内に彼女の右手には小刀が握られていた。

鍔も無く、柄も短い鋼。投合用に特化された、ダークと呼ばれる剣である。

「はぁあああああ？」

上体を戻す動作と投合は同時。
小刀は空間に銀糸の様な残照を残し、少年の喉元目掛けて一直線に飛翔した。

「……っと？　あぶねっ？」

だが標的は、先刻あの男と殺し合いを演じた程の技量を持つ少年である。女との距離は、悠に１５メートル以上。しかも女から見て上方に居る彼に投合武器など当たる筈も無く、少年は首を曲げただけで自らに迫る刃を躱していた。

「オイオイ、ネェちゃん。
キレイな顔して結構――ってうおっ？」

「やぁあああ？」

だが、女の怒りは収まらない。
武装姫は少年が躱している間に更に3本の剣を作製し、矢継ぎ早にそれを放り投げた。
少年がそれに気を取られている間に更に5本の投げ槍を作製し、標的が伏せた瞬間には8つのチャクラムがその頭部に投合される。
息つく暇も無い連続攻撃。
それは奇しくも、少年が彼女の従者に用いた戦法の焼き直しであった。

「――って、好い加減にしやがれこのジャジャ馬？」

叫び声を上げながら少年は跳躍した。
それはどの様な理だったのか。

ただの一蹴りによって空中へと跳ね上げられた彼の身体は高らかに宙を舞い、十数メートルもある瓦礫の山の頂上へと降り立った。

「……ったく、怖ェ怖ェ。
いい女には取り敢えず粉掛けんのがおれっちの信条なんだけどよ～。こいつはちょいと望み薄かね？
あ～……と。一応聞いとくけどさ、遊びでもいいから付き合ってみない？」

「太陽が東から上るくらいあり得ません？」

少年はあくまでも軽薄に話す。
女は余程頭にきているのか、肩を震わせながら少年の言葉を両断した。

「……いや、太陽は東から上るんだけど」

強い頭痛を堪える様な少女の声。
冷静にツッコミを入れながら、今のセリフは怒りのあまり言い間違えただけなのだと、少女は取り敢えず信じてみる事にした。

少年は瓦礫の頂上から眼下の3人を見下ろしつつ、自らの足元をチラリと伺った。山の中腹に先刻投げ捨てた火炎銃を認め、小さく舌打ちの音を響かせる。

「今はちと不利だな。
ったく、何でこんな時に限って壊れてくれんだよ、クソッ」

忌々し気に吐き捨てる。
少年は3人の顔を交互に見比べた。

――女は殺気を漲らせた視線を向けている。
――少女は目を丸くしながら、何かを問う様に青年の顔を見詰めている。
――そして青年は、訝る様な表情を浮かべながらも、地面に何かの図形を描き加えてようと羽根を構えている。

少年の口元が三日月形に歪んだ。
まるで、視界の全てを嘲笑するかの様に。

「コレ、な～んだ？」

少年は、とうとうその背中に背負っていた筒を肩に担いだ。
中身は空っぽ。
黒光りする砲身が陽光を反射する、用途不明の中空の筒である。
純白の姫も、真紅の少女も、その意味を理解出来ないらしく首を傾げていた。

「……な？」

だがこの場でただ1人だけ、少年の持ち出した道具の存在を理解し、同時に驚愕している人物がいた。白衣の青年、朝日　真也である。

彼は知っていた。
少年が使用した火炎銃の脅威を、この中で唯一、彼だけは理解していた。銃器とは、その口径に比例して殺傷力が高まるのが通例だ。
無論、それは一般論でしか無い為に、中には例外もあるだろうが、それでも大砲が拳銃よりも威力が高いのは常識である。

無尽蔵のプラズマを放射し続けた常識外の兵器。
少年の世界が誇るであろうその叡智。
もしもあの火炎銃が、口径に比例した破壊力を持つ兵器だとしたら――。

砲身が咆哮する。
雷鳴の様な駆動音を天高く響かせながら、炎神の殺戮兵器が数秒後の破壊に向けて歓喜する。それはまるで悪鬼の目覚めの様に、禍々しい妖光を纏いながらその内部を輝かせ始めた。

「アル？　伏せろ？」

響き渡る青年の声。
それと引き金の音は同時だった。

「あばよ、ネェちゃん？
生きてたらまた会おうぜ？」

災禍の火球が天を覆い、爆音と共に空間を食い尽くした。

１９．　質量保存の法則の成立を確認する為に行ったとある物理学者の少々強引

い、１９０００文字……。
はい。右往左往しただけあって、なんだかちょっととんでもないコトになっちゃってる気がします。
次からは、ちゃんと一話一万文字くらいに戻れるといいな～、とかちょっと祈ってみたりしてますけど……。
えーと、とにかく！！　いつもの倍くらいの電波を読んでいただき、本当にありがとうございました！！

20. 王宮魔術団による全元素複合魔術を用いた総攻撃による守護魔が持つ特性

少年の筒から放たれたのは、空間を覆う程の炎の鉄槌だった。

僅か数十センチ口径の砲身から放たれたプラズマの弾丸は、空中でその体積を爆発的に増大させ、太陽が2つになったかの様な熱量が瓦礫の山を覆っていく。

青年は目を開けている事すらも出来なかった。

視覚は一瞬で潰され、聴覚は麻痺し、肌を撫でる爆風に神経が削られていく。先程も経験した筈の五感の消失。しかし少年の武器によって齎されたそれは、少女の魔術による物とは根本から異なる現象である様に感じられた。

――否、それは当然か。

先刻の少女の魔術の目的は、あくまでも視界の奪取。目眩ましが目的であり、それが最終目的であったのに比して、少年の武器の目的は破壊と殺傷。視界の消失は副次的な物でしか無いのだから。

「――――っ？」

地べたに這い蹲り、目を固く瞑りながら、青年は嵐が過ぎ去るのをただ待っていた。爆風に乗って何が飛んで来たのか、彼の顔には羽虫の様に無数の粒が衝突し、硬い衝撃が腕や背中を掠めていく。

麻痺した視界。

麻痺した聴覚。

粉塵塗れの大気は猛毒で、呼吸すらもままならない。

青年はその全てが煙に巻かれる暴風の中で、金属が軋む断末魔を

聞いた気がした。

「ゴホッ？　ゴホゴホッ？
ウェェエエッ？」

やがてその猛威も終わりを告げた。
未だに霞が掛かった視界と、キンキンという耳鳴りが止まない聴覚。強烈な粉塵に咳き込みながら、青年はゆらりと瓦礫の中に立ち上がった。

世界は灰色の煙に覆われている。
粉塵が気管に入ったのか、喉は内側からヤスリでも掛けられているかの様に痛かった。全てが消失した様な死の世界で、彼は先ず、自分が未だに原型を留めている事に安堵する。

「……ウソだろ？」

そして粉塵が晴れた瞬間、青年は自らの視界に映った事実を理解して驚愕した。
先刻自らが作り上げた瓦礫の山。
視界が開けた瞬間、その量は2倍になっていたのである。

おそらく少年は、あの大砲で残された塔の半分を撃ち抜いたのだろう。塔はその一撃に耐えきれず、塵芥の瓦礫となって瓦解し、それが山の体積を倍化させたのである。山の周囲に少年の姿は無い。
あの粉塵に紛れて逃げたのだろう。

「……」

“お前と同じ事くらい出来る”
煙幕の為だけにわざわざ破壊され、無造作に積まれた瓦礫の山が、彼には少年のそんなメッセージを伝えている様に思えた。

「……プハッ？
ゲホッ？　ゲホッ？」

「コホッ？　コホッ？」

青年が呆然と立ち尽くしていると、瓦礫の山から2つの影が這い出て来た。黒いのと白いの。真紅の少女と金髪のお姫様である。
2人とも粉塵をモロに吸い込んだのか、涙目になるほど酷く咽せ返りながら、まるで転がる様にして地表へと生還を果たした。

「……」

青年は、ただ無言でその姿を見詰めていた。
敵国のお姫様。
この事態の発端となった襲撃者。
しかしその姿を確認しても尚、彼の心中は奇妙なくらいに穏やかだった。女と少女の距離はそう離れてはおらず、呼吸が整って立ち上がれば、あの姫様ならば即座に少女を斬りつけられる距離だろう。
そうなれば、青年の命も無いに違いない。
だが、それはもう関係が無い事柄だ。
何故なら、状況は既に詰んでいるからである。

「残念だな、お姫様。

どうやら時間切れみたいだ」

青年は静かに宣言した。

その両手を大きく広げ、まるでナニカ指し示す様な所作を伴いながら。

「――――？」

そして、女は目を見開いた。

時計塔が崩壊した瓦礫の山。

そこに居る自分の周囲を、数え切れない程の人影が取り囲んでいる事に気がついたのである。

闇を結晶化した様な黒の軍勢。

漆黒のローブを纏いしその威容は、しかし少女の物とは少し違い、薄手の生地や小さめの帽子で統一されて一様に映る。そして皆が皆、手に手に剣や杖、盾などの魔装を構え、魔力を込めた攻撃を今にも放たんと準備して隊列を組んでいた。

――王宮魔術団。

日夜魔導の修練に明け暮れ、その業と力を一心に磨き続けた一流の魔導師達。一度（ひとたび）戦が起これば王命に従って命を投げ打ち、敵軍を完膚無きまでに叩きのめすであろう、魔術大国銀の国が誇る最高戦力であった。

「これはこれは、武の国のご子息様。

此度は随分と大暴れされたようで。

いやはや、お国柄が偲ばれるというものですなぁ」

その軍勢の中から、一つの影が歩み出た。
黒装束の魔導師達の中にあって、やたらと目立つ派手な宝石衣装。
完璧に整髪されたカツラが目立つその男は、文部大臣アスガルドである。彼は何故か最前列にしゃしゃり出ると、破壊された時計塔を憎々し気に一瞥し、お得意の嫌味をたっぷりと込めながら敵国の姫を見下した。

「武の国第一王女、ウェヌサリア・クリスティー？
領域侵犯、及び王都襲撃の罪により身柄を拘束する？」

仄かな苛立ちを孕んだその声が、瓦礫の山に高らかと響き渡った。

――――

アスガルドの宣言をどの様に受け取ったのか。
ウェヌサリア・クリスティーはゆっくりとその場に立ち上がると、軽やかに周囲の群衆を一瞥した。
そのあまりにも現実離れした容姿に、辺りからはざわめきが巻き起こる。

彼女の佇まいには気品があった。
ある種の花が雑草に塗れた原野から隔離され、血統種として純粋培養される様に、数多の雑種とは生まれながらに次元を別つ圧倒的な品格。
それは例え、彼女が土埃に塗れていようとも一向に衰える気配が無かった。
一糸乱れずに隊列を組んだ王宮魔術団の中にあっても、全ての男

は彼女の一挙手一投足に目を奪われ、全ての女は宝石の様な別次元の美しさに圧倒されていた。

「私の身柄を拘束する、ですか。
随分と面白い事を仰る方ですね」

ウェヌスは一通り周囲を視察したかと思うと、アスガルドを正面から見据えて口元を緩めた。白薔薇に例えられるその微笑を見た観衆からは、感嘆の溜息が漏れる。

彼女に見据えられたまま普段と変わらずに声を発する事が出来るのは、余程美的感覚に疎い欠落者か、或いは自らの品格に過剰な自信を持つ欠陥者しかいないだろう。

「面白い事を仰るのは貴女でしょう。
何のつもりかは存じませぬが、わざわざ我が国の王都までお越し下さったのです。いやいや、このままお帰ししては我が国の名折れでしょうに」

……どうやら彼はそのどちらかであったらしい。
アスガルドは慇懃な笑みを浮かべたままに鼻白み、一切声のトーンを変えずに付け加えた。

「それとも、これだけの人数を相手に鬼ごっこでもする事が、貴女様の望みなのでしょうか？」

「いえ、まさか。
いくら私と言えども、これだけの人数を相手にするのは少々手間です。
ええ。不可能だとは言いませんが、明らかに私よりも技量が劣る者を斬るのは趣味ではありませんので」

ウェヌスはあくまでも優雅に頷いた。
アスガルドにも、魔術団の面々にも、或いは真紅の少女や白衣の青年にさえも、それは余りにも場違いな態度に映った。自らと互角の技量を持つ少女と、その背後に控える圧倒的戦力。それを前にして、彼女は依然として余裕のある態度を崩さない。凛としたその佇まいにある者は困惑し、またある者は世間知らずのお姫様の世迷い事なのだと聞き流していた。

「分かりませんか？
確かに私独りでは、多少厳しい状況かもしれません。ええ。例え私が本来の“魔装”を使用し、先天魔術（ギフト）を全力で行使したとしても、この場を抜け出すには相応の負傷を覚悟しなくてはならないでしょう。
……それこそ“常理を外れた力”でも無くては」

不敵に微笑む武装姫。
その含みのある言い回しに、場の空気は困惑から戦慄へと移った。場の殆どの者がその認識を改め、寒気を覚える程に、自信に満ちた彼女の表情は壮絶だったのだ。
そしてその悪寒が正しかった事は、次の瞬間に証明される事になる。

「聞いていますね？
好い加減、目を覚ましても良い頃合いですよ」

――彼女がそう言った瞬間である。

突如、大地が鳴動した。

「――――？」

その場に居た全員の表情が驚愕に染まる。

突如として発生した、天変地異の様な世界の振動。

火山噴火や大型魔獣の行進を思わせるその鼓動が大地を震わせ、腹の底に響く様な波動を空間に吐き出していく。

「アルテミア。それからシンヤさん、でしたね。

折角ですので手土産に１つだけ、我々の手の内を明かして差し上げましょう」

その振動。立っているのも難しい程の揺れの中、ウェヌスは眉一つ動かさずにそう言った。口元には微笑。それは自らの危機に怯えるどころか、いつでも敵を殲滅出来るとでも言わんばかりの確信に満ち溢れている。

「異世界には様々な可能性があるそうです。

異界の方々はそれぞれ、この世界の常識から見れば信じられない様な人生を歩み、そして何らかのきっかけによってこの世界に訪れます。だからこそ彼らは、我々の考えもつかない様な知識を持ち、同時に彼らの世界特有の性質を持つのです」

何かを思い返す様に、女はそこで言葉を区切った。

それはまるで、自らの過去の過ちを省みる様な、儚げな印象を与える雰囲気を湛えている。

小さく息を吐き、凛とした声は更に続けられる。

「ええ、そうですね。
例えば仮に、の話ですが……。
もしも“その人”が鋼に馴染みのある世界の出身ならば、この世界の人間など及びもしない程の剣の技量を誇るでしょう。仮に、もしも万物全てが岩の如き重さを持つ世界の出身であったのならば、こんな瓦礫の山など木箱程度の重さにも感じないのでしょうね」

瓦礫の山に皹が入る。
複雑かつ乱雑に積み重なった金属の壁が、まるで生き物が呼吸するように起伏を繰り返し、振動は際限無く強まっていく。
それが見物人たちにはまるで、噴火寸前の活火山を見ているかの様な錯覚を与えた。

「そうです。
つまり“彼”は、そういう世界の出身だという事です」

――そして、山は噴火した。
家程もある瓦礫がまるでオモチャの様に空を舞い、粉塵は火山灰となって周囲の群衆を呑み込んでいく。無造作に積まれた破片は冗談の様に辺りに飛び散り、落下した瞬間の衝撃だけが、それが質量を持っていたという事実を証明する。

その中心。
火山噴火の様に飛び散った瓦礫の頂上。
山の半分が吹き飛んだその窪地の中心にて、青い従者は幽鬼如く佇んでいた。

「……主人を敵前に残したまま休息するなんて、随分な従者ですね」

囀る様な、微笑の混じった声。

全ての人間が驚嘆し、言葉を失った世界。
しかしその中にあって、純白の姫だけは唯一、それがさも当然の様に視線を男へと向けていた。男は肩を竦めながら、自らの右手の甲を指差している。

「仕方ねぇだろ。
見ての通り、チョイと手を擦り剥いちまったんでな。約束を守るんなら、俺が出て来た時点で俺たちの負けになっちまうじゃねぇか」

言われて、女は男の手へと目線を落とした。
確かによく見ると、男の手にはほんの小さな擦り傷があり、既に止まってはいるが血が2、3滴滲んでいる。“1滴でも血を流させたら勝ちにしてやる”。彼がそう約束した以上、彼の負傷を知った上で女が戦闘を続行しては約束の反故に当たるだろう。女は小さく息を吐きながら、身体の熱を緩やかに下げていった。

「いいでしょう。貴方が勝手に交わした約束ですが、私は従者の戦闘方針にまで口は出しません。
ええ。貴方の心遣いには感謝しましょう。
……ですが。次からは、無事ならばまず私の前に出て来て下さい。私だって、その……、ほんの少しは不安になるのですから」

余人には分からぬ程度に頬を膨らませ、拗ねる様な声色で告げる姫。足場として不安定な筈の瓦礫の山を当然の様に踏みしめながら、悠然と男の下へ登って行く。対する男は、やれやれといった様子で頷いていた。

「お、王宮魔術団何をしておるかっ？
さっさとあの連中を吹き飛ばせっっ？」

アスガルドの叱責が山に響く。
唾を飛ばしながら激する文部大臣の声を聞いた魔術団の面々は、我に帰りながらもなお行動を躊躇っていた。

“あんな化け物がいるなんて聞いていない”
“山を吹き飛ばしたぞ。人間じゃない”
“ここは様子を見るのが適切ではないか”

様々な意見が轟々と飛び交い、黒い軍勢は敵を見ながらもたたらを踏んでいる。そんな彼らの様子に業を煮やしたのか。アスガルドは更に声を張り上げた。

「ええい？　貴様らそれでも魔導師か？
あんな野獣を恐れるんじゃない？
そんなに彼奴が恐ろしいのならば、王女ウェヌサリアを狙え？
いかな大魔導と言えど、これだけの軍勢から魔術を浴びては一堪りも無い筈だ？」

文部大臣は高らかに標的を指示した。
なおも行動を迷う黒い軍勢。
しかし大臣の命には逆らえないと考えたのか、軍勢の中の何人かが、その腕に魔力を流し始めた。それを合図に、連鎖的に増殖していく魔術の気配。軍勢が発する燐光は黒装束の景色にイルミネーションの様に浮かび上がり、４属性の魔術がコーラスの様に次々と詠唱されていく。魔力が収束し、光が飽和し、その全てがただ一点に向けられて停止する。
準備が十分に整った事を確信したアスガルドは、肩が上がる程に大きく息を吸った。

「放てぇぇぇえええええっっ？」

そして世界が振動する。

純白の姫を取り囲む無数の魔導師達は、その全てが銀の国の誇る一流の使い手達なのだ。炎の上位魔法が、大嵐の如き暴風が、空気が氷る程の冷気の弾丸が、土塊の兵士が、剣槍盾杖、様々な魔装によって増幅されて放たれ、たった1人の人間を仕留めるべくその銘を誇っていく。視界を覆う4原色の閃光。標的に対して明らかにオーバーキルな破壊力のそれらは、一切の手心無く白いドレスに向けて疾駆した。

「――――っ？」

鳴り響く爆音。

最早音と形容していいのかすらも分からない程の衝撃が世に放たれ、空間そのものを食い尽くすかの様に4属性の波動が暴れ狂う。あまりにもデタラメな魔術の衝撃。これだけの攻撃を受けては、純白の姫君とて骨も残らないだろう。

粉塵が立ち昇る。

灰色の煙は三度（みたび）世界を覆い、その惨劇の凄惨さを呂実に語る。単身王都に乗り込んで来た美貌の姫君は、今この瞬間、圧倒的戦力の前にこの世を去ったのだろう。その場に居合わせたある者はそれを誇り、またある者は、麗しの姫君の姿が世から消えた事に落胆していた。

――少なくとも、その光景を見るまでは。

煙が晴れる。

爽やかな涼風が土埃に塗れた大気を浄化し、爆心地の様子を見物人に伝え始める。その刹那。一個大隊の総攻撃を受けてクレーターとなった筈の瓦礫が健在であるという事実を理解した瞬間、その場に居た殆どの人間は言葉を失った。

「うるせぇな。
悪いが花火は間に合ってるぜ？」

爆心地には男が居た。

先刻瓦礫の山を吹き飛ばした、青い甲冑の大男。彼はまるで姫を庇う様に魔術団の前に立ちはだかり、鎧に焦げ痕一つ無いままにその場に佇んでいた。

男は退屈そうに溜息を吐きながら、細めた視線を女に向ける。

「……ったく、無用心な姫様だな。
敵国の軍隊に背中向けるか？　普通」

「まさか攻撃されるとは思わなかった、というのが一つですが……。
仮に攻撃されても問題は無いと思ったのです。
ええ。貴方ならば間に合うと信じていましたから」

清流の様な信頼を込めた声で言いながら、女は先刻まで男が居た場所と現在地を見比べた。距離にして、凡そ２０歩程度。男ならば魔術の発動を感じ取った瞬間に、十分に間合いを詰め得る距離であ

る。

王宮魔術団は沈黙している。

あれ程の魔術の直撃を完全に無効化した怪物。その存在が信じられないのだろう。守護魔の存在が一部の魔導師と大臣達にしか知られていないという事実が裏目に出た。魔術が効かない世界の存在が居る事すらも知らない殆どの魔導師達は、まるで悪夢を見た様に放心し、頭を抱えたり首を振ったりしている。

「――さて」

そんな魔導師達の間にあって、男は一際目立つ宝石衣装に目を留めた。獣の様な眼光で、殺気を込めて睨み付ける。男の視線を受けたアスガルドは、小さく呻きながら2歩後退していた。

「おっさん。武器も持ってねぇ女の背中ぁ攻撃させるたぁ、大した信念の持ち主みてぇだな。俺の主に手ェ出したからにゃ、相応の覚悟は出来てんだろうなぁ？」

低い声が空気を伝播し、向けられた存在に死の恐怖を抱かせる。捕食者に睨まれた哀れな獲物は、カクカクと顎を震わせながら、怯える様に周囲をギロギロと眺め回していた。

「お、王宮魔術団？　王宮魔術団っ？
何をしておるか愚か者どもめがぁっ？
貴いこのワシが狙われておるのだぞ？
さっさと追撃を始めぬかこの間抜けどもっっ？」

再度攻撃を命じるアスガルド。

しかしその憐れを誘う程に蝋梅した声には、今度ばかりは本当に

返答が無かった。
　王宮魔術団は完全に沈黙したまま、微動だにせずにお互い目配せ合っている。

……そして、やがてどこからとも無く叫び声が上がった。

「やってられるかぁぁぁぁああ？」
「あんな化け物どうしろってんだよっっ？」
「まだ死にたくねーっっっ？
大臣？　やるならてめえでやりやがれ？」

口々に奇声を上げる銀の国最高戦力。
彼らは上司たる大臣に思い思いの罵声を浴びせかけると、隊列の最後尾に居た何人かが逃げ出したのを合図に散り散りになって逃走を始めた。

「な、お、おい貴様らぁぁあああ？
逃げるな？　今逃げたヤツは減給じゃ済ま――だから頼むから逃げないでくれぇぇえええ？」

去りゆく黒色の軍勢の背に、大臣の声だけが虚しく響いていた。

「……」

言葉を失って立ち尽くすアスガルド。
ポツンと取り残された文部大臣は、寂し気に明後日の方向を眺め

たまま、何かの化石の様に固まっている。

コホンと咳払いをする。

大臣はゆっくりと瞼を閉じながら振り返り、純白の姫君へと視線を向けた。その口元には、妙に馬鹿丁寧な笑みが浮かんでいる。

「さて、武の国が第一王女様。

我が国の誇る余興はお楽しみ頂けたでしょうか？

ええ。楽しんで頂けたのであれば結構です。では、そろそろお帰りになってはいかがでしょうか。　勿論、我が国の威信にかけて、ご客人に無礼は働きませんとも。

では御機嫌よう」

最後まで慇懃な笑みで取り繕ったまま、文部大臣はよろめく様に去って行った。

――――

「……あいつら、何しに来たんだ？」

一気に人口密度が低下した時計塔跡。

たった４人残された、２人の守護魔とその召喚主。

すっかり寂しくなった景色を疲れた瞳で眺めながら、朝日　真也は頭を抱えた。

“暫くしたら王宮魔術団も来ると思うから、それまで時間を稼いでくれればいいの”

先刻聞いた少女のセリフが、虚しげに何度も脳内でリフレインする。あの時には、彼女の言う魔術団とやらが、一体どれ程の希望の光に思えたことか。

あんな連中に一度でも期待したという事実が汚点にしか思えず、彼は凄く死にたくなった。

少女へと視線を移す。

真紅の少女はまるで酷い頭痛を堪える様に、或いは身内の至らなさに恥じ入る様に、ほんのりと頬を染めながら頭を抱えていた。

「あたしを怒らせに来たんじゃない？

アスガルド……はほっとくとして、取り敢えずあの連中、明日から修練の量2倍だから」

ドス黒いオーラを滲ませつつ、少女は妖精の様な笑みでそんな事を言う。魔術団の連中が逃げたのは、ある意味では正しい判断であったかもしれない。魔導師としての少女を知る者が彼女にこんな笑みを向けられたとしたら、その人物は恐怖のあまり失禁してもおかしくは無かっただろう。

幸運にも、魔導師の何たるかを良くは分かっていない青年にはそれ程顕著な効果は現れなかったが、それでも風邪を引いた様な悪寒が背筋に走るのを彼は感じた。溜息を1つ吐いてから、視線を少女から外して瓦礫を見上げる。

「ケッ、腰ぬけどもが」

視線の先では青い男が、悪態をつきながらアスガルドが消えた方

角を睨んでいた。その隣には寄り添う様にして白い女が立ち、同様にして不快そうな視線を投げかけている。やがて彼らは青年の視線に気が付いたのか、瓦礫の山から悠々と眼下の2人を見下ろした。

青年の緊張が再び高まる。

緩んだ神経が一気に引き締められ、アドレナリンが心臓の拍動を情けないくらいに速めていく。

何の事は無い。

色々と余計な出来事が起こりはしたが、結局状況は門前での邂逅に戻っただけだ。この場にはたった4人しかおらず、純白の姫とその従者は丘の上からこちらを見下ろしている。先刻と違い、青年は不死鳥の羽根ペンという魔装を所持してはいるものの、魔法円という前準備をしていない現状では何の役にも立ちはしない。このまま時が過ぎれば、今度こそあの男は青年を串刺しにするだろう。

純白の姫は真紅の少女を見据えている。

その怜悧な視線からは、女の内心は到底伺えない。否、彼女の言動は常に青年の理解の外なのだから、今だけ都合良く彼女の思考を把握出来るなどという話は無いだろう。ただ少なくとも、彼には女の視線が、自分の短命を哀れんでいる様に思えたのだ。

「アルテミア、どうしますか？

どうやら、あの方々は我々の戦闘には干渉しないつもりの様ですが」

発せられたその問いは、戦闘続行の意思の確認であった。

女は真っ直ぐに少女を見据えながら、無色の声で静かに問う。

少女は一瞬だけ目を丸くしたが、直ぐに溜息で返事を返した。

「勿論続ける、って言いたいところだけど……。
なんかさ、あの連中見てたら気が削がれちゃった。
……どうする？
あんたがどうしてもって言うんなら、今日のところは見逃してあげてもいいけど？」

最後の方にはクスリという声色を滲ませて、真紅の少女は女を見据える。
その視線を正面から受け止め、純白の姫は微笑を返した。

「そうですね。私個人としましては、続ける事に何の支障もないのですが……。
約束を反故にしては王族の名折れですからね。
ええ、今日のところは帰らせていただきましょうか。貴女の奮戦に免じて、今の発言は見逃して差し上げます」

少女に負けじと言い返し、ウェヌスはその長髪から髪飾りを外した。金砂を散りばめた様な彼女の髪に良く映える、羽根を模した白い髪留め。彼女はそれを天高く掲げると、祈る様に目を閉じた。髪飾りからは燐光が漏れ、彼女が何らかの魔術を行使している事を周囲に知らせる。

そして、街には劈く様な異形の鳴き声が響き渡った。

蒼い陽光が遮られる。
天を覆い尽くす程の影が天空を舞い、瓦礫の山が夜が訪れたかの様な常闇に包まれる。その暗転した世界。天の運行を乱す程の存在感と共に、鳴動の如き羽音を響かせて、その“翼”は飛来した。

「……冗談だろ？」

惚けた様な声。
白い青年は半ば放心しながら、茫然自失の体でその“翼”に目を奪われていた。

人間が2人乗っても余裕がある程に巨大な背。
羽毛に覆われた翼は力強く、その体躯が宙に浮くという異常を正常の如く誤認させる。
先端が曲がった、鋭い嘴。
クリクリとした猛禽の眼は捕食者を思わせる鋭さながら、しかし辺りを見回す様には愛嬌と気品が感じられる。

――怪鳥・グリフォン。

この世界において、天の国の翼竜（ワイバーン）と並び称される天空の覇者。武術王国武の国（ウォルヘイム）が誇る長距離移動用生物であり、そして王女ウェヌサリア・クリスティーの愛鳥の1羽であった。

怪鳥はまるでその力強さを誇るかの様に、悠然と瓦礫の山に降り立った。おそらくは、かなり丁重に扱われているのだろう。白い羽毛に所々灰色のメッシュが入ったその体色には、しかし一切の汚れが見られない。叫ぶ様な声でわななきながら、翼は自らの主に頭を摺り寄せていた。

王女はその僕の頭に手を置き、まるで慈しむ様に撫でる。やがて青年の内心を悟ったのか、恐々としている彼の顔に目を移して小さく笑った。

「安心して下さい。

“彼女”は大変に勇敢ですが、同時に節度を弁えてもいます。貴方が危害を加えるつもりが無いのならば、“彼女”とて貴方を襲う事は無いでしょう」

ウェヌスはそう言って会釈をすると、簡単な謝辞を述べてから翼へと飛び乗った。気品に溢れる彼女と白い翼の組み合わせは、青年には天の使いを彷彿とさせる程に神々しく映った。

「それではアルテミア、それからシンヤさん。
次にお会い出来る日を楽しみにしています」

翼の背中を優しく撫でながらそう告げて、王女は自らの従者にも搭乗を促した。

「……」

……しかし青年は、天女の様な彼女がその安全性を保証して尚、何故か目の前の怪鳥に対する警戒心が拭えなかった。

大男は一度大きな溜息を吐くと、何故か青年よりも更に警戒する様な素振りでグリフォンの背に跨った。青年はその素振りに、何か確証に近い様なイヤな予感を感じたが、男が思い出したかの様にこちらへと目線を移したのを見て思考を止めた。男は捨て台詞の様に、その低い声を唸らせる。

「……おい、白いの。
これからお前は、５つの国に命を狙われる事になる。
俺も同じ立場だから分かるけどよ、それはきっと、息つく暇も無い血みどろの修羅道だ。気ぃ抜いたら、明日にでもお陀仏だぜ」

大男は睨みつけながら言い捨てる。
その声には未来を暗示する様な響きと共に、何故か青年の身を案じる様な色も含まれている様に思えた。
男の意図するところが理解出来なかった青年は、首を傾げながら男の真意について考察する。

そんな彼を呆れる様に睨みながら、男は堂々と続けた。

「……まっ、要するにだな。
お前を殺すのは俺だ？
だからお前は、その時まで絶対ェ死ぬんじゃねぇぞ？」

王道バトル漫画みたいなセリフが響いた瞬間であった。
突如として巻き起こった突風が、４人だけの世界に吹き荒れる。
グリフォンの羽撃きは大気を鳴動させ、旋風が粉塵を巻き上げて視界を遮った。白衣の袖で顔を覆う青年。粉塵に遮られた世界の中、絹を割く様なけたたましい鳴き声が、ドップラー効果を残して遠ざかっていくのを彼は聞いていた。

「殺せなくなるから死ぬな、って事か。
出来れば二度と会いたくないな」

風が収まったのを見計らって、白衣の袖をどける。
視界には瓦礫の上に広がる青空と、大空をかける白い翼だけが写っていた。

溜息を吐きながら、視線を隣へと移す。

真紅の少女は悔し気に唇を噛み、睨み付ける様にして空を見上げている。

――と、青年の視線に気が付いたのか眼を合わせてきた。

「とんでもない事に巻き込まれたもんだな。

あんな化け物があと三体居るって言うんだろ？

……やれやれだ。こんなに家が恋しいと思ったのは、もしかしたら生まれて初めてかもしれないな」

肩を竦めて恨み言を言う科学者。

その視線が痛かったのか、少女は目線を隣へと泳がせた。

彼女の目線の先には、瓦礫の山がある。

つい数分前までは荘厳な時計塔だった筈のその金属塊は、今や元の面影すらも残さず、ただの無秩序な残骸としてそこにあった。

――この白い青年が、僅かペン一本で成し遂げた破壊の痕跡。

少女は、背筋に冷たい物が走るのを感じた。

知識としてだけは知っていた事実を目の当たりにし、静かな戦慄が心臓から脳天へと突き抜ける。

そしてその感覚は、少女の口元をフッと綻ばせた。

「……化け物、ね」

翠の瞳が、再び青年の方へと向けられた。

その翡翠の様な双眸は心底楽しそうに、そしてどこか誇らしそうに青年を見つめている。

「あんただって、十分に化け物じゃない」

思わず鼓動が速まる程に可憐な笑顔で、少女は真っ直ぐにそう告げた。

なにを言われたのか理解出来なかったのか、或いは理解している余裕が無かったのか、青年はキョトンとした顔で少女の言葉を聞く。

やがて我に帰った彼からの返事は、どこまでも深い溜息と軽い皮肉だった。

「ありがとう。
全くもって嬉しくないな」

頭を掻き上げながら、青年は空を見上げる。
純白の鳥はもう見えなくなっていた。
それは長かったこの日の事件の終わりであり、そしておそらくは、全ての始まりを告げる狼煙だったのだ。

どこまでも青い群青の空の下。
６つの世界を巻き込む魔導師達の祭典は、こうしてその火蓋を切って落とした。

２０．　王宮魔術団による全元素複合魔術を用いた総攻撃による守護魔が持つ特性の解析

１１０００文字！！　はい、なんとか目標達成って感じです。
やっぱり作者くらいの文章力だと、飽きないで読んで頂けるのはこのくらいが限界ですよね……？　はい、もっと上手く書けるようになりたいです。

それから、一応今回で戦闘パートは一段落で、次回に後日談みたいなお話を入れて、あとアイアイ★こらむとか入れてから次章、みたいな形を考えたりしてます。
でもでも、ちょっと書き始めてみたんですけど、この後日談がまとまらないのなんのって……。

……はい。例によって、ちょっぴり更新が遅れちゃうかもです。
徹夜の勢いで頑張りますけど、間に合わなかったらごめんなさい。
ではでは、また次回もお願いします！！

21. 異世界に存在する2つの国の文化や風土及び生活習慣の違いに関する調

ご、ゴメンナサイ！！
何がごめんなさいって、とにかくごめんなさい！！
その、まとめるのに3日掛っただけあって、ちょっとモノスゴイ長さになっちゃってます。
はい。ちょっと読むのも疲れるかもしれませんけど、一応召喚編のラストなので、最後までお付き合い頂けるとうれしいです。

21．異世界に存在する2つの国の文化や風土及び生活習慣の違いに関する講義

冬の夕暮れは早い。

秋の夕陽は釣瓶落とし、とはよく言うが、一般的に1年で日照時間が最も短くなるのは冬至、つまりは12月20日頃であり、それは常識的に考えれば冬も冬、真冬である。よって冬季の太陽は、鶴瓶にも増して速く落ちると表現出来るだろう。

そしてそれは、どうやら異世界においても共通の定理であったらしい。考えてみれば太陽と気温の間には密接な関係があるのだから、気温が低ければ必然的に日照時間が短かったり太陽光線のエネルギーが弱かったりなどの要素（ファクター）が想定されるのは当然な訳で、現在この国が冬であるという前提に立つのであれば、まあ正午を過ぎれば瞬く間に夕暮れ時を迎えるのは自明の理であったと言えるだろう。

その理に律儀にも従ったのだろうか。聖堂はガラス張りの天井から降り注ぐ、オレンジ色の光の帯に溢れていた。しかし、ソコはソレ。流石は異世界と言ったところである。蒼い太陽には青年が地球で見慣れた様な綺麗な夕暮れなど期待出来る筈も無いらしく、太陽は今や赤黒い染みの様な姿となって不気味に空を切り取っている。

それでも聖堂が綺麗なオレンジ色の光に包まれているのは、単（ひとえ）に月が鮮やかな真紅である為だった。どの様な理屈なのか。太陽が血塗れになり始めると同時に地平線より上がった紅い月は、輝きを失い始めた太陽と並ぶ程に眩く輝き、結果としてこの世界特有の幻想的な夕暮れを演出しているのである。

「……で」

その聖堂の中心。
いかにも地位のありそうな貴族や大臣達に囲まれながら、朝日真也は謎の呟きを零していた。その表情には色が無く、声にはやはり抑揚が無い。

「この集まりは何なんだ？」

青年は顔色を変えずに問いを重ねた。
その表情は茫然自失というよりも、本当に状況が理解出来ないという単純な疑問から形作られた物である様な印象を受ける。彼はあくまでも涼やかな表情のまま、黒い瞳を隣のトンガリ帽子へと向けていた。

「何って、審問会でしょ？
ほら。あんたがさっきやらかしちゃったコトについてさ」

「やらかしたコト？」

「うん」

青年の素朴な疑問を受けて、アルテミア・クラリスはやはり淡々と返答した。その表情には青年と同様に色が無く、やはり心中が伺えない。少女は観念した様な、呆れた様な、或いはどこか達観した様な雰囲気を醸し出しながら、視線を正面の座へと向けていた。

「汝はアサヒ　シンヤで間違いが無いか？」

厳粛な声が聞こえてきて、青年は視線を正面へと向けた。視線の先には、口髭をピンと立てた、厳しそうな顔つきの男が座っている。青年は彼の名前になど興味が無いのでスルーしたものの、男の椅子

に乗せられたプレートには“法務大臣”の役職が記されていた。彼の隣や後列には、これまた偉そうな貴族達が沢山座り、やはり様々な役職の書かれたプレートを乗せている。

（なんか、癪に触る空気だな）

まるで罪人を裁く裁判の様なその雰囲気に、青年は少し居心地が悪くなるのを感じていた。

「答えよ、被告人？
汝は特務教諭、アサヒ　シンヤで間違いは無いか？」

「……へ？　あ～、はい」

法務大臣が叱責するかの様に怒鳴りつけたので、青年はつられる様に頷いた。答えてから、今の問いには何かスゴくおかしな呼称が含まれていた気がしたが、まああまり気にせずに周りを見回してみる。法務大臣の後ろに座っていた貴族達は、何故か満足気に頷いたりざわめいたりしていた。

「では被告人、アサヒ　シンヤよ。
汝には起訴状の事実を確認した後、我ら審問会が定めた刑罰を負ってもらうものとする。異議申し立てがあるのならば、今のうちに申すがよい」

「あー、その……。
異議っていうか、どうしても聞きたい事が先ず1つあるんスけど」

青年はゆっくりと手を上げると、もう一度辺りを見回してみた。ざわめく貴族達と、最後までナニカを喚いていたカツラの大臣が少

々気になったので、彼らが静かになるのを待ってから再び口を開いた。

「そもそも、何でこんな事になってるんスか？」

「……」

法務大臣は無言のままに青年を睨みつけると、その顎を青年の隣に控えている少女へと向けた。

溜息を吐きながら、気怠そうな態度で口を開く少女に、青年は何故かデジャヴを見ている様な錯覚を覚えたりする。

少女は本当にイヤそうにしながらも、青年に先刻の出来事を思い返す様に促した。

――遡るは数刻程前である。

グリフォンが飛来し、純白の姫とその従者が武の国へと発った後、青年と少女は何故か戻って来た王宮魔術団に囲まれた。

……いや、少し違う。

正確には王宮魔術団は遠巻きに見ているだけであり、2人を取り囲んだのは王宮“騎士団”であった。銀の国の軍隊には魔術団と騎士団があり、魔術大国たる銀の国では騎士団は魔術団に比べて軽視される傾向がある。しかし今回は魔術が効かない敵が現れたという報せを受けて、緊急に騎士団が前線に駆り出されたとの事である。今度は文部大臣アスガルドだけで無く、軍務大臣を名乗る小太りの男も先陣に立っていたのだが、まあその辺は余り重要では無いので省略する。

兎にも角にも意気揚々と、おそらくは武の国の2人組と戦う為に乗り込んで来たであろう彼らであるのだが、標的が既に帰った後だと知るや否や戦意の矛先は青年と少女に向いた。

“何故みすみす逃がしたのか”とか、“怖くて手出し出来なかったんじゃないか”、などという非難はまだ序の口。終いには真っ先に逃げ出した魔術団の連中やアスガルドまでもが罵声に加勢し始め、2人を何らかの罪に問うべきであるという意見が出始めたのである。

……結論から言うと、これは何とかなった。

何しろ敵を見逃した事で罪を問うというのであれば、敵前逃亡をかました魔術団やアスガルドなどは更に重い罪になってしまう。軍務大臣や騎士団の連中はそれでも良かったらしいが、敵襲の報せを受けても救援に来なかったという負い目もあり、彼らも直ぐに沈黙した。

問題が起きたのはその後だ。

2人の大臣達は、暫しの間憤怒に満ち溢れた眼差しで“元”時計塔を睨みつけていたのだが、それが半分以上青年の仕業だと知るや否や態度を急変させた。

“き、貴様？　この塔の中にどれ程の……オ、オホンッ。いや、この塔がどれ程由緒正き物であるのか分からんのか？　貴様のやった事は、十分な反逆行為だ？”

そんな事を言いながら突然、何故か青年の胸倉を掴みかからんばかりの勢いで憤慨した2人の大臣は、面目を潰された魔術団や騎士団の加勢もあって、青年を塔の破壊に関する罪状で審問会に掛ける事を決定したのである。

――そして現在、王宮に引き摺られてから数刻程待たされた青年は、数多の大臣達に囲まれながら審問を受けていた。そこまでの経緯を整理した後、青年は再び首を傾げる。

「……まあ、確かそうだったよな。
で。結局それのどこが不味かったんだ？
あの時は緊急事態だったから、まあ仕方なかったと思うんだが……」

小さく肩を竦めながら、青年はゆるゆると辺りを見回してみる。時計塔の展望台と同じくらい広い聖堂には、無駄に青年を待たせただけあってスゴい数の大臣や貴族が参列していた。彼らは少し高くなった豪奢な椅子から、青年と少女を囲む様にして見下ろしている。

……そう。青年はここに至る経緯は理解出来ていたのだが、この状況が分からなかったのである。だってこんなに沢山のお偉いさんらしき人々に囲まれていたら、まるで自分が重罪人か何かみたいでは無いか、と。

「どこが不味いって、あんたね……。
……まあ、とにかくさ。あの連中の機嫌損ねてもロクなコト無いから、あんたは大人しくしてなさい」

少女も肩を竦め、溜息混じりに返答する。
青年も吊られて溜息を吐き、面倒臭そうに正面の大臣を見据えるのだった。

一呼吸置くと、大臣達は漸く審議に移るつもりになったらしい。
法務大臣のプレートを抱えている正面の男は、手元の書類に簡単に

目を通すと、文部大臣アスガルドに起立を促した。
おそらく、調書に名前でもあったからだろう。アスガルドは意気揚々と立ち上がると、小さく咳払いをし、まるで演説でもするかの様に大音声を響かせ始めた。

「皆さん、聞いて戴きたい？
ここにいる被告人、アサヒ　シンヤは、偉大なる国王陛下に仕える身でありながら王権のシンボルたる時計塔に悪辣な落書きなどを施し、王都の景観を著しく損なったのです？」

「……そういう言い方をされると、なんか物凄く悪い事したみたいだな」

あんまりな説明のされ方に、聞こえないくらい小さく悪態をつく。どうやら文部大臣にはそれが聞こえたらしく、一瞬だけチラリと睨まれた気がしたので、取り敢えず青年はスルーしておく事にした。

「更にです？　この男はそれだけでは飽き足らず、塔の重要性を十分に理解していながらもこれに卑劣極まりない仕掛けを施し、あろう事か破壊する事によって王の威厳を地に落とした？　これらの反逆行為を、我々は決して？　決して許してはならないっっ？」

大袈裟なジェスチャーと、訴えかける声。
如何にも芝居がかったアスガルドの演説であったが、辺りからは拍手と賛同の声が巻き起こった。貴族や他の大臣達の視線を受けて、アスガルドは油ぎった顔を光らせながら満足気に頷く。

その温まった空気を落ち着かせながら、法務大臣は確認する様に口を開いた。

「被告人。以上の事実に相違は無いか？」

「……いや、まあ。
間違ってはいないッスけど」

青年は溜息混じりにそう答えた。
……そうとしか言えないからである。
確かに言い方はアレではあったが、その実アスガルドの言葉には、明らかな虚言は何も含まれてはいないのだ。

法務大臣は青年の言葉を聞くと、何の感慨も無く次のセリフを告げた。

「反論が無いのであれば、審議はここで終了となる。汝は文化財破損及び反逆の罪により、全ての財を没収した後地下の独居房に入る事になるが、宜しいか？」

「……」

青年は、黙したままに暫し逡巡した。
現状について頭を巡らせる。
どうやらこの大臣様達とやらは、自分が塔を破壊した事にご立腹で、ここで何かを言わないと独居房とやらに放り込むつもりらしい。

青年は小さく首を振った。
いや、反論とかは未だ思いついていなかったのだが、取り敢えず独居房は困るのだ。というか異世界に攫われ、敵国の化け物に命を狙われた挙句牢屋暮らしなんて、それはあまりにも非道過ぎる。あまりにも納得がいかない。

「では、反論が無い様なので判決に移る」

「いや、今首振……」

「受け付けない？」

「……」

黙った。

あまりの横暴さに、青年はとうとう言葉を失った。思うに、魔女狩りの裁判とかってこんな感じだったのでは無かろうか。なるほど。実はココ、割と独裁的な統治の国なのかもしれない。

青年が言葉を発しないのを、果たして会の終結ととったのか。法務大臣は咳払いをし、青年を真っ直ぐに見詰めながら――。

「待って下さい？」

むさ苦しい中年ばかりの聖堂に、不似合いな程に澄んだ声が響き渡った。全ての視線が、半自動的に声の元へと向けられる。

判決を遮った声の主は、青年の隣に佇んでいた真紅の少女である。彼女は大臣席を真っ直ぐに見据えながら、良く通る声で続ける。

「大臣様方。彼に罪状ばかりを押し付けるなんて、一体どの様なおつもりなのでしょうか？

確かに、彼のした事は上手くなかったかもしれません。もっと上手く立ち振る舞えば、塔を壊さずに済んだ可能性もあるでしょう。

ですが大臣様。貴方方は、彼の功績に対する評価をお忘れではありませんか？」

「功績だと？」

「はい」

真紅の少女は迷いの無い声で続ける。

彼女に向けられる視線には非常に冷たい物があったが、少女は物怖じせずに堂々と語った。

「先刻、この国は二体もの守護魔に襲われたのです。

――守護魔。彼らがどれ程に強力な魔人であるのかは、直接その目で確認された文部大臣様ならば良くご存知である事と思われます。それを二体。彼は倒せないまでも、王都から追い払って見せたのです。その功績は、決して過小評価すべき物ではありません」

少女の言を聞いて、法務大臣はアスガルドの方へと視線を送った。資料に目を通しつつ、アスガルドに2、3言何かを確認している。それが終わると、仕切り直す様に咳払いをしながら少女へと向き直った。

「……確かに、危機的状況であった事は認める。

被告人の貢献は、無かったとは言えないだろう。

だが、それが時計塔破壊の罪を軽くする物では無い」

「何故でしょうか？

法務大臣様？　貴方様は時計塔を破壊する事が、敵国の襲撃を容認するよりも王の権威を損なうとでも？」

少女は更に勢い良く詰め寄る。
そして厳粛な面持ちで聞き入っている法務大臣を一瞥した後、その背後で苦虫を噛み潰したような顔をしているアスガルドへと視線を向けた。

「私には塔の破壊よりも、不用意な判断で敵国民に逃亡の機会を与えた者の行為の方が遥かに重罪であると考えます。そもそもです。確かにあの時計塔は王都のシンボルではありましたが、魔導研究所や王宮に比べれば遥かに歴史が浅く、その破壊は器物破損の域をでる物ではありません。
……それとも大臣様。貴方方はあの時計塔に、一歴史有る塔よりも価値の有る物でもお忘れになったのでしょうか？」

「この痴れ者があっ？」

少女が揶揄するかの様に尋ねた瞬間、アスガルドは席を立ちながら怒声を上げた。吊られる様に何人かの貴族も立ち上がり始め、疎ましげな視線が少女へと投げかけられる。

「アルテミア・クラリス？　貴様はこの場を何と心得るか？　本来であれば、神聖なる審問会の場に、貴様の如き卑しき者など立ち入ることすらも許されんのだぞ？　それを戯言で会の進行を乱した挙句、下らぬ妄想で我らを侮辱するとは？　恥を知れえっ？」

アスガルドの叱責を皮切りに、周囲の貴族や大臣達からも罵声が巻き起こった。そこには少女の主張に対する反論のみで無く、少女の人格そのものを否定する様な、聞くに耐えない罵詈雑言まで含まれている。少女に向けられるのは侮蔑と卑下。中には溝鼠や蛆を見る様な、向けられただけでいたたまれなくなる様な視線もあった。

「雑種の魔導師風情が、恥を知れ？」
「貴様の様な汚らわしい鼠が、どの面を下げて我ら貴族に意見するか？」
「小蝿は外に集るが似合いだろう？　早々に王都から立ち去り、最果ての丘へと下るがいい？」

貴族達からの野次は止まない。
蔑む様な彼らの視線は、青年が嫌悪を通り越して吐き気を覚える程であった。少女は肩を震わせている。俯いたその顔は、帽子の鍔に隠されてよく伺えない。だが青年は、真紅の少女が悔し気に下唇を噛みながら、強く拳を握りしめてるのを見た。

「……穏やかじゃないな」

青年は独り言の様に呟いた。
視線は大臣席に。しかし向けられる相貌の温度は、大臣達が少女に向ける物よりも数割増しで尚低い。少女の前に立つ様にして歩み出た彼に、その場の全ての視線が収束する。

青年は、アスガルドを真っ直ぐに見据えた。
人間の全てを嫌悪する氷の瞳が、冷徹に文部大臣の姿を映す。何か反論があるのだろう。青年はアスガルドに指を突き付けながら、その口を今にも開こうとし――。

「……」

――何故か、青年はポカンと目を見開いて、顎に手を当てながら考え込み始めた。

「……なんて言ったか。
確かナントカルド……ナントカルド……」

……どうやら青年は、大臣の名前を呼ぼうとしているらしい。だが、悲しいかな。この青年は、ヒトの名前を3音節以上覚えられない。名前が呼べず、早速出鼻を挫かれた形である。
青年は思い返す様に何かを呟いている。
その彼の呟きをどう受け止めたのか。
彼に収束する全ての視線は、彼が発する言葉を聞き逃すまいと沈黙し、全ての人間が彼の存在に意識を向けていた。

「……ああ、そうだ」

思い出したらしい。
青年はアスガルドの頭部をまじまじと見ながら手を拍ち、不敵に微笑みながら反論を述べ始めた。

「“カツラルド”文部大臣。
貴方に一つ、確認したい事があります」

「「「……」」」

――空気が、凍った。

「……ん。あれ、どうしたんスか？」

青年は首を傾げている。

おそらくは、まだ反論も述べていないのに沈黙した彼らの空気が気になったのだろう。心底不思議そうに疑問符を浮かべ、辺りをキョロキョロと見回している。そんな彼の視線の先にいる貴族達。ある者は青くなり、ある者は必死で笑いを堪え、そしてまたある者は、顔をタコの様に真っ赤にしながら青年を睨み付けていた。

「貴様？　貴様ぁああ？
こここ、高貴なるこのワシに向かって、なっ、何という暴言を？」

「……罪状に審問会侮辱罪を追加する」

火山活動の様に喚き立てる文部大臣と、淡々と青年の罪状に新たな条文を追加する法務大臣。そんな彼らの態度を受けて、尚も青年は、心底不思議そうに次の爆弾を投下した。

「何故でしょうか。私はまだ、カツラルド文部大臣の行いについては何も言及しては……ムグッ？」

「……シン。お願いだからちょっと黙ってて」

続きの言葉を言おうとした瞬間、青年の口には何かが突っ込まれた。ゴツゴツしていて硬い感触と、口腔に広がる錆びた鉄みたいな味。その感覚から青年は、どうやら少女に、大きめの金属塊みたい

な物を突っ込まれたらしいと判断した。大方、先刻瓦礫の山に埋まった時に、帽子やローブの中にでも入り込んでいた破片なのだろう。

「話を戻しましょう。
彼の処遇についてですが……」

「それならばもう決まっていよう。
独居房に放り込み、そこで永久労働だ」

少女と法務大臣が、何かを話し込んでいる。
しかし今の青年には、そんな事を気に留める余裕などありはしなかった。

「ムグッ……？　グッ……？」

――苦しい。
呼吸困難に陥る程の息苦しさに涙が滲む。まるで野球ボールやリンゴが、歯列の内側に丸ごと詰め込まれている様な感覚。アダマス鉱は内蔵魔力量によって体積が変わる金属である。これが塔の破片であるとするのならば、おそらく少女は、詰め込んだ瞬間にソレを膨張させて抜けなくなる様に細工したに違いない。何という手の込んだ拷問だろうか。

「独居房ですと？　何を甘い事を？
此奴にはたった今、このワシに対する侮辱罪が追加されたではありませぬか？
こんな無礼な生き物には、懲役させる価値も無い？

さっさと家畜にでもその地位を落とすべきなのです？」

「な、何を勝手な事を言っておられるのですか？
彼はまだ、この世界の名前に慣れていないだけなんです？　大臣様のお名前なら、今夜にでも１００回復唱させて覚えさせますので、それでこの場は放免にすればいいではありませんか？」

周囲の会話が遠くなる。
酸素不足と異物感に何度も嘔吐くが、口が塞がっている為にそれすらも許されない。舌が圧される強烈な違和感に、不快感を通り越して気が狂いそうになる。

「ハン、何を悠長な事を言っておるのだ？
高貴なるこのワシの名を覚えられなかったのだぞ？
それだけでも万死に値する無能さだというのに、此奴は大切な塔まで壊した重罪人だ。機会を与えるだけ愚かしかろう。
ああ、そうだなぁ。異存があるのならば、貴様も仲良く家畜に落としてやろうか？　貴様の如き銀蝿には、さぞお似合いな地位であろう」

「だ、大臣様――ああもう？　あんたどこまで性格悪いのよ？　息吸ってるだけで嫌味が漏れる生き物の癖に、人様に対して侮辱罪？
家畜みたいな体型して、人を家畜にするとかギャグでも三流よ？」

会話の内容は無視して、青年は現状を打破する手立てを考える。
口の中身は、おそらくアダマス鉱。所持している不死鳥の羽根ペンを使えば、確か成形は可能な筈だ。だが悲しいかな、青年はアダマ

ス鉱を膨張させて、槍を作る変形しかやり方を知らない。無論、口の中なんかで使ったら大惨事である。

「ハハハッ？　売女め？　とうとう馬脚を現したな？
貴様の如き品性に欠けた賤民は、やはり家畜が似合いだ？
なんなら5番街の富裕館にでも飼われてみるか？　連中なら貴様の様な銀蝿でも、多少はましな性奴に調教してくれそうだしなあ？」

「～～～～っ？
――だ、ダイジンサマ。
お戯れは、そのくらいに、していただけませんか？
先程のは、場を…和ませようと、冗談を述べただけでして。この私が、高貴なる貴方様を、侮辱……などする筈が無いではありませんか」

涙で歪んだ世界に、砕けそうなくらい奥歯を噛み締めている少女が映った気がしたが、青年には気にしている暇など無かった。不死鳥の羽根ペンが使えない以上、方法は一つだけだ。つまりは無理矢理に指を入れて、力尽くで破片を引っ張り出す――。

青年は上を向き、顎が良く開く様な体勢を作りながら、奇声をくぐもらせつつ口に手を突っ込んだ。

「ははは？　そうか、冗談か？　それは良かった？
ワシの言葉には何一つ冗談など無いから安心するがいい？　そもそも貴族出身者でも無い貴様が、歴史ある魔導研究所の所長職に就いておる事自体、王権に対する許し難い侮辱なのだ？　そうだなぁ

？　これを機に、元の身分に相応しい身の振り方を考えるのも悪くはな――」

大臣の嫌味は、最後までこの世界に産まれる事は無かった。

「――っし？　抜けた？」

カポッという音と共に、青年が歓声を上げる。

彼は楽になった呼吸に空気の美味しさを噛み締めながら、深呼吸を二度三度と繰り返した。滲んだ涙をボロボロの白衣の袖で拭き、生き返った心地に安堵する。

「アル、口を塞ぐにも方法があるだろう？　そもそも黙らせたいのならば、口で言ってくれればいいじゃないか？　口より先に手が出るのは、君の悪い癖だと――」

言いかけて、青年はその言葉を切った。

自らの隣にいる少女。

彼女が何故か蒼白な表情をしながら、オバケでも見た様な顔で、大臣席を指差していたからである。辺りの貴族達も卒倒する様に顔色を失い、信じられないモノを見る様な視線で青年を睨んでいる。

「……シン。あんた、ナニしてんの？」

「は？」

言われて、少女の指先を追う。

正面の大臣席には、最前列に法務大臣。少女の指先は、どうやらその隣を示している様だ。更にそちらの方へと目線移す。

「……」

そこには、文部大臣アスガルドが居た。

大臣は何かを言い掛けた体勢のまま、何故か顔に石つぶてみたいなモノを減り込ませて固まっている。

……頭には、カツラが無かった。

おそらく、石つぶてが当たった衝撃で飛んだのだろう。顔から問題のブツが剥がれると、ゴロリ、という虚しい音が、沈黙が支配する聖堂にイヤに大きく響き渡った。どうでもいいが、なんか、物凄く覚えがある大きさの石つぶてだった。

青年は、視線を右手に落とす。

口腔の障害物を取り除き、今現在ソレを持っている筈の右手を見る。

今現在ソレを持っている筈なのに、矢鱈と軽い右手をまじまじと観察する。

「……」

コレは、まさか……。

「……抜けた？」

状況を理解した。
どうやら石つぶてを口から引っこ抜いた際、勢い余って手からすっぽ抜けたらしい。要するに、それが運悪く、文部大臣の顔面へと直撃したのだ。

「……シン。あんた、ナニしてんの？」

壊れたプレイヤーみたいな少女のリピートが、矢鱈と良く耳に残った。

「フハ？　フハハハハァァッッ？
見ましたか皆様？　見ましたか法務大臣殿っ？
この者はあろうことか、神聖なる審問会で暴力を？　暴力を振るったのですぞ？　こんな危険で野蛮な生き物は、サッサと首輪でも付けて奴隷にでもするのが相応しい処遇でありましょう？」

「いや、別に悪気とかは無かったんスけど。
いや、本当に。全く」

努めて淡々とした青年の弁明。
そんな事には聞く耳持たず、アスガルドは真っ赤になった顔で、壊れた笑みを浮かべながら聖堂中に叫び散らす。カツラの吹き飛んだその頭は、まるでトンスラの様な見事な河童であった。

「ああ、そうだ？　もっと早くそうしておくべきだったのだ？　何しろ斯様な赤ばみ溝鼠に呼ばれた魔人殿ですものなあ？　放任して

おけば、直ぐに問題を起すのは道理であった？　よし、決まりだ？
貴様達はたった今より、このワシの奴隷としてこき使ってやる？
このワシが情けを掛けてやるのだ、有難く――ヒャベバァ？」

アスガルドがナニカを言い終わる前である。
突然として飛来した石つぶてが、再び彼の顔面に減り込んでいた。

「……アル？」

青年が、目を伏せながら少女に問う。
少女は見事な投球フォームを経て、完璧なフォロースルーをしながら右手を下げていた。
なるほど。ローブに入っていた瓦礫は、アレ1つでは無かったらしい。

「……ゴメン。
あまりにもウザいから、つい……」

「牢ォにぶち込めェェエエエ？
此奴らに懲役……、いや死刑？　死刑をぉぉおおお？」

発狂せんばかりに憤慨するアスガルド。
貴族用の豪奢な椅子を投げようとしたところを、隣にいた貴族達に宥められていた。
青年も何やら命の危機を感じた為、宥める声に参加しようと声を張る。

「落ち着いてくださいカツラルド大臣！！」

「殺ォォォオオス？

殺ォォォォオオオオスッ？」

「何故だ？　何故あのおっさんは怒るんだ？」

逆効果であった。

何故大臣がそれ程までに憤慨しているのか、青年には終ぞ理解出来なかった。

審問会は既に混沌としている。

法務大臣が叫ぶ声もアスガルドの罵声に掻き消され、周囲の貴族達も唖然としたままに硬直して動かない。既にこの場の混乱は、何人たりとも収束出来ない域に達しようとしていた。

「あ、アル？　何とかしてくれ？
君があんなモノ投げるからこうなったんだろ？」

「あ、あんたが先にあんなの投げるから、つい手が滑ったんじゃない？　あたしだって、いつもはあのくらいのイヤミ我慢してるのよ？」

「アレは事故だったと言っているだろ？
大体？　元はと言えば君がオレの口にあんなモノ突っ込むからあなったんじゃないか？」

「元はと言えば？　あんたがアイツの名前変な風に間違えるからでしょうが？　ナニよカツラルドって？　アイツの名前はアスガルド？　明らかにワザとじゃない？」

「音が似てるから言い間違えただけだろ？

大体、名は体を表すって言うじゃないか？
あまりにもカツラのイメージが強すぎたから口が滑ったんだ？」

「はぁ？　アスガルドとカツラルドって、どこがどう似た発音だって言うのよ？　信じられない？　あんたどういう耳してるワケ？
あの頭で名前がカツラルドだったら、いっそ清々しいわよ？」

「ホアギャァアアア？」

「あ、アスガルド文部大臣？
神聖なる審問会で剣を抜くとは何事か？
衛兵？　衛兵はナニをしておるか？」

「君こそ忘れたのか？
オレの耳には、君たちの言葉がオレの世界の言葉に翻訳されて聞こえてるんだぞ？　あのハゲの名前は、こっちの発音に変換させるとカツラと極めて近くなるって事だろう？　そのくらい配慮してくれ？」

「配慮するのはあんたの方でしょ？　アイツがハゲなのは誰が見ても明らかなんだから？　発音が似てるんなら尚更気をつけなきゃダメに決まってるじゃない？」

「ブロォオオアアアッ？」

「衛兵？　衛兵？　こっちだ早く来い？
さっさとそこの2人とこちらの……違う？　それは魔獣では無くアスガルド文部大臣だ？　少々変貌しておるが決して傷付け……」

「あ〜っ？　もうっ？

あんたらうるさい？　燃えろ？」

「「「ぐぁあああああっっ？」」」

「衛兵？　衛兵っ？
あ、アルテミア・クラリスよ？
貴様神聖なる審問会で魔術行使などと正気……ってアスガルド文部大臣？　青筋が切れて血を噴いておりますぞ？　どうか落ち着いて……」

「ハゲハゲ言うなバカッ？
カツラルドだって隠してるつもりなんだから？　黙って気付かないフリしてあげるのが優しさじゃない？」

「待て？　今君はカツラハゲ大臣を呼び捨てにしたぞ？　それは名前を間違えるのと同じくらい不敬じゃないのか？」

「あんたこそ？　いつになったら覚えるのよ？
何度も言ってるように？　アイツの名前はカツラルド……ってアレ？」

「Ｇｙｅｅａａｈｈｈｈｈｈｈａｈａｈａｈａｈａｈａａ？」

「静粛に？　静粛にっ？
アスガルド文部大臣？　お願いですからせめて人語を……というかお願い誰か止めてもうイヤァァアアっ？」

巻き起こる罵声と奇声の嵐。
時折声に混じって魔術や椅子までが聖堂を飛び交い、審問会は阿

鼻叫喚の地獄絵図へと変貌していた。貴族達は逃げる事も出来ずに椅子の下に伏せて隠れ、駆け込んだ衛兵は乱舞する火球によって聖堂に踏み込んだ瞬間に討ち取られていく。

そう。この場は既にこの世の地獄。

治め得るのは闇魔か仏のみであろう。

――だからきっと、その存在はそのどちらかであったに違いない。

「おやおや。随分とお困りのようじゃのぉ」

「――――――？」

振り向いた。

突如として聞こえた嗄れ声に思考は止まり、青年は条件反射の様に背後へとその視線を向けた。

青年だけでは無い。真紅の少々や法務大臣。怒りに我を忘れていたアスガルドどころか雪崩れ込んで来た衛兵達まで、まるで申し合わせたかの様に、全ての視線が突如として現れた声の元に向けられる。

視線の先には老人が居た。

この嵐の様な混乱の中を、一体どの様に通過したのか。

薄汚れたボロを来たその人物は、足音も気配も何一つ発さぬままに、まるで背後霊の如く青年の後ろに立っていたのである。その老人の在り方は、それその物がまるで魔法の様であった。

審問会の空気は、一瞬にして凍り付いていた。

突如として会場の中心へと現れた老人。その姿に全ての人間は驚愕し、顔色を失いながら呆気にとられている。奇声を上げていた法務大臣やアスガルドでさえも、老人の姿を認めるなり顔色を無くし、ただ無言のままにその姿に見入っていた。老人の一言は、それだけで聖堂の空気を一変させてしまったのである。

その不可思議な沈黙の中。

青年はそれを実現した魔術師の姿をその目で確認すると、その老人が目の前にいる理由に思いを馳せて溜息を吐いた。

「……魔荷屋の爺さんじゃないか。

言っておくが、金ならまだ払えないぞ？

見ての通り、今はそれどころじゃ……ってかあんた、よくここに入れて貰えたな」

老人の姿を、果たしてどう受け止めたのだろうか。

青年は取引の時と変わらぬ口調で話しながら、明後日の方向を向いて頭を掻いた。

青年の視線の先には、黒いローブの少女の姿。

彼女は青年の呟きを聞くと驚きに目を見張り、次の瞬間には“やられた”という様な表情を浮かべて溜息を吐いた。

「……なるほどね。

コイツがどこから不死鳥の羽根ペンなんか持って来たのか不思議でしょうがなかったけど、そういう事だったわけ」

「……？

アル。この爺さんと知り合いなのか？」

眉を潜めながら舌打ちする少女。
青年は少女と老人の姿を交互に見比べる。
そして老人がその口髭を誤魔化す様に引っ張ったのを見て、泳ぐ視線を老人へと止めた。

「ほほほ。まあ訝りなさるな、若いの。
実はのぉ、魔荷屋は副業で、本職はチョイと別にあるんじゃよ」

「……へ？」

首を傾げる青年。彼が思案している間に、聖堂にはガタガタという椅子の音が響き始めていた。それに気付いて青年が周囲を見回した時には、既に全ての貴族や大臣が席を立ち、床に跪いて礼をしていた。驚くべき事に真紅の少女でさえも、丁寧に床に片膝を着き、行儀良く浮浪の老人に傅いている。

「……漸くお戻りになられたのですね。国王陛下」

困惑し、目を見開く青年。
アスガルドの意味不明な言葉だけが、理解不能なままに彼の頭の中に響いていた。

「……。
……へ？」

一一一一

審問の間から追い出され、再び謁見の間へと通された頃には、陽は既にとっぷりと暮れていた。
砕いた真珠を散りばめた様な白銀の星々と、漆黒の夜空に浮かぶ紅い月。穏やかな月光が窓から差し込み、聖堂は幻想的な煌めきに包まれている。

その最奥に設置された王座。
昼は無人であった豪奢な椅子に、今宵は1人の老人の姿があった。ギリシャ神話の最高神を思わせる純白のローブに身を包み、入浴により洗浄された口髭は、穢れとは無縁に老人の威厳を周囲に知らせる。軽いカールの掛かった銀髪は老人の灼眼と強いコントラストとなり、聖堂を照らす燭台の灯に透明感のある輝きを得ていた。

名をヘリアス・ノルマンド・フォン・プラティヘイム。国王とは思えぬ程に奔放な気質を持ち、国民の前には殆ど姿を現さぬこの老人こそが、魔術大国・銀の国（プラティヘイム）を統べる“魔導王”である。

その王座の前。
老人の視線を正面から受け止め、国王を囲む数多の貴族達に見下ろされながら、顔を寄せ合って何事かを囁き合う若い男女の姿があった。

「……どういう事なんだよ、アル」

「……どういう事なのか聞きたいのはこっちよ。
あんたこそ、どういう経緯で国王様と知り合いになったわけ？」

「だから、そこが先ずおかしいだろ。

あんな性根の腐った浮浪者が国王だって？
この国の統治はどうなってるんだよ」

「アレは例外中の例外よ。
国王の浮浪癖は病気なの。
大臣達も誰も咎めないの。
だってあの王様、居なくなっても誰も困らないんだもん」

「……この国はもうダメだな」

幻様に煌めく聖堂に、燭台の灯り。
そして小声で何かを囁き合う男女。
……見様によってはロマンチックなシチュエーションなのだろうが、彼らの会話の内容には色も素っ気もありはしなかった。

そんな彼らをよそに、大臣席から1人の人影が歩み出る。

「国王陛下？　お戻りになられて早々のところ申し訳ございません？　ご無礼を承知で、私の箴言をお聞き願いたい」

大きな音源が存在しなかった聖堂に、張り上げる様な声が響き渡った。文部大臣アスガルドは国王の前に跪くと、頭を垂れながら発言の許可を貰う。
――どうでもいいが、カツラは既に被り直していた。

「本日、我が国は敵国による襲撃を受けました。
その折、ここに居るアサヒ　シンヤ特務教諭は、あろう事か塔を？　王都のシンボルたる時計塔を？　敵国民の襲撃に託(かこつ)けて不必要にも破壊したのです？」

「……いや。
なんかさっきより酷い話になってないか？」

「黙れぇぇぇえええッ？
最早貴様に発言権などナイワァアアアッッ？」

……妖怪の様な形相に気圧されて、青年は取り敢えず黙る事にした。

アスガルドは、表情を作ってから国王に向き直り、続ける。

「此奴のした事は、立派な反逆罪ですぞ？
……いや。いや？　それだけでは御座いませぬ？
此奴が来た当日に2体もの守護魔が現れるなどと、こんな事態が偶然の筈が無い？
はっ？　そっ、そうだ？　きっと此奴は異世界人のフリをした魔界の悪魔なのです？　そうだそうに違いありません？　大魔導アルテミア・クラリスは守護魔を喚んだと虚言を申し、我らを滅ぼすべく悪魔を用いて呪いを掛けておるのです？
国王陛下ぁ？　処分をっ？　一刻も早く此奴らに処分を？　これ以上判断が遅れては、国がとんでもないコトになりますぞ？」

目を白黒させながら、アスガルドは半狂乱になって喚き散らしていた。呆気に取られる青年と、呆れ顔で溜息を吐く少女。そんな彼らを好々爺めいた笑みで眺めながら、銀髪の老人はふむふむと唸っていた。

「塔を壊したか。
一体どこの誰があんなことをしでかしたのかと思っておったが、まさかお前さんとはなぁ。いやいや、流石のワシにも予測できんかったなぁ。しかしその様な大事、果たしてどう処分したものか」

老人はその灼眼で、白衣の青年の全身を余さず観察していた。流石にアスガルドの主張を全て真に受けた訳では無かったようだが、それでも老人は、意地の悪い笑みを浮かべながら、値踏みする様に彼を眺め回している。老人の性根の曲がり具合を知っていた青年は、その視線だけで生きた心地がしなかった。

「よし、決めたぞ」

やがて老人は、意を決した様に手を叩き――。

「大負けに負けて、今回は赦す？」

「「は？」」

疑問符が重なった。

白衣の青年とアスガルドのみで無く、真紅の少女や貴族達も含め、全ての人間がポカン口を開けて言葉を失っていた。

「ここ、国王陛下？

な、何を血迷った事を仰いますか？

此奴らはその発言？　行動？　否、存在自体が王権を脅かす不敬の塊なのですぞ？　此奴らを？　此奴らを放免などにしては？　とても国民に示しがつきませぬっ？」

憤るアスガルド。

老人は果たして聞いているのか、ほうほうと頷きながら笑ってい

た。

「しかし、そうは言ってものぉ。
貴族でも無い若者の敬語に、一々目くじらを立てるのもなぁ」

「不敬に身分など関係ありませぬ？
それに此奴らは、曲がりなりにも由緒正しき王宮へと足を踏み入れる事を許された身分？　例え平民下民であろうとも、貴族と同等の権威を持ち、相応の責任を負うべき立場にあるのです？」

「いや、あんた。
さっきと言ってる事全然違……」

「黙れぇえええッッ？
貴様が喋ると呪いが掛かるわこの悪魔めぇえええっっ？
――コホン？　そ、それにですぞ？　仮に塔の破壊を赦すにしてもです？　私の調査によりますと、この者はその手段として、かの不死鳥の羽根ペンを用いたとのことです？　あれは一級危険魔装に指定されており、許可無き者は使用どころかその所持すらも許されてはおりませぬ？　そうです？　この下賤な輩は今現在もそれを所持しており、その違法行為は王権を著しく損なう物であります？　ならばこの者の処分は免れ……いや、それだけではありません？　守護魔の不法行為を見逃した召喚主アルテミア、及び身分を無視して魔装を売り捌いた、どこの馬の骨とも知らぬ許し難い輩まで探しだし、一刻も早く牢へとぶち込んでやるべきなのです？」

「……あ。終わった」

この時青年は、初めて人が壮大なる墓穴を掘る瞬間を目撃した。

「そうか。彼に魔装を売り付けた者は牢獄行きか。
まあ仕方ないのかのぉ」

「そ、そうです？　そうなのです？　そんな身分も分からぬ大馬鹿者は、太陽の下を歩くことすらも許されるべきではありません？　一刻も早く探し出し、相応の処罰を与えて後悔させてやらねばなるませぬ？」

「しかし、困ったのぉ。
一応、彼に魔装を売りつけたのはワシなんじゃが」

「そうですか？　まさか国王陛下が馬の骨だとは思いませんでした？　ではさっさと牢獄にお入りになって下さ……ってなんですと？」

アスガルドの弁舌が止まる。
茹でダコの様になっていた頭は急速に萎れ、瞬く間に真っ青な青瓢箪になった。口は顎が外れたカバの様にガバッと開けられ、舌は脱水症のヘビの様に飛び出ている。

「……やっぱりね」

少女の納得した様な声だけが、妙に大きく聞こえた気がした。

「し、ししし、失礼いたしました？
こ、ここ国王陛下がお認めになられたのであれば、彼が魔装を所持する事については何の問題も御座いませぬ？　それは法にも明文化されておる事で御座います？
し、しかし修繕費は？　塔の修繕費はどうなさるおつもりなのです？　あれ程の塔を復旧させるには、相応に税を引き上げねばならぬでしょう？　此奴を処罰せねば、国民の反感は免れませぬぞ？」

「ほほほ。実はのぉ、赦して良いと言った一番の理由はそこなんじゃよ」

最後の砦の様に食い下がるアスガルド。

しかし国王の返事は、あくまでも軽い物だった。

「壊れた時計塔の下から、これが中々に面白い物が見つかってのぉ。いやいや、どうやら暫くは財政に余裕が出そうでなぁ。彼には処罰どころか、寧ろ勲章を与えたいくらいなのじゃが」

「こ、国王陛下……？

ま、まさか、それは……」

そう言ったきり、アスガルドは完全に沈黙した。

国王の後ろに佇む貴族からも、驚愕した様なざわめきが大きく聞こえて来る。

「……どうしたんだ？」

その様子が気になった青年は、何となく少女へと話を振ってみる事にした。

少女は頭を抱えながら、国家の恥を見る様な目で大臣達を見据えていた。

「……知らない。

埋蔵金でも埋まってたんじゃない？」

結局アスガルドを中心とした大臣勢は国王の鶴の一声で沈黙し、青年と少女は、今回の件について一切のお咎めが無いという信じら

れない事態が発生したのであった。

――――

「そうだ。二人共、今日は昼も食べておらんのだろう？　今宵はもう遅い。折角じゃし、夕食でも食べていかんかね？」

罪状の審議が終わった謁見の間。

隣に控えていた衛兵から時間を聞いたヘリアス王は、口髭を弄りながらそんな提案を示した。

「ゆ、夕食ですと？」

流石に今の提案は聞き流せなかったのだろう。放心していた、アスガルドを始めとした大臣達は瞬時に我に帰って色めき立ち、口々に制止の言葉を発し始めた。

「なりません？　なりませんぞ？　国王陛下？

此奴らの如き下賤な者を王宮に上げるだけでも汚らわしき事態であるというのに、更に王族の晩餐に参列させるなどと……」

「シン、どうする？

あんたがいいなら、別に食べて行ってもいいけど」

「そうだな……」

「……って聞け貴様らぁあ？

貴族が発言中であるぞぉおおお？」

アスガルドの奇声は無視しつつ、国王の提案を吟味する青年。内容を理解した後、彼は少女に首を振った。その表情には、何か記憶を辿る様な色が明確に含まれている。

青年は国王へと向き直ると、確かめる様な表情で言葉を発した。

「……えーと。

国王陛下、でいいんスよね？」

「ほほほ。楽にするがよい。

お前さんの呼びたい様に呼べばいいさ」

楽に呼べばいいと言うので、一瞬“魔荷屋の爺さん”と言いかけた青年ではあったが、アスガルドが深海魚みたいな目付きで睨んで来たので思い留まった。

「折角のお心遣い悼みいるのですが、出来ればお断りさせては戴けないでしょうか。

今朝方、私は彼女にこの世界の朝食を賜りました。ですがどうにも、私の身体には受け付けない様でして……」

青年がそう発言した瞬間である。

突如として、周囲のざわめきは一層濃い物になった。

不思議に思って見回す青年。

貴族は皆蒼白になってこちらを見据え、吐き気を堪える様に口元に手を当てたり頭を掻き毟ったりしている。中には信じられないモノを見る目や、完全に異次元の生命体を見る様な視線も混じっていた。あのアスガルドや国王でさえも、脂汗を流しながら、まるでヒ素を食べる細菌を発見した生物学者の様な目でこちらを見ていた。

やがてヘリアス王は、痙攣したかの様にガチガチと歯を鳴らしながらも、意を決したかの様に一言だけ問うた。

「アルテミアの、料理を……。食べたのか……？」

「……アル。後で話がある」

明後日の方向を見ながら頬を掻いている少女を見据えつつ、青年はただ一言だけ、抑揚の無い声でそう告げた。

結局青年は、晩餐の申し出を受ける事にした。

この世界の“普通の”料理を摂取できるのかどうかを確認したかったし、それに異世界の宮廷料理とやらにも少々興味があったからである。本来、新しい料理の発見は、新しい星の発見よりも人々の幸せに貢献するのだ。

流石に土埃で汚れた白衣では晩餐会には参列出来なかったらしく、青年は宝石着きのローブの様な衣装を借り受ける事になった。聞くに、それはこの世界の魔導師の正装なのだという。衣服は綺麗に修繕し、夕食が終わる頃には洗った状態で渡してくれるというのだから、使用人はきっと大忙しだろう。

日本の一般家庭の部屋よりも容積がありそうなシャンデリアが飾られた、豪奢なサロン。その末席に案内された青年が暫く待っていると、やがて見た事も無い程に可憐な少女が隣に座った。

真紅の髪に良く映える、絹糸で編んだ様な白いドレス。首元に飾られた宝石が、彼女の芸術的なまでに白い肌をさらに艶やかに魅せている。

たった1日で見慣れたローブとかけ離れたその出で立ちは、一瞬それが誰なのか分からなくなる程に可憐に過ぎた。暫し呼吸を忘れ、何一つ言葉を発せぬままに見入っていた青年だったが、少女の不機嫌そうなセリフを聞いて取り繕う様に何かを言った……と彼は思う。実際何を言ったのか、彼には覚えている余裕などなかった。ただ、昼間にローブが1番似合うと言った事を鮮烈に後悔した事だけは記憶している。

……要するに本当に美しい宝石というのは、どの様な装飾を繋いでも、犯罪的なまでに人を惹きつけるのである。

本当にこの世界の料理が食べられるのか。否、それ以前に今の少女の隣で料理の味など分かるのかと暫し不安になっていた青年ではあったが、偉そうな貴族達が長々と謝辞を述べてくれたお陰で、何とか味を判別するくらいの機能は取り戻す事が出来た。

料理は非常に美味だった。

見覚えのあるスープから、見た事も無い程に大きな果物。ローストチキンの様な味がする植物には少々面食らったものの、どれもが本当に、信じ難い程に美味であった。思えば料理で身心共に満たされる体験などという物は、青年にとっていつぶりであっただろうか。

……だが正直に言えば、彼の内心は少々複雑であった。

この料理が美味ければ美味い程、今朝方食べた少女の料理の異次元な刺激が誇張され、彼女の味覚の異常性をまざまざと認識させられるのである。

陛下曰く、

「ほほほ、まあ仕方ないだろう。何しろ彼女のアレは、調理では無く調合だ。まあ身体には良さそうなんで、月に一度くらいは、大臣共々振舞って貰う事にしておるのだがなぁ」

……とのことだ。

無論。爺さんには一度、国を上げて味覚の存在意義を確かめる様に打診しておいた。これも地球の知識を供給するという、守護魔の仕事の1つだろう、と、青年は何やらいい事をしたつもりになってみたりする。

何はともあれ、これからも少女の家で過ごすのだと仮定した場合、彼女の料理にはなんらかの対策を取らねばならないだろうと彼は嘆息した。

食事は厳かながらも粛々と進み、食後に全員で“ポーション”なる嗜好飲料を飲んでいた頃、時計を見た王様は唐突に口を開いた。

「おやおや、しまったのぉ。
どうやら門限を過ぎてしまったようじゃ」

どうやら、この城と王都の防壁には門限があるらしかった。まあ、こんな敵国民が跋扈している様な世界であれば、夜に警戒して門を閉めるのは当然であると言えるだろう。そうでなくては、何の為の防壁なのか分かった物では無い。

「仕方ない。
アルテミア。それからシンヤ殿。
今夜は城に泊まっていきなさいな」

「国王陛下ぁ？」

これに口を挟んだのは、矢張り文部大臣アスガルドであった。晩

餐会にも当然の様に出席していた大臣は、矢張り当然の様に国王の隣に陣取っており、当然の様に2人の“異分子”への対応を箴言し始める。

「神聖なる王宮を何と心得ておられるのですか？
此奴らの様な凡俗は、野宿でもなんでもさせれば良いのです？」

「しかしのぉ、今宵は一応、客人として招いておるワケじゃしなぁ。客人に野宿などさせては、まあ王族の名折れじゃろうて」

「その様な事は決して御座いませぬ？
此奴らの様な輩は、我らが王宮の様な高貴な場所では十分な休息が取れない生き物なのです？　ええ、野宿の方が心が休まるのですから、そうする事こそが客人に対する正しい対応なのです」

「……いや、別にそんな事は無いッスけど」

発言した瞬間、アスガルドが強烈な睨みを効かせて来た為に青年は黙った。まるで親の仇を見る様な目だった。成る程。何故かは分からないが、どうやら相当に嫌われたらしいと青年は納得する。
……いや、青年には本当に理由が分からなかったのではあるが。

国が喚んだ“協力者”と、文部大臣の不仲を悟ったのだろうか。
ヘリアス王は両者の顔をほうほうと見比べたかと思うと、徐に大臣の顔を見つめ、思い付きの様に口を開いた。

「そうさなぁ、アスガルドよ。
折角じゃし、お前さんが彼らに部屋を選んでやってくれんかの？」

「「「は？」」」

三者の声が、重なった。

「お前さんは生粋の貴族じゃからな。王宮を知り尽くしたお前さんなら、まあいい部屋を見繕ろえるじゃろうて。不仲ではお互いに居心地も悪かろう。城の案内でもしながら、彼らと打ち解けるがいい」

「な……こ……お……」

アスガルドは、暫し大口を開けながら青年の顔と国王の顔を交互に見ていた。無論、国王を見る時には赦しを請う仔犬の様な目をし、青年を見る時にはゴキブリを見る害虫駆除業者の様な目をしながら、である。

しかしやがて、国王の表情から、どうやら今の発言に撤回は無いらしいという事実に気が付いた様だ。アスガルドは引き攣った顔で、血走った眼で、充血した歯茎を見せながら、額にビキビキと青筋を立て一一。

「……コチラヘドウゾ。ゴキャクジン」

「「……」」

笑顔で、そう告げた。

一一一一一

「……やけに待遇がいいな、あの王様」

燭台の灯りが照らす、赤絨毯に覆われた城の回廊。
無言で殺気を放ちながら先行するアスガルドの後ろに3歩下がってついて行きながら、朝日　真也は独り呟いた。

この世界に来てこの方、次々と襲う待遇の悪化に苦しめられ続けて来た彼である。初めは自分を優遇してくれる王様に好感度を上げるだけであったが、流石にここに来て少々不気味になってきた様であった。否。あの老人の性根を考えるに、こんな丁重なもてなしがある筈が無い。きっと持ち上げてから崖に蹴り落とし、転がっていく音を肴に酒でも飲むつもに違いない、と。青年は、半ば確信めいた予感でそう感じていた。もしも、いや万が一それ以外の理由が考えられるとしたら、きっとそれは――。

「オレ達、なんか物凄く良い事でもしたのか？」

なるべく前向きな解釈に努めつつ、青年は少女の方へ問いを発した。

「うん。多分ね」

否定されると思っていたのだが、少女の返答は思いの外前向きな物であった。その何かを確信する様な表情に、謁見の間でのヘリアス王の発言と、その時に少女の言った“埋蔵金”という単語が何となく頭を過ったりする。気になったので、青年は少女に先を促した。

「あたしもさっき知ったんだけどさ。
なんか壊れた塔の下から、物凄い額のお金が出てきたんだって。
一応王宮で回収する事になったみたいだけど、なんかソレを巡って、街中の人々は大騒ぎだって話よ？」

「さっき？
さっきっていつ……ああ、そうか」

疑問を持ったところで、青年は少女が遠隔感知の魔術を扱える事を思い出して納得した。そういえば晩餐会前に大臣達のスピーチを聞きながら、何か集中する様な仕草を見せていた気がしたが、おそらくはその時にでも街に探りを入れていたのだろう。

その身をドレスに包もうと、少女の本質はやはり“魔導師”だという事だろうか。国一番の魔導師であるという彼女の手腕に、青年は改めて感心した。

少女は頭を抱えながら更に続ける。

「……前から噂はあったのよ。
時計塔のどこかには、一部の貴族達が横領した税金を溜め込んでる隠し金庫があるって」

「……まあ、言われてみればいかにも、って感じの建物だったよな」

青年は、既に存在しない建物の内部に思いを馳せた。矢鱈と上下が入り組んだ階段に、迷宮の様な各階層。極めつけには、内部をジャングルの様に覆い尽くす本棚の群れときている。階段の汚れ方を見る限りでは利用者も少ない様ではあったし、確かに良からぬ物を隠すには最適の場所であっただろう。

「何度か視察団が入った事もあるんだけど、結局何も見つからなかったらしいから、あたしも都市伝説の類いだと思ってたんだけど……。実際にあったって事は、きっと相当に手の込んだ隠し部屋でも作ってたんでしょうね。まあ流石に塔そのものが壊れたんじゃ、伝説の宝箱も一堪りも無かったみたいだけど……。

……なんでも今回の晩餐会は、全部そのお金で賄ったんだって。塔を再建しても余裕があるくらいバカみたいな金額だったから、暫くは国民にばら撒く様な使い方になるみたい。まあ先ずは、今回の事件で被害が大きかった店とか、民家とかから保障するみたいだけど。

……全く。一体どれだけの貴族が、何十年かけて溜め込んでたんだって話よね」

「……溜息の出る話だな。

でもまあ、要するに全うな金じゃないってわけか。

そんなもんで宴会開くんだから、流石はあの爺さんというか何というか……。

隠してた連中には気の毒だが、自業自得か」

などと言いながら実際に大きな溜息を吐いた青年に、少女は賛同するかの様に頷いた。

「そうそう。あんな額のお金を隠す様なのは、どうせブクブク太ったブタみたいなヤツに決まってるのよ。それで誤魔化せるって思ってるんだから、ほんとにバカっていうか頭が悪いっていうか……。

ま、いい薬になったんじゃない？」

「オレ達の世界じゃ、バカに付ける薬は無いって言うぞ？　その連中も、きっと凄い逆恨みでもしてるんだろうな……。もしかして、あの審問会もそいつらが噛んでたんじゃのか？」

「あはは、まっさか～。

流石にそこまでバカなヤツはいないでしょ。

人様から盗んだお金が没収されたからって、ソレを見つけた人恨んで審問会？

今時、子供でもそんなバカな逆ギレの仕方しないって」

「……まあ、それもそうだな。
相手もいい大人なんだろうし、それが当然だろう。
オレの考え過ぎか」

「そうそう。そうに決まってるって。
横領とかする時点で性根が腐ってるクセに、アタマまでそんなバカなんじゃ、流石にもう人間としてマズイでしょ」

「……」

少女と青年が好き放題な予想を述べていると、前を歩いていた大臣が急に立ち止まった。ゆっくりと振り向く。2人を真っ正面から睨み付けながら、その唇はショック症状でも起した様に震えている。
血走った目。切れそうな青筋。引きつった笑顔がピクピクと痙攣し、お面の様に顔に張り付いている。
アスガルドは――。

「エエ、マッタク、ソノトオリ、デショウナ」

……怖かった。

――――

少女とは部屋の前で別れた。部屋に案内されたのは青年が先であった為、少女の部屋の場所を彼は知らない。それが女性である彼女への配慮だとするのならば、アスガルドも流石は腐っても貴族様といったところであろうか。

「フゥ……」

アスガルドの言は正しかったのかもしれない。

一人で寝るには広すぎるベッド。

心地良過ぎるが故に逆に居心地が悪くなる様なその布地に、身体を横たえた青年は大きくため息を吐いた。

衣服の袖で目を覆いながら、緩やかに思考を回してゆく。瞼の裏を巡るのは、昨夜からまるで嵐の如く襲いかかって来た出来事の数々。今まで深く考えている余裕は無かったが、異世界に来て初めて独りで考える時間を得た今、彼の頭は静かに状況を整理し始めていた。取り留めの無い思考が水泡の様に生まれ、次の瞬間には弾ける様に消えていく。

――セトル・セトラの義。

様々な可能性を持つ異世界から“協力者”を呼び寄せ、国の発展に貢献させるという壮大な拉致計画。

冷静に考えれば、物凄い話ではある。

昨日まで物理学者として常識的な生活を送っていた自分。おそらくはあの大男や少年にも、自分の様に元の世界での生活はあったのだろう。

そんな、この世界とは何の関係も無い存在を6人。一方的に拉致した挙句、生命維持装置という保険を盾に、利用するだけでなく時

には殺し合わせる。もしも自分が発狂する程に怒り狂ったとしたらそれは当然であり、事実自分にはそうする権利があるのだと、少なくとも彼の感情の表面だけは訴え続けている。

「……」

そこまで考えたところで、青年は自らの思考に違和感を感じた。確かに、怒りはある。とんでもない事に巻き込まれたな、などという気持ちも、当然の如く持ち合わせてはいる。だが、青年にはどうにも、自分が本心からそう思っているようには感じられなかったのだ。

微睡む様な思考で、暫し思案する。幸か不幸か、少し考えると、その理由は拍子抜けする程あっさりと見つかった。

魔法使いだという少女。
命を握られているという自分。
化け物染みた、異世界人達との殺し合い。
……何の事は無い。
要するに、全てがあまりにも突拍子もない事態に過ぎるが故に、全く現実感が湧かないのである。

まるで、映画でも見ている様な感覚。
登場人物が危険に晒されれば緊張もするだろうし、危機感も感じるだろう。でもそれは、どこか他人事の様な、余りにも希薄な現実感に過ぎないのだ。

きっと人間とは、本質的にそういうモノなのだろう。あまりにも現実離れした危機に出くわすと、それが自分自身の事として考えら

れない。鮮烈過ぎる危機感は、その本来の味を薄めてしまうのだ。例え先刻、実際に命を狙われたとしても、である。

「ふぅ……」

ため息を吐きながら上体を起こし、宝石が埋め込まれた窓枠から空を覗く。漆黒の天空には、まるで血の様に紅い満月が煌々と輝いていた。その様に、嫌でもここが異世界なのだという事実を認識させられる。

何となく、自分の頬を叩いてみる。弱すぎたと判断したのか、彼は何度か追加で音を鳴らした。

「……バカか、オレは」

自嘲気味に呟きながら、彼は軽く頭を降った。

夢を見ているかの様な感覚。

余りにも鮮烈で、それゆえに生温い悪夢。

まるで、それが今の現実であると目を覚ますかの様に――。

「お前は今日、殺されかけたんだぞ？」

宵の窓とは天然の黒鏡だ。

窓辺の向こうの世界には、もう1人の自分が写っている。微睡む様なその姿を正面から見据え、彼は警告する様に言い聞かせる。

――殺されかけたのだ。

常識の括りに出来ない、まるで化物の様な連中が、本気で命を狙って来た。剥き出しの殺気。腕を抉る刃の激痛。冷静になって思い出すと、それを現実の物であると認めると、今でも血が凍る様な恐

怖を感じる。

巻き込まれたのだ。化物達の殺し合いに。

他にも数組、ああいう化物達がこの世界には居て、そいつらは間違いなくこちらの命を狙って来るのである。

ならば、現実感が無いなどと言ってはいられない。

夢だなどと思っている暇などありはしない。

そんな余計な事を考えていたら、この悪夢の様な現実から、二度と目を覚ます事は無い。

青年にとっての現実とは、既にそういう世界になったのだ。

考えなくてはならない。

自分に出来る事を。

そして、自分にしか出来ない事を。

「……困難は乗り越えられる者にだけ与えられる、か。

成る程な、オレが喚ばれるワケだ。

――いいだろう。やってやる？」

左手に輝く魔法円を見つめ、一度強く握り閉めた。

倒れこむ様にベッドに沈み、重い瞼を閉じる。

これからのプランをイメージしながら、青年の思考は緩やかに微睡みへと落ちて行った。

一一一一一

獰猛なる氷河帝国・氷の国（フィンブルエンプ）。銀の国の北に隣接するこの国は、年間を通して雪と氷河が支配する極寒の帝国として、その名を世界に知られている。

特に北半球に冬が訪れるこの時期には、地表に育つ作物など有る筈も無く、それどころかそもそも木々や草本といった植物すらも見る事は出来ない。

――よって真っさらな雪原には目印となる物など1つも無く、更に局所に見られるクレバスは訪問者を飲み込む天然の罠と化している。

今やこの帝国は、例え虹の橋（ビフレスト）のシステムなど無かったとしても、一部の特殊な人間以外には十分な陸の孤島になっていると言えるだろう。

そんな地獄の様な光景を横目に、事前に聞いていた安全地帯を走ること半日以上。氷の国自慢の魔犬（ガルム）を飛ばしに飛ばし、少年は漸く帝都へと帰還する事に成功した。出発から数えて丸二日。この瞬間こそが一睡もせず、ろくな食事も摂らずに行った少年の遠征劇の終わりであった。

銀世界を照らす太陽は既に高い。

長い冬の間に降り積もったであろうドカ雪は、帝都に並ぶ急勾配な屋根の住宅群を2階まで埋め、比較的高い建物が乱立している筈の街は、建造物の殆どが1階建ての安屋の様になってしまっている。

雪掻きに精を出す街人もチラホラ見られたが、大半の人間はそれすらも諦めて家に閉じ籠っているようであった。それはつまり、この程度の雪ではこの国の家は潰れやしないという事なのだろう。

「寒っ？　やっぱハンパね～な、この国？

こんなトコに住めるとか、ココの連中って肌腐ってんじゃね～の？　いやマジで」

吹き荒ぶ吹雪（ブリザード）に全身の体毛を逆立てつつ、少年は魔犬で通りを走りながら悪態を吐く。口ではそう言ったものの、実際には今の言葉は、半分以上が冗談であった。

何しろ少年は、既にこの国の人間の肌を知っている。もしも“あの女”の肌を基準にしていいのなら、という前提付きではあるが、少年にはアレが腐っているモノとは到底思えなかったのだ。

……いや仮に、もしもあの旨そうな二の腕とか太腿の肉がこの世界の平均的な腐敗物であるとするのならば、この世界の男どもは毎日屍姦に没頭しているに違いない。勿論少年はこの世界に来てこの方、未だそんなシュールな光景にはお目にかかっていないのだから、少なくとも“あの女”の肌は腐っていないという事なのだろう。

……腐ってるのは、身体では無く趣味の方なのだ。

「……」

自らをこの世界に喚んだ元凶の姿を思い出して、少年は言い知れない悪寒に身震いした。どうにも少年は、“あの女”が生理的に受け付けなかったのだ。いや、少年が思うに、“あの女”に会えば全ての男はそう感じるに違いない。あんなむしゃぶりつきたくなる様な外面で中身が“アレ”なのだから、ホント世の中間違ってると彼は思う。

「ケッ、なんだってんだよ～。
あの金髪ネェちゃんは犯し甲斐ありそうだったってのによぉ、何でおれっちは“アレ”なんだっての」

魔犬の揺れに身を任せながら溜息を吐く。

……しかし、まあ。いくら悪態を吐いてみても、“あの女”が少年の召喚主であるという事実は揺るがないのだ。召喚主、つまりは

“ご主人様”であるのだから、どんなにイヤでも一緒にいないワケにもいかないのである。

というか、これ以上帰りが遅くなると本気でナニされるか分かったもんじゃ無いので、少年は理性と本能に逆らって、帝都の中心に聳える宮殿へと急ぐのであった。

宮殿の外壁へと辿り着く。

クリスタルの装飾が施された外壁には、バカみたいな大きさの上下開閉式の門が設置されており、その両サイドには2人の衛兵が据えられていた。今は冬場である。周囲の民家の埋まり具合から考えて、地面に相当な厚さの雪が積もっているであろう事を考えると、この門は本当はもっとバカなのだろう。

少年は銀の国の防壁を見た時にも思ったが、どうやらこの世界の門やら壁やらは、やたらと大巨人が来訪した時の事を想定し過ぎているらしい。

少年には心底、その辺の理屈が意味不明であったものの、まあデカブツはそれだけで威張り散らせるのが常であるし、これもどうせ、例のイゲンとかタチバとかいうのに関係しているのだろう、くらいに考えていた。

地獄みたいな寒さの中、鼻水1つ垂らさずに仁王立ちしている兵士達を冷やかしつつ、適当に挨拶でもしながら門を開けて貰う。凍り付いたチェーンが軋みながらも重い鉄板を持ち上げ、少年に宮殿内の意匠を見る事を許す。“あの女”にピッタリの、クリアブルーで統一された色彩であった。

衛兵に魔犬の処理を頼みながらタイル張りの床へと歩み乗ると、“動かない空気”による熱循環で温められた空気が、凍り付いた少年の骨髄を緩やかに融かしてくれた。

「……」

……いや。温められた空気とは言っても、それはあくまで外気と比べての話である。宮殿内はコートが脱げない程に寒い。その寒さが“あの女”の趣向である事は重々理解している少年ではあるものの、それでもやはり、この国の風土と“あの女”には反感を覚えずにはいられない少年であった。

一応のところ反感とは説明したが、少年にとってそれは長く抱ける類いの感情では無かった。何故なら少年が自分の思考に浸れたのは、この日はこれが最後になったからである。

少年は、余分な思考など中断せざるを得なかったのだ。

……見覚えのある“女”が、少年の目の前から全力疾走で駆けて来たのだから。

「マ……」

女は何かを呟いた。

可愛らしくフリルスカートの裾を掴みながら疾走し、素晴らしい脚力で間合いを詰めて来る。

やがて女は、その細身な上体を屈めることで両足に溜を作り……。

「マルスきゅ～んっっっ？」

ガバッと、女はフライングボディープレスをかますかの如く宙を舞い、マルスと呼ばれた少年に正面から飛び付いた。

「ゴハッ……？」

女の体重を受け止める事が出来ずに、派手に吹き飛ぶ赤い少年。
衝撃で背負っていた大砲は遠くに飛び、彼は背中を打ち付けながらド派手に床を滑って行く。焼ける様な背中の熱さに奇声を発した少年の身体は、女にボディーボードみたいに乗り回された挙句、閉められた門に頭を打ち付けたところで漸く停止してくれた。

「マルス君だ〜。
ホントにマルス君だぁ。
ううう。モフモフ気持ちいいですよぉ。
モフモフ癒されますよ〜」

頭を打った少年の視界に、チラチラと星が明滅する。
しかし女は一向に止まる気配が無く、少年に強く抱き付いたままに頬擦りしたり、頭をナデナデしたりしている。少年が顔を顰めても、女は尚も止まらず、髪の匂いをクンカクンカしたり尻尾の有無を確かめる様に少年の臀部をサワサワしたりしている。

「——ってフォル？　テメッ？
良い加減離れねェと犯すぞごらぁ？」

ヌイグルミの様な扱いに激怒したのか。
甲高いながらもドスの効いた声が宮殿のエントランスに響き渡る。
瞬間、フォルと呼ばれた女は我に帰ったかの様に目を見開き、“ひゃっ”と小さく呻きながら後方へと飛び退いた。

「きゃぁ〜っ？　ご、ごごご、ゴメンなさい？
だ、だってモフモフだったんで？　犬耳がスゴくモフモフだったんで？　ゴメンなさい許して下さい犯さないで下さいゴメンなさいゴメンなさぃ？」

女はぺたりと座り込みつつ、両手を顔の前で合わせながら懇願する様にペコペコと謝った。少年は漸く、女とまともに向かい合う機会を得る。

フォルは、家庭的な雰囲気の女性であった。

容姿について言及するのであれば、まあ極端な美人というワケでは無いだろう。決してブスとか醜いとかいうワケでは無いのだが、先刻少年が見た姫や少女の現実離れした美貌に比べると、やはり野花と薔薇といった感情を覚える。

三つ編みにした栗毛が白い三角巾からチョコンと下がり、宮廷仕えのメイド服に良く似合っている。年齢は少年と比べれば上なのだろうが、それでも彼女の小動物の様な目やソバカス、何よりそのおっとりとした雰囲気が保護欲をそそり、たまに年下なのではないかと少年が錯覚する程である。

フォルはどちらかと聞かれれば、まあ美人の部類に入るだろう。だがそれは、絶世の美女というよりも、差し詰め近所の綺麗なお姉さんという感じの可愛らしさであった。

「ん～……」

少年、マルスはフォルの全身を観察しながら、先程から小さな引っかかりを覚えている自分に気がついていた。フォルは、大人しい娘である。“あの女”直属の使用人として扱き使われている彼女ではあるが、しかしそれでも、自分から感情を露わにする様な性格では無かった筈なのだ。少なくとも少年は、召喚されてからこの国に居た間で、フォルが我を失って誰かに飛び付くのを見た事は無い。

「なんかあったの？」

少年は、頭頂部の犬耳をピョコピョコと動かしながら女に問うた。
フォルはその耳に心底ご執心であった様に見えたが、少年が何を聞いているのかを理解したらしく、シュンと項垂れた。

「はぃ～……」

空気の抜けた風船みたいな声。
フォルは突如として沈んだ面持ちになると、おずおずといった様子で肯定する。
……その態度から、少年は事の概要を理解した。
“あの女”直属の使用人である彼女がこういう反応をする相手は、必然的に1人しかいないからである。

「……メル嬢か」

“あの女”の名前を呟く少年。
フォルは、コクコクと頷いていた。

「マルス君があんまり遅いから、“ご主人様”がタイヘンだったんですよぉ？　今も王座で、沢山の男のヒトを集めて、新しい拷問の方法考えたりしてるんです。さっき、これで12個目だって喜んでました。早くマルス君に試したいって笑ってましたぁ」

「……じゃ、そういうことで。
メル嬢には、おれっちは旅に出たって伝えてくれ」

サッサと立ち上がり、回れ右して門へと向かうマルス。フォルはそんな彼を抱きとめる様に、後ろから少年の幼い身体にしがみ付いた。

「だ、ダメですよぉ？　早く行かないと、スゴくタイヘンな事になるんですからぁ？」

「行くとおれっちがタイヘンな事になるんだろ？
ジョーダンじゃねーっての？　メル嬢のワガママに一々付き合ってられっかってんだ？」

「で、でもぉ」

「でもじゃねーっ？
どうせあと半日もすりゃ飽きるんだから、それまでおれっちは絶対ェに逃げ切る？」

「だ、だからぁ……」

尚も門に向かおうと暴れるマルス。
そんな彼を必死で押さえつけながら、フォルはおずおずと先を告げた。

「ご主人様、今ゲームしてるんですよぉ。
マルス君が出かけてる間に新しい拷問を考えて、戻って来るまでに幾つ作れるかっていう……。
ご主人様、ゲームの間に考えた拷問は、全部マルス君に試すって言ってましたぁ。
そ、それに……。
さ、さっき、ちょっとだけ覗いたんですけど……。試されてるヒト、す、スゴイ声で叫んでて……。こ、これ以上増えたら……、マルス君、し、死んじゃう……？」

「さあて、ご主人様はどこかな～っ？
あっ、王座だっけ？　王座ってあっちだよね～？
早く会いて～なコンチクショウッ？」

ガマガエルの様に脂汗を垂れ流しながら、少年は王座へ続く階段を全速力で駆け上り始めた。

―――

宮殿の頂上にある王座に着くには、少年の脚をもってしても半刻程の時を要した。途中、擦れ違う臣下達から投げられる哀れみの視線と、何故か時折感じる妬む様な目線を完全に無視しつつ、少年はガラスの階段を駆け上がり、蹴破る様にして最後の扉を開け放った。

視界に映るは女が1人。
丁度新作の拷問とやらが終わったばかりなのか、湖上の氷を思わせるクリスタル張りの床にはナニも転がってはいない。部屋に親衛隊すらもいないという事は、おそらく実験台の入れ替えの為に部屋を出ているのだろう。

――好都合だ。
これなら、ここで何が起こっても誰にも分からない。
少年はそんな解釈をしながら身体に力を込めた。

「帰ったぜメル嬢？
おれっち早かっただろ？　頑張っただろ？
だからお願いちょいと待てやゴラァアアア？」

徹夜とランナーズハイ、及び死の恐怖により少々おかしなテンションになりながら、少年は王座の前まで一気に駆け寄る。そのまま速度を落とさずに広間を駆け抜け、王座に偉そうに踏ん反りかえる女の、艶かしいクリアブルーの長髪に手を伸ばし――、

女の姿は、手が触れる直前に少年の視界から消失していた。

「……は？
どうな――ヒャベバァッ？」

突如として消えた“あの女”の姿。
それが何なのかを理解するより尚早く、少年の後頭部には稲妻の様な衝撃が炸裂していた。一撃で脳を揺らされ、床に這わされる少年。その頭に、非情にも固い靴の感触が乗せられる。

「遅かったなぁ、マルスよ。
まあ、予の美貌を2日も拝めんかったのだ。
辛抱堪らず発情する気持ちは分からんでもないが……。
主人を押し倒すのは、愛玩動物（ペット）の分際にしては過ぎた欲情だとは思わぬか？」

頭の上から浴びせられる、熱を帯びた様に恍惚とした声。脳震盪にぐるぐると回る視界でそれを聞きながら、少年は強く歯を食いしばった。

「うっせぇえええッ？
おれっちは、ババアに欲情する程堕ちちゃいねぇっ？」

甲高い声を荒げつつ、少年は床を転がって頭に乗っている足を外す。麻痺しきった三半規管が訴える吐き気を無理矢理に抑え付けながら、少年は“あの女”が立っているであろう位置に全力の蹴りをくれてやった。

「――――はぁ？」

――が、またしても居ない。

蹴りを放つその瞬間まで確かにそこに居た筈の“あの女”は、少年が足を伸ばした瞬間に幻の様に消え失せていた。

「ハビャッ？」

そして次瞬、当然の様に背後から走る衝撃。おそらくは“あの女”の蹴りが、全く何の容赦も無く、真後ろから少年の腰部を撃ち抜く。

「グッ？　ベッ……？」

蹴りの衝撃を受け止め切れず、まるでヌイグルミの様に床を転がっていく赤い少年。視界に3回、天井の歴史掛かった油絵が映ったところで、少年の身体は何故か自分を蹴り飛ばした筈の“あの女”の脚に止められていた。

「落ち着くがよい、赤犬。
そう興奮されては、ついついその生意気な口を踏み潰してしまいそうだ」

脳髄が痺れる程に艶のある声が響いた瞬間、少年の口元には女の靴が乗せられた。少年の反撃が気に障ったのか、体重を込めてグリ

グリと踏み付ける。徐々に重くなるその感触に、少年は本当に口を潰されかねない程の痛みを覚えた。

「……」

暫しの沈黙。

ピクリともしなくなった少年の態度を、女は果たして服従と取ったのか。余韻が残る程緩やかに、彼女はその脚を退けた。

マルスは、仰向けになったまま動かない。

しかしその目線だけは恨めしげに、自らを見下ろす女の姿へと向けられている。やがて女が起き上がる許可を出したのを確認してから、少年は床に胡座をかいて座り込んだ。

「フハハッ？　良い貌だ？

その生意気そうな目？　虐め甲斐が有り過ぎて、眺めているだけでも脊髄が痺れそうだぞ？」

女はそのふくよかな胸を張りながら、高らかに笑い声を上げた。

少年はやり場に困る女の肢体から逃れる様に目を伏せつつ、聞こえない程小さく舌打ちをするのだった。

――メルクリウス・フィンブルエンプ。

透き通る様なクリアブルーの長髪に、サファイアを思わせる蒼い瞳。常に嗜虐的な笑みを絶やさない彼女こそが、獰猛なる氷河帝国・氷の国（フィンブルエンプ）を統べる若き女帝である。

彼女自身の実力もさることながら、特にその極めて希少な先天魔

術から“瞬帝”と恐れられる暴君であり……つまりは、少年の召喚主にあたる人物であった。

容赦について述べるのであれば、とにかくキツい。

何がキツいかって、男子にはとにかく刺激がキツ過ぎるのである。

彼女と向かい合った者が男であれば、先ず間違いなくその妖艶な肢体に逆らう事は出来ないだろう。細身で清楚な純白の姫とも、華奢で可憐な真紅の少女とも違う、タップリとした女の身体から香る色気。ふくよかに過ぎるその胸は、相対した者に欲情の欠落があったとしても、否が応にもその視線を誘惑する。

そんな刺激の強すぎる身体だけでも健康な男子としては堪らないというのに、何を考えているのか、この皇帝陛下は服を着ない。否、一応のところ衣装と呼べる物は身に付けてはいるが、少年にはソレを服と呼ぶのは憚られた。

何しろ胸部に当てられた胸当ては、その豊満すぎる胸の頂上付近しか隠しておらず、下に至ってはTバックも真っ青な程の食い込みっぷり。赤い外套のお陰で直線尻を拝まなくて済むのが救いと言えば救いではあったが、彼女の格好は冗談抜きで、並の男であれば近寄られただけで腰砕けになる程の殺人的な色気となって雄を蠱惑していた。

「ほぅ、どうした？

予の身体に見惚れるのであれば、もっと正面から鑑賞すれば良いだろう。そんな盗み見る様な視線では、いくら眺めても満足など出来なかろうに」

自信満々な声色。からかう様なメルクリウスのセリフを受けて、少年は漸く、自分が彼女の身体を食い入る様に見ていた事に気が付いた。視線を上げると、嗜虐的に見下ろすブルーの瞳。その事実が。

いや、よりにもよって“この女”に魅入っていたという事実が、凶悪なアルコールとなって少年の顔を見る見る紅潮させる。

「うっ、うっせえ変態女っ？
テメェはサッサと服着ろよ？」

「フハハハッ？　何をバカな事を言っておるのだ？
服とは、見苦しい部位を隠す為にあるのだぞ？
この予の身体に、恥ずべき所など一片たりともありはせんっ？」

「こっっちが恥ずいんだよぉっ？
ババアの裸見せられるおれっちの身にもなりやがれこの変態っっ？」

少年の悪態に表情を歪める氷の女帝。
しかしそれは、決して怒り故では無い。
心底楽し気な嗜虐に満ちた流し目は、身体の奥を直に舐め回す様に少年に向けられている。
女帝は屈み込み、少年の顎をクイッと持ち上げると、赤い瞳を覗き込みながら囁いた。

「……マルスよ。
敵国民から敗走した割には、随分と余力が残っていると見えるな。
いや、良かった。折角の仕置きを加減せねばならぬかと迷っておったが。どうやら、その必要も無さそうだ」

神経をネットリと溶かす様な、身体を芯から痺れさせる程に甘い声。しかし悦に入ったその声が示す内容を聞いて、少年の背筋はブルリと震えた。

「ま、待てよメル嬢――ってかざけんなババアッ？
おれっちが敗走したぁ？
あのデカブツは死んだんだからよ～、結局はおれっちの勝ちだろ？」

「ほぅ、マルスよ。
予に向かって虚言を吐くとは、少し見ぬ内に随分と肝が据わったものだな。いや、折角の愛玩動物だ。そうで無くては詰まらんが」

ニタリと、口の端を上げた意地の悪い笑みを浮かべながら、メルクリウスは少年を削る様に言葉を繋げた。

「予を誰と心得るか。
隣国で起きた出来事の顛末など、この座に座りながらでも把握できるわ。
貴様がノコノコ逃げ帰った後、あの男は瓦礫の山から這い出たぞ？　それも、殆ど無傷と来たものだ。これでも尚、貴様は敗走などしておらぬと申すのか？」

「はぁ？　んだそりゃ？
あいつどんな身体してやがんだよ？
……ん？　顛末を知ってる？」

驚きに目を瞠っていた少年は、女のその一言に凄まじい悪寒を覚えた。時計塔の崩壊と、その顛末。そして彼女は、少年が去った後の事まで把握しているという。と、いう事は、つまり、時計塔が壊れた後の“あの事”も知ってるってわけで……。

「……」

――少年は、呼吸の仕方を忘れた。

「マルスよ。この予の寵愛を受けておきながら、まさか武の国の棒人間に尻尾を振るとはなぁ。フハハハハッ？　なかなかに面白い口上を述べてくれたものだ？　あまりの愛しさ故に、その泣きっ面を想像しただけで芯が疼いた程だぞ？」

「ちょっ？　まっ？　あ、あれはほら、アレだから？
こう、その――ってせめて言い訳だけでもさせてお願いだからぁあああ？」

蕩ける様な顔でニッと笑う妖艶な美女。
その全ての雄を骨抜きにする程に凶悪な表情を見た瞬間、マルスの見る景色は凄まじい勢いで流れ始めた。
ムカつく兄貴。フロッド族との抗争。武器売買に大爆発。あー、ろくな人生じゃなかったなー、なんて目の前を走る光景を眺めながら、少年は自分の人生を他人事の様に理解する。

（……ってまてええっ？
え？　走馬灯？　コレって走馬灯ってやつ？
え？　死ぬの？　ヤッパおれっち死ぬの？）

少年の困惑を無視しつつ、景色は更に疾走してゆく。
突然の召喚。目の前にあった凶悪な肢体。楽しませろとか足を舐めろとかいう滅茶苦茶な命令。叫び声を上げる自分を見て、心底楽しそうに高笑いする美女。
……とことん酷い女である。

最後に視界には、とある大男の姿が映った。
先刻少年と死闘を演じた、青い甲冑の武の国の守護魔――。

『俺は主には逆らわねぇ』

その声が脳内に響いた瞬間、少年の腹部に手が触れた。迷彩服の破れ目から女の体温が直に伝わり、その驚く程の熱さに、心の一番大事な部分が溶かされていく様な錯覚を覚える。高い高いされる子供の様に、女の眼前へと掲げられる少年。目の前には笑み。心の底から虐待を愉しむ、人間としてあってはならない暴君スマイル。

『主がそうしろって言うんなら、いつだってそれが俺の意思だ？』

……そして、リフレインする大男の言葉。

「認めねぇえええっ？
あんなデカブツ、おれっちはぜってェ認めねぇからなっっっ？」

叫んでみても虚しいだけだった。
皇帝は少年を小脇に抱え直すと、少年の為に新調した拷問部屋へと歩いて行く。どうやら生意気な少年が虐められる姿というのは、この皇帝様の嗜好にピッタリと嵌ったらしい。

「さてと、どれから試そうか。
流石に35通りも思い付いては、些か判断に迷うものだな」

「さ、3じゅ……！？
――って待てやメル嬢？
ふぉ、フォルは？　フォルはさっき12個って？」

「ん？　ああ、あの後急に頭が冴え渡ってな。
２０もの方法が次々に閃いたのだ。
いや、真に素晴らしき時間であった。
貴様を見ている内に３つ程思い付いたし、全部で３５通りで合っておるぞ？」

「そ、そうだ？　こんな事してる場合じゃねーだろ？
敵国？　あのデカブツが生きてんなら、サッサと攻め込んでやらねえと？　やられっ放しは性に合わ――」

「ハハハッ？　何をバカな？
虹の橋（ビフレスト）がある限り、どうせ当分、貴様は連中とは争えん？　つまり時間はタップリあるという事だ？　……おっ、そうだな。虹の橋に因んで、先ずは“橋渡し”から試すとするか。
ククククッ？　良い声で鳴けよ？」

「いやいや因んでっていうかマジヤメテイヤアアアア？」

……この日の王宮には、夜まで少年の悲鳴が絶えなかったという。

21．　異世界に存在する2つの国の文化や風土及び生活習慣の違いに関する調査

はい！！　と、いうわけで、召喚編ようやく終了です！！
なんとこの21話、文字数が35000を超えてます。危うく制限オーバーという、危機的状況の特異点でした。はい！！　読んでいただけた方、ありがとうございました！！　そしておつかれさまでした！！

えーと、今ノリで終了とか言っちゃいましたけど、このお話、実はまだ始まってすらもいなかったりします。
はい、そうです。朝マガはここまでが“プロローグ”なんです！！
これから先、ようやく異世界人バトルロイヤルが本格始動ですよ～。
残り3人の召喚主さんとか守護魔さんも続々登場予定です！！
皆さん、召喚するなら（されるなら）誰がいいですか？

と、言うわけで、次回はアイアイ★こらむです。

22．　アイアイ★こらむ？　超合金？　アダマス鉱？（前書き）

注）アイアイ★こらむは電波系楽屋落ちコーナーです。真面目な方、まともな方、あるいは毒電波に対する耐性が無い方などが読まれますと、精神とかに何らかの異常をきたす可能性がありますのでご注意下さい。

22．　アイアイ★こらむ？　超合金？　アダマス鉱？

「アイアイーーーーっ★
こらむーーーーっ」

「……」

「皆さんこんにちは？
朝マガ唯一の読者目線キャラ、相川　愛です？
皆さんの心の声を代弁するため、再び異界よりやって参りましたーーーー？」

「……夢じゃなかったのか」

「いえ、ぶっちゃけて言うと、この空間は本編に対して夢みたいなモノです。踏み外した方々の夢の理想郷です。なんか色々なモノを崩壊させる、ルールブレイカーなリミッターなんです？」

「夢は夢でも悪夢だろう。
キャラもそうだが、特に読者の精神崩壊は深刻だろうな。向こうは小説を読みに来てるっていうのに、開いたページが会話オンリーでは、何がなんだかサッパリ分からん」

「だ、ダメですよーっ？
朝マガは魔導科学の入門書なんですから、コラムはスゴく大事なんです？　ただでさえ作者は理屈っぽい文章に慣れてなくて、本編は回りくどい言い回しにするのが限界なんですから、このコーナーだけが朝マガを似非教科書にする為の最後の砦なんですよ～っ？」

「相変わらず言ってる事は何一つ分からんが……。
つまりは、粉末ソース掛けただけでタコ焼き味とかぬかすスナック菓子みたいなモノか」

「はぅ？　み、身も蓋もない言い方です……？
た、確かに、他人事とは思えない親近感ですけど～……」

――――

「はい、それじゃあ講義にイッてみましょう？
教授？　今回のお題は何でしょうか？」

「……そうだな。
今回はどうやら、件のアダマス鉱に関する理論考証の様ではあるが……。
始める前に一つツッコミたい。
サブタイに“超合金”って入ってるんだが、アダマス鉱って“合金”だったのか？」

「……へ？　あ、はい。
多分そう、なんじゃ……ないですか？」

「……“合金”とは、ステンレスの様に金属に複数種類の金属や非金属を混ぜ合わせた物を指す言葉だったな。“超合金”などと書いてあるが……。アダマス鉱は、何にナニを混ぜて作った合金なんだ？」

「えーと、その……。
それは、ですね、きっと。あ、アレですよ？
なんか、それっぽい金属に適当な魔力とか混ぜるときっと出来るんですよ？」

「……もう1つ。
“鉱”とは精錬前の金属を指す言葉の筈だ。つまりアダマス鉱とは、“掘り出したままの鉱石”の状態で既に“合金”だったということか？
一一成る程、素晴らしいな。
それなら確かに“超合金”だ」

「……」

「……」

「……あぅ。
ご、ゴメンなさい？
間違えました？　調子に乗りました？
本当はただカッコいいから、ついノリで書いちゃっただけなんですよ～っ？」

「……直せば済む話だろう」

「こ、こっちにも色々都合があるんです？
た、確かに、超合金って書いたのは悪ノリでしたけど、“アダマス鉱”っていう名前はもうどうしようもなかったんですよ～っ？
……はい。ぶっちゃけ気付いたのは相方なんですけど、指摘された時には既に何度も何度も本編で使っちゃったあとで、合宿とか色々あって忙しかった所に全部直せとか言われて、ついついこっちもカチンときて……」

「……おい、待て。
なんか、誰か乗り移ってないか？」

「な、何でもないです？
と、とにかくですね？
アダマス鉱は、きっと一般に色々利用されてるから、鉱石の名称が材質の名称にまで使われるようになっちゃっただけなんです？　はい？　きっとそうです？　もう後には退けなくなっちゃったんで、朝マガではそういう事にしておいて下さ～い？」

「……まあ、ツッコミ所は色々あるがそういう事にしておこうか。さて、それではアダマス鉱？　の性質とその原理について考察していこうと思う」

「き、教授？　納得いかないのは分かりますけど、せめて疑問符は取ってくださ～いっ？」

「仕方ないな。
さて。先ずは要点を纏める為に、例によってアダマス鉱の性質を列挙してみようと思う。

・金属である
（金属光沢有り。展性有り。電気伝導性は未検証）
・強度や硬度が極めて高い（青銅以上？）
・銀白色
・魔力を放出すると膨張する

まあ、こんな所だろうな」

「えーと。こうして見ると、最後のやつ以外は、地球とかにあっても意外と違和感無いですよね」

「実際、最後の性質以外が似た金属なら地球にもあるぞ。
ズバリ、タングステンだ。

というか、初見ではオレもそう思っていた」

「タングステン……？
なんか、あんまり聞かない金属ですけど」

「馴染みの薄い名前かもしれないが、見る事も出来ない程に特別というワケでも無い。
そうだな。身近な所で言うと、白熱電球のフィラメントがコレで出来ている」

「えーーーっ？
フィ、フィラメントって、あの電球の中の光るヤツですよね？　あの、バネみたいにビヨヨヨ～ンってなってる細い金属ですよね？」

「……？
いや、まあそうだが。
何をそんなに驚く事がある？」

「あ、アレって……、“竹”じゃなかったんですか？」

「……は？」

「フィ、フィラメントって竹ですよね？
日本で採れた新鮮な竹を使ってるんですよね？

教授お願いですそうだって言ってくださ～いっ？
エジソンさんは……。
エジソンさんは日本を選んだんだって、わたしの日本人としての自慢の1つだったんですから～っ？」

「待て待て待て？
一体何世紀頃の話をしているんだ？
大体、君はさっき自分で何て言った？」

「バネみたいにビヨヨヨ～ンってなってる細い金ぞ……あっ？」

「……話を戻すぞ」

「うぅ……。小さな夢が壊れた気分ですよ～……。

……それで、教授。
そのタングステンっていうのは、具体的にはどんな金属なんですか？」

「そうだな。端的に表現するとすれば、
とにかく硬い。重い。そして高い。
これに尽きると言ってもいい」

「へ？？

それって、金属なら普通じゃないんですか？」

「常識的な金属とはレベルが違う。
タングステンの硬さたるや対戦車砲弾に使われる程でな。その研磨や加工にはダイヤモンドドリルを使うのが一般的だ。それでも、ダイヤモンド製のドリルでさえも割とボロボロ欠けると聞くな。更にその比重は重金属である金に匹敵し、１ｍ＾３で２０トンにもなる。そしてその値段たるや、アルミニウム材ならば数千円程度で済むパーツが数万円にまでなるという破格ぶりだ」

「きゃーっ？
む、ムチャクチャじゃないですかぁ？
というか教授？　そんな高級な材料で出来た塔壊したんですか？
そ、そりゃ怒られますよ～っ？」

「……いや、流石にこれは無いだろう。
というかアダマス鉱＝タングステンだとすると、あの街の防壁なんか天文学的な値段になるぞ？　そもそも細かい加工に向かない金属なんだし、像や建物への使用など狂気の沙汰だ。
……まあ魔力量の調整によって自在に加工可能っていう話だし、あの国では街一つ作れる程の産出量があるワケだから、地球の基準を当て嵌めるのもどうかとは思うが」

「む～……。
つまり、結局は魔力に関する謎を解かないと分からないってコトなんですね？」

「まあ、そういう事だ。
さて、それでは魔力の放出に伴う膨張という現象を元に、アダマス鉱と魔力の関連性について探っていこう」

「ピコーン？　ピコーン？
警戒令？　警戒令？
レーダーが毒電波の気配を感知です？
スゴい電波が飛び出る前触れです？」

「そう言うな。
コラムは重要なんだろう？」

「……。
（ど、毒を食らわば皿まで。
毒を食らわば皿まで？）」

「さて。それでは先ず、力と物質との関係性についての考察だが……。
ふむ、なるほど。アダマス鉱は魔力を“放出”すると“膨張”か。
これはまた……、中々に難儀だな」

「はい。実は、わたしもちょっと気になってたんですよ～。だって普通、ファンタジーとかの理論だと、魔力を使って剣創ったりとか

しますよね？　魔力を“加えて”ナイフを伸ばしたり、アクセサリーを大剣にしたりするんですよね？　なのに魔力を出した上に大きくなるなんて、なんだかちょっとインチキっぽいです」

「まあ、そうなんだよな。
確かに君が言う通り、魔力を加えると体積が増えるというものであれば話は簡単だ。相対性理論から導かれるエネルギーと質量の等価性を考慮すると、エネルギーは質量に変換可能だし、力とはそもそもエネルギーに変換可能な物理量だから、魔力を元にアダマス鉱の原子を創り出し、それによって体積を増やすというのは、まあ原理的には問題が無い」

「……へ？
エネルギーから原子って作れるんですか？」

「理論上はな。
現代の宇宙論ではエネルギーから素粒子が生まれ、それらが結合する事で核子、やがては原子を形作ったとされている。つまり我々の身体を作っている原子も、元々は宇宙誕生期にエネルギーから作られた物だという事だ。
……そうだな。本編に出た話を利用するのなら、オレが異世界に行く羽目になったあの加速器実験を引用してもいいだろう。素粒子研究の物理学者達は、ああいう“加速器”と呼ばれる装置で高エネルギー化した粒子をぶつけ、そのエネルギーを使って未知の粒子を生み出そうと日夜躍起になっている」

「へ～。
魔力から物を作るのって、実は意外と簡単なんですね」

「……まあ、理論上は可能だろうな。
Ｅ＝ｍｃ＾２とは世界一有名な方程式だが、これはエネルギーがあればそれを光速度の２乗で割った値の質量が生まれ得る事を示している。
つまり１ｇの物体を作りたければ、凡そ９００００００００Ｊのエネルギーを用意してやればいいんだ」

「なるほどなるほど。
なんかそう言われると、頑張ればわたしでも出来そうな気がしてきましたよ～。
――ところで教授。その９せんまんジュールって、具体的にどの位のエネルギーなんでしょうか？」

「そうだな、具体例を上げるのは難しいが……。
一番分かりやすいところで言うと、広島に落とされた原子爆弾の火力と同じくらいだ。１トンの物体を９ｋｍの上空に跳ね上げる為のエネルギーと大体等しい」

「全然簡単じゃないです？」

「何を言っている。
エネルギーから質量を作るとはそういう事だぞ？

よくあるファンタジーに登場する連中は、魔力を変化させたり変換させたり結晶化させたりして剣だの鎧だの要塞だの反射装甲だの創っているじゃないか。

――連中に教えてやりたいもんだな。そんな事がホイホイ出来るだけのエネルギーがあるのなら、ソレを全部熱に変えてぶつけた方が遥かに強い。仮に５ｋｇの剣を作れる人間なら、広島原爆５０万発分の大爆発が起こせる筈だ。世界と戦争しても単騎で勝てる」

「か、勝ち負け以前に、星が吹っ飛びそうですよ～っ？　良かったです、教授？　教授にそんな特殊能力とか追加されてなくって本当に良かったです？　というか教授、なんか段々ファンタジーな世界観に馴染んで来てませんか？」

「……まあ、冗談はこのくらいにしておこう。

とにかく、件の魔法金属は魔力を加えると収縮、失うと膨張と言っているのだから、その変形の原理はエネルギーからの原子の生成ではあり得ない。事実、本編でもオレは違う仮説を取った」

「……へ？

ど、どういうコトなんでしょうか？」

「……あのな、考えてもみろ。

オレはアダマス鉱の膨張現象を用いて塔を破壊したのだぞ？　仮に膨張に伴って金属を構成する原子の数が増えていたとしたら、いくら膨張したところでその密度も強度も変わらんだろう。よって建物の自重を用いて押し潰すインプロージョンは不可能だ」

「あっ、そう言えばそうですよね？
確かに教授、アダマス鉱は膨張するとスカスカになるとか言ってました。アレって、結局どういうコトだったんでしょうか」

「そうだな。
オレはあの時、叩いた時に聞こえる音の違いから、アダマス鉱はその膨張率によって密度が変化すると考えた。つまり膨張前と後ではその総重量は変わらず、密度が下がる事で体積の増大を実現しているのだろう、と。
密度の変化……まあ物質がその変化に伴って密度を下げる場合、いくつかの可能性が考えられるが……。

例えば
1. 物質を構成する原子や分子の種類が変わった
例）酸化還元反応。放射性元素の崩壊。
2. 物質の結晶構造が変わった
例）一定質量の黒鉛が全てダイアモンドに変わった場合、体積は凡そ６４％に減少する。
3. 物質の構造が変わった
例）内部に含まれる空気も材質の一部と考えると、スポンジや膨らんだ風船の様な構造になった場合、物質の密度は低下する。

まあ、こんなところが一般的だろうな。
もっとも、どれもアダマス鉱の膨張の原理を完全に説明し得る物ではないが」

「へ？　そうなんですか？
なんか聞いてると、どれもけっこう上手くいきそうなんですけど」

「……まあ、あれだ。一つづつ検証してみよう。
先ず1．　の可能性だが、これは殆ど例外だな。原子の種類が変わるには核融合か核崩壊が起きなくてはならないが、そんな現象が日常生活でホイホイ起こるのは、先の魔力変換理論と同レベルに非現実的だ。
一方、仮にアダマス鉱の体積の変化が化学反応によるものだったとした場合、あの世界にはアダマス鉱と反応可能な原子が大気中に溢れかえっていて、尚且つそれがアダマス鉱の内部にまで自在に浸透しなくてはならない。その上、アダマス鉱の体積増大の仕方は、常識的な金属の化学反応による体積増加と比べると明らかに異常だ。
よって、あの現象は化学反応ではおそらく無い」

「えーと、はい。
確かに、鉄棒が錆びたからって槍が生えたりとかしませんもんね？」

「そういう事だ。
さて、それでは2．　の可能性だが。まあオレには、この中ではこれが最も有望な仮説に思える。だが残念ながらこれも却下だ。何しろアダマス鉱は、先も述べた通りに膨張率の変化が大き過ぎる。ダイアモンドの例ですら、それが全て黒鉛になったとしても2倍にも膨張しないのだぞ？　結晶構造の変化だけで体積が4倍にも5倍にもなるなんていうのは、最早物質として無理がある」

「なるほどなるほど。
というコトは、つまり3．　が正しいってコトですか？　膨張したアダマス鉱の中は、けっこうスポンジっぽい形になってて、なんか空気みたいなのが沢山入ってるってコトなんですか？」

「……じゃあ聞くが。あの強固なアダマス鉱に対して、何をどうすればそんなに都合良く空気を入れられるんだ？」

「へ……？」

「確かにアダマス鉱の構造が変化してスポンジ状になるのであれば、密度は下がった上に体積も増えるだろう。だがそもそもの前提として、アダマス鉱は恐ろしい程に硬く、そして強い金属なんだ。レーザー光線でも使えば穴くらいは開けられるかもしれないが、それでも内部構造までスポンジ状に加工なんていうのは、矢張りあの金属に対しては難しい。原理が上手く説明出来ない以上これも却下だ」

「だ、ダメじゃないですか？」
教授が言った可能性、結局教授が全滅させちゃいましたよ？」

「安心しろ。
例の如く、我々は1つ重要な前提を見逃している。
何かはもう言うまでも無いな？」

「……魔力、ですか？」

「その通り。
この難物のアダマス鉱膨張への関与を考えない事には、我々は真の意味で原理を考証した事にはならないだろう。よって、ここではあえて、オレはこいつを使った第四の仮説を提唱したいと思う」

「お、お手柔らかにお願いします～……」

「一一結構。
さて。時に唐突ではあるが、君は元素周期表という物を見た事があるか？」

「あ、はい。一応。
確か、化学の教科書に載ってるアレですよね？
水兵のリーベさんが、ボクのお舟をどうのこうのって覚えるアレですよね？」

「……丸暗記の必要性には疑問を感じるが、まあそれだ。さて、しかしここでは各原子の名前や性質では無く、原子半径の規則性に注目して欲しい」

「原子半径っていうと一一、原子の大きさ、ですよね？
あれ？　それって、普通に番号が大きくなる程大きくなるんじゃな

いんですか？」

「そう思うだろう？
だが、実はそうシンプルでは無いのだ。
確かに原子半径は、原子番号が大きくなる程に大きくなる傾向はある。まあ、原子を構成する殻の数が増えるのだから当然だろう。しかし不思議な事に、同じ周期同士の原子を比較すると、原子番号が大きいほどにその半径は小さくなるのだ」

「……へ？
臭気がどうしたんですか？」

「……周期表の横列に振られている番号の事だ。
まあここでは、電子が存在出来る場所には陸上競技のトラックみたいに何層かのレーンがあって、周期はその原子が持ってる一般的なレーンの数だとでも思っていてくれ。
つまりだな、原子番号が大きい程原子半径が長くなる傾向はあるが、同列の横に並んでいる原子同士を比べると、番号が大きくなるほどその原子半径は小さくなるという事だ」

「うぅ……。ちょっと混乱してきちゃいましたよ～。つまり、縦に見ると番号が大きい程原子も大きいけど、横に見ると番号が大きい程原子が小さいってコト……、ですよね？
――それで、教授。結局そのお話が、アダマス鉱の膨張とどう関係するんですか～？」

「どう関係するもなにも、もう殆ど結論だぞ？
いいか。イオンでない原子を考えた場合、原子番号と電子の数は一致する。だから、原子番号が大きくなる程、原子核を周る電子の数も増えて原子半径も大きくなる傾向がある。
じゃあ同じ周期同士を比べた場合、原子番号が大きくなる程に原子半径が小さくなるのは何故だと思う？」

「そ、それは……。
き、きっと、誰かが押してるんです？
誰かがギュッと押して、固めてるから、そこだけちょっとおかしくなってるんです？」

「……半分正解なのが腹立たしいな。
それではその誰かが誰なのかを教えてやろう。
ズバリ、陽子だ」

「へ？　陽子（ようこ）さん？
ホントに誰ですか？　ソレ」

「……君は本当に理系学生か」

「……スミマセン、冗談です。
ちょこっと悪ふざけしてみちゃいました。
えーと、原子核の中のプラスの粒ですよね？」

「……分かっているようで安心した。
もう少しだけ掘り下げると、陽子とは中性子と共に原子核を作っているハドロンであり、電子の負電荷と同等の絶対値の正電荷を持つ、原子番号を決定する存在である。

さて。ここまで言えばもう分かっただろう。
陽子が持つのは正電荷だ。
つまり負電荷を持つ電子とは電気的に引き合う。
そして原子中の陽子の数は、その原子の原子番号に一致する」

「えーと、陽子がプラスの電気を持ってて、電子がマイナスの電子を持ってるから引き合って、陽子の数は原子番号が大きくなる程増えるから――あっ？」

「そういう事だ。
原子は、原子番号が大きくなる程に原子核が持つ正電荷も大きくなり、結果として電子を引き付ける力も強くなる。よって同一周期中では、原子番号が大きくなる程原子半径は小さくなるのだ」

「な、なるほど～。
なんか、ようやくちょっとは分かった気がします。

……あれ？　でも教授。それで結局、それと例の膨張とどこが関係するんですか？」

「分からんか？　今オレは、原子核と電子が引き合う力が強い程、原子半径は小さくなると言ったんだぞ？
つまりだな、仮に陽子の数が同じ原子ＡとＢがあったとしても、何らかの理由によってＡの電子・陽子間の力がＢのソレよりも大きくなった場合、Ａの原子半径はＢよりも小さくなる可能性があると言ったんだ」

「へ？　でも引き合う力の強さって、陽子とか電子で決まってるんですよね？　確か、陽子の電荷は全部一定だって、何かで読んだ様な気がします。陽子の数が同じなのに、引き合う力が違うなんて、そんな魔法みたいなコトが……て、もしかして教授？」

「そう。この世界には魔法があるのだ。
この際、遠慮無く使わせて貰おうじゃないか。

例えば今回のケースだと、魔力には電磁気力を強める作用があると考えてはどうだ？
アダマス鉱がどんな組成を持っているのかは知らないが、それでも魔力によって各原子内部の電磁気力が強まれば、やはり原子半径も小さくなってアダマス鉱の密度は上がるはずだ。その逆で、アダマス鉱に蓄えられている魔力が解放されれば、それまで原子内の電磁気力を強めていたブースターが無くなり、原子半径は増大してアダマス鉱は膨張するだろう。
――ここが１つ重要な点なのだが、一般的に物質とは、構造が同じなら密に詰まった物の方が強い。例えば炭素とケイ素、そしてその化合物の結晶を比べると、その原子間距離は一般にＣ＞ＳｉＣ＞Ｓｉであり、硬度はこの順で低下する。これは先の定義を裏付ける資

料と考えていいだろうし、つまりはアダマス鉱でも同様だろう」

「なるほど～。
確かに砂遊びとかしてても、フカフカな砂場よりもギュウギュウに固めた校庭の方が硬いですもんね」

「少々乱暴な例えだが、まあそういう事だな。
何にせよ、これならば物質として不可解にすぎるアダマス鉱の膨張率にもある程度の説明を付けるコトが出来るし、そして何よりも前回の講義の内容に矛盾しない。
前回の講義の結論として、我々は魔力を第五のゲージ粒子である霊子によって媒介される力であるとし、重力子というゲージ粒子のやり取りを阻害する力があるとした。今回はこれの逆で、魔力が光子（ファン）のやり取りを補助したと考えるのだ。これによって前回仮定した霊子（トモン）の性質も拡張し、魔力の性質を一歩汎用的に定義し直せる」

「えーと、それじゃあ、今回の結論は……」

「うむ」

“魔力とは力を変化させる力である。霊子はゲージ粒子のやり取りを阻害、または促進する事によって物理現象に変化を生む性質を持つと考えられる。魔導科学においては、その中でも特に人為的に起こされた現象を魔術、または魔法と定義する。

アダマス鉱がその密度を変動させる現象おいては、魔力は電子・陽子間の光子の交換に作用する事でアダマス鉱原子の原子半径に影響を与え、これを膨張ないし収縮させる働きをしている考えられる。この際、原子半径が大きくなる程にアダマス鉱の密度は下がり、強度や硬度は低下する”

「まあ、こんなところだろうな。
この仮説が正しいとするのならば、体積の変動現象はアダマス鉱のみに留まらない可能性も高い。魔力とその他の力との関係性は、再び何らかの形で考証する必要がありそうだな」

「あぅ～……。
魔力の変換だったら一言で済んだのにぃ～……」

――――

「はい？　それでは、本日のアイアイ★こらむはここまでです？
ムダに蛇足な電波文にここまで付き合ってくれた方、本当にありがとうございました？」

「……漸く帰れるのか。
まあ第一回の混沌度を知っている人間なら、二度は足を踏み入れたく無いと感じる程の魔窟だからな。まともに読み込む物好きもいないだろうし、多少カオスでも文句は言われ……って待て。何故そんな、まるで獲物を頬袋に詰め込む直前のハムスターの様な目でオレ

を見る？」

「甘いですよ～、教授～。
このくらいで帰ろうなんて、ハチミツ漬けにした上生クリームとチョコをトッピングしたどら焼きくらいに激甘です？」

「……それは確かに甘そうだな。
って、オレはまだ帰れないのか？」

「はい、そうなんです？
今回は色々事情が有りまして、そんなワケでもうちょっとだけお付き合い下さい？」

「……これだけ好き勝手やらかした挙句、まだ読者を付き合わせるのか？　好い加減キレられてもおかしく無いぞ？　ただでさえ寂しいコメント欄が、今度こそ本当に炎上するぞ？」

「あぅ。それを言われるとイタイですけど……。
で、でもとにかく、急ぎの事情がありますので、もう少々ご辛抱下さい？　皆さん、分かっていただけますよね？　ね？」

「（分からないと言っても続けるんだろうな）
……サッサとしてくれ」

「はい？　ありがとうございます？
えーと、その、問題になってるのはあの世界の地図なんですよ～。
アルちゃんも言ってましたけど、その、あの世界の国境には虹の橋（ビフレスト）
なんてシステムがあって、ちょっと作者の文章力じゃ説明不可能な
感じになっちゃってるんです。それぞれの国の位置関係とかも結構
重要だったりしますし、この辺りで整理しとかないと、ちょっとお
話が混沌としそうなんです……」

「……既に十分混沌としてるだろう。
まあ、解決策があるならそれに越した事はないと思うが……。
でも残念だな。生憎とあの世界の地理には、オレもあまり詳しくは
無い。そんな事なら、オレじゃなくて適当なあっちの世界の住人で
も……」

「あ、それもそうですよね？
それじゃ、召喚しちゃいましょうか。
アルちゃんどうぞ？」

「……ナニ、ここ」

「新たなる犠牲者が……」

「はいはい？　呆然としてないでテンション上げて下さいよ？　こ
こは何でもありな異界の楽屋なんですから？

えーと。それじゃ、アルちゃん。
早速ですけど、あの世界の地理とか地形とか、結局どんな感じになってるんでしょうか？」

「……シン。
とりあえず、ココが何なのか説明してくれない？」

「……悪夢の理想郷だ。
帰りたければ、あの暴虐ハムスターに大人しく従ってくれ」

「はぁ……。面倒くさいな～……」

「や、やめて下さい？
そんな、酢豚のパイナップルを見る様な目で見ないでくださ～い？」

「……なんでもいいけどさ。
えーと、それでなんだっけ？
あたし達の世界の地図が知りたいの？
アレ、説明するのホントにキツいんだけど」

「はい。ぶっちゃけわたしもそう思ってました。
作者さん、合宿中に何人かに説明文を見せてみたらしいんですけど、誰一人文章だけじゃ分かってくれなくて膝抱えてました。ハッキリ言って、　朝マガ始まって以来の大ピンチです。

……と、いうワケで。相方に相談してみたところ、なんか挿絵とか使えるっぽいというお話を聞けたので、ちょこっと頼んでみたんですよ～。
そしたら、こんなの送ってきやがりました」

＞ｉ２９２０６―３７１２＜

「……なんだコレ？」

「はい？　現時点までに判明してる召喚主さん、及び守護魔さんの位置関係まで一目で分かる親切仕様？？
朝マガ世界のワールドマップです？
って、相方は言ってたんですけど……」

「……分かりにくい事この上ないな。
縮尺やら気候やら植生やら、そもそも主要な街の立地も載ってない。
何が一体どうなってるんだ？」

「……というか、シン。まさかと思うけどさ。
あんたっぽい染みの隣にある、あの目つきが悪いのって、もしかしてあたし？」

「そ、そうなんですよーっ？
ホント、聞いくださいっ？

なんかムダにボコボコしてたり、砂漠とか川とか海とかちょくちょく入ってますし、国境とか国の広さとかマチマチですし、書いてる内に矛盾とかしたらどうしてくれるんですか～っ？」

「待て待て待て待て？　ちょっと落ち着け？
今日の君は、脳内にもう一つの人格を飼ってるとしか思えないぞ！？
一度お祓いにでも行ってこい？」

「し、仕方ないじゃないですか～っ？
だ、だって、ちょっとリンク先のサイト覗いてみたら、相方がモノスゴク勝手なコトしでかしてやがったんですよ？　一言の相談も無かったんですよ？　わたしだってたまには怒りますよ～っ？
……って感じでメールしたら、その１０分後、今度はこんな絵がＵＰされてました」

＞ｉ２９２０７―３７１２＜

「……身も蓋もないな」

「……ねえ、シン。
このコ、さっきからナニ話してるの？」

「異世界言語だ。
あまり気にしないのが正解だろう」

「だ、だからそんな目で見ないで下さい？
せめてキャラ〇ルコーンのピーナッツを見る目にしてくださ～いっ？
……そ、それでアルちゃん？？
結局、この世界ってどんな感じなんでしょうか？」

「（……大丈夫なの？　これ）
えーと、一応気候から簡単に説明すると、赤道が通ってるのがこの大陸の真ん中くらい。丁度、銀の国と武の国の国境から、天の国の北部を掠める所かな。そこから外れるごとに一気に気温は下がっていって、最北の氷の国と最南の死の国はもう殆ど極寒地帯ってわけ。まあ最も、死の国は緯度とか地形の関係で、氷の国程ツンドラってわけじゃなさそうだけど」

「ちょっと待て。
赤道が通ってるのが大陸の真ん中だと？
その上大陸の北端と南端は寒帯に入るって、この大陸はどれだけ大きいんだ？
北アメリカ＋南アメリカくらいの上下幅があるって、殆どパンゲア状態だぞ」

「そんなに大きい？
一応“魔犬（ガルム）”とか使うと、隣の国まで1日もかからないって話だし、そもそもあたし達の大陸、他の世界のに比べるとやたら小さいって

言われるんだけど」

「は？　それはどういう……、
一一ああ、成る程。そういう事か」

「へ？　どういうコトですか？」

「つまりあの世界は、星そのものが地球よりも遥かに小さいという事だろう。星の表面は地球に比べて遥かに急なカーブを描くから、当然そこまで巨大な大陸で無くとも全ての気候帯を内包する事は可能となる。
まあ。地球より小さいのに重力の差異を殆ど感じない原因が、果たしてあの星の重さ故なのか、或いは重力その物が我々の宇宙よりも強いのか、というのは気になる所ではあるが……」

「ほへー、なるほど～。
アルちゃん、そうなんですか？」

「……続けるね？
この地図で、取り分け重要なのが虹の橋（ビフレスト）。
多分後で詳しく説明する事になるとは思うけど……、下の図を見てくれる？
この世界の国境は、通行出来るのはその虹色の部分だけなの」

「そうなのか？
なんか、上の図を見てるとどこでも通れそうなんだが……」

「通ろうと思えば、なんとか通れる所はあると思う。
でもそれは条約違反。虹の橋は“橋の番人（ヘイムダル）”って連中が管理してて、違反者とその国には重大な罰則が加えられる事になってるの。まあ、その辺りは後々詳しくって感じかな。
とりあえず、今は各国の位置と虹の橋の場所だけ分かってればいいんじゃない？」

「結局はそれも後で、か。
じゃあ下の図だけで良かったな。
上の図も、そもそも君を喚ぶ必要すらも無かったぞ？」

「好きで喚ばれたワケじゃないわよ？
ていうか上の絵って、あんなの思い出したくもないってのよ？」

「そうか？　そうやって目を吊り上げてる所なんかそっくりだと……ヘブッ？」

「ダレの？　どの目が？　吊り上がってるって？？
いうのよっ？」

「待ぺっ？　ちょっガッ？　何故オ……ぶっ？

殴ブの……止ぐはっ？」

「……。

……えーと、皆さん。
教授とアルちゃんがケンカを始めちゃいましたので、そろそろ戻してあげようかなって思います。

ここで広告？
召喚編が漸く終り、次回からはいよいよ激闘の第二章突入です？
ドS陛下とかホームレス国王とか出て来ましたし、犬耳少年はいい感じにイジメられてましたし、バトロワムード更に加熱でゴーゴーです？　さあ、我らが教授は一体どうやって生き延びるのか！？
こうご期待です？」

「おい？　その前に助け……
待て待て待て？
その関節はマジでヤバ……（ゴキッ）」

22.　アイアイ★こらむ？　超合金？　アダマス鉱？（後書き）

えーと、なんだか相方が余計なコトをしてくれてやがったみたいです。

具体的に言うと、リンク先のページで朝マガのキャラ絵（もどき）を産出してやがりました。下手とまでは言いませんけど……、ぶっちゃけ突っ込みどころ満載というか、アルちゃん髪の色違うというか、キャラのイメージが絵で決まっちゃうのがイヤなんですよー！！　皆さん、小説書いたコトがあるなら、ここら辺のビミョーな気持ち、わかりますよね？　はい。アルちゃんじゃないですけど、マジで一発殴りたくなっちゃいました。

次回から第二章ですけど、そろそろ夏休みも終わっちゃうんで、ちょっぴり更新ペースが落ちるかもです。大体の大枠が固まったら続きを投下しますんで、これからも見捨てないでちょくちょくのぞいて戴けるとうれしいです。

23.　異世界に於けるとある名著からの引用を利用した現代魔導理論の基礎的

お待たせいたしました！！
はい！！　ただいまより、朝マガ第二章開幕です！！
……いえ、その。もしかしたら誰も待ってなかったんじゃないかな～、とか、そこはかとなく不安を感じてたりもしてますけど……。
と、とにかく！！　バトロワムードとか電波度とか、さらに過熱でゴーゴーしていきますんで、これからもよろしくお願いします！！

23.　異世界に於けるとある名著からの引用を利用した現代魔導理論の基礎的解説

（エドワード・R・パーシー著：近代魔導概論　第四刷より抜粋）

“精霊根源説”が説明するところによると、魔術とは四大精霊が持つ力の一部、又はその全てを借り受ける事によって行使される神秘の総称であると定義されている。

世界の森羅万象を司るとされる四大精霊。彼らは星の活力の具現たる魔力を糧として存在し、取り込んだ魔力によって様々な現象を引き起こす。気まぐれな風の精霊が争った際に起こる火山噴火などはその代表例と言えるだろう。魔力を取り込んだ彼らが持つ、矮小なる人間などとは次元を別つ神秘の力は我々を畏れさせ、そして時には魅了する物でもある。

魔術とは、彼ら精霊に上質な魔力を捧げる対価として、彼らの持つ力をほんの少しだけ貸してもらう行為の事を指す。極論して言ってしまえば、魔術師とは精霊達へと食事を捧げる給仕なのである。

魔術は、力を借り受ける精霊の種類によって火、氷、土、風の４つの属性に分類されるのが通例である。それ以外の属性は俗に“亜種”と呼ばれ、全て４つの属性から派生した物であり、最終的には帰属して扱う事が出来る物であるとされている。

〜〈中略〉〜

さて。ご存知の通り、この定義に反する物が一つだけ存在する。おそらくは貴方もお持ちであろう、“先天魔術（ギフト）”と呼ばれる魔術である。

この世に生まれ出でる以前に貴方が精霊より賜った贈り物たるこの才能は、一つだけ、貴方に術式の構築や詠唱を気に留めずとも紡げる高位の神秘を許可している。人が扱う魔術の正しい形である先天魔術を行使する上では、わざわざ言霊を用いて精霊に要望を告げずとも、彼らは貴方が何を求めているのかを理解してくれるのである。

よって先天魔術は、魔装と並んで魔術師の個性を決定づける最大の要素と言って良いだろう。

同時に、先天魔術は魔装を決定づける最大の要素と言い換える事も出来る。

この本を手に取った貴方が魔導師を志すのであれば、是非とも魔装の選択には気を配って戴きたい。魔装とはあくまで魔術を補助する装備品であり、そしてそれが補助する魔術とは、多くの場合貴方の先天魔術を指すからだ。

先天魔術の理解無くして、貴方は魔装を決定し得ない。

先天魔術の研鑽無くして、貴方は魔導師足りえない。

魔術師の身体は、たった一つの神秘を成し遂げる為に存在するのである。

貴方が魔導を志すのであれば、この不文律を決して軽んじてはならない。

王宮の生活とは何もかもが豪奢である。

まあ、人間とは立場に応じて相応の体裁を整える事が求められる

生き物であり、また富裕層の人間が金を使わなくては国の経済は滞るのだから、つまりは贅沢をする事は王侯貴族の仕事の１つなワケであり、そういった意味ではこの国の貴族達は（１人の例外を除いては）十分にその職務を全うしていると言えるだろう。

何気なしにそんな思索を巡らせながら、朝食と呼ぶには余りにも豪勢に過ぎる食事を終えた真也は、使用人らしき女性から昨夜に修繕を頼んでいた衣服を受け取って部屋で正装を解いていた。

――余談ではあるが、使用人の女性とは言っても真也に比べれば遥かに歳上である。具体的にその容姿を述べるのであれば、５０を過ぎたくらいの、眼鏡を掛けた、小太りのおばさんである。まあよく考えるまでもなく、使用人と言えば普通は比較的年配の人間が就くのが一般的な職業なワケであって、特別な事情でも無い限りは、異世界でもそれはやはり同様の真理であったという事だろうか。

……若くて可愛らしいメイドさんなどという幻想が、一体どこから生まれた物であるのか。地球に帰ったら一度、某アニメの街の住人の思考回路を分析するように同僚の生物学者に頼んでみようかと、なんとなく頷いてみたりする真也であった。

完璧に“修繕”されたダメージジーンズを履き、昨日の血痕がまだ少し残っている白衣へと袖を通した頃、使用人のおばさんは謁見の間へと向かうように彼に告げた。どうやらヘリアス王が面会をしたがっているらしい。大方昨日はろくに出来なかった挨拶や任命式か何かなのだろう、などと解釈しながら部屋を出た彼は、回廊を歩いている内に矢鱈と目立つ例のとんがり帽子を見かけたので、後を

追う様にして謁見の間へと向かった。

少女に続いて入った聖堂は、彼にとってはやはり何度見ても壮観だった。

蒼い日光が両サイドに空けられた採光窓から溢れ、どうやって洗浄するのかも分からない程に毛の長い赤絨毯を照らしている。昨夜の審問会より人数を減じたとはいえ、やはり十分な数の貴族達が周囲の椅子に厳粛に座っているその広間には、何故か、審問会の時よりも更に数を増した衛兵達が、まるで主君を守る様に佇んでいた。

しかしそんな厳かな空気の中にあろうとも、国王陛下は泰然自若にして不動であった。王座に佇む隻眼の老人は、まるで眠る様な静けさでただ座り、憂う様に伏せた灼眼を侵入して来た人影に向けている。

青年が大扉を閉めた音や、この場の厳かな空気、そして少女の挨拶を聞いても身じろぎ一つしないその風格は、やはりこの老人こそは国の最高権力者なのだと、白衣の青年に納得させるには十分に過ぎる材料となっていた。

昨日のボロ着とは似ても似つかない、身嗜みを整えた陛下の佇まいに妙な感慨を覚えながら、青年は少女の隣にまで歩みを進める。

既に傅いている少女の真横に立つと、彼には国王の隣に控える大臣が何かを囁いているのがわかった。

大臣は、まるで陛下に耳打ちするかの様に――、

「……国王陛下。

国王陛下、起きて下さい。

2人が参りました」

「……」

……寝ていたらしい。

小太りの大臣に軽く肩を揺らされ、イビキを小さくくぐもらせたヘリアス王は、不意にその頭をカクリと落とした。青年はその様子に、打ち首にされた武者を連想してみたりする。

王はゆっくりとその隻眼を開きながら、口腔内がハッキリと観察出来る程の大欠伸(あくび)をし、グリグリと目を擦った。

「おやぁ？　お前さん達。
こんな朝っぱらから、何故にこんな所に集まっとるんじゃ？
朝食はまだだったのかぇのぉ？」

「……」

寝ぼけたコトを抜かしているヘリアス王に、大臣達は背後から更に何かを耳打ちしていた。本当に小声だった為に、青年には何を言っているのかなど聞き取れない。しかしとぼけた様に生返事をしている陛下と対象的に、大臣達を包むゲンナリとした空気には何となく哀れみを覚えたりしてみた。

……本当に、この爺さんに頭を垂れる必然性があるのだろうか。

この国の国民達の思考回路に著しい疑問を覚えたままに棒立ちしていた青年ではあったが、既に片膝を着いている少女や大臣達の睨みつける様な視線に気付いた為、取り敢えず少女に倣って片膝を着く

事にした。

ふむふむと唸っていたヘリアス王は、暫くするとその姿勢を正し、何事も無かったかの様に座り直した。

「――さて、大魔導　アルテミア・クラリス。
それから特務教諭・アサヒ　シンヤ殿。
昨日の働きは大義であった。
あ～、昨夜は十分に休めたかのぉ？」

コホンと咳払いをし、飄々とした体で尋ねる国王陛下。
“ええ、お陰様で。国王陛下も、随分とお休みになっておられた様で何よりです”。
……青年が口にしかけた皮肉は、少女の睨みによって止められた。
そんな彼の心中を知ってか知らずか、国王陛下はほうほうと続ける。

「それは何よりじゃ。
客人を疲れさせては王家の名折れじゃからのぉ。
――さて。今朝呼んだ理由は他でも無い。
一晩考えたんじゃがなぁ。
やはりお前さん達には、今回の件に関してちゃんとした褒美をやろうと思う」

「褒美……？」

予想外の言葉に、青年の目は丸くなった。
ツイと視線を少女に移すと、彼女も相当に意外だったのか、やはり訝しそうにその首を傾げている。
大臣達は既に知っていたのだろうか。昨日程明瞭に反対の意を示

す者は無かったものの、やはりどうにも不満そうな視線で2人の若者を突き刺していた。
王は剽軽に笑いながら続ける。

「ほほほ、そう訝りなさるな。
まあ、わしにも良心の呵責という物はあってのぉ。
単騎であの“武装姫”を食い止めたアルテミアは勿論として、特にシンヤ殿。お前さんは、一応アレだけの金を寄付してくれた金主という事になっておるからのぉ。国の財政を援助した英雄から、給金を3回分も巻き上げたままでは、流石のわしもちょいと心苦しいんじゃよ」

「……？」

青年はますます訝しげに首を傾げた。
“例の金は、王宮から特務教諭の任を得た青年が発掘した遺産であるとして処理をする”とは、確かに朝食の席で少女づてに聞かされた王の方針だ。流石にアレを貴族が溜め込んだ税金であると公表しては国民の反感は免れないらしく、また隠した犯人が貴族であるという決定的な証拠と呼べるモノも見つからなかった為に、苦しい言い訳ながらもそういう形にしておく事に決定したらしい。
それは青年にとっても、塔破壊の罪を免除するにはこの上なく都合が良い口実であった為に、まあ2つ返事で納得したのだが……。

しかし青年には、今の国王の発言には少々不可解なモノがあった。
何しろこの性悪爺さんの事である。“埋蔵金”の発見は昨夜の待遇と塔破壊の罪の免除で帳消しだろうし、そもそも彼自身は、三ヶ月分の給料であの“不死鳥の羽根ペン”を売ってくれたのは破格だと納得しているのだ。ならばこちらが恩義を感じる事はあれ、国王が良心の呵責に苛まれる必然性はどこにも無い筈なのだが――、

「シン……。今の話、ホント？」

青年がそんなコトを考えていると、少女が脇から口を挟んだ。
何故か底冷えする程に声を震わせて、全身からドス黒いオーラを滲ませながら……。
青年が思案顔で目を移すと、少女の肩が５ｃｍ程上昇した。

「ふざけないでよっ？
きゅ、給料の3回分って……？
あんた？　向こう3年間ただ働きするつもりなワケ？」

「……。
……年棒制だったのか」

……理解した。
そう言えば、特務教諭の給料が“月給制”であるなんて誰も言ってなかったなぁ、などと、今更ながらに自らに存在していた固定観念を認識して青年は感動してみたりする。成る程、コレがこの国の一般的な給与体制だという事だろうか。

あくまで大学教授の給料を参考にするのなら、という前提ではあるが、特徴教諭の年収は大凡８００～１０００万円程度であると推測するのが妥当だろうか。否、特務教諭が王宮直属の研究員である事や、その国家に対する重要性を踏まえると、それ以上の金額であった可能性すらも十分にあり得るだろう。

……3年分なら、ハッキリ言って家が建つ。
それも、かなり良いヤツが。

「国王陛下。
今更で恐縮ですが――」

“ゆめゆめ忘れるなよ”、と言った筈じゃが？」

「……」

……なるほど。
ある程度分かりきってはいた事だが、魔荷屋は再交渉を受け付けていないらしい。国王様ならあの羽根ペンなどいくらでも手に入る立場だろうに、それをここまで馬鹿げた値段で売りつけるとは……。
なんともこの爺さんらしいやり口に、青年は肩を竦めざるを得なかった。

「まあ、アレじゃよ。お前さんも知っての通り、我が“銀の国”は魔術師の国でのぉ。魔術師は、ほら。約束だの契約だのを後生大事にする生き物じゃろ？　つまりのぉ、この国では、1度交わした約束を反故にする事だけは認められておらんのじゃよ。
――まあその代わりと言っては難じゃが、ある程度の要望ならば聞いてやろうと思う。さて、何でも言ってみなさいな」

「……要望、ですか」

ヘリアス王の説明を話半分に聞きながら、取り敢えず羽根ペンと金の事に関してはもう諦めた青年。
隣から感じる少女の視線が痛かったがサラリと受け流し、彼はそ

の“褒美”とやらにでも期待しようと、なるべく前向きな解釈に努めてみる。

さて、やはり今1番の要望と言えば――、

「駄目元でお聞きしますが……。
元の世界に帰して欲しい、というのはどうでしょうか？」

「それは――。
流石にちょいと聞けんかのぉ」

まあ、当然だろう。
何しろ青年は、地球の知識をこの国に伝える為に呼ばれたのである。まだ搭しか壊していない現状で帰還を許したのでは、何の為に召喚したのか分かったものでは無い。

青年が帰還する事が有るとすれば、その方法は2通りしかあり得ないのだ。それは、昨日に文部大臣から状況を説明された段階で既に理解している事実である。

「……」

そう。シンプルに、方法は2通り。
端的に述べるならば、帰還を彼らに承諾して貰うか、或いは自力で帰るかしかあり得ない。
そのどちらを用いるにしても、或いは並列に事を進めるとしても、昨日の段階では時期尚早でしかなかったワケだが……。

青年は思案する。

もしかしたら、今は交渉するにはまたと無い好機なのでは無いのだろうか。

銀の国は魔術師の国。
魔術師とは約束を大切にする生き物。
王は今そう言った。
つまり一度“約束”さえしてしまえば、それがどんな物であれもう反故にはしない、と考えていいのだろう。
状況を静かに分析し、青年は小さく首肯した。

「……1つ、確認ですが。
貴方方が私をこの世界に喚んだ理由は、敵国が同じ様に異世界から協力者を喚び寄せているから。つまりは悪しき敵国から自国を守る為に、本当に仕方なく、苦渋の選択として私を連れて来た。
昨日私はその様に説明されましたが、その主張には変わりがありませんね？」

「……？　そうじゃが？」

ヘリアス王は僅かに眉を顰めながらも肯定した。
それに小さく頷きを返して逡巡する青年。
――もう1クッション。
青年はわざと不敵な笑みを作りながら続けた。

「敵国が異世界人を喚ぶから、私が必要になる。
対偶を取って、敵国が異世界人さえ喚ばなければ、貴方方も私を必要としない。
――つまり他の守護魔さえ居なくなってしまえば、特務教諭（わたし）は向こう100年用済みなワケですね」

「……何が言いたい？」

回りくどい口調に業を煮やしたのか。
国王の隣に控えていた小太りの大臣が口を挟んだ。
――ここが勝負所か。
青年は努めて言葉を選びながら、鍵となるセリフを口にする。

「今回、私は一切の褒美を要求しません。
その代わりと言っては難ですが……。
1つだけ約束をして戴きたいのです。
“私が脅威となる敵国の守護魔を倒し、この世界に残る守護魔が私だけになった暁には、必ず私を元の世界へと帰還させる”、と」

青年は努めて平静を装って国王を見据える。
気づかれてはならない。
悟られてはならない。
知らないままに譲歩させなくてはならない。
今の条件のまま、一言一句違わぬ状態で約束を取り付けなくてはならない。

見えない緊張が青年を圧迫する。

王はただ無言で、聞いているのか聞いていないのか分からない様な顔をしている。ただ、まるで青年の中身を透視するかの様にその灼眼を細め、ジッとその機微を伺っていた。
ヘリアス王は、感情の窺えない表情で、ただ彼の黒色の瞳を覗き――、

「……謀ろうとするな」

（チッ……）

王の言葉に先んじて、横合いから声が掛かった。

これは王座の隣に控えていた、小太りの軍務大臣が発した物である。

予想外ながらも核心を突くその一言に、青年は舌打ちしながら表情を歪めた。

「特務教諭・アサヒ　シンヤよ。

話をすり替えるならばもっと上手くやれ。

我々が問題としておるのは、“守護魔”では無く“敵国”の方だ。

貴様が帰還する日が来るとしたら、それは守護魔では無く“敵国”が倒れた時だ」

大臣は厳かにそう告げた。

帰還へのハードルが跳ね上がり、青年の涼やかな双眸には僅かに苛立ちの色が籠る。

否、その反応も当然だろうか。

何しろ青年にしてみれば、相手にするのが“守護魔だけ”なのか“敵国全て”なのかでは天と地程の差がある。

それは別に、個人では国を倒せない、などという一般論を述べているのでは無い。

彼自身に、敵国を打倒する為の知恵や力が不足している、などという事を述べているのでも無い。

否、確かにそういった要因も考慮に入れて然るべきではあろうが、それ以前に、この世界にはもっと確たる事実が存在しているではないか。

――そう。事実としてこの世界の国々は、今まで数え切れない程

の守護魔を喚んで来たというのにも関わらず、現在まで冷戦という形でその均衡を保っているらしいのである。それは下手な仮定や仮説よりも、遥かに純然たる事実としてそこにある。

ならば例え、青年がたった1人で奮起したところで、そう簡単に情勢が動くと考えるのは、あまりにも楽観的思考に過ぎるだろう。

自分にだけはその力がある、と過信するのは、彼にはあまりにも傲慢な考え方であるように思えた。

憎々しい感情を押し殺している青年に対して、軍務大臣は“ハン”と小さく鼻を鳴らした。憐憫に細められたその視線には、言外に愚か者を揶揄する様な色が含まれている。それを好機と取ったのか。まるで昨夜の復讐だとでも言わんばかりに、周囲の大臣達までもが便乗し始めた。

「下郎の分際で国王陛下を謀ろうとしたのか？　身の程を知れ？　この悪魔め？」

「流石はあの銀蠅が喚んだ魔人だ？　国王陛下？　やはり斯様な無礼者は、隣の溝鼠共々奴隷に墜としてやるべきなのです？」

「否々。いっそ希望通りに、サッサと魔界に追い返してやるのはどうですかな？　何しろ此奴は、既に隣の売女と一夜を共にしたそうではありませんか？　これ以上この国に居座られて、妙な病原菌でもバラ撒かれたら堪りませんからな？　ハッハッハッ？」

「……」

……野次は国会の華と聞くが、それはどうやら異世界でも共通の真理らしい。他にやる事とか無いのだろうか。真也は、政治家という存在につくづく嫌気が差し始めていた。

「いいじゃろう」

「は……？」

しかしその暴言の嵐は、あまりにも剽軽な嗄れ声によって遮られた。隻眼の老人は困惑する大臣達をふむふむと眺めながら、まるで梟の様にほうほうと続ける。

「確約にまでは出来んがのぉ。

まあ、お前さんへの借りは小さいとは言えんし。

……何よりなぁ。どうにもお前さん、さっきからわしの“左眼”には、“長く国に居座られると凶”と映っておるんじゃよ……。

あー、まあ、なんじゃ。その時の状況次第じゃがなぁ、そのくらいの要望なら、まあ前向きに検討してやってもいいかと思ってのぉ」

国王の言い分は、青年にはイマイチ要領を得なかった。ただなんとなく、まるでこちらが国家転覆でも狙ってるかの様な、その物騒な言い回しはなんとかならないものか、などと心の中で呟いてみる。

……まあ、信じる人間も少なかろうが。

「「「……」」」

「――って、アレ？」

しかし青年の予想に反し、何故か大臣達は青年に向ける態度を一変させていた。

具体例を上げるのであれば、ある者は完全に疫病神を見る目で青

年に怯え、ある者はそんな疫病神を喚び寄せた少女に対して憤り、そしてまたある者は、その“魔界の悪魔”が自ら世界を去りたがっている事に歓喜している。

……この国王、副業で占い師でもやってるのだろうか。王様に対する青年の疑問は尽きない。

――でも、まあ。アレである。

王の思惑は分からないが、それでも帰還を許可してさえくれるのであれば、彼としては何の不都合もありはしない。

よって彼は――、

「感謝します。ヘリクツ王」

「「「「……」」」」

……再び、無自覚にも、言葉という名の爆弾を投下してしまった。

「……ん？

なんだこの空――キッ？」

「お赦し下さい、国王陛下。

このバカには？　後で１００回程？　復唱させてっ？　覚えさせますのでっっ？」

掌底、裏拳、ボディーブロー。肘打ちで顎を撃ち抜いた後、脳震盪にフラつく青年を流れる様な動作で払い腰、という格闘ゲームも真っ青なコンボでK．Oしつつ、少女は国王陛下に頭を下げた。

呻き声をくぐもらせながらタップしている青年を海老反らせ、惨たらしくも関節技で締め上げている少女を微笑まし気に眺めつつ、王は尚も剽軽にその嗄れ声を発する。

「あ～。時に、アルテミアよ。
お前さんは、褒美はいらんのかえなぁ？」

「へ……？」

老人の問いを聞いて、漸く青年の腰椎に休息を与える少女。青年が涙目で何かを懇願していたが気にせずに、締め具合を緩めながらも拘束は決して解かない、という器用な事をやってのけつつ、彼女は自らの要望を思案した。

「私は……」

―――

謁見の間を後にした青年は、少女に連れられる形で渡り廊下を歩いていた。その黒い瞳には微かに涙が滲み、老人の様に前屈した腰に当てられた手は摩擦熱によって患部を温めようと必死になっている。それはあまり感情が面に出ない質の彼にとっては、やはり許容量を超えた苦痛の訴えであると言えるだろう。

もしや自分は椎間板ヘルニアでも発症したのではなかろうか、などと自身の年齢を完全に無視した不安を懐かされつつ、青年は昨日発見した自らの体質について思いを馳せてみたりする。

昨日の事件で分かった事は、どうやら今の自分は、多少の裂傷ならば随分と早く治るらしいという事実である。おそらくは守護魔とやらになった事が何らかの要素（ファクター）として関与しているのだろうが……。どうもその原理は直ぐには分かりそうに無いので、今は保留にしておくべきだろう。

ただここで問題となるのは、仮に多少の裂傷ならば直ぐに治る身体になった、という仮定をしてみたとしても、果たして脱臼や骨折や椎間板ヘルニアの場合についてはどうなるのだろうか、という点である。これから先もあんな化け物達に襲われるであろう事を考えると、何らかの傷を負う可能性は十分に考えられるワケで、青年は他の怪我についても予め試しておきたい様なおきたく無い様な、或いは自分で試さなくても某真紅の少女が勝手に実験してくれそうだという事実に割と複雑な気分になってみたりする。

「……（ブルッ）」

少女の右ストレートがフラッシュバックして、青年は知らず身震いした。

何しろ、１２歳で博士号を取得した彼である。クラスメイトは殴り合いの喧嘩をするには遥かに歳上であったし、つまりは野蛮な暴力などとは無縁な人生を送って来たワケであって、端的かつ簡潔に述べるのであれば、人間（ホモサピエンスに限らない）から身体的

苦痛を受けるなどという経験は、彼にとってそれこそ小学生以来の出来事なのである。

増してや自分と同年代の、（少なくとも外見は）可憐な少女に殴られるなどという経験はある筈も無く――。

……窓から吹き込む高層の風が、何故か矢鱈と冷く感じられるのだった。

青年の前で絨毯を踏み締めている少女は、何を思っているのか窓の外から見える街の光景を翡翠の瞳に映していた。しかし特に何かを見ているワケでは無く、頭の中で何かを考える為になんとなく眺めているといった体である。

青年も今は、少女には恨み言こそあれ会話するべき事柄も特には無かった為、連られる様にして何となく外を眺めて暇を潰す事にした。

窓の外から覗く街は、僅か1日で様変わりしていた。

秩序立っていた街並みは所々に綻びが生まれ、葉脈の様だった大通りは、まるで出来の悪いジャガイモみたいになってしまっている。

しかし街には、何故か昨日にも増して活気がある様にも思われた。時間帯が違うという事もあるのかもしれないが、穴だらけの道や潰れた家の周りには大勢の人々が集まり、どう見ても乱痴気騒ぎとしか思えない様な格好で街の修復に精を出している。たまに荷台いっぱいに瓦礫を積んだ馬車が王宮の隣の方から来るのを見ると、おそらくは時計塔跡にも山の様な人数が集まっているのだろう。

どうやら時計塔の崩壊は、なにもこの街にデメリットだけを齎したワケではなかったらしい。考えてみればあれだけの建造物を再建しようと思えばそれなりの人手が必要になるのは当然であって、ニューディール政策の例に漏れず、国家事業規模の大工事は雇用を生み出し経済を潤す。

増してや、銀の国は魔術師の国である。青年が少女に聞いたところによると、この国の建造物は魔法金属で造られるのが基本である為に、建築は部品の加工から設計に至るまで専門の魔導師が行うのが一般的らしい。王宮のお抱えになるほどの実力が無く、知名度の低さによる依頼の少なさから貧困に喘いでいた魔導師達も人手不足故に駆り出され、またこの国では軽視されがちな力仕事の人間も多分に登用されるのはほぼ確実だという。つまり王都は、今や降って湧いた景気向上の兆しにフィーバーしていたのだ。
この好景気は、塔が完成するまでの数年は続く見込みらしい。

「あんたさ」

青年が適当な思索を巡らせていると、不意に少女が何かを呟いた。
青年は目線だけを少女に向けて、とくに意識もやらずに続きを聞く。

「せっかく国王陛下が褒美をやるって言ってるのに、あんなので良かったの？」

少女は視線を窓から外さずに、まるで独り言の様にそう尋ねた。
あんなの、というと、全ての守護魔を倒したら帰ってもいいという約束の事だろうか。

青年が質問の意図を掴めずにいると、少女は更に続けた。

「国王陛下。多分あれで、アンタの事けっこう気に入ってるよ？
ある程度の要望なら叶えるって話、嘘じゃ無かったと思う。
……貴族位くらい要求してやれば良かったのに。
上手くすれば、あの王宮にずっと住む事だって出来たんじゃない？」

「……そんな事か」

少女の言わんとする事を理解して、青年は軽く嘆息した。
要するに彼女には、青年が折角の立場確立の機会を不意にした様に思えたのだろう。なるほど、確かに昨夜垣間見たあの暮らしを考えれば、そういう意見もあり得るのかもしれない。
豪勢な食事に、豪奢な寝室。過ごす分には何もかもが高級ホテル以上で、あそこで過ごしていいと言われれば、それこそ文句の出る人間など居る筈も無いだろう。

だが青年は、それはあくまで昨夜1日で済んだから言える事だと考えている。窮屈な正装に、息の詰まる様な大臣達の顔。要するにああいう会食は、数年に1度くらいだから有難いのであって、毎日毎日経験してはただ息苦しいだけなのだ。
そもそも四六時中誰かに囲まれて生活するなんていうのは、青年の性格的に許容出来る物では無い。

何より――、

「あのな。オレは元の世界に帰るんだぞ？
この世界で偉くなってどうするんだよ」

青年は当たり前の様にそう答えた。
事実それは、彼にとって当然の答えである。
金も、地位も、例えどんなに手に入れたとしても、決して地球に持ち越す事が出来る物では無いのだ。ここでの生活を多少は楽にしてくれるかもしれないが、それでもすぐに失くす事が決定している物である以上、帰還への足掛かり以上に求める理由などありはしない。

「……」

青年がそう言った瞬間、何故か少女は立ち止まり、ゆっくりと振り向いた。
少々俯いている為にその表情は伺えないが、青年には、少女の佇まいには無色の翳りが含まれている様に感じられた。

「……あんた、そんなに帰りたいの？」

「……？」

おかしな事を聞く。
何しろ青年は、一方的に拉致された上に生殺与奪を握られ、挙げ句の果てには化け物達と殺し合いを強要されている身なのである。
（改めて列挙すると酷い立場である）
帰りたいと思うのは当然であろうし、むしろ留まりたいと思う理由を探す方が難しいだろう。
――少なくとも、彼はそう考える。

暫し困惑する青年。彼が目を丸くしていると、やがて少女はハッとしたかの様に息を飲んだ。
そして気まずそうな、或いはバツが悪そうな表情で目を伏せて、申し訳なさそうに続けた。

「……ゴメン、どうかしてた。
あんただって、家族とか友達とかいたんだもんね。
帰りたいって思うのは普通か……」

「……は？」

納得した様な、少女の言葉。
しかしそれを聞いた青年は、今度こそ本当に呆然と目を瞬いた。

――家族。友人。
名称が異なるだけで、指し示すのはどちらも“人間”の事だろう。
そんなモノ、疎ましいとは思えど、恋しいと思う理由はどこにもあるまい。
仮にそういう関係にあるヒトが地球に存在していたとして、どうしてそれが、自分に帰りたいと思わせる要素（ファクター）になり得るというのか。
どうして少女は、そんな理解出来ない解釈で納得して、剰えあんなに申し訳なさそうな表情（かお）をしているのか。

青年には終ぞ、少女の思考を理解する事は出来なかった。

「そういう君こそ、随分と所帯染みてたな。
まさか“当面の生活費をお願いします”とは……。

そっちこそ、貴族位でも要求してやれば良かったんじゃないか？」

――問いを返す。

妙な霞が掛かった脳を覚醒させるかの様に、青年は話を変える事にした。

少女はゆっくりと顔を上げたかと思うと、自前の吊り目をなおも吊り上げて、刺々しくキッと睨んでくる。

「あんたね……」

……何が気に障ったのだろうか。

少女は突如大きく息を吸い込んだかと思うと、いつもの如く大音声で何かを喚き散らし始めた。

曰く“誰のせいだと思ってるのよ”とか、“あんたの給料が無くなったからでしょうが”とか、バカとかバカとかバカとかバカとか……。

そして最後に少女は、まるで締めくくる様に息を落ち着かせて、

「大体……。そんなの要求しても意味無いのよ。

あたしだけは、絶対に貴族位なんか認めてもらえないんだから」

感情の伺えない声でそう告げた。

少女は僅かに瞳を翳らせて、窓の外へと視線を流す。

少女の表情は理解出来なかったものの、なんとなく、青年も窓の外へと目を移してみる事にした。

窓から覗く最果ての地平線には、少女の館が霞んでいる。

この年端もいかない少女が、高い防壁で隔絶されたあの丘に住ん

でいる理由など、この時の青年にはまだ知る由も無い事柄であった。

23.　異世界に於けるとある名著からの引用を利用した現代魔導理論の基礎的

はい！！　とりあえず、今回はここまでです！！
その、一応、一週間に一話くらいのペースで投稿できるように頑張りますので、ちょくちょく覗いていただけると嬉しいかな～、なんて思います。
……はい。やっぱり、学校の授業とかあるとちょっと厳しいです。
数式とか計算とか大っ嫌いです。
あと、年号覚えたりとかすると頭痛が発生します。
そ、そんな感じですけど、とにかく、これからもよろしくお願いします！！

２４．　魔導研究所所長による新任特務教諭への施設案内及び異世界に於いて思う

異世界生活三日目の午前中は、青年にとってひたすら少女に引っ張りまわされるだけの時間となった。

全ては研究所に入った瞬間に少女が告げた、

「午前中は研究所を案内しようと思うの」

の一言から始まった出来事である。まあいくら給料が無くなってしまったとはいえ、今の青年がこの研究所の職員であるという事実には変わりが無く、つまりいずれはここで働かなくてはならない立場であるのだから、彼もこの提案には快く賛成したのだが……。

――結論から言う。青年は、まだこの世界を嘗めていた。

“午前中で研究所を案内する”という提案が、どんなに無茶な物なのかを全く理解していなかったのである。

少女の提案を聞いた時の青年は完全に失念していたものの、この世界は建物だとかモニュメントだとかいう話になると、地球のそれに比してバカみたいに大きいのだ。どうやら大臣様が言うところの“銀の国の強大な国力の象徴にして荘厳なる魔導研究所”とやらもその例に漏れるつもりは全く無いらしく、眩いばかりの白銀の外壁には、一個大隊が隊列を組んで出撃できるほどに大きな扉が５４０も連なっている。

……そう。つまり少女は、この建築基準法も知らない扉のお化けみたいな建物を、僅かに午前中のみで回ろうと仰っていたのである。

研究所の内部は、設計したバカに蹴りを入れたくなるほど広大なフロアが４つのブロックに区切られていた。少女によると、それが

全部で9階層もあるらしい。
おおまかな傾向を述べるのであれば、ちょうど各フロアが火、氷、土、風の4つの属性別に分かれており、さらに階層が上がるに伴って扱われる魔術の難易度や魔導師の格が上がる形である。王宮からの渡り廊下は5階にあった為に、青年は研究所を1階層づつ駆け足で案内されながら上に連れていかれることになった。

1階層につきのべ数キロは歩かされようかという肉体的疲労に加えて、事情に暗い職員達から向けられる好奇の視線による精神的疲労。更には時折飛んでくる魔術の流れ弾や、“ごちそうだー”とでも言わんばかりの形相で向かってくる謎の魔法生物達による精神的苦痛も加算され、3階層もまわった頃にはすっかり減量中のボクサーみたいにされてしまった青年。

「休ませてくれ？　何だらしない事言ってるのよ！！
まだ半分も見て回ってないんだから、休憩なんかしてたら日が暮れちゃうじゃない！！」

……などという少女の不満もなんとか押しのけて、確かに情けないな、などと思いつつも、残りの案内はまた後日ということで勘弁してもらったのであった。

――――――

適当な所で休むのは逆に危険だと忠告された青年は、休憩場所へ向かうという口実で結局研究所の最上階まで引っ張られる羽目になった。ヘトヘトの身体で一番危険なフロアを闊歩させられ、不満を言う気力まで失わされながら、最終的にその最奥の部屋へと引きず

り込まれる。入るときにチラリと見えた大扉の上には、荘厳な研究所には似合わない可愛らしい書体で“所長室”と記されていた。

部屋の中は汚かった。正確に述べるのであれば、汚いというよりも散らかっていた。もっと正確に述べるのであれば、間違いなくきちんと整頓されている筈なのに、何故か散らかっているようにしか見えないという器用な惨状になってしまっていた。

なにしろその部屋は、青年の研究室よりも二回りは容積がありそうなのにも関わらず、その3分の2以上を魔導書と本棚に占拠されている。内包された物量が大きすぎて足の踏み場も無いその有様は、この部屋が人では無く本を収める為に造られたのではないかと錯覚させられる程であった。本来であれば部屋を煌々と照らすべき陽光は、あちこちに聳える本の山に遮られ、部屋全体に落ちる影が訪問者への圧迫感を3割ほど増している。

「……なんと表現するべきか。
これはまた……、筆舌に尽くし難いほどにいかにもな部屋だな」

人間用に残された、僅かな空間を満たすインクの芳香を嗅ぎながら、小さく呟く。
昨日から人々が口々に唱える呼称からここが少女の部屋であるとあたりを付けた青年は、彼女と本の山を交互に見遣りながら、深々と溜息を吐いた。

「あの屋敷を見た時にも思ったが、ここもまた大概だ。
まさかとは思うが、コレ全部読んだのか？」

「そんなワケ無いでしょ。
あんた、あたしをなんだと思ってるのよ」

「聞いてみただけだ」

軽く眉を顰めながら、少々不満げに返答する少女。
半ば以上に分かりきっていた答えであった為に、青年も特に感慨も覚えずに頷いた。

――計算してみれば自明だろう。
仮に少女が毎日欠かさず1冊の本を読みきる程の読書家であるという仮定をしてみても、彼女が5歳で文字を覚えたとして、１０年やそこらで読める本の数は僅か３６５０冊程度でしかない。真也の大学の図書館でさえ確か１７６万冊くらいの蔵書があったのだから、この少女はあの屋敷の本を読み切っている可能性すらも皆無だろう。否、それ以前の問題として、普通の人間ならば一生掛っても、図書館の本など１００分の1も読み切れはしないという計算結果が出る。
……つまり少女のように大量の本を持っていたとしても、人間の寿命で活用しきることは絶対に不可能なのである。

そんな彼の分析を知ってか知らずか、少女は少々不機嫌そうな視線を彼に向けていた。

「……ナニよ、その目。
あのね。本っていうのは、知らないことを調べる為にあるの。
１回読んで内容知ってる本なら、わざわざ部屋の中で嵩張らせといても邪魔なだけじゃない」

「それはそうだが……。

今時、もっと便利な物はいくらでも――」

言いかけた青年の疑問は、口をつく前に自壊した。

なんのことはない。

要するにこの世界には、その“もっと便利な物”が無いのである。

例えば青年が地球で論文に引用する資料を探すとしたら、信用性のあるサイトに検索を掛ければ直ぐに最新の論文がデスクトップに表示されるだろう。場合によっては、それを書いた研究者と、電話や掲示板で直接意見を交換することすらも可能である。近年のネットワークの発達という波に乗り、電子化されてない古い資料でもない限り、最近では本を開く機会もめっきり減った。

この部屋の書籍群は、確かに膨大だろう。

しかしこの程度の情報量であれば、地球ならばＵＳＢメモリー１つで事足りるのだ。それが無いこの世界で真っ当な方法論を用いて研究しようと思えば、なるほど、必然的に巨大な書庫を抱えてその都度必要な本を取ってくるしかないということだろうか。

「……ふん。多分、あんたが思ってるほど不便なものでも無いと思うけどね。

必要な本を検索して手元に飛ばすなんていうのは、魔導師にとっては基礎どころじゃないから。

まあ。この部屋もあの屋敷も貰い物だから、あたしもどんな本があるのか、完全に把握しきれてるわけじゃないんだけど……」

そんなことを言いながら、少女は本棚に埋もれているデスクの椅子にヒョイと腰を下ろした。貰い物というのは嘘ではないらしく、年季の入ったアンティーク調のその椅子は、少女の体格に比べると不釣り合いに大きい。脚を組んでいるのは、少しでも“らしく”見

せようという彼女のプライドなのかもしれないが、少女特有の柔らかさを感じる生白い脚は、やはり格調高い重役椅子には不似合いに感じられる。

青年は、父親の仕事机に座らせてもらっている愛娘を連想した。

少女に促されて、真也はデスクの正面に埋まっていたソファーへと腰を掛けた。

年季の入った黒革に体を沈めると、鉛のような両脚から力が抜けて、なんとも言えない安堵が全身に広がる。……多少埃っぽかったが、今はまあ気にするまい。

ぬるま湯のような血液が緩やかに脚を上り、再び熱い溜息が漏れた。

――指を鳴らす様な、パチンという音。

反応して視線を上げると、少女の隣には青い木箱がフヨフヨと浮いていた。少女が再度指を鳴らしたのを合図に、今度は箱から1本の薬瓶がピョンと飛び出る。確かアレは、ポーションとか呼ばれていたこの世界の嗜好飲料である。

「何ポがいい？」

酷く聞き慣れない略称で物を尋ねながら、少女は箱の口を真也の方に向けた。

箱には例の“氷の魔法円”とやらが描かれていたのか、中に並んだ色とりどりの液体が入ったビンには結露が付着している。飲み頃らしい。

真也は昨夜の晩餐会にて飲んだ、フルーツティー風味の“赤ポーション”も中々に気に入ってはいたが、今はなんとなくその隣でブルーハワイのシロップみたいな姿を晒している“青ポーション”に

対して好奇心が湧いたりしてみる。「青ポ」、などと不愛想に答えながら、飲み物に選択肢がある場合にはついつい飲んだことが無い種類を選んでしまうのは果たして学者の性なのかと、青年は小さく首を傾げて思案するのだった。

空間を滑る様に飛んできた青ポーションを手で掴み、コルク栓をポンと外して、中身を口に含んでみる。“青ポ”はキツイ見た目の割には随分とサッパリしていて、柑橘系の風味をしていた。色にさえ目を瞑れば、味的にはライムが最も近いかもしれない。甘みが少なく、鼻から抜けるミントの様な芳香は、確かに食後の口直しには十分に役に立ってくれるだろう。なるほど、嗜好飲料になるはずである。

爽やかな香りに精神を落ち着けながら視線を戻すと、少女も先のビンを両手に持ち、可愛らしくもコクコクと、その中身を小さな口に含んでいた。

……余談ではあるが、彼女が飲んでいる液体は、何故か毒々しい赤紫色をしている。見た目だけで言えば、なにやら色々ヤバいモノを混ぜ込んだヨウ素液である。奇妙な程にトロトロとしたその水面には、恐竜図鑑でしか見ないような葉っぱが沢山浮いていた。

昨夜の晩餐会で、アレと同じモノを飲んでいる人間が一人もいなかったという事実は秘密である。

ポーション？　を3分の1くらい飲んだ少女は、口元からビンを離すと、チロリと舌を出した。花弁の様な赤い唇を、姫苺の様な舌が、可愛らしい仕草でちょこんと舐める。唇に付いた飲料を軽く舐

め取ってから、彼女はビンを太腿の上にまで下げた。

「……そんなに退屈だった？」

「――――？」

落ち着かない様子で脚をブラブラさせながら、少女は呟く様に尋ねた。

アンティークの椅子からはキシッ、キシッという軋む様な音が規則的に生まれ、少女が下げたビンの水面は、その音に合わせるかの様に波紋を作っている。その妙に不安そうな、居心地が悪そうな雰囲気は少々気にはなったものの、質問の意図が理解出来なかった青年は、小さく首を傾げることで意思を示した。

「誤魔化さなくてもいいのよ。
そんなに疲れてるってことは、それだけ退屈だったってことでしょ？

まあ一般人のあんたから見れば、魔術なんて小難しいだけで、面白くもなんともないのかもしれないけど……。
……あたしも案内とか、あんまり慣れてないし」

「……」

……もしやコレは、自分の案内は耐え難いくらい退屈だったのかもしれない、なんて事を心配しているのだろうか。このお転婆な少女がそんな事を気にするのは少々意外に感じられ、青年は少々反応に困った。

「……あのな、オレは学者だぞ？
慣れない場所を引っ張りまわされるのが疲れただけで、君の紹介してくてれた魔術とやらは、十分に興味深い現象だ。
機会があれば、一度まじめに習ってみたいくらいだよ」

取りあえず、退屈だったというのは酷い誤解であった為に、素直に返答する。
――ポーションとやらには、鎮静作用でもあるのだろうか。
自分の内心を人に話すという、非常に稀な行動を取った自分に少々面喰いつつ、青年はコクリともう一口、ポーションを含んで飲み込んだ。
少女は一言だけ「そう」と相槌を打っただけで、半分以上中身の入っている薬瓶に視線を落としていた。

「……」

「……」

――会話が途切れる。
少女は相変わらずバツが悪そうな表情を浮かべながら、手に持った薬瓶をクルクルと回している。青年は、初めはそれをこちらの飲むペースに合わせてくれているのだ、と解釈していたのだが、今では少女の性格的にそれは無いだろうと思い直している。
……彼女には、自分が飲み終わった時点で相手が飲み終わっていなかった場合、顎をこじ開けて無理矢理残りを流し込ませるくらいの所業が似合っているだろう。

「……」

妙にソワソワした態度。

少女は借りてきたネコを思わせる挙動不審さで、視線が定まらずに部屋中をキョロキョロと見回している。いや、部屋を見ているというよりも、どちらかと言えば青年から視線を外しているような感じであった。

「……。

……どうかしたのか？」

流石に気になったので、彼は何となく問いかけてみた。

いや。本当に大したことはないのだが、（少なくとも見た目は）目を奪う程に可愛らしい彼女にこういう態度を取られると、青年も妙に落ち着かなくて困るのだ。

少女はキュッと目を閉じてから、コホンと咳払いをした。

「べつに、そうじゃないけど……。

こうやって誰かとお茶飲むとかさ。

……ちょっと、初めてだから」

「……。

そうか……」

再びポーションに口をつけながら、ポツリと答える少女。

照れを隠す様な声色のその返答は、しかし青年の胸には妙にスト

ンと落ちた。

真也がこの世界に召喚されてから、今日で3日目。

確かに彼は、少女が誰かと親しく話をしている光景など見たことが無かった。

否。それどころか青年は、貴族も民衆も皆、彼女からは一歩距離を置いているような印象を感じていた。

加えて彼女は今、一番寛げる場所として青年を自室に連れてきた。

今の真也にとって一番寛げる場所とは、つまり一番他人の目が少ない場所、という事ではないのだろうか。

「……」

詳しい理由は分からない。

癇癪持ちな少女の性格も、原因には多分に含まれているのだろうし、それ以外にも何か理由があるのかもしれない。

ただ少女は今、誰かとお茶を飲むのが初めてだと言った。

家族や友人が元の世界に帰りたくなる要素であると納得した彼女が、家族や友人を含めて、こうしてお茶を飲むのが初めてであると。

それが意味する物とは、一体なんなのだろうか。

この年端もいかない少女が過ごして来た人生（じかん）とは、果たしてどんな物だったのだろうか――。

「……なんて顔してるのよ」

「？　なんて顔って、いつもの顔だが？」

「……ウソ。なんか今、骨折した乗用馬とか見るような目してた」

苦虫を噛み潰した様な少女の顔。

ジト目で青年を睨みつけながら、彼女はそんなよく分からない例えを持ち出した。

そういえば馬は、確か骨折して立てなくなったら処分される生き物で、馬肉として出荷される運命ある生き物だったはずである、なんて、青年の頭にはそんな無駄な知識が何気なしに過ったりしてみる。

……要約すると、自分は彼女に哀れむ様な視線でも向けていた、という事なのだろうか。

青年にはまるで自覚が無かったものの、少女が言うのならそうなのかもしれない、などと、彼は少々思案顔になってみる。

少女は、眉を顰めながら腕を組んでいた。

「……ふん。どうせあんた、あいつらがいつ攻めてくるかも分からないのに、呑気にお茶なんか飲んでる場合じゃないだろ、とか言いたいんでしょ？

そんなの杞憂よ。虹の橋（ビフレスト）がある限り、どうせあと8日は誰も攻めて来ないんだから」

「ビフレスト？」

聞き慣れない単語が聞こえた気がして、青年は思考を中断した。

そういえば、少女が噴水の広場で汚れた水（略して汚水）を掛けてくれやがった時にも、同じような単語を呟いていた様な記憶が頭を過る。確か、複雑だとかなんとか。

少女は「うん」と返事をしながら続けた。

「簡単に言うと、この世界の国境のことね。
この世界には6つの国があって、それぞれの国は果ての無い平原（ヴィーグリード）を中心にして放射状にあるって話、もうしたでしょ？
虹の橋っていうのはね。隣の国に行く時に、唯一通行が許されてる所なの。
各国が両隣の国と繋がった橋を2つ。あと“果ての無い平原”に繋がってる1本を含めて計3か所ね」

「？　つまり、関所だろ？
複雑でもなんでも無いじゃないか」

少女は小さく首を振った。

「虹の橋はただの関所じゃなくて、休戦協定も兼ねてるのよ。
主な役割は3つ。
通行人数の制限と、通行期間の制限。それから、違反した国への罰則ね。
これがなかなか良く出来てるから、殺したいほど憎み合ってる6大国も、今のところは特に目立って戦火も無し。お陰様で冷戦なんてろくでもない状態が続いてるってわけ」

「……休戦協定、か」

諦観した様に語る少女の言葉を聞いて、青年は少し考えてみた。
――通行人数制限と、通行期間制限。
やや抽象的ではあるが、まあ休戦を考えれば基本的なルールだとも言える。
おそらくは、どちらも大規模な軍隊が他国で暴れるのを防ぐ為の

ルールなのだろう。

「もうちょっと詳しく説明するとね。
　1つ目の通行人数制限っていうのは、一度に橋を通れる人数は、最大で9人までっていう決まり。
　2つ目の通行期間制限は、一度橋を通った人は、9日間同じ橋は通れないっていう決まり」

「一度っていうのは往復の事か？」

「片道よ。しかも、空を飛べる乗り物に乗ってる場合でも、国境を越えるときには必ずここを通過しなきゃいけないっていう制限付き。
　例えば仮に、あたし達が隣接の橋を使って武の国に行ったとするでしょ？　その場合には、武の国の中で9日間待つか、別の橋を使って回り道して帰らなきゃいけないって事。
　……あ、そういえば昨日の筋肉コンビだけど。
　あいつら、多分隣接の橋から来たんだろうから、今頃ヤバい魔獣がゴロゴロしてる“果ての無い平原（ヴィーグリード）”をうろうろしてるんじゃないの？」

“いい気味ね”と、少女はゾッとするほど妖艶な笑みを浮かべながらそう言った。
　どうやら、あのお姫様がしているであろう苦労を思って痛快に感じているらしい。
　……つくづく犬猿の仲である。

　対して青年は、休戦協定だというその橋のシステムとやらをもう一度よく吟味していた。
　簡単に考察してみた結果は――成程、悪くはないかもしれない。
　もしもそれが完全に成り立つのなら、という条件付きではあるも

のの、確かに武装戦力が9人やそこらでは軍隊などとは言えないし、それで敵国を攻めようなどとは思わないだろう。
軍隊を小分けにして送るなどして、密かに敵国に大軍隊を送る事が出来た場合でも、今度は二つ目の条件が致命的になる。万が一敵国軍に遣り込められる、などの不足の事態が発生してしまった場合、隣接の橋が使えないのであれば、今度は敵国を突っ切らなくては撤退もままならないからである。少数ならばともかくとして、大人数では必然的に動きが遅れ、別の橋まで辿り着く事が難しくなる。

「……」

青年は、なおも思案する。
なるほど。もしもコレが完全に成り立つのならば、という仮定の上ではあるが、よっぽど国力に差でも無い限りは、迂闊に敵国に攻撃を仕掛ける事なんか出来ない訳だ。
要約するとこの虹の橋（ビフレスト）というシステムは、9日間敵国に滞在が許される様な人物か、もしくは別の橋を通って国に帰還出来る様な少数精鋭。或いは、両国合意の上での大使などしか他国には行けない、という事を意味している。

さて。問題があるとすれば――。

「……で。それはどこのどいつが管理してるんだ？」

――この点だろう。

そもそもこのシステムは、国を完全に律する事が出来る組織が存在しなくては成り立たない筈ではないのだろうか。

すでに聞いている情報を統合すると、六大国の国力はほぼ同等。そして警備すべき関所の数は、隣接の二国と中央の平原に至る所の計三カ所。ならば自明の理として、一つの関所に裂けるであろう人員は、侵攻して来る敵軍に比べれば紙にも等しい数しか用意できない筈である。よって、各国が自主的に管理しているなんていう可能性は初めからあり得ない。このシステムを成り立たせる為には、敵国の軍隊を止め得る程の戦力を持った組織が、関所付近に常時駐在していなくてはならない筈なのだ。

しかもその組織に要求されるのは、決して戦力だけでは無いだろう。仮に関所を設けたとしても、いくらなんでも物理的に通れる場所がそこしか無いとは考え難い。つまりそれは、“虹の橋”以外から進軍されると手の打ちようがないという事実を示唆する。それを防ごうと思うのであれば、その“橋を管理している組織”は、敵国の軍隊を丸々止める戦力のみならず、その動きを完全に察知するだけの諜報技術まで併せ持っていなくてはならないという事になる。

……そんな巨大戦力が、全国家冷戦状態の火薬庫みたいなこの世界で、堂々と存在しているとでも言うのだろうか。考えれば考える程、青年には、このシステムを現実に成り立たせるのは無理がある様に思えてならなかった。

青年がそんな事を考えていると、少女は軽く肩を竦めて見せた。

「橋を管理してるのは“橋の番人（ヘイムダル）”って連中よ。古くから橋を守ってきた民族で、諜報の秘術を持ってるって事以外、あたしもよく知らないけど……。

――まあ、流石に大挙してやって来る軍隊を止めるほどの力は無いから、いざどこかの国が戦争を仕掛ける段になったら、別に止め

はしないらしいけどね」

「……だよな」

真也は当たり前のように相槌を打った。

勿論彼はそんな連中の事などまるで知らなかったが、仮に戦争を起させない事が目的であり、尚且つ国と真っ向から戦って勝てる程の戦力があるのならば、そもそも通せんぼなんかに甘んじている必要はまるで無い事くらいは分かるからである。自分たちで団結して世界征服でもした方が、戦争を無くすには遥かに手っ取り早くて旨味があるだろう。

……仮に少女の言う“諜報の秘術”とやらがどれほど優れていたとしても、戦力の伴わない組織では情報などいくらあっても宝の持ち腐れでしか無い。

青年は、大きく溜息を吐いた。

「……そんなの誰が守るんだ？

殆ど努力義務じゃないか。

それで何百年も冷戦状態とか、この世界の人間はバカか？」

「それがそうでもないのよね」

ピン、と、少女は3本の指を立てながら青年の揶揄に答えた。

どう見ても若すぎるのに、青年には一瞬だけ、この少女が学校の先生に見えてしまった。

「そこで重要になるのが3つ目の役割、違反者への罰則ってわけ。

……連中、止めない代わりにこう言ってるらしいのよ。

『我々の管理を好ましく思われないのであれば、その意思を尊重いたしましょう。

９日程、貴国に隣接する全ての橋の制限を解除いたしますので、その間、私共が本当に不必要かどうかを熟考なさって下さい。
新たな試みをなされる貴国を讃え、我々はその行いを、角笛にて全世界に響かせましょう』
――ってね」

「……なんだそれは。
要するに、注意しても聞かないんならボイコットしてやる、って事だろ？
そんな拗ねた子供みたいな条件で誰が――。
……って待てよ。制限解除に、全世界への報告？」

もう一度よく思案し直してみた青年は、この条件の意味するところに気が付いた。
“９日間の制限解除と、世界中への報告”。
つまり少女の話を要約すると、協定を破った国は橋の制限が解除される上に、少女が言うところの“諜報の秘術”とやらで軍隊の動きを世界中に告げ口されてしまうわけである。

少女に説明された、この世界の地理が思い出される。
大陸の中心に広がる平野と、それを囲むように隣接する６つの国。
それはつまり、それぞれの国は、必ず２つの敵国と隣り合う状態になっているという事である。

例えば仮に、この状態で銀の国が武の国に侵攻でもしたとしよう。
この場合、武の国と反対方向に位置する氷の国はどうするだろうか。
傍観する可能性も有るには有るだろうが、背中を叩く様にして銀の国に攻撃を仕掛けても何ら不思議は無い。そもそもの前提として、この世界の地理は、既に下手な侵攻など出来ない程に睨み合った状

態となっているのである。

さて。ここで、先ほどのルールを加えて考察してみよう。

再び銀の国が武の国に侵攻したケースを考えると、この時には銀の国に隣接する全ての橋の制限が解除されるのだから、氷の国が銀の国に攻め入る分には一切の罰則が無い。しかも氷の国にしてみれば、優秀な間諜が銀の国の動きを逐一報告してくれるオマケ付きである。青年が采配を握る立場であったとしたら、おそらくは喜び勇んで出撃するに違いない。

「……なんて陰湿な」

知らず、溜息混じりに悪態が漏れる。

しかし、なるほど。確かに、上手くいきそうなシステムかもしれない。

戦争を禁止する為に国際規模の組織が存在しているワケでは無いが、結果として各国がそれを避ける為の抑止力に組み込まれてしまっている。

「まあ。橋の番人達も、表立って戦った記録が少ないってだけで相当な手練れ達だって言われてるしね。　各国も絶対に勝てるっていう保証が無い限りは、なかなか戦争なんか仕掛ける気になれないってわけ」

再びポーションに口をつけながら、少女は肩を竦めて説明を終えた。

―――――

その後の会話は、特に特筆する事もないくらいに他愛のない物となった。

６大国がどんな特徴を持っている国だとか、各国の召喚主の噂だとか、伝説の魔法使いの伝説だとか、そんななんてことの無い噂話である。

武の国のお姫様に対しては、少女の矢鱈と口汚い説明が目立ったものの、説明に要した語数が一番多かったことに気が付いた時には、青年はつい呆気にとられた物である。

最も、それを指摘した瞬間には強烈な罵詈雑言の嵐を貰う羽目になったが……。

現状の説明とはいえ、長々と話した事が良かったのだろうか。

そんな素っ気ない会話をしている頃には、少女もすっかりいつもの調子を取り戻した様子だった。大臣達や国王のダメさ加減について共感しながら、二人はクイッとポーションの残りを飲み干す。

「それじゃ、そろそろ行かない？」

空になった瓶を空き箱の中へと飛ばしてから、少女はピョンと床に飛び降りた。

「……やれやれ。

今度はどこに連れて行くつもりだ？」

散々引っ張り回された記憶がまだ堪えているのだろうか。

どうにもつれない様子の青年。

少女はタンッと床を蹴りながら、扉の前でフワリと振り返ると、

「――魔術に興味があるんでしょ？
あたしも、あんたの準備期間に合わせて休暇貰えたからさ。
基礎知識くらいなら教えてあげる」

息を呑むほどに、可憐な笑顔でそう言った。

……この時の彼らは、まさかこの提案が“あんな争い”に発展するなんて、全く予想すらもしていなかったのである。

２４．　魔導研究所所長による新任特務教諭への施設案内及び異世界に於いて思考する

はい！！　と、いうわけで、一章でぼかしてた設定なんかをちょっと詰めてみちゃいました。

いえ、その。作者はあんまり政治とか詳しくないんで、あちこち無理があったり、矛盾とかもあったりするかもなんですけど……。

はい。アドバイスとか、ご意見とか、書き込んで戴けるとすごくうれしいです。すごく助かります。なのでこれからもよろしくお願いします！！

25. 真理を探求する上での根本的な世界観及び大前提を完全に異にした二つ

ちょっぴり長いです。

25.　真理を探求する上での根本的な世界観及び大前提を完全に異にした二つの

薄暗い空間に、焼け焦げた様な臭気が籠っている。
赤銅が楠んだドーム型の天蓋は無機質で、まるで有機物の混入による精緻の紛れを嫌っているかの様だ。十数メートルはあろうかという高さの天蓋から無数にぶら下がっているアレは、換気用のプロペラだろうか。風力発電機を思わせる巨大なウィンドミルが、硝煙に粘る空気を捏ね回すかの様に、ゴウンゴウンと回っている。

「ここが第三修練場。
規模としては、まあ魔導研究所（ヴァルスキャルグ）じゃ真ん中くらいね」

――コツン、コツン。
革製のブーツが、乾いた音を鳴らしている。
鼻腔に張り付く様な、薬香を思わせるこの空気の粘度も、おそらくこの少女には慣れた物なのだろう。例えるなら、一般人ならば須らく頭痛に苛まれる程のホルマリンの臭気を、熟練した医師が気に留める事を忘れる様に――。
彼女はこの場の異常な空気をまるで正常の如く呼気としながら、いつもと変わらぬ声色で、青年をドームの中心へと先導した。

「それじゃ、先ずは理論の方から簡単に説明するけど……。
大丈夫？　なんか顔色悪くない？」

「……」

翡翠の瞳が、見上げる様にして青年の顔を覗き込む。
案じる様なその視線に、しかし彼は上手く言葉を発する事も出来なかった。

修練場と呼ばれたその部屋には、別段異臭や悪臭が籠っているというわけでは無い。寧ろ地球の、排ガス塗れの都会の空気に比べれば、幾分澄み渡っているとすらも言えるだろう。

――違うのはただ一つ。青年には何と表現して良いのかが釈然としなかったものの、強いて言うのであれば、空気の“濃度”が違うとでも形容しようか。

特別湿度が高いという訳でも無いのに、奇妙な程に皮膚に纏わりつく空気。

妙に生温かく、湿り気を含んでいるとしか思えないそれは、身を動かす度に青年の体表を撫で、何者かに吐息でも浴びせられ続けているかの様な錯覚を与える。

身震いする青年に視線を向けて、少女は含んだ様な笑みを零していた。

「……ふーん、なるほどね。

流石に異世界人のあんたでも、ここの“濃さ”は分かるんだ」

「――濃さ？」

ネットリと絡みついてくる、蜂蜜の様な気体。

鼓膜をくすぐられる様な気味の悪さをなんとか堪えつつ、青年は一言だけそう聞き返した。

少女は別段気にした様子も無く、コクンと頷きを返す。

「渡り廊下から見たとき、街が図形みたいになってるって、気付いたでしょ？

実は王都（シルヴェルサイト）はね。街そのものが巨大な魔法円になってるの。

――言わば人工的な霊地ね。街自体が掻き集める魔力のおかげで、

この王都の中では、魔導師は普段の3割増しくらいの力が出せるってわけ」

言いながら、少女は空間にソロリと指を這わせた。
細い指先の周りに、陽炎の様な景色の歪みが生まれる。
白く、しなやかなその手を、青年は何となく目で追った。

「――で。その中でも、研究所に12カ所ある修練場の濃度は別格。ちょっと集積しただけでも、ホントにバカみたいな量の魔力が流れ込んで来るから、負荷を掛けてキャパを鍛えるにはもってこいなの。
……ま。慣れない内は霊道が焼け付いちゃって、みんなすぐに寝込むんだけどね」

「……」

青年は、静かに少女の言葉を吟味した。
要約すると、ここは酸素を薄くしたジムみたいな物だという事だろうか。
……なるほど。実際以上に過酷な環境に身体を晒し、それに適応させることで能力を伸ばすのは、まあ確かにどの分野の練習でも常套手段だと言えるだろう。
最も今回の場合は、酸素を減らして行う低酸素トレーニングとは真逆な理屈なわけだから、どちらかと言えば酒に慣れる様な感覚の方が近いのかもしれないが……。

「……その霊道っていうのは？」

少女の説明を地球流に解釈した彼は、聞き慣れない単語を聞き返した。

少女は頷きながら、動物の顎を撫でる様な動作で、さらに空中に手を這わせる。

「この世界の人間にはね。“集積器官”っていう、魔力を集める為の臓器があるの。
そこから神経みたいな管が体のあちこちに伸びてて、それが魔力を全身に届ける道になってるってわけ。――こんな風にね」

少女はゆっくりとその右手を開き、5本の指をまっすぐに伸ばした。
掌の上でユラリ、と空気が揺れたかと思うと、ポッ、と燐光が4粒。まるで蛍の様に煌めきながら空中を踊る。朧な4匹の蛍達は、花火の残照の様に尾を引きながら、静かに虚空へと溶けていった。

「あんたも見たことあるでしょ？
今のオレンジとピンクが混ざった様なのが、魔力の色」

少女はポッ、ポッ、と、そのまま続けて何粒か燐光を舞わせた。
――確かに、見覚えがある。
青年は、顎に手を当てて頷いた。

記憶にあるのは少女が炎を出した時や、あのお姫様が武器を作った時。あとは、アダマス鉱が魔力を放出して膨張した時だろうか。
確かに青年には、魔力やら魔法やらという話が出てくる時には、大抵あのエフェクトが掛っていたように思えた。

青年はまとめながら、もう一度頷く。
要約すると、この世界には魔力という未知のナニかが存在していて、この世界の人間の身体にはそれを集める為の臓器がある、という事らしい。これまでの話を統括すると、魔術とは、その魔力を何

らかの形で使って起される現象なのだという。
……例えば、（恐ろしい事だが）この少女がヒステリーを起こした時によく出す火炎は、その代表例だと言えるだろう。

「……」

――と、すれば。魔力というのはこの世界特有の化学物質、だということなのだろうか。
つまりこの世界の生命体である彼女たちは、まるで地球の生命体が酸素を利用して活動する術を会得した様に、大気中に溢れ返る“魔力”という化学物質を利用しながら進化してきた、と。もしも“魔力”という名の化学物質がこの世界に溢れ返っており、尚且つそれが燃焼反応を起せる程に反応性に富んだ物質であるとするのであれば、確かにそのエネルギーを利用する事は、生化学的に見て大変に有効な手段だったと考えられるだろう。

「……なるほどな」

青年は、なおも解釈を続けた。
なるほど、そう考えると魔術というのは、実は思った以上に生物学的に理に適った現象なのかもしれない。
彼は、心底感心した様子で頷いた。
いやはや。“魔術”なんていうオカルトな名称の為に危うく混乱するところではあったが、考えてみれば、思ったよりもずっと科学的な話ではないか。
要するに魔術とは、簡単に言うと、魔力という物質の化学反応――。

「魔術っていうのはね、簡単に言うと、精霊との契約なの。

星の活力である魔力は、四大精霊の力の源。
だからこうやって魔力を集めたら、力を借りたい精霊に呼びかけて――」

「……」

そこで言葉を区切った少女は、僅かに集中する様な仕草を見せた。
空間の揺らめきが大きくなり、光の粒が徐々に大きくなっていく。
やがて燐光が一カ所に集まったかと思うと、少女の掌の上で、ピンポン玉くらいの炎がポンと燃えた。
オレンジ色に燃える火球は、そのまま少女の手の周りをふよふよと漂い、衛星の様に掌を周回してから、転がる様にして人差し指の先へと留まる。少女がフッと息を吹きかけると、紅焔はシャボン玉が割れる様に、パンッと弾けた。

「――魔術が発動するってわけ。
なにか質問はある？」

「……。
……今、なんて言った？」

何故か、唖然としている青年。
なんか、まるでコーラと騙されてヨウ素液でも飲まされたかの様な顔だった。
少女は、うーん、と、自らの唇に人差し指を当てた。

「“魔術が発動するってわけ”？」

「……いや、その前だ」

コクン、と、少女は小さく首を傾げた。
傾げながら、自分の言葉をよーく思い出す様な仕草を見せて、再び口を開いた。

「――精霊との、契約？」

「却下だ」

まるで酷い頭痛を堪えているかの様な、青年の表情。
目を丸くしている少女に、彼は静かに肩を震わせた。

「君の体構造がオレの世界の人間と異なっていて、君にその“魔力”とやらを集める臓器がある。これは、いい。その魔力とやらが今の燐光の原因で、それが発火という現象を引き起こした。これも、観測出来たから、まだ納得してもいい。
……で。その精霊とやらは、いったいどこに居たんだ？
気のせいかもしれないが、オレには一切、全くそんなモノは見えなかったんだが」

「？　当たり前でしょ？　精霊なんだから」

「……。
どうしてそれが当たり前だと思えるんだ……」

少女ははてな、と、今度は反対方向に首を傾げて見せた。
青年は、なんかこの世の終わりの様な顔で頭を抱えていた。

「……分かった。仮に、その精霊とやらが居たとしよう。それで？

そいつらは見えないんだよな？　見えないのに、なぜ君は、そいつらがそこに居たと言い切れるんだ？」

「魔法が発動したから、でしょ？」

「……どうして火が出た事が、イコールで精霊が居た事になるんだ？」

「？　どうしてもなにも……。
火を起してるのが火の精霊なんだから、火が出たなら火の精霊が居たって事でしょ？」

「だから、どうして火を起してるのが、火の精霊とやらになるんだ？」

「火を起すのが火の精霊だからに決まってるじゃない。
なに当たり前のコト聞いてるのよ」

「……」

青年は、目を伏せた。
目を伏せて、静かに溜息を吐いた。
それは酷い頭痛を堪えるかの様な、或いは酷い胸やけに悶えているかの様な、もしくは耐えきれない程のモヤモヤが、心臓にでも張り付いてしまったかの様な苦悶の表情であった。

少女はあまり気にしないで、首を元の位置に戻す。

「うーん……。まあ、よくわかんないけど続けるね？
とにかく、魔術っていうのは精霊との契約で、力を借りる精霊の

種類によって、４つの属性に分けられるの」

「……なるほど。
魔力が起す現象によって、４種類に分類してるわけか。
シンプルでいいな」

「魔力を取り込んだ、精霊が、起す現象ね？」

「……」

――ここ、正確にね？
なんて言いながら人差し指を立てる少女。
青年は、ナニか、深い瞑想状態に入りつつあった。
ソレを心底不思議そうに見つめながら、少女は更に続けた。

「精霊の持つ属性は、火、氷、風、土の４種類。
亜種っていう細かいのも沢山あるんだけど、結局は全部、この４つから派生した属性だっていうのが現代の解釈ね。加えてそれぞれの属性は、各精霊の性格と能力を反映した性質を持ってるの」

「……」

青年は固く目を閉じて、プルプルと肩を震わせている。
まるで、胃の中の虫刺されが痒くて痒くてしょうがないとでもいうかの様な、非常に奇妙な震え方である。
少女は無情にも、一切構わずに先を続ける。

「例えば――。火の精霊は、四大精霊の王だって言われてるの。
気性が荒く、同時に力への野心が強い彼の者の力を借りる火炎魔法は、４属性の中でも特に最強ね。もしも同じ魔力で同ランクの魔

法を撃ったとしたら、火炎魔法の規模は、他の3属性に比べて断トツってわけ」

「……なるほど。
で、まさか最弱が風魔法。
理由は燃費が悪くて威力が弱いから。とか言い出さないよな？」

「？　よく分かったじゃない」

押し黙っていた青年の、吐露するかの様な一言。
その言葉の裏に隠された彼の内心を、果たして少女は感じなかったのか。
彼女は、平然と頷いていた。

「確かにあんたの言う通り、風の精霊は気まぐれな上に怠け症だから、バカみたいに魔力を食う割には弱い魔法が多いけど――。
あ、もしかして。あんたの世界でも、やっぱり風の精霊は気分家だったの？」

「……エネルギー変換効率を考えただけだ」

えねるぎー？　なんてオウム返しの様に呟きながら眉を寄せる少女。
そんな彼女に言い聞かせるかの様に、青年は人差し指を立てながら説明を始めた。

――エネルギーとは、仕事をする能力を示す物理量である。特にエネルギー保存の法則より、例えどの様な変換過程を経ようと、その総和は全宇宙で普遍である事が一般に知られている。また熱力学の第二法則より、変換工程を増やす程にエントロピーと呼ばれるエ

ネルギーの“質”が悪くなり、使用可能なエネルギーとしてのロスが大きくなるのも一般常識だろう。

さて。そこで、先の４つの事例を考えてみる事にする。

おそらく４つの属性とやらの内、火と氷とやらは熱エネルギー。土とやらはまだよく分からないが、これも風と合わせて運動エネルギーに関係すると考えるのが妥当だろう。そして運動エネルギーへの変換というのは、熱エネルギーへの変換に比べて格段にロスが大きいのが常である。

例えばプロペラ無しで風を作ろうと思えば、それはそれは大変な事だろう。

台風の事例を考えても、同じ現象を起すには風だけでも広島原爆の数千倍のエネルギーが必要であるし、人間の骨格筋を想定しても、化学エネルギーから運動エネルギーへの変換効率は３０パーセントを切る。

しかも風魔法が本当に風を生む魔法であり、もしも土魔法が土に運動エネルギーを与える魔法であるとしたら、空気という“気体”を扱うという点でも風魔法は酷い。先の扇風機がいい例だろう。密度が低い気体では、よっぽどのエネルギーを使わない限り、涼むくらいにしか役には立つまい。涼む為の道具である扇風機でさえも、内臓されているモーターを使えば、“強”の風力で動かせなかった物体でも動かし得るというのに――。

「……」

少女は、青年の説明を、分かったのか分からないのか分からない様な顔で聞いていた。

ただ、何故か、ちょっとだけ不機嫌そうな顔になっていた。

「……」

青年はそんな少女を見てから、グッと強く目を閉じた。
少女が分かったのか分からないのか分からない顔をしているという事実が、やっぱり本当に分からないとでも言いたげな顔で、プルプルと肩を震わせていた。

――突然だが、ここでいくつか有名な逸話を紹介したい。
アルベルト・アインシュタインとニールス・ボーア。
当時の物理学の先頭に立ちながらも根本を異にする自然観を持っていた二人の天才物理学者は、１９２７年の第五回ソルヴェイ会議から１９３５年のＥＰＲ論文に至るまで、歴史に残る熾烈な論争を繰り広げた。アインシュタインが夕食の席で示した思考実験をボーアが一晩考え抜き、次の日の朝食の席で反論を述べた、などという逸話もあるくらいであり、中でも、特に光子箱の思考実験は語るに及ばぬ程に有名だろう。

ニュートンとフックの論争。ガリレオ・ガリレイの天文対話を巡る、当時の教会との確執。近年では、生物学におけるチャールズ・ダーウィンの自然選択論に対してインテリジェントデザインという解釈を用いる進化論否定論者もおり、中にはソレを支持する生物学者も散見される程である。
異なる思想を持つ知識人達は、時にその意見を真っ向から異にし、真偽の程は別にしようとも、度々誇りを掛けた議論を戦わせてきた。

えーと。つまり何が言いたいのかというと、同じ世界の同業でさえも時に思想の不一致から熾烈な論争を巻き起こすのが自然現象というモノの特性であるにも関わらず、剰え物理学者と魔法使いなどという、根本とする世界観や前提からしてそもそも異なる二人が、魔術などというたった一つの自然現象について語り合った場合、起こり得る、そして想定され得る現象は、客観的かつ単純明快に考えようとも、たった一つの事象に収束され得るわけであり――。

「……」
「……」

……二人は、大きく、息を吸った。

「ほら見ろ!!　精霊なんか、考える必要が全く無いじゃないか!!」

「何でそうなるのよ!!　あんた、たった今火炎魔法見たばっかりでしょ!?」

「ふざけてるのか!?　君は!!
火が起きたから精霊が居るって!?　君は焚火も、山火事もっ、火は全部その精霊とやらの仕業だとでも言い出すつもりなのかっっ!?」

「だから、ナニを当たり前の事ばっか言ってるのよっ!!
焚火も、山火事も、木々が大地から吸い上げた活力を!!
火の精霊が取り込んで起してる現象じゃない!!」

「どう考えても違うだろう!!
どちらも単純な有機物の燃焼反応だ!!
酸素が炭化水素と結合するだけの現象だよ!!」

「だ!!　か!!　ら!!　ソレを起してるのが火の精霊でしょうが!!」

「そんな存在を仮定する必要がそもそも皆無だと言っているんだ!!
“オッカムの剃刀”に完膚無きまでに抵触しているぞ!?　君の説明は!!」

「オカマの髭剃りなんか見たくもないわよ!!」

「オッッッカムの剃刀だぁ!!　不必要な仮定はなるべく切り落とすべし!!　自然科学の基本姿勢だろう!!　そんな基礎も成立してないのか!?　この世界の学問は!!」

「精霊はどぉ考えても必要でしょうが!!
そんな基礎も出来てないとか、あんたの世界の人間こそバカなんじゃないの!?」

「だぁから!!　何故そんな意味不明なモノが必要になるのかと聞いてるんだ!!
よぉし!!　じゃあ、アレだ!!　１万歩ほど譲って、仮に精霊が居るとするぞ!?　その精霊とやらの存在を、君はどうやって証明!!　或いは否定するんだ!?」

「居るモノをどうやって否定しろって言うのよ!!
森羅万象の原因になるのが精霊なんだから!!　世界が有る事が

そのまま精霊が居る事の証明じゃない！！」

「だから！！　その精霊とやらが！！　森羅万象の原因となっている事を証明してみせろと言っているんだ！！」

「はぁ！？　ナニよその無茶苦茶な屁理屈！！　虚次存在の精霊を！！　実次存在の人間が！！　何の神秘の後ろ盾も無しに認識出来るワケが無いでしょうが！！」

「ソレがおかしいと言っているんだろぉが！！　仮説は検証可能且つ否定可能でなくてはならないとするのが自然科学の大原則だろうッッ！！　そんなバカげた脚注を付けるくらいならな！！　普通に魔力が火を起したと説明した方が遥かにシンプルで現実的だッッ！！」

「ナぁニよそのバカみたいな解釈！！　あんたこそッ！！　そこまで言うからにはッッ！！　ソレを証明出来るんでしょうねッッッ！？」

「生憎だなぁ！！　オレの世界では！！　物が燃えるのはっ！！　酸素が物質の結合エネルギーを解放するからだとっっ！！　全ての実験結果が支持しているんだよっっっ！！」

「だから！！　それに精霊が関与してないって事を！！　証明してみせろって言ってるの！！」

「悪魔の証明だろ！！　それは！！」

「誰が悪魔の話をしたのよ！！
精霊の話をしてるんでしょ！？」

「誰がモノホンの悪魔の話をした!?　オレが言ったのは“悪魔の証明”だ!!
　無い事の証明が求められる場合は!!　その証明の難易度から!!　有ると主張した方に証明する義務があるという論証の大原則だろう!!　君こそ!!　オレの世界の化学反応に精霊が関与している事を証明出来るのか!?」

「賢者の最終審問（ヴァフスルードニル）じゃないッ!!」

「何だそれはぁ!!」

「全ての人間が知らず!!　また知る事の叶わぬ事柄は!!　それを知り得る存在によってのみ語られ得るっていう論理の大原則でしょう!?　あんたの世界の話なら!!　あんたしか知りえないんだからっ!!　あんたこそあんたの世界に精霊が存在しない事を証ぉ明してみなさいってのよっっ!!」

「だぁかぁらっ!!　それが悪魔の証明だと言っているんだ!!　そもそもだなぁ!!　論理はシンプルな程に信憑性があり!!　数学的な美観を伴うというのが学者たる者のキホンシセイだろう!!　せっかく精霊なんていう不確定要素を除外しても説明出来るというのにだなぁ!!　下手に蛇足を付けてソレを損なってどうするんだ君は!!」

「精霊無しの魔導理論の!!　どこに美観があるってのよッッ!!　そもそもねぇ!!　四大精霊が森羅万象を引き起こしてるって言ってるんだから!!　それが!!　この上なく!!　シンプルな!!!!　説明じゃないのッッッ!!!!!!!!」

「君は！！　シンプルの意味を！！！！！　根本から履き違えて！！！！！！！――おお〝エェっ！！　ゲホッ！！　ゴホッ！！」

……流石に、酸素が足りなくなったらしい。

青年は涙目で咳き込みながら、ガラガラになり始めた喉を抑え、呼吸困難を訴える肺に無理矢理酸素をねじ込んだ。

「ケホッ……！！　コホ……ッ！！」

対する少女も肩で息をしながら、大声を出しすぎて荒れた喉に休息を与えていた。熱弁により紅潮した顔を帽子のつばで隠しつつ、酸素不足を訴える体に休養を与える。

少女は、どこからか手元に木箱を飛ばした。

氷の魔法円が内部の温度を下げるソレには、中にポーションのビンが沢山入っている。

少女は、それから赤いビンを一本取り出すと、中身をクピクピと飲み始めた。

青年も一本貰って、枯れた喉をなんとか潤す。

議論に水分補給は大事である。

「なるほ…ど。君……は！！　どうしても、ゼェ……、精霊とやらが……、ハァッ、居る事に、したいんだな――？」

「そっちこそ……、フゥ……ッ、どう…しても、ハァッ、認めないつもりな……わけね――？」

「……」

「……」

二人は、取りあえず、無言でポーションを飲み干した。

飲み干してから、空になったビンを床に置いて、静かに静かに見つめ合った。

青年の喉から、息を吸う音が聞こえた。

少女の肩が、５ｃｍ程上昇した。

「思考実験だぁッ！！　精霊が実在すると仮定するっ！！　精霊が実在するならばその静止質量ｍは実数領域でｍ＝０又はｍ＜０のいずれかの条件を満たす！！　ｍ＝０の場合！！　その速度は自然界の最高速度たる光速に等しくなり！！　真空中をどの観測者から見ても光速度ｃで動き続ける！！　この場合！！　特殊相対性理論から導かれる時間の遅れΔｔ′＝√１－（ｖ／ｃ）＾２・Δｔより！！　Δｔ′＝０となり精霊の時間は停止しなくてはならない！！　これは精霊に自由意思があるとする君の主張に矛盾する！！　よって精霊には質量がなければならず！！　精霊はｍ＜０を満たす領域内でしか存在し得ない！！　また精霊の質量ｍがｍ＜０を満たすと仮定した場合！！　その組成として想定される素粒子の種類は――」

「ナニを異次元言語喚き散らしてるのよ！！　そんなワケの分からないコト言わなくても！！　もっとずっと簡単な話でしょ！？　精霊は実次存在の人間とは別次の虚次存在なんだから！！　その重さなんかを考える事自体が無意味で！！　そもそも最速は火属性亜種の光魔法じゃなくて氷属性の特異術式を使った転移魔術！！　だからあんたの光が最速とかいう前提がそもそも的外れなの！！　それに精霊（ロナ）の自由意思は人間（エトス）の意識なんかとはそもそも定義が違うんだから！！　例え時間が停止してもその意思まで停止するとは言い切れないでしょうが！！　そもそも精霊を構成する要素として想定さ

れてるのは創世期に原初の紅焔と暗黒の氷度から生まれた――」

――〈中略〉――

――で。

結局どうなったのかというと……。

「――なるほどな。君の言いたい事は、まあ大体分かった」

「――うん。あたしも、あんたの言いたい事は大体わかったかな」

「ふむ。考えてみれば小さな誤解だったな」

「そうそう。ホント、考えてみたら同じことだもんね」

補給したポーションは各自6本。

出会ってからの総会話量と同じくらいの単語数を話したのではないか、という、まるでマシンガンの様な両者の舌戦は、一応のところお互いが納得する形で幕を下ろした。なに、大したことでは無い。お互いが使っている用語に、ほんの些細な違いがあっただけで、結局は同じ事を言っているのだと気が付いたのだ。

――物理学者・真也　真也の解釈。

魔術とは、“精霊”という高分子を触媒にした化学反応である。

――魔法使い　アルテミア・クラリスの解釈。

青年の世界には、“カガクハンノウ”という名前の精霊がいる。

「分かり合えてよかったな」

「うん、ホントホント。なに当たり前のコトを議論してたんだって感じよね」

……同じコト、だった、のだ。

――――

「……なんか無駄に時間食った気がするけど。取りあえず、次ね」

7本目のポーションを飲んで一息ついた少女は、コホンと咳払いをしてからそんな事を言った。人差し指が、先生の様にピンと伸びている。

「魔術って一言で言っても、その難易度とか規模にはかなり差があってね。

魔導師の序列を決める為に、大まかに九つのランクに分かれてるの。

下から順番に、自然霊級、戦霊級、境霊級、狼霊級、龍霊級、帝霊級、精霊級、神霊級。

あと、番外の特霊級。まあ、これは説明するより見せたほうが早いかな」

言いながら、少女はローブの懐に手を忍ばせた。

取り出したのは、アクセサリーにしては大きめの、銀色の三日月である。

青年が首を傾げていると、少女は短く解呪の呪文を唱えた。

三日月は燐光のエフェクトと共にその形を変え、少女の身の丈ほどもあろうかという長弓へと変化する。

「コレが、あたしの魔装――。
あ、魔装っていうのは、魔術を補助する装備のことね。
色々試してみたけど、あたしにはコレが一番馴染むみたいでさ。
魔導師になった頃から、ずっと使ってるけど……」

「？　魔法使いのくせに、弓が馴染む……？
――ああ。なるほどな」

弓使いの魔女というのがあまり想像出来なかった彼は、少し考え込む様な仕草を見せた。
しかし少女の体格をまじまじと観察したところで、すぐに納得したように手を打っていた。

――時に弓道においては、胸当てを付けずに弓を引く女性はあまりいない。
何故ならば、胸当て無しで弓を引こうとすると、どうしても体の一部が射線の障害になってしまい、大変に危険だからである。
逆に言うと、女性がローブ姿で弓なんか引こうと思ったら、その人物は必然的にある条件を満たしておらねばならず、またその前提の上に立つのであれば、少女の体型は正にその為の必要、いや、十分な条件を満たしていると――。

「……シン。それ、言ったら殴るから」

……青年は、思考を中断した。

「――ふん。とにかくね。魔装っていうのは、魔術を補助する装備品のこと。

剣とか盾とか網とか箒とか。あと、専門によっては鍋とかギターとかね。魔導師によって、種類は本当に様々。……っていうか、戦闘学閥でも無い限り、大抵は専攻とかで決めてるの。書籍系の魔導師なら、魔装が紙とかインクなんてのも沢山いるし」

「魔導師っていっても、王宮魔術団（きのう）の連中みたいに戦闘一色じゃないってことか。まあ、建築に携わってるヤツもいるんなら、当たり前って言えば当たり前だよな。

……それにしても、剣に盾に弓、か。

オレの世界じゃ、魔法使いって言えば普通は杖だぞ？」

「うーん。まあ、確かに杖は基本にして万能、とかって言われてるけど。

……ちょっと器用貧乏な感じは否めないのよね。

“戦霊級魔術”を掛けても、杖じゃどうしても迫力に欠けるし。

まあ、その辺は今から説明するけど――」

言いつつ、少女はその右手をローブの懐に忍ばせて、一枚の羽を取り出した。

オレンジ色の蛍光が目を引くソレは、不死鳥の羽ペンと呼ばれる、魔法金属の加工に特化した魔装である。少女はしゃがみ込むと、ソレを使ってチョコチョコと、アダマスの床に基本図形を描いていく。今回はそこから更に象形文字の様な文様をびっちりと書き込んでいき、基本図形の内部をソレで埋め尽くしてから、羽を翳して解放の呪文を唱えた。

床からは一束の矢が燐光と共に生えてきて、完全に伸びきったと

ころで、散らばるように四方に倒れる。

「取りあえず、こんなもんでいいかな。

……あ、そうだ、シン。これ、ホントはこうやって使うんだからね？

塔とか壊す為にある魔装じゃないんだから。

せっかく陛下から許可もらったんだし、ちゃんと術式とか勉強しなさいよ？」

「まあ。そりゃ折角の金工技術だし、利用しない手は無いが……。

――ってちょっと待ってくれ。

良く考えたら君達、そもそも本当にそんな物が必要なのか？」

床から生えてきた矢を見た青年は、顎に手を当てながらそんな疑問を口にした。

青年の記憶が正しければ、確かこの不死鳥の羽ペンという魔装は、嘗て銀の国が呼び出した異世界人の一人が伝えた技術であるという。おそらくその異世界人とやらは、今の青年と同じ様にのっぴきならない状態に追い込まれ、自分の世界の知識を総動員してこの世界でも役に立つ“武器”を作り上げたのだろう。

――だがそもそも、これは魔法に馴染みの無かった異世界人だったからこそ必要とした装備ではないのだろうか。

青年の記憶によると、確か少女は昨日の朝、指を鳴らすだけでアダマス鉱をシャワーやコンロに変えていた筈である。それにあのお姫様も、地面の金属からバカみたいな数の武器を作ってはいなかったか。ならばそもそも、彼女たちクラスの魔術師であれば、別にこんな羽ペンなんか無くても一切困らないという事だと思われるのだが――。

青年の疑問に、少女は小さく肩を竦めた。

「……あの家は別よ。あの家にはね。魔力の波長を合わせると、予め決められた形に変形する様に特別な術式を組んであるの。
――それに、ウェヌスの武器作成は例外中の例外。
だってアレ、絶対あいつの先天魔術（ギフト）だもん」

「ギフト？」

聞き返す青年の声。
少女は、コクリと頷いた。

「誰でも一つだけ持ってる、生まれた時から使える魔術のこと。
詠唱も術式構築もすっ飛ばして使える魔術だから、まあ最初にして最速の魔術ね。
人が扱う魔術の、正しい形とも言われてる」

そこまで言って、少女は自らの右手に視線を落とした。
彼女の手の甲にて燐光を放つのは、銀色に煌めく刺青の様な紋様である。
少女は左手の指先で、それに軽く触れていた

「――あたし達の身体はね。本来はソレを使う様に出来てるの。
一般的な詠唱魔術は、その本来あるべき形を崩して、無理矢理に汎用的な神秘を扱えるように工夫してるってわけ。術式とか詠唱って言うのは、その本来の形から“無色の力”を取り出して、別の色に変換する過程のこと。
本当に使うべき形から逸脱して行使するから、どうしても複雑な工程が必要になるの」

「ふむ……」

少女の言葉を聞きながら、青年はソレを自分の常識に則って解釈しようと努めた。

少々抽象的な彼女の注釈から、具体例を考えようと暫し逡巡する。

――ふと。青年の頭に浮かんだのは自動車の設計図だった。

自動車の基本要素は、車輪とエンジン。あとは、ソレを動かす為の燃料（ガソリン）といったところだろうか。

仮に、その先天魔術とやらを自動車だと考えてみよう。自動車を動かす為には、エンジンを掛けてアクセルを踏むだけでいいだろう。ソレが本来の用途なのだから、車輪で地を駆ける分には、特に大がかりな仕掛けなど要するわけもない。

だが自動車の構成要素を一つ一つ見ていくと、ソレは地を駆ける以外の用途にも使えそうだという事に気が付くはずだ。

例えば自動車の動力部分を取り出して、車輪の代わりに歯車とスクリューでも繋いでみよう。車体が水に浮き、動力で前進する事さえ出来れば、それは既にモーターボートと呼んでよい代物である。車体の形を工夫して翼を付ければ、エンジンの出力次第では飛行機にすらもなるだろう。ガソリンだけを取り出して、然るべき器具から吹き付ければ、もしかしたらガスバーナーの様な使い方も出来るかもしれない。

「……」

青年は、なおも思案する。
と、すると。つまり術式の構築とやらは、エンジンをそういった付属物に繋いで改変する工程、と言えるのかもしれない。本来はその“先天魔術”とやらを使う為にある魔力を、何らかの操作によって別の魔術にも使える様に改変する手段、だという事だろうか。先天魔術がアクセルを踏むだけの物だとするのならば、なるほど、ボートや飛行機に変化させる為には手間が必要になるわけである。

「――――ん？」

そこまで理解した彼は、不意に少女自身の事が気になった。

「なるほどな。
――て事は君も、その先天魔術とかいう便利なのを持ってるわけか」

少々興味が湧いて、何気なしに尋ねてみた青年。
何しろ、癇癪を起しただけで火を吹く少女である。
国一番の魔導師であるという彼女なら、きっと、それはそれは大層なモノを持っていらっしゃるのだろう。あのお姫様も中々に興味深い能力を持ってはいたし、この少女の先天魔術とやらも、一度くらいは見てみたい気がしないでもない。

「……見せないからね？」

しかし、少女の返事はつれない物だった。

「？　一番簡単に使える魔術なんだろ？」

「……あのね。先天魔術っていうのは、魔導師の切り札なの。先天魔術を分析されたら、その魔導師の属性も、使用魔術の傾向も、魔装の使い方までバレちゃうんだから。つまり先天魔術を教えるっていうのはね。自分の弱点を大声で叫ぶのと同じなの」

「あ、なるほどな」

言われて、青年は納得した。

先ほど彼は、先天魔術を自動車に例えて解釈した。しかしよく考えてみると、実際はそんなに穏便な物であるとも限らないだろう。魔術は戦闘にも使う様な物騒なモノなのだから、少女の先天魔術はピストルやナイフ、或いはミサイルや戦車に相当する概念である可能性も十分にあり得る。

そして実際に戦闘になったとしたら、ソレを知られる事は、確かに生死を別つくらいに重要な問題になるだろう。こちらの得物が拳銃なのか、散弾銃なのか、或いは機関銃なのか。威力はどのくらいで、レンジやクールはどのくらいなのか。

それが分かってしまえば、対策を立てるのは随分容易になってしまう。

戦場で不用意に自分の武器をバラすバカなど、そうそういる筈も無い。

だが、そうなると……。

「……でもな。

あのお姫様、昨日はソレをバカスカ使ってなかったか？」

……と、いう問題にならないだろうか。

否。寧ろ青年には、彼女がそれ以外に魔術を使っていた記憶が無かった。

もしも少女の言う通り、武器を作る事があのお姫様の先天魔術とやらであり、尚且つ先天魔術が少女の説明通りのモノだとしたら、あのお姫様は昨日、敵国の王都で弱点を叫びながら戦っていた、という事になるのだが……。

少女は、小さく溜息をついた。

「……そりゃそうでしょ。だってアイツは、確かに大魔導だけど、魔導師じゃなくて戦士なんだもん。武の国なんて変態国家の王族に、魔導師（あたしたち）の流儀なんか通じるワケ無いじゃない」

「……。

言えてるな……」

王女様の破天荒ぶりを思い出した青年は、酷い頭痛を堪える様に頭を抱えた。

成程、あり得る話である。確かにあのお姫様ならば、敵地で自分の弱点を叫びながら戦った上に、“弱点を隠すのは弱者の証拠です”――とか言いそうな気がする。

……いや、割と本気で。

殆ど会話もしていないのだが、青年には、そんな彼女の声が割と

リアルに聞こえた。

「そういう事。あんなバカの言動なんか、考えるだけ無駄なの。

……って、言うのは簡単だけど。

アイツの場合はそれだけじゃないか。

実際アレだけバカスカ先天魔術を連発してたのに、あたしでもアイツの先天魔術の“銘(ギフト)”は特定出来なかったし。

そういう意味で言えば、アイツは先天魔術を隠してるのと変わらない、とも言えるかも……。

――きっと、よっぽど特殊な亜種か複合属性なんだと思う。

よく考えたら、いくらアイツでも迂闊に自分の切り札を見せるとは思えないし、もしかしたら、武器作成の他にも何か隠し玉があるのかもしれない。

まあ、あのバカがそこまで考えてるとも思えないけど……」

そんな分析を宣いながら、少女はなにやら長考に入り始めてしまった。

青年の手がリズムを刻み始めるまでたっぷり考え込んだ後、やっぱり結論が出ないといった様子で首を振って、コホンと咳払いをした。

「……とにかく、あたしが言いたいのはね。

あたしは自分の弱点を自慢げに喚き散らすような、氷の国の高飛車女とは違うってこと」

「ふーん。まあ、そんなもんなのか」

その高飛車女とやらがどんな人物なのか、青年は当然の様に知らなかったものの、取りあえず少女は、自分の能力を見せるのは気が

進まないらしいという事だけは理解した。
少女は魔導師である事を誇っている様な節があるし、自分の一番の武器であれば、それはもう自慢気に見せてくれそうな物でもあるのだが……。
もしかしたら、曲がりなりにも身体的特徴の一つとも言える“先天魔術”とやらは、見せるのにも少々照れを伴うのかもしれない、などと青年は解釈した。

先天魔術を分析すれば、個人情報とも言える様々な特徴が分かってしまう様でもあるし、それから推測するに、先天魔術を教えるというのは――。

「つまり、裸を見せる様なモンなんだな。
……いや、待てよ？　それなら、なおさら気にする必要なんか無いじゃないか。
君とオレは本質的に異生物なわけだし、そもそもだな、オレは既に“恵まれてない方”を見ているわけだから、いっそ“恵まれてる方”を見せた方が君も……」

――ゾクリ、と、青年の背筋に悪寒が走った。
咄嗟に口を噤んで、3歩ほど後退さる。
ニコリ、と、少女は寒気がする様な笑みを浮かべていた。

「あんたにだけは、絶対に、イヤ」

――――――

「それじゃ、ランクに話を戻すけど。

今あたし、羽ペンを使って矢を作ったでしょ？
実はコレが魔術の最下級で、自然霊級魔術って呼ばれてるヤツなの」

「ん？　今のも魔術に入るのか？」

少女は、コクンと頷いた。

「魔術っていうのは精霊との契約で、魔力を捧げることで発現する神秘だって話はしたでしょ？　つまりね。別に術者本人が魔力を供給するんじゃなくても、人為的に魔力を用いて引き起こされた現象は魔術の範疇に入るの。
自然霊級魔術っていうのは、勝手に魔術を使ってくれる道具を使う事で、ホントに誰でも使えるヤツ」

「……なるほど」

青年は、顎に手を当てる仕草と共に思案した。
例を挙げるとすれば、先のポーションの冷却箱や、少女の家で見たコンロなどの日用雑貨だろうか。誰でも使えるという事は、専門的な魔術というよりは、どちらかと言うと定義上仕方なく入ってしまった分類なのかもしれない。
概して分類を含む学問というのは、常にそういう曖昧な領域が付き物なのである。

青年がそんな事を考えていると、少女は床から矢を一本拾い上げ、ゆっくりとその長弓につがえた。慣れた様子で、壁の方向へと視線を移す。
少女の視線の先には、金属製の的が墓標の様に、それこそ無数に立ち並んでいた。

１０メートルくらい先の一つに向けて狙いを定め、ゆっくりと弓を構える。
集中すること、一呼吸。音が消えたかの様な静寂が漂った瞬間、少女の右手はブレの無い動作で矢から離された。矢は水平に近い放物線を描きながら、空気の音を鋭く残し、決して大きいとは言えない的のほぼ真ん中に命中する。
なるほど、見事な腕前である。
……最も、流石に金属製の的は固すぎたらしく、矢は軽い音を響かせながら床へと落ちてしまったが。

「……ま、普通の矢なんてこんなもんよね。
じゃ、次は魔術使うから。見てて」

少女の弓術に感心している青年をよそに、彼女は二本目の矢を床から拾うと、再び銀の長弓へとつがえた。
先と全く同じ動作、同じリズムで、ソレを的へと構える。
弓道に限らず運動に於いては、多くの場合、競技者の技量が上がる程に動作間の差異は小さくなるのが常である。まるで時間が戻ったかの様に、一度目の残像と寸分違わぬその挙動は、少女の射手としての卓越した力量を示すのには十分な材料となっていた。
――しかし、今度は先ほどと違う点が一つだけある。
少女が構える白銀の鏃は、まるで熱せられたフライパンの様に、ブスブスと白煙を燻らせていた。

「これが、戦霊級魔術――」

声と共に、矢切りの音がヒュンと鳴った。
少女の弓から放たれた一矢の銀閃は、まるで先ほどのリプレイの様に、僅か数ミリの誤差しか無い軌跡を描きながら的へと向かって行く。

――そして、当然の様に着弾。
ただし今度は、先の様な軽い音は聞こえない。
代わりに青年の耳に届いたのは、ジュッ、という、フライパンに水が落ちる様な音だった。
鏃に触れた的が、前方で燻らせる白煙。
金属製の筈のその墓標は、少女の射た一矢によって易々と貫通されていた。

「――戦ていう名前がついてるけど、別に戦闘用魔法だけを表す名前じゃないの。
一応『触媒そのものの機能を過度に変化、強調しない範囲で触媒に機能の向上及び性質の付与を行う術式。または抗魔術結界を要しない副次的難易度の中位術式』なんて小難しい定義があるけど……。あんた、これで意味分かる？」

「簡単に言うと、物本来の機能を上げる魔法、ってことか？」

「――オマケで正解。よくできました」

少女の弓と的を交互に見比べながら、青年は簡単にまとめた。
少女の矢は、確かに熱で金属を溶かすことによって的に刺さったらしい。しかし矢とは、そもそも的を貫く為にある物であり、例え的が金属であったとしても、ソレを貫くのはあくまで矢という道具の概念を超えるものではないだろう。
つまりは、そういう道具本来の機能を底上げするのが戦霊級とやらに分類される魔術、ということなのだろうか。
他にこのランクの魔法を考えるとすれば、似たような原理で剣の切れ味を上げたり、或いは魔術の火力を上乗せしてコンロの熱を上げたり、なんて魔法があればそれに当たるだろう。

「次が抗魔術結界の境霊級。
その上が魔導師認定試験で有名な狼霊級ね。
――じゃ、ちょっとあたしの手を見てて」

青年が思考を終えると、少女は集中する様な仕草を見せた。
少女の手に注目していると、やがて視界に焦点がブレたかの様な違和感が生じる。青年が咄嗟に目を擦り、瞬きをしている間に、少女の手の周りには空気の膜の様な物が現れていた。屈折率の変化により蜃気楼になったその領域が、黒いローブごと、少女の腕全体を覆っている。

「先ず、コレが抗魔術結界。
今は見せる為にちょっと大げさにしてるけど、ホントはもっと薄くして、無駄が無いようにして使うの。結界に使われてる魔力量以下の魔術を遮断する防御魔術で、まあ魔導師にとっては基本中の基本ね」

少女はそのまま、空気の膜に覆われた手で矢を拾い上げた。
三度、その矢を弓へとつがえ、ゆっくりと引き絞る。
今度の矢は完全に赤熱し、高熱により乱された気流が、矢を覆う螺旋となって渦を巻いていた。

「――で、コレが狼霊級」

声と共に放たれた矢は、小鳥の囀りの様な残響を響かせながら的へと疾駆した。先の二つに比して明らかに速度を増しているその銀閃は、ほぼ水平な軌道を保って空を駆け、既に前の矢が突き刺さっている墓標へと直撃する。
そして、着弾と同時に解放される炎の魔力。
鏃は的に触れた瞬間、まるで手榴弾の様にその熱量を爆散させ、

雷光を伴いながら、目標物を木端微塵に吹き飛ばしていた。
飛び散る破片と、腹腔に響く程の爆発音。

「……なるほどな。
これは……、確かに先の定義からは外れるか」

青年は、呆気に取られたかの様にそう呟いた。
粉塵が治まると同時に現れた光景は、消し飛んだ的と抉られた床板。

……これでは、弓矢どころか重火器の領域である。
最早矢では無い威力なのだから、確かに“物の能力を強化する”という先の定義には合わないだろう。

ふむと頷く青年に、少女は視線を向けた。

「ちなみに。境霊級は抗魔術結界だけで、狼霊級を習得出来た人は晴れて王宮から魔導師になる許可が下りるの。魔導師になれれば、この国じゃ、取りあえず働き口には困らないくらいなんだからね？
……まあ、余計な出費も多いんだけど。
取りあえず覚えておいて欲しいのが、狼霊級以上の魔術は、抗魔術結界無しじゃ打てないって事」

「？　抗魔術結界って、防御の魔法なんだろ？
何でそれが、自分が攻撃する時にも必要になるんだ？」

「……あのね」

とぼけた様に聞き返す青年。
少女は、何やらバカを見るような視線を送ってきた。

「あたし達は、あんたみたいに魔法防御カンストじゃないの。
このレベルの魔術使うなら、防御陣組まなきゃ自分の手が火傷しちゃうじゃない」

「――あ、なるほどな」

言われて、納得した。
よく考えてみれば、確かに防護服無しで火炎放射器を使うバカもいないだろう。毒ガスを使うならガスマスクは必須であるし、ウイルス兵器を使うなら、ワクチンや抗ウイルス薬を用意しないのは自殺願望の有るヤツだけである。
物理法則とは万物を支配し、そして例外は無い物なのだ。
どうやらゲームや漫画の様に、自分で出した炎は自分には効かない、なんて都合よくはいかないようである。

「……そういう事。
ただ、実際にやってみるとコレが中々にネックでね。だって、ほら。戦霊級なら魔法だけに集中できるけど、狼霊級になると、抗魔術結界を維持しながらさらに難しい術式を組まなきゃならないでしょ？　難易度は、この辺りから一気に跳ね上がるの。
だからこれが使えるかどうかが、魔法を使える人を指す魔術師と、国に認められたプロを指す魔導師との境界線」

少々、指が疲れてきたのかもしれない。
二、三度、指を曲げたり伸ばしたりする動作をしてから、少女は床から４本目の矢を拾い上げ、もう一度弓へとつがえた。

「まあ、並の魔導師が個人で使えるのはこの辺りが限界ね。
――ここから先は、一生修練して出来るかどうかの世界」

――静かにそう言った少女の雰囲気は、先ほどまでとは完全に別物になっていた。

無感情なままに集中するその仕草は、妖精の様な彼女の容姿と相俟って、見る者に神聖な印象を与える。前の三度と全く同じペースで行われたはずの、弓を構えるという動作が、今度は矢鱈とゆっくりに感じられた。込められた魔力によるものだろうか。赤熱した鏃はなおも熱く、キラキラとした燐光を周囲に吐き出している。

翡翠を思わせる、翠色の瞳。薄暗い修練場の中でもなお煌めくその宝石が、僅かにハイライトを変えた気がした。

その幻想的な姿に魅入る青年。

彼を視界に収める事も無く、少女はその魔術の銘を高らかに告げる。

「火龍の火炎弾（ファーヴニル）」

「は――――――？」

――そして、龍が現れた。

空間を切り裂き、駆け抜ける矢を包み込む様にして現れる、橙赤色のフレア。

空中放電による轟音が、広い筈のドームを埋め尽くす様に響き渡り、憤慨した獣を思わせる咆哮が、四方八方から共鳴する。プロミネンスを彷彿とさせる、常識外の熱量を圧縮したその紅焔は、矢そのものを巨大な火龍へと変貌させた。

火龍の雄叫びが、視界の全てを食い尽くす。

飲み込み、蹂躙し、万物を灰燼へと帰しながら、魔導の焦熱が領域を覆い、行く手の全てを溶解し尽くしていく。留まる事を知らず、止め得る存在も無く疾走した炎の龍は、最果ての壁へと到達した瞬

間、その全ての力を解放するかの様に爆散した。

「――――っ！！」

閃光の後に、緩やかに回復していく視界。

青年が再び目を開けた時には、的の墓場はその半分以上を焦土へと変えられていた。

向かいの壁は、まるで削岩機でもぶつけられたかの様に抉られている。

「――コレが、龍霊級。

……ま。今回は詠唱無しだから、威力はちょっと抑え目になったけど」

大した感慨も見せずに、まるで当たり前の様に説明する少女。

対する青年は、唖然として言葉を失っていた。

……コレは弓とか爆弾とか言う以前に、最早地球の近代兵器と比較しても遜色の無い威力である。しかもコレが抑え目だとすると、全力で撃ったとしたら何ジュールくらいの破壊力になると言うのだろうか。

青年は、魔力が化学物質だという自らの仮説に、少々自信が無くなってきた。

「アル……」

「……なに？」

訝る様な、少女の視線。
青年は、大げさに溜息を吐いてから続けた。

「……君、昨日は一体ナニをしてたんだ？
こんなの、あんなお姫様なんか一捻りじゃないか。
いや。というかコレ、軍隊とかと戦えるレベルだぞ？
昨日は使わなかったのか？　街中だったから？」

「……使ったわよ。
完全詠唱の、補助霊道魔法円まで使ったヤツを、しかも不意打ちで。
……アイツ、ソレを軽い火傷だけで済ませたのよ？　信じられる？
裸に？けば、鱗の一、二枚見つかるんじゃないの？」

「……」

――君も同類だ、という呟きは、取りあえず飲み込むことにした。
青年は思案する。どうやらこの世界は、個人の戦闘能力格差が恐ろしいコトになっているらしい。この少女やあのお姫様の相手をするとなれば、地球では自衛隊あたりが出動しても危ないのではないだろうか。
戦闘機とかが少女の吹いた火炎に飲まれていく様を想像して、なんとなく、青年には彼女の姿が某黒い大怪獣と重なって見えた。

「じゃ、ここから先は名前だけね。
――というより、流石に帝霊級以上はこの修練場じゃ持たないから」

「帝霊級――ってことは、龍霊級の上か。
……今のより上ってどんなだよ」

「もう知ってるでしょ？
ほら。一昨日の夜にあんたにぶつけたヤツ。
始祖の炎帝（ムスペルヘイム）は帝霊級魔術よ」

「……待て。龍霊級がプロでも一部しか使えない魔術なんだよな？
君、さらにその上の魔術を、あんなくだらない理由でオレに撃ったのか？」

「……べ、別に本気じゃなかったわよ。
アレだって、本来の威力の４分の１も出てなかったんだから」

「……」

気まずそうに頬を描いている少女を見ながら、青年の背中には嫌な汗が滴っていた。
何のことは無い。この少女、どうやら本物の大怪獣である。癇癪を起しただけで火を吹いて、街とか簡単に破壊出来る生き物なのである。
青年はこの時ほど、自分の世界の法則でしか傷つかないという守護魔の特性に感謝した事は無かった。いや、まあ。魔術でシバかれない代わりに、鉄拳制裁でバカスカ殴られているワケではあるが……。

「さて。その上が、いよいよ精霊級ね。
精霊一体分の力を丸々使う最強の術式で、魔術の最高峰。
各属性に１つづつの、計４つしかないの」

“精霊”という単語に、青年の眉がピクリと跳ねたが、少女は無視して続けた。

「ちなみに大魔導っていうのは、この精霊級魔術を単騎で使える魔術師に贈られる称号。人の身で、最高　存在である精霊の力を扱えるその技量に対して、畏怖を込めて、ね。
でもそんなことが出来るヤツは、各国に1人居るか居ないか。
――銀の国の魔導師では、あたし1人だけ」

「なるほど、それはまた……。
凄まじいな……」

半分以上放心状態になりながら、青年はここまでの説明を簡単にまとめた。

曰く、魔術師というのは、魔法を使える人物の事を指すらしい。流石に日用雑貨の自然霊級魔術は含まないと思われるから、おそらくはその上の戦霊級魔術が扱えれば、一応は魔術師と呼ばれるようになるのだろう。魔法が使える人という意味だから、コレは職業とは無関係の呼称だと思われる。

その上が抗魔術結界とやらの境霊級。コレは高ランクの魔術を使う為には必須の魔法で、防護服の様な役割を果たすのだという。その上が狼霊級で、少女はこれを魔導師認定試験と言っていたから、おそらくはこの狼霊級以上を使える人間を魔導師と言うのだろう。
魔導師は国に認められたプロだと言っていたから、おそらくは魔導師というのは、呼称では無く職業名である。少女は魔導研究所の所長なんていう職に就いているのだから、まあ完全に魔導師だろう。
対して昨日のお姫様の職業は“姫”なのだから、例え魔法が使えても魔導師では無い。
……いや、まあ。確かに“戦士”かもしれないが。

そして魔導師達の中でも、４つの最強魔術のどれかを使える人間は、特別に大魔導と呼称される。精霊級魔術と呼ばれたそのランクを独りで使えるのは、国に1人居るかどうかであるという。少女によると、そんな事が出来る大怪獣は、この国では少女だけらしい。なるほど、自ら国一番の魔導師だと謳うワケである。

また精霊級魔術を単騎で使える人間が大魔導だとすると、あのお姫様がソレを使えるとすれば、確かに彼女は魔導師ではないが大魔導だという事になる。

――そこまでを纏めたところで、青年は疲れ切った様な溜息を零した。

「アル……」

「……ナニよ」

「いや、なんと言うか……。
君、本気で人外だったんだな……」

少女の怪獣ぶりを再認識した青年は、まるで吐露するかの様にそう呟いた。

因みに今回の人外とは、別にホモサピエンス以外という意味で言ったワケでは無い。

要するにこの世界の常識に当てはめても、少女やあのお姫様は、十分に規格外の大怪獣なのである。魔導師以外の一般人も沢山居るであろう事を想定すると、この世界の戦闘能力格差は、それはそれはモノスゴイコトになっているのだろう。

この少女は、その中でも特に危ない方の位置にいる生き物なワケである。

「……ふん。どうせ魔導師なんかそんなもんよ。
それにね。どうせ敵国の召喚主も殆ど大魔導なんだから、このくらい出来なきゃ直ぐに殺されて終わりじゃない」

「……」

……どうやら怪獣は、少女とお姫様の他にもあと4匹いるらしい。
5体の怪物（しゅごま）だけでも既に頭が痛いというのに、さらにそいつらのペアが怪獣だったとは……。青年は、あまりの頭痛にいっそ頭を割りたくなった。

「……取りあえず、この世界が怪獣王国だったという事実は理解した。
それで？　さっきは君、魔術のランクは9階級あるって言ってなかったか？
今の精霊級を含めて7つなんだが、精霊級が最強なら、あと2つはなんなんだ？」

最早半分自棄っパチになりつつある青年の声。
少女は少し考える様な仕草をしてから、続けた。

「――特霊級と神霊級。
特霊級は、まあ番外みたいな物よ。現象が特殊だったり、規模によって難易度が大幅に変動したり、あとは相当特殊な先天魔術が無いと使えなかったりする魔術を分類する為にあるランク。例を挙げるとすれば、賢者の高座（フリズスキャルグ）かな」

少女の言葉に、少し記憶を辿ってみた。
賢者の高座、と言えば、確か少女が昨日使っていた感知魔術であ

る。
　原理はよく分からなかったものの、もしもあれがレーダーの様なモノであったとすれば、確かに目標の距離や数、補測時間によって難易度は大幅に変わるかもしれない。
なるほど。確かに2メートル先の人間と、2キロ先のミジンコを感知する難易度の差を考えた場合、同じランクに分類するのは憚られるだろう。

「で、最後が神霊級だけど……。
これは、まあいいわ。
だって、存在してないから」

「は？　存在してない？
じゃあ、どうしてランクなんか設けてるんだ？」

訝しげな青年の声に、少女はうーん、と言いにくそうにしていた。

「ユミル様の伝承にね、真理の宿木（ミスティルテイン）っていう、“死者殺し”の大魔術が出てくるのよ。でもね。伝説の魔術っていうだけあって、威力や属性どころか現象自体も全部不明。
……と、いうかね。精霊級が精霊の力を全部使って撃つんだから、原理的にそれ以上の魔術なんかあり得ないのよ。そもそも死んでるヤツをどうやって殺すのかとか、それ以前に死んでるんだから殺す必要なんか無いじゃないかとか、色々突っ込みどころ満載のヤツでさ……。魔術が始まった頃からある伝承だから、便宜上残ってるけど――まあ、おとぎ話みたいなもんだと思ってて」

　少女は、そんな歯切れの悪い言い方で説明を終えた。
　青年にはその様子が、“個人的には信じたいんだけど、流石にちょっと眉唾っぽいな～”なんていう、少女の複雑な内心を顕著に表

している様に思えた。いやはや、夢と現実の区別は大事である。

「――あ。ちょっと待った。
ゴメン、一つだけウソついた」

――と思っていると、最後の最後で、少女はそんな事を言い出した。

「？　まだ他にランクでもあるのか？」

「いや、そっちじゃなくてさ。
さっきの属性の説明。
火が最強って言ったけど、よく考えたら正確じゃ無かったから。
まあ、殆どあり得ないケースだから、あたしもつい除外しちゃったんだけど……」

「？」

困惑している青年をよそに、少女は神妙な顔つきで付け加えた。

「――最強は、“光”だって言われてる。
数百年に1人しか現れない、英雄の先天（ギフト）魔術よ」

――――――

「まあ、魔術の概要はそんな感じだけど。

なにか質問とかある？」

説明を終え、弓を収納した少女を見て、青年は暫し思案した。
思考の結果、質問は――特には無い。
いや、正確には聞きたい事は山ほどあるが、おそらくソレは聞いても切りがない事だろう。

少女の説明は、まあ比較的簡潔であったとは思う。
しかしそれは、裏を返せば細かいところは何も説明してはいないという事なのだろう。
例えば地球の学問、物理学あたりを例に考えれば明らかではあるが、本来学問の一分野というモノは、人一人が数時間説明しただけで語りきれる様な物では無いのだ。今少女が説明をしたのは、おそらくは中学の教科書の導入に羅列されている様な、一般常識の中でも本当に基礎の様な部分だったのだろう。
……つまり、真也自身の目的には殆ど役に立たなかったと言ってもいい。

そもそも今回、真也が魔術を学んでみたいと言い出したのは、知的好奇心があったことは間違いが無いが、それ以上に帰還の為の足掛かりになると考えられたからなのである。彼をこの世界に拉致したのがその魔術だと言うのであるから、つまりはその魔術とやらを学べば、自力で帰る方法を見つける事も出来るかもしれない、と思ったのだ。自力で帰る事さえ出来れば、そもそも5体の化け物達と殺し合う必要すら無くなる。

……まあ最も、異世界に移動する方法を開発した地球人が居ない事からも察する事が出来る様に、異世界への帰還というのは、魔術とやらにとっても相当に難易度の高い事なのだろうと予想はついていた。青年もこの場ですぐに召喚陣とやらの仕掛けまで理解できる

とは楽観視していなかったし、まあ当分は、例の化け物連中に対抗する手段でも考えながらゆっくり魔術を学ぶくらいが最善だろう、などと思っている。

少女の見せてくれた現象は、純粋に学者として面白かったと考える事にした。

「ん？　そういえば……」

そこまで考えた青年は、ある重要な懸案事項を思い出した。

「アル。魔術の事は何となく分かったが――、
やっぱりオレには使えないのか？」

――この問題である。

よく考えると、仮に魔導とやらを学び、自力で帰る算段が付いたとしても、ソレを自分で使えなくては意味が無いのだ。魔術を使わなくては帰れないと仮定し、さらにこの世界の人間にしか魔術が使えなかった場合、結局全ての守護魔を倒してからでなくては地球に帰してはもらえないだろう。

それでは、あまりにも意味が無い。

少女はコホンと咳払いをしてから、妙にわざとらしい仕草で、ピンと人差し指を伸ばした。

「――1つ。貴方の左手には、貴方を維持する為の魔法円があります。

実はその魔法円自体にも魔力の集積機能があって、貴方の因果律歪曲はその魔力によって行われています。そして守護魔の魔法円はかなり余裕をもって組まれている為、貴方の魔力は、毎日ちょっとづつ余った状態になっています」

「？　なんだ。それじゃあオレは、別に君が居なくても生きていられるわけか」

どこか安心した様な青年の声。

少女は溜息を返した。

「……あのね。その魔法円は、あんたの維持に必要な魔力を集めてるだけなの。

あんたがランプの炎だとしたら、それは自分で油を足してくれるネジの無いランプで、壊れない様に抑えてるのがあたし。少しでもあたしから魔力が流れてる内は問題じゃないし、そのくらい意識しなくても出来るくらい簡単だけど――。

あたしが死んだり魔力を止めたりしたら、その時点であんたはお陀仏よ」

「――例え世界を敵に回したとしても、君だけは最後まで守り抜こう」

「……ソレ、そんな死んだ魚の目で言うセリフじゃないと思うんだけど」

青年は、遠い目をして心で泣いた。

――ああ、どうやら自分は、やはりこの少女には逆らえない運命にあるらしい。

昨日の様に機嫌を損ねて殺される可能性もあれば、少女が敵国の刺客に殺されてしまう可能性もあるだろうし、もっと言えば、彼女が事故や病で死んだ場合にも殺されてしまう立場にあるワケである。

今の青年には、この少女が世界中の誰より大切な、掛け替えのない存在に思えた。

……勿論、色も素っ気も無い意味で。

「まあとにかく、オレにも自由になる魔力とやらがあるってことか……。

それじゃ、オレにもその魔法とやらが使えるのか？」

コホンと、気を取り直すかの様に咳払いしてから、彼はそう訊いた。

少女は、呆れた様に頭を抱えている。

「……あんた、馬に乗ったことある？」

「いや、無いが？」

「……今から馬術とか覚えて、本職の騎兵になる自信は？」

「……」

――そのやりとりだけで、青年は少女の言わんとする事を悟った。

「……そういうこと。

いい？　あたしが組んだ術式なんだから、確かにあんたは、一般人に比べたら多少ましなくらいの魔力を持ってる。

でもね。それがそのまま、魔法をポンポン使えるって意味じゃな

いの。
あたし達魔導師は、物心つく前から毎日毎日修練を積んできて、ようやく今のレベルにいるんだから。
先天魔術が無い時点で一般人より不利なのに、他所から来たド素人のあんたが、今から魔術なんか始めたところで、そうそう使えるようになるワケが無いでしょ？」

少女は、今までより少々厳しい口調で、言い聞かせる様にして青年へと告げた。
おそらくこれは、魔導師としての彼女の言葉なのだろう。
初めからモノにならない事が分かっているのであれば、初めに現実を教えておくのは、確かに先達としての務めであると言えるのかもしれない。

「……」

しかしそれを聞いた青年は、人差し指をピンと立てた。

「……アル。科学者とは、常識を破壊する為に存在する職業のことなんだ」

「……？　うん」

「君は今、他所から来たド素人には、そう簡単に魔術を使う事は出来ないという常識を述べた。ならば科学者たるオレは、その常識を一度検証し、場合によっては破壊する義務を負っている」

「……？　うん、それで？」

「加えてオレは、今現在特務教諭の任に就いていて、オレの世界の

技術をこの世界に伝える義務も負っている。そして技術というモノは、異なる技術や知識と共鳴する事によって発展するのが常である。つまりだな、もしもオレが魔術を使える様になったとすれば、それによって何らかの未知の要素が生まれる可能性もあるわけだ。よってオレが魔術とやらを学ぶ事は、ある意味では国王陛下直々に仰せつかった任務であるとも言い換える事ができる」

「……。だから？」

「……」

青年は、コホン、と咳払いをした。

「――言い方を変えよう。仮説の是非とは、本質的に実験によってのみ証明され得るんだ。君は今、オレに対して魔術を使えるワケが無いという仮説を立てた。オレの世界の知識を伝えるとだな。立てた仮説は、実験によって証明されなくてはならない。今回のケースであれば、オレが魔術を使えるようになるのかどうかは、君がオレに魔術を教え、ソレを実際に使ってみるという実験を経て漸く結論を得られる物なんだ。つまり何が言いたいのかというと……」

「……。

……要するにさ。使ってみたいの？」

青年は、コクリと頷いた。

使いたいかと聞かれれば、答えは勿論使ってみたい。

――何しろ、地球へ帰る為の第一歩なのだ。

自分の命が風前の燈火である事がはっきりした以上、化け物と殺し合うなんて悠長な事は言っていられない。

一刻も早く帰りたいのは当然である。

「……どうしても、教えなきゃダメ？」

「？　教えてくれるんじゃなかったのか？」

何故か、バツが悪そうな顔をし始めた少女。
青年は、先の所長室での言質を返した。

「あ、あの時は基礎知識って言ったじゃない。
使うのを教えるのは、その……、
ちょっと、心の準備が必要というか……。
と、とにかく、なんかまた違うの！！

……。
その……。どうしても、教えなきゃ、ダメ？」

少女はモニョモニョと何かを口籠りながら、明らかにおかしな様子でそんなコトを言った。
目を泳がせ、頬を染めながら、む～と唸っている。

「……」

……その態度はどうにも気になったが、しかし青年にしてみれば、

魔術を使えなくては自力での帰還は絶望的になるのだ。少女の異変を努めて意識しない様に気を付けながら、無言でコクリと頷いた。

「……ホントのホントに、ど～しても、あたしじゃなきゃダメ？」

コクリ、と青年は頷いた。

他に魔法使いのあても無いし、そもそも彼は、少女の実力を既に知っているからである。

国一番の魔導師であるという少女。ならば、この国に彼女以上の講師なんか居る筈が無いのだ。それに青年の性格的に言って、顔も知らない誰かになど、教えを乞える筈も無い。

「……。

はぁー……」

少女は暫し悶々とした様子で唸っていたが、青年の魔術を学ぶ意思が固いのを悟ったのか、やがて諦めたかの様に溜息を吐いた。紅潮した頬はそのままに、本当に仕方なさそうな感じで、呼吸を落ち着ける様に二度三度と深呼吸を繰り返す。

そして伏し目がちに、軽く俯きながら口を開き――。

「……わかったわよ。

あーっ!!　もう!!　分かったわよ!!

それじゃ、本当に初歩の初歩だけね!?

一番簡単な、自然霊級すれっすれのヤツ!!

そうよね！！　良く考えたらあんた、特務教諭だもんね！！
そういえば、暇なときには魔術を学ぶ権利があるんだった！！」

――本当に、仕方なさそーに、教えてくれる事になった。

25.　真理を探求する上での根本的な世界観及び大前提を完全に異にした二つ

はい！！　と、いうわけで、ここまでの設定を全部まとめてみちゃいました！！

えーと、次回から、真也君に魔術とか覚えさせてみようかな、って思ってます。

はい。やっぱり、異世界トリップ物で魔術覚えないのは詐欺だと思うんですよー。

せっかく、“魔導”科学なんてタイトルがついてますしね？　ね？

ではでは、これからもよろしくお願いします。

26. 魔導研究所所長による異世界人への魔術指導及び現代物理学と魔導理論

ちょっぴりラブコメ練習中です。
……ちょっぴり、ですけど。

26. 魔導研究所所長による異世界人への魔術指導及び現代物理学と魔導理論

――突然だが。

朝日　真也は、才能に満ち溢れた物理学者である。

僅か8歳にして相対性理論を理解し、12歳にして博士号を取得した彼は、17歳の今となっては、日本最年少の大学教授として地方大学にその席を置いていた。専門分野は素粒子論全般。最近では、特にヒッグス場をゲージ場的に捉える事によって湯川相互作用をゲージ力と統一的に扱おうという試みに尽力しており、文字通りに万物が内包する質量という性質の発生機構を解き明かす事は、爆発事故に巻き込まれるその瞬間まで、彼の中では最もホットで重要な位置を占める感心事の一つであったと言えるだろう。

朝日真也は、才能に満ち溢れた物理学者である。
有り体に言えば、天才であったと言い換えてもいい。

天才とは、脳の偏りによって齎される一種の欠陥であるとも言える。

サヴァン症の例を考慮すれば大方の推測が成り立つ様に、天才とは多くの場合、一つの才能に秀でる対価として数多の機能（よぶん）を前世に置き忘れた患者なのである。

そういった意味で言っても、彼は天才と形容されるのに些かの不都合も無かっただろう。

彼を構成する要素とはずばり物理学における頭抜けた才能であり、それが全てであったとすらも言える。幼少の頃から物理学という単

一の用途にのみ秀で、その他に対する関心を失った、ある意味では人格破綻者とでも言うべき人形（ヒトガタ）。彼にとっての感心事とは、つまり自らを収める宇宙の運行についてであり、つまり自然界に存在する、至高の数式（ことば）で綴られた方程式（げいじゅつ）のみであったのだ。

故に朝日　真也は、自身の才能の不足という状況について考察する事など一度たりとも無かった。彼にとって興味の全てとは自然界の理であり、つまりそれ以外の事象は全て関与するに値しない些末事だったからである。ならばこそ、唯一関与するに値するその分野で既に圧倒的な才覚を誇っていた以上、自らの才能の限界などという物について考察する機会などあった筈も無い。

――無論、世界は広い。彼とて真摯に探し、世界中に目を向ければ、自分よりも才能のある存在を見つける事は容易だっただろう。もしも彼が、ほんの少しでもそういった外の世界に目を向けるだけの人間性を備えていたのであれば、彼とてここまで偏屈とした人格を形成する事はなかったかもしれない。もしも、彼がほんの僅かでも他者に対する優越感や劣等感を抱く事が出来る人間であったのであれば、彼も人並みの挫折や達成感といった感情を経験する事が出来たのかもしれない。

しかし人間という生き物にほとほと無関心であった彼は、不幸にも自らの才能を他者のソレに比する、などという行為に関心を持つことすらも無かった。彼にとって必要であったのは、自然の発するメッセージを過つことなく受け取る為の能力であり、決してそれ以上の物では無かったからである。彼は例え、視界に映る全ての人間よりも自分の才が秀でている事を知ろうと、逆に視界に映らないどこか遠くに、自らよりも優れた受信機（ニンゲン）がある事を自覚しようと、その事に対して考察することに時間を空費することなどなかった。

詰まるところ、朝日　真也には努力をして何かを成し遂げた経験という物が無かった。

彼が自らの労力を費やす分野とは、それ即ち彼にとって興味のある物事意外ではあり得ないからである。興味のある分野なのだから、仮に何日か徹夜で研究室に詰めなくてはならない様な状況が続いたとしても、それは彼にとって決して苦では無く、苦行というニュアンスを含む努力という名詞は適さない。

彼の発明王、トーマス・アルバ・エジソンは、天才とは1パーセントの閃きと、99パーセントの努力であると言った。この言葉は非常に有名に過ぎるが、彼が原文に於いて努力に当たる単語にｅｆｆｏｒｔやｅｎｄｅａｖｏｒでは無くｐｅｒｓｐｉｒａｔｉｏｎ（汗）を充てたのは、この場合の努力が必ずしも本人にとっての苦難を意味しない事を含んでいたのではないか、と真也自身は解釈している。

繰り返しになるが、朝日　真也は才能に満ち溢れた物理学者である。

彼にとって興味のある事柄、つまりは時間を費やすに値する事柄とは自然界を司る物理法則の発掘であり、彼はその一点においてのみ、正に比類なき才能を誇っていた。

故に彼にとって劣等感や努力などという概念はまるで縁の無い事柄であり、つまりは17年に渡る彼の人生に於いて、終ぞ経験する事が出来ない現象であったのだ。

――さて。その事を是非とも念頭に置いた上で、ここからの彼の様子を観察して戴きたい。

場所は修練場と呼ばれた部屋がある廊下の突き当たり。
埃っぽくて薄暗く、訪れる人間も少ないであろうその一角において、朝日　真也は低い声で唸っていた。眉間に皺を寄せ、たまにソレを指先でグリグリと弄っては、思い出したかの様に左手を前方へと突き出す。たっぷり数秒程考え込む様な仕草を見せ、力む様に腹筋に力を入れたかと思えば、次の瞬間にはフラストレーションを爆発させるかの様に頭を掻き毟る。

「く……っ。また、ダメか……」

額に汗を浮かばせつつ、科学者特有の洞察眼に殺気を漲らせながら、彼は前方にある何かを全力で睨み付けていた。親の仇を見るようなその視線を追うと、１０メートルくらい先には一本の空き瓶。廊下の突き当たりの窓枠に、飲み終わったポーションの入れ物が、差し込む陽光を受けてキラキラと輝いている。ビンの口には、乾燥したコルク栓が、押し込まれる事も無くただ上に乗っていた。

人気の無い一角で、空き瓶を睨みながら、謎の悪態を零す白衣の青年。
……傍目から見れば、かなり危ない人状態になっていると言えなくも無い。
最も、確かに彼は常識的な人間性の持ち主であるとは言い難いものの、決して世間一般が想像するところの変質者の類ではない事は既に皆さんもご存じの通りだろう。
彼がこんな残念な状況に陥ってしまっているのには、一応のところそれなりな理由があったりする。

――話は数刻前に遡る。

青年に魔術を教える事を約束した少女は、早速にして一番簡単なモノを試してみようという提案を持ちかけた。曰く、どの程度魔術の才能があるのかを知らなくては教えようが無い。実際に使うところを見て、どの程度のモノであるのかを見極めたい、という事らしい。

少女の真意は測りかねたものの、まあ教えてくれるというのであれば断る理由などどこにも無いため、青年は快く少女の提案を受け入れることにした。

暫し、何故かもじもじとしながらむ～っと唸っていた少女は、そのうち意を決したかの様に咳払いをすると、おずおずと青年に向き直った。

「――そ、それじゃ、教えるね？

始める前に言っとくけど、魔術っていうのはね。イメージが凄く大事なの。

魔力集積能力の個人差を除けば、術者がどれだけハッキリとイメージ出来るかによって、威力が9割は決まるって言われてるんだから。

今から簡単な火を出す魔法を教えるけど、出来るだけはっきりとイメージできるように頑張ってね？」

「いや、それはいいが……。

アレだ。お手本とか見せてくれないのか？

どんな事が起きるのか知らなきゃ、想像しようも無いんだが……」

「ダメ。同じ火っていっても、どうせあんたのイメージする火とあ

たしのイメージする火は微妙に違うんだから、あたしのイメージがあんたにとって最適とは限らないでしょ？
だから、初めの一回だけは、絶対に自力で作んなきゃダメなの。
……大丈夫よ。心配しなくても、ちゃんと誘導してあげるから。
……あんまり、やりたくないけど」

「……？」

何故か口籠っている少女が気にはなったが、まあ説明自体には納得したので彼は頷く事にした。
確かに彼女の言う様に、同じ火と言われても蝋燭の火をイメージする人もいれば、人魂の様な火を想像する人もいるかもしれないし、もしかしたら、ナトリウムの炎色反応を想像する人もいるかもしれないからである。

本質的に、人間のイメージなど千差万別な物なのだ。
明確にイメージする事が現在の命題となっている以上、少女の火を見た先入観でイメージに影響が出ては、確かに彼自身にとって最適なそれを作り上げたとは言い難いだろう。

真也がそんな解釈をしていると、少女は躊躇するように視線を泳がせながら、上擦った声で口を開いた。

「……それじゃ、教えるよ？
ほ、ホントに、教えるから、ね？

――先ず、左手をこう、前に構えて。
ううん、もうちょっと下。
余計な力が入らない様に気を付けてね。
うん。肘も、もうちょっとだけ曲げた方がいいかな」

「こうか？」

対面する様に立っている少女を模写するかの様に、真也は脚を肩幅に広げ、右足を半歩下げ、左腕を前方へと突き出した。少女はまるでダンスの稽古か何かの様に、型とズレているらしい部分を手で引き、正しい位置へと誘導する。

真也には、なぜ魔術に姿勢が関与するのか甚だ疑問ではあったものの、折角教えてくれている少女の気勢を削ぐ気分でも無かった為に、黙って言われるままに誘導される事にした。

――余談ではあるが。魔術は本来、利き手で行使するところから始めるのが一般的らしい。

狙いを定めたり腕を動かしたりするのだから、まあ当然と言えば当然だろう。

真也は右利きである為、本来であれば右手を構えるのが初めの一歩だということなのだが、しかし守護魔である彼の場合には、どうやらそう簡単にはいかない様だった。

何しろ真也の場合、魔力を集めているのは体内の集積器官では無く、左手に輝く魔法円なのである。少女によると、霊道の無い守護魔の体内には魔力を効率的に運ぶための回路が無く、左手で集めた魔力を右手に運んで使用するのはほぼ不可能であり、万が一出来たとしてもかなり効率が悪くなることは間違い無いらしい。

……つまり真也は、仮に魔術を習得出来たとしても、永久に、左手の、しかも魔法円（手の平）の上という非常に限られた領域でしか魔術を行使し得ないという事になる。

「うん、ＯＫ。
それじゃ、初めにちょっと条件があるんだけど……。
あたしの声をちゃんと聞いて、絶対に逆らわないって、約束してくれる？」

「？　いや、まあ。
そりゃ教えて貰うんだから従うつもりだが……。
わざわざ約束する意味があるのか？」

「――いいから。
あたしの声だけを聞いて、あたしがいいって言うまで、絶対に逆らわない。
あたしの声だけを聞いて、あたしがいいって言うまで、他の事はなんにも考えない。
魔術を教える前には、約束しなきゃダメなの。
ほら、約束。するの？　しないの？　どっち？」

「……まあ、いいか。
君の声を聞いて、指示には従う。
あと、他の事は考えないって約束する。
――これでいいのか？」

少女の言葉はいまいち要領を得なかったが、まあソレが必要なら
と、彼はあまり考えずに頷いた。多分、伝統的な儀式みたいなモノ
なのだろう、などと解釈してみる。
国王陛下も、魔導師は約束を大事にする生き物だと言っていたし
……。

真也がそんな事を考えていると、

「――うん、ＯＫ。
それじゃ、さっそく一つ目だけど……。
その姿勢のまま、絶対に動かないでね？」

「――――？」

少女はそんな事をいいながら、彼の左腕を引き寄せる様にして歩み寄り――。

――強く、その身体を抱きしめた。

「――は？」

暫し、何が起きたのか分からずに放心する青年。
そんな彼をよそに、少女は更に強く、きゅ～～っと彼の身体を抱きしめる。
抱きしめながら、彼の胸板に顎を乗せて、ゆっくりと顔を見上げてきた。

「――そう。そのまま、動かないで。
そのまま、あたしの目を見ててね。
あたしがいいっていうまで、絶対に逸らしちゃダメ」

「ちょ、ちょっと待て！！　いきなりナニを――」

「いいから！！　あたしの目を見るの！！
目を逸らさないで、あたしの目だけを見る。
そのまま、あたしの声だけを聞く。
今は、あたしの事しか考えない。
――約束、したでしょ？」

「――――っ！！」

先の約束を思い出して、青年は一応のところ口を噤んだ。
完全に想定外の状況ではあるものの、確かに、約束してしまったものは仕方がないからだ。
青年は黙ったまま、少女の翠色の瞳を覗き込んで集中した。

少女の瞳が、まっすぐにこちらを見上げている。
間近で見ると、堪らなくなる程に魅力的な少女の顔立ち。
首筋に吐息が掛る度に、甘い香りが脳髄を直撃して、彼女が異世界人だという事実を忘れてしまいそうになる。
昨夜の晩餐会の時にも思ったが、ぷるんと柔らかそうな唇も、宝石の様な翡翠の瞳も、それこそ何度見ても慣れない程に可憐に過ぎた。
仄かに上気し、桜色に色づいた頬を見ていると、先の指示なんか無くても、他のコトなんか考えられなくなってくる――。

「――そう、そのまま。そのままだからね？
あたしの目をまっすぐに見るの。
見詰めながら、ゆっくり、意識を広げていって？
身体から伝わる、あたしの体温に、ゆっくり意識を向けていくの」

ピッタリと密着しながら、囁く様な声で指示する少女。
努めて冷静を演じ、まっすぐに少女の目を見たまま、言われるがままにゆっくりと意識を広げていく。

微かに上気した、雪の様に白い肌。
翡翠の瞳から視野を広げると、目を奪う程に艶やかな真紅の髪が飛び込んでくる。
黒い帽子の下に覗くソレが、少女が呼吸し、身を捩る度に揺れて、柔らかい匂いを漂わせる。
まるで、強いアルコールの様だった。
彼女の髪の匂いを嗅いでいるだけで、クラクラと、平衡感覚を失いそうな錯覚を覚える。

ソレを無理矢理に理性で押さえつけながら、青年は少女の指示に従おうと努力した。
確か動かないで、まっすぐに少女の目を見る。次はゆっくりと意識を広げて、その後は――。

「――――っ！！」

想像した瞬間に、卒倒しそうになった。
――この状態で、彼女の体温に意識を向ける。
コレは、健全な男子としては、倒れずにはいられない程の拷問ではあるまいか。
いや、まあ。彼女は異世界人なんだし、全然問題なんかある筈が無いのではあるが、でも、何故か、とにかく今ソレをすると物凄くヤバい事になる気がしたのだ。
――だが彼は、先ほど少女には逆らわないと約束してしまってい

る。

青年はなるべく何も考えないようにしながら、無心になって彼女の体温へと意識を移動していった。

……無心では少女の事しか考えないという約束には反するのだが、今そこまで要求されるのは、流石に難易度が高すぎるだろう。

青年は、言われた通りに少女の体温に集中した。

体温を感じようと意識を向けると、否応なしに彼女の身体の感触も分かってしまう。

少女の身体は、それはもう、どうにかなりそうなくらいに柔らかかった。

温かさと、柔らかさと、いい匂いが同時に伝わってきて、まともに意識しているだけで脳が沸騰しそうになる。

これだけ密着していると、ローブ越しでも分かってしまう、小ぶりな胸。

小さいくせに、理解できない程に柔らかいソレが、ゆっくりと、生々しい呼吸音に合わせて上下している。

胸が下がる時に、首筋をくすぐる彼女の吐息が、致命的なまでに彼の精神を侵食していった。

「体温、意識、できた？

温かいのとか、心臓の音とか、ちゃんと伝わってる？

――伝わってたら、頷いて？」

……既に限界が近いというのに、少女は、そんな追い打ちをかける様な質問をしてくる。

トびそうになる意識をなんとか繋ぎ止めて、青年は、なんとか数センチだけ顎を上下させた。

それをどう理解したのか。少女は、その花弁の様な唇をフッと緩ませていた。

「……やっぱり、不安？
絶対に逆らわないって約束させて、なにさせられるのか、やっぱり不安なの？

――大丈夫よ。大丈夫……。
あんたが嫌がることなんか、絶対しないからさ。
あたしも、あんたの嫌がる事はしないって、約束する。

……ただ、ね。あたしの声を聞いて、ちょっとでも楽にイメージしてほしいの。
魔術はね、リラックスして、自然体で練習するのが一番なんだから」

一言、一言、言い聞かせる様に、少女は囁く。
吸い込まれそうな程に透き通った、翡翠の瞳。
少女の両手が、ゆっくりと腕に移動し、左手を包み込んだのを感じた。
人差し指の感触が、手の平の魔法円に触れ、つつーっとなぞっていく。
少女の指が皮膚を撫でる度に、神経には強烈な電流が流された。
何度も跳ね上がりそうになる背筋を、青年は気力だけで押し留める。

「――ね。心の中で、もう一回復唱してみて？
あたしの声だけを聞いて、他の事はなんにも考えない。
あたしの声だけを聞いて、あたしの言葉だけを聞いて、他の事は考えない。
……復唱。できたら、頷いて？
あたしの声だけを聞いて、他のことは考えない。

――さっき出来たんだから、できるよね？
できたら、コクン、て、頷いてみて？
あたしの声だけを聞くって、心の中で言えたら、頷いて」

少女は、先ほどまでよりもずっとゆっくりとした言い方で、もう一度約束を求めた。
翠色の瞳が、まっすぐにこちらの目を見詰めている。
見ているだけで吸い込まれそうな、透き通った瞳が、まるで心の奥底を覗き込む様に、ジッとこちらを見詰めている。
見ているだけで吸い込まれそうな、翡翠の瞳。
青年は魅入られたかの様に目線を外せず、気が付くと、コクリと頷いていた。

「――うん。頷いたね？
あたしの声だけを聞くって、頷いたよね？
今の、コクン、ていうの、“約束”だよ？
この国ではね。“約束”は、全部、本当になるの。
魔法使い（あたし）との約束は、全部、本当になる。
約束したから、ここからは、本当に、あたしの声しか聞こえなくなるの。
あたしの声だけが聞こえて、身体は、あたしの言う通りになる――」

――魅了の魔法でも使われているのだろうか。
少女の瞳を、瞬きもせずに見詰めていると、それだけで意識が溶けていく様な感覚に襲われた。
優しげな少女の声が聞こえる度に、不思議と、頭がぼんやりしていく様な――。

「……大丈夫。難しいことじゃないから。

ただ、ね。ちょっとだけ、力、ぬいてほしいの。
疲れて、ベッドに倒れるみたいに、フって。
あたしの手、左手、包んでるの、わかるでしょ？
うん。そのまま、あたしの手の温度、意識して？
ポカポカ、温かいの、分かるでしょ？
分かったら、フって、力、ぬいてみて？

――ダメ。目はそらさない。
あたしの目、見てて。
目、閉じちゃダメだよ？
まばたきしないで、ジッと、あたしの目を見るの。
まばたきしないって、頷いたよね？
そう、そのまま、目を見てて。

あたしの手、どんな感触？
あたしの手の温度、分かるよね？
分かったら、力、フって、ぬいてみて？
温かい温度が、あたしの手から、ゆっくり、伝わってるよ？
温かくて、ポカポカするから、力がぬけるの。
一日頑張って、疲れきって、ベッドに倒れ込むみたいに――。
あたしの手の温度に、集中するの。
そのまま。そのまま……。
力、ふわって、抜いてみて？　大丈夫。大丈夫だから……。
だから、ね？　身体から、力、ぬいてみて？」

少女の手から、じんわりと、ゆるやかな熱が伝わって来るのがわかる。
鈴の様な、澄んだ声が頭に響く度に、脳にかすみが掛っていくような感覚を覚えた。
翠の瞳は、まるで何かを吸い取る様に、まっすぐにこちらの目を

みつめている――。

「……まだ、力、残ってるよね？
あたしの声、ちゃんと聞いて？
全身の力が、ふわって抜けて、頭の中が、とろんてなるよ。
あたしの声、聞こえてるでしょ？
力が、ふわって抜けて、頭の中、とろ～ん、て。
大丈夫。倒れないように、ちゃんと支えててあげるから。
だから、ね？　あたしを信じて、ゆっくり、力、抜いてみて？
そう、そのまま。体の中が、わた菓子になったみたいに、ふわって、力が抜けるよ？
体が、わた菓子になったみたいに、ふわって、軽くなる。
体の中が、わた菓子になって、ふわって、力が抜ける……」

瞬きすら出来ずに、真也は少女の瞳だけをみつめていた。
見ているだけで、意識が吸い込まれる、透き通った、翠色の瞳。
心地のいい声が頭に響く度に、脳が芯から痺れていく様な錯覚を覚える――。

「だめ？　まだ、力、抜いてくれないの？
……緊張、してるのかな。

――深呼吸、しようか。
ゆっくり、吸って。
ゆ～っくり、息を吐くの。
あたしに、呼吸、合わせてみて？
吐くときに、余計な力も、一緒に出てくよ？
すって……、はいて……。
すって……、はいて……。
そう、そのまま。

すって……。はいて……。
うん、いいよ。
すって……。はいて……。
もっと……。もっと……。
すって……。はいて……。
そのまま。もっと。深く沈んで。
あたしの声が、聞こえなくなるくらい、もっと、深く……」

聞いているだけで落ち着く、いつまでも聞いていたくなる、優しい声色。
それはまるで、心地のいい子守唄の様だった。
脳の深いところに響く様な、聞いているだけで安心する声。
瞳に魅入って、声を聞いているだけで、頭に霞が掛っていく――。

「リラックス、できた？
身体の力、全部抜けてるの、分かる？
――分かる、よね。
その感覚、すごく大事だから、ちゃんと覚えてね？

それじゃ、イメージして。
周りから、ちょっとづつ温かいのを借りてきて、それを一カ所に集める感じ。
――ううん、急いじゃダメ。
ゆっくり、ゆ～っくり、でいいから。
最初だし、目を閉じた方がやり易いなら、それでもいいよ。

目、閉じてみて？　瞼の力をふっ、て抜いて、ゆっくり、目を閉じるの。
瞼の重さにまかせて、ふっ、て、力ぬいて、目を閉じるの。
うん。そのまま……。そのまま……」

声に促される様に、ゆっくりと、瞼から力を抜く。
視界が暗くなると、先ほどまでよりなおはっきりと、少女の声が耳に届いた。
脳髄の痺れが、どんどん強くなっていく――。

「――目、閉じたね。
目を閉じるとさ。身体の中に、熱いのが流れてるの、よく分かるでしょ？
トクン、トクン、て。心臓の動きに合わせて、身体を巡ってる。
熱くて、トロトロしたの、身体の中を巡ってる。
ソレから、温かいのを借りて来て、ゆっくり、ゆっくり、一カ所に集めるの。
ゆっくり……、ゆっくり……」

声に促されて、身体の中に意識を向ける。
体内には、温かいナニかが流れていた。
左手を包み込む、温かい手の感触。
その体温に意識を向けると、トクン、トクン、という脈拍がはっきりと分かる。
少女の体温が、どんどん、はっきりと伝わって来る。

「だんだん、温かくなってきたの、分かる？
日向ぼっこしてるみたいに、身体が内から温かくなってきたの、分かるでしょ？
もうちょっと……。もうちょっと……。
お湯に包まれてるみたいに、温かいのが、じんわりじんわり芯に集まってくる。
そのまま。そのまま。じんわりと、温かいのが、集まって来る」

身体が、芯から痺れ始めた。
鼓動と共に体を巡る熱が、意識の集中と共に一点に集まっていく。
手の平が、どんどん温かくなってきた。
その熱が際限なく高まっていって、刺す様な刺激となって神経を感電させる。
手の平が熱くなって、溶けそうになる。

「――わかる？　中から熱いのが来たの、わかる？
わかるよね？　温かいのが、熱いのが、ぜんぶ一カ所に集まって来る。
そう、そのまま。そのままだよ？　イメージして？　燃えるよ？
温かいのが熱くなってきて、ソレが一気に外に出る。出来た？
いくよ？　イメージして？　赤くて、熱い火の玉。燃えるよ？　燃えるよ？　熱いのが集まってきて、そのまま、外に出る。あたしに合わせて、声をだして。火が付く。口にすると、一気にそれが燃え上がる。詠唱して。詠唱して！！　燃えるよ？　燃えるよ？　熱いのが集まってきて、外にでる。そのまま。そのまま。言って！！
言って！！　発火（ropt）！！」

少女の告げた言霊をリピートする。
口に出す瞬間、少女は左手から手を離し、魔法円を露出させた。
焼けそうに熱い左手が突然外気に晒されて、その温度差がパルスとなって中枢神経を駆け巡る。その強烈な電流を意識の外に追いやりつつ、彼はその呪文を口にした。

――瞬間、スパークする視界。

脳の中枢から捻り出したかの様な、強烈な電気信号が、爆発する様に神経中を駆け抜け、掌の一点に向かって疾走していく。身体を内側から火で炙られる様な感覚に、青年は悲鳴を上げそうになった。

気合でソレを噛み殺して、無理矢理力を抑え込む。コンマ2秒後、電流はとうとう終点へと達した。

――バチン、という音。

強烈な静電気にでも会ったかの様な痛みが掌に走り、筋が切れたかの様な音が耳に届く。

「――――っつ？

成功……した、のか？」

無数の星が飛び回る視界。

未だに焦点の合わない両目。

脳が麻痺した様な気分の悪さを我慢しつつ、真也は目を開けて自らの左手を見詰めた。

左手の上には、微かに白煙が上がっているのが見える。

――深い、深いため息が聞こえた。

いつの間にか、2歩ほど離れたところに立っていた少女へと視線を移す。

見ると、彼女は真也以上に強烈な頭痛でも感じているかの様に、疲れ切った表情で頭を抱えていた。

「……あんたさ、ある意味すごいわ」

心底呆れきったかの様に言う少女。

気怠そうに目を伏せたまま、ゆっくりと、その右腕を前方へと伸ばした。

「……発火（ropt）」

先の呪文と、全く同じモノを口にする。瞬間、少女の掌の上にはビー玉くらいの大きさの火球が生まれていた。オレンジ色の火の玉が、シャボン玉のようにユラユラと揺らめきながら、掌の上に漂っている。やがて小さなシャボン玉は、転がる様にして少女の人差し指へと登ったかと思うと、水滴が跳ねる様にして空中へと浮かび上がった。

１０ｃｍくらい上昇したところで、ガラス細工の様にパンッと消失する。

……なるほど。お世辞にも成功したとは言えない出来であったらしい。

青年は、まだぼんやりしている頭を再度振りつつ、先の醜態を誤魔化すかの様に人差し指を立てた。

「……アル。

分かってると思うけどな。

オレは、魔法を使うのは初めてなんだ」

「……あたしにとっても初めてよ。

ここまで丁寧に誘導されたのに火の粉も出なかったのは、あたしが知ってる中じゃあんただけなんだから……」

まるで初めて０点の答案を見た優等生の様に、少女はもう一度、深々と溜息を吐いた。

それはもう、グランドキャニオンを彷彿とさせるくらいに深い溜息だった。

なるほど。どうやら少女は、よっぽど懇切丁寧に教えてくれていたらしい。

それで火の粉も出なかったのが初めてだと言うのならば、確かにこんな顔をされても文句は言えないのかもしれない――。

「……というか、アル。今のなんだったんだ？」

そこまで考えた青年は、先ほどのアレを思い出して首を傾げた。

少女はバツが悪そうに目を伏せ、頬を染めながらそっぽを向いた。

「……ナニよ。

接触と視線交差による思考誘導なんか、ま、魔術指導の基礎の基礎じゃない。

そ、そうよ。あたしは魔導師…なん…だから。あのくらい、全然……、なん…とも……」

口ではそんな事をいいながらも、後半になるほど、少女の顔はみるみる薬缶の様に紅潮し、最終的には完全に下を向きながら煙でも出しそうになっていた。

……どうやら、やった本人も相当に恥ずかしかったらしい。

その様子を見た青年は、ほんの些細な事が気になった。

「……因みに君、どのくらいの頻度でこういう指導をしてるんだ？」

「……う。に、2回か3回しか、したこと、ないわよ。

だって、所長のあたしが教える様なヤツは、普通は基本なんか完璧に出来てる上級者ばっかりだし。人数も多いから、一人一人個別に誘導してる時間なんか無いし……。

……貴族が多いから、あたしに触られるの、よく思わないヤツも多いし」

ブツブツと呟くようにして言いながら、少女は肩をプルプルと震

わせ始めた。
その肩が、震えながら5センチほど上昇する。
羞恥に潤んだ瞳が、キッと青年の顔を睨み付けた。

「……もう。
あーっ!!　もう!!　だからやりたくなかったのよ!!
言っとくけど、今までの3回だって、相手はみんな女だったんだからね!?
何であんたは男なのよ!!
何であんたは男なんかに生まれてきちゃったのよ!!
あたしの純潔返せバカァァアアアア!!!!」

「待て待て待て待てちょっと待て!!
君の言いたい事は全く分からんが、取りあえず落ち着いて話し合おう!!
だから先ずその拳は――へブッ!?」

――何かが吹っ切れたかの様に大暴れを始めた少女。
半分錯乱しながら拳を振り回す彼女を宥める為には、青年は僅か10分の間に27発の右ストレートと15発の左フック。6発のハイキックと1発のアッパーカットというキックボクサーも真っ青なラッシュのフルコースをお見舞いされなくてはならなかった。

何はともあれ、回復が早いのが今の真也の強みである。
……いや、まあ。果てしなく何かを間違えている気はしたが、それでも傷が早く治るというこの体質のおかげで、目を覆いたくなるほどの打撲や流血も、5分も待てば動ける程度には回復してはくれた。

とにかく彼に言えるのは、漸く正気を取り戻した少女が、まるで

何事も無かったかの様に話を再開したという事実だけである。

「……まあ。とりあえず、今ので感覚は掴めたでしょ？
一応確認するけど。あんた今、自分の中に流れてる魔力は分かる？」

「……」

……色々と言いたい事はあったものの、今はまあ気にするまい。
真也は確認するかの様に目を閉じてみた。
結果は――なるほど、確かに分かる。
意識して体の中へと集中すると、確かに左手から温かい感覚が伝わってきて、それが全身に巡っているのが分かった。

「うん。なんとか擬似的な霊道は把握できる様になったみたいね。
それじゃ、もう一回さっきのをやってみて？
初めは苦しかったと思うけど、一回魔力の流れる感覚を覚えたら、もう随分楽に出来る筈だから」

少女に促されて、真也は再び左手に意識を集中させた。
先ほどの激痛を知っている為に一瞬だけ躊躇したが、それでも今度こそはという挑戦心が先に立ち、再び神経に電流を流す。少女の言う通り、今回は少女の誘導無しでも、魔力が集まっていく感覚を明確に意識する事が出来た。意を決して、再び先の銘を詠唱する。

「発火（ropt）！！」

――ペチ、と、驚くほどにショボい音が聞こえた。

静電気としか思えない程度の火花が一瞬だけ散って、瞬く間に虚空へと消えてしまう。
……少女の溜息が、とうとうマリアナ海溝に匹敵する程に深くなってしまった。

「……シン。分かったでしょ？
だからさ。あんた、才能無いんだって……」

少女の声を聞こえなかった事にして、真也はもう一度腕に魔力を流した。
神経が痺れる様な錯覚が起きた後に、火傷しそうな程の熱が魔法円に集中する。
詠唱を完了させると、今度は弾ける様な音が響いた。
火打石を擦ったくらいの火の粉が舞って、一瞬のうちに消え失せる。

真也は、口元を緩ませた。

「火――」

「……火が出た、とか言ったら殴るから」

「……」

真也は、肩を竦めて沈黙した。

――――――

さて。そんなこんなで、良くも悪くも魔術の才能という物がはっきりしてしまった真也は、少女によって即刻修練場からこの廊下の端へと移動させられる羽目になった。

少女曰く――

「中で練習したい？　何言ってるのよ！！
あんたみたいなド素人が、真っ当な修練場で練習なんか１００年早いの！！
あと２０分もすれば見習い魔導師達でごった返すんだから、線香花火なんかが混ざってたら邪魔なだけじゃない！！」

――との事である。
確かに、真也自身が講師を務める講義に足し算が出来ないようなヤツが混じっていようものなら、彼は間違いなくそいつを廊下へと締め出すので、まあ火花しか出せない自分が廊下に出されたのは当然であるのだと、彼は一応のところ納得をしてはいる。
取りあえず結論として言えるのは、少女は彼をこの最果ての一角へと隔離した後、窓際にあのポーションの空き瓶を置き、１０メートルくらい手前にビンを二つ立てて境界線にしながら――、

「じゃ。あたしはちょっと用事があるから、あんたはここで適当に練習でもしてて。
ここから魔術を使って、あのコルクを床に落とすの。
もしもそれが出来たら、あたしも、もうちょっとくらいなら教えてあげるから」

――と言って王宮の方へと去って行ったという事実である。
それから数刻に渡り、青年は掌から線香花火を出しながら、殺気を漲らせた視線で空き瓶を睨み付け続けている。

「燃焼!!(combustion)」

3桁目に届こうかという青年の詠唱は、掌の上に1センチ以下の、本当に小さな火の玉を作り出した。しかしいざソレを瓶に向けて放とうとした瞬間、火の玉は当たり前の様に虚空へと消滅してしまった。

――余談だが、彼の言霊はここに至るまでに5回ほど改変されている。

何度か続けていくうちに、詠唱とは自己暗示、つまりは術者が現象をイメージし易くすることを目的とする行為であり、よって想像し易ければ何でもいいという事実を思い出したからである。

……少女にバレたらまた殴られそうな物ではあるが、まあ指示は魔術でコルク栓を落とせという事だけだったので、文句は言われないだろうと彼は前向きな解釈に努める事にしている。

「……ダメか。

どうしても射程が10センチを超えない……」

零れた弱音はあまりにも悲痛であった。

ついでに言うと、射程10cmというのも大負けに負けた上での四捨五入である。

正確に言うのならば、2cm以下ならまず成功するが、5cmを越えたあたりで成功率が半分を切り、7cmになるとその成功率は1割も無くなる。火球の移動距離が10cmに到達した事など、それこそ本当に一回しか無かった。

有効射程：2cm。

火力：火打石。

……どんな一発芸だというのか。
こんな物、はっきり言ってライター程度の役にも立ちはしない。

「……」

――そう。火が出る事に感動するよりも、役に立たないという落胆の方が遥かに強い。
本音を言うと、朝日　真也にとって魔術とは、決して道具の域を出る存在では無かったのだ。
彼が魔術を学ぼうと思ったのは、確かに知的好奇心も少なからずあったものの、それ以上に帰還の為の足掛かりになると思われたからなのである。つまり彼にしてみれば、帰還の為の方法を魔術的に行う事が出来ればそれでいいわけであり、別段それ以上の物を望んでいたわけでもない。

「はぁ……」

そこまで考えたところで、真也は再び底知れない頭痛を覚えた。
そう、その魔術的な帰還の方法というのが問題なのである。
少女曰く、守護魔の召喚とは奇跡に匹敵する類の、本当に無茶苦茶な召喚術であり、つまりは魔導の最高峰の一つなのだという。
帰還した守護魔の前例がない事を鑑みても、その術式が召喚よりも簡単だとは到底考えられないワケであり、つまりソレは、少女クラスの魔導師が本気になってようやく行使し得る魔法である事を意味している。

……その少女ですらも一度召喚に失敗しているという事実を知らなかったのは、彼にとって果たして僥倖だったのだろうか。ともかくとして彼に言える事は、線香花火程度の火力しか出せない彼には、少女クラスの魔術を行使するのは最果てのクエーサーに行く様なモ

ノであり、尚且つ自力で帰還などを考えるのは、最早観測限界を超えて宇宙空間を突き抜けるくらいに果てしない道のりである、という事である。

いや、まあ。ここは異世界なんだから、彼が帰るには、本気で宇宙空間なんか突き抜けなきゃダメなワケではあるが……。

「痛――っ！！　流石に痛くなってきたな」

集中状態を維持しすぎた弊害か、或いは、異物である魔力に対する拒絶反応だったのか。真也は頭を締め付けられる様な頭痛と、火傷したかの様な神経の火照りを感じ始めていた。

額の汗を拭い、大きく息を付きながら、へバる様にして床へと座り込む。

アダマス製の床から伝わる、ひんやりとした感触が、熱を持った体に心地よかった。

「魔術……。精霊、か」

乱れた呼吸を整えながら、真也は少女の言葉を復唱して思案した。

少女曰く、魔術とは精霊との契約であり、魔力を彼らに捧げる対価として力を借りる行為、らしい。

物理学者としての彼は、勿論そんな不完全な理論体系は否定して然るべきであると考えていたのだが――、

しかし実際に魔術を使ってみると、実は意外と精霊理論もバカには出来ないのではないか、などと考え始めていた。

アインシュタインの一般相対性理論では、重力を時空の曲りとして扱う。

質量が存在する場では時空が歪み、ユークリッド幾何学が破綻し

てリーマン幾何学で扱われるべき世界になるとするのは、一般相対性理論の主な概念の一つと言っていいだろう。

しかし、この質量による時空の歪みという物を、視覚的に正確にイメージして理解する事は非常に困難を極める。体積が3次元の世界に属する存在である我々は、4次元的な場の変化を記述する術を持たないからである。よって多くの相対性理論の入門的な解説書では、3次元空間を2次元平面として捉え、空間をゴム膜の様なモノであるとして時空の歪みを視覚的に理解させる手法を取っている。

ならば精霊とやらも、これと似たようなものであるとは考えられないだろうか。

多くの人々にとって、目に見えない放射線や素粒子が確たるイメージを伴わない存在である様に、この世界の多くの人々にとっても、確たる実態を持たない魔力という概念は理解する事が非常に困難を極めたに違いない。魔力が魔術という現象を引き起こすとしても、何故そんな現象が起きるのかを、おそらくは理解出来なかったのだろう。

だから、精霊というその原因になる物を想定する事によって、自らが起す現象について一応の説明を付けた。

ましてや魔術とやらは、先ほど思い出した知識によると、術者のイメージがそのまま成功率や規模に直結しているらしいのである。詠唱なんて自己暗示染みた工程を入れているのも、おそらくはソレが一番の理由なのだろう。掴みどころのない現象を把握し、納得してイメージする為には、確かに精霊とやらを想定する事は実用上非常に役に立ったに違いない。

「……」

おそらくこの魔術という分野は、物理学の様に観察と分析を繰り返す事で発展した分野では無く、ひたすらに実用を追い求める事によって成長してきた分野なのだろう、と彼は解釈する。

そこに真実はどうなのか、なんていう無駄な考察は存在しない。

実際問題として、精霊を信じる事によって効率よく魔術を運用する事が出来るのであれば、それを事実として認め、納得し、使用していけばいい。

それで実際に魔術が使えるのだから、真理など追い求める必要はどこにも無い。

――おそらく、魔導師（彼女たち）の在り方はそういう物なのだ。

……最も、ソレを客観的に分析出来てしまう時点で、精霊を信じる事で効率を上げるというロジックは真也自身には成り立たないワケではあるが……。

「……やっぱりか」

――5分が経過した。

そんな取り止めのない事を思考している間に、彼の身体は既に回復してしまっていた。

焼ける様だった神経はあっという間に熱が引き、頭蓋に棘が生えたかの様なあの頭痛も、今ではウソの様に治まってしまっている。

ここまで来ると少々不気味ですらあったが、今の真也は痛みや怪我という物に関しては素晴らしい回復力を誇っているらしい事が改めて証明されたわけである。

まあ、他の化け物（しゅごま）も皆そうである可能性は否めないワケではある

が……。

「……どうするか」

呟きながら、手元の本へと視線を落とす。

そこに書かれた知識を思い出しながら、青年は少々思案してみた。

因みに、この本は少女が参考までにと置いて行った魔導の入門書であり、勿論彼にとっては初見である。

よって思い出しながらというのは、あくまで感覚的な比喩であって事実では無い。

例え真也がソレを“思い出す”という感覚を伴って認識していたとしても、ソレが彼にとって未知の知識であるという事実に揺るぎは無いからである。

――何が言いたいのか分からないと言う方。正しい反応であると確信を持って断言しよう。

何しろ真也自身も、初めにその事に気が付いた時には、かなり面喰った程である。

話は、少女が王宮に発って間もない頃に遡る。

少女が置いて行ったこの本の中身をチェックしていた彼は、不意に、自分がその内容を既に知っている事に気が付いたのだ。否、知っているというよりも、既視感と言った方が正しいかもしれない。

文章を目で追っていく毎に、まるで幼い頃に読んで内容を忘れていた絵本を読んでいるかの様な、“あれ？　コレ、なんか見た事あるぞ？”という懐かしい感覚に襲われたのである。

そして次瞬、彼は直ぐにその理由に思い至った。
そう。おそらくは、彼がこの本を読めるというその事実が、既にその原因に違いないのだ、と。
――つまりは、少女との“知識の共有”である。

彼女に召喚されたあの夜、彼女は言語などの基本的な知識は彼女の知識が補間する事になっていると説明した。つまり彼が今、この世界の人間と意思疎通が出来ているその理由は、彼女の頭の中から“言語”という知識を借りているからなのだ、と。
考えてみれば、この時点で既に予測できた事態ではある。
何しろどんなに難しい専門書であろうとも、それらは突き詰めれば、結局は“言語”によって記されているモノに違いはないのだから。つまりは、もしもあの少女がソレを読める、否、“理解している”という状態にあるのであれば、その知識は真也と共有されていても何ら不思議は無いのである。

感覚的には、“ど忘れ”が一番近いかもしれない。
そうと意識しなければ知っている事そのものを忘れている程にヒドイ物だが、しかしソレを理解しようと努めながら意識を向けると、まるで随分昔に暗唱した教科書の内容を諳んじるかの様に、スムーズに知識を引っ張り出す事が出来る様であった。

――否。それだけでも十分に便利なのだが、話はソレに留まらない。
現在彼と知識を共有している、あの真紅の少女。
国一番の魔導師だと自称するだけあって、どうやら、彼女は本当に只者では無かったらしい。
この知識の共有という裏ワザに気が付いてからというもの、真也は魔導書へと目を向けながら、しかし意識は自己の内面へと向ける様にしていた。

すると彼女の知識というバックアップが、予想よりも遥かに強力である事が判明してしまったのである。

……具体的に言うのならば、この程度の初歩的な魔導書であれば、初めの数行も読めば一章分に相当する内容を脳が勝手に思い出してくれる程である。

“火炎魔法”という単語を見ただけで、そこからその発生原理や歴史、成立などの知識が汲めども尽きぬ程に脳内から溢れて来て、辞書を直接引いているかの様な情報量に呆気に取られずにはいられない。

５０パターンくらいある“炎の魔法円”の術式表を見た瞬間、派生とアレンジを含めてその１０倍くらいの形式を既に暗記していた事に気が付いた時には、真也も最早呆れを通り越して妙な感動を覚えてしまった程である。

いやはや。全く、なんとマニアック――もとい勤勉な１５歳なのだろうか。

真也は、講義の最中に集団感染の如く居眠りを伝播させる自らの教え子たちを思い出し、１００分の１でいいから見習わせてやりたいな、などと皮肉混じりに思ってしまった。

因みに、科学に関する知識量ならば彼とて全く引けを取らない程のマニアックさではあるのだが……、この際、ソレには敢えて触れないのが華だろう。

ともかくとして、今の彼に言えるのは、少女が置いて行った5冊の魔導書の内容を把握しきるには、精々１５分もあれば十分であったという事である。否。それどころか、今ではその内容から派生する応用知識まで脳内に流れ込んできている始末であった。この分だと、知識だけならば、一週間もあれば並の魔導師を圧倒する事は容易に違いない。

――もっとも、知識だけなら、だが。

どうにもこの魔導という分野は、知識と実用ではまるで別物らしかった。

初めの頃こそ、練習していればその内コツでも掴めるかもしれないと楽観視していた彼も、流石にもう、今のまま続けていても１０メートルの射程は絶望的である事を理解してしまっている。それに、彼が使っている魔力とは生命維持装置の電池の様なモノなのだから、このまま無駄に使い続けるのも少々不安には感じるし……。

……まあ少女曰く、精霊級や帝霊級でも使えば別として、線香花火程度では誤差にもならないらしいが。

「……」

さて。しかしそうなると、そろそろ何か革命的な解法でも見つけなくてはならない時期に来ているのは間違いが無い様だ。

だが……、あるのだろうか？　異世界から来て、魔術に馴染みの無い自分が、あの真紅の少女の様に魔術を行使する方法。弓矢を火龍に変える程の大魔術を紡ぐ、あの少女に追い付く方法が――。

「――――？　弓矢？」

そこまで考えた瞬間、青年の頭には天啓が閃いた。

「待てよ――？　よく考えると、確か道具を使うなとは言われなかったよな？

アルの指示は確か、“魔術であのコルクを落とせ”、だけだった筈だ。

それに、確か魔導師には“魔装”とやらが付き物で、魔装は才能（ギフト）に合わせて選ぶ物なんだから――」

脳内にインプットされた情報が無意識に演算処理を始め、音を立てながらたった一つの回答に向かって疾走を始める。否、この時の彼には、少女が本気でその一つの回答を示唆していた様に思えたのだ。

……いや、思えてしまったのだ。

若き天才物理学者は、少女が全く想定すらしていなかった速さで、ななめ４５。の方角に駆けだした。

26. 魔導研究所所長による異世界人への魔術指導及び現代物理学と魔導理論

はい！！　と、いうわけで。逆チートスキル・“一周してバカ”発動です。

27. 銀の国の魔導王による世界各国の情勢の概要に関する調査報告及び地球

青年と廊下で別れてから半刻程の後、アルテミア・クラリスは目的の場所へと辿り着いた。

金淵で飾られた大扉は荘厳で、中に居るべき人物が持つべき風格をそのまま体現しているかの様である。悠久の歴史を重ねようとも色褪せないその装飾は、少女には、まるで年輪を重ねようと変わらない“あの人”を象徴しているかの様に感じられた。

――緋色の瞳と、白い髭が印象的な、“あの人”。

今から会話をするのだと考えると、正直、少女は平常心を保ち続ける自信が無かった。昨晩だって、今朝の謁見の時だって、本音を言えば何度脳が沸騰しそうになったか分からないのだ。周りにアイツや貴族達が居たから理性で抑え込んだものの、どうしようも無いくらいに本能的で、純粋な感情のせいで、昨日から何度も何度も意識をトばしそうになっていたのである。

「――――っ」

思い出しただけで、少女の身体の奥からはまた、じわりと熱が込み上げてきた。

唇をキュッと噤んで、白い右手をその小さな胸に当てる。

ドクン、ドクンと、心臓が異常なくらい脈を打っているのが分かる。

謁見の間へと続く大扉を、強い瞳で見詰める事、1分。

“あの人”の顔を思い出しただけで鼓動が早まり、温度が急上昇してしまう身体を深呼吸で落ち着かせ、少女は決心したかの様にその扉を開け放った。

「失礼します。
魔導研究所所長、アルテミア・クラリス。
国王陛下に拝謁されたく参上致しました」

意識しないと、上擦りそうになる声。
高熱に侵された様な神経を全力で鎮めながら、少女は努めて冷静な声でそう告げた。
目に見えて余裕が無く、明らかに感情を抑え込んでいることが分かる、翡翠の瞳。
気を抜くと紅潮しそうなその顔を隠すかの様に、少女は王座の前にまで歩み寄り、頭を垂れて片膝を着いた。

「ふむ、よく参った。
大魔導、アルテミア・クラリスよ。
変わり無いようでなによりじゃ」

「陛下こそ、お怪我も無い様で何よりです。
この度の諸国巡礼の旅は、いかがでしたでしょうか。
我らが王たる御身であらせられながら、諸侯の拝見を怠らないそのお心。
一国民として、常日頃から、深く感銘を受けております」

頭を垂れ、床の赤絨毯を見詰めながら、努めて淡々と返事をする少女。
――ダメだ、と彼女は思った。
この人の近くに寄り過ぎてしまったのは、彼女にとってどう考えても失敗だった。
だってこんなに近くで、一対一で向かい合っていると、声が聞こ

える度に神経が震えてしまうのだ。この人の声が鼓膜を撫でる度に、何度も何度も理性が決壊しそうになる。
溶けそうな脳を気力で留めて、少女はあくまでも冷静を装おうと努めた。

「ほうほう、それはありがたい事じゃなぁ。
あー。その、なんじゃ？
この数日はお前さん、随分と大変な出来事が続いておったと聞いておるが。
さて、首尾はどうなっておるのかね？」

「畏れながら、私程度に陛下の参考となる判断が出来るとも思えませんが――。
私個人の意見を述べさせて戴くのであれば、上々、とまではいきませんが、許容範囲ではないかと考えております」

「ふむ。まあ、それはよかった。
さて。改めて言うが、昨日の働きは大義であった。
六国に名高き武装姫に引けを取らぬその技量、銀の国の国王として、大変に誉れ高く思う。
あー、守護魔の彼とは馴染めたかえ？」

「……それは、私が判断する事では御座いません。
私は一介の魔導師であり、私も、そして彼も、所詮は陛下の手駒の一つに過ぎませんので。
陛下がもしも馴染めていないと仰るのであれば、恐らくはそれが正しいのかと……」

嗄れた、しかし決して威厳を失う事の無い声。
正直今でも、少女は平常心を保てなくなりそうで怖い。

否、とっくに平常心なんかではないのかもしれない。
だって低く、深いその声が響くだけで、少女の背筋は強く震え、何度も何度も我を失いそうになってしまう。

ソレを体裁とプライドだけで押し留めて、少女は尚も場に応じた挨拶を続ける。

「御無事で何よりです、国王陛下。
私の如き卑しき民草に、勿体無くも恩赦を下さっただけでなく、褒美まで賜られたそのお心遣い。特務教諭共々、心から感謝しておる次第で御座います」

身体を満たし、溢れ出そうになる感情を無理矢理に押し殺して、少女は努めて冷静を演じながら、国王陛下の問いへと応じ続けた。

「ふむ……」

少女の口上を、果たしてどの様に受け取ったのだろうか。
ヘリアス王は少女のつば広帽子を見下ろしながら、不機嫌そうにその眉根を顰めた。
目を閉じ、額を手で押さえながら、大きく首を振って溜息を吐く。

「はぁ……。アルテミアよ……。
この場には、今はわしとお前さんしかおらん。
小煩い大臣も、騒がしい衛兵も、今は席を外して貰っておる。
――この意味を、賢いお前さんは分かってくれんのかのぉ？」

「――――っ！！」

王のその言葉を聞いた瞬間、床を見つめる少女の目は大きく開かれた。

ドクン、と、心臓が一際大きく脈を打つ。

――大臣も、衛兵も、今は居ない。

つまり、今はこの人と二人きりで、それは、何も我慢する必要なんか無いという事なのだ。昨日から抑え込んでいた感情が、堰を切ったかの様に心中に飽和して、理性が一瞬で塗りつぶされる。高揚する意識に視界が急速に狭まって、強すぎる感情に、情けなくも指先が震えだしてしまった。

「……そう。

そう……、なんだ」

フッと、少女の口元が緩んだ。

あまりにも感情が強すぎると笑みしか出ないなんて、少女はここ暫くの間忘れていた。

ソレを表に出す事を許された悦びに、意識しなくても肩が震えだす。

翠色の瞳が、まっすぐに老人の姿を映した。

様々な感情が入り乱れ、ソレらを上回るたった一色に塗り潰された翡翠の瞳が、国王陛下の姿をまっすぐに捉えた。

ひゅぅっ、と、風鳴りの音が高く響いた。

少女の肩が、5センチくらい上昇した。

「いぃいぃい加減にしてよこの色ボケ爺さんッッッ!!　諸国巡礼!?　諸侯拝見!?　ふっっざけないでよっっ!!　どぉせまた誑し込んだ女の家でも転々としてたんでしょ!?　あんたがいない間!!!　この国の貴族どもが!!!　どんな有様だったか知ってる!?

時間があったら1から10まで三日三晩!!　夜通ぉおし説明してやりたいくらいよ!!　そのクセいきなり帰ってきたと思ったら、言うに事欠いて大変だったな？　タイヘンなのはあんたの頭の中でしょうが!!　あんたねぇ!!　その歳になってまッッッだ下半身の管理も出来ないワケ!?　今時王族なら!!　5歳の子供でも!!　あんたよりはマシな人格持ってるってのよ!!!!!　ロクに仕事した試しも無いクセにねぇ!!　ソレで王様気取りとかマジで何様だっていうのよバカーーーーっ!!!!!!!」

キーーーーン、と、耳を潰す程の大音声が謁見の間へと木霊した。

仮にも国王陛下に対する物言いとは思えない程の罵詈雑言の嵐が、決壊したダムの如く少女の口から溢れ出す。初めてこの光景を見た者が居たとしたら、この小さな体のどこにこんな発声機構があるのか、心底不思議に思いながら気絶したに違いない。とにかくこの少女にとっては、“この人”に対する感情は、どんなに声を張り上げても足りないくらいに本能的で純粋な物だったのだ。

……つまりは、怒りである。

いくら席を外しているとはいえ、王宮内の衛兵や大臣達には間違いなく少女の声が聞こえたに違いない。否、下手をしたら魔導研究所の果てにまで響き渡って、その空気振動が例のコルク栓を落としてしまったのではなかろうか。

……流石にそれは杞憂であったものの、青年が同時刻に窓ガラスに謎の微振動を観測していたという事実は秘密である。

少女は体毛があったら間違いなく逆立っているであろう剣幕で、猫の様にフーッ、フーッ、と息を乱しながら、鬼の様な形相で国王陛下を睨みつけていた。

立ち上る魔力のせいだろうか。
少女の周囲では、明らかに空気が震えている。

「ほほほ。相変わらず元気のいい娘じゃのぉ。
やはり、お前さんはそうでなくてはいかんわい」

……本当に、耳でも潰れたのだろうか。
陛下はそんな少女の罵声を、まるでそよ風の様に受け流しながら、満足げにカラカラと笑っていた。少女に全力の怒りをぶつけられて、尚且つこんな態度を返せるのは、この国ではおそらくこの老人だけに違いない。愉悦らしき色を含んだ隻眼が、愛でる様に少女を見詰めている。

「……ナニよ、その生暖かい目は」

「いやぁ、なに。
お前さんの気持ちは、よ～く分かっておるさ」

憮然として睨み付ける少女の視線。
それを心底微笑(ほほえ)ましげに、ニンマリと受けながら、ヘリアス王は嬉しそうに頷いた。

「わしが居なくて、そんなに寂しかったのか。
いやいや、お前さんの様に可愛らしい娘さんが、こんな年寄りをそこまで慕ってくれるとはなぁ。いやはや、まったく、ありがたい事じゃ」

「――――っ！！」

少女の喉から、龍霊級風魔法の様な音が聞こえた。

「どこをどぉ聞いたらそうなるのよっっっ！！！！」

――――――

「――で、どうなのよ？」

烈火の如く不平不満を撒き散らした少女は、やがて何度か深呼吸をして呼吸を整えたかと思うと、フンと鼻を鳴らしてからそう切り出した。

パチン、と指を鳴らしただけで、謁見の間に安置された貴族用の椅子が一つ、軽々と宙を舞って少女の隣まで飛んでくる。

「どう、と言うとな？」

「……無駄な時間使わせないで。
あんたがわざわざ帰って来たって事は、つまりそういう事なんでしょ？」

とぼけた様に顎髭を弄るヘリアス王。

少女は憮然とした態度のまま、豪奢な装飾椅子にピョンと座り、脚を組みながら王座を睨み付けた。

それはこの老人がここに居る意味を、既に察しているが故の態度だった。

――ヘリアス・ノルマンド・フォン・プラティヘイム。

国王とは思えぬ程に奔放な気質を持ち、気の向くままに六大国を

放浪する
天下無双の遊び人。風に流される様に世界中を転々とするこの困ったさんは、殆ど王座に座る事など無く、自国も敵国も関係無しに浮浪するのである。

しかし同時に、彼は確かに魔術大国・銀の国を総べる魔導王でもあるのだ。

“亡き左目が未来を映す”とまで言われるほど先見に長けたこの老人は、たまに思い出したかの様に国に帰って来たかと思うと、知り得ない筈の機密情報を自国に提示する。国政などそっちのけな彼が国王としての君臨を許されているのは、単衣にこの“賢言”と“予言”の力による物だと言っていいだろう。この老人がその気になれば、憎き敵国の情報など筒抜けも同じになってしまうのである。

そしてその魔導王が、この時期に帰って来た理由。
召喚主となった少女を、わざわざ呼び出してまで提示する情報。
そんな物は、考えなくても一つしかありえない。

「……勿体ぶってないで、さっさと出しなさいよ。
敵国の召喚主が誰なのか。喚ばれた守護魔がどんなヤツなのか。
あと、あんたが掴んだ連中の動き。早く！！」

椅子にふんぞり返った少女は、国王陛下を見下すような視線で、顎を突き付けながら先を促した。本来であれば貴族用の椅子に少女が腰を下ろす時点で懲罰ものであり、仮にも王様にこんな物言いをすれば不敬罪で鞭打ちを食らっても不思議はないくらいなのではあるが……、少女は一対一でこの老人を敬えるほど老成してはいなかった。

ヘリアス王は“反抗期かのぉ。悲しいのぉ”なんて飄々と呟いて

いたが、少女の吊り目がキツくなったのを感じて、溜息を吐きながら口を開いた。

「ま、当たりじゃ。確かに、今回はその情報を探って来た。
――と、言ってものぉ。流石に百年に一度の大儀式ともなると、連中も気を付けておるようでなぁ。残念ながら、そう珍しい情報も手に入らんかった。
先ず武の国からは“武装姫”ウェヌサリア。守護魔は剣術に長けた青髪の大男じゃが……。
まあやり合ったばかりじゃし、コレは言わんでも知っておろう。
時に武装姫とやり合ってみて、どうだったかのぉ？
手応えはあったのかえ？」

「……あのね。アレっぽっちじゃ何も分からないわよ」

昨日の戦闘を脳裏に浮かべ、少女は小さく鼻を鳴らした。
この言葉は強がりでもなんでも無く、純然たる事実である。

――そう。少なくとも少女にとって、あんな物は前哨戦だった。
敵は魔装を使う事も無く、少女とて切り札である先天魔術（ギフト）を温存している。扱える精霊級魔術の種別を知られたのは少女にとって痛手ではあったものの、それでも完全に発動させなかった以上、敵とてその威力は測り兼ねているに違いない。
……つまりは、まだお互いに隠している手札が多すぎるのだ。
こんな状態で彼我の優劣を決定出来る程、魔導師としての彼女は安直では無い。

「……ふむ。まあ、お前さんならそう言うか」

ヘリアス王は、魔導師としてあまりにも生真面目な少女の返答に少々辟易しながらも、それを予想していたかの様に頷いた。

「さて。次が氷の国じゃが、ここは君主自らが参戦しておる。件の“瞬帝”メルクリウスが呼び出したのが、あの赤髪の少年じゃよ。

長けておるのは兵器の作成技術。

中でもあの珍妙な火器の完成度には目を見張る物があった。

僅か3日で4種もの兵器を生み出したあの手腕は、若輩の割にはまあ大したもんじゃな」

「メルクリウス――っていうと、あの暴君女？

ま、ある意味順当ね。

……っていうかあのワンコ、やっぱり氷の国の守護魔だったんだ」

国王の言葉に少年の口上を思い出した少女は、呆れた様に頭を抱えた。

成程。あの脳筋姫に求愛するなんて、一体どんな酷い女に召喚されたのか気がかりで仕方なかったものの、確かに彼の“瞬帝”が飼い主であれば納得である。

――瞬帝・メルクリウス。

風に聞くあの女の噂は、どれ一つを取っても信じ難い物だった。

曰く、肉親たる皇族を皆殺しにして帝位を奪った。

曰く、帝位に就いたその瞬間に、全国民を自らの奴隷だと言い放った。

曰く、人の悲鳴という物に悦を覚え、僅かでも彼女に反抗の意を持つ者は、三日三晩残忍な拷問に掛けられる。

……何のことは無い。要するに、骨の髄からサディストなのである。

他にも傲慢さに関する逸話には遑（いとま）が無く、自らの先天魔術を最強だと豪語して公言しているくらいなのだから、まあトンデモナイ人格の持ち主であると言えるだろう。

終いには“宮殿内を全裸で闊歩している”、なんてワケの分からない噂もあるのだが――まあ、これはいくらなんでも只の風評だろう、と少女は考えていた。だってあの極寒の“氷の国”で全裸とか、よっぽどのバカか変態でも無い限りあり得ない。

何はともあれ、あの“単騎革命”を成し遂げたという先天魔術は、確かにいくら気を付けても足りる物では無いに違いない。

「……」

もっとも、その暴君女にあんな暴言を宣ってしまったのだ。あのワンコに会う事は、もうないかもしれない。

……少女だって、もしもアイツが同じコトを言い出したら、間違いなく原型が無くなる程殴ってしまうのだ。

話に聞く瞬帝が、ワンコを許すとは思えなかった。

「地の国と死の国は？」

話を整理しながら、少女は先を求める。

ヘリアス王は、申し訳なさそうに肩を竦めながら続けた。

「地の国では“魔王”タイタニウスが随分と早く守護魔を呼んだと聞いたが……。

……ヤツの慎重さは異常じゃよ。
わしでも守護魔の姿どころか、奴らの所在すら掴む事ができんかった。
死の国は、相変わらず黙んまりじゃわい」

「タイタニウス……。
あの妖怪爺さんも、まだ生きてたワケね。
ま、でもあの地の国の情報を掴んだだけ流石じゃない。
死の国は……まあ仕方ないでしょ」

少女は感心と諦めが混じったような声で応えた。

――光無き地底都市同盟・地の国（ノームズアシュ）

国土の殆どが砂漠地帯に当たるこの国は、地下に無数の都市を網の目の様に作り、首都機能をコロコロと移動させていると聞く。未だ他国に知られていない地下都市も多くあるらしく、君主たるタイタニウスの所在を掴むのは、それこそ地の国の国民ですら不可能だと言われているくらいなのだ。召喚主がタイタニウス本人だという事と、守護魔を呼んだおおよその時期を把握できただけ、王は評価されるべきである。

そして死の国（ネクロガルド）に至っては、最早存在そのものが分からない。
無数の死骸が転がる“黒の凍土”に、街の痕跡らしき瓦礫があるだけ、というのが、噂に聞く彼の死霊国家の光景だ。
おそらくは地の国の様に、どこかに国としての機能を隠匿しているのだろうが……。
少なくとも、ソレを探しに行った密偵が帰って来たという話は、少女は聞いた事が無かった。
地理的に遠い事も相俟って、銀の国では、“死の国には餓えた死霊と生き死体しか住んでいない”、なんていう噂が実しやかに流れ

ているくらいなのである。
死の国の存在を裏付ける情報は、たった一つ。
百年に一度、まるで思い出したかの様に現れる、召喚主と守護魔だけなのだ。

「まあ、大体わかったわ」

一通りの情報を理解した少女は、コクリと頷いた。

「要するに、当面は武の国の筋肉コンビを何とかするのが先決ってワケね。
ワンコの口上があったから、あの暴君女なら先ず武の国から潰しに掛るだろうし。
タイタニウスは……まあそれだけ慎重なら、当面大掛かりに喧嘩吹っかけて来ることも無いでしょ。
死の国も気になるけど、何か動きがあるとしたら隣接の武の国か天の国から始めるだろうし――」

「いやいや。そうじゃないんじゃなぁ。
今のところ、どうにも天の国が頭一つ抜けておる」

「……は？　天の国？」

あまりにも意外に過ぎる言葉に、少女は目を丸くした。

――崇高なる選民共和国・天の国（ソルヘイム）。
空中国家とも呼ばれるほど、国土の殆どが標高の高い山脈に覆われているこの国は、同時にこの世界最強の魔獣種である“龍”の繁殖地としても知られている。中でも嘗ての守護魔が伝えた技術によって調教した、翼竜（ワイバーン）を乗りこなす“龍騎兵”達の実力は折り紙つき

で、武の国の怪鳥（グリフォン）と並んでこの世界に於ける天空の覇者と謳われているほどだ。

もっともこの国は、少女は敵戦力としては度外視していた。

だって――、

「ちょっと、どういう事よ。

今代の天の国には“大魔導”が居ないって話じゃなかった？」

そう。少女が事前に聞かされていた情報では、今代の天の国には、そもそも大魔導を名乗れる魔術師が居ないという話だったのだ。勿論、大魔導とは“精霊級魔術”を習得した人間に贈られる呼称であるので、別に大魔導でなくては守護魔を呼べない、という訳では無い。実際過去の儀式では、どの世代でも、一国か二国は大魔導以外の召喚主が混ざっていたと聞く。

――だがそういった国は、まず大した脅威にはなり得ない、というのがこの世界の常識だ。

大魔導でないという事は、即ち“精霊級魔術”が扱えないという意味であり、ソレはつまり扱える魔力量そのものが大魔導級の魔術師達に劣っている事を示しているからである。

通常の詠唱魔術は先天魔術を変換して放つ物であるから、精霊級を扱えないという事は即ちその先天魔術の規模も多寡が知れているという事を意味し、つまりは魔術戦に於いてほぼ全ての面で大魔導に後れを取る、という事実を示唆している。

要するに大魔導とそれ以外の魔術師というのは、それくらい根本的な火力に差があるのである。

そして召喚主無しでは守護魔は生存できないのだから、召喚主の格が他国に劣るというのは、セトル・セトラの儀に於いては致命的

な弱点になる。事実、過去の儀式を見返してみても、そういった魔術師は一部の例外を除き、早々に他国の大魔導に敗れて死亡するか、或いは自ら守護魔を処分して国を追われるか、なんて末路を辿って来たという。

よって今回の儀式に於いても、少女は大魔導がいないという天の国は警戒に値しないと考えていたのだ。万が一召喚主となった魔術師がよっぽど特殊な先天魔術でも持っていて、尚且つよっぽど直接戦闘に慣れていた、という場合ならば少しは戦いにもなるかもしれないが……。少なくとも王が言う様な“頭一つ抜ける”、などという事態には絶対になり得ない。

少女の言いたいことを悟ったのか、ヘリアス王は神妙な面持ちで目を伏せた。

「色々とあったらしくてなぁ。
まあ、あの国が有利だというのには、いくつかの理由があるが……。
先ず、呼び出した守護魔というのがとんでもない。
わしも一度この目で見たがなぁ――。
ありゃダメじゃ。どうしようもない。
歴代の守護魔を数えても、アレに匹敵するのは5人と居るまいよ」

「……うわ、運よく大物を釣り上げたってワケね。
歴代5番内って、そりゃ勢いづくのも分かるわ……。

で、そんな化け物を呼び出した召喚主は誰なの？
炎民議長のエウロパ？
それとも、例のカリストとかいう傭兵崩れ？」

「いや、そのどちらでも無い。
それがのぉ……」

「？」

王は、再び渋面になりながら口を噤んだ。
それはまるで、言うべきか言わざるべきかを迷う様な、或いは王自身がその事実を未だに信じきれていないかの様な、非常に複雑な表情だった。

やがて王は、一度だけ息を吐いてから、一言だけ短く答えた。

「……“風の民”の生き残りじゃ」

「はぁ！？」

王の言葉を聞いた少女は、今度こそ本当に理解できないといった顔で卒倒していた。

「ちょっと！！　どうなってるのよ！？
あの高慢ちきな天の国の貴族どもが、どこをどう間違えて“風の民”なんかを召喚主に抜擢してるワケ！？　いや、それ以前に、“風の民”に儀式を行える程の教養なんか無い筈でしょ！？」

少女は、火が付いたかの様に王をまくし立てる。
そう。王の告げた内容は、本来あり得ない様な代物なのだ。

天の国は貴族の国である。火の民、氷の民、土の民の3大貴族家によって統治されているこの国は、各門閥から一人の党首を募った“三院議会”と呼ばれる円卓によって政治が行われていると聞く。

各門閥間に優劣は無いと公言しているこの国の性格が目を引くのは、やはりその二つ名にも表れている程に根強い選民思想だろう。貴族とそれ以外の者との間には、それこそ人と家畜程にも離れた生活格差があり、また全国民が、ソレを当たり前の事だとして納得しているという話である。

――貴族は、君臨する事を許された存在。

――それ以外のモノは、ソレを支える為の贄。

――貴族はとは戦に於いて、民草を守る為に敵を打つ、国を代表する存在。

故に、彼らは君臨を許される。

敵国がどんな思想を持っていようとも、少女は特に関心など無かったが、只一つ言える事がある。この思想に基づくのであれば、国の代表ともいえる召喚主という役職を、貴族以外が受け持つなんて事態はあり得ない、という事だ。

魔術師の国である銀の国ですら、貴族位を持てない少女が召喚主となる事に反対する者も多かったのである。それが貴族国家である天の国ともなれば、国王が言う様な事態は、国家の思想に対する冒涜としか言えない。

――増してやそれが、“風の民”。

連中にとっては口にするのも忌まわしいであろう、その名前を持

つモノならば――。

少女の困惑をよそに、王はいつもの調子で口髭を弄りながら、ほうほうと頷いていた。

「まあ、いつの時代もイレギュラーは付き物じゃからなぁ。……大体なぁ。わしに言わせれば、お前さんも大概なもんじゃぞ？儀式を一度失敗した挙句、あろう事か自宅で守護魔を喚んだ召喚主など、わしの知っとる限りじゃ前代未聞じゃよ……」

「……う。そ、そんなの、今は、関係無いじゃない」

痛いところを突かれたのか、少女は身じろぎしながら、僅かにその剣幕を弱めた。

「大体――。ちゃんと呼べたんだから、同じコトでしょ？」

「同じ、のぉ？それにしては、また随分と変わり種を引っ張ってきてしまったようじゃがなぁ」

「……」

揶揄するように言う王の言葉に、少女はとうとう口を噤んだ。

少女自身、自分が呼んだ魔人の珍獣ぶりには否定出来ない所があったからである。

王は、小さく溜息を吐いてから続ける。

「……そもそもなぁ。彼奴は一体何者なんじゃ？今朝もちぃと左目で見てみたんじゃがのぉ。

あんな不吉な男は、わしは今までに見た事が無い。
いやぁ、異世界人の“相”が見難いのは当たり前なんじゃがのぉ。
流石にアレは、ちょいとばかし行き過ぎじゃろ。
……全く未来が読めんのに、不吉だという事だけは痛く伝わって来よるんじゃからなぁ。
あー、一応聞いておくが。彼は本当に、わしらと同じ人間なんじゃな？」

「そうなんじゃない？
……まあ、アイツがどう思ってるかは知らないけどね」

とことん自分を人間扱いしない“アイツ”のセリフが頭を掠めて、僅かに憮然とした表情になる少女。
皮肉る様に答えながらも、しかし彼女の脳裏には風に靡く彼の白衣が過っていた。
――本当に、アイツは何者なんだろう。
王の言葉に昨日の出来事を思い返し、少女は再び、その奇妙な能力に思考を奪われた。

昨日アイツは、王都のシンボルたる時計塔を、瞬き程の間に真っ二つに割って見せた。
少女は昨晩、自分がアイツと同じ事をするにはどうすればいいのかをずっと考えていたのだ。
考えた結果は――。少女でも、多分あの塔は破壊出来た。
だがその答えは、どれ一つをとっても、アイツの異常さを際立たせる物でしかなかったのである。

少女があの塔を破壊しようとしたら、先ず間違いなく、完全詠唱の帝霊級魔術を使用するだろう。もしそれでも足りなければ、伝家

の宝刀たる“精霊級魔術”を持ち出せば、確実にあの塔なんか消滅させることが出来たに違いない。

――そう。本質的に、魔術とはそういう物なのだ。

破壊対象が大きくなればなる程、術を研鑽し、威力を上げる事で問題を解決していく。それが魔導師としての常道であり、つまりはこの世界の常識なのだ。その意味で言えば巨大火球で塔の残りを粉砕した赤の守護魔も、その瓦礫の山を吹き飛ばした青の守護魔も、ある意味ではこの世界の常識内で行動していた、とすらも言える。

……でも、アイツのアレは明らかに違った。アイツはあんなペン一本。つまりは、自然霊級相当の力のみで、帝霊級に匹敵する程の破壊を成し遂げてしまったのである。

最低ランクの汎用魔術のみで、超上位の軍用魔術と同等の現象を引き起こしてしまう能力。それはまるで、馬で魔犬（ガルム）の速度に張り合う様な、小鳥が翼竜（ワイバーン）を打ち落とすかの様な、自然の摂理に反する力ではないのか。

「……」

いや、それだけではない。

そもそも大前提として、アイツは弱い。それこそ、下手をすれば少女でも魔術無しで殺せてしまう程、他の2体の魔人に比べて、アイツは飛びぬけて弱かった。

――だからこそ、アイツが今生きているという事実が不可解に過ぎる。

アイツは、他の2体に比べて飛びぬけて弱かったのにも関わらず、あの2体の魔人との乱戦を、五体満足のままに生き延びてしまったのである。

絶対に敵わない筈の相手に、絶望的に足りない筈の力で渡り合ってしまうアイツの“性質”。
振り翳す理の奇妙さという一点に於いて、アイツは3人の魔人の中で群を抜いている――。

「――んん？　アルテミア、大丈夫かえ？」

「――へ？　うん、大丈夫。
ちょっと気になっただけだから」

少々、考え過ぎていたらしい。
案ずるような王の声を聞いて、少女は我に返ったかの様に首を振った。
思考をクリアにして、今必要な事に意識を戻す。

「ありがと。まあ、大体の事は分かったわ。
また何か分かったら教えてちょうだい」

言いながら、少女は立ち上がった。
現状は大体把握したし、聞くべきことは聞いたからである。
パチンと指を鳴らすと、少女が座っていた椅子は滑る様に宙を舞い、何事も無かったかの様に元の位置へと戻された。

「おやおや、もう行ってしまうのかえ？
久方ぶりに話しておるんじゃ。
もう少しくらい愛想を振りまいてくれても、バチは当たるまいに」

「お生憎様。あんたに振りまく愛想なんか、5歳の誕生日に使い果たしてるのよ。
それにさ、出来の悪い教え子を待たせとくわけにもいかないでし

よ？」

冗談めかしていう少女の言に、王は首を傾げていた。
少女は、口元に笑みを浮かべながら続ける。

「あのバカ、今度は魔術なんか学んでるのよ？
どう贔屓目に見たって才能なんか無いし、物になるワケないのにさ。
ある意味じゃ、コレも変わり種って言うのかな？
まあ、絶対に出来ない課題与えといたから、もうとっくに諦めてる頃だと思うけど」

少女は、どこか楽しげな声で、唄う様にしてそういった。
まるで遠くを見る様に、目を細めながら続ける。

「――でも、何でだろ。
なんか、アイツならさ。あたしの予想なんか平気で裏切ってくれそうな気がするのよね。
常識ぶっ壊すのが仕事とか言ってたけど、ホントそんな感じ。
鉄の翼で空飛んでみろとか言ったら、なんかマジでやっちゃいそうでさ。
……そんなの、おとぎ話の中でしか有り得ないのにね」

何か、尊い物を見る様な目でそう呟いた少女は、“じゃあね”と軽く告げながら、一度礼をして王に背を向けた。その姿を、老人の灼眼は、まるで懐かしむ様に映している。
向けられた少女の背中は、隻眼の老人には、昔日の光景に重なって見えた。

――物心の付く前より魔導に打ち込み、僅か１０歳にして魔導師

となった彼女。
　嘗てあの屋敷で涙を堪えていたか弱い少女は、降りかかる困難を誇りに変える様にして成長し、漆黒の装束を身に纏う大魔導になった。
　そして今、彼女は国の代表として、自らの呼んだ協力者と共に、熾烈な代理戦争に臨もうとしている――。

　昔日の少女を知っていた王は、去り行くその後ろ姿を、まるで眩しい物でも見るかの様に、しかしどこか申し訳なさそうな顔で見詰めていた。

「アルテミアよ。
今のお前さんは、幸せかえ？」

「――――」

　装飾の付いた大扉に手を掛ける少女。
　その頼もしくも映る後ろ姿に向けて、王はただ一言だけそう尋ねた。
　少女は、答えない。
　まるで、突如として答えの無い問題を突き付けられたかの様に、後ろ姿を一切揺るがせないままに、扉に手を掛けたまま何かを思案していた。

　やがて少女は――、

「……感謝してますよ。師匠」

透明な声で、隻眼の老人に礼を言った。

――――――

「……」

――扉を閉める。

金淵で飾られた大扉に寄りかかりながら、少女は自らの右手をジッと見詰めていた。

別段、傷があるとか疲れたとかいう訳では無い。

ただ何となく、直ぐにこの扉から去る気にはなれなかったのだ。

魔導王との会談は、少女が思っていたよりも少々長引いた。

一番初めに、癇癪を起して罵声を浴びせてしまったのが原因だろう。

あの老人の前に立つと、いつになっても、まるで昔日に戻ったかの様に感情が飽和してしまう。ああやって変わらない表情で腰かけている、飄々とした態度のあの人を見ていると、つい幼き日に戻ってきたかの様に感じてしまうのは、もう仕方のない事なのか。

――そう。

少女が未だ魔導師ですらなかった、あの頃に――。

「……なんてね」

頭に過った考えがあまりにもバカバカしくて、少女は自嘲気味に息を吐いた。
昨日の疲れが、まだ残っていたのだろうか。
過去の自分を思い出して懐かしむなんて、疲れていないとあり得ない様な事をしている自分に気が付いて、少女はつい苦笑した。

「……」

――あの頃に戻りたい、なんて思った事は無い。
幼いくて弱い、大人たち(ぼうりょく)に左右されるだけの立場なんか二度とゴメンだし、何より少女は、今の魔導師としての自分に誇りを持っているからである。
今まで積み重ねてきたモノを全て無にして、一からやり直したいと思える程、少女の人生は空っぽでは無い。

今が最善だと言い切る自信は無いけれど、今の自分は昨日の自分よりも少しは上等なモノなのだと、少なくとも少女はそう信じている。

「……」

――そう。
ならば今すべき事、集中すべき事は一つだけである。
“セトル・セトラの儀”。

やってくるであろう敵国の魔術師達（身の程知らず）に、最強の魔導師が誰なのかを証明してやる事だけ。
それで。それだけで、少女が今まで積み重ねてきた物は、全て報われる筈なのだから――。

「――天の国の、最強の守護魔、ね」

一度だけ、切り替える様にして復唱する。
未だ見ぬ敵の姿を想像し、少女は無駄な余韻を振り払った。

――――――

初めに考案したのは、パラポラ型の反射鏡を使って、魔力の焦点を遠方に合わせる道具だった。ここは魔導研究所である。本や資料といった物ならばそれこそ掃いて捨てる程あり、また修練場の近くにも調べ物をする為の資料室は当然の様に存在していたので、休憩を終えた彼は同じく当然の様な顔でその部屋を訪れた。
資料室に居た書籍管理系の魔導師に立場と事情を説明した彼は、取りあえずは不死鳥の羽ペンや魔力流動とやらに関する資料を取り寄せてもらい、直ぐに必要な情報の検索を開始。少女の知識という強力なバックアップを受ける事が出来た彼は、瞬く間に構想していた道具を床から作り上げる事に成功した。

結論から言うと、彼の設計自体は完璧であった。
距離と反射と屈折角を完璧に計算され尽くしたそのパラポラは、

理想的な位置で魔力の焦点を合わせ、火の粉は計算通りきっかり１０メートル先で上がったのである。

……しかし、例え火の粉を浴びようとも、にっくきヤツは微動だにしなかった。

どう考えても出力が足りないのである。

少女くらいの火力があるのならともかくとして、ライター以下の火でアレを動かすのは、仮に１０メートルの飛距離が出せたとしても先ず不可能だという事実が判明した。

そもそも１０メートル先のコルク栓を飛ばす程の熱なんて、地球では火炎放射器とか無くては無理なんじゃなかろうか、なんて彼は冷静に分析してみたりする。

――そこまで考えた青年の脳は、直ぐに次の思考へと飛躍した。

「待てよ？

よく考えると、そもそも火炎魔法じゃなきゃダメだとは言われなかったよな？

容器内気体の熱膨張で栓を飛ばすのが難しいなら、何か別の――」

その発想をもとに、再び資料室を訪れた青年。

流石に書籍管理魔導師も訝しそうな顔をし始めていたが、“学者モード”の彼はそんな事を気にする様な人間性を持ち合わせてはいない。頼みに頼んで先ほどまで練習していた基礎火炎魔法と同じくらいの難易度の魔術が乗っている本を検索してもらい、意気揚々と受け取った。廊下へと戻った彼は、早速使えそうな魔法を順番に試してみる事にしたのだ。

その結果は以下の通りである。

先ず氷属性魔法は、火属性とは感覚が違い過ぎるらしく発動しなかった。
次の地属性魔法は、低ランクの物は土が無くては使えないという事で試せなかった。
最後に試した風魔法は有望だと思ったが、コレも青年程度の魔術では、手で扇いだ方が遥かにましなくらいの超微風しか起こせなかった。

この頃になると、流石に半ば諦め始めていた青年。
もしや少女は、自分を諦めさせる為だけに絶対に不可能な課題でも与えたのではないか、などと割と核心に近い邪推まで始めた程ではあったが、幼少の頃より天才と持て囃されてきた彼である。少女は自分ならソレが出来ると信じてこの課題を与えたのだと、その点に関して疑うのは、彼自身のプライドが許さなかった。そもそも、不可能だと言われた課題は、あらゆる手段を行使してその実現可能性を探らなくてはいられない、というのが科学者という生き物の習性でもある。

自然科学に於いて、答えが出ない命題というのは、多くの場合設問の仕方が間違っている。
設問を疑わないのであれば、その解釈の仕方を間違えている、というのが常である。
そう考えた彼は、少女の与えた命題を再び深く考察してみる事にした。

「“魔術を使ってコルク栓を床に落とせ”、か。
コルク栓とはあの物体。床は、まあ床だろうな。この条件は動かせない。
落ちる。万有引力。ビンごと落とせば結果としてコルクも落とせるが、オレの魔術ではビンは動かない。あと考えられるのは……。

不死鳥の羽ペン（インプロージョン）を使って、床ごと階下に叩き落とす、とかか？
……いや、ダメだな。床の定義とは、建物の各階層を別つ板の下のヤツだ。
崩落させてしまっては、ソレは最早床とは言わない。
魔法。魔術。魔力。魔術の定義とは……。
待てよ？　確か、魔力さえ使っていればそれは魔術だったはずだ。
――って事は、魔力を使った道具の使用、つまりは自然霊級魔術でも、ソレは魔術を使ってコルクを落とした、という事になるよな。
という事は……」

――で、最終的にどうなったのかと言うと。

――――――

本音を言うのであれば、アルテミア・クラリスは多少の罪悪感を覚えていた。

自分の様には魔術を扱えないと納得し、それでもなお魔術を学びたいと言った彼。

魔導師としての少女は、そういう無垢な向上心は尊重したいと思うし、本当ならば応援してやりたいとも思う。普通なら男相手には絶対やらない様な誘導を、羞恥心を押し殺してまでやってあげたのは、魔術を学んだ先達としての彼女が、芯の部分でそういう気持ちを大切にしてあげたいと思ったからだ。

だからこそ、絶対に無理な課題を与えてしまった事に、彼女の胸

はチクリと痛んだ。

でも、仕方のないことだったのだ。

だって、彼には明らかに才能が不足していたのだから。

世界が違う、というのもあるのかもしれないが、彼にはどうにも、魔術を信じる意思というか、精霊に語る意思という物が欠けていた。

その二つは、本来であれば魔導師にとっての生命線なのだ。

ちょっとでも魔術や精霊に対する疑いを持っている人間は、意識を無意識に落とし込む“転換”が上手くいかず、精霊との疎通が乱れてしまう。

――彼は、その典型であった。

魔導を学ぶのは優しい事ではない。毎日毎日、神経が焼き切れるような修練を繰り返して、毒に慣れる様にして前に進んでいくのが魔導師としての道なのだ。それは先に進むごとに苦しくなる事こそあれ、決して楽になる物では無い。

才能のある魔導師である少女には、彼の才能なんか初めの魔術を見ただけで明らかだった。

彼はおそらく、毎日腕が壊死する程に練習を積み重ねたとしても、魔導師を名乗れる日が来る事すら無いだろう。実らない努力である事がはっきりとしているのであれば、多少厳しい思いをさせたとしても、別の道を諭してあげるのが優しさである、と少女は思う。

だから、少女に残された仕事はあと二つだけだ。

彼のところに戻って、多分、こんなの絶対に無理だとか不満を言ってくる彼の後ろから、彼に教えた呪文と全く同じモノであのコルク栓を弾き飛ばして見せる事。

そしてその後、自分がコレを覚えたのは5歳の時であり、本を読

んで一回試しただけで出来てしまったという事実を教える事。
……頭の回転の速いアイツの事だから、その意味を直ぐに理解してくれるに違いない。

我ながら意地の悪いやり方だな、と少女は思う。
アイツにだってプライドくらいあるだろうし、ここまで完全な差を見せつけられたら、凄く悔しくて傷つくのは間違いが無いと思う。
でも少なくとも、身にならない魔導で身体をボロボロにしてから諦めるよりは、この方がずっと彼の為であり、そうする事が優しさなのだと少女は信じる事にした。
彼のプライドを傷つけてしまう代わりに、ちょっとくらいなら、優しく慰めてあげてもいいかな、などと思っていたのだ。

――だからこそ、その光景を見た少女は放心する以外の対処法を知らなかった。

とっくに諦めて、自分に泣き付いてくる筈だった彼。
彼は、両腕を前方に突き出す様な姿勢を取りながら、何やらよく分からない事をしていた。
その時は本当によく分からなかったので、少女はゆっくりと近づいてみた。
近づいて、よく見ると、彼は千切れた水道管みたいなL字型の金属塊を両手で持って、ソレを目前のビンへと向けていた。
そして、規則的に響くポスッ、ポスッ、という空気が抜けるみた

いな音。
ソレが響く度に、ビンの背後にある窓はひしゃげ、ガラスは砕け、粉々に飛び散った。
唖然とする少女をよそに、５回目の、ポスッ、という音。
それが少女の耳に届いた瞬間に、件のビンは無残にも砕け散り、粉々になりながら床へと崩れ落ちた。それはもう、ガッシャーン、という派手な音を立てて。
……約束のコルク栓は、自らを支えていた土台の崩壊と共に、コロリと床を転がった。

「――以上の実験結果より、魔術素人の地球人であろうとも魔術を用いて１０メートル先のコルク栓を床に落とし得る。証明終了（Q.E.D）」

「な……！！」

その地獄絵図をちょっと誇らしげに眺めながら、彼は得意げに決め台詞を口にしやがった。
少女は目の前の光景を理解する事が出来ず、未だ放心から立ち直る事が出来ない。
しかし彼には、そんな彼女の魂の叫びが聞こえた様である。
ゆっくりと、気が付いたかの様に振り返った。

「ん？　アル、帰って来てたのか？
言われた通り、一応アレを魔術で叩き落としたが……」

平然と、普段と変わらぬポーカーフェイスで出鱈目を言い放つバ科学者。
そんな彼の手にある金属塊を、ポカン口を開けながら、少女はプルプルと人差し指で指していた。

――少女は知る由もあるまい。

これこそ青年の世界では武器の王様とまで謳われる、最もポピュラーな兵装の再現なのである。

その道具が広く知られ始めたのは、１４００年代後半にまで遡る。

ソレを主力として用いたオスマン帝国は、強力無比なるイェニチェリ軍団を運用する事によって１４７３年に白羊朝軍を打ち破り、１５１４年にはサファヴィー朝のクズルバシュ軍を打ち破った。それ以前まで主流であった遠距離武器である弓やクロスボウに比べて、エネルギー的に見れば文字通り桁が違う破壊力を誇っていたその武器は、当時の技術に於ける様々なデメリットを抱えていたにも関わらず、直ぐに戦場に於ける主力兵器へと上り詰めた。

日本にその武器の原型が初めて齎されたのは、１５４３年の種子島での事であったという。

同島に漂着した中国船に乗り合わせていたという二人のポルトガル人、フランシスコとキリシタダモッタが所持していたソレの内２挺を島主の種子島恵時と種子島時堯の親子が買い取り、研究をしたのが始まりだと『鉄炮記』という書物には伝えられている。

それから瞬く間に、その武器は戦国日本の主流兵器となってしまった。

無論、ソレによる被害を防ぐ為には様々な道具や具足が考案されはしたものの、当時使用されていた物と全く同じ条件のソレですら鉄板製の具足を易々と貫通してしまったという実験データもあり、彼の時代その武器がどれほど強力なモノであったのかが垣間見られる。

そして現代に於いて、その兵器は日々複雑に進化を遂げており、

その構造の全てを完全に説明しきる事はマニアでもなくては不可能だろう。

だがしかし、その基本構造を見ると、我々がソレをソレとして認識する為に必要な要素は、品の良し悪しを問わないのであればそう多い物では無い事に気が付く筈だ。具体的に言えば射出されるべき弾丸と、ソレを加速する為の銃身。そして弾丸に運動エネルギーを与える為の火薬さえ揃っていれば、それが手で扱える大きさである以上、我々はソレをソレとして認識するに違いない。

――無論青年は、あくまでソレをこの世界の常識を用いて再現しようと努めた。

その目的が魔力を用いてコルク栓を落とす事であった以上、彼は運動エネルギー源として火薬を使う様な無粋はしない。彼が作り上げたその武器は、彼の世界の武器でありながらも、定義上どうしようも無いくらいに“自然霊級魔術”であった。

彼が火薬の代わりに用いるのは空気である。

アダマス鉱の内蔵魔力量に応じた体積の可変性に目を付けた彼は、ソレを利用して空気を圧縮・充填し、その気圧によって弾丸を射出する機構を思いついたのだ。少女からのバックアップによって、テキストに載っている術式などほぼ丸暗記し終えてしまった彼にとって、コレを制作する事自体は造作も無かった。銃身の上部に固定されたシリンダーに保持される空気の圧力は実に４００気圧。一般的な競技用のソレが精々２００気圧程度なのに比べると異常だとすら言えるその圧縮率は、異常な強度と加工の自在性を持つアダマス製だからこそ可能な数値であった。アダマスの弾丸は１３発装填のマガジンから順次薬室へと送られ、その超気圧により加速されると共に銃身内でライフリングされ、確実に目標物を破砕するだろう。発砲に伴う可動部が少なく、それによる反動の少なさと命中精度の高さという点で言っても、素人かつ体格に恵まれない日本人である青

年にとって、その形式を選択した事はやはりベストであったと言えるに違いない。

――アダマス膨張型プリチャージ式空気拳銃。

魔力を使用して空気を圧縮し、ソレを解放する事によって弾丸を放つ、彼の世界の技術を再現した“自然霊級魔術”。

それこそが、少女の与えた命題に対する物理学者・朝日　真也の解答であった。

「な……！！」

さて。そんな事など露ほども知らず、同時に知る筈も無い少女は、バカみたいに口を開けたままに棒立ちしていた。

取りあえず、彼の顔とその手元にある白銀のオモチャ、そしてその周囲に広がる凄惨な光景を交互に見比べてみたりしている。

青年の周りの床は、それはそれはヒドい事になっていた。

無計画に体積を奪われたアダマス鉱は歪み、凹み、辺り一面は見事なまでのジャガイモ模様を呈している。更にそのあちこちには、山の様な資料と青年の生み出した失敗作の数々が文字通りの意味で山を作り、薄暗い廊下を埋め尽くしている。

――コレ、全部直すとしたら、何時間くらいかかるんだろう。

――もし人を雇って直させたとしたら、一体いくらくらいかかるんだろう。

――なんでこのバカは、こんなバカみたいなコトをしでかしたのに、あんなバカみたいに誇らしげな表情でこっちを見てるんだろう。

そんな取り止めのない思考と共に肺に空気を満たしていく少女をよそに、青年はコクリと首を傾げてみせた。

「――課題はクリア、だよな？
それで？　次は、ナニをすれば――」

「クリアなわけ無いでしょナニよコレは！！
何をどうやれば初歩火炎魔法の練習でこんな大惨事が引き起こせるのよ！？
ナニすればいいって、先ずその物騒なオモチャをしまいなさいバカァァアアア！！」

……本日何度目になるか分からない少女の叫びが、魔導研究所に木霊した。

えーと、つまり結論から言うと、彼はある意味本気で少女の予想なんか裏切ってくれたワケで、国王陛下の嫌な予感は、ある意味ではやっぱり当たっていたかもしれないワケで――。

――天才とは、たった1つの才能と、99個の欠点である。

by　朝日　真也

28．広義的な意味での地球外生命体の数々を代用した現代日本に於いて最も

廊下の修復が終わった頃には、空は既に茜色に変わり始めていた。
いや、終わった、という表現は些か適切では無いかもしれない。
何しろアダマスの床は、青年によって無計画かつ無遠慮に、しかも暴力的なまでにその体積を奪われ、殆ど壊滅状態になってしまっていたのである。修繕する為に山と積み上げられた資料と産廃、そして二人掛りの知識を総動員し、何とか元に戻そうと頑張ってはみたのだが……、調べれば調べる程に、ちょっと刺激を与えれば崩落しかねないくらい危険な状態である事が判明してしまった。よって二人は、取りあえずは山の様な産廃達を廃棄場へと運び、使えそうな部分だけを取り出して床の表面の隠匿に当て、せめて見た目だけでも何事も無かったかの様に見せかけておこう、という事で意見を一致させたのである。
なに。元から殆ど人なんか来ない一角だったらしいし、まあきっと問題は無いだろう、などと、青年はなるべく前向きな解釈に努める事にしている。目を凝らして見れば凹凸がハッキリと分かってしまうその廊下を眺めながら、少女はようやく、“異世界人とは独りにするとロクな事をしない生き物である”、という事実を理解した。
……いや、像とか薬とか塔とか塔とか。

殆ど地雷原状態になってしまった廊下に“危険・立ち入り禁止”の看板を立て終えた二人は、その足で正門前商店街へと向かった。
昨日は結局買えなかった、青年の生活用品を買い揃える為である。
夕暮れ時の商店街は混雑しており、青年は門限までに買い物が終わるのか、と少々不安に感じもしたが、一件目の衣料店に入った瞬間にソレが杞憂であった事を知った。
少女が店を闊歩すると、殆どの客は一も二も無くさっさと道を譲ってくれるからである。

いやはや。どうやら少女は、昨日の襲撃者との戦闘によって、また一段とその（危険物としての）名声を民衆の間に轟かせたらしかった。彼らの態度に気付いた少女が右手を挙げると、それだけで店内の客は脱兎の如く彼女の視界から消え失せた程だ。あっという間に閑古鳥が鳴いてしまった店内を見て、衣料店の店主がホロリと涙を流したという事実は秘密である。相変わらずの少女の怪獣ぶりに、青年は小さく溜息を吐いた。

――もっとも、実は逃げ出した客の内何割かは青年に対しても怯えていたのだが……他人の視線になどはほとほと無関心である彼には気付けなかった。昨日の一件が既に民衆の間に噂として広まりつつあった事など、この時の青年には知る由も無い事柄であった。

買い物は、二件目の店からは非常に慌ただしい物となった。

と、いうのも。衣類を買い終えた青年が、店を出た瞬間に目の前にあった鉱石店に目を留めてしまったのが原因である。青年があまりにも物珍しそうに眺めているため、少女もちょっとくらいなら見せてあげてもいいか、などという軽い気持ちで店内に入ったのだが、ここからこの天才物理学者殿は暴走を始めた。

少女自身は当然の様に知らなかったものの、この世界の鉱物の種類という物は、地球のソレに比して桁外れに多いのだ。後に青年は、それが原子間の結合に魔力が関与する事によって地球ではあり得ない構造を作るからである、という事実を突き止めるのだが、とにかくこの時の彼は、見たことも聞いたことも無い性質を持つ金属達を見ているだけで探究心という物がヒシヒシと刺激されてしまったのである。

一瞬にしてあの危険な“学者モード”に突入してしまった彼は、

鉱石を一つ手にとっては店主や少女に詰め寄って性質を聞き出し、気になった物を見つけては買い物籠に塊ごと突っ込むという暴挙を仕出かし始めた。そこにきて流石に、少女も自らの行為が失策であった事に気が付き始めたのだが、その頃には青年は、既に“不死鳥の羽ペン”がアダマス鉱以外の魔法金属の加工にも使えるという話を店主から聞き出した後だったのだ。無論、このバ科学者がそんな面白そうなオモチャ、もとい研究材料をみすみす諦める筈も無く、結局少女は、籠いっぱいの魔法金属鉱石を大人買いどころか富豪買いのようにして買わされる羽目になってしまった。

幸いなことに今朝方、国王陛下に“当面の生活費の工面”という条件を飲ませておいた為、それだけの鉱石でもサイン一つで済んだ。

鉱石を買い終わった後も、青年の暴走は止まらなかった。

三件目に入った魔装屋では護符（チャーム）や降魔聖水などの珍しそうな“補助魔装”を買い漁り、四件目に特攻した農具店では、もう荷物を持ちきれないからなんて理由でリヤカーなんかを買いなさった。五件目に入った食料品店では肉や卵、野菜などをどんな生物のモノなのかを詳しく聞きながらリヤカーに突っ込み、六件目に入った工具店では、最早少女には用途すら不明な珍道具を買い集めていた。まあ、どれだけ買ってもサイン一つで済んでしまうので、少女も特には咎めなかったのだが……。

後に明細を見た国王陛下が、“やはりわしの目に狂いは無かったかのぉ”なんて呟く羽目になったという事実を知る者は居ない。

兎にも角にもそんな感じで、明らかにリヤカーの最大積載量を上回る程にモノを買い込んだ二人は、月が綺麗な真紅に色づき始めた頃、門限ギリギリで王都から脱出する事に成功した。あとはこの大荷物を、少女の館まで運び込むだけである。

――その時である。

正気を取り戻した青年が、自らの置かれている状況を理解して青褪めたのは……。

学者モードに突入していた彼は完全に失念していたものの、何故か、どういうワケなのか、この見目麗しき真紅の少女は、あの最果ての丘なんかにたった一人で住んでいらっしゃるのである。しかもこの世界には、アスファルトなんていう便利な物は当然の如くある筈も無く、門の外から少女の丘までは、土と草本の大地が嗜虐に満ちた表情を浮かべつつどこまでもどこまでも広がっている。

そう。つまり彼は、これだけの大荷物を背負ったまま、あの長い長い道のりを完歩しなくてはならくなったのである。

あまりの事態に、茫然自失の表情で立ち尽くすしかなかった青年。そんな彼を尻目に、少女はリヤカーの荷台にヒョイと飛び乗ると、荷物を背もたれにしながら寛ぎ始めた。彼女が何をしているのか理解できずに、何となく首を傾げてみた青年。少女はまるで妖精の様な笑顔でソレに答えると、

「じゃ、頑張ってね」

などと言いながら、丘の頂上、つまりは自らの館の方角をチョンと指差した。

この瞬間になって、青年は漸く、この少女がリヤカーを買うのに全く反対しなかった真の理由を思い知った。

「……アル？」

青年の口から、低い、低い声が漏れた。いや、まあ。元はと言えばすべて彼自身の荷物なワケだから、彼とて手伝え、とまでは言わない。それにいくら常識的な人間性を欠いている彼であっても、この可憐な少女に力仕事をしろ、と言い出す程の度胸は無いワケであって、そういった意味で言えば、まあ青年が苦労している隣で彼女が何をどうしていようとも、別段咎めるつもりも無い。

――無論、ソレがリヤカーの上でさえ無ければ、の話ではあるが。

更に一つ付け加えるのであれば、昨日から一生分以上に貰っている少女の鉄拳を思い返す限り、この少女に筋力が不足しているとは到底思えないワケで、それに元はと言えば、今彼がこんなモノを必要としているのはそもそも少女がこの世界に自分を拉致したからであって、そういう意味で言えば、やっぱり少女もちょっとくらいは運ぶのを手伝うべきではないか、などという感情が彼の中に芽生えたりしないこともなかったりはする。

青年がそんな事を考えながら恨めしそうな視線を向けていると、少女は何か集中する様な仕草を見せ、短く呪文を詠唱した。

「軽量化（Rad）」

少女がそう呟いた瞬間である。あまりの重さ故に地面に沈まんばかりであった筈のリヤカーは、地面から数ミリだけ浮き上がったかと思うと、ピタリとそこで停止した。

目を丸くしている青年をよそに、少女はフフンと得意げに笑った。

「言っとくけどさ。

これだけの量の荷物に軽量化の魔法かけ続けるの、楽じゃないんだからね？

下りて手伝うと、集中が乱れてかえって重くなるかもしれないけ

ど――、あんたはそれがいいの？」

「……」

……こう言われてしまうと、青年としては何も言い返す言葉が無い。

渋々ながらも彼は、この時ばかりは少女の馬車を引っ張る馬に身分を落とさざるを得なかった。いや、まあ。少女のセリフは痛く正論である事は否めないのだが、何か騙されている様な気がしてならないのは本当に気のせいなのだろうか、などと、彼は後ろから聞こえる少女の快適そうな鼻歌を聞きながら思案するのであった。

――――――

少女の館に辿り着いた頃には、青年は既に肩で息をせんばかりに疲弊していた。

誤解してはいけないのだが、真也は別段、平均的な日本人に比べて体格で劣っているだとか、筋力が不足しているだとかいう訳では無い。無論、彼は生粋の物理学者である。普段からバランスの崩れた食生活や乱れた生活習慣を送らざるを得なかった彼は、確かに健康的な食生活を送り且つ運動部で日夜鍛錬に励んでいる、同年齢の体育会系の高校生達には体力面で少々譲らなくてはならないだろう。

しかし彼は同時に、運動不足が思考能力を低下させることを、一般論として重々に承知してもいた。よって彼は、起床と共に毎朝適度な運動を熟す事を習慣としていたのである。

これは異世界に拉致された後も目下継続中のライフワークであり、そういった意味で言えば、彼の身体能力は一般の高校生の平均値を

クリアしている、と言っても問題は無いだろう。

ならば軽量化の魔法を掛けられたリヤカーを引きずったくらいで疲れる事もあるまい、などと思われるかもしれないが、実を言うと事はそう単純では無かった。具体的に述べるのであれば、その“軽量化の魔法”という名称が大きな落とし穴だったのである。

少女の掛けた魔法は、確かに荷物の重量を減らした。ソレには少女自身の体重も含まれており、結果として彼の引くリヤカーは、この星の重力という物の影響を殆ど受けなくなったと言って良かっただろう。しかし先日彼が行った塔破壊実験が示唆している様に、この世界に於いても、やはり“質量保存の法則”は成立していると考えられるのである。

……そう。つまり軽量化とは“重量”を減らす事は出来ても、“質量”を減らす事は出来ない魔法なのだ。

例えるのなら、そう。軽量化の魔法というのは、無重力状態を作り出す様な魔法だとでも考えて戴きたい。例えば宇宙空間に於いては、落ちるべき“下”など無いのだから、宇宙船内で手から離れた１ｋｇの砲丸は、いつまでも空中に静止している様に見えるだろう。重量計の上で手を離したとしても、やはりその数値は０から動かないに違いない。

だがソレは、決して砲丸の“質量”が消えた事を意味しない。我々の宇宙には慣性の法則という物があり、運動の状態を変化させる為には力を加えなくてはならない、とするのは物理学の基本中の基本ではあるが、それはつまり、今ここに無重力中で静止している様に見える１ｋｇの砲丸が存在するとすれば、それを動かす為には、我々は依然として１ｋｇの重量を持つ物体を地球重力下で持ち上げ

るのと同等の力を加えなくてはならない、という事を意味しているのである。

えーと、つまり何が言いたいのかというと。少女の掛けた軽量化の魔法とやらの働きは、結局のところリヤカーから手を離しても丘をズルズルと逆戻りしない為のストッパーになる役割と、車輪が地面に沈んで回しにくくなるのを防ぐ程度の役割に留まり、端的かつ簡潔に述べるのであれば、青年は依然として平地でリヤカーを引くに等しい力を加え続けなくては坂など上れなかったという事である。

……薄々感じていた事ではあるが、王都から少女宅への坂というのは、どうも彼にとっては鬼門らしい。青年は、一刻も早く彼女の通勤事情を改善してやらねばなるまい、などと、買い込んだ大量の鉱石と工具に目をやりながら思案するのであった。

―――――

さて。そんなこんなで何とか少女の館へと帰還を果たした真也は、ここに至って予想外の窮地に立たされる事となった。

否、窮地なんて生易しいモノでは無いだろう。

何しろ彼にとってそれは、正に死活問題。文字通りに生死を賭した出来事であり、敢えて比較対象を出すのであれば、昨日のあの大男との一件なんか目じゃない程の災難であったのだから……。

先ず屋敷の大扉の前まで辿り着いた少女は、額の汗を拭いながら整理運動に励んでいた青年をよそに、扉を蹴破る様にして開けてから呪文を詠唱した。

軽く集中する様な仕草と共に、短く二言だけ唱えられたその言霊

は、空間を僅かに揺らがせる様な錯覚と共に本の山に隠れた灯りを次々と灯していった。

一昨日の晩は点けていなかった様だが、どうやらこの屋敷にも灯りと呼べるものは設置されていたらしい。感心している青年に目をやる事も無く、少女は本棚の隙間を縫うようにしてヒョイ、ヒョイ、といつもの要領で居住領域までその歩みを進め始めた。

青年は山の様な本を押しのけながら、かなり苦労して台車を引いていかなくてはならなかったのではあるが、これはまあ、まだ災難などとは言わない。

次に青年がなんとか少女に追い付いた頃には、少女はベッドを中心として開けた居住空間の中に佇み、何やらまた呪文を詠唱しているところであった。どうやら、結局召喚に伴うアレコレで惨状を呈したままとなっていた本や瓦礫を片づけていたらしい。ついでに、青年が同居人となった事で手狭になった居住領域の拡大も図っていた様であった。

少女が一言呪文を詠唱する毎に、青年が3人掛りでも動かせない程の瓦礫が軽々と宙を舞い、隅の方へとどんどん積み重なっていく。その現象を見た彼は、不意に昼間自分が使った風魔法による超微風を思い出して、言い知れない敗北感の様な物を覚えたりもしたのではあったが、コレはまあ、まだ大した災難とは言えない出来事であっただろう。

――問題が起きたのはその後である。

未だ慣れない場所であるとはいえ、多少なりとも帰宅による安堵を覚えた青年は、身心を休ませるかの様にしてフウと小さく息を吐いた。そして少しだけ休息を取ろうか、などと今にもダイニングテーブルに腰を下ろそうとしたその瞬間、彼の耳は不幸にも、少女のその呟きを拾ってしまったのである。

「じゃ。簡単に作っちゃうから、待っててね？」

青年は、青褪めた。

少女の呟きの意味を理解してしまったが故に、彼の背筋にはゾクリ、とした悪寒が這い回り、あまりの恐怖に末期癌患者の如く膝が痙攣を始める。

――少女が家に帰って来て、作るモノ。

浴びるでも被るでも見るでも無く、彼女は今、“作る”と仰ったのである。

日が暮れて家に帰宅した人間が、先ず作るモノ。

そんなモノは一つしか無い。

夕飯、である。

青年は戦慄した。

彼の脳は何度も何度もその仮説を否定しようと現実逃避を繰り返したが、まるでそんな彼の努力を嘲笑うかの様に、少女は鼻歌と共に周囲のアダマス鉱からキッチンを作り上げてゆく。その楽しげな姿を見ているだけで青年の脳裏にはあの緑の粘液がフラッシュバックして、走馬灯と共にフラリと意識を失いかけた。

「あ、アル！！　一つ提案があるんだが……！！」

すぐさま、彼は説得を開始した。

キッチンに立つ少女の姿に今朝の光景がデジャヴして、そのトラ

ウマが彼の声を1オクターブ程も上擦らせた。正直、今は彼女を直視しているだけでも舌が覚えてしまったあの禁止薬物の風味が何度も何度もリプレイされ、“危険危険危険危険”と本能が悲鳴を上げ続けるのではあるが、ここで退いては更なる大惨事を招くことは誰の目にも明らかであった為、彼はダラダラと脂汗を流しながらも、努めて冷静を演じながら少女に譲歩を求めようとした。

――無論、彼とて自らの内心を正直に告げる様な不手際はしない。何しろ今回の説得対象は、癇癪が服を着て歩いていると言っても過言では無いこの少女なのである。もしも下手な事でも口走ろうモノなら――、

「……なによ。あたしの料理はそんなに不味いって言いたいワケ!?折角あたしが作ってあげてるのに、味にまでイチャモン付けるなんて何様のつもりなのよバカ!!」

……などと理不尽な理由でボコボコにされた挙句、顎を固定されたままあの汚泥を皿ごと流し込まれかねない。

無論、そんな事になれば今度こそショック死は、免れないだろう。故に、交渉には細心の注意が要求された。

「これから、料理はオレが作ろうと思うんだ」

「ほら、オレは特務教諭だろ?」

「オレは、料理のレシピも一種の知識だと思うんだ。だったら、ほら。この世界に伝えるのは義務みたいなもんじゃないか。

それに君だって、オレの世界の料理に興味があるだろう?」

などと、彼は妥当性のある理論を思いつく限り懇切丁寧に、かつ彼女の機嫌を損なわない様に気を付けながら展開し、尚且つなるべ

く自然に振る舞いながら説得を続けた。
いや、まあ。声は多少不自然なくらい震えてしまっていたかもしれないが、この状況で声色まで自然に出来るヤツは、役者とか演技がどうとかいう以前に最早人間では無い、と彼は分析している。

あまりにも集中しすぎて、半ば無我の境地に達していたからであろうか。

正直に言うと、彼は交渉の内容を半分以上覚えていなかった。
ただ結論として言えるのは、彼は今少女の代わりにキッチンに向かい合い、そこを使用する事を認められた、という事実だけである。
――そう。遂に彼は、自らの手によって生存する権利を勝ち取ったのである。
背後に存在するダイニングテーブルからは、青年の説得を受けた少女が興味深そうな、しかしどこか訝しげな視線でこちらを見詰めており、依然として余談を許さない状況である事は否めないが、一応のところ最悪の事態だけは回避出来た、と言って良いだろう。

青年は、食材をキッチンに並べながら冷静に思考した。
――ここから先は、一切の不手際など許されまい。
ちょっとでもこちらの動きに不自然さでも感じたりしようものなら、この意地っ張りな少女の事である。

「ナニよ。あたしの方が上手いじゃない。
やっぱりあたしが作るから、あんたはそこで座ってて」

……なんて事を言い出しかねない。無論、その言葉は青年にとって死刑宣告に等しい。
調理実習をまともに受けて来なかった事が、心の底から悔やまれた。何しろ彼は、生粋の物理学者なのである。自炊と言えばカップ

麺と卵掛けご飯くらいしか経験してこなかった彼にとって、今現在直面している問題は、あの超統一理論を3時間で完成させるに等しい程の超難問に感じられた。“料理は科学だ。料理は科学だ。料理をひっくり返せば理科になる”と心の中で何度も呟き、理科実験と調理の違いなど微々たる物だと信じる事でその不安を薙ぎ払う。

彼が用意したのは、丸っこい形のねぎと挽肉。パン粉に塩胡椒といった調味料。あとはボウルやフライパンなどの調理器具であった。材料は青年が先の商店街で買った物。調理器具は少女に頼んで飛ばしてもらった物である。説得に“家具の使い方を覚えたい”、という名目も含んでしまった為に、ここから先は少女の魔術には頼れなくなってしまった。

やり方だけは教えて貰えたが、コンロの炎も自分で調節しなくてはならないのである。

「確か微塵切りにした玉ねぎを炒めて、一回冷やす、だったよな？」

嘗て中学校で習った内容を諳んじながら、彼はまな板の上に玉ねぎを置き、やたらと切れ味の良さそうな万能包丁をトントンと押し込んでいった。左手を猫にするという基本は忠実に再現している。彼も、そこだけはよく覚えていた。

――余談ではあるが、玉ねぎとは言っても、やはり青年が地球で慣れ親しんだモノとは少々違っているらしい。未だ大量の玉ねぎが入っている包装には、“シクシクねぎ・中”などというふざけたタグが堂々と括り付けられていた。商店街で玉ねぎをくれと言ったところ、店主のおじさんは、何故か無言でコレを手渡してきたのである。

……明らかに顔が付いているのが少々気にはなったが、まあ形は

確かに丸いのだ。きっと、ちょっと洒落た玉ねぎなのだろう、などと青年は解釈する事にしている。

切っている内に涙の様なモノを流し始めたのだが、多分、気のせいである。

きっとアレだ。汁かナニかが漏れているだけに違いない。

青年は微塵切りにしたソレを、フライパンでキツネ色になるまで炒めていく。

火加減を見ながら手を動かすのは少々難しかったが、何しろ今の彼は命がけである。

やってみると、火力の調節には意外と早く慣れる事が出来た。

炒め終わった“玉ねぎ”を氷の魔法円の描かれた冷却皿に移し、冷ましている間に挽肉をパックから取り出してボウルに移す。勿論、牛肉なんて都合のいい物が異世界でそう簡単に手に入る筈も無く、この挽肉を、肉屋の店主は“モニ”の肉を2回挽いた物だと説明していた。店主曰く、ソレは4本の脚と沢山の歯、それから4つの口を持っており、全身が白と黒のまだら模様で覆われている生き物なのだという。

4本の脚に白黒のまだらと言うのだから、きっとそれは牛の仲間なんだろう、などと青年は信じる事にしている。4つの口、というのは、きっと4つの胃袋の言い間違いに違いない。どちらも消化に関係する器官なので、きっと、守護魔の翻訳システムが少々誤作動を起こしただけなのだろう、などと彼は心の中で繰り返した。

……春になると羽化するという一言が少々気にはなったものの、まあ、アレである。動物の毛なんて季節によって生え変わる物なんだし、きっと、ソレを冗談めかして例えただけに違いないのだ。

「ふぅ……」

“モニ肉”をボウルに移した青年は、温度を確かめる為に指先で“シクシクねぎ”に触れてみた。
結果は――まだ熱い。
教科書に素直に従うのであれば、火傷防止と挽肉の風味を保つ為には、あと5分少々は冷ました方が得策だろうか。
……多少熱くとも、無視して肉に混ぜて捏ね回すくらいなら出来そうな物ではあるが、何しろ今回の目的はただ料理を作る事ではない。後ろに控えている少女に食べさせて、尚且つ満足させなくては、明日以降キッチンに立たせてもらえるのかすらも分からないのである。

「……」

――そこまで思案した青年は、不意にその少女の反応が気になった。
シクシクねぎが冷めるまで、やることが無かった、という理由もあるだろう。
それにここまでの作業を見た少女が、何らかの不満を抱えたりしてはいないか、なんて事が気になったという理由も、間違いなくある。
どちらが正しいのかは彼自身にも断定できなかったものの、真也は何となく、かつさり気無く、後方のダイニングテーブル腰掛けている少女の方へと視線を送ってみる事にした。

「――――？」

急に振り向いたのが気になったのだろうか。
少女は一瞬だけ首を傾げる様な仕草を見せた気がしたが、あまり深く考えた様子も無く、乳白色のテーブルに肘を着いたままこちらを観察していた。
きっと、もうじき出来る異世界の食事の到着を心待ちにしているのだろう。
妙なくらいに大人しく、無言で青年が調理する姿を見詰めている真紅の少女。

言葉を交わさない分、青年の意識は自然、彼女の容姿に向いてしまった。

両掌に支えられた、むき身の卵の様な頬。すべすべと柔らかそうなそこから、滑らせる様に視線を上昇させると、宝石の様な翡翠の瞳と見つめ合う形になる。少女の瞳はちょっとだけ訝しそうな、しかし異世界の料理に興味深々といった様子で、真っ直ぐにこちらを見詰めていた。

「――――っ！！」

何故か、少々バツが悪くなって、青年は視線をシクシクねぎへと戻してしまった。
魔術練習の後遺症だろうか。
彼女と目を合わせているだけで、身体の芯を加熱される様なあの錯覚が、じわじわと冷静な筈の彼の精神を苛んだ。

――少女の瞳が、自分の方をジッと見詰めている。
その事実をハッキリと意識しただけで、料理の次の手順が思い出せない程に、脳の奥の方がジーンと痺れてくる。

彼女の視線を意識しているだけで、彼には自分の体温が上昇していくのが明確に分かった。
……本音を言うと彼自身、そんな自分に酷く困惑していた。
彼女はただこちらを見詰めているだけで、別段魔術か何かで圧力を掛けているわけでも無いのである。否、そもそも彼女が仮に魔術を使っているとしても、そんな物は青年には何の効果も齎さない筈なのだ。
何の種も仕掛けも無く、ただ見詰めているだけで体調に異常を起してしまう、少女の視線。
何故か動悸を起しそうになる心臓に手を当てて、深く精神を落ち着かせながら、青年は彼女の起している不可思議な現象の要因について暫し思案しなければならなかった。

考察する事、約三分。
彼は漸く、考え得る中で最も説得力のある原因に思い至った。

彼が今しているのは、料理である。
そして料理とは当然の事ながら、作った段階で全てが終了する行為では無く、完成品を誰かに食べて貰って初めて意味を成す概念であると説明する事が出来るだろう。

――そう。つまり彼が作っている料理は、今からあの少女が口にする物なのである。

吸い込まれそうな程に大きな瞳。月明かりから生まれた様な、目を奪う程に綺麗な真紅の髪。真っ白な肌は、それこそ触れれば溶けてしまいそうで、紅い唇のぷるんとした柔らかさは、直接触れずとも見ているだけで十二分に伝わって来る。

彼女の容姿は、それはもう、まともに見ると脳髄が揺さぶられるくらいに可愛いと言えるだろう。それだけは絶対に、客観だろうが主観だろうが関係なしに断言できる。

そして今、そんな彼が見たことも無いくらいの次元違いの美少女は、彼が作る物を口にしようとダイニングテーブルで待っているのである。おまけに彼女はただ待っているだけで無く、興味深そうな視線で始終、彼の料理する姿をジーッと見詰めているのだ。

……女の子に料理を食べさせるのも初めての青年が、この状況でまともに動作出来るワケが無い。青年はこの段になって漸く、自らの選択した行為の重大性に気が付いたのだった。

途端にやり難くなった作業に頭痛を覚えながら、青年は暫し自らの置かれた状況を思案していた。

考えてみれば、この光景の何と奇妙なことだろうか。

何しろ3日前までは包丁すら持たず、ポットと炊飯器以外の調理器具を使わなかった彼が、今はあんな可愛らしい女の子に手料理を振る舞おうとしているのである。

本当に、人生はどう転ぶか分かった物では――。

「……って、バカか。オレは……」

そこまで思考した青年は、自らの思考のあまりの酷さに気が付い

て頭を振った。
底知れない羞恥と自己嫌悪が沸々と湧き起こってきて、精神が自殺したい程の鬱状態にまで沈着する。
彼が“シクシクねぎ”を切り終えていたのは幸いだっただろう。
もしも彼の手に包丁があったのならば、それで潔く自らの魔法円を削ぎ落して自決してしまっていたかもしれない。
とにかくとして今の彼は、そのくらい凄まじいレベルの精神汚染を感じていたのである。
……なんの事は無い。
一瞬でも、彼女を“女の子”と考えてしまった自分が許せなかったのだ。

そもそも“女の子”とは何なのだろうか。
無論、ソレはホモサピエンス雌性体の幼少期を指し示すのに用いられる呼称であると彼は定義する。ならば彼女が女の子なのか、という命題について考察すれば、答えは“否”と言わざるを得ないだろう。何しろ彼女は地球外の、そもそも世界すら異なるこの場所に生息している生き物であり、当然の事ながらホモサピエンスなんかである筈が無いからである。魔術講座の時にも地球人には無い臓器の名前を出されたし、いくら外見が可憐な少女にしか見えないとしても、一皮?けば中身がどうなっているかなんて分かったものでは無いのだ。

「……」

頭蓋を抉られる様な頭痛に頭を抱えながら、彼はどこをどう間違えてこんなバカげた思考に至ってしまったのかと自己分析を始めた。
原因としては、まあ。色々と考えられるのではあろうが、その中

でも特に大きなウェイトを占めると思われる要因はアレだろうか。
――そう。要するに、アレである。
昨夜少女が晩餐会にて見せた、純白のドレス姿。アレが、非常に不味かったのだ。

例えば、そう。彼女が今着ている様なローブならば、いくら見た目がホモサピエンスに近かろうと、彼女が自分とは違う存在なのだと認識する事は容易だろう。何故ならばあんな服装は地球ではやはり異質なモノであり、そんな物を日常的に着る生き物は、どう考えても青年のよく知る人間などとは違う生き物に違いないからである。

だが昨夜の様に、この少女に綺麗なドレスでも着られてしまうと、途端にその事情は変わってくる。例えばドレスというカテゴリーに分類される衣装は、地球にも多く存在しているだろう。材質や仕立てを細かく見れば、地球製のモノとはやはり細部が異なるのだろうが、裁縫に詳しくない青年にしてみれば、昨夜の少女の服装はどう見ても地球で言うところの“ドレス”にしか見えない。

そう。つまりは彼女がそういった、青年自身の記憶にある様な衣装を着ると、その情報を処理した脳が、彼女が同族であると混乱を起してしまうのだ。

……要は、擬態と同じ理屈である。

増してや昨夜は、徹夜の上に次々と災難が降りかかり、つまりは酷く疲弊した状態であったのだ。そんな疲れて判断力が落ちた状態であんなモノを見せられては、確かに、脳が彼女の擬態を見抜けなくとも無理はないのかもしれない。

極めつけは、昼間の彼女の魔術指導である。青年にとってはアレが決定的だった。

彼はあの時、只でさえ昨夜の晩餐会で種の境界線を混乱し始めていたところに、その本人に身体の感触が伝わるほどピッタリと密着されてしまったのである。

彼女の行為は、彼女を異生物であると正確に認識出来ているのであれば、特に何の問題も無かっただろう。しかし、もしもほんの僅かでもこの少女を“女の子”であると錯覚してしまっていたのならば、やはりその事情は全く変わってくる。

あの指導に、致命的なまでに精神を侵食されてしまうのである。

吐息が掛かる距離で囁かれる甘い声に、真っ直ぐに視線を合わせる翡翠の瞳。彼女を“女の子”であると意識すると、彼女の髪の匂いや、どうしても分かってしまう乳房の感触などに、凶悪なまでにその理性を抉られてしまうのだ。

増してや、あの少女の容姿である。

現代日本の美的感覚から判断して、何の冗談か、どうしようもないくらいに魅力的であると断言出来る彼女の姿なら、密着されただけで意識を飛ばす男がいたとしても何の不思議も無いだろう。

幸いにして青年は、あのときはまだ彼女をハッキリと“女の子である”とは誤認してはいなかった為、そこまで顕著な効果は受けなかったが――。

つまりは、アレで完全に脳が誤解してしまったという事なのだろう。

今しがた陥っていた低レベルな思考は、きっとソレが全ての原因に違いない。

「はぁー……」

自分自身に心底呆れきったといった表情で、彼は嘗てない程に大きなため息を吐いた。

何気なしに、シクシクねぎの入った冷却皿に手を触れる。

今の青年には、その器から伝わるヒンヤリとした感触が、自分に頭を冷やせとでも警告している様に思えてならなかった。

氷の魔法円によって冷やされた皿が左手の体温を奪うごとに、少しづつ、熱に浮かされたかの様な思考の温度が下がってゆく。

――そう、なんのことは無い。

別に彼は、女の子に手料理を食べさせるワケでは無いのである。

これは、そう。アレである。

アマゾンの奥地で新種の珍獣を発見した生物学者が、ソレを健康的に保護・飼育していく為に、適切な飼料を調合する様なモノなのだ。そこに脳が痺れる様な感覚とか、或いは体温が上がる様な感情を持ち込むのは、飼い犬に顔を舐め回されて興奮する異常性癖の変質者と何ら違いがない。

ならば彼女にそういう感情を抱くのは、全ての論理と倫理を統合して考えようとも、やはり根本から間違っていると言わざるを得ないだろう。今しているのは、あくまでも実験と観察に伴う作業の一つでしか無いのである。

「はぁー……」

もう一度だけ、深く溜息を吐いて思考を沈ませる。

どうやら彼女があまりにも人間（ソレ）っぽく振る舞う為に、脳が病的な誤認を起してしまっていただけらしい。

地球に帰ったら一度、自分の脳が正常かどうかを同僚の心理学者

にでも相談してみるべきだろうか、などと思案したところで、彼はその予定を心のメモから削除する。

……精神科に送られるのが落ちだからである。

「……？」

――と、そこまで思考した時である。

真也はなんだか、それはそれで中々に得難い経験である様な気がし始めた。

成程、未知の生命体が摂取する飼料を作成しているのだと考えると、それはそれで興味深い行為であると言えなくも無い。青年にとって生物学は、まあ完全に畑違いではあるものの、それでも未知の生命体の生態観察というのは、学者として心躍らせずにはいられない程の課題であると言って差し支えは無いだろう。

そんな結論に至った青年は、取りあえず、今の作業は学者として楽しんでおこう、という意見で納得した。

「――っと。そろそろいいか？」

思索に耽っている内に、シクシクねぎが冷めていた。

綺麗な飴色のソレが玉ねぎである事を信じて、彼はモニの肉が入れられたボウルへと足していく。確か次は、1カップのパン粉と卵を入れて、粘り気が出るまで捏ね回す、だっただろうか。モニの肉とやらが粘り気を出すのかどうかに少々の不安も覚えはしたが、取りあえずは試してから考える事にした。

日本で使われている計量カップなんて物は当然の如く存在しない為、目分量でパン粉を加えてから、用意してあった“ピョンピョン鳥の卵”を取り上げる。

真也はボウルの淵で卵殻に罅を入れて、肉とパン粉の塊の上にパカリと落とした。

……黄身が毒々しい緑色をしているのが少々気にはなるが、まあ卵は卵だろう。

何らかの理由（腐敗、細菌、突然変異など）によってこの色に変色しているという可能性も無くは無いが、まあ買ったばかりだし大丈夫に違いない、と彼は信じてみる事にする。

何しろ多少色が異なっていようとも、卵は卵なのである。

真獣類と有袋類を除く、陸上生活に適応した高等脊椎動物が等しく産み落とす、次世代を発生させる為の栄養の塊なのである。

「ん……？」

――と。

そこまで思案した真也は、少々気になった点があってその動きを止めた。

科学者としての思いつきが天啓の様に脳内を走り、ソレがたった一つの疑問に向けて収束していく。

「？　どうかしたの？」

彼の異変に気が付いたのだろうか。

少女は真也の方を見詰めながら、不思議そうに首を傾げていた。
真也の目線は、彼自身の手元に落とされている。
深く考え込む様な表情で、たった今、自らが割ったピョンピョン鳥の卵の殻を見詰めている。

その様子に、なおも疑問符を強める少女。
彼はまるで、思い詰めるかの様に眉間に皺を寄せていた。

「いや、大した事じゃ無いんだが……」

平然とした声色で、彼は少女の方へと視線を戻した。
本当に些細な疑問なのか、青年の表情は本当に自然なままである。
そして、まるで明日の天気でも尋ねる様な感じで、本当に普通にこう訊ねた。

「君は、卵とか産まないのか？」

――青年は、粘り気が出るまで殴られた。

――――――

顔中から吹き出す血液が止まり、瞼の腫れによって失われていた視界が戻ったのを確認した後、真也は鼻の奥に感じる謎の熱さを我慢しながら料理を完成させた。

口内に吐き気を催す程の血の味が充満していたのが辛かったが、それでもやはり、今の彼の回復力は偉大であるらしい。
味見をする段になる頃には、何とか味覚を判断するくらいの機能は回復してくれた。

因みに察しの良い方はとうに気付いた事とは思われるが、今回彼が作ったのはハンバーグである。
無論、料理になんか慣れていない彼が、代用食材ばかりでででっち上げて作っただけの料理である為、抜群においしい、なんて事は間違っても言えないレベルの代物であっただろう。だが彼自身が味見をしてみたところ、初めて一人で作ったにしては上出来だったのではないか、などと少々得意げに頷ける程度ではあった。

――端的に表現するのであれば、中学の家庭科ならば4が貰えるレベルである。

勿論、今回の料理の審査員は彼自身では無い。
味覚に少々問題があると言わざるを得ない、この少女なのである。
真也には、それはある意味、ミシュランの三ツ星シェフに合格点を貰うよりも遥かに困難な事である様に思えてならなかったのだが、まあそれは今更気にしても仕方の無い事でもある。
彼は、黙って審判の時を待つことにした。

少々形の悪い肉団子を切り分け、物珍しさからか恐る恐るといった様子でそれを口に運ぶ少女。彼女がソレをもぐもぐと咀嚼してからコクンと飲み込むまで、真也は戦々恐々としながらその感想を待っていた。
この少女の裁量一つで、青年の余命が問答無用で決まってしまう

からである。
彼は塔の中で大男を罠に嵌めようとした時以上の、手に汗を握る程の緊張感と共に、一秒が十秒に感じられる程の戦慄の中、呼吸すらも忘れて少女の食事風景に意識を奪われていた。

そんな彼の内心を知ってか知らずか、少女は初めて食べる異世界の料理をゆっくりと味わい、飲み込んだ後も暫し余韻に浸っている様子であった。
まるでどう評価すべきか迷う様に、思案顔でハンバーグが乗った皿に視線を落としている。
その間ずっと、青年はあまりの恐怖に血が凍りついたかの様な錯覚を味わい続けていた。
無言で彼女の様子を見守る事、3秒。
やがて少女は目線を上げ、僅かに頬を緩ませながら――。

「――なんだ、普通においしいじゃない。
ちょっと物足りないけど、コレなら許容範囲かな」

と、彼にとって最高の生存許可(ほめことば)を口にした。
感情があまり面に出ない性質(たち)の青年は、いつものポーカーフェイスで小さく頷くだけで返事としていたが、内心ではさぞ狂喜乱舞せんばかりに叫んでいた事だろう。否、それどころか、気を抜くとガッツポーズをしてしまいそうな腕を抑え込むのに必死だったに違いない。
大げさだと思われるだろうか。
だが命が繋がったという事実は、人間にとっては本来そこまで嬉しい物なのである。

もっとも少女は、本音を言うと、彼の作った料理がそこまでおい

しいとは思っていなかったりしたのだが……。

“シクシクねぎ”は火の通りが足りてなくて少々辛いし、捏ね回されすぎた“モニ肉”は、まるで筋でも入ったかの様に固くなってしまっている。“初めてにしては上出来”と自評できた真也に対して、彼が初めてそれを作ったと知らなかった少女にとっては、それは贔屓目に見てもおいしいと言えるような代物ではなかっただろう。

だがそもそも、初体験なのは真也だけでは無かったのである。

この屋敷でたった一人で暮らしてきたこの少女にとっても、他人の、それも“男の子”の作った手料理なんか食べるのは、勿論初めての経験だったのだ。

無論、彼女とてプライドはあるので、その結果として生じた感情をわざわざ面に出す様な事はしない。

だがそれでも、なんだかちょっと嬉しくなってしまって、ついつい採点が甘めになってしまったというのは否めないだろう。

――自分の為に、誰かが料理してくれる。

そんな単純な事一つで、ここまでどうしようもないくらいに嬉しくなってしまうなんて、少女は今日この瞬間まで知らなかった。

彼女がつい頬を緩ませてしまったのは、料理の味そのものよりも、実はその感情によるところが大きかったりする。

何はともあれ、こうして日々の食事当番は青年が担当する事に決定したのである。

28. 広義的な意味での地球外生命体の数々を代用した現代日本に於いて最も

ちょっぴり長いので、二つに分けます。

29．　海外旅行中の日本人を対象にしたアンケート調査に於いては必ずと言っ

「それじゃ、脱いで」

食事が終わり、真也が洗い物を済ませたタイミングを見計らって、少女はそんな爆弾発言をかましてきた。

暫し、ナニを言われたのか分からないといった表情で硬直していた真也。

そんな彼の様子から、今のセリフの微妙なニュアンスに気が付いてしまったのだろう。

少女は顔を紅潮させながら、プルプルと肩を震わせた。

「そ、そういう意味じゃない！！

服！！　あんたの！！　洗濯しないワケにはいかないでしょ！？

ほら。あたしはあっちでシャワー浴びてくるから、あんたはここで浴びる。

服は脱いで、そこの籠の中。　分かった？」

羞恥の為か、少々妙な日本語（ではないのだが）であちこちを指さした少女は、腕を掲げながら短く呪文を詠唱した。以前見た光景と全く同じ様に、青年の真後ろに例の即席シャワーが作成される。

今回はそこから更に呪文を詠唱して、シャワーを囲む様にして数本の柱を生やした。パチン、と指を鳴らしたのを合図に、どこからともなくシーツの様な布が飛んできて、柱と柱の間を覆うようにしてピンと張られる。

――なるほど。どうやら仕切りの代わりらしい。

シャワーの周囲には、あっという間に半径５メートル程の個室が出来上がっていた。

青年は少女の気配りへの感心と、少女にとって異生物たる自分にとっての個室の必要性に対する些細な疑問を同時に抱いたりもしていたのだが、少女がシャワーの使い方を説明し始めた為に思考を中断した。

魔術無しではシャワーも浴びられないこの世界の常識には、少々不安と不満を感じた青年であったが……、幸いにして使い方自体はそう複雑なモノでも無かった様である。

要は、先ほど洗い物をした時に教わった流し台の使い方とほぼ同じなのだ。

青年が問題なくお湯を出せた事を確認してから、少女はさっさと自分用のシャワーを作りに居住領域の反対端へと去って行った。

日本のモノと少々勝手の違うシャワーに、少々戸惑いながらも汗を流し始めた青年。

湯加減の調節が少々面倒臭くはあったが、しかしガスや電気が無くとも温水が出せるのだから、魔法というのも実に便利な物なのかもしれない、と、彼は感心した様に呟いていた。

……呟いた瞬間、意識が保温から逸れた為にあっという間にシャワーが冷水に変わってしまい、青年は自らの評価を酷く後悔する羽目になった。

いやはや、やはり地球の科学技術は偉大である。

商店街で購入した洗髪料を流しながら湯船が無い事に思い至り、それで物足りなさを感じてしまう自分はやはり日本人なんだろう、などと、彼は海外旅行気分でふむと頷いてみるのだった。

「シン？　もう服着た？」

商店街で買ってきた部屋着を適当に着込み、少々温まり足りない様な感覚を感じながら髪の水分をタオルに吸わせていると、暫くして仕切りの向こうからそんな声が聞こえてきた。短く、肯定の意だけを示す青年。少女は一言だけ“入るよ？”と告げてから、シーツをずらすようにして中に入ってきた。

「――――っ！！」

その瞬間、青年の意識は不覚にも漂白されてしまった。

ゆっくりと、シーツをずらす様にしながら入ってきた少女。
その格好は、青年が知るどんな物とも違っていた。
可愛らしいフリルが沢山付いた、少女自身の肌に溶け合うかの様に白い布地。
少々丈の短いワンピースと表現できるその寝間着は、いわゆるネグリジェと呼ばれる物だろう。仕立て自体は目を惹く程に珍しい物では無かったのではあるが、しかしそれでも、そのフワフワと肌触りの良さそうな衣装を彼女が纏うと、ソレは文字通りの意味で破壊力が違った。予想以上に少女趣味なその格好で、遠慮がちに仕切りの中に入ってくる彼女を見ていると、まるで童話のワンシーンにでも迷い込んでしまったかの様な錯覚に襲われる。

湯上りの為に、いつもに増してなお艶っぽい唇。
しっとりと水分を含んだ真紅の髪が、温かみのあるランプの光に照らされて、珊瑚を散りばめたかの様な煌めきを得ている。

洗髪料の香りだろうか。
春先の苺の様な、甘い匂いがふわりと漂って来ただけで、意識が朦朧とする様な錯覚を覚えてしまう。
真紅の少女の寝間着姿は、彼女を異生物であると強く認識している青年をして尚、その心理的堤防を容易く崩壊させる程に凶悪に過ぎた。
“チンパンジーに欲情する変態性癖の異常者”の姿を思い浮かべる事で、真也は動悸が起きそうな心臓を全力で抑え込む。
もっとも、情けなくも直ぐには収まりがつきそうに無かった為、暫くは目を閉じて、深く深く思索に耽る羽目になりそうではあったが……。

「……」

そんな彼の様子を、少女は果たしてどう受け取ったのだろうか。
暫し訝しそうな、そしてどこか不安そうな表情を浮かべて彼の顔を覗き込んではいたものの、彼の表情には（少なくとも表情には）何の変化も無いと知るや否や、少々不機嫌そうに眉を顰めてしまった。
まあ、何故ちょっと不機嫌になったのかは、少女自身にもよく分からなかったのだが……。

「……洗濯物、これで全部？」

青年が目を閉じたまま頷いたのを確認した少女は、「じゃ、洗っとくね」と言いながら、籠の方に目をやった。
ようやく落ち着きを取り戻してきて、ゆっくりとその目を開けた青年。
しかし次の瞬間、少女の言葉が意味するところを察して、今度こ

そ本当に卒倒しそうになった。

――考えてみて戴きたい。

現在、ここは異世界なのである。

動力期間も電力も存在している様子が無いのだから、当然洗濯機なんていう便利な物も無いだろうし、という事は、やはり洗濯と言えば、手とか洗濯板で洗うのだろう。

……と、いう事は、である。つまりこの少女が服を洗うという事は、青年の脱いだ物を一枚一枚手に取って、ソレをゴシゴシと擦り合わせるという事なのである。

不意に、青年の脳裏には、自分の下着が目の前の少女に洗われている光景が過ってしまった。

あの籠に放り込んだ布地が、少女の白い手にむんずと掴まれて、ゴリゴリと洗濯板に押し付けられている映像が無慈悲にも脳内で再生される。

その瞬間、青年の心中には、何故か底知れない羞恥心の様な物が湧き上がってきてしまった。

……いや、まあ。

目の前の少女は異生物なのだから、下着を洗われようが裸身を見られようが別段問題など有る筈も無いのではあるが……。

少女のネグリジェによって少々脳が沸騰していた青年には、そんな事を冷静に思考している余裕など無かった様だ。

――やはり、自分の服くらいは自分で洗おう。

彼はそう決心し、その意を少女に伝えようと脳内で制止の言葉を組み立てた。

しかし、正にその瞬間である。

少女は右腕を掲げ、短く飛行魔術の呪文を詠唱しながら、パチンと一度指を鳴らしてしまったのだ。

青年が制止する暇も無く、籠はふわりと空中に浮かびあがり、滑空するかの様に部屋の奥の方へと消えていく。

瞬く間に手の届かない所まで飛んで行ってしまった僕達(いふく)を見送りながら、彼は、自らの遅すぎた判断を暫し後悔し続けていた。

……おそらくアレらは、明日にでも少女の手元に戻って来て、桶の様な物でゴシゴシ洗われてしまうのだろう。

まあ、でも。それならば、少女がアレらを洗う時にもう一度説得するチャンスが……。

「――――ん？」

そこまで考えた彼は、今の一連の行為に少々不可解な点を見つけて首を傾げた。

「そういえば、アル。

昨日も思ったんだが、何で服を飛ばす必要があるんだ？」

そう。この点である。

昨日の朝の時点では、青年は、少女の行動は服をクローゼットに仕舞う様な物なのだと解釈していた。

見たところ居住領域内にはそれらしき物は無いし、きっと衣類は嵩張るから、屋敷の別のところにでも保管してあるのだろう、と。

だが――。それならば、洗濯する前の服をわざわざ飛ばす理由はなんなのだろうか？

居住領域は二人で住むにしても十分広いし、どうせ洗濯するのであれば、籠ごとそこらへんに置いておいた方が遥かに手間も省けると思われるのだが……。

「？　何でって、洗濯でしょ？」

青年の疑問をどう理解したのだろうか。

少女は、心底不思議そうに首を傾げながら、

「明日までには舐め終わってると思うけど……」

「……。

……そうか」

……スルーした。青年は、好奇心という名の邪念を全力で抑え込んでスルーした。

なんか、小一時間ほど少女を問い詰めたい様な欲求に駆られもしたのだが、ソレをしてしまうと、どうもあの白衣を二度と着られなくなってしまう様な気がしてしまったからである。

多分、何かの隠語なのだろう、などと彼は解釈してみる事にする。

きっと、この世界には既に全自動洗濯機兼乾燥機みたいな物があって、きっとソレを使用する事を、一般的な慣用句か何かで“舐める”、と表現するに違いない、と。

……守護魔の翻訳システムが働かないのが少々気がかりではあったものの、取りあえず、この日の彼はそう信じてみる事にした。

―――――

長かった一日もこうして終わる。
食事が終わり、汚れを落とした人間がする事など、通常ならばたった一つしか無い。
つまりは睡眠である。
彼らに残された仕事は、少なくとも今に限って言えば何も無く、あとはただ心地よい夢の世界へとダイブするだけで明日への活力を養う事が出来る筈であった。

……この日最後の問題は、いざ寝ようかというその段になって発生したのである。

「しまった」

全ては、青年のこの一言が物語っていた。
少女も同時にその事に気が付いたのか。
殆ど放心に近い状態となって、自らが潜り込むべきベッドを見詰めている。
その隣に立ち、同じ様にベッドを見詰めている青年。
彼は分かり切っていたその事実を、まるで反芻するかの様に明文化した。

「……布団、買い忘れたな」

「……」

そう。彼らは完全に失念していた。

二件目に入った鉱石店から暴走状態に入ってしまった青年は、興味の赴くままにもの珍しい道具を買い揃えていったのだが、そこからは当初の最重要項目であった“布団”がスッポリと抜け落ちてしまっていたのである。

いや、まあ。リヤカーが既にいっぱいであった為に、無意識に思考から排除されてしまっていたのかもしれないが……。

ともかくとして、今重要なのは、現在この家にはベッドが一脚しか存在していないというその事実のみである。

年若い姿をした二人の男女は、たった一つしか無いベッドをまじまじと見つめながら、途方に暮れた様子で暫し突っ立っていた。

「――――っ！！」

5分くらい、だろうか。

まるで何かの化石みたいに立ち尽くしていた少女は、不意に弾かれる様にしてベッドへとダイブした。

そしてぼふっ、という柔らかそうな音を居住領域に響かせた後、なにやら布団の上で奇妙なブレイクダンスを踊り始める。

……どうやら、あまりの事態故に布団の被り方を忘れてしまったらしい。

暫し尺取虫の様にゴロゴロと布団の上を転がりまわっていた少女は、やがて布団とは一度捲らないと中には入れない物である、という真理を思い出したらしく、枕の辺りをペロンと捲ってその中へと潜り込んだ。

顔を口元まで、スッポリと布団に埋め、む～っと唸りながら青年

の方を睨み付ける。

「……いいわよ」

そして、ポツリと呟いた。

「……いいわよ。
いいわよ！！　ほら、来るんでしょ！？
あ、ああ、あんた。同じ、種じゃ……、ないんだもん、ね？
い、いっしょに、ね、寝たって、べべ、別に、何とも、無い、し……。
……く、来るんでしょ？　寝るんでしょ！？
く、くくく、来るなら来なさいよ！！　さあ！！」

「……」

初日の青年の言葉を覚えていた少女は、もう半分以上意地だけでそんな事を言っていた。
声はどうしようも無いくらいに震えているし、顔も、布団で隠しても丸わかりなくらいに真っ赤になってしまっている事は、彼女自身十分に分かってはいたのだが……。
彼女は、この青年がそんな事を全く気にしない生き物である、という事も重々理解していたので、我慢した。
だって、どうせ彼もこの布団に入って来るのだろうし、自分だけが“そういう事”を意識しているなんていう状況は、彼女のプライド的に許せる事では無いのである。

初日よりはましだ、と、少女は何度も自分自身に言い聞かせる。
だって今日は、ちゃんとシャワーだって浴びたのである。
彼の黒くて、綺麗な瞳とか、線の細い顔立ちとか、スラリと長い指先とか、意外と、引き締まっている体つき、とか――。ホントに、ちょっとは、慣れた筈なのである。
そう。もう全く知らない仲じゃ無くなったのだし、彼が一緒に寝ても何もしない（というか人間だとすら思われてない）という事は既に証明済みなのだし、このくらいは、別に何の問題も無いのである。これは、そう。アレ。猫とか犬を布団に入れる様な物で、ちょっと布団を温めてもらうだけなのである。

そんな混乱した決意と共に、完全に臨戦態勢で彼を睨んでいた少女。
真也は相変わらずのポーカーフェイスを保ったまま、小さく溜息を吐いた。

「……いや。オレは、今日は寝ないからいいよ」

「――――へ？」

少女は、目を丸くした。

正直、彼が布団に入ってこないのは、いい。
……だって本音を言うと、もしもまた彼と一緒に寝る、なんて事になったら、少女は今度こそどうなるか分かったモノじゃなかったのだ。さっきはもう慣れてきたから、知らない仲じゃ無くなったか

らと自分に言い聞かせたが――。
知らない仲じゃ無いからこそ、余計に強まる羞恥心という物もあるのである。

でも、たったそれだけの理由で彼に徹夜を強いるのは、流石の少女にもちょっと気が引けた。
否。それ以前の問題として、そもそも彼は、デリカシーなんて概念は全く無い生き物では無かったのだろうか。
いや、そんなモノが無い生き物であるのは間違いがない。
それだけは、もう、少女は命を賭けても断言できる。

……でも、そうなると。
じゃあコレは、一体どういう風の吹き回しなのだろうか？
少女はあまりの困惑に、少々放心状態になりかけていた。

真也は、軽く肩を竦めて見せる。

「……実は、今日はもともと寝ない予定だったんだ。
昨日、久しぶりにたっぷり寝たからな。
布団を買い忘れたのは確かだが、まあ、きっと初めから使うつもりが無かったから忘れたんだろう」

困惑している少女に、真也はそんな言葉を付け加えた。
意味が分からず、なおも疑問符を強める少女。
そんな彼女をよそに、真也はゆっくりと、その視線を部屋の隅の方へと移し――。

「造ってみたい物があったのさ」

リヤカーに積まれたままになっている、大量の鉱石を見据えながらそう呟いた。

３０．　地球とは全く異なる技術体系が発達した世界に於ける現地の技術を用い

今週は3分割です～。

30．地球とは全く異なる技術体系が発達した世界に於ける現地の技術を用いた

始まりは単純な思い付きであった。
大量の荷物、及び少女を積載したリヤカーを引き摺っていた際に青年の頭を過った、本当に些細な願望である。

――下りだったら、楽だったのにな。

そう。もしもこの坂が下りでさえあったのならば、例えどんなに荷物を積載していようが関係無しに、彼も少女の隣に乗りながら滑走するだけで家に帰る事が出来ただろう。もしもそれさえ出来たのならば、この拷問の如き長い長い道のりも、全く苦なんかでは無かった筈なのである。

無論、そんな物はあり得ない空想に過ぎない。
苦痛に苛まれた人間の、ある意味では現実逃避による精神保護、とも言えるだろう。
だが同時に、その空想を空想で終わらせないのが科学者という人種の習性でもあるのだ。
半ば妄想に近い程の空想に侵された彼の思考は、直ぐさま次の発想へと流動した。

――今が上り坂ならば、王都に行く時は下り坂になるのではないか？

当然である。王都からの帰り道が上り坂であるのならば、昨日彼自身が経験した事実の正にそのままに、少女の家から王都に行く時には下り坂になるのだ。それは、普遍的な事実として間違いなくそこにある。では、その坂を下れるような道具を開発すればどうなるか？　青年の世界が誇る移動器具をこの世界に於いて再現し、それを用いさえすれば、昨日も経験したあの長い長い通勤時間は遥かに改善されるのではあるまいか？

幸いにして、材料とソレを加工する為の技術、そして知識だけはあり余る程に有る。

それを理解した青年は、直ぐにその器具を再現してみたくて堪らなくなった。

そう。つまりは、“自転車”の製造である。

青年が徹夜をするつもりだったというのは、別にネグリジェ姿の少女と同衾するのを躊躇ったというワケでは無かった。

いや、その理由も少なからずあったかもしれないが、彼があの時に言った“初めから寝ないつもりだった”というのは、決して出任せなんかでは無かったのだ。

たった一日分の睡眠時間を削る事で、これから先の通勤時間を半分以下に短縮できるのであれば、ソレは結果的に大幅な睡眠時間の確保にすらも繋がるからである。

彼は買ってきた大量の鉱石を元に簡単な自転車の設計図を作成し、少女のバックアップから使えそうな術式を諳んじて、なんとか走れるだけの物を自作しようと取り組んだ。

ところが、である。設計図を作成し始めた彼は、直ぐにその問題に突き当たる事になった。

先ほども述べた様に、行きが下り坂だというその事実は、そのまま帰り道が上り坂になるという真理を示唆してしまうのだ。加えて

そこそこ急勾配とも言えるその坂は、舗装なんか全くされておらず、?き出しの土が草本に覆われているだけという程のオフロードぶりを呈しているのである。

下るだけならばともかくとして、普通の自転車なんかで登り切れる様なレベルの坂であるとは到底思えず、これでは折角自転車を作ったとしても、帰り道ではソレを押して帰らなくてはならないだろう。

帰り道に無駄な荷物が増えるとなると、当然ながらその有難味は半減してしまうワケで、これでは少々片手落ちである。よって青年は、どうせ作るのならば、ギア付きのマウンテンバイクの様な代物にする必要がありそうだと理解した。

設計図にギアの構造を付け足し、次に材質を決定しようとリヤカーいっぱいの鉱石の山へと目を移した青年。タイヤに使うゴムが無いのが少々辛いかもしれない、などと思っていたが、そこはそれ、流石は異世界の不思議鉱石達である。一つ一つその名前とタグをチェックしていくと、“トロンドラス鋳鉄”なる灰褐色の金属が耐久性、性質、共にゴムと非常に近い物である事が判明した為、彼はソレをチューブ状に加工してタイヤとする事を決めた。

口元を緩めながら、設計図に使用予定の材質を書き加え、それから生まれるであろう器具を用いてあの坂を滑走する光景を脳裏に浮かべた青年。

しかしその時、彼はこの計画における致命的な欠陥に思い至った。

――あの少女、自転車に乗れない。

考えてみれば自明である。

真也自身、補助輪無しで自転車を乗れるようになるまでには、幼

い頃に一週間以上の練習期間を必要とした様な記憶があるのだ。彼に限らず、個人差はあるとしても、自転車に乗れるようになる為には相応の練習期間が必要になるのは日本人であれば誰でも知っている真理だろう。

そしてそれは、異世界人であるあの少女にとってもおそらくは不変である。

準備期間と称した休みは、残り3日。

仮に彼女が異常なくらい物覚えが良く、かつ運動神経に優れており、しかも転んでも転んでも諦めないくらいにとても練習熱心である、というかなり都合がいい仮定をしてみたとしても、3日であの坂道を変速ギヤを駆使しながら滑走できる程に自転車を乗りこなすのは、相当に困難を極めるように思えてならなかった。勿論、舗装もされていないあの坂で補助輪なんかを使用するという選択肢は初めから存在しない。

もしも彼女が自転車の乗り方を覚えられなかった場合には、彼女は真也の後ろに便乗する事になるのだろう。行きはいいにしても、帰り道は相当ハードな軍行になるに違いない。否、それ以前に、もしも少女が真也の後ろに便乗する事に味を占めてしまったとしたら、わざわざ転びながら練習するなんて苦労はせず、コバンザメの様に背後に張り付く様になるのではあるまいか。

それも、これからずっと。

魔術で補助するとかいう、尤もらしい口実をつけながら――。

……それでは、自滅である。

小柄な少女がかなり軽量である事はこれまでの体感から既に判明してはいたものの、それでもやはり、人一人を乗せて坂道を走行するという行為の負担はバカに出来る物では無いと彼は判断する。

よって青年は、発想を転換させて、少女を後ろに乗せても坂が上

れるようにパワーアシスト自転車を設計しておこう、という結論に至った。

結論から言えば、それにも少々の問題があると言わざるを得なかった。何しろこの世界には、当然ながら家庭用コンセントなんてものは存在していないのである。つまりは地球で普及していたパワーアシスト自転車をそのまま再現しようとすると、どうしても電力の供給という点で問題が起きてしまうのだ。

実を言うと、簡易的な発電機を作る事くらいならば、不死鳥の羽（悪魔のツ）ペンと強力なバックアップ（魔女の知恵）を手に入れた今の彼には造作も無い事だったりもするのだが……。

しかしそれでも、もしも人力発電の電力をパワーアシスト自転車に利用しようというのならば、彼は予めこの屋敷内で相当量の運動をして電気を溜めておかなくてはならないだろう。それでは、なにやら本末転倒とは言えないだろうか。

無論、下るときに余剰となるエネルギーを効率よく利用する様な機構を組み込めばかなり楽にはなるものの、そこまで高度な制御システムを組み込んだ結果がパワーアシスト自転車では、彼には苦労の割に少々リターンが少ない様に思えてならなかった。

よって彼は、再び発想の転換を迫られる事となった。

――で。

最終的にどうなったのかと言うと――。

――――――

その日の少女は、やたらとけたたましい騒音によって現実世界へとその意識を引き戻される事になった。繰り返す。少女を起したのは、紛れも無い騒音である。煩くともどこか清々しい起床鳥（グリンカムビ）の鳴き声でも無ければ、断じて穏やかな朝の日差しなどでも無い、正に文字通りの意味での騒音だったのである。

「――って、へ！？
ちょ、な、ナニこの音！？」

大量のスズメバチが耳元で飛び回る様な音に不快感を覚え、驚嘆する様な声を洩らしながら少女は飛び起きた。
本来は朝に弱い彼女なのではあるが、流石に枕もとで蜂の大群に飛び回られて平然としていられる程に図太い神経は持ち合わせていない。
彼女は跳ねる様にベッドの上に状態を起したかと思うと、殆ど反射だけで周囲を見回し、異変の原因を探し始めた。

「お。ようやくお目覚めか。
やっぱり君は、基本的に夜行性なんだな」

心臓を揺らす様な大音響の中に、この3日ですっかり聞き慣れてしまったアイツの声が響く。
決して大声じゃない筈なのに、アイツの声はこの騒音の中でも妙に良く通った。
条件反射の様に、視線を声の方向に向けた少女。

「なに……、ソレ？」

――そして彼女は。
彼と、その隣に生まれ落ちた“ソレ”の姿を目撃した。

黒光りするボディが、天蓋から差し込む陽光を反射して煌めいている。
計算され尽くし、流線形に成形された魔法金属はそれだけである種の芸術に近い域の存在感を醸し出し、ソレを初めて見る少女の目にさえ、ソレが既に“完成品”であるという事実を伝えている。
前方と後方に設置された、荒々しい二つの車輪。
大地を転がる為に存在するのであろうその器具は、しかし少女の記憶に無い程に起伏に富み、“転がる”のではなく“噛み締める”為に特化された構造となっている事が一目で分かってしまった。
奇妙な、しかしとことんまで機能美を研鑽された何かを、ソレは確かに纏っている。
大地を揺るがさんばかりの騒音と振動は、ソレの鼓動と共に世界へと吐き出され、後方から噴き出る白煙と共に少女の皮膚をビリビリと震わせた。

自らの生を誇る様な、猛々しい咆哮。
少女はそれを、まるで産声の様だと思った。

「ん？　コレか？
聞いて驚くなよ、コレは――」

自慢げに口元を緩めながら、青年は自らが生み出したその作品に

ついて、唄う様に少女へと語り始めた。

――その器具の起源は、１８６３年にまで遡る。

フランスの発明家、ルイ・ギヨーム・ペローが、二輪車に動力装置を取り付けるという斬新な発想を用いて発明し、１８７３年のウィーン万博に出展したのが始まりであるとされている。当時は動力源として蒸気機関を使用していた為、大きさ、出力、安全性など、どれ一つをとっても実用には程遠い程度のレベルでしか無かったものの、ソレを初めに実現しようとした彼の功績は決して軽視するべき物では無いだろう。

蒸気機関が内燃機関に変更されたのは、１８８５年の事だ。現在のダイムラー社によって改善されたソレはその後も着々と進歩、改良を重ねられ、１９２０年代になると徐々に社会に浸透し始めた。日本であれば、１９８０年代後半のブームを記憶している方も多くいるだろう。

現在では四輪自動車の普及や危険性の認知などにより販売台数は伸び悩んでいるという話を聞くものの、依然として、ソレが一部の方々に根強い人気を誇る“芸術品”であるという事実に変わりは無い。

青年が作り上げたのは、この世界の常識を用いたソレの再現であった。

通常であれば気化させたガソリンを爆発させる事によってピストンを動かし、動力へと変換させるのがその機器の基本構造なのだが、残念な事にこの世界に実用的なガソリンは未だ存在していない。

ソレを火炎魔法によって代用するという発想に至ったのは、少女からのバックアップ以上に、彼が昨夜料理の際にコンロを使用したという事が大きかっただろうか。いくら数百のバリエーションを記

憶しているからとはいえ、最適な炎の魔法円をシリンダー内に隙間なく書き込み、それらが一切の誤差無く同時に発火する様に計算したのは、“素粒子の魔法使い”とまで呼ばれた彼の面目躍如であったと言える。

地球よりも遥かに進んでいる、この国の金属加工技術というツールを得た天才物理学者とは、正に水を得た魚に等しかった様だ。

密集魔法円の超高熱による気体体積の増加は、並列四気筒エンジンにガソリン車と遜色ない程の運動エネルギーを生み出させることだろう。

更に、彼が生み出したこの“魔力式エンジン”の優れているところは別にある。エンジンのエネルギー源としてガソリンを用いていない為に、燃料タンクを積み込む必要なくなったという点だ。

この時点で既に軽量化という点で市販のソレと比肩し得る程の高性能だと言えるのだが、しかし真也はその程度で満足できる様な人間性の持ち主では無かった。燃料タンクが必要無くなった事により余裕が出来たスペースに、なんと馬鹿デカいターボを積み込んだのである。机上計算ですら排気量４００ｃｃは固いとされていたソレは、その思い付き一つによって想定以上の推進力を誇る怪物マシンへと変貌してしまっていた。

世界初の魔力式エンジンである事を踏まえれば、ソレは驚異的な性能であると言わざるを得ないだろう。

思いついた構造を、羽ペンで絵を描くだけで簡単に作成出来てしまうこの世界の金工技術には、ソレを使った真也自身すらも放心する程に驚いていた。

難点を一つ上げるとすれば、走行時間であろうか。ガソリンの代わりに魔力を使用しているこのマシンは、当然ながら予め魔力を蓄えておかなければ動かない。しかしながらこの魔力の集積というのが魔術素人の真也にとっては中々にネックであり、どうにもその効

率には術者自身の魔力運用の手腕が大きなウェイトを占めているらしかった。

高価な“降魔聖水”とやらをふんだんに使って魔力集積魔法円を描き上げたのではあるが、お世辞にも上手く機能しているとは言えない出来にしかならなかったのである。

それならせめて数で稼げという発想で、車体内部の描き込めるところには全て魔法円を描きまくり、結果として１２８もの円をびっちりと装甲の裏に詰め込んだのだが……、それでも、まだ彼が満足できる程の能力とは言い難い。一晩チャージしてみたが、現在の走行可能時間は三時間程度といったところだろうか。

そのマシンにとって血液とも呼ばれるオイルが、リヤカーの車輪用の物しか用意できなかった事も悔やまれるだろう。

コレの改良は後の課題である。

とはいえ、その器具が試作品にしては恐るべき完成度を誇っている事は決して否定できないだろう。彼が魔導を用いて再現したその移動器具は、まだ試作品でありながらも、その実既に完成品であると賞して良い程の代物であった。

――４気筒２ストローク魔力式エンジン・オフロードオートモービル。

排気量５００ｃｃを誇り、試算では路面の条件次第で最高時速２００ｋｍ／ｈ近くをマークするというこの怪物マシンこそが、通勤事情の改善という、今回の命題に対する物理学者・朝日　真也の解答であった。

「……えーと。

つまり、乗り物……？
――って！！　う、ウソでしょ！？
こんな鉄くずが、ホントに走るの！？」

青年の説明を聞いた少女は、驚嘆に目を見張りながらそんな声を発した。
無論、動力機関に関する知識すら無い彼女には、彼の説明なんか半分以上が意味不明であったのだが、“鉄くずが走る”という事実のみでも、彼女が驚くには十分に値する理由である。

「走るさ。まだ試運転は済ませて無いが……、音を聞く限り完成度はそこそこだろう」

対して青年は、そんな彼女の様子に満足げに頷いて、細部を点検しながらそう答えた。流石にパーツからバイクを造るのは、魔法の金属加工技術と少女の知識、そして彼の天才をしても非常に困難を極める難題ではあったのだが、その苦労や疲労、徹夜の憔悴も、少女の反応を見た瞬間に吹き飛んだらしい。
そして不意に、思いついたかの様にこう提案した。

「そうだな。試運転もしたいし、早速これで王都まで行ってみないか？」

「……」

少女は、もうどんな反応をしていいのか分からないといった様子で固まっていた。
彼女にしてみれば、朝突然に未体験の騒音で叩き起こされたかと思ったら、起きた瞬間にワケの分からない説明をかまされ、それでもなんとか、彼が未知の“乗り物”を作った事を理解した段階なの

である。
彼女は未だ、ベッドから降りてすらもいない。
彼の提案を吟味する余裕など、まさかある筈も無かっただろう。
ただ、彼女は冷静に、昨夜青年がシャワーを浴びた位置へと人差し指を向けた。

「？　どうしたんだ？」

青年の疑問の声を聞いて、少女は呆れ顔で彼の服を指さした。

「……あんたさ。まさか、その格好で王都に行くつもり？」

「……ん？」

少女に言われて、青年は自らの衣装へと視線を落とした。
よく見ると、彼の服装は昨夜の寝間着のままであり、作業に没頭していた為か、真っ黒としか形容できない程にオイルや粉塵塗れになってしまっている。
軽く肩を竦めながら、彼は、取りあえずシャワーを浴びて着替える事に決めた。

――――――

正面から吹き抜ける突風が、黒光りするヘルムの中に風鳴りの音を響かせる。
眼下に広がる深緑の絨毯は、車体の脈動に合わせて流動し、河水の様にうねっては残像を残しつつ背後へと疾走してゆく。
雲一つ無い、爽やかな冬晴れの日差しの中。

蒼い太陽へとその存在を知らしめる様に、猛々しく咆哮を張り上げながら、大型バイク特有の重低音が群青の空へと響いていく。

「ちょ、し、シン！！
コレ、ほんとに速いじゃない！！
なんか、風を裂いてるみたい！！」

「そんなに速度出して無いぞ？
速度計は付けてないから分からんが、多分２０～３０ｋｍ／ｈくらいじゃないか？」

背後から響く少女の驚声を聞きながら、真也は平然とした声でそんな答えを返した。
無論、１７歳にして大学教授を務めている彼である。
天才の名をほしいままにしている物理学者であり、日々研究者としての激務に追われてきた彼は、当然の如く大型バイクの運転免許なんか持ってはいない。
否、それどころか実を言うと、彼は自転車より大きな二輪車に乗った経験すらも無かったりする。
よって現在、彼は練習も兼ねて、ノリで造ってしまったこの怪物マシンのスペックからすれば誤差にもならない程度の超安全運転に徹していたのではあるが――。
どうやら乗り物初体験の少女は、この程度の速度でも十分に刺激的に感じている様である。
少女は真也の腰に手を回し、ライダースーツの裾をキュッと握りしめながら、車体が揺れるたびに小さく悲鳴を上げている。

因みにライダースーツとは、勿論真也の比喩である。

当然ながらライダーの居ないこの世界にライダースーツなんかが存在している筈も無く、正確には“ライダースーツみたいな黒服”であった。

正式名称は、確か“ハンプ”とか呼ばれている物で、この世界の旅人に人気の衣装の一つなのだという。

昨日、商店街の衣類店に立ち寄った際に、着用者の体型ピッタリに伸縮するという不思議さが真也の興味を惹き、3着ほど購入してみた物である。

シャワーを浴び終わった彼に、少女は昨夜洗濯していた衣服を渡してくれた。

初めは彼も、何の迷いも無くその服を着ようとしたのではあるが――。

よく考えると、どうにも、素人が丈の長い白衣を着てバイクに乗るのは自殺行為に思えてならなかった。

よって仕方なしに、彼は手元にある中で一番バイクの乗車に適しているであろうと思われるこの服を卸してみる事にしたのである。

少女曰く、実はこの服は7代くらい前の守護魔が着ていた民族衣装を参考に作られた物らしい。

こんな些細な所にまで守護魔の恩恵が生きているというのだから、やはりこの世界の人間にとって異世界の知識という物は偉大なのかもしれない、などと、光沢のある黒服が風を切る感触を楽しみながら、彼は文字通りの意味で肌に感じていた。

……余談だが、白衣は不気味なくらい真っ白になっていた。

「うわっ！！　もうこんなトコまで来ちゃったの！？
ホント、どうなってんのよコレ！！
あんた、実は魔術師だったんじゃないの！？
コレ、あんたの先天魔術（ギフト）か何かなんでしょ！！　ねえ！！」

風鳴りの音に混じって、背後からは少女の良い反応が返ってくる。
無論、少女が身に着けているのもそのハンプである。
理由は青年の白衣と同じで、少女が普段身に着けているローブや帽子などは、やはりバイクの走行には適さない為だ。
……今でこそ機嫌を直してくれた様だが、しかし実は、初めコレを着る様に指示した時には相当な反発を招いたものである。

理由は明確である。
先に述べた様に、このハンプという服は着用者の体型ピッタリにサイズが変化する。
そう。つまり簡潔に表現するのであれば、コレを着用したりすると、胸部や臀部などの身体のラインが、ソレはもう露骨なまでに浮き出てしまうのだ。
真也には気付けなかったものの、自らの体型に少々コンプレックスのある少女にとっては、ソレは拷問に等しいくらいの辱めであった。

尤も、ソレを正直に彼に告げるのは、当然の事ながら少女自身のプライドが許さない。
よって彼女の主張は――、

「あたしはね、大魔導なの。このローブも、帽子も、特別な事情が無い限り、自宅以外じゃ一切脱いじゃいけない規則になってるんだから、そんなの着て出かけられるワケ無いじゃない！！」

――という正論であったのだが、よく考えるまでも無く、特務教諭たる真也には自らの世界の知識をこの世界に伝えるという最重要の義務があり、尚且つ特務教諭の実験は言うまでも無く、十分に“特別な事情”とやらの適応範囲に収まる。

ソレを指摘されても尚渋っていた少女だったのだが、最終的には真也の、

「馬より速い乗り物に乗ってみたくないのか？
君がこの世界一番乗りだぞ？」

という悪魔の囁きによって陥落した。

いやはや。魔導師たる少女は、本質的に未知への好奇心という物には逆らえない生き物であるらしい。

この際、彼女が真也に出した条件が三つあった。

王都に着いたら先ず着替えさせる事と、運転中は絶対に後ろを振り向かない事。あと、絶対に顔が分からない様に工夫する事、である。

着替えはともかくとして、運転中に後ろを振り向くのは危険極まりないし、どの道安全の為に“ファンサント闇銅”なるプラスチックみたいな鉱石から造ったヘルメットを被ってもらう予定であったので、これらの条件には、真也も別段意義は無かった。

まあ。何はともあれその様な経緯があり、現在、二人は全身真っ黒のライダースーツに身を包み、黒塗りのヘルメットを被り、黒光りする大型バイクに跨っているというアメコミの悪役みたいな恰好になってしまっていたりする。

だが、まあ。初めてのドライブに夢中になっている彼らにとって、そんな些細な事を気に留めるのは野暮という物だったのだろう。

異界の車輪は大地を噛み締め、二人の高揚を代弁するかの様に雄

叫びを上げ続ける。

「どうだ？　アル。
異世界の乗り物ってのもいいもんだろ？」

「ふん。ナニ調子に乗っちゃってるのよ。
……なんかヤな感じ」

走り始めてから5分が経過していた。
少女も、大分ドライブという物に慣れてきたらしい。
真也の腰から左手を離すと、彼の背中をチョンチョンとツツきながら、からかう様にしてそう言った。

「言っとくけど、乗り物ってホントは動物の事なんだからね？
こんなうるさい鉄くず、この世界じゃ乗り物でもなんでもないんだから。
……あんまり調子に乗ってると、蹴るよ？」

「ほう。それで？　その鉄くずの乗り心地はどうだ？
君のお気には召さなかったのかな？」

わざとらしく、ちょっとムッとした口調を作って言う少女。
真也もそれが分かったのか、わざわざ慇懃な口調で返答してみた。
――背後で、少女がフッと笑ったのが分かった。
少女はもう一度、彼の腰に両腕を回し、一際強くその背を抱き寄せる。

「最っ高！！」

どうやら、少女はかなりご機嫌らしい。
未だ練習の域を出ない程の超低速ではあったものの、無邪気に喜ぶ彼女の声を聞いていると、真也はそれだけで心が和むのを感じた。
人間嫌いの筈の彼が、他人の声を心地のいい物として感じているという矛盾に、この時の彼自身は全く気付いてはいなかった。

「飛ばすぞ？　アル！！」

真也も、少々運転に慣れてきたところである。
少女の反応に気を良くした彼は、一際強くアクセルを吹かした。

「――へ？　ちょ、きゃ！？」

背後から聞こえる可愛らしい声に応えるかの様に、車体は尚も加速する――。

加速を始めると、なんと3分もしない内に王都の正門が近づいてきてしまった。
その有り得ない程の速度と、丘を滑走する車体から感じる浮遊感によって恐怖と快感が入り混じり、少女は彼の後ろから悲鳴に近い驚声を発し続ける。
真也は約束通り、始終前だけを見て運転をしていたが、声だけでも彼女が酷く高揚しているであろう事は容易に想像する事が出来た。
可愛らしい容姿なのに、しかし基本的には仏頂面を崩さないこの

少女が驚嘆しながら声を上げている様子を思うと、知らず口元が緩んでしまう。
ミュージックプレーヤーが搭載されていないのが惜しまれた。
これでロックな音楽でも流れてくれれば、演出としては最高だったというのに――。

このドライブも、もうすぐ終わりを告げる。

本音を言えば少々物足りないと感じてしまう程に、少女と異世界をドライブするというのは、彼にとってなかなかに爽快な経験であった。
これからは毎日の様にする事になるのだろうが、それでもつい、いつまでも続けていたいと思ってしまうほどである。

「シン、門の前で止めてね？
流石に、これで王都の中に入るわけにはいかないからさ」

「ああ、了解」

少女の声に相槌を打ちながら、真也はこのドライブの終わりを理解した。
バイクは、まあ門の外に止めっぱなしでも構わないだろう。
大型バイクなんか1人2人で盗める様な物じゃ無いし、そもそも、盗んだって乗れる人間なんかこの世界にはいないのだ。
――さて。王都に着いてからはどうするのだろう。
時間もあるし、やはり魔導研究所の案内だろうか？

それとも、昨日は行けなかった様な、少々変わった店でも見て回るのかもしれない。
何をするかはまだ決まっていなかったものの、今日は何やら退屈しない一日になりそうだ、などと、真也は心の中で頷いた。

ハッキリと言葉には出来ないものの、真也はこの時既に、ナニかが起こりそうな予感をヒシヒシと感じていたのだろう。

遠目には、門番の姿が見えた。
まだボンヤリとしか見えないものの、恐らくは一昨日見た白い歯の好青年と同一人物である。
遠くからでも、記憶に新しい爽やかな笑顔がキラリと光っているのが分かった。

彼の姿を目印に、真也は車体を減速させようとし――、

「……？」

鈍い音が、響き渡った。

爽やかな笑顔が、明らかにヤバい角度に傾き、モノスゴイ速さで遠ざかって行く。
門番の青年は、ボロクズの様に回転しながら宙を舞い、鎧の破片を飛び散らせながら通りの端へと突っ込んだ。
まるで水飛沫みたいに飛び散る木箱の山。
ソレが、彼の突っ込んだ衝撃の大きさを物語っていた。

「……」

……チラリ、と、そこを振り返ってみた少女。
崩れた木箱の山から、一本。門番の彼の物らしい腕だけが伸びていた。
砕けた籠手を纏ったソレはビクン、ビクン、と規則的に痙攣し、やがて、パッタリと、動かなくなった。

異世界初の交通事故が発生した瞬間であった。

周囲から悲鳴が上がる。
車体は問答無用で王都の中へと侵入し、咆哮を張り上げながら疾走していく。
撥ね飛ばされた門番の姿は、あっという間に見えなくなってしまった。

「……シン？」

「……なんだ？」

「……止まって、って、言ったんだけど」

「……」

真也は、何故か答えなかった。

まるでお化けでも見たかの様な蒼白な表情を浮かべたまま、何故か、その信じられない事実を信じたくないとでも言わんばかりの、感情の伺えない能面の様な顔になってしまっている。

後ろに乗っている上に、彼はヘルメットを被っている為、当然ながら少女にはその表情など知る由も無かった。ただ、何となく、スゴくスゴく嫌な予感だけは感じてしまった。

――さて。ここで、二輪車の歴史について少し語ろう。

この偉大なる発明品の起源には諸説有る。

有力な説としては、１８１７年頃にドイツのドライス男爵が、当時存在していたベロシフェールと呼ばれる玩具にハンドルを取り付けたのが始まりであるという物がある。

当時の二輪車にはペダルが存在せず、漕いで進むという行為が成り立たなかった為、足で地面を蹴ったり坂を下ったりなどと玩具の

域を出ない使い方しか出来ず、現在一般に認知されている様な移動器具としての地位を確立する為にはもう暫しの時間が必要であった。

その後、１８４０年頃のマクミラン型自転車の開発をもってペダルを得た二輪車は、急速に社会に普及していくことになったと言われている。

ソレが取り付けられたのは、１９世紀後半頃の事である。

ベロシフェールではそもそも大した速度を出すことが前提とされておらず、精々靴の裏でも使えばソレの代わりを果たすには十分だっただろう。

マクミラン型自転車でも、前輪とクランクペダルが完全に連結しており、ペダルを止めれば車輪も止まった為、特にソレは必要とされなかったのだ。

その後、馬車や自転車の高機能化・高速化に伴って、より高度な構造が必要とされるようになってきたソレは、現在では競技用などの一部を除き、ほぼ全ての二輪車に取り付けられている。

その定義を以下に記す。

“速度を減ずる装置で、自転車の安全性を司る極めて重要な部分である。

これを前後両輪に備えない自転車は、日本の公道を走行することが法的に許されない。

その重要性ゆえに、古来より幾多の改良工夫が繰り返されており、さまざまな形式が存在する。”〈Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　より抜粋〉

えーと、つまり何が言いたいのかというと……、

「ブレーキ……。

自転車のままだった……」

――ここに、惨劇の幕が上がった。

３０．　地球とは全く異なる技術体系が発達した世界に於ける現地の技術を用い

教授～！！

31．他文明に機械技術を齎す科学者には相応の倫理と慎重さ及び責任能力が

正門前商店街は阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。
突如として突っ込んできた黒色の獣の咆哮に慄いた民衆たちは、口々に断末魔の悲鳴を上げながら、我先へと手近な建物に立て籠もる。
朝早い時間帯とはいえ、既に十分な数の人が集まってしまっているこの商店街の活気が災いした。
自動車の類が無い為に、通りの真ん中だろうが端だろうが関係無しに立ち往生している民衆の群れは、今の彼らにとって邪魔な障害物でしか無い。
それらを反射神経だけで躱し切り、真也はとても初心者とは思えないハンドル捌きで商店街を疾駆していく。
……無論、ソレは彼自身に運転の才能が備わっていたという意味では無い。
ただの、追い込まれた人間が発揮する、言わば火事場の馬鹿力的技能であった。

「ちょ、ちょっと!!　シン!!　なんとかしなさいよ!!　ほら!!　その右手のヤツ!!　それ戻せば止まるんじゃないの!?」

「無理だ!!　ブレーキが弱すぎて全く減速しない!!　それにさっきの衝突でハンドルが歪んでて、アクセルが全然戻らないんだ!!」

「はあ!?　ちょ、ちょっと!!　どうすんのよじゃあ!!　なんか方法ないワケ!?　どこか壊せば止まるんじゃないの!?

コレ！！」

「どこかってどこを壊すんだよ！！
コレには燃料タンクなんか無いんだぞ！？
集めた魔力を使えない様にするには、それこそ粉微塵にするしか無い！！
車輪でも壊せば止まるだろうが、そんな事したら、オレ達この速度で地面にクラッシュだぞ！？
下手すりゃ死ぬ！！」

「ま、待ちなさいよ！！
じゃあナニ！？　コレもう止めようがないってコト！？
信じられない！！　早く何とかしなさいよバカァァアア！！」

「待て待て待て待て！！
今殴られるとバランスが……のわっ！！」

二人がそんな会話を交わしている内にも、事態はどんどん悪い方向に向かっていた。
未だ試作品であった事も災いしたのかもしれない。
先の衝突事故によって、どうやら動力系に異常が出ている様であった。
心なしか、というか間違いなく、門を通過した時よりもスピードが上がってきている気がする。
王都の中心部に向かう程に活気を増すという商店街の性質も災いし、真也はまるで、小さい頃にゲームセンターで遊んだ、所謂“避けゲー”をリアルでやっている気分になっていた。無論、緊張感はその時の比では無い。

正面に現れた3体の老人。
耳が遠いのか、全くこっちに気付いた様子の無いソレらを、少女に殴られながらもハンドルを急旋回して回避する。
完全に躱したが、風圧に煽られて一人コケた。
追い抜きざまに視界の端に映ったその姿は、失禁しながらプルプルと震えていた。
なんか、腰でも抜かしたらしい。
少女の猛攻で視界がブレる中、勘と反射神経だけで動きの鈍い2体の肥満の隣を掠め、混雑の中で眼鏡を落としたらしい中年のオヤジの横を通り過ぎる。
――タイヤの下から、パリン、という音が聞こえた。

「アル！！　ここは危険だ！！
取りあえず門の外に出よう！！
3時間も走れば止まるはずだ！！」

「さ……、3時間……！？
ちょ、ちょっとふざけないでよ！！
早く着けるからってコレに乗ったのに、それじゃ歩いた方が全然マシだったじゃない！！」

「言ってる場合か！！
とにかく、早く外に出ないとマジで死人が出かねない！！
どこかUターン出来る様な場所は！？」

「ああ！！　もう！！　分かったわよ！！
じゃあ、4つ先の角を右に曲がって！！
その先に公園があるから、そこで……」

少女の言葉は、最後まで青年の耳に届く事は無かった。
劈く様な鐘の音が王都に鳴り響き、彼女の声など跡形も無くかき消したからである。
その後、一昨日も聞いた、あのメガホンで拡張された様な大音声が響き渡った。

『敵襲！！　敵襲！！　敵は正門前商店街に侵入！！
王宮魔術団は隊列を組み、騎士団は即刻出撃せよ！！
繰り返す！！　王宮魔術団は隊列を組み、騎士団は即刻出撃せよ！！』

「敵襲！？　ウソでしょ！？　まさかこんな時に――」
「いや、ちょっと待て。この状況って……」

なんか、寒気がして、青年がそう呟いた瞬間である。
正面から、何やらモノスゴイ数の騎馬が駆けて来た。
なんかもう、蹄の音が天高く響き渡り、“うぉおおおお！！”という鬨の声が、大地を揺るがさんばかりの迫力で迫って来る。
流石に、彼らも先日の襲撃から学んだ様である。
騎士団の皆さんがやってくるのは、警報の発令からすると本当に、有り得ないくらいに早かった。
……頼もしい筈なのに、何故か、嫌な予感しかしない真也。

――さて。
ここで、現在彼らが置かれている状況を整理してみよう。
本日彼らは、この世界に存在しない“バイク”という未知の乗り物を開発し、ソレを使っていつもよりも遥かに早い時間に王都に辿

り着いた。
そして先ほど、その未知の道具で制止しようとした門番を撥ね飛ばし、そのまま商店街を恐怖の渦に包み込んでいる。
ここで念を押しておくが、彼らは全身黒尽くめである。
ハンプと呼ばれる旅人用の黒服を着て、頭には安全の為に、同じく真っ黒の覆面（ヘルメット）を被っている。
一言で言えば、誰だか分からない旅人ルックである。

えーと。つまり、ナニが言いたいのかというと……。

「「「「「「「「ウォォオオオオオオオオッッッ！！！！
おのれ敵国民めぇぇえええええ！！」」」」」」」」」

「やっぱりかぁあああああ！？」

叫び声を上げながら、無数の騎馬はロングソードを抜きつつ二人目がけて突進して来た。
その姿を見て、少女も流石にアレらがどこに向かっているのかを察したらしい。
まさか味方に追われる日が来るなんて思っていなかった少女は、真也の背後から声にならない悲鳴を上げたかと思うと、強烈な罵詈雑言の嵐を浴びせながらバカスカと彼の背を殴り始めた。
肺に響く鈍痛に眩暈を覚えながらも、あまりにも危機的状況に過ぎるが故か、その事が思考に上る事も無く１秒が１０秒になったかの様な集中だけが彼の脳を支配する。

「のぉおおおおおおおおわぁあああああああああああっ！！！！」

あの真也が、奇声を上げた。

視界に映る騎馬は、目算で５０騎程。

あれだけの数のマッチョに正面から突っ込んでは、いかにこの黒獣だろうと無事では済まないだろう。極限状態に意識を置きながらも、脳のどこかで冷静にそう理解した彼は、自身の重心を大きく右に落としながら、車体を極限まで傾けた。

背後から聞こえる少女の悪態が悲鳴に変わり、彼女は振り落とされまいと全力で彼の身体にしがみ付く。

靴底が地面に擦れる程の傾きを得た黒獣は、ゴムが擦り切れるかの様な金切り声を張り上げながら、その進路を急速に右へと転換させた。

ゴリゴリという、鈍い音。

ハンドルの端を僅かに壁に擦り付けながら、大型バイクは車体の倍も道幅の無い、細い裏路地へと吸い込まれる。

――瞬間、少女が息を呑んだ。

「ま！！　まままま！！　待ちなさいよ！！
な、何でよりにもよってこんなトコ入ってるワケ！？
あ、あたしが言ったのは４番目の角！！
ここ３番目じゃない！！
ナニしてんのよバカ！！」

「分かってるよ！！

あのまま4番目を目指してたら、騎士団に正面衝突だったじゃないか！！」

「そんなの何とかしなさいよ！！
この鉄くず、ホントはもっと速いんでしょ！？
加速すれば良かったじゃない！！」

「だからアクセルが動かないんだよ！！」

「そんな事言ってる場合じゃないのよッ！！
だってこの道は――」

「この道はなんだって――」

そこまで言った真也は、突如として言葉を失った。
少女の言わんとする事を自らの目によって理解し、その事実が走馬灯となって彼の全身を駆け巡る。
目の前に迫る、大きな、壁――！！

「袋小路なんだってばぁッ！！」

「早く言えぇぇぇえええ！！！！」

驚愕する暇もあればこそ、目前の壁は恐ろしい勢いでその距離を詰めて来る。
目算、約2秒。
その瞬くほどの時間の後に、壁に衝突したこのバイクは大破し、二人は無残にも硬質の金属によって頭蓋を砕かれるだろう。
一瞬、彼らの脳裏に過ったのは、潰された蚊の様に壁に張り付き、グチャグチャの肉塊に成り果てた自分達の最期……。

「「わぁぁあああああああああッッッ！！！！！！！」」

瞬間、二人の身に奇跡が起こった。

意識してない筈なのに、まるで何者かに操られたかの様に流動する両者の身体。

少女は自分たちの正面に向けて咄嗟に狼霊級相当の火炎魔法を放ち、その爆風によって車体を僅かに減速させた。

同時に、まるで示し合わせたかの様なタイミングでハンドルを切り、重心を極限まで落とし込む真也。

それは果たして、守護魔として少女と知識を共有し、ある意味では以心伝心とも言える状態であったことが幸いしたのだろうか。

彼らは出会って3日とはとても思えない様な、素晴らしいまでの連携を成立させていた。

真也は左足が完全に地面に着くほど、否、その地に着いた左足を寧ろ積極的に軸として使い、少女の魔法による反動を完全に生かし切りながら、幅数メートルしか無い裏路地でバイクを急旋回させる。重心をなるべく前方へと移動させ、フロントタイヤに全身を乗せる様なイメージを伴いながら――。

後輪が流れ、悲鳴のような高い音を響かせながら白煙を燻らせた。

あまりの急旋回故に後輪は完全に浮き上がり、後ろ向きに滑りながら壁へと突っ込む。

――瞬間。壁を蹴りあげる後輪のオフロードタイヤ。

二人を乗せた車体は、物理法則など知らんと言わんばかりの、スタントマンも真っ青な程に凄まじいドライビングテクニックを見せつけ、“車幅Uターン”という神業を成し遂げながら、入ってきた路地を反対方向に向けて戻り出した。

「は、はは、ははははは、ははははははあぁあああ！！
何とかなるじゃないかッ！！！！
やってみれば何とかなるモンじゃないかぁッ！！！！
あははははははははははぁっぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！
！」

「あははは。
キャハハハハハハハハハハハハ！！！！！！
ほ、ホント！！　何とかなるじゃない！！　あたしってやっぱり天才！！
アハハハハハハハハハハハハハ！！！！！
キャハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！」

奇跡的な生存を果たした二人の“天才（バカ）”。
彼らは、それはもう、未だ嘗て無いくらいに和やかに大爆笑を始めた。
なんかそれは、もうあまりの事態に理性が半分以上機能しなくなったかの様な、どこか壊れた悲しい笑顔だった。
きっと、アレである。強烈な恐怖を感じてしまった彼らの脳が、自己防衛本能に従って無尽蔵にヤバいドーパミンみたいなのを分泌したのだろう。
……そんな、ちょっと普通じゃない精神状態になってしまっていた彼らは、事態は何も解決していないと気付くのに暫しの時間を要した。

路地を抜ける。
来た道を戻ったのだから、彼らは当然の如く先の商店街へと舞い戻る事になる。

瞬間、彼らが目撃したのは、ソレはソレは凄まじい数の鎧と剣、あと、馬だった。

マッチョなガタイの騎士たちが、“いただきまーす”とでも言わんばかりの笑顔で、獲物に喰らい付く直前の肉食獣みたいに待ち構えている。

……そこで彼らは、ようやく、そもそもどうして自分たちがこんな道に入ったのかを思い出した。

騎士団長らしき黒髭の男が、ニッコリと微笑みながら、号令一下高らかに剣を振り下ろした。

「突撃ィィイイイイイ！！！！」

「「「「「「「「うぉぉおおおおおおおおお！！！！！！！！」」」」」」」」

「「うわあぁぁぁぁぁあああああああ！！！！？？？？」」

正面から突き出される２０本くらいのロングソード。

真也は再び反射神経のみで車体を大きく右に傾け、地面擦れ擦れに伏せる事でソレらを避けた。

何度も何度も鳴り響く、鳥肌が立つ様な金属の摩擦音。

ソレが、車体に剣が掠っている事を知らせる。

無駄な思考を脳内から追い出し、真也は、今はこの場を抜ける事だけに意識を集中させた。

車体を右に９０度方向転換させたところで、進行方向に待ち伏せていた騎士たちの馬が大きく暴れ出した。

馬の足元に火の粉が散り、赤茶色の体毛を微かに焦がしているのが視界の端に映る。

おそらく、少女が牽制の為に放った火炎魔法による物だろう。

騎士たちは、暴れる馬にしがみ付いていられずに次々と落馬していった。
こんな体勢で良く魔術が行使できる物だ、なんて脳のどこか冷静な部分が考えたところで、真也はこじ開けられた僅かな隙間に大きな車体を無理矢理に捻じ込む。
車体は、騎馬の足元を這うようにして滑り、包囲網の外へと飛び出した。

被害を確認する。
目につく傷は車体の表面を軽く削られただけ、という事実に安堵の溜息を零しながら、真也は車体を起して再び逃走を始める。
背後からは、無数の蹄の音が少しも離れずについてきた。

「どぉすんのよバカぁ！！」

「どうするってもう逃げるしか無いだろ！！」

「だからどこに逃げるつもりなのよ！！」

「だから門の外だろ！！」

「だから！！　それなら何で右になんか曲がったのよ！！
こっち王宮じゃない門は逆方向よッ！！
信じられないナニ考えてるワケ！？　あんたどこまでバカなのよ！！　このバカ！！」

「方向なんか気にしてられる状況じゃ無かっただろ！！
いいから早くUターンを……のわ！！」

会話している内にも、背後からはピュンピュンと矢が飛んできて

いた。
少女が炎で防いでいる様な気配はあるが、それでもその恐ろしい状況に、真也の背筋に汗がダラダラと滴り落ちる。
その汗ばんだ背中を、少女は問答無用で殴り続けている。
……少々、呼吸が苦しくなってきた。

「バカ！！　ばかぁ！！　いいから！！　ばかぁ！！
早く！！　何とか！！　しなさい！！　この！！　バカ！！　バカァァア！！！！！」

「待て！！　ちょっと落ち着いてくれ！！
何とかするからちょっと考える時間を――ゴフッ！！」

バカと叫ぶ度に威力を増す少女のラッシュ。
ソレが疲労によって落ち着いた頃合いを見計らって、真也は打開策を練り始めた。
周囲を見回しながら、全力で思考を回し、起死回生の策を模索する。

商店街には、既に人気が無い。
どうやら、住民はもう既に避難を終えたらしい。
つまり、この騎士団さえ何とかできれば、あとは門の外に出て蓄積したエネルギーを使い果たすまで走り続けるだけで助かる筈だ。
何か無いか？　背後から群がるあのマッチョ隊を、一網打尽にする方法が――。

そこまで考えた時、彼の視界の端にはソレが映った。

「あ、アル！！　正面の小麦屋だ！！
あそこに積まれてる袋を前方３０メートル、高さ２メートルの位

置に飛ばしてくれ！！」

「はあ！？　こんな時にナニ言って――」

「いいから！！　早くしてくれ！！
間に合わなくなる！！」

突如、不可解な指示を飛ばした真也。
だが半狂乱状態にあった少女には彼の意図を予想する余裕も無く、結果として尋常でない彼の剣幕に圧される形で飛行魔術を発動させた。小麦袋が３つ、高らかに宙に舞いあがり、空中にバリケードを作る様に立ちはだかる。

ソレを目で追いながら、真也は自らの腰元の“武器”へと左手を下ろした。
――アダマス膨張型プリチャージ式空気拳銃。
昨日彼が作り上げた、現在彼が所有する中で最も武器らしい武器である。

「うぉおおおおおおおおおっ！！！！！！」

真也は腰のホルスターから空気拳銃を引き抜き、空中に投げられた袋をクイックドロウで撃ち抜いた。何が起こるか分からないから、常に武器は持ち歩くことにしよう、と決心していた事が幸いした形だ。いつ敵国の化け物に命を狙われるかも分からない身である彼は、ピッタリとしたライダースーツを着ている今日も、念のためにソレを身に着けていたのである。
プリチャージ式空気銃は、可動部分の少なさ故に非常に反動が弱い。その分、現時点ではガラスを割る程度の威力しか無いが、それでも、片手でも撃てるという扱い易さは今の状況では何よりも有難

い利点であると言えた。１３発装填のマガジンを全て打ちつくし、内５発の弾丸が空中の小麦袋に命中。空けられた穴から大量の内容物が風に乗り、周囲一帯に巻き散らかされる。
視界を覆い尽くす、粉塵の煙幕。
商店街は、一時の白煙に包まれた。

――――――

“敵国民”の駆る未知の黒獣に追従しながら、騎士団長は自慢の口髭を引っ張ってほくそ笑んだ。
目前を逃げ惑う、おそらくは敵国が生み出したであろう“新兵器”。
ソレを自らの率いる騎士団が、決して魔術団なんかでは無く、誇り高き騎士団が追いつめているという事実に神経が高ぶり、何とも言えない誇らしさと高揚が彼のプライドを満足させる。

やはり、戦闘の本質とは剣と槍なのだ。
騎士団長は、自らの信条が至高の物であったと確信して笑みを隠せなかった。

銀の国は魔術師の国である。
魔導の研究が進み、他国と比較すれば文字通りで“桁が違う”数の精鋭魔導師達を抱えるこの魔術大国は、しかし魔導師連中の厚遇に反比例するかの様に、それ以外の、特に力仕事に従事する人間を軽視する悪癖が染み付いてしまっている。

だが、騎士団長たる彼に言わせれば、そんな物は悪癖どころか許し難い程の妄言でしか無かった。魔導師が騎士よりも優れている、などという誤りを憚りなく口に出来る人間は、言うなれば悲しき妄信に洗脳されてしまった愚か者に過ぎないのだ、と。

何の事は無い。魔術団と騎士団が存在する、銀の国の軍隊。

無知な者の中には、“騎士団は魔術団の二番煎じ”などという根も葉もない虚妄を宣う者も居るが、そんな物は本当にただの妄言に過ぎないのだ。

何しろ、魔術団の連中は殆ど動かない。

連中が現場に出てくるのは、敵国民の襲撃などの大きな事件を除いてはとんと稀であり、暴漢や盗賊やらその他の犯罪者等の検挙数は、常に町の最前線で治安に目を光らせている騎士団の方が遥かに多いのである。

騎士団長の彼に言わせれば、それこそが騎士団の魔術団に対する優位性を示す確固たる証拠に他ならなかった。魔導師なる下種は須らく鶏の如き臆病者であり、その癖プライドだけは一人前にある、無能を隠す為に隠れるしか能の無い国税の寄生虫なのだ、と。

彼に言わせれば、魔導師なんてモノは、頭でっかちのクセにその中身が空っぽな木偶の坊でしか無かったのだ。

自らの愛馬を駆り、魔導師なんかには夢でも叶わない程の速度に加速しながら、騎士団長は更に嗜虐的な笑みを深める。

――そう。そも研究所に引きこもってばかりの、根暗な魔導師などという生き物は、一度懐に入り込まれてしまえば斬り倒される以外に道は無いのである。

なんとひ弱。なんと脆弱で、嘆かわしい生き物なのだろうか。

そう考えると、彼はそんな在り方を至高と信じて疑わない彼らに

哀れみすらも覚えてしまう。
……いや、まあ。年に何回か行われている騎士団と魔術団の交流戦では、毎回毎回懐に入る前に魔術の雨で一掃されてしまうのだが、あれは、まあアレである。あくまでも、交流戦に過ぎないのだ。そもそも本気じゃ無いし、油断しただけだし、魔術団を贔屓しているお偉いさん達の手前、魔術団の顔を立ててやっているだけなのである。

「……」

過去の屈辱が脳裏を過った騎士団長は、一昨日の事件を思い出してハンと鼻を鳴らした。

そう、一昨日である。武の国の王族を名乗った一昨日の侵入者どもは、あの鼻持ちならない魔術団の鼻っ柱を、ソレはもう完膚無きまでにへし折ってくれた。それも、連中が彼の武術王国の出であり、片方は魔術師ですら無かったらしいという事実がもう傑作である。あの事件は、この国が取り憑かれている魔術至上主義という妄信に一石を投じてくれたのだ。
所詮は敵国の野蛮人どもではあったのだが、しかしそれでも、騎士団長の彼にしてみれば餌をやってもいいくらいには賞賛に値する働きだったと拳を握ったものである。

一昨日は騎士団である彼らが到着する前に逃げられてしまったが……。
だがソレは、裏を返せば、連中が魔術団よりも騎士団を畏れているという態度の現れだとは取れまいか？　いやはや、なんと物事の

本質を弁えた、素晴らしい姿勢であろうか。武の国なんていう猿山王国の姫だと言うのだから、きっと醜悪極まりない雌ゴリラだったのだろうが、なかなかどうして、ゴリラの割には知恵がある。

舌の根も乾かぬ内に再び襲撃してきた、姑息にも魔術を使いながら逃げ惑う、目前の二匹の黒害虫に見習わせたい程だ。

――そう。今回は逃がすつもりなど無い。

今度ばかりは魔術団の連中がしゃしゃり出る前にあの愚か者どもを征伐し、やはり騎士団こそが国の平和を担う最高戦力なのだと、王宮の連中の目を覚ましてやらなくてはならないのである。

「矢を射掛けろ！！！！

右翼！！　放てぇぇえええええ！！！！

左翼と中央はワシに続けぃ！！！！

何としても連中の首を取るのだぁあああああ！！！！」

号令を下した瞬間、敵が魔術を用いて小麦袋を投げ上げた。

一瞬、敵の魔術に対して怯えを見せる騎士たち。

恐らくは、なまじ交流戦で魔術の威力を知っているだけに、魔術を見ると条件反射で怯んでしまうのだろう。

――なんと嘆かわしい事か。

寧ろ好都合であると、騎士団長は先頭を駆けながら同朋を鼓舞する。

敵が魔術を扱うのであれば、つまりは魔術師なのであれば、ソレを仕留める事は魔導師連中に一泡吹かせる事に等しいではないか、と。

空中で小麦袋が破裂した。

おそらく、敵が更に何らかの魔術を重ねたのだろう。

破られた小麦袋から、大量にその中身が漏れ出す。

通りが、視界が、白煙に包まれる。

なんとバカな獲物だろうか。

騎士団長は内心でほくそ笑んだ。

煙幕のつもりなのだろうが、白煙はその実、全くその役割を果たしていない。

白煙の向こうには、まだぼんやりと、黒い敵影が浮かび上がっていた。

これでは、見失おう筈も無い。

恐らくは、相当に追い詰められたが故の苦し紛れなのだろうが……、

ならば、打ち取る瞬間は手が届く程に近い――！！

騎士団長は、魔導師という生き物の無能を糾弾し、魔導師と騎士の立場が逆転する未来をその瞼の内に幻視しながら、立ち込める白煙の中に意気揚々と突っ込んだ。

――――――

――掛った。

背後で白煙が靡き、敵影が無数に映ったその様子を見て、真也は自らの策が成った事を確信した。

落ち着いて、ゆっくりと、空気拳銃をホルスターへと戻す。

次に自らの左掌に視線を落として、そこに存在する“武器”を自

覚する。
そう。左手に輝く自らの存在証明。
燈赤色の燐光を吐き出す、自らが常理を外れた存在なのだと周囲に知らしめる、この世界が誇る“奇跡”を――。

白煙を抜ける。
視界が一気に開け、一瞬だけ蒼い太陽の輝きに目が眩んだ。
無駄な思考は脳内から一瞬で排除し、精神をどこまでもクリアにしながら、真也はその声を張り上げた。

「アルッ！！　伏せろぉおッ！！」

叫び声を上げながら、左手を背後へと振り翳す。
空中に鮮やかな白線が描かれ、オレンジの残照が、閃光の様に彼の網膜に焼き付いた。
白色の雲を掴む様に、振り上げた左手を戻す様に引っ張り抜く。
白煙から生じた導火線が、虚空に弧を描きながら、彼の左手へと繋がっていた。
少女が困惑する事、０．５秒。意味が分からないままに彼女が伏せたのを確認したところで、真也は強く“その現象”をイメージし、左腕に魔力を飽和させた。

「いっけぇぇぇえええええええっっ！！！！」

――そして、爆音が全ての音を奪い去った。

射程僅か２ｃｍの火炎魔法が、空気中に散布された小麦へと次々

に引火し、視界を覆う業火となって背後の騎士団へと疾走する。既に雲塊に飛び込んでいた騎士達に、ソレが躱せるワケが無い。否、おそらくは、彼が火炎を放とうとしていた事にすらも気付けてはいなかったに違いない。通りは一瞬にして火の海へと変わり、４０を超える騎士たちは、高熱と爆風によって瞬く間に吹き飛ばされた。

比表面積の大きい可燃性の粉塵が、空気中で十分な量の酸素と混じり合う事によって燃焼反応に対して過敏な状態となり、僅かな火種でも爆発的に燃焼する災害。小麦粉や粉末金属の様なポピュラーな物質を、危険な爆薬へと変貌させてしまう恐ろしい化学反応。

――“粉塵爆発”と呼ばれる現象である。

最弱とも言える自らの火炎魔法を火種として利用し、その災害を意図的に再現するという荒業。

ソレこそが、今回の命題に対する物理学者・朝日　真也の解答であった。

背後では、馬の戦慄き（わなな）が高く響いていた。

爆炎に巻き込まれずとも、炎を見た馬たちが興奮して暴れている。

危うく難を逃れた後続の騎士達も、呆気にとられた様子で呆然と沈黙していた。

敵が使用した想定外な規模の大魔術に、完全に戦意を喪失してしまった形である。

「ヴァァ…ハ…アア…ァアア！！！？？？

見…だが……マドウジどもぉ……！！！！
こでで…ダジバ…逆…で……ん……」

「騎士団長……？
お気を確かに！！　騎士団長！！！！！
ソレは魔導師では無く貴方の愛馬……ああ！！　ダメです！！
そんな風に毛を引っ張られては蹴られ……」

「ボブフゥウウウウ！！！！？？？？」

「騎士団長ぉぉぉおおおおおおお！！！！！！！
おのれ敵国民めぇ！！！！！　よくも！！！！！　よくも騎士団長をぉぉおおおおお！！！！！！！」

「……」

――背後で、ナニか聞こえた気がしたが、真也はあまり気にしない事にした。

「ウソ、でしょ……？」

驚愕の声は少女の物であった。
困惑の度合いで言えば、彼の素性を知っている彼女のソレは、騎士団の面々を遥かに凌駕する程に大きな物であった事だろう。
自らの頭上を通過した巨大火球の破壊力をまざまざと見せられた少女は、殆ど放心状態で背後から立ち上る黒煙を眺めていた。

――まただ。

その事実を認識して、彼女の背筋に冷たい汗が滴り落ちる。

どう贔屓目に見ても、魔術の才なんか皆無だった筈の彼。

確か昨日の時点では、彼は“戦霊級”と呼べるかも怪しい様な、火打石程度の火しか扱えなかった筈なのである。

――だが。それなら彼が今使った魔術は何だったと言うのだろうか。

通りを完全に覆い尽くした炎の弾丸。

魔力の消費量こそ戦霊級の最下位程度のモノであったが、しかしその威力は甚大だった。

大通りを爆散したその破壊は、少なく見積もっても“狼霊級”。

否、人によっては、もしかしたら“龍霊級”の最下位と判定するかもしれない。

いずれにしても今の彼女に分かるのは、自らの正面にて異界の騎馬を駆るこの青年が、再びランクを無視した大破壊を成し遂げてしまったという事実だけである。

――最小限の力で、最大の破壊を齎してしまう、あまりにも不可解な彼の“性質”。

彼の振り翳す理は、奇妙さというその一点に於いて、明らかに常理を外れている。

と、いうか……。

「ナニしてんのよバカァッ！！
手ぇ出したら完全に襲撃者じゃない！！」

「仕方ないだろ！？　緊急事態だったんだよ！！」

「その緊急事態を生み出したのはあんたでしょうが！！！！
ちょっと！！　もっと他になんか方法無かったワケ！？
せめてなんか安全な手が思いつくまで待つとかさ！！！！！」

「そんなの待ってたら弓矢でハリセンボンだっただろ！！
大体！！　話も聞かずに襲い掛かってくるアイツらも悪い！！
オレの世界じゃな！！　こういうのを正当防衛って言うんだ！！」

「あんたが今やってるコトのどぉこに正当性があるってのよッ！！
！！
門番轢き倒して、商店街襲った挙句、今度は火炎魔法で大爆発！？
本物の襲撃者（ウェヌスたち）より遥かに性質（たち）悪いじゃないばかぁ！！！！！」

「襲撃じゃないコレは事故だッ！！
それに、技術提供は確か特務教諭の義務じゃないか！！
きっと、あの連中だってソレを話せば分かってくれる筈――」

「きゃ、ちょ、ちょっと！！！！　ちゃんと前見て運転しなさいよ
！！
振り向かないって約束したのに……、
――あ、そうだ！！　あんた、さっきも約束破ったでしょ！！！！
信じられない！！　絶対に見ないって約束したのにッ！！！！
あんたってそういうヤツだったワケ！？
降りたら絶対！！　もう絶対記憶が無くなるまで殴ってやるんだ

からぁ！！！！」

「言ってる場合――アル！！　伏せろ！！」

視界の外からナニかが迫っている事に気が付いて、真也は突如叫び声を上げた。

咄嗟に少女の身体を抱き寄せて、腕で包み込む様にしながら庇う。

瞬間、２０発を超える火炎弾が黒色の車体へと降り注いだ。

半数が車体の表面を僅かに溶解し。残り半数が少女を庇った真也へと次々に命中していく。腕、頭部、腹部、背。全身に灼熱の業火が降り注ぎ、皮膚が一瞬で炭化する程の熱量が襲い掛る。

もっとも、ソレらは彼に触れようとした瞬間に霧散してしまい、彼には傷一つ付ける事が叶わなかったが……。

ソレで彼は、今のが魔術による攻撃であった事を確信した。

「――――っ！！」

細く、しかし見た目よりも逞しい彼の腕に包まれて、少女は微かに頬を染めていた。

「ちょ、し、シン！？

な、ナニしてんのよ！！

あんた、今のが魔術だって分かったワケじゃ無いでしょ！？」

「どっちでも同じコトだ！！

君に怪我なんかしてほしくないんだよ！！

世界を敵に回しても守り抜くって誓ったろ！！
魔導師なら約束くらい覚えとけ！！」

「ちょっ！？　こ、こここんな時にナニ口走ってんのよあんたは！！

だ、大体、あ、あんな簡易魔術なんか、１００発撃ったってあたしの結界に傷一つ付けられないんだから、気にしなくていい、のに……」

「そんなワケにいくか！！
君が死んだらイコールでオレも死ぬんだぞ！？
オレは怪我してもすぐ治るんだから、この状況じゃ庇うのが当然だろ！！
君こそ、オレの為にもうちょっとくらい健康には気をつけてくれ！！　頼むから！！」

「――なっ！？　ち、ちょっと待ちなさいよ！！　あんた！！　人がちょっと見直してやろうかなとか思ってたら、結局自分の為だったワケ！？　は、放してよ！！　いつまで抱き寄せてるつもりなのよバカ！！」

「不満なら助かってから聞く！！
次弾！！　来てるぞ！！　備えろ！！」

「あ、あたしを誰だと思ってんのよ！！
魔導研究所の所長で、銀の国の大魔導よ！？
あんな連中の魔術なんか、目を閉じてても見えてるの！！」

「そりゃ頼もしいな！！
じゃあ一緒に車体守ってくれ！！

今度のは、流石に一人じゃキツそうだ！！」

「あーっ！！　もう！！
あんた絶対後で泣かすからぁ！！！！！」

会話を交わしている間にも、上空からは絶え間なく魔術の雨が降り注いでいた。

蠅でも払う様に腕を振り回し、真也はその大部分を車体に到達する前に霧散させていく。

正面から迫る7つのつむじ風を片手で払い除け、人魂の様に不規則に飛び回る蒼炎を蹴り飛ばし、冷気の弾丸を指先一つで無効化する。理の外から来た異世界人（守護魔）である彼には、この世界の理である魔術など4桁撃っても効きはしない。常人には一撃で死が訪れる程の魔術の雨を、真也はそれこそ雨粒でも払うようにして消滅させ続ける。

――だが、ソレが雨粒であるのならば、人間が身一つで防ぐのは少々苦しいだろう。

どう努力して車体を雨から保護したところで、どうしても彼の防備をすり抜ける水滴（モノ）は出てきてしまう。

その討ち漏らしを処理するのは、背後に控える真紅の少女だ。

抗魔術結界を自らの身体から車体全体へと展開し、車体の魔法防御を一時的に補強する。

まるで空気の膜を纏ったかのような黒色のバイクは、降り注ぐ大量の魔術を完全に弾き飛ばし、一切のブレを見せぬままに無人の街道を駆け抜けていた。

『ちぃ！！　抗魔術結界か！！　ちょこざいな！！』

「「――――？」」

その時、彼らの耳には、まるでメガホンで拡張されたかの様な老人の声が聞こえた。
不思議に思って、なんとなく耳を澄ます二人。

『まあまあ、魔術団長殿。連中も魔導師の端くれの様ですし、頑張ればあのくらいは防げるでしょうよ。まあ、もう息が上がっているとは思いますがな。はっはっはっ』

『連中の攻撃魔術も、おそらくは先の火炎弾で打ち止めでしょうしな。
今頃、霊道が焼け付いてのたうっているのではありませぬかな？
まったく。実力以上の魔術行使は身を滅ぼすというのに、よくやりますなぁ』

『いやいや、お見事！！　流石は二番煎じの騎士団だ！！
あんな蛮族どもにしてやられるとは、仮にも銀の国の軍隊の名が泣くという物！！
いっそ、この辺りで解体を打診しておくのも……おや？　魔術団長殿？　“遠声”のスイッチが入っておりませんか？』

『おや。ははは、コレはしまったなぁ。
襲撃者や騎士団の面々に聞かれてしまったかもなぁ。
あー。気を悪くしたなら申し訳無い。聞こえないと思ってつい本音が漏れてしまった様だ。
いや、何。君たちはよく頑張っているよ？　うん。
敵国の野蛮人や二番煎じの割には、まあ、うん。頑張った頑張った』

「「……」」

取りあえず、二人は聞こえなかった事にして、無言でバイクを走らせる事にした。

だってこうしている間にも、遠方からの魔術の掃射は続けられているのだ。

なるべく、余計な事は考えたくなかったのだろう。

わざとらしい口上を努めて無視しながら、どこか方向転換出来る場所を探そうと、大型バイクは無人の商店街を駆け抜ける。

『お？　頑張るね～。

諸君。彼らを讃えてやってくれたまえ。

やっとあそこまで辿り着いたようだよ？

はっはっはっはっ……』

「「……」」

……無視、したかったのに。

何故か、正面に“声の主”っぽい集団が現れてしまった。

王宮に続く道を遮る様に隊列を組んでいる、街道を埋め尽くす黒の軍勢。

“王宮魔術団”が、まだぼんやりとしか見えないくらいの距離に沢山佇んでいる。

現在降り注いでいる魔術の雨は、どうやら彼らが撃っているモノらしかった。

……放っておいてほしいのに、“魔術団長”と呼ばれた老人は、何故か、意味の無さそうな口上を続ける。

『さて、異国の三流魔導師諸君。

我ら銀の国に楯突いたその勇気に免じて、我ら一流の“王宮魔術団”が、君達に魔導師のなんたるかを身を以て教えて差し上げよう。精々、自らの無能を死の淵で悔いるがいい！！』

「……。

……三流？」

ゾクリ、と、青年の背後から底冷えする様な声が聞こえた。

一瞬、彼の脳裏に過ったのは、一昨日丘で少女に処分されかけた時のあの声である。

向けられたモノに絶対の死を齎す、冷酷な魔導師の空気が、背後に感じる小さな気配から滲み出し、全身の血液が凍りつきそうな程の恐怖を与える。

……なまじ、魔術を覚えてしまった事が災いしたかもしれない。

今の彼には、少女がどれだけ邪悪な魔力を発しているのか、それはもう明確なまでに感じ取れてしまった。

「……誰が。

誰に向かって、三流魔導師ですって～～～っっ！！！？」

「――――っ！！」

声だけで、真也は背に衝撃を感じた。

瞬間、彼はこの少女の本質を完全に理解する。
彼女は、良くも悪くも一流の魔導師なのである。
確かな実力と、ソレを裏打ちするだけの鍛錬を重ねてきたであろう彼女は、当然ながら、それに見合うだけのプロ意識（プライド）を持ち合わせているのだ。
そしてソレを否定する様な言動は、彼女には許し難い侮辱として映る。
……つまりは、あんな。三流”なんていう、魔導師としての彼女の努力を貶める様な中傷は、彼女には絶対に言ってはならない禁句に当たるのである。

「あ、アル……？
ちょ、ちょっと待て一回落ち着こう！！
君、さっき自分で、今これ以上手を出したら不味いって……」

「ううん、いいの。全然いいの。
だってほら。格の違いもわからないようなバカな部下は、しっかり指導してあげないと、ホントに敵が来た時に危険でしょ？　これ、あたしの仕事だから。所長としての役目だから」

「……」

無駄と知りつつ、何とか説得を試みた真也。
だが、彼女の有無を言わせぬ雰囲気から、やっぱりこの少女に説得は無駄なんだろうな～、と、心のどこか冷静な部分が諦観してしまった。

「シン、防御とかしなくていいから。

そのままあっちに直進して」

努めて冷静を演じながら告げられる、少女の命。

……拒否すれば、彼女の怒りの矛先が自分に向きかねない事を悟った彼は、海よりも深いため息を吐きながら、目前に構える黒い軍勢へと距離を詰めるのだった。

――――――

徐々に大きくなってくる黒い影を見据えながら、魔術団長は杖に嵌った霊石を磨いた。

頭の軽い騎士団を蹴散らし、息も絶え絶えになりながらここまで辿り着いたであろう、魔術後進国たる敵国の放った刺客。魔術大国・銀の国以外からやってきた彼らが魔術を扱い、そして辛くも騎士団を退けたというその事実が、魔術団長のプライドを震わせた。

やはり、この世界の至高は魔術なのだ。

魔術団長は自らの信条が正しかった事を確信して、ニタリとその口元を緩ませる。

先日やって来た武の国の王族を名乗る襲撃者。彼らは銀の国の最高戦力たる王宮魔術団の総攻撃を受けて尚、幸運にも無傷なままに生還してしまった。

野蛮人とはいえ、中々に見目麗しき彼の王女が飼っていた、青いゴリラ。

あのペテン師染みた大男のせいで、辛くもあの王女を取り逃がしてしまった事で、あの無能な騎士どもが愚かしくもつけ上がり始めていたのである。

――全く、なんと許し難い事か。

魔術団長は、その日から行われた仕打ちを思い出して胃酸が強くなったのを感じた。

「……」

（全く、なんと嘆かわしい。なんと許し難い。使いっ走りの下っ端の分際で、最後まで前線に出てこなかったばかりか、まさか全てに於いて上位たる魔術団を侮るとは……。

こっちはあの一件のせいで、昨日からあの魔女の組み上げた修練という名の拷問を、普段の2倍も熟しているのだぞ？　そう！！あの薄汚い魔女の命令をである！！　この辛さが、頭の軽い蛮族や騎士風情に理解出来て堪るものか――！！）

そこまで思い出したところで、魔術団長の脳裏には、一瞬だけその魔女の姿が過った。

あまりの嫌悪感に、怒りを通り越して遂には吐き気すらも込み上げてくる。

そう。魔術団長の彼にとっては、アレは断じて魔導師などでは無かった。

何故ならば魔術とはこの世界が誇る至高であり、それは即ち、同じく至高なる者によってのみ学ばれなくてはならないからである。

魔術は崇高なる物であり、故に魔術大国たる銀の国は、この世界

で最も優れた国家である、とするのが彼の信条だ。
ソレに則るのであれば、つまりそこで魔導師を名乗る様な人間は、家柄、才能、否、存在そのものがこの世界で最も優れた人種でなくてはならない。

詰まるところ彼に言わせれば、あの小娘はあくまでも魔導研究所に寄生している害虫であり、即ち魔女と蔑まれて然るべきモノでしか無いのである。
そんな魔女の命令に従わざるを得ない、魔術団の辛さが、果たして魔術団以外の誰に理解出来ようか。
魔術団長の心痛には果てが無い。

「……」

あまりの怒りに、団長は奥歯を鳴らした。
そう。そもそも、あんな何処の下民の出身かも分からぬ小娘が由緒正しき魔導研究所の所長職に就いている事自体、彼にしてみれば魔術という概念そのものに対する冒涜でしか無かったのである。
代々続く魔導の名家に生まれ、幼い頃より“神童”と持て囃されてきた彼は、あんなぽっと出の汚物に指図されなくてはならないという事実だけで、何度殺してやろうと思ったか分からない程の屈辱を感じていたのだ。

何しろ、国王陛下の気まぐれで拾われただけのあのドブネズミなど、少々魔術の運用が優れているに過ぎないのである。調子のいい時に、偶々まぐれで“精霊級魔術”を使えてしまったが為にあの椅子に座る事が許されてはいるが、先日もナニか大きな儀式に失敗したと噂されていたし、実力の程など全くもって怪しいモノだ。

否、きっとその“精霊級魔術”の行使にしたって、程度の低いイカサマによる物であったに違いないのである。あの売女は、下種で雑種の割には少々恵まれてしまったその容姿でもって、王宮の貴族たちを誑かしているだけに違いないのである。

彼の怒気に呼応するかの様に、霊石が赤く、そして強く輝きを発し始めた。

徐々に近づいてくる、覆面で顔を隠した侵入者の姿。

ソレを真っ直ぐに視界に収めながら、魔術団長はふと、今がチャンスである事に気が付いた。

そう。今この場に、あの生意気な小娘はいないのである。

先日はあの武の国の襲撃者から逃げ惑っていたらしいが、おそらくは、それで敵国民に恐れをなしたに違いない。きっと今頃、最果ての自宅ででも震えているのだろう。

何にしても、王都が襲撃されるというこの緊急事態に、イカサマとはいえ大魔導の名を冠しながらも現れないとは、最早弁明のしようも無い程の大失態である。

――そうだ。ここであの侵入者を葬ったとあれば、王宮や研究所の皆も目を覚ますに違いない。

あんな小娘など、そも魔導を学ぶに値しない亜人なのだと。

歴史ある魔導研究所を総べるべき所長は、歴史ある名家の出身たるこの私こそが相応しいのだと――。

あの魔女を糾弾し、最果ての丘へと追い返すその瞬間を幻視して、魔術団長は知らず拳を握りしめていた。霊道が疼き、一刻も早くソレを成し遂げたくて仕方なくなってしまう。

「下がっていいぞ、諸君！！
あの凡俗共には、団長たるこの私自らが引導を渡してやろう！！」

思い立ったが吉日。
団長は部下たちを自らの背後へと下がらせると、自らの魔装たる杖を迫りくる敵影へと掲げた。
杖は基本にして万能の、魔法使いの象徴である。
器用貧乏などとは断じて言わせない。
魔術を至高とする信条を掲げる彼にとっては、ソレはそれ以外に認められぬ、唯一無二の本物の魔装であった。
通りに描かせた魔法円を補助に使い、霊道に魔力を流し込みながら、徐々にその奔流を加速させつつ言霊を紡ぐ。
その詠唱を聞いている部下たちが感嘆に息を呑むのを、彼は背後に聞いていた。

――無理も無い事だろう。
このランクの魔術を単騎で扱えるのは、一流の魔導師の中でもほんの一握りなのだ。
多くの魔導師が一度は目指し、しかし辿り着く前に諦めてしまう、魔導師としての到達点の一つ。

さあ、見るがいい。
選ばれし者にしか成し得ぬ大魔術。
“龍霊級魔術”の一撃を！！
野蛮人の分際で、一流の魔導師に楯突いた事を、最期の業火の中で悔いるがいい――！！

「火龍の火炎弾（ファーヴニル）！！」

魔術団長は、必勝の手応えと共に、その銘を高らかに響かせた。

――――――

眼前に広がる黒い海。

闇が結晶化したかの様なその軍勢へと向けて、それよりも更に深い黒を纏った鋼鉄の騎馬が駆け抜ける。

自らの前で、脇目も振らずに操縦を続ける異界の青年。

彼が覚悟を決めたのを確認した少女は、視線を更に遠くへと移し、“敵”の動向を注視した。

軍勢が退き、魔術の雨が止み、こちらに杖を向けている老人の姿だけが目立つ。

老人の足元では大量の炎の魔力が渦を巻き、解放の時を今か今かと待っていた。

恐らく、単騎で決着を着けようと考えているのだろう。

その事実を認識し、少女は自分の身体が震えている事を自覚した。

武者震いだ。

「上等――！！」

血が冷たくなった様な感覚と共に、彼女の細い肩が静かに震える。

敵が行使するのは、龍霊級魔術。

補助霊道魔法円を用い、完全詠唱で放たれるであろうその威力は、

通常の魔導師の価値観から言えば神域と賞しても構わない程のモノだろう。

――対する、少女自身の戦力。

彼にしがみ付かなくてはならない現状では、使えるのは片手のみ。

少女のシンボルたる魔装は、弓という両手武器の為、現在は使用不可である。

高速での移動にともなって、魔力の集積も難易度が高い。

敵が既に術式を完了させている事を考えると、通常の魔導師の基準で考えれば、ハンデ戦どころか最早虐殺の域に入る状況だろう。

敵が、魔術の銘を告げた。

龍霊級火炎魔法・火龍（ファーヴニル）の火炎弾。

龍の姿を模した巨大火炎を放つ、火属性を得意とする魔導師が個人で扱い得る中では、最上位と言って良い大魔術である。

こんな悪条件であんな大魔術を向けられては、通常の魔導師は絶望して辞世の句でも詠み始めるに違いない。

「侵攻せよ、炎の巨人（tir kenthorn）！！
虹橋を渡りて世界樹を焼け（raidho sigel yr）！！」

――だが、それはあくまでも通常の魔導師を基準にした場合の話。

“大魔導”の名を冠するこの少女は、この世界の理の中に在りながらも、既に常識の枠からは外れた場所に立っている。

ならばこそ、彼女が今詠むのは辞世の句などではあり得ない。

詠むべきは精霊へと語りかける神秘の言葉。つまりは言霊だ。

神速で術式を構築し、詠唱を終えた少女は、その魔術の銘を高らかに響かせた。

「始祖の炎帝（ムスペルヘイム）！！」

――――――

そして、魔術団長の顎は５ｃｍ程下がった。

ナニが起きたのか理解できず、バカみたいに大口を開けたまま目を？く黒服の老人。

哀れを誘う程に放心したその様は、彼の年齢を更に１０程も更けて見せた。

あまりの驚愕に白髪は逆立ち、顔面からは色々な液体がダラダラと漏れ始めている。

――アリエナイ。

目前に現れた壁の様な炎球を視認し、彼の頭の中にはそのシンプルなフレーズだけが、いつまでも無限にリフレインされる。

火炎魔法・始祖の炎帝（ムスペルヘイム）。

帝霊級魔術に分類されるこの大魔術は、別名を“焼夷の紅炎”とも呼ばれる。

頻繁に修練場を焦土へと変えるソレは、完全に発動させれば火龍（サラマンダー）のブレスを上回る程の火力を発揮するという軍用魔術であった。

――そう、軍用魔術。

帝霊級というのは本来、あくまでも敵の軍隊を吹き飛ばす為に運用される魔術であり、発動する上でも、術式構築の難易度や使用魔

力量から、最低でも１０人以上の魔導師達が連携して放つ事が前提とされているランクなのである。

そう。間違っても、あんな、高速で疾走する謎の敵が、たった二人で使用できる様な魔術では無いのだ。

否。それだけでは無い。

不可思議なのは、それだけでは無いのだ。

こんな事は、絶対にあり得る筈がないのである。

こんな、視界を覆い尽くす様な業火が、こちらの放とうとした“火龍の火炎弾（ファーヴニル）”がみすぼらしいトカゲにしか見えなくなる程の巨大火球が、目の前にあってはならない筈なのである。

何故なら、あまりにも速すぎる。

魔術団長の彼が発動したのは、龍霊級魔術だった。

それも事前に術式を構築し、通りに補助霊道魔法円まで描き、更に敵よりも先に詠唱を開始したのである。ならばそれに遅れてあの敵が放ったあの魔術は、絶対にこちらよりも数ランク簡単な魔術。よくて狼霊級か、下手をすれば戦霊級も怪しい程度の魔術しか放ててはならない。

だが、アレは明らかにこちらのランクを超えている。

敵がソレを撃てたという事は、即ちあの敵は、龍霊級よりも格上の大魔術を、あんな不利な条件の上に、魔術団長たる彼よりも更に速く紡いだとでもいうのだろうか。

そんな、無茶苦茶な速度で術式を構築する事が、一体どんなイカサマをすれば可能になる？

否。そもそもあの敵はいつ、どこで術式を構築したのか。

魔力を集めている素振りなど、一切無かったのではなかったか――？

自らの天才を疑わなかった彼には、気付けなかった事ではあるが――。

少女は今回、間違いなく正規の手順を踏んでから魔術を放っていた。

一般的な詠唱魔術の手順に則り、魔力を集め、霊道へと飽和させ、意識を無意識に転換させるという一連の工程を経て、何の特異性も無く魔術を放っただけなのである。

彼がそれに気付けなかった理由は幾つか挙げられようが……、中でもとりわけ大きな要因が一つ、ある。

人は、知らない内に、自らの常識に照らし合わせる事で外界を認識する。

例えばここに林檎が一つ、あるとしよう。

仮に、事実ソレが林檎であったとしても、見た人間の常識に比してあまりにも大きすぎたり、色が濃すぎたりすれば、ソレを見た人間は、咄嗟にはそれが林檎だと断定できないに違いない。

本質的に、人間の知覚とはそういう物なのである。

見たモノがあまりにも自身の持ち合わせる常識から外れていた場合、人間は、ソレをソレとして正しく認識する事が出来ない。

そう。つまりは彼女のソレは、魔術団長の彼が術式の構築だと思えない程に、あまりにも完璧すぎたのだ。

あまりにも、ソレが速すぎたが故に、彼には、それが自らが常日頃から行っている動作を数倍加速したモノだと気付く事が出来なかった。

――銀の国（プラティヘイム）の大魔導、アルテミア・クラリス。

この少女を大魔導たらしめているのは当然ながら彼女の扱う“精霊級魔術”ではあるが、しかし彼女を国一番の魔導師たらしめている理由は別にある。

つまりは才能と圧倒的練度に裏打ちされた、人外の魔術の発動速度であった。

この真紅の少女の扱う魔術は、魔力を集積し、霊道へと飽和させ、意識を無意識へと転換させるという一連の予備動作が、ほぼゼロに等しいのである。

それは、それこそ、注意していなければ、大魔導級の魔術師であろうとも、彼女が魔術を行使しようとしている事に気付けない程に――。

並の魔導師が４０秒で術式を構築し、５秒で詠唱して撃つ魔術を、彼女は僅かに５秒の詠唱のみで再現してしまう。

狼霊級までならば、毎秒一撃。

龍霊級だとしても、最速詠唱で３秒もあれば発動させてしまうのだ。

彼女の魔術行使を見た人間には、彼女が魔力も集めずに、いきなり魔術を出している様にしか見えないのである。

――それこそ、腕のいい魔術師が見る程、誰か別の人間が撃っているのではないか、などというイカサマを勘ぐってしまう程に。

真っ当な魔術戦に於いて、コレは脅威になる。

何しろ高位の魔導師同士の戦いとは、本来は心理戦なのだ。

お互いに術式の構築に時間を要し、お互いに敵が何の魔術を行使しようとしているのかを認識した中で、いかに相手の裏をかき、攻撃を凌ぐか。或いは、いかにこちらの魔術を命中させるかが争点となるのが、高位の術者同士の魔術戦なのである。

大魔導クラスの魔術戦においては先天魔術（ギフト）の差が決め手となる、と言われる要因はここにある。

大魔導の持つ先天魔術は、どれ一つを取っても例外なく強力に過ぎるからだ。

それこそ、ソレ一つだけで、並の魔導師など一個中隊で掛ろうとも歯が立たない程に――。

当然の帰結として、それだけ強力な魔術を無詠唱で扱う怪物を相手にしては、通常の詠唱魔術など行使する暇はどこにも無い。何しろ長々と何十秒も術式を構築している間に、敵はその右手を翳すだけで相対する存在を消し飛ばしてしまうのだから。

無詠唱魔術以外は、役に立たない早撃ち勝負。

持って生まれた才能（ギフト）同士の競い合い。

それが、大魔導クラスの魔術戦なのである。

そして、だからこそ。その先天魔術以外は役に立たない筈の戦いに詠唱魔術を介入させ得るこの少女は、若干１５歳にして、魔術大国たる銀の国の魔導師達の頂点に立つ事を許されているのである。

彼女の行使する最速詠唱は、時と場合によっては、無詠唱で紡がれる先天魔術と比しても尚速い。

無論。敵を完全に格下と侮っていた魔術団長には、そんな事など知る由も無い事柄ではあったが……。

大通りの幅いっぱいに広がる、否、通りに面した店舗を次々と溶解しながら迫る業火を眺めながら、魔術団長の胸には、ごく些細な疑問だけが去来していた。

――アレ、ナンダロウ。

魔術では、無い。

術式を構築し、集中して、詠唱して、何とか頑張って撃つのが彼の知る魔術なのである。

アレは詠唱しかしてないんだから、魔術っぽく見えるけど、魔術じゃない。

個人で撃てるのは龍霊級くらいが限界で、一回それを撃たれちゃえば、あとは逃げるしかないのが魔導師なのである。

アレは、逃げないで、ソレの5倍くらいのヘンなのを撃ってきたんだから、アレは魔導師じゃない。

あれだけの魔術の雨を無傷で抜けて、でも魔導師じゃなくて、しかも魔術じゃないヘンなのを撃ってくる生き物。

ソレって、なんだろう――？

「……」

ふと、なんとなく、後ろを振り向いてみた魔術団長。

背後には、もう誰もいなかった。

なんか、みんな、スゴイ悲鳴とか上げながら、必死に必死に逃げていた。

――あ、わかった。

逃げ惑う人々を見た瞬間、彼は、アレが何なのかを漸く理解した。

魔導師じゃないのに、魔術も使わずに、あんな大きな火を吹く生き物。

大暴れして、火を吹いて、人々が悲鳴を上げながら逃げていく物。

そんなモノは、一つしか無い。

――怪獣だ。

「いいいいいいいいいやぁぁぁぁぁぁあああああああッッッ!!!

て言うか、このくらいで死ぬ様なヤツは後で補習だから」

“始祖の炎帝（ムスペルヘイム）”の一撃によって、完全に焦土と成り果てた大通り。
地獄の様に燻る黒煙に少々目を細めながら、二人はそんな、魔術団長の火傷に塩を塗りたくってヤスリで削る様な会話を交わしていた。
“遠声”に受信機能が付いていなかったのは、果たして魔術団長にとって幸運だったのか否か……。

「まあ。とりあえず、これで……」

ポツリ、と呟きながら、真也は辺りを見回した。
前方では、一時退避した魔術団が、編成を整えながらこっちを睨んでいる。
ソレはもう、親の仇でも見る様な目で睨んでいる。
“よくも魔術団長をぉおおお！！！！”とか、叫んでいる。

背後からは、なんかもう、凄まじい数の蹄の音が響いてきている。
何となく振り返ると、目算だけでも１００騎くらいの騎士たちが、キリキリと弓矢を引き絞っていた。
“殺せぇぇえええええ！！！！”とか、なんか、物騒な声が聞こえた。

「……これで、完全に襲撃者だな」

「……」

彼が一際深く溜息を吐いた、その時である。
魔術団と騎士団による、息を合わせた一斉射撃が始まった。
前方からは、４属性の魔術の雨が、視界を覆い尽くさんばかりの勢いで迫って来る。
後方からは、大量の矢が、もうどこから飛んできてるのか分からないくらい飛んできている。

――軍隊ｖｓ二人の戦い。
その現実を理解した瞬間、あまりの絶望感に、彼らは肺に空気を満たしていた。

「あ、アルッ！！　どぉするんだよコレ！！
あいつら完全に殺るつもりの目してるぞ！？
君、あんなの撃ったんだから、ちゃんと責任を――」

「元はと言えばあんたがこんなの造るからでしょうが！！
そっちこそ何とか出来ないの！？　ほら！！　さっきの爆発魔法は！？」

「粉塵が無きゃ無理に決まってるだろ！！
大体、ソレを言うなら君こそもう一回！！
今の癇癪玉撃ってくれ！！　早く！！！！」

「か、癇癪玉ぁ！？
あ、あんた、今始祖の炎帝（ムスペルヘイム）を癇癪玉って言った！？
ちょっと、どういう神経してるのよ！！！！

アレは帝霊級に分類される火炎魔法で、本来なら１０人で使う軍用――」

「小言は後で聞く！！　いいから早く撃つんだ！！！！
魔術が多すぎて、そんないつまでも防ぎきれないぞ！？　オレ！！！！」

「出来るワケ無いでしょうが！！
こっちだってねぇ！！　後ろから飛んでくる矢を燃やし尽くすだけで手いっぱいなの！！
帝霊級なんか撃とうとしたら、詠唱してる間にハリセンボンじゃない！！」

「頼りにならないな！！　君は！！
自分で国一番の魔導師とか言ってたくせに、いざという時には役に立たないのか！？」

「召喚から3日連続で！！　毎日毎日なんかブッ壊してるバカに言われたくないわよ！！
塔壊して、魔導研究所をボコボコにして、挙句の果てには王都の襲撃！？
どこの疫病神よ！！　どこの邪神よ！！　どこの大魔王よぉ！！！！
国王陛下の言ってた事が良く分かったわバカァァアアア！！！！！」

「のわぁ！！？？　ま、待て待て待て！！！！
今殴られるのはマジで洒落にならない！！
ってかアル！！　矢！！　矢！！　飛んできてるから何とかしてくれ！！」

「なんとか！！　するのは！！　あんたの！！　頭の！！　中でしょうがぁ！！
いいから何とかして降りる方法を探しなさいってのよ！！」

「降りるってどうするんだ！！
この速度でクラッシュしたら怪我じゃ済まないぞ！？
君の魔法を使えばある程度なら減速出来るかもしれないが、相応の制動距離が必要だろ！！
それとも君は、そんなに長くて人が居ない、都合の良い直線でも知ってるって言うのか！？
素晴らしいな！！　ついでに、飛び降りても大丈夫なくらいフカフカのマットでも敷いてあれば言う事無しだ！！」

「はぁ！？　そんな都合の良い場所なんかあるワケ無いでしょうが！！
無駄に長くて、人が居なくて、その上フカフカの赤絨毯でも敷いてあればいいってワケ！？
そんな税金の無駄遣いも甚だしい様な、見栄っ張りな貴族の巣みたいな場所がどこに――」

「「――――！！！！！」」

――瞬間、二人の脳裏には、同時にある場所が去来した。

「「あった！！！！！」」

32．　あるギリシャ神話の愚者に対するとある物理学者の解釈及びアイザック

「銀蠅め」

王宮上層階のとある回廊。

血走った眼で歩みながら、煌びやかな宝石衣装に身を包みつつんだ文部大臣・アスガルドは毒づいた。

ここ数日間に渡って自らに降りかかった不幸の数々と、ソレを齎したあの“アブラムシ”の姿が頭から離れず、彼の血圧は朝から既に基準値を振り切ろうとしている。

始まりは、４日前の守護魔の召喚だった。

貴族でも無いクセに召喚主になろうなどとしゃしゃり出たあの“赤まだらゴミ虫”は、あろう事か一級霊地たる“ウルズの泉”に於いて卑劣極まりない大爆発などを引き起こし、周囲一帯に甚大なる被害を齎したのである。

今にして思えば、何故あの時にあのゴミ虫を謹慎などという軽い処分で済ませてしまったのか、心底不思議でならない。本来であれば、それこそ大衆の面前で、失禁するまで鞭打ち刑でも食らわせて然るべき程の罪業であっただろうに――。

一等級霊地・ウルズの泉は、文部大臣・アスガルドの領地の中にあった。

幻想的な景観が人気の観光スポットであったあの泉は、国中から人を呼び寄せる事で、彼の懐に少なくない税金を納めてくれていたのである。

ソレが、あの大爆発によって、一瞬にして綺麗さっぱりと消し飛んでしまった。

今現在の、みすぼらしい水たまりが幾つか残っているだけという

あの状では、わざわざ訪問しようと思う物好きなどいよう筈も無い。
あの日から興奮しっぱなしな、魔獣による民家への被害。その保証も含めると、最早考えるだけで血管が切れそうな程の大赤字になってしまっていたのだ。
そう。あの“赤染まりカマドウマ”は、自らの領地を用いて守護魔を召喚するという、彼の今後の発言権や影響力に多大な影響を残した筈の計画を不意にしただけでは飽き足らず、あろう事か、彼の大事な資金源までをも食いつぶしていったのである。
――許し難い。全くもって許し難い！！
アスガルドの血圧上昇は留まる事を知らない。

そう。そもそも文部大臣は、前々からあの“赤ばみドブネズミ”の事が気に入らなかったのである。

確かあの小娘は、5年程前に慈悲深い国王陛下がどこぞから拾ってきたのが初見だったと思ったが……、そもそも第一印象からして、アレは最悪であった。
身分、身なり、態度など、原因を挙げれば暇はないが……特にあの！！　あの人を馬鹿にしくさった目である！！　あの小生意気な小娘が貴族を見る目には、高貴なる存在を敬う心どころか、まるで見下す様な嫌悪感すらも見て取れた。
“貴族？　だからナニ？　あんたのどこが貴いのよバカ”と、言葉に出さずともあの目が十分に過ぎる程に主張し続けているのである。親の顔も知らない孤児（みなしご）の分際で、一体何を勘違いし、思い上がっているというのだろうか。あんな“赤翅ゴキブリ”など、慈悲深い国王陛下の気まぐれとお情けで拾われただけの雑種に過ぎないというのに――！！
成長すれば態度も改めるかと考えた事もあったが、あの小娘は目つきが悪くなるばかりで、少しも誠意を表そうという意思が見られなかった。

銀蠅の分際で、ドブネズミの分際で、アメーバ赤痢の分際でである！！

「銀蠅めぇ！！」

あの翠の双眸を思い出したところで、アスガルドは更に、ギリギリとその歯を鳴らした。

そう。5年前に、いきなり国王陛下が連れ帰って来たと思ったら、いつの間にか由緒正しき魔導研究所を征服してしまっていたあの“侵略者（インベーダー）”。あの小娘がおこがましくもその役職にあるという事実が、更なるガソリンとなって彼の感情を燃え上がらせる。

そもそも魔導研究所とは本質的に研究機関兼教育機関であり、その意味で言えば、文部大臣たる彼の権力をもってすれば、本来どうにでもなって然るべき機関なのである。その所長職にあるべき存在は、本来は文部大臣たる彼の手足となって働くべき者であり、即ち彼の顔色を伺いながら癒着する者で無くてはならない筈なのだ。

だが金の使い方も知らないあの小娘には、そもそも“献金”という概念からして存在しないらしい。

魔術狂いのあの変質者は、高慢にも自分の実力を格下の魔導師どもに誇示出来ていればそれだけで満足らしく、金を献上して貴族をバックに付けたり、その逆に裏金をせびる様な知恵を働かせるだけの能が無い。ヤツが所長になってからというもの、魔導研究所に対する、文部大臣・アスガルドの影響力がめっきり弱まってしまった程だ。

――あの害虫は、どこまでこちらの利益を食い潰せば気が済むというのだろうか！！

そもそもあのゴキブリは、害虫の割には、見てくれだけは分不相応な程に整っているのである。本来ならばああいった手合いは、金や立場を都合してもらう為に、王宮の貴族達に身体を売るくらいはして然るべき立場であろう物を――！！

男嫌いと専らな噂を立てられているあの“変態性癖の異常者”は、全く貴族に媚を売らないどころか、寧ろ権力者達であろうとも恐ろしくて手を出せない程の魔女として名を知られてしまっていた。

金に執着の無い、生粋の魔導師程、扱い難い駒は無い。

――何故忌々しくも、ヤツはこちらの持っていて欲しくない才能（モノ）を、十分に過ぎる程持ち合わせているのだろうか。

――何故忌々しくも、ヤツはこちらの持っていて欲しい欲望（モノ）を、何一つ持ち合わせてはいないのだろうか。

――何故忌々しくも、ヤツはやる事成す事、全てこちらの不利益にしかならないのだろうか！！

「銀蠅めぇぇぇぇえええええええ！！！！！！！」

嫌悪感が沸点を超え、遂に奇声を発しながら壁に頭突きを始めたアスガルド。

アダマス製の筈の銀壁が、心なしか僅かに凹み始め、彼が一撃を噛ますごとに頭部に乗ったカツラがボフンボフンと宙を跳ねる。

そんな自らの惨事など気にも留めず、彼は尚も頭突きの威力を強めた。

――ヤツの齎す、甚大なる“不利益”。

その単語が過った瞬間、彼の脳裏には、ヤツとは正反対の色彩を放ちながらも同等の不利益を齎すあの影が浮かび上がる。

（そうだ!!　加えて、奴が3日前に呼び寄せたというあの悪魔!!　悪魔ぁ!!

人様の金を強奪した挙句このワシに暴力を振るい、終いには高貴なるワシをカツラ呼ばわりするなどとは何たる不敬!!　何たる罪業!!　おまけにあの“白癬菌”は、偉大なる国王陛下すらもその悪魔の囁きで誑かし、一昨日は恐ろしくも神聖なる王宮の中に寄生してしまったのだ!!　きっとこのまま少しずつ!!　少しずつ王宮の内部にその毒を巻き散らかし、王権の崩壊でも狙っているに違いない!!　否、あの悪魔は、既にその呪いを国中にばら撒いているに違いないのである!!　このままでは、国が!!　銀の国が、ワシの金が!!　金が!!　あの悪魔に乗っ取られてしまう!!　あの、あの!!　白い悪魔にぃぃぃぃぃぃ!!!!!!!!）

会う度に自らに暴言を吐き続ける“魔界からの侵略者”の姿が頭を過り、大臣の頭部には蜘蛛の巣状の青筋が浮き上がり始めた。あの魔女が使役し、国家転覆の呪いを掛ける為に用いているあの“異世界人のフリをした悪魔”。その呪言が脳内でリプレイされる度に視界は明滅し、あの涼やかな魔顔を切り落として晒したい衝動が抑えられなくなってしまう。

そう。審問会に呪いを掛け、一瞬にして不浄の地獄へと変貌させてしまった奴の“悪魔の囁き”!!

アレ以来、陰で自分を“カツラルド”と呼ぶ愚か者が後を絶たないのだ!!

否!!　きっとソレは、陰口を叩く連中が愚かなだけでは無い!!　きっと連中は、ヤツが王宮に寄生したあの夜に魂を喰われ、心を操られているに違いないのである!!　何しろヤツは、異世界人のフリをした魔界の悪魔なのだ!!　人心を悪しき方向に操るなど造作も無い事だろう!!

（それだけでは無いッ！！！　そもヤツは、何故あの日侵入者に襲われながらもソレを1匹たりとも仕留めずに、あの塔を！！　よりにもよってあの時計塔のみを破壊したのか！！　あの時計塔を破壊できる程の“理”を持ち合わせているのであれば、侵入者の1匹くらい仕留める事は容易だっただろうに！！　ソレをしなかった理由など、一つしか有り得ない！！　わざとだ！！　ヤツは、侵入者を仕留める事が出来たにも関わらず、このワシを貶める為だけにわざと時計塔の破壊を優先したに違いないのだ！！！！　何しろ、ヤツは悪魔だ！！　あのドブネズミの瘴気に惹かれて世界の壁を食い破り、この国を滅ぼす事に歓喜している本物の悪魔なのだ！！　そんな疫病神が、そんな不浄なる汚物が！！　敵国民の退治などという、この国の利になる事をする筈が無い！！　きっと、国王陛下も騙されているに違いないのだ！！　否、もしやあの悪魔はすでに何らかの呪術を行使して、国王陛下を傀儡にでもしてしまっているのではあるまいか！？　そ、そうだそうに違いない！！　きっと昨日の朝に陛下が仰っていた、“長く国に居座られると凶”という予言は、既に魂を喰われた国王陛下が最期の力を振り絞って伝えた警告だったのだ！！　もしくはアレだ！！　国王陛下は既にあの悪魔に食い殺されていて、今の陛下は分裂したあの悪魔が成り代わっているモノなのではあるまいか？　そ、そうか、分かったぞ！？　だ、だから国王陛下は、あの重罪人どもを放免にするなどという、信じがたい措置を取ったのだ！！　あぁぁああああ！！！！　こ、このままでは国が！！　陛下が！！　ワシの金がぁぁあああ！！！！）

「あの銀蠅めッ！！
銀蠅めぇぇえええええええ！！！！！
ワシの金を食い潰すだけでは飽き足らず、陛下や国そのものまでをも滅ぼそうと悪魔まで呼び寄せるとはぁあああ！！？？

は、早くなんとかせねば！！！！
一刻も早くあの銀蠅を抹殺しなければ！！
ヤツらのばら撒く病原菌に、国全体が汚染されてしまうぅぅぅぅぅ！！！！」

……おそらく、彼は疲れていたのだろう。
国王陛下が告げたたった一言の“予言”は、一日経った現在では、彼の心中をそこまで深く侵食してしまっていたらしい。
ある意味では、その国王陛下自身の一言の方が遥かに“悪魔の囁き”染みた効果を齎していると言えなくも無いのではあるが……。
アダマスの壁に頭突きを続ける彼の脳には、そこまで深く思考するだけの余裕などありはしなかった。
ただ、今は、どうにかしてあの“病原菌の媒体”どもを駆逐する事が最優先事項に思えてしまってならなかったのである。

そして幸か不幸か、額が腫れ上がるまで壁を傷めつけ続けた彼の頭脳は、不意に、自分にはそれが出来る事に気が付いてしまった。

「――そうだ」

彼の脳内に天啓が閃き、その思い付きのあまりの素晴らしさ故に、彼は口元を筋肉の限界まで吊り上げた。

「そうだ、抹殺してしまえばいいのだ！！」

なんと素晴らしい思い付きだろうか。
そう、抹殺である。
無論ソレは、あの化け物どもを物理的に抹殺するという意味では無い。

相応の地位を保っているあの連中を、“社会的に”抹殺するという意味である。

文部大臣の彼を持ってすれば、ソレは決して難しい事では無いのだ。

段取りは、こうだ。現在、準備期間と称して休暇を取っているあの害虫ども。

ヤツらは昨日に魔導研究所の案内を済ませていたという情報が入っているし、おそらく、今日一日は魔導研究所に立ち寄る事も無いだろう。

そこでヤツらが居ないこのタイミングを見計らって、文部大臣権限でもって魔導研究所の視察を行うのである。

何しろ、相手はあの“赤ばみドブネズミ”なのだ。

薄汚い雑種のあの小娘ならば、それこそ埃など、叩けば山と出てくるに違いない。

そう。時計塔の秘密を暴露された意趣返しとして、ヤツの不祥事を全て暴き出してやるのである。

それこそヤツの社会的信用がゼロになる程に、徹底的に、である。

そも人間とは、立場に応じて相応の暗部を抱え込む様に出来ているのだ。ソレは、あの魔女であろうと例外ではあるまい。準備期間が終わって出勤してくる頃には、きっとヤツも、スキャンダル塗れで身動きが取れない状態になっていることだろう。

仮にヤツが相当に用心深く、僅か数日の家探し程度では証拠を掴ませない様な女狐であったとしても、ソレはそれで構わない。何故ならば、最悪は適当な物証をでっち上げればいいだけの話だからだ。何しろあのドブネズミが所長になってから、まだ3年と経っていないのである。只でさえ多忙な魔導研究所の所長職に就いているあの売女が、あのゴミ山みたいな所長室の中身を、完全に把握していよ

う筈も無い。ナニか不都合な物が出てきたとしても、ソレが絶対に所長室に無かった、などと言い切れる筈が無いのである。

もしソレが前任者の物であると言い張った場合であっても、それはそれで問題が無い。何故ならばそれは、ソレが所長室にあったと認める事と同義であり、自室の管理も満足に出来ない様な無能は、やはり歴史ある魔導研究所の所長職には相応しく無いからである。

「……く、くはっ！！」

アスガルドは、その顔に張り付いた笑みを更に深めた。

――重要な点は、更にもう一つある。

それは、仮に少々強引な手段でヤツを貶めたとしても、それに異を唱えようとする者など居る筈も無いという点だ。

何しろあのゴミ虫は、貴族からも、研究所の職員からも、好感など一切持たれていない事が周知の事実として知られている。ならばこそ、例えヤツが何らかの責任に問われたとしても、賞賛する者こそ在れ庇う者など居よう筈も無いのだ。

そう。ヤツの地位など、初めから薄氷の上に乗っているも同然。否、氷などとっくに割れているのに、魔術の実力だけで無理矢理浮いているに過ぎないのである。ならば上から石でも落として、さっさと沈めてやるのも慈悲というものだろう。

「銀蠅めぇ！！　あの銀蠅めぇぇえええ！！！！！
くはっ！！　くははははははぁあああッ！！！！！」

その事実を理解した瞬間、アスガルドは、とうとう込み上げてくる笑いを噛み殺す事が出来なくなった。

意識するまでも無く、自然とその足が魔導研究所の方角へと向いてしまう。

そう。この際、多少汚い手を使うのも致し方なしという物だろう。何しろコレは越権行為などでは無く、悪魔払いにして魔女狩りなのである。

あの悪しき者どもを排除した暁には、きっと文部大臣・アスガルドを讃える像が王宮の前に建つに違いないのだ。きっと連中の排除には、殆どの貴族や職員が賛成するに違いないのである。

さて。そうとなれば、善は急げと言う。早速準備に取り掛かろうではないか。

アスガルドはスキップでもしそうな程のご機嫌さで回廊を抜けると、魔導研究所へと続く渡り廊下を悠々と闊歩した。

これから訪れるであろう、素晴らしい未来を脳裏に幻視し、意気揚々と、無駄に長いその廊下を踏みしめていく。

窓の外が妙に騒がしい気もしたが、今の彼にはそんな事は気にならない。

だってこっちには、連中の排除という重要な、正義の仕事が待っているからである。

そう考えながら歩むと、その長い長い廊下も、彼にはまるで凱旋でもしているかの様な、全く苦では無い道のりに思えた。

（ああ、なんと素晴らしい日だろうか）

アスガルドはそんなことを考えながら、研究所へと続く大扉を開け放った。

――瞬間。
彼は、正面に蜂の羽音を聞いた気がした。

――――――

「ゴブゥゥウウウウウ！！！！？？？？」

扉を抜けた二人を出迎えたのは、強い衝撃と養豚場の豚みたいな鳴き声だった
出会い頭に正面衝突を果たした黒獣と“その影”は、2秒くらい一塊になって走ったかと思うと、やがて被害者をずり落とす形で別れを告げた。
カツラの吹き飛んだトンスラが、窓から差し込む太陽の光を反射しながら、真也の視界からズレていく。

「……」

暫し、放心しながら、真也はどうしてこんな事になったのかを思い返していた。
そう。コレは、確かアレである。魔術団と騎士団という、銀の国の二大軍隊に挟撃される形になった彼らは、取りあえず魔術団の連中を正面突破する事に決めたのである。魔術団の連中は徒歩である為、取りあえずその防衛線さえ突破してしまえば、陥っていた挟撃という最悪の状況からは脱出出来たからだ。

守護魔の魔法防御カンスト特性もあって、死ぬ気でやってみると、突破自体は意外と何とかなった。

……まあ、何人か轢いたが。

そして次に彼らは、魔術団の隊列に邪魔されてまともに動けなくなっている騎馬軍団を尻目に、魔導研究所の中へと逃げ込んだ。扉という扉を少女の魔術で吹き飛ばし、軽量化と飛行魔術を駆使して階段を上り切り、目的地であるその場所を目指し走り続けたのである。

研究所の職員とか、大量の魔法生物とか、防御システムとか、なんか色々ヒドイ目には会ったけれど、それでも何とか、目的地であるその場所に辿り着いたのである。

――無駄に長くて、滅多に人なんか通らなくて、しかも終点には、靴が埋まる程毛の長い絨毯が敷いてある通路。

そう。つまりは、この“王宮の渡り廊下”に。

後は、まあ。少女の魔術でも使ってちょっとずつ減速しながら、なんとか降りられるくらいまで速度を落として、絨毯の上に飛び降りるだけで全てが丸く収まった筈なのだ。

助かった、と、思って、最後の扉を開け放とうとしたところだった筈なのだ。

だと、言うのに……。

「何でこんなトコほっつき歩ってんだこのオッサンはぁぁぁぁあああっ！！！！」

「知らないわよっ！！　あーっ！！　もう！！

コイツどこまで間が悪いワケ！？

どこまであたしの邪魔すれば気が済むのよバカァ！！！！！」

ホント、何なのだろうか。今の物体は。
きっと、アレだったのだ。
“避けゲー”で言えば、回避不能のラスボスみたいな物だったのだ。
自機はまだ生きているし、ゴールは目の前だし、もう忘れる事にしよう。
うん、そうしよう。

彼がそう思った瞬間である。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぉぉあああああ！！？？」

大型バイクのハンドルがぐらりと揺れ、真也の背後から奇声が響いた。

「――って、何だ！？　このカエルが潰れた様な鳴き声は！？
あ、アル！！　まさかさっきの魔法生物がまだ――」

「きゃぁぁあああ！？
シ、シシシ、シン！！
あ、アスガルド！！
アスガルドが引っかかってる！！
服が車輪に引っかかって、宙吊りになって顔面ゴリゴリ擦ってるッ！！」

「ごべべべぇえべべえええあああああ！！？？」

奇声と少女の声に振り向く真也。
背後では、車輪からぶら下がったアスガルドが、廊下にビッタンビッタンと顔を打っていた。

「――って！！　ナニ引っかかってんだこのハゲはぁっ！！！！
や、ヤバい！！　バランスが取れない！！
あ、アル！！　さっさと蹴り落とすんだ！！　早く！！」

「もうやってるわよ！！
こいつの宝石が車輪に噛んじゃってて、全然外れないの！！
――って、きゃぁぁあああああ！！？？
の、上って来た！！　引っかかったトコ命綱にしてゾンビみたいに上ってきたぁ！！
怖い怖い怖い怖い！！！！　顔がなんかモノスゴク怖い！！！！！」

「ふぅぅぅうううう！！
ふぅぅぅぅうううううううううッッ！！！！！」

「クッ！！　な、なんて生命力なんだ！！
と、とにかくこのままじゃマズイ！！
アル！！　蹴れ！！　蹴れ！！　力尽きるまで蹴り倒すんだ！！」

「言われなくても！！　もう！！　やって！！　るわ！！　よぉ！！！！！

――きゃぁああ！？　へ、ヘンなトコ踏んじゃったぁ！！

ぐ、ぐにゅっていった！！　ぐにゅって！！！！　もう最悪ッ！！！！」

「おほぉぉおおおおお！！！！！
おほぉぉおおおおおおおおおおおお！！！？？？」

「が、頑張れアル！！　もう少しだ！！
いつもオレにかましてるあの一撃を思い出すんだ！！
君のポテンシャルはそんなモンじゃ無い筈だろ！！
抉るように撃て！！　抉るように！！」

「ああっ！！　もう！！
こうなったら、燃（cen）えろ！！」

「ブゥルァアアアアアアアッ！！！！！
ブゥゥゥウルァアアアアアアアアアア！！！！！」

「ば、バカな！！　効いて無いだと！？
こ、このオッサン、ホントに人間か！？」

「ウソぉ！？　今の、狼霊級相当の火炎魔法なのに！！？？
きゃぁぁあああああ！！？？　く、くるなくるなくるなくるなぁ！！
燃（cen）えろ燃（cen）えろ燃（cen）えろ燃（cen）えろ！！！！！」

「ガ……ゴ……」

「や、やった！！　力尽きた！！　ダラーン、てぶら下がった！！
これだけ撃ってコレって、大型魔獣くらいのしぶとさだけど……」

「おおおぉぉぉぉぉおおおおおおおおおお！！
ぉぉぉおおおおおおおおおおおぁぁぁあぁあああああ！！？？」

「な、なんだ！？
こ、今度はナニが起きてる！？
なんか鳴き声が普通じゃないぞ！？」

「きゃぁあああああ！？
あ、頭擦ってる！！　額とか思いっきりジョリジョリ擦ってる！！
擦れて抜けてく前髪を、必死に手で庇ってる！！！！」

「ＧＹＹＹＹＨＡＨＡＡＡ

な、なんだこの形相は！！！！　悪鬼か！？　羅刹か！？
ば、バカな！！　あ、阿修羅がマスコットに思えてきた！！
こ、これがホントに人間の顔か！？
だ、ダメだ！！　戻せ！！　戻せ！！　やっぱりうつ伏せがいい！！
こんな顔を光の下に晒しちゃいけない！！！！」

「りょ、了解――って、し、シン！！
ま、前！！　前！！　もう――」

「もう何だって――なにぃ！？」

――突然だが。

いくら渡り廊下が長い、とは言っても、当然ながら長さという単位は現実世界において有限である。

つまりはこうして、無駄にドタバタして時間を空費しようものなら、大型バイクの高速では、それこそ瞬く間に終点へと着いてしまっても何ら不思議は無いだろう。

さて。そして常識的に考えるのであれば、通常、入口に扉が有る形の渡り廊下であれば、出口にも同様の物が設置されるのが常であったりする。王宮の渡り廊下もその例には全く漏れないワケであり、つまり、簡潔かつ端的に述べるとするのならば――。

「ごぶぅぅうううッ！？」

――瞬間、真也の視界に星が飛んだ。

荘厳な大扉に正面から突っ込み、扉そのものを大破させながら、終着点であった筈の王宮のホールへと突っ込む。無論、絶対に下車不可能な速度で。

否。ソレはまだ良かった。

この問題に比べるのであれば、そんな、下りられないなどという事実は、取るに足らない些末事であるとすらも言えるだろう。

そう。都合三度目の正面衝突によって発生した、その問題。

ソレは――。

「ま、ままま、前が見えないぃぃいいいいい！！？？」

「は、はぁ！？　こんな時にナニふざけ――って、う、ウソ！！あ、あんた！！　ふ、覆面！！　逆向いてるじゃない！！！！は、早く治しなさ――きゃぁあああ！？　ま、前！！　前！！ユミル様にぶつかるから！！！！　曲がって！！　曲がって！！」

「りょ、了解！！　任せ――」

「――って！？　ば、ばばば、ばかぁぁあああああ！！！！そ、そっちはバルコ――」

少女がナニかを言おうとした、正にその時である。

ガッシャーン、と、ナニかが割れる派手な音と共に、車体から凄まじい衝撃が伝わってきた。

首がもげそうなくらい、ガクン、と揺れたかと思うと、次の瞬間には強いGと突き上げるような浮遊感に襲われる。

真也の記憶にある限り、一番近いのは、ジェットコースターで急

降下した時のあの瞬間だろうか。
あの強烈な圧迫感が、僅か一瞬に圧縮されて全身を貫いた様な感覚である。

「――――？」

ふと、その時。真也はその違和感に気が付いた。
――風が、冷たい。
先ほどまで感じていた、室内特有の温もりが突如として消え失せて、冷たい冷気が歪んだヘルメットの隙間から吹き込む。
同時に、どんなにハンドルを捻っても方向が変わっている気がしない、という怪奇を経験する事になった。

「……」

ハンドルを操作する必要が無くなった為、真也は、ゆっくりと、ヘルメットを元の位置に戻してみた。

――空が、広がっていた。

まるで、現代社会に荒みきった心が洗われる様な、或いは小さな悩み事など全てバカバカしく思えてしまう様な、そんな、どこまで

もどこまでも続く、青空。
雲一つ無いその冬晴れの景色は、彼の心に、ここのところ忙しさにかまけて忘れかけていた幼き日の憧憬を思い出させた。

彼がまだ、同年代の子供たちと同じ学び舎に居た頃。
音楽の時間に習った、とある青年の逸話が脳裏を過る。

それは鳥の翼を蝋で模し、大空へと羽ばたいた、勇気ある愚者の物語である。
丘から飛び立ち、一時は雲よりも遥か高くまで舞い上がったと言われるその英雄。
飛び続けた結果、やがて太陽に近づきすぎたが為にその翼を溶かされ、地に落ちてその一生を終えたと言われる、とある愚者のお話。

勿論、現実にはそんな事実は有り得まい。
人間の大胸筋では、どんなに鍛えたって鳥と同じ様に飛行する事は出来ないとか、蝋を翼にするのはどう考えても重すぎるだろうとか、そもそも、富士山の万年雪を見れば明らかなように、気温とは普通地表から遠ざかる程に寧ろ下がる物なのだとか、この逸話にはあまりにも突っ込みどころが多すぎると、真也は幼心に思ったものである。
このお話は、きっと、大空に憧れたどこかの夢想家が生み出した幻想に過ぎないのだろう、と。

当時はバカバカしいと流したものではあるが――。
――ああ。でも、この光景を見ていると、その気持ちも分からなくはない。
こんな、ちっぽけな人間なんかではどうする事も出来ない程に大きな物を見てしまうと、どうしてもソレに挑んでみたい、と思ってしまうのは、ある意味では人間の習性とも言えるのかもしれない。

きっと人は、それをロマンと呼ぶのだろう。

例え破滅が約束されていたとしても、例え、挑んだ結果が翼をもがれての死という、惨たらしい物であったとしても、それでも挑まずにはいられないのだ。

翼を持たない人類にとって、大空への憧れという物は、それほどまでに抗いがたい物なのだろう。きっと、あの愚かなる英雄を生み出した夢想家は、後世の人間にそういう事を伝えたかったのではあるまいか。

何らかの因果によって空に挑まなくてはならなくなったとしても、決して臆してはならない。何故ならば、結果がどうなったとしても、その挑戦自体は尊い物に違いないのだから、と。

真也は、心洗われる様な大空を眺めながら、何となくそんな事を考えていた。

……そうでも考えないと、この状況で正気なんか保てなかったからだ。

翼を持たずに大空に挑んだ生物の、宿命。

かの英雄と同様の、逆らい難い、その運命。

ソレは――。

「……」

少女も、察したのだろう。

背後から息を呑む音を聞いた。

真也も、それに合わせる様に、フッと目を閉じる。

二人は、大きく、大きく息を吸い込んだ。

「「あああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！？？？？？？？？？」」

――以上の実験結果より、万有引力の法則はこの時空に於いても成り立つと考えられる。
証明終了。（Q.E.D）

――――――

「……ったぁ。し、シン……？
あんた、生きてる……？」

「痛～っ！！　あ、アル？　無事か……？
いや、オレが生きてるんだから無事だよな……。
とにかくありがとう。おかげで助かった」

王宮5階のバルコニーから落下した二人は、フラフラになりながらもなんとか身体を起した。強烈な浮遊感の余韻が残っていて、未だに上手く足腰が立たない。取りあえずお互いの無事を深く深く喜びながら、彼らは散らばる瓦礫に手を着いて立ち上がろうと努力した。

――瓦礫の山。

どうやら、ここは一昨日の一件で崩壊した王宮隣の時計塔跡らしい。

崩壊直後に比べれば少々量を減じたとはいえ、いまだに１０メートルを超える程の高さの瓦礫が、天を突く様にして積み上げられている。

どうやら彼らは、丁度その中腹辺りに落下したらしかった。

きっと瓦礫の高さ分、落下する距離が少なくなった事が、彼らの生存に一役買ってくれたのだろう。

真也は、自らの悪運に少なからず感謝した。

もっとも、当然ながらそれだけでは王宮の５階から落下してほぼ無傷なんていう状態にはなり得ない。彼が本当に感謝すべきなのは、自身の悪運などでは無く寧ろこの少女に対してであった。

あの、確実に助からない高さから落下を始めた正にあの瞬間。極限状態にありながらも、少女は咄嗟に飛行魔術と軽量化をバイクに重ね掛けしたのである。そんな条件反射の術式では、流石にこの大型バイクを飛ばすまでは至らなかった様だが……。

それでも、おかげで落下の衝撃が大幅に軽減されてくれたらしい。

真也は、彼女の魔導師としての卓越した技能に深く感心すると同時に、生存の安堵と深い感謝を覚えていた。

――因みに、真也渾身の発明品であった件の大型バイクは、前輪から瓦礫の山に突っ込んだ形で停止している。どうやら、バルコニーを突き破って落下するという一連の衝撃のどこかで、再びハンドルが歪んでアクセルのロックが外れてくれたらしい。今では、あれほど暴れまわっていたのがウソだったかの様に大人しくなってくれていた。

「……」

……因みにその隣には、文部大臣・アスガルドが、頭から瓦礫の山に突っ込んだ形で停止している。どうやら、撥ね飛ばされて引きずられるという一連の動作のどこかで、何らかのリミッターが外れてしまったらしい。今では、あれほど暴れまわっていたのがウソだったかの様に大人しくなってくれていた。

殆ど逆立ちに近い状態で、ビーン、なんていう効果音が似合いそうな姿勢で固まっているのだが……。

腹筋とか背筋とか、疲れないのだろうか。

真也は、ちょっとつついてみたい様な衝動に駆られたりして、やっぱり止めた。

何故なら、状況は既に詰んでしまっているからである。

「――――ッ！！」

少女が、息を呑んだのが分かった。

つられて真也も息を呑みながら、自らを取り囲むその軍勢へと視線を向けた。

前列を守るは、銀の国が誇る剣と盾。

王宮騎士団が隊列を整えながら、瓦礫の山を完全に取り囲んでいる。
彼らの身を包み込む白銀の鎧が、蒼い陽光を反射して、涼やかにキラリと光っていた。

その背後に控えるは、銀の国が誇る知恵と杖。
王宮魔術団が、漆黒の衣を靡かせながら、騎士団の後ろから彼らの首を狙っている。
霊道に飽和された魔力が空気中に漏れ出し、キラキラとした燐光を放っていた。

その彼らの前に陣取った、恰幅のいい男。
小太りの軍務大臣が、騎士団の面々を率いながら、ライダースーツに身を包んだ二人をギロギロと睨みつけていた。

少女は、ヘルメットごと頭を抱えながら、真也に小声で耳打ちした。

「……ちょっと、シン。どうするのよコレ。
流石にあたしでも、コレ全部とは戦えないよ？」

「……大丈夫。大丈夫だ」

対して、真也はあくまでも冷静にそう答えた。

「オレに考えがある」

不意に、不敵な笑みを作った真也。
彼は、無言のまま瓦礫に埋まったバイクの隣に歩み寄ったかと思うと、ピンと伸びているアスガルドを瓦礫の山から引っ張り出した。
埃塗れになってしまっているその頭部をパタパタと払い、ライダースーツの袖でキュッキュと磨いてから、ゆっくりと抱え起して自らを取り囲む軍勢へと目線をやる。
次に、アスガルドの首筋に右腕を巻きつけて彼の頭部を抱え込むと、左手をそのピカピカと光る頭部に翳し、威勢よく声を張り上げた。

「動くなぁッ！！
テメェら！！　一歩でも動きやがったらこのハゲの毛はねぇぞ！！」

「「「「……」」」」

いつに無くドスを効かせた、涼やかな声。
敵軍は完全にその動きを停止させていた。
真也のその一言によって、空気が完全に凍りついたのがハッキリと分かる。
……ただそれは、要求を呑んだというよりも、どこか失笑感の否めない様な、何となくいやーな沈黙であった。

彼らの反応が理解出来ず、何となく首を傾げてみた真也。
やがて、まるで民意を代表するかの様に、小太りの軍務大臣は引き攣った顔でその口を開いた。

「……なにをして、おられるのですかな？
特務教諭殿」

「……へ？」

「ちょ、ちょっと！！　シン！！
あ、あんた、覆面……」

少女の声に、ふと、自らの頬に手をやる真也。
ペチ、ペチ、と触ってみると、確かに、というか間違いなく、柔らかい頬の感触がある。
……どうやら、扉にぶつかった拍子にヘルメットが割れていたらしい。
彼の顔は、ソレはもう、誰が見ても明らかなくらい丸出しになっていた。

ついでに言うと、少女の覆面にも少々問題が起きていた。
どこかにぶつけたのか、或いは引っ掻けたのかは分からない。
ともかく、彼女のソレは後頭部に小さな穴が幾つか空いており、そこからトレードマークの真紅の髪が、ピョコン、と跳ねていた。
……ハッキリ言ってこの少女の場合、体型と髪だけで人物像が丸わかりである。

「――――っ！？」

ゾクリ、とした悪寒が背筋を走り抜け、真也はその身を震わせた。
否、悪寒、なんていう生易しい物では無い。
コレは、そう。この世界に来てからすっかり馴染みの深い物となった、紛れも無い死の恐怖である。
それも、生半可なレベルでは無い。
まるであの大男の殺気が児戯に思える程の、否、到底人間が発し得るなどとは思えない様な、正に妖魔のみが放つ程の強烈な威圧感が、彼の右腕の間から飛んできている。

真也は、ゆっくりと、その首を右に向けた。

――バケモノが居た。

視線だけで、人をショック死させかねない程の呪眼。
完全に見開かれたその眼球が、血走った血管よって完全なる赤色へと変貌している。
あまりの怒り故に、ちょっとおかしくなっている表情筋。
ソレによって吊り上った口元から、歯列が、歯茎ごと完全に見えていた。
……何故だろう。なんか、どんなに探しても牙しか見当たらない気がする。

青筋は最早頭部全体に走っており、まるで爬虫類の鱗みたいな紋様を形成していた。
何カ所か、ソレがプッツンと切れて、中身が噴水みたいにピューッと噴き出ている。

そんな、子供が見たら失禁して且つ失神した挙句、成人するまで悪夢に魘される程の魔貌を見せつけながら、アスガルドは、なんと笑っていた。
絶対に、どう考えても、笑える様な作りの顔じゃ無くなってる筈なのに、どうやったのか、彼はニコリと笑って見せていたのだ。
人間、あまりにも感情が強すぎると笑みしか出ないのだと、彼はこの時思い出した。
無論、目は完全に見開かれたままである。
青筋がさらに隆起して、ピューッと、赤いのが真也の頬に掛った。
赤い筈のソレが、何故か一瞬、真也には得体の知れない深緑色に見えてならなかった。
アスガルドは、まだ、ニコリと笑ったまま睨んでいる。

「「あは……」」

二人の若者は、何となく顔を見合わせた。
見合わせてから、つられる様に、どちらとも無く、ニッコリと微笑んでいた。

「「あはは……あはははは……ははは……は……」」

――機械式騎馬の悪夢。

倒壊した建物、実に２３棟。

３桁近い負傷者を出したこの事件は、ここ１００年の間で最も被害の大きかった“襲撃事件”として魔導研究所の歴史館に記録される事となった。

被害総額は、時計塔再建費の実に3分の1にまで上り、王都の経済に与えた打撃も深刻だったと書物には記されている。

……死者が出なかったという奇跡が、唯一の救いだったと言えるだろう。

〜〜〈勧告〉〜〜

魔導研究所所長　アルテミア・クラリス

・２５万フェオの罰金（一般的な国民年収の１０年分）
・大幅な減給（給料の９５パーセントを没収）
・被害者全員に対する誠意を込めた謝罪

特務教諭　アサヒ　シンヤ

・３０万フェオの罰金（利息、年１５％で王宮からの借金）
・更に１０年間に渡る給料の全額没収
・被害を受けた騎士、魔導師に対する１００枚を超える謝罪文

・文部大臣アスガルドに対する、更に別途の謝罪文１００枚

――両名・自宅謹慎一週間を命ずる。

（銀の国審問会）

33．　異邦の国王が自らの手によって行った異世界に於いては必ずと言って良い程に有名な儀式

その国は、太陽に一番近い場所に存在していた。

崇高なる選民共和国・天の国（ソルヘイム）。

貴族の中の貴族と称される“三院議会”なる円卓によって政治が行われているこの国は、同時に国土の殆どを数千メートル級の山々が支配する“空中国家”としてもその名を世界に知られている。

無論、神の領域たる天空に程近きその場所は、本来であれば人の生活には適し得ない。

高度の上昇に伴う酸素濃度と気温の低下。

気圧の減少に伴って火は燃えず、湯は煮えず、日常生活に於いても高山病が多発する。

高所から低所に流れるという摂理を持つ“水”という物は、その性格上これほどの高地を許容し、留まる事などしないだろう。

生育が許されるのは、僅かな高山植物とソレを糧とする乏しい生態系のみ。

それが、本来その国が保つべき常識である。

――だが。

それはあくまでも、我々の世界の常識をこの世界に当て嵌めた場合にのみ成り立つ公式に過ぎない。

魔導がありふれ、魔獣が生息し、異界の魔人達が跋扈するこの時空に於いては、高度など大して環境の過酷さを示す指標になりはしない様だった。

魔力と呼ばれる未知の力が星から溢れ、それの生化学的な利用によって地球のソレに比してあまりにも多種多様な生命体が育くまれ

たこの惑星に於いては、我々の知る常識など狭量だと嘲笑せんばかりの理が、ごく当たり前の様に罷り通る。

地球の植物学者がこの国に訪れる事があるとすれば、その人物は間違いなく正気を失い、自らの無学を恥じて涙を流すことだろう。

そしてその涙はやがて感涙へと変わり、自らをこの場に巡り合わせた奇跡に生涯を通じて感謝し続けるに違いない。

天の国首都・エラルトプラーノ。すり鉢状になったその地形の中心に聳えるのは、雲よりも高き一本の大樹である。樹齢数万年とも、或いはそれ以上とも伝えられるその巨木は、森林限界など知らぬと言わんばかりに高く、太陽を突き刺すかの様に聳え立ち、その神々しいまでの偉容は、気象条件次第では遥か隣国からでも見えると言われている。

高さ数キロメートルにまで及ぶこの植物界の王者は、その巨体を支える為に、同じく常識外の深さにまで根を伸ばし、下界を巡る地下水源を啜る。王者の身に血液の如く流れたその水は、街が丸々入りそうな程に力強い幹の中を駆けのぼり、神の領域間際に在りしこの空中都市へと豊かな水源を供給する。更にそれらは天を覆う様に広がる、小さな屋敷程もある常緑の葉へと供給され、光合成と魔力合成の併用によってその巨体を維持するに足るだけの糖を生み出し続けている。

結果として生じる大量の酸素は、この超高層に在りながらも、この国が世界で最も清涼な空気を纏っているという矛盾を実現していた。

――神々が生み出したとしか思えぬ程に、あまりにも偉大に過ぎ

るその生命の樹。
故に人々はソレを神樹（レーラズ）と崇め、この崇高なる国家の象徴として奉っていた。

すり鉢状の為中心に行くほど高度が下がり、神樹の齎す利潤をより享受出来る独特の地形。
ならばこの国に根強い選民思想に則り、民の立地は自然と決まっていた。
簡単に言えば、“高貴な者”ほど街の中心部に近い大樹の傍に住み、“下賤な者”ほどすり鉢の端に程近い場所で酸素不足と水不足に喘ぐという必然が成り立つのである。
神の名を持つ樹そのものが、人の在り方に区別を齎している。
その皮肉は、まるでこの国の常識をそのまま体現しているかの様であった。

“下賤な場所”の中でも、特にすり鉢の淵の方に位置するとある丘。
好んで住む者も居ないであろうその最果ての地に、この日はたった独りで歩む少女の姿があった。
歳の頃は銀の国（プラティヘイム）の赤髪の魔導師と同じか、或いは少し上といったところだろうか。
肩より少し短い緑髪を、薄くなってきた神樹からの風に靡かせつつ、彼女は息を切らしながらも小高い丘を登って行く。

草本も殆ど生育出来ない砂利道を踏みしめる彼女の靴は、純粋なクリスタルの様に透き通っている。“ガラスの靴”と名付けられたその履物は、ツルツルとして硬質な質感の割には柔軟性に富み、履きやすくも美しいという点で上流階級の淑女たちの間では人気を博

していた。材質が少々特殊な為に需要に供給が間に合わず、購入に際しては屋敷が5軒は建つ程の法外な額が要求される事もあり、上流階級の中でも本当に一部の人間しか手に出来ない逸品である。

彼女の身を包む薄紅のドレスも、仕立てからして相当に高価な物である事が見て取れた。ボタンというボタンには七色に輝く“彩色金剛石（プリズム・ダイヤモンド）”が嵌め込まれ、その全てを外して掻き集めたとしたら、おそらくはそれだけで小さな城が建つ程の額になることだろう。少女の緑髪を束ねるハイビスカスを模した髪飾りは、彼女自身の片手と比してもなお大きく、総重量1ｋｇ近いルビーが惜しげも無く括り付けられている。

――社交会に出席していた令嬢が、何らかの気まぐれでも起したのだろうか。

――もしくは、宮廷の庭でも散策している内に帰り道を忘れてしまったのかもしれない。

彼女が纏う装飾の数々は、見る者にそんなあり得ない幻想を抱かせてしまう程に、この最果ての地にはあまりにも不似合いに過ぎた。

これ程高貴なお召物を纏うご令嬢がこのような僻地を単身で歩くなどと、この国の人間達の常識からすれば、自らの目と正気を疑うどころでは済まない程の異常である。

もっとも少女の挙動には、大貴族の令嬢の物にしては少々の違和感があったが……。

砂利を蹴飛ばし、羽の様な身軽さで丘を登って行く少女。しかしその軽快な歩調は宮廷貴族の洗練された所作からは程遠く、寧ろ酒場で料理を運ぶ給仕のソレを連想させた。足運びに慎ましさを纏わせる、などという器用な概念は彼女の両脚には存在せず、地面に着きそうな程に長いスカートの裾は、小石と少女の靴の攻撃によって既にボロボロになりかけている。どうやら髪に結われたルビーもお気に召さないらしく、5歩踏み出すごとに大粒の髪飾りに手をやり、邪魔者を扱う様にグリグリと弄っている。

その、まるで庶民の果実飲料を神酒（ネクタル）の瓶に入れて包装したかの様なアンバランスさは、見物人が居ればコレは夢か幻かと自我崩壊を起こしかねない程におかしなモノに思えただろう。

だが、ソレも無理からぬ事だったのかもしれない。

何しろその彼女自身ですらも、未だにコレが悪い夢か何かだとしか思えなかったのである。

……いや、まあ。悪夢だなんて言ってはバチが当たる程恵まれ過ぎた状況だという事は、彼女自身が一番よく分かってはいるのだが。

まるで童話のお姫様にでもなったかの様な、キラキラのドレス。

決して美人だとは思えない自分でも、ちょっとは可愛く見せてくれていると信じたい、でも全然似合っていないと分かってしまうソレに視線を落としながら、少女はバツが悪そうな溜息を吐いた。

頭の中に不安とも罪悪感ともつかない感情が飽和して、圧し潰されそうになる。

「……」

――正直。馴れないドレスは、肌に擦れて痛い。

胸元の青いリボンがぎゅうぎゅうに縛ってあるせいで、肺には空気が半分くらいしか入らないし、こんな格好でこんな場所に居たら、きっと自分じゃなければ水揚げされたお魚さんみたいになっているんじゃないか、なんて少女は思ってしまった。

こんなに長くて、重いスカートなんか履いた事も無いし、だから歩き方が分からなくて、小石を踏む度に何度も何度も転びそうになってしまうのだ。

クリスタルの様に透き通った履物はとても綺麗で、履かせて貰えるって聞いた時には舞い上がるくらいに嬉しかったけど、実際に履いてみると、ツルツル滑って歩きにくいだけだった。

……あと、なんか。足が蒸れてちょっと痒い。

靴を地面にトントンと叩き、足に適度な刺激を与えながら、少女はその沈鬱な表情を更に深める。

――ケーキにでもなったみたいだ、なんて少女は思う。

キラキラの飾りを沢山刺されて、赤くて重たい果物（ルビー）を乗せられて、箱詰めにされてギュウギュウのリボンで縛られている。

あの、綺麗でおいしそうなケーキ達がこんなに窮屈な思いをしていたなんて、少女は想像した事もなかった。

……自分の格好なんか、どうせ鏡でしか見れないし。

……どうせ、全然似合ってなんかないし。

少女の気がどんどん滅入っていく。

――もしも、さっきの社交会で食べたガトーショコラが喋れたら、

口に入る前に恨み言の一つくらいは言われたのかもしれない。
せめてリボンくらいは、もうちょっと緩めてくれないかな、とか。
君も仲間だね。大変だね、とか。
君、綺麗に包装されてるクセに、かわいそうなくらい安物だね、とか。

細やかな自虐に浸りながら、少女は薄い唇をキュッと結んだ。
比較的童顔と褒められる（遠まわしに子供っぽくて色気が無いとバカにされている）顔立ちを、不機嫌そうに膨らませる。

（――分かってるよ。
分かってるよ!!　どうせ、ボクは安物だよ!!
こんな服着てるのとか、絶対なんか間違ってる、ケーキで言ったら売れ残って固くなったスポンジだよ!!
ううん、違うかな。宮廷の皆に比べたら、どっちかっていうと、“失敗して焦げちゃって、お店に出されないで捨てられちゃう炭”、とかかも。
……せめて、ネコとか、くらいは、食べてくれないかな。
……あのガトーショコラも、ボクみたいな炭に食べられるのは、イヤだったの、かな。
……泣きたくなるくらい美味しかったけど）

「……」

考えれば考える程、少女はどんどん鬱になってしまった。

――どうして自分みたいな売れ残りの炭が、我慢してまで、こんな丁寧な包装なんかされてなきゃいけないんだろう？

――なんで、どうせ全然似合ってないし、可愛くも無いのに、こんな苦しい思いをし続けなきゃいけないんだろう？

そう考えると、なんだか、こんな格好で独り突っ立っている自分が、酷く虚しい事をしている様に思えてならなかったのである。

キョロキョロと、辺りを見回す。

酸素が薄くて、寒過ぎるからだろうか。

街の淵に住んでいる筈の貧民層の人たちも、どうやらこの丘には寄り付かないようだった。

お目付け役といって纏わりついてくる執事達も、社交会を警備していた衛兵達も、あの、何故か少女をイビリ倒して悦に入っているエウロパ炎民議長も、今は、誰も居ない。

――“あの人”も、多分。

自分があの窮屈な社交会がイヤになって、つい抜け出してしまった事には、まだ気づいていない。

誰も見ていない事をハッキリと確かめた少女は、2度3度と深呼吸をして気合を入れたかと思うと、胸元の青いリボンへと手を伸ばした。

端を握って引っ張ると、スルリ、とそれが緩んで、呼吸が一気に楽になる。

ついでに歩きにくいスカートも膝上までたくし上げて、重たいルビーの髪飾りでそれを留めた。

貴族の人たちに見られたら、多分お説教どころじゃ済まない様な格好だけど……、今の少女には新鮮な空気の齎す爽快感の方が遥かに意味のある物だったのである。

そもそも先週まで、いつももっと、ずっとスゴイ格好で過ごしていたんだし……。
寧ろ、そっちの方が自分にとっての“当たり前”だったんだし……。

「……」

いつもの格好。
ソレを思い出した時、彼女は自分の手が無意識に首元を撫でていた事に気が付いた。
――落ち着かない。
“そこにあるべき物”が無くなったという違和感にはまだ慣れず、それどころか、少女にはこの感覚に慣れる日が来ることなんか想像も出来なかった。
まるで“ソレ”の代わりになっているみたいに、そこだけ変色して、硬くなった皮膚。
周りの肌に比べて、酷く感覚の鈍いその部分から伝わる信号が、解放感と同時にそれを上回る不安感を彼女に齎している。
そんな事を感じてしまう、自分に染み付いたその根性に、少女は何とも言えない複雑な気分になった。

緩められたリボンのせいで、ドレスの合間から覗く胸元。
瑞々しい筈の少女の素肌には、生々しい痣が幾つも見受けられた。

見物人の居ない丘を、少女は更に登って行く。
酸素濃度は、既に高山病を発症する人間が居てもおかしくはない

レベルにまで低下していた。
だが、幸か不幸か。この少女にとって“空気”が問題になる事なんかまず有り得なかった。少女はまるで平地を跳ねる様な軽快さで、未知の土地を探検する子供の様な足取りで、人気の無い丘を上へ上へと登って行く。
空気が薄い筈のその地にあって、少女のショートの緑髪は、しかし踊る様に風に靡き続けていた。
少女は街から離れ、誰も居ないその丘を登って行く。

――考えてみれば、少女はその時点で気付くべきだったのである。
いくら酸素が薄いからと言っても、高所で過ごす事を当たり前としてきた天の国の貧民層にとっては、この程度の高度など実は大した苦にもなりはしないのだ。
この丘の先には小川が流れており、美しい高山植物が花を咲かせる憩いの場があるのだから、本来ならば、誰か一人くらいは人が居てもおかしくは無いのである。
万物が死に絶えた様なこの静寂を、彼女はおかしいと思わなくてはならなかったのだ。

……いや。彼女にそれを要求するのは酷だっただろうか。
外の世界というモノ知らずに育った彼女は、知らなかったのだ。
この国に於いて一般常識を持ち合わせている国民は、この時期、絶対にこの丘にだけは近寄らないという事を――。

“死”が待っていた。

丘を登り切った少女の瞳に映ったのは、どこまでも黒い、悍ましいまでに黒い房。

あまりにも黒く、大き過ぎた為に、少女はソレが“鱗”だと気付くのに暫しの時間を費やさなければならなかった。

茫然としていた時間は、果たして5秒か、或いは10秒だったか。

一つ、言えるのは。その僅かな時間の内に、彼女の運命は既に決してしまったという事である。

“死”が彼女の存在に気づき、その鎌首を擡げた。

まるで深い、底の見えない湖底を見る様な、死人を思わせる黒い眼（まなこ）。

無数に枝分かれした角はまるで合体した昆虫の脚の様で、触れただけで切り裂かれそうな程に刺々しいソレが、この世ならざる禍々しさを感じさせている。

山ほどもあり、しかし大蛇の様にうねるその体躯の背には、退化して形を失ったボロボロの翼がはためいていた。

――黒龍。

この世界の生態系の頂点に位置し、相対する者に絶対の死を齎す“災害”の名である。

最強の魔獣たる龍種の中でも特に力強く、そして攻撃性の高いこの種は、同時に世界を最も広く旅する“渡り龍”としてもその名を知られている。身の丈の数倍はあろうかという巨大な翼で天を駆ける彼らは、数十年周期で世界各地へと空を飛び、そこで他に類を見ない大きさにまで成長する。そして寿命が尽きて、空を飛べなくな

る間際。彼らは出生地たる天の国へと集い、そこで次代を残す為に繁殖してその生涯を終えるのである。

重要な点は、たった一つ。

地球の多くの生物種がそうである様に、この世界の龍種に於いても、繁殖期にはその攻撃性が酷く高まるという事である。そして中でも、この黒龍という種のソレは、他種に比してそれこそ異常だとすらも言えた。

彼らの雌には、卵を温めている時に近づく生き物は、何であろうが見境なく食い殺すという習性がある。雄にこの習性があるのか否かを、検証出来た人間は未だ居ない。雌が卵を温めている時期であれば、その伴侶となった雄の黒龍は、既に雌に食われた後だからである。

黒龍の母親はこの高層の国に独り座して、近寄る生き物を食い尽くして栄養を蓄えつつ、寿命が尽きるまで卵を温め続けるのだ。やがて、自分の死後に生まれてくる子供たちが、自分の死骸を糧として成長し、大空へと羽ばたいていく様にと――。

無論。少女にはそんな、黒龍の生態など知る由も無かったが――。

しかしそれでも、この存在の前に立つというその意味は、理性では無く本能が理解してしまった。

相対する存在を見境なく食い尽くす、捕食者の双眸。

少女は呼吸すらも忘れ、身じろぎ一つ出来ぬままに、目前に立ちふさがった“死”に魅入られている。

咆哮が腹腔に響いた。

生き物が、聞いただけで血を凍りつかせて絶命してしまう程の、地の底から響く様な異形の鳴き声。空気の薄いこの丘にあって、尚もその音波は少女の素肌をビリビリと震わせた。傍聴人に死を約束

するソレは、宛ら地獄からの怨嗟である。
黒龍はその、下手なナイフよりも遥かに鋭利な歯列を覗かせながら、少女の身体を噛み砕こうと鎌首にためを作った。爛々と燃える様に光る死者の瞳が、全身の骨をバリバリと噛み砕かれ、内臓をズルリと引きずり出されるという、少女の無残な最期を予言する。

自らの運命を悟ったのだろうか。
少女はただ、静かにその目を閉じながら、祈る様に胸元で手を組んでいた。

「待ってくれないかな？」

――時間が凍りついた。

突如として最果ての丘に響き渡った、静かな声。
その、まるで友人に語りかけるかの様な、何気ない一言だけで、黒龍は振り出そうとした首を止めていた。

あり得ない。

少しでも常識を持ち合わせている人間がこの光景を見たとしたら、間違いなくそう形容して正気を疑っただろう。事実、その時が止まったかの様な静寂は、本来あり得てはならない出来事であった。

何故ならば前提として、黒龍は人語を解しない。
然るべき技術によって調教された翼竜ならば話は別だが、本能だけで動くこの獣は、そもそも人の言葉を聞いて行動を変えるなどという“機能”を持ち合わせてはいないのだ。
獣が、動きを止める理由。
そんな物は思考や言語などでは勿論無く、もっと生物としての根本にある、本能的なナニかでなくてはならないだろう。

――だからこそ、有り得ないのである。

繁殖期であるこの時期、黒龍が視界に入った生き物を食い殺すのは習性だ。
それは余分な思考など入る余地の一切無い、遺伝子に組み込まれた絶対の本能としてそこにある。
本能の止め得る要因があるとするのならば、ソレは、黒龍としての本能より優先して組み込まれたモノ。つまりは、黒龍という種が生まれる以前に組み込まれた、生物としての原初の機能を置いて他には無いだろう。
ならばソレを、今のたった一言が呼び起こしたとでもいうのだろうか？
人語にて発せられた、たった一言の言葉が、黒龍として獲得した習性に勝る程の本能。
――つまりは、被食者としての死の恐怖を。

最も困惑が大きかったのは、他ならぬ龍自身であった。
侵すモノなど有り得ない、生態系の王者たる自分が、矮小なる人間が発する声一言によって動きを止めてしまったという矛盾。黒龍自身、何故自分が攻撃を止めたのかを理解出来てはいなかったのだ。
黒い暴君は、そのあり得てはならない存在を映すべく、死者の瞳を丘を悠然と登って来る気配へと向けた。

「驚かせてしまったね。
でも、彼女にも悪気は無かったんだ。
どうか、それだけは分かってほしい」

深淵の瞳が、その姿を捉えた。
黒い瞳に映った、一つの人影。
声の先にあったソレは、確かに人の形をしていた。
否。確かに人型ではあるが――、
アレは、本当に“人”なのだろうか？
人と断言するのが戸惑われる程に、その人物は“違っていた”。
落ち着き払った気配が年齢以上に大人びた気配を醸し出す、一人の青年。
だが目が眩まずにはいられない程、その人物の容姿は異質だった。

青年は、美しかった。
否。美しいなどという陳腐な表現では、彼の貌を無為に貶める役目しか果たさないだろう。
６国に存在し得る全ての言葉を知ったと伝え聞く、創世の大魔導・ユミルですらも、彼の容姿を形容する為の言葉など持ち合わせてはいなかったに違いない。
世界中に存在する賛辞を全て受け切り、しかしソレをしてなお表し切れぬ程に圧倒的な雰囲気を、その青年は確かに纏っている。
光を纏った様な黄金色の髪が、吹き抜ける風と戯れる様に、しなやかに揺れる。
その淡い碧色の瞳を向けられた者は、それこそ老若男女の差異無

く意識を奪われ、神々しいまでの美貌に陶然と魅入る以外の選択肢など持ち得まい。

スラリと伸びる長身の体躯が、異国風の緑色の衣に抱かれている。首元に巻かれた赤いスカーフが、彼自身の芸術品の様な容貌と相俟って鮮烈な印象を強め、胸に煌めく翡翠のブローチには、彼がこの国の頂点に位置する者である事を示す“王華の紋”が模られていた。

「その子を傷つけられると困るんだ。直ぐに立ち去るから、今日のところは見逃してはくれないかな？」

三度掛けられる、涼やかな声。

しかしその優しげな音色を聞きながらも、黒龍は確かに感じてしまっていた。

この青年は。自分よりも、生物として遥か上位に位置する存在であると――。

――何をバカな。

黒龍は一瞬だけ自身を満たしたその畏れを、次瞬には理性の声で塗り潰す。

そう。最強の魔獣種の名を冠する龍という種族は、この世界の生態系の頂点に位置する存在である。そして、その中でも成長しきった黒龍とは、最早生物では無く“災害”だ。人間に害を成し、しか

し矮小なる人という種族には御する事など叶わない、圧倒的な暴力。災害とは、どうする事も出来ないからこそ災害なのである。黒龍とは人にとっては天敵に当たる存在であり、人が黒龍を畏れようとも、その逆は天命に従ってあり得ないのだ。

そう。人間などそれこそ数百人で掛ってこようとも、黒龍はブレスの一息で蹴散らすことだろう。人間の扱う魔術も、剣も、年輪を重ねて十分に育った黒龍の鱗を貫くことなど出来はしない。幼生期の子供ならば別として、既に飛べぬ程にその身体を育てた黒龍を殺す方法など、この世界の理にはある筈が無いのである。

ならばこそ。あの青年が何を口走ったところで、黒龍には恐れる理由などありはしないのだ。

黒い巨龍は何度も自らを制止しようとした本能の声を塗りつぶし、遺伝子に組み込まれた本能（アイデンティティー）に縋ろうと、再びその歯列を剥いて少女の肌へと食い掛かった。

「そうか……」

悼む様な、音色が聞こえた。

一瞬、黒龍の眼に映ったその表情は、翳り。

心の底から対象を憐れむ様な、本心からの悲しみに満ちた色を、その青年の瞳は湛えている。

それを無視して本能の動作を続けようと動く黒龍に向けて、彼は、その橙赤色の図形が煌めく左手を翳し――。

「残念だよ」

そして――。

黒龍の視界は、地に堕ちた。

ナニかが弾ける音が聞こえたと思ったその瞬間には、既に全てが終わっていた。

ズルリ、という、粘着質な音と共に、龍の視界は傾きながら滑り落ちていく。

頭部は空回りする様に回転し、鮮血を飛沫の如く飛び散らせた。

驚愕に見開かれた龍の右目に、弾け飛んだ臓物の欠片が突き刺さる。

激痛に呻く自由など、既に発声器官から切り離された龍の頭部には無い。

重力に従いボトリと落ち、グチャリと脳漿をブチマケル以外の行為は、既にこの哀れな肉塊には許されていなかった。

幸いなのは、ソレを理解するだけの時間すらも、身の程を弁えなかったこの被食者には与えられなかった事か――。

頭蓋を地に砕かれ、意識が途切れるその刹那。

黒龍は挽肉になった自らの巨体と、綺麗な、赤い、アカイ華を見た――。

――――――

「は、はふぅ……」

そして少女は、ぺたりと地面にへたり込んだ。
空気の抜けた風船の様な声を出と共に、糸の切れた人形の如く、その臀部を丘の地面へと接触させる。
どうやら、あまりの事態に腰が抜けてしまったらしい。
いや、まあ。先天魔術（ギフト）の格だけで言えば、彼女とて他国の召喚主にも引けを取らない程の物を持ってはいるのだが……。
あんな大きな龍に襲われるのは、やっぱり理屈じゃなくて怖いのだ。
それは、もう。どうしようも無いくらいに、怖い物は怖いのである。
安堵の溜息を零しながら、少女は大きく空を仰いでいた。

「大丈夫かい？　ウラノス」

いつの間にか歩み寄っていた“彼”が、声を掛けてくれた。
仰いだ天に浮かぶ様に、黄金色の髪がサラリと靡いている。
何度見ても馴れないくらいに、あまりにも綺麗すぎる“彼”の容姿。

少女は、まるで夢でも見ているかの様に、その姿にポーッと魅入ったまま思考を止めていた。

「……」

――1分、経っただろうか。
少女の放心は、中々解けてはくれなかった。
否、彼が顔を覗き込んでくるせいで、余計に復活が遅れてしまっていたのだが……、
彼がその手を差し伸べてくれていたのを見つけて、慌てて少女はその手を取ろうとした。

そして、不意に。
少女は彼の顔に浮かんだ悲しみに気づく。

気になって彼の視線を追うと、そこには少女自身の右手があった。
差し伸べられた彼の手を取ろうと伸ばした、彼女の手。
龍に睨まれた時の恐怖が抜けきっていなかったのだろう。
皸(あかぎれ)が痛々しいその手は、しかしどうしようもないくらいに震えてしまっていた。
彼はそんな少女の手を、本当に寂しそうに見つめている。

「怖がらせて、しまったかな」

「――へ？」

ありえない一言を聞いた気がして、少女の背筋はピクンと跳ねあがった。

「ち、違うよ！！　そんなのじゃないよ！！」

気が付くと、少女はあたふたとしながら必死に首を振っていた。
急いで彼の手を取って、跳ねる様にピョンと立ち上がる。

「ぼ、ボクがユピ様のこと、怖がるワケなんか無いよ！！
だって、ユピ様だもん！！
ユピ様は、ユピ様で、またボクを助けてくれたんだから、ユピ様で、だからボクが怖がるわけなんかないユピ様で――あれ？」

……慌てていたから、だろう。
少女はだんだん、なんだか自分でも何を言っているのか分からなくなってきてしまった。
言葉が上手く扱えない、舌っ足らずな自分が、ちょっとだけ悔しい。
でも、とにかく。自分が彼を怖がるなんて事は絶対にありえないという事を、少女は必死で伝えようと頑張った。

だって、この人は――。

「ふふ。ありがとう」

少女があたふたする様子が、よほどおかしかったのだろうか。
青年は一瞬だけ堪える様な仕草を見せてから、安堵の微笑を浮かべた。
その優しげな顔を見ているだけで、少女の頭の中はまた真っ白にされてしまう。

「安心したよ。
君に怖がられてしまったら、僕は今夜を泣いて過ごすところだった」

笑顔だけでも、頭の中が溶けそうになるというのに――、
あろうことか彼は、そんな誤解しそうな事を言いながら少女の瞳を覗きこんで、身体を優しく抱き寄せてきた。既にショートしかけていた少女の思考が完全に許容量を超えて、ちょっと大変な事になってしまう。

「あ、う……、ゆ、ユピ、さま……？
だ、ダメ、だよ。ボクなんかに、触っちゃ……」

少女の口から辛うじて出たのは、やっぱりそんな、自分を貶める様な言葉。
こんな事で、やっぱり自分には、本当に“その立場”が骨身に染み付いているんだな～、なんて事を、少女は再確認させられてしまう。
彼はそんな彼女を、少しだけ悲しげに見つめていた。
背の高い彼に抱かれて、顔を覗き込まれると、自然に“その部分”も見られてしまう気がして――。

「あ――――」

隠そうと思ったのが、不思議だった。

少女は咄嗟に首筋に手をやり、浅黒く変色している“その部分”を隠す。

自分は“そういうモノ”だと分かっているんだから、別にその証を見られても、全然気にする事なんか無い筈なのに――。

でも、何故だろうか。

少女は、彼にだけは、自分の身体で一番醜い“その部分”を見てほしくないと思ってしまったのである。

多分。

彼の碧色の瞳に映すには、自分の身体は、あまりにも汚すぎるから――。

彼は、そんな少女の目を真っ直ぐに見詰めながら、ゆっくりと彼女の緑髪に指を絡ませた。

サラり、と彼の手櫛で髪を梳かれると、少女の頬はまた染まってしまう。

自分には、彼の温かさを感じる権利なんか無いって事は、良く分かっているけれど――。

それでも少女には、そう感じてしまう自分の感情を抑える事なんか出来なかった。

「目、閉じて」

囁く様な、彼の声色。

少女はただ、その言葉に素直に従う。

――だって、きっと。

こんな汚い自分にジロジロ見られて、よく思う人なんか居ない筈だから。

ソレが良く分かっているからこそ、少女はいつまでも彼を見ていたい名残惜しさを振り切って、静かにその目を瞑った。

首筋に、柔らかい布の感触が掛った。

温かくて、優しい感触が、首筋から体中を満たす。

最後に、首の後ろで何かがキュッと締まる感触がしたかと思うと、額に一瞬だけ、柔らかくて湿った感触が当てられて、直ぐに離れていった。

「――って、へ？　へ！？
ゆ、ユピ様！！　い、今！！　ボクのおでこに――！？」

「開けていいよ」

未だに額に残る余韻にオロオロしている少女をよそに、彼は悪戯っぽい声色でそんな事を言った。反射的に目を開けて、パタパタと奇妙なダンスを踊り始めてしまう緑髪の少女。

どうやら、脳の処理能力がとうとう限界を迎えたらしい。

誰がどう見ても分かるくらい、それはもう見事なまでに真っ赤になっている少女に向けて、彼はニコリ、と、見ただけで頭の中が溶かされる様な、あの笑顔を浮かべた。

少女の顔の紅潮が、天井知らずに悪化する。

「うん。やっぱり似合ってる」

「――――？」

だが。
殆ど放心状態だった少女は、彼のその一言によって冷や水でも浴びたかの様に硬直した。
咄嗟に彼の視線を追って、自らの首へと視線を落とす。

「こ、コレ……。ユピ様、の」

少女の首元には、赤いスカーフが巻かれていた。
未だに彼の温もりが残っている、手触りのいい、華やかな布地。
自分の隠したい部分を覆う様に巻かれたそれに、どうしようもないくらいの安堵を感じてしまう反面、彼の物に触ってしまっているというその事実を理解して彼女は卒倒した。

「だ、だだだ、ダメだよ!!　こんなコト、しちゃ……。
だ、だって、ボクなんかに巻いちゃったら、コレ!!
汚くて、使えなくなっちゃう、よ……？」

このヒト、なんてコトするんだろう。
少女は狼狽しながら、心の中で彼を軽く非難した。
だって、彼みたいに綺麗な人のモノを、こんな自分の、一番醜いところに巻くなんて、ソレはナニか、酷く間違っている事の様な気がしたのである。
咄嗟に外そうともがいたけど、あまりにも慌て過ぎていたから、結び目は中々解けてはくれなかった。
あたふたしている彼女の手を、彼はそっと握って、止める。

「――――！！」

そして。そのまま彼女をゆっくりと引き寄せて、彼は再び額にキスを落とした。

少女の抵抗の意思が、それだけで頭の中ごと溶かされる。

「ユピ、さ、ま……？」

「貸しておくよ」

再び、頭の中を真っ白にされてしまった少女。

蕩けた様に潤むその瞳を覗きこみながら、彼女の背に腕を回し、青年は囁く様にそう言った。

「君の傷が――。

首の傷だけじゃなくて、心の傷も消えるまで。ソレを、君に貸してあげる。

だから。いつでもいいから、君が自信を持てたと思えた時に、返してくれないかな。

それまでは。せめてソレが、少しでも君の傷を癒す助けになるように、ね」

耳元で囁かれる、彼の言葉。

その優しい声に鼓膜を撫でられると、身体を中から溶かされそうになってしまう。
まるで、魔法にでも掛けられた様に、頭の中が真っ白になって、絶対にイケナイ事だって分かっていても、制止する意思ごと蕩けてしまった。
緑髪の少女は、彼の言葉の意味を半分以上理解出来ないままに、小さく頷く。
――耳元に掛る吐息に、彼が、小さく笑ったのが分かる。
ここに居続けるのは、ちょっとマズイみたいだ」
「うん。それじゃあ、戻ろうか。
彼は腕の中から少女を解放して手を引くと、軽く周囲に目をやった。
遠くからは、まだ何頭かの黒龍がこっちを覗いている。
流石に彼に襲いかかろうとするような猛者はもういない様だが――。
でも、マズイ、というのは、多分危険という意味じゃないんだろう。
彼が殺めてしまった黒龍。
よく見ると、その隣にはいくつかの卵が転がっていた。
親の温もりを失ったアレらは、きっと生まれる前にこの寒さでダメになってしまうんだろう。
勿論、龍は人を襲う“災害”なんだから、それが生まれてこないという事は、人にとっては間違いなく“良い事”の筈なんだけど……。

「……ゴメン、なさい」

青い瞳を少しだけ翳らせて、でもソレを少女に悟られまいと、必死に隠している彼を見ていると――。

「ゴメンなさい。
ボクの、せい、だよね……？」

少女には、自分のせいで生き物が死んでしまうというその事実が、どうしようも無いくらいに悲しい事に思えてしまった。
緑衣の青年は、小さく首を横に振って答える。

「ううん。悪いのは僕だよ。
君が気に病む必要は、どこにも無いんだ」

安心させる様に少女の緑髪を撫でた青年。
彼は自らの左手に視線を落としながら、小さく溜息を零していた。

「本当に……。ダメだね、僕は。
この世界に来て1週間も経つのに、まだ手加減の一つも覚えられないんだから」

漏れた言葉は、彼にとっての切実な嘆きだった。
緑衣の青年――ユピテルは、この世界よりも遥かに強力な力が存在する世界から呼び出された守護魔らしい。緑髪の少女、ウラノスの知っている限り、彼がその力を揮ったのは、今回を含めてたった3回である。勿論、全て天の国を徘徊する凶悪な魔獣に対してであった。

そして彼はその3回の行使に於いて、国が軍隊を動員して退治すべきレベルの魔獣達を、例外なく一撃で滅ぼしている。
しかも。本人は、決して殺さないように手加減したつもりにも関わらず、である。
強力に過ぎる力を持つ彼にとって、殺さない様に標的を制圧する為の“手加減”を覚える事は、どうやらこの世界に来てからの最重要課題となっている様だった。

もっとも少女は。
彼がどんなに強くても、絶対に怖がったりはしないのである。
だって――。

「とにかく、君が無事で良かったよ。
疲れてるよね？　帰ったら、午後まではゆっくり休もうか」

彼はこうして、どんな時でも他人を気にかけてしまう様な、どうしようもないくらいに優しすぎる性格の持ち主なのである。
……たまに。ちょっとお人好し過ぎて、少女が不安になる事もあるのだけど。

少女の目線から、その内心を悟ったのだろうか。
ユピテルは誤魔化す様な笑みを零してから、僅かにその雰囲気を変えた。
爽やかな、しかしこの丘に比べると穏やかな温もりを含んだ風が神樹（レーラズ）から吹き抜け、彼の金髪を鮮やかに靡かせる。

「確かに、あの卵の事は心苦しいけどね――。
でも、助けが必要な人たちは沢山いるから。
あの卵達と、その親を殺めてしまった分。
せめて“彼ら”くらいは救わないと」

風に流れた髪を寄せ、ユピテルは遠い空を見詰めながらそう言った。

まるでその碧色の瞳に、異国の景色を映す様に――。
彼の視線の先には、無数の山々を抜けた先に、広い空と“果ての無い平原”が広がっている。
彼はその遠い景色へと、微かな憂いを含んだ視線を向けていた。

「何日か前、だったかな。
“銀の国”で、僕たちの仲間が戦ったらしいよ。
……もっと早く分かってれば、止めに行きたかったのにね。
怪我人が出てないといいんだけど」

少女は、小さく頷きを返した。
少女も一応、彼の“召喚主”としてその話は聞いていたからだ。
銀の国の大魔導が守護魔を召喚した事と、その翌日に銀の国に攻め込んだという、武の国の王女。そしてそれに便乗する形で参戦した、氷の国の守護魔の情報。
少女は、彼が酷く悲しそうな目で語っているのに気付いたが――。

だが。今のあまりにもこの人らしい言い回しには、少女は苦笑を洩らさずにはいられなかった。

「ユピ様。仲間なんて言ったら、“三院議会”の皆に怒られちゃうよ？

国王としての自覚がどうとか、ってね」

「はは。そうかもしれないね。
でも僕は、それでも彼らを敵だなんて言えないよ。
だって、僕は――」

「みんなが笑える平和な世界を、でしょ？」

満面の笑顔で告げられた少女の言葉に、ユピテルは目を丸くしながら口を噤んだ。

――彼を召喚してから、1週間。
彼が口癖のように呟いて、そして少女も、そんな世界になったらどんなにいいかと共感してしまった、彼の夢。
冷たい呪いに覆われたこの世界にとっては、あまりにも温かすぎる、彼の希望。
それはとても難しい事に思えたけれど――、

「……信じてるよ？」

だからこそ、緑髪の少女ははっきりと言った。

「ユピ様なら出来るって、ボクは信じてるよ？」

少女に先を越されたのが、少々バツが悪かったからだろうか。
ユピテルは、妙に複雑そうな表情を浮かべていた。
しかし直ぐに首を振って――、

「……勿論だよ。
きっと、やってみせる」

祈る様に、口を開いた。

「僕はきっと、そのために君に呼ばれたんだからね」

どちらからとも無く微笑みながら、緑衣の王とその召喚主は、風が吹き抜ける丘を下っていった。
残されたのは、先刻までは絶対者であった筈の、哀れな獣の亡骸。
どこまでも黒いその骸からは、赤く美しい、一輪の花が咲いていた――。

33.　異邦の国王が自らの手によって行った異世界に於いては必ずと言って良

はい！！　と、言うワケで、イケメンチートな中二病・ユピ様の登場です！！
お天気バカップルの参戦で、ますます収拾が付かなくなりそうな朝マガワールド！！
次の十話ちょっとで性懲りも無く戦闘パートに挑戦しますので、どんどん電波になるバトロワをこれからもよろしくです！！
（次回はアイアイ★こらむです）

３４．　アイアイ★こらむ？　燃えろ！！　火炎魔法！！（前書き）

注）アイアイ★こらむは電波系楽屋落ちコーナーです。真面目な方、まともな方、あるいは毒電波に対する耐性が無い方などが読まれますと、精神とかに何らかの異常をきたす可能性がありますのでご注意下さい。

34．　アイアイ★こらむ？　燃えろ！！　火炎魔法！！

「アイアイ★こらむ～～～～♪」

「……」

「こっんにっちは～～～～♪
胃もたれしそうな本文に蛇足という名の油をぶっ掛けるこのコーナー。
アイアイ★こらむのお時間がやってまいりましたよ～～～～♪
今日も皆さんお馴染みのこのわたし、アイアイこと相川　愛と。
天災物理学者こと朝日　真也元大学教授（現魔導研究所特務教諭）
の二人でお送りしたいと思いま～す♪」

「……おい。今のあからさまな誤字はスルーなのか？
ってか、どうした？　なんか、やけにテンション高くてご機嫌じゃないか」

「いえ！！　誤字なんか一つも無かったんで気にしないでください！！
……でも、テンション高くてご機嫌、ですか？
フフフ。やっぱり、そう見えちゃいますか？　見えちゃいますよね？
フフフフ。そうですよ？　そうなんですよ～？」

「待て。なんか、君。今日は目が座って――」

「えー？　ぜんぜん、いつも通りじゃないですか～。
それとも、教授。
教授には、今日のわたしが、なんかいつもと違う様にでも見えてるんですか～？」

「（ゾクッ！！）な、なんだ！？
君の笑顔、今背筋がゾワって……」

「……気にしないでください。
ところで、教授。さっきの“やけに”って、どんな字を想像しました？
妬けですか？　それとも……、自棄（やけ）、ですか？
ムッフッフ～～。どうなんでしょうね～？　どうなんでしょうね～？」

「……待て。何故君は、オレの肩に両手を置く？
それとなんか、今の君からは明らかに魔力が……」

「ナニしてるんですかぁぁぁぁあああああああ！！！！」

「のぁぁぁあああぁぁぁあああッッ！！？？
ま、待て！！　待て待て！！　ちょ！！　ま！！

ゆ、揺するなッ！！　それ以上揺するなぁ！！！
コレ、マジで脳震盪――ブ！？
し、シチャ噛んだ！！　シチャ！！」

「ウソなんかつくから！！　闇魔様に舌噛まれるんですよ！！」

「抜かれるだろ！！
いつから闇魔は罪人にディープキスする変態になったんだよ！！
ってか待て待て待て待て！！　オレは、嘘なんか――」

「ついたじゃないですか！！
アルちゃんとニャンニャンしないって言ったの、ウソだったじゃないですか！！
何なんですか、あれ！！
ラブラブじゃないですか！！
新婚さんじゃないですか！！
恥ずかしくなるくらいの幸せ空間を形成しちゃってたじゃないですか！！
教授！！　わたし以外の女の子には興味が無いって、第一回で言ってたの忘れたんですか！？」

「待て待て待て！！　君の頭は何をどう誤変換したんだ！？
オレは異生物を女の子扱いするのが間違いだと言ったんだぞ！？
君について言及した覚えは全く無い！！」

「（じと～～～～……）」

「……なんだ？　そのあからさまなジト目は？」

「べつに。なんでも無いですよ～。
教授は、何とも思ってない筈の女の子に手料理とか食べさせて赤面するような節操無しだったんだな～、とか、全然軽蔑してないんで気にしないでください」

「誤解を受ける様な言い方をするなぁ！！！！
あ～……、と。因みに、参考までに聞かせてもらうが。
君の目には、アレがどんな風に映っていたんだ？」

「はい！！　ぶっちゃけて言いますと――！！」

『アル。ご飯ができたよ？　冷めないうちに食べて』

『ほんと？　――んむ。
うーん……。悪くないけど……固くて、ちょっと辛いかも……』

『……そうか。
初めて作ったんだけど、やっぱり上手くいかないもんだな。
料理くらい勉強しておくんだったよ。
そうすれば、君においしい物を食べさせてあげられたのに……』

『あはは、気にしなくていいよ～。
だって、シンが作ってくれたってだけでさ。
あたし、十分幸せだよ？』

『はは。君は優しいな。
オレの料理なんか、ホントは食べられたもんじゃないだろ？』

『そんなコトないよ。だって、シンの料理だもん。
それにさ。初めてなのは、お互い様でしょ？
あたしも、男の子の料理とか、初めてだから……。
……ちょっと、緊張してるのかも』

『アル――』

『――なんてね。
シン。これからも、よろしく♪』

「さ、砂糖が！！　一舐めで糖尿病が発症するくらい高濃度の砂糖が！！
き、教授！！　コレ、コレどうするんですか～！！
朝マガはラブコメじゃないんですよ！？
こんな精神歪みまくりのダメ人間に、甘々なラブコメとか書けるワケが無いじゃないですか！！
いくらなんでも、やっていい事と悪い事があると思います！！」

「待て待て待て待て！！　オレはその前段階で原型が無くなる程殴られてるんだぞ？

どんなフィルターを通してアレを見ればそうなるんだよ！！
言っちゃ難だが君の脳には何らかの障害があるとしか思えん！！
脳機能の一部が腐敗でもしているんじゃないのか！？」

「ふ、腐の何が悪いんですか～っ！！
ショタとＢＬは世界に誇る日本の文――」

「待てぇぇぇぇぇえええええええ！！！！
“その趣味”だけは治せとあれ程言われたばかりだろぉがあああああ！！！！
マジで一回捕まれ作者ぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁあああ！！！！
！」

――――――

「はい。それじゃ、本題にいってみましょう。
教授！！　本日のお題は何でしょうか！？」

「ふむ。どうやら今回は火炎魔法に関する講義の様だが……。
はぁ……とうとう来てしまったか……」

「へ？　何でそんなにネガティブなんですか？
火炎魔法って言えば、ファンタジーには１００パーセント出てくる
ポピュラー魔法じゃないですか。

ある意味魔法の花形さんじゃないですか。
魔獣さんも魔王さんも怪獣さんも火とか噴きますし、なんか、一番簡単そうですけど……」

「そうなんだがな……。
ポピュラーなだけに、ソレを実現するには中々の困難を極めるというか……」

「ソレって、どういう……。
っていうかちょっと待ってください！！
良く考えたら教授！！　今その火炎魔法使えるじゃないですか！！
……。

あ、あの～。
その、ちょっぴり興味があったりとかしますんで。
一回だけ、見せて頂いても、よろしいでしょうか？」

「フ、仕方ないな。
それじゃ、オレの左手をよく見ていてくれ。
ああ。危ないからちょっと離れてるんだぞ？
よし。それじゃ、いくぞ？燃焼（combustion）！！」

――ペチ。

「……」

「……」

「……。

はい。それじゃ、次、行きましょうか」

「……待て。

何故君は、そんな残念なモノを見た様な目をしている？」

「い、いえ。なんでもないです。

なんか、触れちゃいけない部分の様な気がしたんで……」

「……余計な気など回さなくていい。

と、いうかな。普通に考えれば、２センチでも火が出せるだけ恵まれているじゃないか」

「？　そうなんですか？

普通、ファンタジーとかの主人公さんって言えば、魔力チートはテンプレじゃないですか。

地球人って言えば、異世界とかに行ったら、現地の人たちより魔術が使えて当たり前じゃないんですか？」

「……そんなワケが無いだろ。
あのな、よく考えてみろ。
生物というのは、普通は環境に適応して進化していくものなんだぞ？
余分な機能を持った生き物は直ぐに淘汰されてしまうし、ある機能が必要以上に伸びる事も、よっぽど特殊な事情が無い限りはあり得ない。
エラを持っている哺乳類なんか居ないし、馬より速く走れる魚もいないのがその証明だ。
……つまりな。魔力の無い世界で進化した我々が現地人よりも魔術に優れるというのは、“時速３００キロで泳ぐゴキブリ”と同じだ。
特殊な事情が無い限りほぼ有り得ん」

「きゃぁぁあああああ！？
そ、ソレは最早あのお方じゃありませんよー！！
台所をカサカサって這って、お空をブーンって飛ぶだけでももう手に負えないのに、そんなにシャカシャカ泳がれたら、人類はどうやって立ち向かえばいいんですかーっ！！」

「……取りあえずスリッパか殺虫剤だな。
泳いでくれるなら、界面活性剤も効きそうだ。
まあ、とにかくオレが言いたいのはだな。地球人が魔術を使うには、そのくらい自然の摂理に反した“反則”が必要だって事さ。オレは最弱でも魔術が使えたんだから、まだ十分に恵まれている方だ」

「あ、あう……。身も蓋も無い理屈です……。で、でも～。

やっぱり、教授より先に異世界に行った“先輩”達を見ていると、魔力チートには少なからず憧れるといいますか、ぶっちゃけそっちが本筋っぽいと思っちゃうといいますか……」

「まあ。ファンタジーの主役に選ばれる様な連中は、世界を渡る時に神やら精霊やら“何者かの意思”によって漏れなく人外の魔力やら特殊な才能やらヘンなスキルとか貰ってるからな。爆発事故で飛ばされただけのオレには、この程度の能力補正が妥当な所だろう。取りあえず覚えておいて欲しいのが、現実としてそういうチート能力を貰えるヤツの方が遥かに稀で、一般に知られている漫画やゲーム、ライトノベルの主人公たちの数倍の数の若者達が、能力補正どころか言語補正やライフラインの補正すら無しで酷い目に会ってる可能性が高い、という事だ。

……異世界嘗めると、痛い目みるぞ？」

「み、みなさん、祈りましょう！！

皆さんが異世界に飛ぶ時には、出来れば能力補正とか沢山ある様に頑張って祈りましょう！！

……お供えとか、効きますでしょうか？」

「……お供えしてる時に異世界に飛ばされた主人公の記録は無いから、望み薄だな。

と言うか、な。正直、チート連中も少々心配だぞ？

だってあれ、チワワにエラ呼吸を覚えさせるくらいの魔改造に等しいからな。

地球に帰ってから、まともな生活が送れるのかどうか心配だ」

「教授！！　ソレ、気にしちゃダメなんです！！
ファンタジーでは、面白さっていうのが、どんな物理法則よりも最優先される絶対ルールなんですから！！　ぶっちゃけ誰も細かい事なんか気にしないんですから、そこは“神様スゴイな～。”とかで普通にスルーするのがお約束なんです！！」

「……理不尽だな」

「お　や　く　そ　く。なんです」

「まあ、そこまで言うなら気にせんが。
さて。それでは、いい加減に本題に入ろうと思う。
火炎魔法とは、まあ大雑把に言って炎を出す魔法であると定義できると思うが――。
基本的な所から確認しよう。そもそも火とは何だ？」

「はい！！　ズバリ、ファイヤーです！！」

「……聞かなかった事にしてやる。
そうだな。ここでは火を、“熱や光の放出を伴う可燃物の急激な酸化反応”であると定義しておこうか。そして、もう一つ。燃焼の三要素、という物があってな。燃焼反応が起こる為には、可燃性物質と酸素（広義に酸化剤）、そしてソレを燃やす為の火源が必要であるとされている。

つまりだな。炎が出ているという事は、即ちナニかが燃えていなくてはならないんだ。
よって火炎魔法が火を出す魔法であれば、果たしてナニが燃えているのか、という点が一番の問題になる」

「えーと、はい。
なんか、言われてみれば聞いたことある気がします。
確か、“燃える物が無い火は存在しない”、とかなんとか……」

「火を先の様に定義すればそうだ。
さて。以上の理由から、火炎魔法に於いてもナニかが燃えている、という前提の上で話を進めよう。
オレは本編に於いて、魔力を“可燃性の化学物質”であると仮定し、火炎魔法とはその燃焼反応であると考えた。もう一歩補測するとするのならば、オレの左手の魔法円による物理法則の補正の大元も、その魔力が貯めこんでいる化学エネルギーではないか、とな。
まあ、かなり無理がある仮説なのは間違いが無いんだが……」

「へ？　でも、燃える物が無くちゃ火は出ないんですよね？
火炎魔法は火が出る魔法で、魔法っていうのは、魔力を使って発動させる物なんですから、魔力が燃えてるって、なんか一番シンプルな感じがするんですけど……」

「いや、問題がある。
アルの説明によると、あの世界の人間には“集積器官”なる魔力を集める為の臓器があって、ソレで星の内部から染み出してくる魔力

とやらを集めているという話だったな？
つまり、魔力はあの星の大気中に充満していて、火炎魔法を撃つときには十分な量が体内に集積されなくてはならない」

「？　はい、そうですよね。
でも、それのどこが問題なんですか？
ファンタジー理論の説明だと、“空気中の水素とか一酸化炭素とかを集めて大爆発！！”　なんて魔法、よく見ますけど……」

「……あのな。あくまでも地球の大気組成を参考にした場合の話だが、空気中の水素なんか体積比で０．０００００５％しか無いぞ？
一酸化炭素だって０．０００００４％に過ぎないし、比較的体積比の大きなメタンだってたった０．０００１４％だ」

「はい！！　だから、ソレを頑張って頑張って集めて……」

「……ほう、そうか。じゃあ計算してみよう。
魔力が大気中に充満している可燃性ガスであると仮定すると、ソレを体内に取り込むのに最も適した器官は“肺”だと考えられる。つまりは、人体に於ける酸素と二酸化炭素のガス交換に似た原理で、酸素を取り込むのと同時に魔力を集積しているのだろう、とな。
ここではアルの肺活量を、１５歳女児平均の２７００ｍＬ前後と仮定する。
これはあくまでもホモサピエンスの場合ではあるが、まあ身長１５０～１５５ｃｍ程度という彼女の体格を見る限り、これよりも大幅に値が勝ることはまず無いだろう。少々多めに見積もっても、精々

３０００ｍＬくらいがボーダーだろうな」

「ふ～ん。アルちゃんって、やっぱりちょっと小柄なんですね～」

「……帽子とブーツのせいで、大分水増しされてる気がするけどな。さて。仮にあの世界の空気中には、体積比で０．０００２％の魔力が充満しているとしよう。（上記の可燃性ガスの総和にほぼ等しいので、妥当な線だと考えられる）するとアルが一回の呼吸で肺に取り込める魔力の体積は約０．００６ｍｌとなる。

狼霊級火炎魔法のエネルギーをダイナマイト一本分と同程度であるとして計算する。仮にダイナマイト一本に５００ｇのＴＮＴ爆薬が使われているとすると、ＴＮＴ爆薬１ｇ当たりのエネルギーが４１８４Ｊであるから、そのエネルギーは凡そ２０９２ｋＪとなる。

ここでは“魔力の燃焼熱”をメタンと同程度であるとしておこう。メタンの燃焼熱は８９０ｋＪ／ｍｏｌだから、２０９２ｋＪのエネルギーを生み出すのに必要なメタンの量は約２．３５ｍｏｌ。

話を簡単にする為に、理想気体の状態方程式を適応する。

仮に気温を１７℃（２９０Ｋ）とすると、１気圧でのメタン２．３５ｍｏｌの体積は、

Ｖ＝ｎＲＴ／ｐ

＝（２．３５）×（８．２０６×１０＾－２）×（２９０）／（１）

＝５５．９２Ｌ（５５９２０ｍＬ）　となり、これを先の一回の呼吸で取り込める魔力量０．００６ｍｌで割るとその値は９３２０００。

よって、狼霊級火炎魔法一回を発動するのに必要な呼吸回数は凡そ９３２００００回となる」

「ふ～ん、大変そうですね～。
アルちゃん、本編で散々“小さい事”を気にしてましたけど、確かにコレならその気持ちもわか――。
……って、へ？　き、きゅうひゃ……」

「……アルは毎秒一回の魔術発動が自慢だったから、だとすると彼女の呼吸回数は毎秒９３２万回か。スポーツカーのエンジン回転数でも最大の物で毎秒３００回程度だという事を加味すると驚異的な数値だな。なるほど。確かに魔術団長が術式の構築だと気付けなくても無理は無いだろう。
しかもコレ、ただの呼吸じゃなくて深呼吸の換算だぞ？
肺の空気を限界まで吐き出して、再び完全に満たすという動作を前提にした上での試算だ。
いや、待て。これだけじゃ無い！！　今のはあくまでも、肺に魔力を入れるという事象のみを考えた値にすぎなかった筈だ！！　実際には肺に取り込まれた気体が全部体内に取り込まれるわけが無いから、ロスの分を考えると必要な呼吸回数は更に増える。しかも、その結果として発動するのは高々“狼霊級”だ！！“始祖の炎帝”クラスの魔術を扱うには、更に想像を絶する程の呼吸回数が必要になる！！
……最早詠唱なんかしてる場合じゃないな。どう考えても過呼吸だ。ってか魔術撃つ度にハアハア息荒くしてたら、流石にオレでもちょっと退くぞ？」

「退くとか以前に、なんか絵面的にヤバいですよ～！！
だ、ダメですその理論！！
異世界トリップもののヒロインとして、絶対にやっちゃダメなヤツ

です！！

……あれ、でもちょっと待ってください。
そもそもさっき、魔力が空気中に０．０００２％しか無い、なんて言ったからこんなタイヘンな事になったんですよね？　でもでも。それなら、空気中に魔力がもっと沢山ある事にしちゃえば、全然問題なんか無くなるんじゃないんですか？」

「……それだと、今度はもっとタイヘンな事になるぞ？
手元の資料によると、メタンガスの爆発限界は重量比で５％だそうだ。
仮に魔力がメタンと同程度の分子量と爆発限界を持つとしよう。
あの星の大気が爆発限界ギリギリの５％の魔力を含んでいたとすると、それは体積比にして約９％。この数値で先と同様な計算を行うと、一回の呼吸で取り込める魔力の体積は約２７０ｍｌとなる。この場合に必要な呼吸回数は毎秒約２０７回であり、まあスポーツカーのエンジンのくらいの回転数だからまだ現実的だが……。
気を付けて欲しいのが、コレが通常値だという事だ。
アルの話によると、オレが行ったあの修練場は、魔力の濃度を別格に高めてあるって話だったよな？　もしもあそこが、可燃性ガスの濃度が只でさえ高い惑星だったとして、更にその基準からして“別格な”濃度の魔力が充満した場所で火炎魔法の練習なんかすると――」

「きゃぁぁぁぁあああ！？
ど、ドカンです！！　ドッカンていきます！！
火龍（ファーヴニル）の火炎弾なんか目じゃないくらいの大惨事です！！！！」

「……だろ？　あの修練場のシステムなんか正気じゃ無くなってしまう。
霊道が焼け付くどころか、全身隈なくウェルダンだ。
やはり、ソレを考えるのも無理はある」

「あうー……。
火を出すだけなら、一番簡単な魔法だと思ったのにー……。
やってみようとすると、実は結構難しくないですか？」

「そりゃそうだろ。
そもそもな。地球じゃ火を扱える生物は人間だけだ。
オレ達の世界に実例が居ない以上、原理を考えるのも相応に苦しい物になるのは否めない。

……仕方ない。ここは、アルには体内で可燃性ガスを生産できる生き物になってもらおう。
大気中から取り込んで即時使うのが難しいなら、予めある程度蓄えてストックしておけばいいんだ」

「なんか、どんどんアルちゃんが遠くに行っちゃってる気がするんですけど……」

「この際それは已む無しだ。何しろ、あそこは異世界なんだしな。
本来なら、アルは宇宙人よりも遺伝的に因果の無い場所に生息している生き物なんだし、そのくらいの無理は我慢してもらおう。

……異世界に行った若者たちよ。よく覚えておけ。
君の後ろで震えているヒロインは、今君が斬った魔物と同列に位置する生き物だ。
君とヒロインの生物学的な距離は、我々の宇宙の単位では表せないくらいに離れている」

「き、教授！！　い、今の瞬間！！
きっとモノスゴイ数の勇者様たちを敵に回しましたよ～！？」

「……現実とは時として残酷な物だな。
まあ、勇者とか英雄とかは割と人格者だから、きっと大丈夫だろう。
魔王退治に比べれば、連中にとってそのくらいの苦難は苦難に入るまい」

「……人によっては魔王退治の方がましなくらいだと思うんですけど。
でも、教授。生き物って、身体の中で燃料なんか作れるんですか？
なんか、焼くと爆発するお肉とか見た事無いんですけど……」

「作れるぞ？
例えば酒に入ってるエタノールだが、アレだって定義的には微生物が作った燃料じゃないか。
哺乳類で言えば、牛などの反芻動物が腸内細菌を利用して食物繊維を分解する時に、メタンという可燃性ガスを作っている。
まあ、アルが体内で燃料を作るとしたら、この辺りが妥当か」

「メタン？　なんか、聞いたことある様な、無いような……。
それって、具体的にはどんなガスなんですか？」

「そうだな。最も単純な構造を持つ炭化水素で、二酸化炭素の２１～７２倍の効果を持つ温室効果ガスでもある。
都市ガスとして使用されてる燃料であり、生物学の世界で具体例を挙げるのなら……。
牛のゲップとオナラの主成分だ」

「なんてモノ引き合いに出すんですかぁぁあああ！！
――って、ちょっと待ってください！！
さっき蓄えておくって……ま、まさか教授！！」

「……なるほどな。
つまり火炎魔法とは、屁に火をつける一発芸と同じ現象だったのか。
要約すると、あの世界の人間には貯め込んだオナラを全身に届ける為の“霊道”と呼ばれる回路があり、ソレの燃焼によって魔術を使用している、と。
……大魔導、恐るべしだな。
コレは確かに、“意識を無意識に落とし込”まなきゃやってられない羞恥心だろう」

「す、ストーーーーーーップ！！！！
き、教授！！　そのくらいにして下さい！！

ファ、ファンタジーが！！
幻想（ファンタジー）が壊れます！！」

「まあ、そう言うならやめに……。
――待てよ？　つまりアルは、直径１０メートル近い火炎を生み出すだけの屁を常に体内にため込んでるってコトなのか？

どれどれ、ちょっと計算してみよう。
相当少なめに見積もって、アルの総火力がガソリン１０ｋｇくらいだと仮定する。
ガソリンはメタンの約７．５倍の火力があるから、その数値を元にコレをメタンに換算して物質量を求めると、約３７００ｍｏｌ。
話を簡単にする為に理想気体の状態方程式を用いて考える。
集積器官の体積を心臓とほぼ同じの３００ｍｌ、アルの体温を３７℃（３１０Ｋ）として計算すると。
Ｐ＝ｎＲＴ　／　Ｖ
　＝３７００×８．３１４×１０＾３×３１０　／　０．３
　　３２０００００００Ｐａ
これを気圧に直すと約３２００００ａｔｍ。
よって彼女の“ガスタンク”の中には約３２万気圧のメタンが圧縮されて――ってちょっと待て！！　３２万気圧だと！？　高圧ガスボンベでも精々１５０気圧なのにか！？
……コレ、最早天文学的な圧力だろ。
大丈夫か？　アイツ」

「が、ガスタン……なんてネーミングなんですか！！
き、教授！！　ちょ、ホントに――」

「まあ、酸素さえ上手く排除出来ていれば、滅多な事では引火もしないだろうが……。
ガスタンクがこれだけ高圧なら、彼女は相当慎重に扱わないとマズイ生き物だな。
戦ったり暴れたりなんかは勿論ＮＧだ。
何しろこの高圧ガスタンクが破裂したら、常圧換算で９６０００Ｌのメタンが一気に噴出する計算になる。
空気と混ざったメタンが引火する可能性もあるし、そうなったら文字通りの意味での爆弾だ。
ガスタンクが破れたら、そこから中身のガスが大気中に撒き散らされ、周囲一帯は一瞬にして――」

「きゃぁぁあぁあああああ！！？？
いい加減にしてください教授！！！！
そんな理論は絶対に却下ですよーっ！！！！
ヒロインの能力がソレじゃあ、朝マガ全体の評価に関わります！！」

「……まあ、コレは流石に生物として無理があるだろう。
そもそもメタンガス９６０００Ｌって言ったら６０キロ以上。
それだけで彼女自身の体重を遥かに超えてしまう。
と、言うかだな。オレに効かないっていう時点で、火炎魔法が化学反応だっていう前提は既に半分却下だろう。ソレに、化学反応理論じゃ説明出来ない点もまだある」

「……なんですか？」

「炎の形だ。アルの生み出す火球は、丸い奴が多かっただろ？　だが本来、丸い炎というのは存在しない筈なんだ。先に言った様に、燃焼反応には酸素（広義に酸化剤）が必要で、対流の影響で炎は通常、上に伸びる。もしも完全な球だったら、ソレは周囲から新しい酸素が吹き込んでいない事を示すから、あっという間に燃焼に必要な酸素を使い果たして鎮火してしまう筈だ。事実、無重力中では丸い炎が生まれるが、風を送ってやらない限り直ぐに消えると聞く」

「じゃあさっきまでのお話はなんだったんですか～っ！！！！」

「……だから火炎魔法は厄介だと言っただろう。可燃性物質が無きゃ炎は存在し得ないのに、可燃性物質を仮定すると矛盾が生じるっていうのは、最早炎の概念そのものに挑むくらい困難な課題だ。……仕方ない。ここではやはり、前々から利用している霊子理論に登場してもらおうか」

「むー……。やっぱり、最後はそこに落ち着くんですね。……お手柔らかにお願いします」

「結構。さて。我々は先ほどまで、炎を燃焼反応に伴う現象と考え、その結果として火炎魔法の正体に行き詰ってしまった。よってここでは、そもそも炎とはなんなのか、という点を考察し直す必要がありそうだ」

「へ？　でもでも、炎の定義って、さっき教授が言ってたヤツですよね？
そこ、勝手に変えちゃっていいんですか？」

「“火炎魔法が燃焼反応によって炎を出す”、という点に拘るのならばＮＧだな。
だが、今回の命題は別に火炎魔法が燃焼反応じゃなくてもいいじゃないか」

「ど、どういう事なんでしょうか？
だって火炎魔法って、火を出す魔法なんですよね？
火って燃焼反応で出る物なんですから、ソレを変えちゃったら、もう“火炎魔法”じゃないじゃないですか」

「そう思うか？　だが、考えてもみろ。
アルの出した炎が燃焼反応による“本物の炎”だと、一体誰が確かめたんだ？
我々が認識した事象は、彼女の手から“高熱と光を発する何か”が出たと言う事実だけであり、ソレが燃焼反応に伴う“本物の炎”だなんて誰も言ってないぞ？
逆に言えば、“高温と光を発する何か”さえ出せたのなら、それは炎として認識されてもおかしくは無いんじゃないのか？」

「む～、それはそうですけど。

そもそも、炎に偽物も本物もあるんですか？
熱くて、ピカピカ～って光って、メラメラ～ってなるのなんて、やっぱり炎しか無いと思うんですけど……」

「そうだな。では我々が炎を見る時には一体何を見ているのかを考えてみようか。
ここでは先ず、一番簡単な水素の燃焼反応を考えよう。
さて、基本的なところを確認する。
水素の燃焼を示す反応式は何だったかな？」

「はい！！　勿論それは――」

「……ボケるなよ？」

「……はい。
えーと、確か、
２Ｈ２　＋　Ｏ２　→　２Ｈ２Ｏ
でしたよね？」

「高校までの化学であればそれで正解だな。
だが、実際にはそうシンプルにはいかん」

「――へ？
ど、どういう事なんでしょうか！？

だってわたし、学校でこう習いましたよ!?」

「反応の終始のみをみれば正解だ。
実際、学校でもそう教えて間違いだとは言わない。
……でもな、なんかおかしいとは思わないのか？」

「おかしい、ですか？
でもでも、確かゲイのおじさんが発見した法則とかで、２個の水素と１個の酸素から２個の水が出来るとかって、かなり有名なお話だったと……」

「……ゲイ＝リュサックの気体反応の法則、な。
人名は敢えてスルーするが、君の説明は少しばかり問題がある。
この式が説明するのは、分子一個一個の反応では無いんだ。
あくまで、２ｍｏｌの水素と１ｍｏｌの酸素から２ｍｏｌの水が出来る事を示した反応式にすぎないのさ」

「う……で、出ちゃいましたね、モルさん。
わたし、そこら辺のヤツ、なんかゴチャゴチャしてて嫌いなんですよ～。
モルさんにアボカドをぶっ掛けると個数になるとか、ぶっちゃけ意味が分からないです」

「……アボガドロ定数、な。今のは謝れ。
まあ、ここではあまり詳しくは触れんから、ｍｏｌというのは原子

の個数を含めた色々な単位を表せる便利な単位、くらいの認識で構わないと思う。
さて。アボガドロ定数が１０の２３乗なんていう膨大な桁数である事からも分かるとは思うが、このｍｏｌという単位は、個数の単位に変換すると凄まじい事になる。
もう分かるな？　君が提示した式は、膨大な数の分子同士を反応させた時にその比を調べるとそうなるという事を示しただけであり、分子一個一個がその式のまま一度に反応する事を示した式では無い、という事だ」

「う～……。なんか、ちょっと混乱してきちゃいましたよ～……。つまり、簡単に言うと、今のは分子が沢山ある時のお話で、一個一個を見た時にはちょっと違う――ってちょっと待って下さい！！　なんか誤魔化されそうになっちゃいましたけど、やっぱりおかしくなんかないと思います！！　だって、水素さん２個と酸素さん１個がぶつからないと、どう考えても水さんできませんもん！！　この式！！」

「そうだ。今君は、反応するのにぶつかると表現したな。その表現は中々に的を射ており、それ故にこの式のおかしさを浮き彫りにしている」

「？　ど、どういうこと、なんでしょうか？」

「……分からんか？　それでは少しばかり補足するが。
そもそも気体とは、分子がバラバラになって飛び回っている状態だ

ったな？
そして君の説明した通りだとすると、火源からエネルギーを得て、水素分子２つが酸素分子１つとぶつかった時に水が出来る」

「？　はい」

「……もう一度言う。
火源から反応に必要なエネルギーを得た瞬間、水素分子２つが、同時に酸素分子１個とぶつかった時にのみ、この反応が起きる」

「？　はい。ですから、そうだと――って、あれ？
ちょっと待って下さい？　なんか、ちょっとおかしい気も。
バラバラに飛び回ってる沢山の分子があって、ソレが全部同時にぶつからなくちゃいけないから――あっ！！」

「そういう事だ。反応に必要なエネルギーを得た３つの分子が同時にぶつかって、尚且つその構造を入れ替えるなんて、信号無視をかました主人公に右と左から同時にトラックが衝突するようなものだぞ？　確率的に厳しい」

「あれ？　そう言われると、なんかよくありそうな気が……」

「……滅多に無い」

「でもでも、先輩たちのお話を聞いてると、結構――」

「無い！！」

「……はい。
でもでも、それだと、結局どうなるんでしょうか。
滅多に無いって言う割には、水素さんに火とか近づけると、毎回けっこうボンっていきますけど……」

「その謎を解くカギは反応過程にある。
全てを同時に起こすのが難しいなら、一つづつ順番に片づけていけばいいんだ」

「反応、過程……？
えーと、つまり、実は水素さんのボーンっていうのは、もっと色々な反応が沢山あって、上の式はソレが省略されちゃってるだけ、って事ですか？」

「察しがいいじゃないか。その通りだ。
一般に燃焼反応は、素反応とよばれる無数の反応から成り立っている。
まあ、複雑すぎるからここでは割愛させてもらうが、簡単に言うとＨ２が二つのＨに分かれたり、同じくバラバラになったＯとぶつかってＯＨを作ったりなどの、文字通りに上の式の途中経過の反応だ

とでも思ってくれ。このOだのOHだのをラジカルと呼び、不対電子を持ち、とにかく反応性が強いから、ぶつかるとガンガン反応して燃焼を進行させるワケだ。この際、原子や分子が電離したり、電子が励起したり下方遷移したりする反応も起こっていて、エネルギーが特有な光の形で出てくるから、我々の知るあの眩い発光体となる。因みに、この“電離した気体”の状態が、彼の有名なプラズマだ」

「……。

（ぶっちゃけ半分以上意味不明なんですけど……）

でも、教授。結局、ソレが火炎魔法とどう関係するんですか？

ラスカルさんとか、イオンさんとか、プラズマさんとか、ＳＦ兵器ならいいんでしょうけど……。

なんか、あんまり魔法とは関係なさそうな気が……」

「関係も何も、もう殆ど結論だぞ？

つまり、オレが言いたいのはな。上記の“バラバラになった分子”の雲が、光と熱を出している状態が炎ならば、逆に高熱を与えて同じ様なプラズマを作る事さえ出来れば、ソレはもう炎と見分けなんか付かないんじゃないかって事だ」

「う~……。なんか騙されてる様な気が……。

要するに――、燃える物が何もなくても、分子さんがバラバラになるくらい熱しちゃえば、火の玉が出たみたいに見えるかもしれない、って事ですよね？

でも、そんなコト本当に出来るんですか？

霊子さんって、確か力を強めたり弱めたりってだけの人だった気が

するんですけど……」

「霊子は明らかに人では無いがここではスルーだな。
さて。それでは、そもそも熱とはどうやって伝わる物なのかを考えてみる事にする。
熱が伝わる原理には熱伝導と熱放射、及び対流が存在するが……火炎魔法の説明を考えた際、最も重要なのは熱放射なので、今回はコレだけを取り上げる。
そして熱放射とは、熱源が電磁波を発する事によって熱を伝える現象である」

「電磁波――！！
で、電波ですか！？
ついに本物の電波が飛び出ちゃったんですか！？」

「いや。電波だけじゃ無い。
そもそも電波とは、電磁波の中でも特に波長が――」

「分かってます！！
あ、いえ。プラズマ云々は全然分からないんですけど、そうじゃなくってですね！！
……教授。作者、ガチガチの文系なんですよ？
中身を欠片も理解できない設定資料から会話を作るのって、想像以上に難しいんですよ？
作者さんの、そこら辺の苦労とか、ちょっとは分かってくれてます？」

「……何を言っているのか全く分からんが、話を続けよう。
先ほど既に述べた様に、熱とは電磁波によって伝えられる。
そして君が言った様に、我々の定義した魔力とは“力を変化させる力”であり、霊子とはソレを媒介するゲージ粒子の事だったな？
さて。時に、電磁波とは広義的な意味での光であるから、つまりは“光子（フォトン）だと言いかえる事ができる。
光子と、魔力。そして、電磁気力。
――何か気が付かないか？」

「アレ？　なんか、その単語って、ちょっと前にどこかで見た気も――」

「そうだ。熱放射を光子と電磁気力の単位まで分析して考えてみると、少々強引ではあるが、コレは既に第二回で解明したアダマス鉱の体積変動の話と同一に扱い得る物になる。さて。そして前回、我々の定義する魔力には“光子の交換を促進する事によって電磁気力を強める働き”があるという話だったな？　ならば今回、熱源から発された光に作用してその働きを強めてもおかしくは無いと思わないか？」

「へ？　で、でもでも。そのお話だと、どっちにしてもその“熱源から出る光”が無いとダメなんじゃ……」

「……君には、オレの姿が見えているか？」

「？　はい」

「……何故、オレの姿が見えるんだ？」

「光源からでた光が教授に反射して、ソレがわたしの目に――あっ！！」

「そういう事だ。
自然界には、初めから光なんて物は溢れ返っている。
夜の真っ暗闇だって、“可視光”が殆ど無いというだけで、広義的な意味での光までゼロにはならんぞ？　つまり火炎魔法とはな。そういった自然界に存在する光に魔“力”を加えてエネルギーを上げ、結果生成された高エネルギー電磁波によって空気を形成する分子の結合を切る、或いは電離させる事によってプラズマを生成する魔法なのだと考える事が出来る。言わば“球電現象”だな。我々の世界に於いて科学的に証明された訳では無いので参考程度にしておくが、この時空に於いては、火炎魔法によって生み出されるのはこのプラズマの塊だと考えていいと思う」

「あう～。
相変わらず、ナニがなんなのかサッパリなんですけど……。
つまり、今回の結論は――」

「うむ」

火炎魔法で生まれる火炎とは、電離した空気によって形成されたプラズマの塊である。

火炎魔法の発動過程に於いては、先ず術者の体内に何らかの形で集められた霊子が放たれ、次にその霊子から与えられたエネルギーを周囲を飛び交う光子が吸収・極短時間のみ高エネルギー電磁波が生成される。その後、高エネルギー電磁波のエネルギーを得た空気分子が分解・電離する事によってプラズマが生成されるという現象が起こっていると推察される。

また、火炎魔法の火炎が電磁場の影響をあまり受けていない様に見えるという観察から、現段階では高エネルギー電磁波の発生時間が極端に短いという仮説を提唱しておく。発生したプラズマから再び光子が放たれ、その光子のエネルギーが再び霊子として奪われるといった反応が複雑かつ連続的に起こっていると説明するものである。

火炎魔法の火球が飛翔するという現象は、高密度の霊子が光子と相互作用を繰り返しながら目標物に向けて移動する現象であると考えられる。

「まあ、こんなところだろうな。

こうなると、どうやら魔力というのは、あるゲージ粒子のエネルギーを別のゲージ粒子に移動させる働きを持つ力であると考えて良さそうだ。

あの世界に溢れ返っている霊子の持つエネルギーがそもそもどこから来ているのかについては、またどこかで考察する必要がありそうだな」

「あう～。
なんかよく分からなくて、ちょっとモヤモヤしますよ～」

「百聞は一見に強かずさ。
オレの左手を見てくれ。
例えば今、オレの掌からは霊子が出るとする。
オレはその霊子を用いて掌の上の領域に強い魔“力”を働かせる。
するとこの領域を通過しようとした光子は魔力による仕事を受けて、
そのエネルギーを高めるワケだな。この高エネルギー光子が空気の
分子に衝突すると、その内部エネルギーを大きく高め、電離させた
りバラしたりしてプラズマを生じる。この際、励起した電子が下方
遷移する際に光や熱を出す事で、我々にはそれが炎として認識され
る筈だ。
こんな風にな――」

――ペチ。

「……」

「……」

――――――

「はい！！　それでは、今回のアイアイ★コラムはここまでです！！
どんどん電波で理解不能になっていくこのコーナー！！
一体どこに向かおうとしているんでしょうか！？
三回目にしてコレって、先行きがモノスゴク不安です！！」

「目的地も分からずに暴走している事は否めないがな。
まあ、相変わらず言っている事は何一つ分からんが――。
……ぬか喜びする前に、一応確認しておく。
今回はもう帰っていいんだよな？」

「ムッフッフ～。
教授、そんなコト言っちゃっていいんですか～？
今回、帰りたく無いって懇願するのは教授の方なんですよ～？」

「誰がそんな事を……ん？
ちょっと待て。なんかいい匂いがするな」

「そうです。そうなんですよ。
教授、実は～。
今日はお土産を持ってきてるんです！！」

――ジャ～ン！！

「こ、コレは、まさか……。

あの、懐かしの“アホ毛弁当”！！」

「……教授。
裏でそんなネーミング付けてたんですね……ってああ！！
そ、そんなにがっつかなくても！！
た、沢山ありますから！！
そんなに一気に飲み込んだら、お魚さんが――」

「うまい！！」

「～～～っ！！
き、教授！！　その笑顔は反則ですよ～っ！！
……でも。でもやっぱり嬉しいです！！
料理とか、得意な方だと思ってましたけど、やっぱりおいしいって言われるとスゴク嬉しいです！！
教授、そんなにわたしのお弁当、楽しみにしてくれてたんですね！！」

「……君は、食品偽装についてどう思う？」

「へ？　どうって――もちろん許せませんよ！！
消費者をバカにするな～って、お母さんも怒ってました！！
あ。勿論、わたしだって、買い物する時には産地とかに気を使って――」

「……一度、その母親も連れてこっちに来い。
肉なら何でも気にならなくなるぞ？」

「きゃぁぁあああ！？
い、イヤです！！　その境地、なんだかスゴくイヤです！！
そんなヘンな悟りなんか開きたくありません！！」

「フ。いつか礼をしようじゃないか。
モニ肉のハンバーグ、食ってみるか？
難なら、アルに頼んで“魔女釜”も作ってもらうが……」

「せ、せめて“食べ物”にしてくださいよ～！！
羽化する四つ口の生き物とか、緑の粘液とか、人間の食べ物じゃ無いじゃないですか！！」

「今のオレにとってはな！！　ソレが日常的な“食べ物”なんだよ！！
農薬とか産地とかどうでも良くなるくらいの異次元世界なんだ！！
君にここでこの弁当を食べられたオレの喜びが理解できるか！？
断言する！！　君の玉子焼きは素晴らしい！！
これだけで単位をやってもいいと思える程になぁ！！」

「き、教授！！　そ、そんな、なにも産卵中のウミガメさんみたいな目をしなくても――。

わ、わかりましたよ～！！
どうせ本編に戻ったら記憶無くなっちゃいますけど、今日くらいはゆっくりしていって下さい！！
とにかく、みなさん！！　今日はこのくらいで、さよならです！！
（やっぱり、料理の出来る女の子って、ポイント高いですよね？）」

34．　アイアイ★こらむ？　燃えろ！！　火炎魔法！！（後書き）

・「カツラを取って見せてください」
・敵国民からの襲撃
・魔装屋・ギルの破壊
・時計塔の破壊
・審問会での“カツラ事件”
・魔導研究所の床を地雷原に
・商店街で富豪買い
・バイクで門番をボン！！
・火炎魔法で騎士団をドカン！！
・アスガルド引き摺り自由落下
・「動くなぁ！！
一歩でも動きやがったら、このハゲの毛はねぇぞ！！」
――以上！！　真也君がたった3日で引き起こした大災害の数々でした～！！
……そりゃ悪魔って言われますって。

35．　異世界に於ける二つの大国で最も高貴な位に位置するとある姫及び皇帝

――死んでいた。

武の国王都・ヴィーンゴルヴの中央闘技場。

白塗りの王塔の前庭に位置するその武の広場は、王都内に無数に存在する数多のそれと比しても尚別格な程の歴史と格式、そして荘厳さを誇っている。

古代ローマのコロッセオを彷彿とさせる白磁のアーチ。

飾り気の無い美しさを誇る王宮を讃えるかの様に造形された隔壁には装飾が無く、代わりにこの闘技場にて剣を振るった全ての猛者達の名がビッシリと彫り込まれている。

傍目には無骨にさえ映りかねないその外観は、しかしエニュール文字にて刻まれた名そのものが巨大なレリーフを見ているかの様な優美さを人々に感じさせ、矛盾を正常の物として感じさせる事で民衆の心を打つ。

嘗て“英雄”と呼ばれた猛将の像に守られた正門を抜け、過去の強者達の肖像画が並ぶ廊下に沿って歩んだ先に見えるのが、すり鉢状に設けられた観客席と、その中心に位置する“舞台”であった。

月に数度行われる“イベント”の度に剣戟の音が響き渡り、高き音色に共鳴した人々で観客席を満員にするであろう、世界に名高きその円庭。

だがそれも、夜の帳が訪れた今となっては静かな物である。

まるで全てが息絶えた様な静寂の中、吹き抜けの天蓋から差し込む月明かりだけが、役者の消えた舞台を寂しげに観賞している。

その舞台の中心に、“ソレ”はあった。

全身を青い甲冑で包んだ“ソレ”は、大の字に身体を投げ出しながら、ピクリとも動かずに、色の消えた瞳で夜空を見詰めている。
筋骨隆々な体躯に、包容感溢れる精悍な顔立ちが印象的なソレは、武の国の守護魔・ネプトであった。
異世界人として人並外れた身体能力という“性質”を振り翳す猛者たる彼ではあるが、しかしそれでも人としての外見を備えている以上、“ソレ”という代名詞を用いるのは倫理上適切では無いかもしれない。

――否、である。
その実、今の彼の姿を“ヒト”と形容するのには、些か無理があるだろう。
何故ならば我々が“ヒト”と呼ぶのに必要とする要素は、ただ人型である事のみならず、生命体が醸し出す生気や息遣い、そして、それを確かめさせる為の動作だからである。
先ほどから男は、ピクリとも動いてはいない。
僅かに身を捩る様な、或いは痙攣する様な動きが見えなくも無いが、しかしそれを彼自身の自発的な運動であると識別するのは難しいだろう。
それらはあくまでも、園庭の四方から照らす燭台の炎による“揺らぎ”の範疇を出る物では無いからである。
客観的な分析をするのであれば、土気色の顔で総身を滝の様な汗に塗れ、青髪に土埃りを纏いながらピクリとも動かぬ彼の姿は、誰がどう見ても死体であった。

「ウ〝…ェ……ヌ〝ス……？」

恐ろしい事が起きた。

なんと、死体が苦しげに呻いたのだ。
いや、正確には呻いたと判断して良いのかは分からない。
あまりにも低く、小さく、苦しげに掠れたその音は、人によっては良くて風鳴りの音か、悪くすれば怨霊の怨嗟としか受け取るまい。
充血し、生気を失った群青の瞳が緩慢に流れたのを確かめる事で、初めて人はソレがこの死体の発した声であると理解する事が出来るのである。
……無論。並の神経の持ち主であれば、おそらくは断末魔の悲鳴と共に。

だが。しかし、である。
どうやら声を向けられたその人物は、並の神経を持ち合わせてなどいなかったらしい。
死体が視線を流した先に佇んでいるのは、あまりにも美し過ぎる天女であった。
天人の翼を思わせる純白の衣装に身を包んだその女性は、まるで死者の魂を救いに舞い降りた天使（ワルキューレ）の様に、あくまでも澄ました顔で夜空を見上げている。
彼女を象徴する金糸の髪は、月明かりの中で星屑を散りばめたかの様にキラキラと輝いていた。
この神々しいまでの姿をその視界に納めれば、例えどんな名画家であろうとも自らの稚拙な技量を呪って臍を噛むに違いない。
額には、過激な運動により微かな汗が浮かんでいる。
しかしその無色の滴までもが、彼女程の美貌をすれば、その造形を装飾する宝石としての役割を果たしていた。
美貌の天女、ウェヌサリア・クリスティーは、金剛石の様な汗を大きめのタオルでふき取りながら、幻想的な容姿の中に健康的な色気が混在した佇まいで、ただ白金（プラチナ）の星々に目をやっている。

「な〝……に〝か……、言〝い…わ…け〝……は……？」

死体は、更に呻いた。

宛（さなが）ら死者が最期の力を振り絞ったダイイング・メッセージの様に、消える直前の蝋燭の如く、青髪の死体は心底苦しげに呻いていた。

そんな彼を憐れむかの様に、女神はその視線を夜空から流す。

真夏の夜気を吸い込んだかの様に澄んだ、翠の瞳が、死体となった男とその周囲の光景を映し出した。

――そこは、戦場跡だった。

闘技場だから、という意味では無い。

死体となった男の周囲には、無数の残骸が散乱している。

折れた剣。砕けた鎧。割れた兜。

男の着込んだ鎧には目立った損傷が見られないが、まるでその代償となるかの様に、舞台となっているチェス盤模様の床は抉られ、砕かれ、凹み、爆散されている。

燭台の炎では細かな染みまでは確認出来ないが、舞台には真新しい血痕が無数に飛び散っている様に見えた。

その汗と血痕に塗れた凄惨な光景の中、例え息が有るとしても“死体”が転がっているのであれば、我々はそこを戦場跡と認識しても問題はないだろう。

女神は只、澄んだ微笑を浮かべながら、死体となった男を見据えている。

たった一人と一体しか居なくなった戦場跡。

死体はその女神の微笑に寒気とデジャヴを感じながら、まるで走馬灯を見るかの様に、記憶を事の発端へと巻き戻した。

―――――

「武闘大会に出てみませんか？」

“銀の国”での一件から一週間が経とうとしていたある日の夕方。

その日の鍛錬を終えた男を自室に呼び付けた王女は、手短に挨拶を済ませてから開口一番にそう切り出した。

微かに刃こぼれした短刀を鞘に収めながら、当たり前の様に疑問符を飛ばした男。

王女は身の丈程もある戦斧を優雅に壁際の武器棚へと戻すと、コホンと咳払いをしてから補足した。

「既に存じているとは思われますが――。

明後日は年に2回行われる、“選定の剣技会”の日なのです」

男は、粉砕された床板を足で慣らしながら相槌を打った。

武術王国の名を冠する武の国（ウォルヘイム）では、武闘大会は国民の人気を集める一大興業としての認知を受けている。

王都内に散在する闘技場は、面積だけで言えば王都自体の約半分を占め、休日には恋人や家族連れ、友人同士など、老若男女が猛者達の力と技を拝もうと押しかける程である。

この国に於いて武闘大会というのは、そこまでポピュラーな娯楽の一つとして定着していた。

そして王女によると、そういった毎週の様に町中で行われている小さな武闘大会の他に、国中の人々が熱狂する取り分け大きな大会が年に2回行われているのだと言う。

――それが、“選定の剣技会”。
国民的人気を博しているこの大武闘大会は、参加する強者達とそれを一目見ようと熱狂した民衆で、正味一週間に渡って王都（ヴィーンゴルヴ）を埋め尽くすのである。
出場するのは名の有る名将ばかりという事もあり、国家最大規模のこの大会を勝ち抜いた者は真の猛者として認知され、強さが全てとされるこの国に於いては相応の地位を確立出来るという事だった。

王女曰く――、

「貴方がこの国に来てから2週間程が経ちましたが――。
そろそろ、貴方も実力を知らしめなくてはならない時期だと思うのです」

と、いう事らしい。

今の男の立場は、彼女の従者である。
良く考えずとも、素性の知れぬ異国民が第一王女の従者となっているという事実は民意として色々と問題があるのだろう。
いくら男が鍛錬や王女との“挨拶”によってそれなりの技量を示しているとはいえ、実際の戦績が皆無なのでは、色々と立ち回りに問題が起きるのは道理であると言えた。
……まあ。強ければそれも万事解決、というこの国の住民の思考回路には、男は頭痛を覚えずにはいられなかったワケだが。

「別に、いいけどよ。
あれって、予選ってのがあるんじゃ無かったか？」

“挨拶”で砕け散った燭台を廃品箱に放り込みながら、男は確かめる様にしてそう問うた。

彼も一応、あくまでも噂の範疇で“選定の剣技会”の内容を理解してはいた。

毎週の様に行われている小大会に於いては、試合は参加者の実力に応じてかなり細かにランク分けされており、とうに現役を引退した老人から剣の握り方を覚えたばかりの子供まで、それこそ誰もが楽しめる様に配慮されているのだという。

だが、国民的イベントである“選定の剣技会”だけは別なのだ。

男が小耳に挟んだ話では、国最強の戦士を決めるその大会にはランク分けなんていう悠長な物は一切存在せず、言わば“真の無差別級”とでも形容すべき内容らしい。

“参加資格：腕に覚えのある者。以上”

比喩でも何でも無い。募集要項には、本当にこう書かれているらしいのである。

あまりにも希望者が集まりすぎる為に参加者の絞り込みが効かず、仕方ないので、月に一回行われる予選大会の決勝トーナメントに出場する事が本選出場の条件となっている、という話であった。

因みに、最後の予選が行われたのが一週間ほど前。

丁度王女と共に銀の国に殴り込みを掛けていた頃のお話であり、当然ながら男は参加などしていない。

男の疑問に対して、王女はあくまでも凛とした態度で返答した。

「問題ありません。

ちゃんと“飛び入り参加枠”という物が存在します」

「……」

――それ、ちゃんとしてるのか？

男は、酷い頭痛を覚えて破片を集める手を止めた。
そんな彼を尻目に、王女は当たり前の様に“はい”と答えて説明を始める。

――数百年ほど前の出来事である。
選定の剣技会の本選が行われている最中に会場に飛び込んだ二人の若者が、並み居る猛者達へと次々に挑みかかり、その全てを瞬く間に叩きのめした事件があったのだという。
当時は誰が誰を倒したのか分からない程の乱戦になってしまった為に無効試合扱いにはなったらしいが、それ以来、真の強者ならば予選大会に出席していなくとも本選の枠に組み込むべきではないか、という世論が武の国全体に巻き起こったらしいのだ。
その結果生まれたのが、その“飛び入り参加枠”。
大会の前日に希望者を集めて戦い合わせ、勝ち残った一名をその足で本大会に出場させるという、なんとも常識破りな枠なのであった。

……飛び込んだ二人の若者の正体が、当時の武の国第一王子とその守護魔であったという事実は秘密である。

「ふ～ん。要するに、俺にその枠で本選に出ろって事か。
ま、命令なら聞くけどよ。
そんで？　どれくらい勝てばいいんだ？
確か第一中隊のおやっさんが３回戦に進んだのを自慢してたから、俺もそんくらいか？」

「まさか。私がそんな出鱈目を言うとでも？」

――選定の剣技会。

国中の猛者が一堂に会する、武の国最大の大武闘大会。
その熾烈さを良く知る第一王女様は、見た者全てが忠誠を誓ってしまう程の、澄み切った微笑を浮かべながら、男を労わる様にしてこう答えた。

「貴方は私の従者ですからね。
無論、敗北など考えられません」

ある意味予想通りの返答に、男は肩を竦めながら頷いた。

――――――

“飛び入り参加枠選考会”は、翌日の早朝から行われた。
ウェヌスの指示通り、遅れずに“第３７闘技場”の前に訪れたネプト。
彼は到着するなり、暫しその場で呆気に取られて立ち尽くす羽目になった。

会場に行くまでの通りが、既に大勢の民衆でごった返していたからである。

カップル、家族連れ、酒場のバーテンにパン屋のおじさん。
十代前半くらいの少年たちの集団が、和気藹々とした雑談を交わしながら石造りの正門へと吸い込まれていく。
旅服に大荷物を抱えている集団もちらほら並んでいるところを見ると、かなり遠方から来ている観客も多い様だった。
こんな予選の敗者復活戦みたいな試合にすらこんなに人が集まるのだから、国民のこのイベントに対する熱の入り様が良く分かる、

などと客観的な解釈を示しつつ、男は会場内へと足を運んだ。

……その観客達が全て“参加者”だったという事実を知った男が卒倒したのは、それから約１０分後の出来事であった。

そう。男は未だ、このイベントに対する国民達の熱の入れ方を嘗めていたのである。

先も述べた様に、この“選定の剣技会”には一切の出場資格が問われない上に、本選に出場すれば国中に名を轟かせる猛者達と剣を交える機会を得られるのだ。

銀の国の研究者に“三大欲求よりも戦闘意欲が強い生き物”とまで分析されている武の国の国民達がこんな都合の良いお祭りを見逃す筈も無く、この飛び入り参加枠を勝ち取ろうと、選考会には実に国民の過半数もの人数が参加していたのである。

どうやら男の居る“第３７闘技場”のみならず、現在は王都内の全闘技場が似たような状況になっているという話であり、選考会は最早何の集まりなのか分からない様な惨状を呈していた。

そしてこの暴動もかくやという大混雑の中から、本選に出場できる人間はたった一人。

……男は、改めてこの国の人間達の頭のおかしさを実感する事になった。

当然ながら、一々参加者を個人識別している余裕など誰にも無い。

１回戦の内容は、大体１００人くらいの参加者を舞台の上に上がらせて無差別戦闘。

１０分後に立っていた者が2回戦進出という極めて大雑把なモノであった。

だが、まあ。寧ろ、この大雑把さこそが武の国の流儀であるとも

言えるだろう。
目につく殆どの参加者が町人とか一般人にしか見えないという奇妙な武闘大会ではあったが、しかし主人に勝てと命令された以上、手を抜くなどという常識を男は持ち合わせてはいない。
主の命を尊守するという行司は、嘗て誓った鉄の掟として、世界を渡った今でも変わらずに男の中に在り続ける信念だからである。
男は女子供を一人一人丁寧に舞台の外に下ろして“場外負け”にしてから、中央で乱闘しているムキムキの町人（一般人のガタイじゃない）に寧ろ積極的に挑みかかり、１０分で綺麗に１００人を仕留めて２回戦進出を決めた。

……結論から言うと、コレが不味かった。
１回戦で図らずも圧倒的な実力を誇示する事になった男は、２回戦以降同組のメンバーのほぼ全員から徹底マークされる羽目になったのである。
無論、ここは彼の武術王国・武の国（ウォルヘイム）である。
マークの理由は詰まらぬ打算などでは勿論無く、寧ろ“猛者と戦うチャンス”なんていう真逆な意思による物であったのだが、男に齎される結果は何一つ変わらない。
彼は、試合開始の合図と共に１００人を超える２回戦メンバーから袋叩きを受ける羽目になった。

だが、彼は強かった。
１回戦の乱闘を勝ち抜いただけあって全体的にレベルが上がっており、しかもその全員から総攻撃を受けるという凄まじい状況にも関わらず、男は再びその全てをきっかり１０分で場外へと叩き落としたのである。
元々、元の世界でも戦士として名を馳せていた上に、今では“身体能力補正”まで得ている彼である。
民衆など、それこそ１０００人で掛って来ようとも全く敵では無

かった。

……無論、いくら彼でも２００人と戦えば相応の疲労は感じるが。

後はその繰り返しであった。

毎回毎回総攻撃を仕掛けてくる１００人を超える同組メンバー達に、息つく暇すら無い連続戦闘。女子供でも強いヤツは強く、４回戦くらいまでは５キロはあろうかという鉄球一（反則）を振り回す母ちゃんとか、死角を上手く突いてくるナイフ使いの少年一（木刀以外は禁止）などが散見されたのではあったが、６回戦を過ぎた辺りからはほぼ大男ばかりのむさ苦しい戦いになった。

おそらく、常人では体力が持たないのだろう。

３回ほど会場を移動した頃から場外で陸揚げされた金魚みたいになっている参加者が目につく様になったので、その解釈は間違っていないのだと男は信じている。

また、男が覚えている回戦数はそこまでである。

その後はもう、数えるだけ無駄だと知って諦めた。

予選は夜を徹して行われた。

比喩でもなんでも無く、国民の過半数が参加しているこのバカ祭りからたった一人の予選通過者を選ぶ為には、文字通りで夜通し戦い続けなくてはならなかったのである。

流石に日付が変わる頃になるとガタイの良いマッチョ軍団でも限界が来たらしく、発狂したり幻覚症状を起したりしてバタバタ倒れていく者が後を絶たなかった。

衛兵の淡々とした処理を見た限り、この事態は珍しくないどころか寧ろこの選考会の風物詩になっているらしい。

倒しても倒しても、次の相手がどこからともなく涌いてくるという無限トーナメント。

しかも、戦う毎に相手のレベルと発狂指数がうなぎ上りに上昇し

ていくというデスマッチ。
流石の男にも体力の限界が迫る中、武の国十傑に名を連ねる“サイクロプス”の異名を持つ隻眼の名武闘家―（何でこんな所にいるんだ）をどうにかこうにか叩き伏せたのは、本選開会式の３０分前の出来事であった。
直後、“開会式に整列出来なかった選手は問答無用で失格”という話を告げられた男は、人込みでごった返す大通りをフラフラになりながらも全力疾走し、宣誓の５分前になんとか中央闘技場へと辿り着いたのである。
王族用の展望席に座るウェヌサリア王女が、会場入りした男に零れんばかりの笑顔を向けて来たのが印象的だった。

本選は地獄だった。
選考会と違って一応は一対一のトーナメント形式になってはいたものの、予選を勝ち抜いて来た猛者達と言われるだけあって、どの参加者一人を取っても飛び入り参加枠のそれとは練度が段違いだったのだ。
怪しげな暗殺剣を使うマスクの男に、殴っても殴っても手応えの無い妖術師。
流石に全員模造刀を使うというルールは尊守してはいたものの、先天魔術（ギフト）の使用が禁止されていない事もあり、男は段々自分がナニと戦っているのかすらも分からなくなってきた。
それでも彼が本来の実力さえ出せていれば、それこそ初撃で勝負を決められる程度の相手ばかりではあったのだが……。徹夜の激戦を抜けたばかりの彼には、一戦一戦が凄まじいまでの疲労としてその背に伸し掛かったのだ。

それでも、やっぱり男は強かった。
この“飛び入り参加枠”から本選に出られた選手は過去５人しか

おらず、しかもその全員が試合開始と共に瞬殺されるという事態が半ば伝統として定着している程だったのではあるが、そんな常識をねじ伏せて余りある程に、やはりこの青い男は強かったのである。

どうせ直ぐに力尽きて倒れるだろう、と、どこか諦観染みた視線を送っていた民衆たちの反応は、彼が2回戦の相手である“第一中隊隊長”を仕留めた時点で驚嘆に変わり、3回戦で身長3メートルを超える大男を場外に吹き飛ばした時点で歓声に変わった。

しかもここに至るまで、男はその鎧に一切の損傷を負ってはいない。

予選大会に出ておらず、それどころか国民が名前すら知らなかった青髪の男が並み居る戦士たちを叩き伏せる度に、会場には驚愕の声と割れんばかりの大歓声が巻き起こる。

特に彼が“飛び入り参加枠”として、国民の過半数をねじ伏せて上がって来たのだというその事実に、人々は嘗てその枠を生み出した幻の強者の影を重ねて息を呑んだのだった。

王女ウェヌサリアだけが、ただ落ち着き払った面持ちで、満足げに眼下で繰り広げられる“伝説”を見守っていた。

決勝が終わったのは、太陽が既に地平線の彼方へと沈んだ後だった。

相手は、嘗て“最強の剣士”と呼ばれた男と戦って唯一生き残ったと言われる正統派の騎士。

一切の無駄無く、流麗に攻め立てるその騎士の猛攻をいなし、弾き、極度の疲労で霞む視界を心眼で補いながら剣戟を交わすこと、実に一刻。

男は灯された燭台に敵が気を取られたその一瞬を見逃さず、全力の剣戟を騎士の腹へと叩き込んだ。

そして、確かな手応え。

模造の木刀とはいえ、彼の力で叩き込まれた一撃である。
剣戟は騎士の鎧を砕き、跳ねあげ、一刀の下に場外までその体を撥ね飛ばした。
――瞬間、巻き起こった大歓声。
観客は総立ちになり、最後まで舞台に立ち続けた“英雄”の誕生に割れんばかりの拍手が送られた。
場外に撥ね飛ばされた騎士がよろめきながらも立ち上がり、舞台に戻って男と固い握手を交わした時、会場のボルテージは真夏の熱波よりも尚熱く燃え上がった。

限界を超えた疲労によろめきながらも、剣を掲げて拍手に応えた青い英雄。
本音を言えばそんな事をしている暇があるならさっさと休みたかった彼ではあったが、しかし未だ衆目に晒されている以上は、主人の手前膝を着く事など有り得ない。
男は倒れそうな体に鞭を打ち、健在のフリをしながらあくまでもポーズを取り続けた。
そんな彼に向けて、王族用の観覧席から降りてくる一つの影。
“清楚可憐な白薔薇の姫”、ウェヌサリア・クリスティーであった。
彼女は心の底から嬉しそうな、零れんばかりの笑みをその美貌に浮かべながら、祝福のキスでも授けそうなくらい感動に潤んだ瞳と共に、自らの命を果たした従者の下へと緩やかに階段を降りて来た。
……何故か、その腰に試合用の模造刀をぶら下げながら。

「さあ。優勝者の彼には、今大会最強の男の証明たる宝剣と――」

不思議に思って首を傾げていた男をよそに、天高く響き渡った司会の声と観客の雄叫び。
そんな彼の疑問をサラりとスルーしながら、司会者は感極まった

声で叫んだ。

「ウェヌサリア第一王女への挑戦権が与えられます！！」

“いらねぇぇぇぇえええええええええ！！！！”

――いらない。

ソレは賞品では無く罰ゲームである。

謹んで辞退しようと両手を振った男の所作を、戦意の顕れと受け取って更に囃し立てる国民達（バカ）。

男の心からの抗議の声も、大観衆による壮絶な鬨の声に掻き消された。

そうこうしている内に、男の前で構えを作った武装姫と間に入った審査員。

涙目でナニかを懇願する男に姫が女神の笑みを零す中、その日最後の戦いは堂々と幕を開けてしまった。

王女は手強かった。

こうして正式な武闘会で戦ってみると、普段の剣戟があくまでも“挨拶”であった事を思い知る。

いや、もうホント。どういうワケなのか、さっきまで戦っていた武の国の誇る猛者達と比べても、更に別格なくらい王女様は強かったのである。

風を切る羽の如き身の熟しで男の攻撃線を避けたかと思えば、視界の外から神速で閃く無駄の無い剣戟。

筋力では流石に体格で勝る男が有利ではあったが（それでも何故かさっきの騎士より一撃が重い）、疲労で満足に身動きが取れない

という事もあってかなりの苦戦を強いられる事になった。
昨日から散々に戦いまくった事で、多少なりともこの世界の“理”に身体が慣れていなかったら、それこそ一方的に遣り込められていたかもしれない。
ついでに言うと、試合用の模造刀が木製であった事も男にとっては幸運であった。
……もしもこの剣が金属製であったのならば、彼女の先天魔術を鑑みるに勝てるワケが無いのだから。

だが。例え相手が王女であろうとも、一度“負けるな”と命じられた以上、男にとって敗れる事など許されない。
極度の疲労で視界が霞み、崩れ落ちそうになる身体を気力だけで支えながら、男は武の国最強の剣戟を紙一重で捌き続けた。
神域の攻防は1時間にも及び、闘気に当てられた観客達がバタバタと倒れ始めた頃、不意に決着の瞬間は訪れた。
散々無理を重ね続けた男の模造刀が軋みを上げ、遂には耐え切れなくなって王女に粉砕されたのである。今にして思えば、決勝戦の騎士の鎧を叩き割った時点で既に罅くらいは入っていたのだろう。
何はともあれ、この戦闘ジャンキーな王女様がその隙を見逃す事など有る筈も無く、武器を失った男の足元を下段で叩き伏せ、転ばせた後喉元に剣を突き付ける、という見事な連携で勝負を決めたのであった。
少々不本意な決着の仕方ではあったものの、最強の栄誉を守った王女と健闘した英雄には惜しみの無い拍手が送られた。

試合が終わった後には、王宮での楽しい楽しい祝賀パーティーが待っていた。
大会に参加したメンバーを中心に、観戦していた観客たちを集めて皆で立食しながら酒を飲むのである。

……無論、コレにも武の国の流儀が多分に含まれている。
祝賀会、と言えば聞こえは良いのではあるが、その実コレは“大会にて名を馳せた強者”と市民との交流会という名目が強かったのだ。
そして慣習として、この国には“選定の剣技会”の本選に出場した者には、パーティーの最中ならばいつどこから斬りかかってもいい、という暗黙の了解が存在する。
つまりはパーティーの間中、参加者は唐突に襲い来る剣戟を常に警戒しながら食事をし、酒を飲まなくてはならないのである。
――無礼だと思われるだろうか。
だが、敢えて武の国流に言うのであれば、それに堪えられない様な軟弱者は強者を名乗る資格が無いのである。

無論、それはあくまでも例年の話である。
実力が未知数であった事や、この世界に無い未知の剣術を使っていた事、そして飛び入り参加枠から優勝した事も相俟って、今回は参加者の殆どが揃いも揃って男に挑みかかるという異常事態が発生していた。
それはもう、誰がどう見ても集団リンチにしか見えない様な惨状であった。
最強の座を防衛した自分よりも多くの民衆に挑まれている男を見て、機嫌を損ねた王女様までもが男に挑みかかるというアクシデントも発生し、彼は再び中央闘技場に舞い戻って全ての挑戦をさばききる羽目になってしまったのである。

……最終的に倒した人数は、果たして何桁だったのか。
数えようとして、思い返しただけで過労死しかねない程の精神的苦痛を覚えた男は諦めた。
正味丸一日と、更に半分を通した連続戦闘。
人間の限界を超えた労働の代償として、当然の如く男は死んでい

たのである。

――――――

「貴方は、未だ本来の実力を出し切れてはいません」

散々暴れた皆が帰った後の、中央闘技場の舞台の上。

死体となった男が発した問い、“ウェヌス、何か言い訳は？”に対する彼女の返答がソレであった。

あくまでも凛とした、思慮深そうな面持ちを崩さぬままに、第一王女は銀細工を鳴らした様な声で弁明する。

男はその言い分に、苦笑しながらも頷いた。

王女の言う事は、確かに正しかった。

男の生まれ育った世界では、何もかもがこの世界よりも重く、動かしにくく、そして硬かったのである。物理学者の“彼”がその話を聞けば、おそらくは重力がこの世界よりも遥かに強く、そして電磁気力による結合も同様にして強固な世界であったと分析するだろう。

――今の男の状態を理解するには、月に降り立った地球人の例を想像して頂けると分かりやすい。

月の重力は、地球のソレに比べて僅かに6分の1程度しか無い。

もしも我々が月面に降り立ち、全力で跳躍したとしたら、恐らくは地球上での約6倍の高さにまで飛び上がる事が可能だろう。

だがそれは、そのまま月面での行動が地球よりも楽である、という事実を意味する訳では無い。何故ならば重力が6分の1になる、という事は、即ち重力に従う全ての運動の速度が6分の1になって

しまうという事だからである。
例えば剣の重さを利用した振り下ろしは当然にして地球上よりも動きが遅くなり、投合という動作の狙いは狂うどころでは無くなる。
否、それどころか。普通ならば戦闘はおろか歩行すらもままならないだろう。
それは例え本職の宇宙飛行士であろうとも、である。

男は当然の如くそんな知識など持ち合わせてはいなかったが――。
だからこそ特に、この世界があまりにも“フワフワし過ぎて”動きにくいという事実を肌身に感じる事になった。
人間離れした身体能力故に誤魔化しが効いてはいるが、男が生涯を掛けて磨いてきた“技”を満足に生かせていない以上、王女の主張はこの上なく正しいと言える。
苦笑いを浮かべて夜空を見続ける男に、王女は凛とした雰囲気を崩さずに続けた。

「貴方は私の守護魔（ガーディアン）です。
いくら私や他の騎士達と鍛錬に勤しんでいるとは言え、やはり“訓練”では実戦とは勝手が違うでしょう。
私は貴方に、武闘大会という実戦の場で多数の猛者達と剣を交える事で経験を積み、一刻も早くこの世界の理に慣れて頂きたかったのです。
少々荒療治かとも思われましたが――。
真の力を温存した状態で生き残れる程、この“儀式”は温い物ではありませんから」

「……」

王女の返答は完璧であった。
これだけを聞いていれば、彼女はなんと思慮深く、才色兼備な素

晴らしい王女様だろうかと、男はつい感心してしまった事だろう。
ホント、もしも男が彼女というものを全く知らず、このセリフだけを聞いていたとしたら、心からそう感じて頷いていたに違いない。
……ありえないが。

「……それだけか？」

「本来の実力を発揮した貴方と本気で戦ってみた――こ、コホン。いえ。何でもありません。
ネプト、今日の剣舞は見事でした。
あれ程の腕があれば、この世界に貴方の敵など居ないでしょう」

「……」

男は、漏れてくる溜息を抑える事が出来なかった。
……そうである。
このお姫様の考える事など、大体そんな感じなのである。

半ば呆れを通り越して、男は茫然としていた。
湿り気を含んだ夏の夜風が、妙に生温く感じられる。
王女は、切り替える様にして咳払いをした。

「でも、残念でしたね」

「ん？」

疑問符を飛ばす男。
その疲れた顔を覗き込みながら、美貌の王女は神妙な面持ちで話を続けた。

「もしもあの時剣が折れなければ、勝ち名乗りを受けたのは貴方だったでしょう。
あと半刻も凌がれれば、流石の私でも息が上がっていました」

「……俺は息が上がってるどころじゃなかったけどな。
それに剣なんざ、折られた俺の負けだろ。
実戦じゃ、得物が折れたからって敵は待っちゃくれねぇからな」

――珍しい事もあるものである。
試合とはいえ、勝負は勝負だったのだ。
模造刀が折れたのが決め手であったとはいえ、決着に“たられば”を持ち出すのは、彼にはどうにもこの王女様らしくない態度に思えた。
男が訝しそうに目を丸くしていると――。

「私に勝てていれば、素晴らしい“副賞”があったかもしれないのに、ですか？」

……王女は、そんな恐ろしい事を言い出した。

「要らねぇよ！！」

余りの恐怖に、男は動かない身体で尚身震いした。
――何と恐ろしい事を仰る王女様なのだろうか。
優勝したと思ったら王女との戦闘なんていうトンデモナイ副賞が

あったばかりだと言うのに、もしも彼女に勝ってしまっていたとしたら、更なる副賞が彼に襲い掛っていたと言うのである。
……そんな副賞の無限ループなど、一体誰が要るものか。
男は、謹んでお断りする事にした。

「……む。
随分と、失礼な事を言うのですね」

男の返答を聞いた王女は、形の良い頬を余人には分からぬ程度に膨らませながら、僅かに不機嫌そうな声色でそう言った。
理由が分からず、訝しげに首を捻った男。
王女は、少々気まずそうな面持ちになっていた。

「……何でもありません。
ええ。そういえば、貴方はそういう為人（ひととなり）の持ち主でした。
分かってはいましたが。
まったく、随分と無欲なのですね……」

「？」

何故か頬を赤らめつつ、妙にソワソワした態度でそう告げた王女。
……後日、“選定の剣技会”がナニを選定する会だったのかを聞いた男は青褪める羽目になるのだが、ソレはまた別のお話である。

「――さてと」

“祭り”が終わってから、どれくらいの時間が経過しただろうか。

全身の筋肉を満たしていた疲労物質が分解され、ある程度身体が動く様になった事を確認した男は、ユラリとその上体を起こし、立ち上がった。

「？　もう動いても大丈夫なのですか？」

「んあ？　まあな」

気遣う様に尋ねる王女に対して、男は埃塗れの短髪をグリグリと掻きながら答えた。

因みに、男がこうなる理由を作った張本人たる彼女が目を丸くしているのは、別段無責任でも何でも無い。

少なくともこの国に於いては、“通過儀礼”を終えた優勝者は３日ほど寝込むのが極々当たり前の行事として罷り通っているからである。

ソレがこの国と、そして彼女の常識なのである。

誰が何と言おうと、常識と言ったら常識なのである。

常識なのだから、もう仕方の無い事なのである。

……無論、男とて完全に納得している訳では無いが。

「なんかよぉ。こっち来てから、やたら疲れが取れんのが早ぇんだ」

とは言え、郷に入っては郷に従えである。

自分の主人がソレを“常識”として持ち合わせている以上、従者という立場を与えられた男にはあれこれ講釈を垂れる権利も主義もありはしない。

せっかく疲労回復が早い、なんていう特典が付いている様なのだし、一々主に不満を言う程の事では無いと男は考えていた。

それに――、

「それによ。休みたくても、悠長に寝てるワケにゃいかねぇみてぇだ」

「――――？」

どういう事なのか、と王女が声を発しようとした時には、既に男が剣を放った後であった。

鍔鳴りの音が闇夜の静寂を断ち切り、剣風がゴウと音を鳴らしながら空を薙ぐ。

瞬間、王女の視界には拳大の紅焔が断ち切られ、男の生み出した真空に吸い込まれて消滅したのが映った。

鳥が囀る様な炎の音と、高い金属音がコロッセオの舞台に残響し、王女の意識が一瞬で氷点下へと切り替わる。

「……ったく、これで昨日から何戦目だ？

一の二の三の……やめだ。めんどくせぇ。

おい、ガキ。中途半端に隠れてねぇで出てきやがれ」

辟易した態度で、しかしそれ故に余裕を醸しながら、青い従者はその双眸を観客席へと流した。

すり鉢状に設けられた観客席の一角。

席数にして２０段目に当たるその場所から、燭台の灯りに紛れるかの様に、赤銅色の影がユラリと乗り出した。

「ヒヒヒ！！　さっすがチャンピオン！！

よく気付いたじゃね～の」

甲高い、しかし相手を小馬鹿にした態度を隠そうともしないふて

ぶてしさで、その少年は彼らの前に現れた。
右手に奇怪な形状の火炎銃を構え、背には身の丈程もある大筒を背負った小柄な影。
氷の国の守護魔・マルスである。
少年は自らの奇襲を悪びれた風も無く、しかし男がそれを防いだ事が心底愉快だとでもいった様子で、ケラケラと笑いながら舞台を見下ろしている。

マルスの揶揄に、ネプト(ネプト)は双眸に敵意を漲らせながら答えた。

「テメェの殺気は隠せてねぇんだよ。
それとその赤髪は目立ち過ぎだ。
ま。テメェは暗殺にゃ向かねぇな」

「んあ？　殺気？　何で隠さなきゃなんね～の？
何でおれっちが、テメェの為に気ぃ使わなきゃなんねーワケ？」

少年は青い従者の殺気を浴びて尚、飄々とした態度を崩さずに観客席の階段を降りてくる。
奇妙なのは、少年の歩みそのものであった。
見た目に硬質な靴を履いているのにも関わらず、白石造りの階段を踏みしめる彼の足からは、一切の足音が響いてはこないのである。
――歩行。
守護魔がその単純な所作一つを取っても常識を外れる存在である事を思い知らされ、王女の背筋には冷たい汗が滴った。
少年は男の剣へと悪ぶった視線を向けながら、心底嬉しそうに破顔した。

「見てたぜ～？　デカブツ。
テメェ、今日も色々大活躍だったじゃねぇの。

まったく良くヤルねぇ。
何かっつーといっつも姫様姫様主様ってよ～。
“主様の為にしか、剣握りません！！”ってか？
よっ！！　ゾッコンだねぇ！！
バカじゃねぇの？」

――12段。
少年は尚も怖じずに、男に雑言を喚きながら歩みを進める。
右手に収まる火炎銃の標準は、その軽口とは裏腹にブレる事無く男の姿だけを捉えていた。
少年が歩を進める毎に、纏う殺気を徐々に強めながら、男は柄を握る手に力を込める。

「……知ってるか？
誰かの為に使えない力ってのは、只の暴力だそうだ」

「タ～コ。力なんざ全部暴力だよ。
自分（テメェ）の為に使えなきゃ損だろ」

――3段。
舞台の前列に程近いその石板を踏み抜いたところで、少年の身体は軽やかに宙を舞った。
ネコ科の動物を思わせる身軽さで跳躍した赤髪の獣人は、軽快な足遣いのみでその身体を十数メートルも跳躍させ、足音一つ無いままに、20メートルの距離を隔てて舞台の上へと降り立った。
その在り方は、それその物が、既に青い従者とは真逆。
体格、理のみでなく、世界観すらも対極に位置する少年は、自ら

の立ち位置を明確にするかの様に、左腕の火炎銃を前方へと突き出した。

「ハッ！！　そんじゃ決勝戦といこうぜ、チャンピオン！！
今日は邪魔者もいね～しよ。
きっちりケリ着けようや」

宣戦を告げる少年。
男はただ黙したまま、ニヤリとその口元を緩めた。

「姫様。暇だと思うが、ちぃと下がっててくれ。
どうせ直ぐに終わるからよ」

少年が引き金に意識を向けたのを感じた男は、握った短刀を下段に下ろし、いつでも迎撃出来る様に重心を下げた。
――“加勢が必要か”。
青い従者の消耗を知っている王女は、一度だけそう問おうとして、口を噤んだ。
彼の纏う闘気を見れば、そんな物が不要である事は明確だからである。
疲労も、憔悴も、意識を“殺し合い”に切り替えた男にとっては何の枷にもなりはしないらしい。
男の纏う雰囲気は、その実先刻の大会時と比しても尚充足した物であった。

「いいでしょう。ですが――。
あまりに王族を待たせては従者失格です。
私が暇だと感じぬ内に仕留めて下さい」

――彼は、負けない。

未だ手に残る剣戟の残照を余韻とした王女は、それを確信したからこそ、微笑を浮かべつつ自らの従者から3歩、距離を取った。
残骸の散乱する闘技場にて対峙する、二人の魔人の姿をその翠の瞳に映しながら――。

「安心しろ、武装姫よ。
心配せずとも、どの道貴様に暇など許さん」

――瞬間。
耳元で囁かれたその声に、王女の背筋は凍りついた。

「な――――――!?」

寒気がした。
反射的に“祝賀会”から持ち続けていた剣を振り出し、耳元の“誰か”に向かって一撃を加える。
――手応えは、無い。
剣を振り出した先には、その実燭台の炎しかありはしなかった。
だが錯覚、などでは断じて無い。
今の一瞬、王女の左には、確かに誰かが居たのである。
突如として感じた冷気と共に、耳元に掛った生々しい吐息の感触。
全く気配を感じさせずに現れたその“誰か”は、王女の耳元でそう囁いた次瞬、その場から既に消え失せた。
そうとしか、思えない。

「やれやれ。見た目に似合わず随分なジャジャ馬だな。
予が敵で無かったらどうしたというのだ？
まあ、可愛気があるだけましと評してやるが……」

「――――！！」

今度は、右。
突如として現れた気配に身震いしながら、王女は再びその剣を突き出した。

だが、またしても居ない。

耳元で声を発しながら、しかし一切の姿を見せないその相手に、王女は底知れない不気味さを感じていた。
――声からすると、恐らくは女。
それも王女自身よりも、ほんの2～3ばかり年上の物に思える。
王女はまるで纏わりつく幽霊を振り払うかの様に、自らの周囲を破れかぶれに薙ぎ払い続けた。

凍りついたのは王女だけでは無かった。
相対していた二人の魔人すらも、突如おかしくなった王女の様子と謎の声に、強い困惑と血も凍る様な恐怖を覚えて硬直していた。
――因みに、困惑しているのが青い従者。恐怖を覚えているのが赤い少年である。
青い従者が硬直した本当の理由は、寧ろ聞こえた声によって、少年の様子が死病持ちもかくやという程におかしくなってしまった事であった。
赤髪の少年は目を剥き、ガチガチと歯を鳴らし、ガクガクと膝を震わせながら、先ほどまでの気勢がウソだったかの様に蒼白な表情

で怯えている。

「フハハハハ！！　少々悪ふざけが過ぎた様だな。
まあそう逸るな。予は逃げも隠れもする気は無い」

三度聞こえた、傲岸不遜な女の声。
ソレが響き渡った瞬間、強烈な冷気が闘技場内に吹き込んだ。
まるで現在は夏季に当たる筈の武の国が、一瞬にして極寒地帯にでも繋がってしまったかの様な、あまりにも自然の摂理を無視した冷気の奔流。
ブリザードすらも含んだその突風が吹き抜けたが為に、闘技場の四方に設けられた燭台は消えそうな程にユラユラと揺らめき、チェス盤模様の床に散乱していた鎧の破片は飛ばされ、割れた兜には結露が付着した。
――そして猛風に目を覆おうとした瞬間、王女は“ソレ”を見た。
まるで凹レンズの様に歪み、切り取られたかの様に空中に浮かんでいる雪原。
大魔導としての素養も持ち合わせる王女は、瞬時にその意味を理解した。

“アレは、穴だ”。

世界を喰い破り、遠く離れた氷の国（フィンブルエンプ）とこの闘技場を縫い合わせた、虚界のトンネル。
それは恐らく、件の“特異術式”を用いた結果なのだろう。
そしてソレを可能とする先天魔術（ギフト）を保有する人物は、この世界ではただ一人。
彼女がそう理解した瞬間、極寒の冷気を纏いながら、その気配は

闘技場へと姿を現した。
……何故か、赤髪の少年の真上から。

「ヒャブゥゥウウウウッ！？」

奇声をくぐもらせながら、赤い少年は床を舐めた。
否。食い破られた空間を通り抜けて現れたその女に頭を踏みつぶされ、床に顔面を押し付けられたのである。

「な――――っ！？」

驚愕の声を上げて、あまりの事態に言葉を失って硬直する王女。
その理由は突如女が現れたから、というだけでは無い。
女が現れたという状況に加え、何よりもその“姿”を見た瞬間、王女の脳内は凄まじい激情の奔流によって侵される事になったのである。

だって――。

「何ですか貴女その格好はーーーーっ！！？？」

王女の目の前に現れた女は、なんと下着姿だったのである。
否。下着なんていう生易しい物では無い。
下着とは恥部を隠すモノを指すのであって、断じて局部を隠す為の物では無いからだ。

クリアブルーの長髪を靡かせる女は、本当の、本当の本当に一番ヤバい部分しか隠していない様な、富裕館のダンサーみたいにアリエナイ服装に赤マント一枚という凄まじい格好で、でも何故か妙に堂々としながら現れたのである。

しかも、その……。色々な部分が、かなり大きい。

いや、もう。一途に訓練に勤しんで来た王女の拙い思考回路を一瞬で崩壊させてしまう程に、その女の姿は兎に角ヤバ過ぎたのである。

あまりにも際ど過ぎるその格好を、羞恥心で見ていられずに、赤面しながら王女は顔を逸らした。

……その先に居たのが、青い従者だった。

従者はまるで食い入る様にしながら、脇目も振らずに女の肢体を凝視していた。

瞬きすらせず、目を剥きながら、まじまじと女の身体を観察している。

その様を見ていると、何故か王女の脳内には、彼の両目に全力の剣戟をくれてやりたい衝動が沸き上がってきてしまった。

切れ長な視線の温度を更に下げながら、自らの従者にむけて剣を構えた王女。

だが、次瞬。

王女は、従者が女を見る目には殺気と洞察以外の感情が一切見られない事を知って溜飲を下げた。

どうやら一度戦闘体制に入った男にとっては、“敵”の服装など大して意識を惹く物になりはしなかったらしい。

信頼と感心を込めた微笑でニコリと頷いて、また自身もそういった彼の姿勢を見習おうと、王女は気合を入れてモノスゴイ格好の敵を睨んだ。

知らない間に命を落としかけ、知らない内に命拾いしていたという事実を従者自身は知らない。

――クリアブルーの長髪に、氷の帝位を示す赤銅のマント。
そして何よりも、突如として闘技場の中心に現れたその“先天魔術”。
敵の正体と状況を理解した王女は、怜悧な視線を更に細めながら頷いた。

「“瞬帝”、メルクリウス・フィンブルエンプ。
成程。彼を召喚したのは貴女でしたか。
道理で貴女に似て、品性の欠片も無いケダモノなわけです」

「ハッ、こんな汗臭い国の女猿如きがソレを言うか。
それに、品性の無さでは貴様には劣ろう」

露出の激しい敵を揶揄するかの様な王女の呟き。
メルクリウスは片手で胸元を扇ぎながら（あんな格好でもまだ熱いのか）、サファイアを思わせる双眸を王女から青い従者へと移した。
眉を顰めている王女と従者を交互に見遣りながら、ニタリ、という効果音がピッタリな、意地の悪い笑みを浮かべている。

「ナニか、言いたい事でもあるのですか？」

「決まっていよう。
召喚から二週間足らずで絶対服従、とはな。
武装姫よ。貴様、見かけによらず随分と下僕の調教に抜かりが無いのだなぁ。
ハハハ！！　どう躾けたのか、是非とも奏上願いたいものだ！！」

「な――――!?」

その一言で、姫の美貌は茹で上がった。

「な!!　ななな、なんてコトを口走りなさるのですか貴女はッ!?」

「ほうほう。図星か。

いやいや、そう慌ててはなんとも分かりやす――」

メルクリウスの揶揄は最後まで続かなかった。

王女が流れる様な動作で床に散乱した兜の残骸を掴みあげ、尋常ならざる殺気と共に赤マントを目がけて放り投げたからである。

兜は投げられる直前に分散し、5本のクナイとなってメルクリウスの肢体へと飛来した。

――だが、届かない。

メルクリウスの姿はクナイが触れようとしたその瞬間、まるで幻の様に王女の視界から掻き消えてしまったのである。

「のわぁ!?」

……不幸にも、クナイの一本は踏まれていた少年の頭へと狙いを外れていた。

おそらく、王女は精神的にかなり動揺していたのだろう。

何はともあれ、本能的に危険を察知した少年はゴロンと半回転することでそのクナイを躱し――。

「ひゃべばぁ!?」

真上に現れた皇帝によって、その顔面を踏み抜かれていた。

「フン。驕るなよ、武装姫。
下僕の調教ならば、この予とて負けてはおらん！！
マルスよ！！　手始めに足を舐めろ！！
予の調教の成果も見せてやろうではないか！！」

「誰がやるかバッカやろぉぉおおお！！！！
おれっちはそこまで堕ちちゃいねぇんだよぉ！！！！」

「……ほう。一週間仕置きした割には、まだ随分と反意が残っておったのだなぁ。
いやいや、そうでなくてはつまらんが。
さぁて。この予に口答えする生意気な犬には、素晴らしい褒美をやらねばなぁ」

「ま！！　待てやメル嬢！！
こ、ここ敵国！！　アイツら、敵――ギャァアアアアアア！！！！」

メルクリウスは嗜虐的な笑みを浮かべながら、マルスをゴロリと転がしてうつ伏せにすると、その背中に右足を乗せてギュウギュウと踏みつけた。
少年の背には、尖ったヒールの脚がモロに食い込んでいる。
重心の位置を見る限り、メルクリウスは相当な体重を掛けてグリグリと足を押し込んでいる様だった。

……アレは、痛い。

悦に入った表情で自らの呼び出した魔人を踏みつける暴君と、涙目で奇声を発しながらのたうち回る赤い少年。

“もうしませんゴメンナサイ”とか、“ご主人様には逆らいませんだっておれっち下僕だし”とか、“絶対服従しますからもう許してぇぇぇ”とか、聞いてて切なくなる様な言葉が少年の口から漏れ続けていた。

……青い従者の行司に近いが、ニュアンスは聞き手に真逆であった。

メルクリウスは少年が裏返った声で許しを請い、その後声が枯れて、ピクピクと痙攣を始めるまで背を踏み続けた。

突如として始まった皇帝の拷問劇を見せられた武の国の二人は、凄惨な光景に軽く目を逸らしながら、呆れきったかの様に暫し頭を抱えていた。

やがて満足した皇帝が足をどけ、少年が意識を取り戻したのを確認し、男は静かに口を開いた。

「……おい、ガキ」

「あん？」

男は、まるで深い後悔に苛まれたかの様な顔で、倒れたままの少年に目をやり――。

「……悪かった」

「うっせぇぇえええええええ！！！！
ぶっチねテメェはあぁぁぁっぁあああああ！！！！」

憐れみの視線に耐えきれなくなったのか、少年は発狂しながら火炎銃の引き金を引いた。
ソレはもう、烈火の如く引いて引いて引きまくった。
男は条件反射だけでその全てを切り裂いたが、しかし少年の途轍も無い気迫に少々飲まれかけている。

「――――！！」

加勢しようと鎧の破片に手を伸ばした王女は、脅威を感じて咄嗟に背後へと飛び退いた。
彼女が地を蹴るに一瞬後れて、飛来した冷気の弾丸は鎧の破片を直撃し、破片は急激な温度変化に堪えられずに更に粉微塵にまで破砕される。

「相手を間違えるな。
予を退屈させて良いと誰が許可した？」

凍て付く様な存在感と冷気を纏いながら、皇帝はその右手を純白の姫へと突き出した。
結露が燻る白煙となり、嫋(たお)やかな腕から立ち上っている。
自らに向けられた敵意を敏感に感じ取り、王女は刃の様な闘気をその全身に纏わせながら、左手に掴んだ剣の柄を深く握り込んだ。

「……そうでしたね。
確かに加勢など、御節介以外の何物でもありませんでした」

静かな、抜身の剣の様に研ぎ澄まされた気配。
思考から一切の無駄を弾き出した清涼な眼差しが、スゥと敵意の元へと流れる。
１０メートル程の距離を隔て、氷の女王と武具の姫は対峙した。

「ええ、そうですね。
簡単な話ではありませんか」

一度剣を握り込めば、彼女の思考は瞬時に戦闘へと切り替わる。
元より彼女は、一つ以上の事を考えるのが極端に苦手なのである。
意識を剣舞へと傾けた今、彼女の意識からは先ほど思考を苛んだ敵の衣装すらも弾き出されていた。
姫は怜悧な視線に清流の様な殺気を纏わせながら、静かに微笑う。

「私がこの場で貴女を倒せば、話は全て解決です！！」

踏み込む足が風を切り、黄金の長髪が燭台の灯りに残滓を残す。
１０メートルの距離を一瞬で無にする疾走と共に、武装姫の剣戟は白銀の夜空へと響き渡った。
燭台の炎が揺らめく、石造りのコロッセオ。
今代２度目の代理戦争は、炎の揺らめく熱帯夜の中で幕を開けた。

３５．　異世界に於ける二つの大国で最も高貴な位に位置するとある姫及び皇帝

……わたし、武の国にだけは召喚されたくないです。

い、いえ！！　何でもありません！！

と、言うワケで、ドＳ陛下ＶＳ脳筋姫です～。

36. 誰もが一度は憧れる程に有名なとある氷属性特異術式についての魔術的考察

踏み込みは地を抉る気迫と共に振り出された。
推進の勢いは軸足を中心とした回転力に。
全身のバネを用いて生み出された斬撃は、彼女の細身からは想像も付かない程の速度と重さを伴って標的へと落とされる。
繰り出される剣舞は疾風の如く。
受ければ厚手の鎧すらも二つに断ち得る一撃は、赤銅のマント一枚に包まれた敵の胴体など易々と断ち切るだろう。

そう。
受けさせさえすれば――。

「ちょこまかと」

三度放たれた剣戟は、悪態と共に空を切った。
大剣が敵の腹に叩き込まれようかというその刹那、またしても敵の姿は王女の視界から掻き消え、後には燭炎を反射した剣の銀閃と風の音だけが残る。
次瞬、背に感じる強かな圧力。
背後から放たれた冷気の弾丸が王女の抗魔術結界へと衝突し、纏う防御を微かに削っていく。

境目が解れた結界を瞬時に補正し、王女は黄金の髪を振り乱しながら自らの足元へと手を這わせた。
真っ二つに折られ、コロッセオに打ち捨てられた短剣を掴みあげ、一息の元に投げ矢へと加工して背後へと投合する。

――だが、その先にはやはり敵は居ない。

当たるべき的を失った矢は、然るべき距離を飛んだ後に床板を転がるだけである。
そんな当たり前の事実に意識を裂いている暇など有る筈も無く、王女は左手の大剣を両腕に持ち替えて背後へと振り出した。
大剣は死角から迫っていた冷気の弾丸をその側面に受け、急激な温度変化に堪えられずに飴細工の如く変形する。
王女は一息で大剣の歪曲を加工し直し、直感に従って敵の現れるであろう場所へと踏み込みを掛けた。
王女の勘は正しかった。
だが敵影は幻の如く、位置を看破されても尚、剣戟が届くに先んじて消失する。

「ほう、どうした？
随分と息が上がっておるようだが……」

「大きなお世話です！！」

軽口を塞ぐかの様に、王女は再度大剣を振り翳し、紺碧の瞳を神速で薙ぎ払った。
だが、この敵は神速と比しても尚速いらしい。
まるで霞か残像とでも戦っている様である。
居ると認識し、剣を放った瞬間には、既にその位置には敵は居ないのだ。
必殺の剣戟は始終、敵に掠る事すら叶わぬままに、風鳴りの呻きだけを上げ続ける。

「悲観する事は無いぞ？
予の先天魔術（ギフト）の“銘”くらいは知っていよう。
貴様の如き女猿が、この身に触れられると思うだけ烏滸（おこ）がましいのだ！！」

軽口の方向に、打ち捨てられた兜から作成したチャクラムを投合する。

声の前半は右方向から。

後半は投合した後の背後から響いた物だった。

投合された刃は右に2つ、背後に3つ。

敵影は余裕の笑みを浮かべたままに、その氷河の様な髪を乱すこと無く王女の攻撃を躱し続ける。

そして次瞬、王女の死角から迫る冷気の弾丸。

狼霊級相当の寒波が5つ、霧を含みながら純白の衣装へと喰らい付く。

大魔導たる王女の抗魔術結界はそれらを容易く阻んだが、しかし一撃被弾する度に確かに魔力の容量が削られ、霊道にはじわじわと負荷が掛っていく。

――想像以上に厄介だ。

掠め取られた結界を瞬時に補正し直しながら、敵の持つ先天魔術（ギフト）の“銘”を知る王女は歯噛みした。

“先天魔術（ギフト）”。

この世に生まれ出るより前に精霊より賜った贈り物たるこの才能は、この世界の人間に詠唱や術式を構築する事無く紡げる高位の神秘を許可している。

それは魔導を学ばずとも紡げる、最初にして最速の魔術である。

人の扱う魔術の正しい形であり、同時に唯一無二の“才能”だ。

だが。

それが人間の特徴である以上、千差万別とは言えど完全に新しい

物などそうは現れない。
世界を探せば似た人間が三人は居る、とはよく言われるが、現在に限らず長い長い歴史を紐解けば、誰か一人くらいは自分と似た“才能”を持った人間が見つかるものである。
そして突出した才能であればある程に、当時の人間達は後世の為にその情報を記録し、“銘”を付けてその能力や特徴を事細かに残そうとする。
実際、大魔導級の先天魔術であれば、まず間違いなく畏怖や名声と共に各国の“銘書”に記されているのが常識だ。
王女自身が隠匿している、自らの“銘”がそうである様に。

あの皇帝は自らの持つ銘を最強だと自負し、隠匿する事無く公言していた。
銘を公言するなど、本来ならば大魔導にとっては正気の沙汰では無いのだが――。
こうして戦ってみると、その慢心にも頷ける。
あの皇帝が持つ先天魔術は、確かに歴史上でも特に強力であり、同時に希少とされる代物であった。

――先天魔術（ギフト）・虚界転位（スレイプニル）。
氷属性特異術式・転移魔術を湯水の如く行使する、歴史上最速の先天魔術である。

転位とは、世界の異なる場所同士を繋ぐトンネルを生み出す魔法である。
否、繋ぐ、などという丁寧な動詞は適さないだろう。
事実は、寧ろ“食い破る”と表現した方が正しいかもしれない。
氷の精霊は“奪う”事に特化した能力の持ち主だと聞く。
それは時として熱であり、活力であり、寿命であり、そして運動ですらもある。

そして氷の精霊が空間そのものに力を強く働かせると、空間に存在する全ての存在は時間を奪われ、極致に至っては“距離”すらも奪われ得るという。

あまりにも難易度が高く、また割に合わない大魔術である為、王女自身も詳しい知識を持ち合わせている訳では無かったが――。

転位とは膨大な“氷の魔力”を氷の精霊に与え、異なる地点との距離を奪う事で、空間を食い破り“穴”を空ける魔術なのだと聞いている。

“空間に穴を穿っての瞬間移動”。

これだけを聞けば、到底戦闘向きの魔術では無い様にも思われるだろう。

だが、その実質は脅威だ。

事実王女は、既に3桁に届こうかという斬撃を浴びせ掛けながらも、未だに敵の長髪を散らす事にすら成功してはいない。

敵は余裕の笑みを浮かべながらこちらの攻撃を躱し、まるでいたぶるかの様に死角から冷気弾を放ってくるだけだ。

大魔導たる彼女だからこそ防げてはいるが、しかしその威力は並の魔導師の全力にも等しい。

なるほど。帝位を奪った際、数百人の前皇帝親衛隊を皆殺しにしたという戦力も頷ける。

事前に聞いた敵の情報を諳んじながら、王女は打開策を模索した。

王女の記憶によると、虚界転位（スレイプニル）という先天魔術（ギフト）の弱点は、確か大魔導級にしては氷属性以外の適性が極端に弱い事だった筈である。

全身が転位魔術の行使に特化している為に、それ以外の属性の魔術を使うには集積器官の容量が足りなくなっているのだ。

過去の事例では――確か、良くて狼霊級を行使するのがやっとだった筈。

つまり、氷属性の波動にだけ注意を払っておけば、別属性の魔法

は致命的なレベルでは飛んでこない、という事になる。
尤も、こうもこちらの攻撃が当たらないのではどうしようも無いのだが――。
瞬きの内に消え失せる敵影を睨みながら、王女の内心には焦りが募っていた。

「やめだ」

何十合目かの剣戟が空振りに終わった瞬間。
不意に、王女の背後からはそんな言葉が聞こえてきた。
再度剣を構え直し、訝りながらも声の方へと視線を送った王女。
先ほどまでよりも遥かに遠く。２０メートル程の遠方に佇む皇帝は、素肌に薄らと汗を滲ませながら、心底不快そうに佇んでいた。

「やめだ。ああ、やめだ！！　暑苦しい！！
まったく、なんなのだ？　この国は。
暑いし、汗臭いし、その上妙に重いときたものだ。
偶には良い余興だと思いもしたが……流石に飽きた。
ああ。予はもう動かんぞ？　あとは貴様独りで踊れ」

メルクリウスは手団扇で豊満な胸元を扇ぎながら、辟易した様子で言った。
――重い。それは、この街（ヴィーンゴルヴ）の特性を考えれば当然だろう。
銀の国（シルヴェルサイト）の王都がそうである様に、武の国とて、国の要たる王都には相応の環境を整えているのである。
その整備された環境を鑑みれば、敵が動きに不自由を感じるのはある意味では当然とも言えるのだが――。

「……貴女は。
私を、バカにしているのですか――？」

しかしそれを差し引いても尚、敵のあまりにも身勝手な言い草には、流石のウェヌスも顔を引き攣らせた。
底冷えする様な殺気と共に、大剣の柄が更に深く握り込まれる。

――あの敵は、何なのだろうか。
細身な肩を怒気に震わせながら、王女は敵影を睨み付けた。

自らの守護魔を嗾け、突然攻め込んできた。
ここまでは、まだ許せる。どの道いつかは矛を交える相手だからだ。
だが。この人を嘗め切ったかの様な、見下し切った態度は何なのか。
仮にも一国の主が敵国に攻め込む時には、相応の礼儀という物があろうものを。
そして。一度ソレが気になりだすと、ウェヌスには敵のあの格好そのものが、既に自分を馬鹿にする為だけに存在しているモノに思えてきた。
ヒトの、些細なコンプレックスをピンポイントで抉り出すかの様な、神経を逆撫でする“その部分”を、まるで誇示するかの様に露出し、手で扇ぐ、“敵”！！

アドレナリンが筋肉を臨戦態勢に於いたのを確認し、ウェヌスはその怜悧な視線を尚も細めた。
あの敵がいかに速かろうと、油断しているのなら切り伏せる隙は幾らでもあろう。
王女は両の脚に深いタメを作りながら、大剣を大きく下段に下げ、

隙を伺いつつ“敵”を睨み付け――。

「逸るな。予は踊れと命じたのだ。
反論は許さん」

皇帝がマントの裏から取り出した一本の短剣を視認して、纏う空気を反転させた。

「――なるほど。漸く本気を出す気になりましたか」

王女は大剣を正眼に持ち直し、足を肩幅に組み直しながら口元を緩めた。
その雰囲気からは激高が引き、代わりに武者震いに似た高揚が感じられる。
王女自身が構える剣（つるぎ）に比すれば、それこそ玩具にも等しい、手の平に収まる程度の短剣。
外見に鍔の無い、そして女性の親指程の細さしか無い、恐らくは投合用の刃。
だがそれを理解した上で尚、ウェヌスは敵の持ち出したその短剣を、確かな脅威として認識していた。
このタイミングで、敵が取り出した武器。
それはおそらく、敵の“魔装”に他ならないからである。

魔装。それは魔術を補助する装備品の総称である。
魔術を用いる者は自らの先天魔術を理解し、研鑽し、高める事によって、先天魔術の行使に最も相応しい相棒を探していく。
つまるところ、魔術師が扱う武具とはそれ単体で考えていい物で

はあり得ない。
魔装とは、魔術師の先天魔術を反映する鏡なのである。
敵がソレを選んだからには、それ即ち敵の先天魔術の長所を強化ないし弱点を補助する物、もしくは、その先天魔術無しでは扱えない様な特殊武具でしか有り得ない。
そして先刻から披露されている、敵の先天魔術。
それを鑑みるに、あのナイフの能力が脆弱であろう筈が無いだろう。

――あの魔装の効果はどんな物か。
背筋に感じる冷たさと共に、武装姫は推察した。
真紅の少女の弓矢の様に、遠方に高威力魔術を炸裂させる為の爆弾か。
或いは、王女自身の魔装がそうである様に――。

「死んでくれるなよ？
初撃で終わっては興ざめだ」

王女自身の思考をよそに、皇帝は死神めいた笑みを浮かべながら、短剣を２０メートルの彼方より投合した。
問題は、無い。
この距離から投げられる短剣など、王女にとっては静物にも等し――

「――――っ！？」

その攻撃を躱せたのは、研ぎ澄まされた彼女の第六感故だったのか。

突如首筋に感じた、死神の鎌の気配。
それを認識した瞬間、王女は咄嗟に、自らの持つ大剣を背後に振り抜いていた。
高い、高い金属音が鳴り響き、正面から迫っていた筈の短剣を逸らした感触が掌を痺れさせる。

「ハッ！！　凌いだか！！
良いぞ、そうでなくては詰まらん！！」

敵の声に反応する時間は無かった。
大剣を振り翳した瞬間、０秒の誤差で真上から感じた風の変化。
視界の外から迫るその刺突を半身で躱し、次瞬には眼球の前に現れた短剣を屈んで避ける。
雷霆の如く、屈みこんだ背に落ちる鋼の反射光。
王女は地に転がりそれを躱しつつ、短刀の柄に刃を合わせて弾いた。
勢いを奪われた短刀は空に跳ね、次瞬には虚空に空いた“穴”によって吸い込まれる。

追撃が来る前に起き上がり、構えを正す王女。
焦燥の色が濃いその視線の先では、弾き返した筈の短剣が再び皇帝の手に収まっていた。
皇帝の顔に浮かぶは、余裕の笑み。
王女の額に、冷や汗が滴る。

「――虚界転位（スレイプニル）。
便利なものですね。

まさか、魔装にまで有効な先天魔術だとは思いませんでした」

敵の手札を理解したウェヌスは、まるで虚勢を張る様にそう呟いた。

あの刃自体は、それこそどこにでもあるナイフと変わらない程度の代物だろう。

だが。確かに、あの敵にとって投げナイフ以上に適した魔装など有り得まい。

まさか、ナイフまでもが“転位”してくるとは――。

太刀筋も刃渡りも無視したままに、突如として至近距離に現れる刃。

そして、投合の方向と出現の方向が出鱈目な自由度。

これでは、常に死角を取られているのと同じだ。

剣一本では、流石に王女の練度をもってしても対処するのは難しい。

呼吸を整える王女に向けて、皇帝はどこまでも嗜虐に満ちた笑みを向けた。

「誰が休んで良いと言った？」

「――――ッ！！」

再度放たれる転位の刺突。

短剣は皇帝の手を離れた瞬間、０秒の誤差と共に王女の死角から、それも至近距離に現れる。

脇腹を抉る様に飛来したその刃を、王女は直感だけで身体を捻って回避した。

回避されると同時に行使される虚界転位。

虚空に溶けた刃はその運動量を維持したままに、次瞬、王女の後

頭部へと現れる。
金糸の長髪を振り乱しながら、王女は頭を傾けてそれを避けた。
羽根の様に舞い散る、一房の金髪。
自らの頬を掠めて飛び去った刃が、金糸の装飾を纏って視界の端を横切る。
その速度を見定めた彼女は、その鍛え上げられた勝負勘によって、転位する武器の構造を天啓の如く把握した。

（速度は投げられた瞬間から変わっていない――。
いや、転位する前から変わっていない。
ならば――！！）

王女の大腿を切り裂くべく現れた白刃。
脚とはいえど、大動脈を傷つけられては致命的だ。
王女は足運びのみでその刃を躱しながら、風を受ける柳の様なしなやかさで、大剣を刃の正面へと合わせた。
純白のスカートの裾を切り裂きながら、二つの刃が接触する。
――鈍い、小さな鋼の残響。
王女の大剣は敵の短剣を、一切の反発無く軽やかに受け止めた。
前進する速度を奪われた短剣は空中に停止し、転位の穴に到達出来ずにチェス盤模様の舞台へと落下する。

――“エネルギー保存の法則”、という物がある。
それは“閉鎖系内でのエネルギー量の総和は不変である”、という、最も根源的な物理法則の一つである。
この場では、これが投合されたナイフに適応される。
先の法則に則るのであれば、例えナイフが転位しようとも、ソレが持つ力学的エネルギーは投合された時点での速度と高さのみに依存する、という意味になるだろう。

そう。つまりこの法則は、一度投合者の手を離れたナイフは、再度投げ直されるまではその速度を回復出来ないという事を示しているのである。剣との“緩やかな”接触によって失われた速度は、再び敵がソレを投げるまでは回復する事は無いのだ。

無論。王女はそんな理屈など全く知らなかったが――。

彼女が戦士として鍛え上げた直感は、ここに来て確かに正確な答えを弾き出していた。

先の法則など、全然、全く、露ほども知らなかったのにも関わらず、である。

――結果が同じならば過程は無関係だ。

王女は弾き落としたナイフへと手を触れ、彼女自身の先天魔術を行使する事で刃を殺そうと動いた。

重心を落としてナイフを掴み上げながら、魔装による攻撃を破られて蒼白な表情を浮かべているであろう敵へと視線を送る。

その時――。

彼女は、信じられない光景を見た。

「ほう。そんなに予のダガーが気に入ったか。

確かに同程度の銀に匹敵する程の値打ち物だが――。

欲しければくれてやろう。

好きなだけな」

嗜虐に満ちた笑みを浮かべながら、青髪の皇帝が嘯く。

皇帝の右手には、既に4本のダガーが収まっていた。

握られた拳の、指の隙間から生える様に立ち並ぶ、鈍く光る4条の刃。

左手にも同様の物が見える。

計8本の短剣。
その時になって、王女は自らの浅慮に気が付いた。
驚愕に息を呑む王女の声を代弁するかの様に、生暖かい夜風が敵のマントを揺らした。
マントの内側には、無数の刃がズラリと並び、投合される瞬間を待ち詫びている。

「さあて、第二幕だ。
精々滑稽に舞うがいい！！」

狙いも付けず、否、狙いを付ける必要すらも無く空中に放られる8本のダガー。
白刃は夜気に溶けるかの様に消失したかと思うと、次瞬には五月雨の如く王女の全身へと襲い掛った。
それも、方向には一切の規則性が見られない。
上下左右、そして前後。全く予想外の位置から、それも至近距離に現れ、王女の身体を切り裂かんと迫る。
咄嗟に大剣を2本の短刀に加工し直し、振り翳す事で刃を躱す王女。
だが、何分手数と距離が違い過ぎる。
完全に防ぎ切るには至らず、白刃は容赦無く、王女の纏う純白の装束を切り裂いていった。
腹部の布地が浅く破られ、血が滴る。
彫像の様に白く、綺麗な王女の頬に、一筋の赤い線が走った。
切れ目の入っていたスカートが深く抉られ、燭炎の中に細身な生脚が白く覗く。
――だが、未だ窮地と言うには温い。
何故なら、敵は明らかに遊んでいるからだ。
敵が本気ならば、あのマントの内に覗く無数の短剣を次々に追加して早々と勝負を決めに来ているだろう。

あの敵に、明らかに手加減されている。
その事実に、王女の思考は怒りを通り越して冷え切った。

“剣では、防ぎ切れない。ならば――”。

王女は両の腕に強く魔力を流し込み、求める形状を無意識下にて作り上げた。
砂金を思わせる黄金色の燐光が夜のコロッセオの中に踊り、双剣が瞬きの内に繊維状に解れて王女を包む様に展開される。
光り輝くエフェクトと共に王女を囲んだ、白銀の装飾帯。
見た目に細く、柔らかいそれは、事実双剣に使用された鋼にて作られた檻である。
王女の周囲を飛び回る白刃は煌びやかな銀の檻へと囚われ、次々とその運動エネルギーを奪われて停止した。
自身を覆う様にして生まれたその鳥籠と一体化したダガーへと魔力を流し、王女は剣の一部に帰す事で無効化する。
流石に繊維状に伸ばした鋼を剣に加工し直すのは物理的に無理があったらしく、造形し直した大剣は、根元から砕けて床板に飛び散ったが……。

「……随分と嘗めた真似をしてくれるのだな」

――不快そうな声が聞こえた。
王女が魔術で血止めをしながら正面を見据えると、皇帝は苦々しげな表情でこちらを見ている。
その身を切り裂かれた王女は、しかし気丈に敵を睨み返していた。

「それはこちらのセリフです。
随分と私を侮辱してくれましたね。
どうやら貴女は、一々私の誇りを傷つけねば気が済まない性分の様です」

「ハッ、手加減だと？
手の抜き具合で言えば、貴様には負けよう！！」

皇帝の揶揄に、王女の気配が温度を下げた。
それは果たして否定か、或いは肯定だったのか。
メルクリウスは新たな短剣を、熱帯夜の涼風に靡くマントの内から抜き出しながら、王女の纏う気配を高らかに笑い飛ばした。

「この予を相手に、“魔装”すら使わぬとはなぁ。
これはまた随分と嘗められたモノだ。
その上、この予にだけは本気を出せ、か。
フハハ！！　数年来、予をここまで愚弄した娘は貴様だけだ！！
ここまで嘗められては、最早怒りを通り越して愛しみを覚える程だぞ！！」

メルクリウスは飄々とした態を僅かに緩め、冷えた眼差しでウェヌスを射抜いた。
――紛れは許さない。
静かに、しかし確かにそう命ずる氷の蒼眼。
敵の意思を悟った王女の思考が、緩やかに熱を帯びていく。

“あの敵は、自らの本気を求めている”。
それを確信した瞬間、王女は、自身の神経が高ぶっていくのを確かに感じた。

王女は、微笑った。

「後悔しますよ。
私が魔装を解放した時点で、貴女の勝ちは無くなるのですから」

だからこそ――。
彼女は、心底嬉しげに微笑った。

短く、解呪の呪文が詠われる。
銀細工を鳴らす様な響きと共に、黄金色の光の粒子に覆われる王女。
純白のドレスが眩く発光し、白いベールが王女の総身を包み込む。
星空の天蓋を抱いたコロッセオの中に嫋(たお)やかに靡く、彼女を象徴する金糸の髪。
神秘的な燐光の中に踊るその芸術と相俟って、彼女の姿は宛(さなが)ら生まれ出でたばかりの女神の様であった。

「……フン。猿の割には随分と派手な演出だな。
だが――。
まさか、終わるまで待つ、などと楽観してはおらぬだろうなぁ」

しかし。如何にそれが神々しかろうと、彼女は敵の衣装になど興味を示さない。
優劣を示すに当たり、後の記録に不明瞭を残す事はこの皇帝の望

むところでは無いが、しかしそれは、別段無駄な時間を浪費してまで待つ程の事でも無いからだ。
――躱すのなら良し。躱せぬのなら、所詮そこまで。
皇帝はダガーを一本構えると、様子を確かめる様に黄金に包まれた敵の背へと投合した。

金属音が、高く響いた。
敵の背に命中したダガーは、まるで巨大な防壁にでも突き当たったかの様な圧倒的な反響だけを残し、虚ろなままにチェス盤模様の床へと落下する。
ただ阻まれただけでは無い。
刃の先端が欠けているのが不自然だった。

「ぬ――――――？」

一度、眉を顰めたメルクリウス。
それは恐らく、彼女がこの国に来て初めて見せた驚きの表情だっただろう。
マントから４本のダガーを取りだし、更に投合する。
心臓、頸動脈、大腿静脈、脊髄。
どこ一つを取っても致命となる位置に、白刃は２０の距離を０として現れる。
その全てが完全に阻まれ、虚しく地に落ちたその瞬間にこそ、皇帝の顔は真に色を失った。
夏夜に溶けたその金属音こそが、武装姫の魔装が完成した事を示す鐘楼だったからだ。
収まった光の粒子の下から現れた、神々しいまでに白い、白い鋼。
彼女の身を覆う白磁の武具を見た瞬間、色を失った皇帝の顔は驚愕へと変わった。

それは、鎧という名の要塞だった。

白磁の鋼が、虹色に輝く光のベールに包まれている。
無彩色にも関わらず、位置によって色が変わって見えるその偏光は、世界最強の魔法金属・オリハルコン特有の性質である。
――“オリハルコン”。
最強の魔法金属の二つ名が示す通りに、この金属を超える強度を持つ材質は、今のところこの世界には存在していない。
書物によると、その強度は文字通りの意味で他を圧倒しており、金剛石で研磨しようとも傷一つ付かない代物であると記されている。
つまり、一言で言えば“使えない”金属だ。
不死鳥の羽ペンによる自由加工すら受け付けず、龍種の牙でさえも傷一つ付ける事が叶わぬその強固な鋼は、あまりの強度故に加工する術が存在せず、今日まで無用の長物としての扱いを受けてきた。
強いて言うのならば、その希少性故に金に次ぐ金銭的価値を誇る程度の代物だった筈なのである。

――だが。
ならばこれは、果たして夢か幻か。

皇帝の目の前に佇む王女は、それを総身に纏っていた。
王女はその無用の長物を見事なまでに加工し、文字通り戦女神（ワルキューレ）を彷彿とさせる程に神々しい鎧へと仕立てあげてしまっていたのである。
武器作成という、敵の正体不明の先天魔術は、最強の魔法金属すらもその支配下に置くと言うのだろうか。
純白の鎧を８層に渡って取り巻く抗魔術結界。

薄く、しかし洗練され切ったその密度の前では、帝霊級魔術の一撃であろうとも幻の如く霧散するに違いない。
あの鎧は、既に個人が破壊し得るなどという次元に存在する物では無い。
事実、これならば銀の国の防壁を粉微塵にする方がまだ簡単だと言えるだろう。
武装姫が纏うその鎧は、正にそういった類の存在であった。

――オリハルコンのホワイトメイル。
この世界で彼女にしか纏えぬ、世界最強の総鎧。
それが武の国の第一王女、ウェヌサリア・クリスティーの魔装であった。

「なるほど、大した先天魔術ですね。
貴女に勝てる程の使い手は、この世界でもそうは居ないでしょう。
……私を除けば、ですが」

要塞と同等の防壁を身に纏った王女は、対極的なまでに軽装の皇帝を見据えながら不敵に微笑んだ。
魔装を解放し、朗々と告げる彼女の気配は、コロッセオ全てを飲み込む程に壮絶だった。

「背後でも、急所でも、好きな所に打ち込んで頂いて結構です。
私はその全てを受け切り、正面から貴女を打倒しましょう」

腰元に備えられた白磁の大剣。
鎧と同じオリハルコンにて編まれたそれを正眼に抜き放ちながら、武装姫は静かに、敵の打倒を宣言した。

驚愕したのはメルクリウスである。
彼女は、確かに敵に魔装を解放しろと言った。
自らの最強を疑わぬ王者たる彼女は、後の歴史家が記すであろう記述に対する紛れを何よりも嫌うからだ。
全力を振り絞った敵を悠々と打倒してこそ自らの有能が証明される物なのだと、皇帝という“記される”立場にある彼女はそう考えていたのである。
そういった意味で言えば、敵が彼の魔法金属を纏える程の強者であった事は彼女の有能を示す又と無い秤であり、悦びこそすれ驚愕する事など何も無い。

だがそれでも、敵の隠していた手札は彼女の常識の範疇を遥かに凌駕し過ぎていた。
メルクリウスが予想した魔装とは、精々敵が今構えているオリハルコンの剣か、或いはそれに追従する程度の一振りの武具であると考えていたのだ。
――それが、まさかの総鎧。
如何に魔術という神秘の理が存在し、物体の重量を軽減する魔術が当たり前の様に罷り通るこの世界であろうとも、物体の“質量”その物を変える方法は未だ存在してはいない。
あの敵は、恐らくは件の先天魔術でもってあの鎧の形状と体積を変え、ドレスの下にでも仕込んでいたのだろうが――。
だからこそ、その事実がこの唯我独尊たる皇帝から驚愕の色を引き出した。

如何に皇帝とはいえ、希少なオリハルコンの正確な重さなど知らない。

しかし恐らくは、あの剣一本を取ってもその重量は５ｋｇを下らないだろうと予想する事は出来た。

ならば鎧一式を含めれば、その総重量は１０～２０ｋｇ。

通常ならば、これだけで既に女が身に付けて動ける限界などとうに超えている。

だが。ならばコレは、一体どういう事だろうか。

この場で当たり前の様にアレを出したという事は、つまりあの敵は、常時２０ｋｇ近いウェイトをその腹にぶら下げて生活していたとでも言うのだろうか？

否。それだけでは無い。

メルクリウスは、あの敵が今日武闘大会で１時間に渡って剣を振るったという事実を知っていた。

あの、相当な手練れと称して間違い無い大男を打ち破ったとも。

そして先刻、皇帝自身のダガーの雨を防ぎ、剣を振るい続けたあの動き。

アレが、本当に２０ｋｇもの重りをぶら下げた人間のモノか？

そんな、冷静に考えれば足枷にしかならない代物を背負って、おそらくはソレ故に、先は自らの放るダガーにすら切り裂かれたというその在り方。

そして、ソレが示唆する驚愕の事実。

つまり、あの女は――。

「……武装姫よ。

お前バカだろ」

「貴女にだけは言われたくありません！！」

虹色のベールを纏いながら踏込みを掛ける武装姫。
総鎧を担ぎながら日常生活を送っているバカに、物凄くバカなモノを見る様な視線を投げつつ、皇帝はバカみたいに呆れた顔でその両手にダガーを構えた。
絶対防御の要塞を纏う武装姫と、空間を転位する最速の瞬帝が再度鋼の音を夜空に響かせる。
――先天魔術と魔装。
自らの手札を開示しあった二人の大魔導の戦闘は、速さを増した夏風の中で第二幕へと傾れ込んだ。

36. 誰もが一度は憧れる程に有名なとある氷属性特異術式についての魔術的考察

いろいろと思うところがありまして、第一章をカチカチと改稿作業進行中だったりします。ちょっとでも読みやすくなるといいな～とかって思ってますんで、気づいた点やアドバイスなどなどありましたら、お気軽に書き込んで頂けると嬉しいです。

次回更新は、もしかしたらちょっとだけ遅れちゃうかもしれません。年末忙しいんですよ～……。

はい。なるべく定期通りに投稿しますので、これからもよろしくお願いします！！

37．　ヒッグス場が及ぼす湯川相互作用と呼ばれる力による質量の発生機構を

「うお！？　んだありゃ！？
変身？　変身ってヤツ！？
うっひょ～！！　ハンパね～！！
あのネェちゃん、マジ頭ハンパねーわ！！
……沸いてんじゃね？」

隣で行われる戦闘の成り行きをチラリと見つつ、赤い少年はケラケラと嗤いながら嘯いた。
軽口を叩きながらも、引き金に掛けられた指は止まらない。
火炎銃の銃口は、男に向けて火を吹き続けている。

「素っ裸の姉ちゃん連れて来たてめぇがソレ言うか？
敵地でアレは正気じゃねぇぞ。
来世じゃ服くらい買ってやれ！！」

「んあ？　ああ、無理。意味ねー。
ナンか知んね～けどさ。スッゲー暑がりなんだわ、アレ。
そんで、しかも露出狂。変態女。死んでも治んねーよ」

炎を切り裂きながら迫り来る男から、少年はバックステップで距離を取った。
赤髪を靡かせながら観客席の石柵の上へと跳躍し、礫の様に火炎弾を浴びせかける。
プラズマの紅焔は燭台の炎と共にコロッセオを照らし、男の碧色の鎧を鈍く光らせた。
轟々と飛来する炎の音に、斬撃の風切り音が重奏を奏でる。
振り翳す剣で紅焔を悉く切り裂きながら、男は野性味のある眼光

を強めた。

「余裕だな」

「あん？」

軽薄に応えながら、銃を操る少年。

男は独り言の様に続けた。

「あの鎧は見かけ倒しじゃ無いぜ。

武装姫（ワルキューレ）ってのは伊達じゃなくてな。

正直な話が、俺でも斬れねぇ。

余裕かましてる暇があったら、さっさと助けに入ってやったらどうだ？」

「はぁ？　有り得ねェ事抜かしてんじゃね～よ。

メル嬢が負けるかタコ助」

掘削機の如く火炎弾を弾き飛ばし、踏み込んだ男の斬撃が少年の乗った柵を捉えた。

――剛剣一閃。

金属音と共に白刃が瞬いた次瞬には、石造りの柵は真っ二つに切り裂かれて砕け散る。

だが、それも少年の身体には届かない。

軽業師の様に回転しながら宙を舞った少年は、男の斬撃を避けながらその身を星空に高く躍らせて、再度舞台の上へと降り立った。

男の頭上を通過する際には、空爆の様に弾丸を見舞っていくオマケ付きである。

男はその半数を足運びで躱し、残り半数を切り裂いてやり過ごしながら、自らの攻撃圏外へと逃れた少年へと構えを直した。

「どういう意味だ？」

「そのまんまだよ。
アレのドSっぷり嘗めんな。
剣どころか、許しが無きゃ髪一本触らせねー女だぜ？
始めっから、テメェのご主人様にゃ勝ちなんかね～の、っと！！」

四隅に飾られた燭炎に祝福されるかの様に、少年の赤髪が銃撃の熱風に靡く。
男は飛来した5つの火球に難無く刃を合わせながら、同時に視界の端にて戦闘を繰り広げる2人の大魔導の姿を認めていた。
青髪の皇帝は鎧の隙間を穿とうと、ウェヌスの関節部分に重点的に例の“穴”を作り出している。
だがウェヌスもさる物で、敵の魔術の気配を感じた瞬間には構え、足運びを僅かに変え、最小の動きだけでその攻撃を防いでいた。
それもその筈。オリハルコンの鎧の前では、僅かでも隙間を外れれば武器など何の役にも立ちはしないのだ。敵の攻撃を無効化するには、ウェヌスは軽く身じろぎするだけで良い。
鎧の防御を頼りに、赤銅のマントへと突進するウェヌス。
しかし剣戟を放とうと構えた次瞬には、既に敵は遥か後方へと移動していた。
男には魔術の知識など皆無ではあったものの、それが距離を無視して自らの居場所を変える性質の業である事は見て取れた。

――絶対防御と瞬間移動。
それはどうにも、お互いに決め手を欠いた戦いに見えた。

「……消耗戦になるな。
ま、そんじゃ問題ねぇか。

何しろあの姫様、体力だけは有り余ってるからな。
放っときゃあと3日は戦ってるだろ」

「ハッ！！　3日くらいでナニほざいてんだ！？
メル嬢なんかなぁ！！　放っときゃ1週間は拷問してるぜ！？
おれっちが言うんだから間違いねぇ！！」

炎の弾丸が瀑布の様に雪崩れ込む。
ネプトはその全てに神速で剣を合わせながら、マルスとの距離を詰めるべく前進した。
ジワジワと、しかし確実に距離を埋め、間合いに捉えたと感じた瞬間に一気に踏み込みを掛ける。
マルスはその剣戟を闘牛士の様にヒラリと躱すと、跳躍して距離を取りながら再び火炎弾を浴びせかけた。
青髪の男は繰り返す徒労による憔悴すらも見せぬままに、再び赤髪の少年へと構えを作り、笑みを浮かべた。

「……どっちにしても、だ。
こっちのが早く片付くな」

「ヒュ～。同感だね～。
どう見ても、テメェが先にくたばるもんな～っと！！」

軽口を叩きながら、少年の指は再度引き金を引いた。
口元には余裕の笑みが浮かんでいる。
1発、2発、3発――円筒の銃口から射出されるのは12発の火炎弾。
男はその位置を頭抜けた動体視力と銃口の向き、少年の目線から感じ取り、寸分違わず刃を合わせながら再度距離を詰めた。
銀の国での一件より、既に3桁近くも繰り返された動作である。

同じ動作であれば、今になって男が討ち漏らしを貰う事などまず有り得まい。
――そう。同じならば。

１２発目の弾丸が放たれたその瞬間、男は少年の口元が悪鬼の如く吊り上ったのを見た。

「――――に！？」

積み重ねた戦闘経験から確かな不吉を感じ取った男は、咄嗟に前進を止めて背後へと飛び退いた。
同時に、銃口が１２回目の火炎を射出する。
今までと同じ大きさ、熱量を持っている筈のソレは、しかしこれまでの物とは明らかに質が異なっていた。
――速い。
後発だった異質の紅焔は、先駆する４つの火炎弾を瞬く間に追い越し、飲み込みながら、男の喉元へと突き刺さる様に飛翔してきた。
咄嗟に剣を振り翳し、同じように消滅させにかかる男。

「痛――ッ！！」

標的が頭部に迫り過ぎていたが故に剣戟が揮わず、掻き消しきれなかった紅焔の破片が額へと跳ね、前髪を焦がしながら男の皮膚にケロイドを作った。

「か～っ！！　おっし～！！
相変わらず勘だけは良いでやんの」

揶揄する様な声が響いた。
額の火傷を擦りながら、苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべる男。
男の眼光を飄々と受け流しつつ、少年は胸がすいたかの様に笑い声を上げた。

「気づいたかよ、青ゴリラ！！
おれっちだってよ～。この一週間、別に寝てたワケじゃねぇんだぜ～？」

少年は火炎銃の引き金に指を引っ掻け、クルクルと回しながら嘯く。
溶解された額の痛みを拭いつつ、男は静かに理解した。
――成程。言われてみれば道理である。
前回の時点で既にあの武器を作り上げていたあの敵が、わざわざ前回と同スペックの武器しか作らない訳が無い――。

「ケケケ！！　そ～ゆ～コト。
バッテリーの関係で威力調整はまだだけどよ～。
最大速度は前にぶっ壊れたヤツの６・割・増し！！
ちょいと手加減してやってたら気付かなかったか？
ケケケ！！　ハッズカシ～の！！　チャンピオンなのにな～？」

男は奥歯を鳴らした、
――６割増し。
先の高速弾は、男の見立てでは精々４割増し程度だと思ったが――。
少年の声に虚勢の色は無い。
つまりは、あの銃の速度にはまだ上があるという事なのだろう。
厄介なのはそれだけでは無い。

恐らくは今の一撃で、敵は自らの火炎弾が男を殺すに十分足る殺傷力を有すると確信してしまった筈だ。
最高速を撃てば対処のしようがない、とも。
そして少年の笑みは、事実勝利を確信した者にしか浮かべえない程に嗜虐に満ちた物であった。

「リクエストがあるなら聞くぜ～？
ほら。焼いて欲しいトコ順番に言えや。
片っ端から消し炭にしてやるからよ！！」

クルクルと回転を続けた火炎銃の柄が、再び少年の左手に収まった。
掌からは橙赤色の燐光が漏れ出し、少年が火炎銃にナニかを蓄えている様がまじまじと見て取れる。
――次こそ、手加減なしの最速弾が来る。
先ほどよりも更に速い火炎弾。
初見の6割増しの速度を誇る炎の弾丸。
常人ならば、恐らくは回避どころか視認すら出来ない速度のソレは、青い鎧ごと男の身体を骨まで焼き尽くすことだろう。
それを確認した男は――。

「……悪いな、ガキ。
時間切れだ」

ニヤリと笑ってから、消えた。

「は――――――？」

そして、少年は目を丸くした。
粉雪の様に飛び散る粉塵だけを残し、突如として視界から消失した、青い鎧。
少年は呆けた様な声を零しながら、反射のみでその姿を探した。
――否。探せなかった。
消えた男の姿を探し始めた頃には、ゴウという風鳴りの音が、既に頭頂にそば立つ耳の真上を通過した後だったからである。

「おっと。チョイと上だったな」

「に！？」

真隣から、声が聞こえた。
驚愕に目を見張り、視線を右に流した少年。
そこに聳える鎧姿が目に入り、少年の体毛はあまりの怖気に逆立った。
青い男はそこに立ち、振り抜いた剣の回転を利用しながら構えを取り、既にその刃を大上段に振りかぶっていたのである。

「――――っ！！」

生存本能だけで背後に跳躍し、少年は男から距離を取った。
同時に少年の積み重ねた戦闘経験は、回避しながら左手で最速弾での追撃までをも紡ぎだす。
放つは3撃。至近距離から放たれる、回避不能の3条の炎閃！！
――だが。
それらが、それらよりも尚速く振り出された男の剣戟によって残らず切り裂かれたのを見た瞬間、少年の意識はとうとう凍りついた。

「ふざけろ――」

悪態を吐きながら、少年は悴む手で次弾を放とうと銃を構えた。
無感情な貌で、ユラリと構えを作る男。
跳躍した少年の身体が5メートルは離れようかとした次の瞬間、
敵は少年の眼前に幽鬼の如く立ち、同時にその剣を振り抜いていた。
反射のみで地へと転がり、少年は敵の攻撃線を間一髪で避ける。
白刃が再び少年の頭部を再度掠め、一房の赤髪を火の粉の様に散らした。
烈火の様に睨み付けながら、少年の口からは悪態が漏れ続ける。

「ざけんじゃねぇっ!!　何だそりゃ!!
テメェ!!　さっきまでと全然動きが違うじゃねぇか!!」

口元に獰猛な笑みを浮かべつつ、男の剣戟が迫る。
少年が5メートル先で地を蹴ったのと同時に、男の右足はチェス盤模様の舞台を鋼の足で踏み抜いた。
踏込みは真実の意味で地を抉り、粉砕した床板を巻き上げながら男の身体を弾丸へと変える。
男はその巨躯からは想像も付かない程の速さで地を駆けると、距離をとる少年に倍する速さで間合いを詰め、更に追撃をかけてゆく。
少年の額を掠めた、燻し銀の鈍い閃き。
舞い散った髪は、先刻よりもその量を増していた。
一撃を重ねる毎に、剣戟の距離は少年の本体へと近づく。
枷を外された様に動く身体に振り回されながらも、男は着実にその動きを制御し始めていた。
驚愕し、蒼褪めた少年の貌。

「気のせいだろ?」

振りぬいた腕の下にその姿を認めつつ、男は一言、少年の疑問に答えを返した。
間一髪で距離を取ろうと努める少年に、男は更にたたみ掛ける。

王女の采配は正しかったのだ。
昨日から丸一日以上にも及んで続けられた、拷問にも等しき連続戦闘。
しかしそれを乗り越えた現在、彼がこの世界にて積んだ戦闘経験が確実に慣れを齎し、ここに至って遂に彼の動きを流麗な物へと改善するに至っていたのである。
――否。事実は、寧ろ取り戻した、と表現するが正しいか。
男の動きは、確かに彼が元の世界に居た頃の物に近づきつつあったのだ。

無論、それは瞬時に変化を生む類の要素では無い。
今こうして動けているのであれば、彼はこの戦闘の初めからこの動作に耐えるポテンシャルを持っていた筈なのである。
だが、それならば男が今まで手を抜いていたのかというと、実はそういう話でもない。
少年にとっては、序盤に余裕を見せ過ぎたのが仇となった形である。
連続戦闘によって動きが鈍っていた男の身体は、軽い運動を熟した事によって整理運動が成され、今漸く大会での経験値をそのまま生かし切れる状態になり始めていたのだ。
異世界人として並外れた身体能力を誇り、同時に守護魔の超回復能力までをも手に入れた男の身体は、少年との戦闘の最中にも確かに疲労の回復を続けていたのである。

勿論。いかに回復したと言っても、今の男のコンディションは全

快には程遠い。
疲労に疲労を重ねた今の状態では、彼の能力には心身共に少なからぬ制限が掛っていると見て間違いは無いだろう。
だが。それを差し引いても尚、今の男の身体能力はこの世界に来てからの最大値を優に上回る程になっていた。
疲れていても尚、今の彼は大会を経験する前よりも遥かに強い。
それこそ。今ではあの武装姫とて、魔法剣無しでは彼には太刀打ちし得ぬ程に――。

「クソが！！」

急激な身体能力の上昇と、動作の向上。
敵の急激な戦闘能力の変化に呑まれた少年は、再度悪態を吐きながら敵の攻撃を回避した。
しかしその声は、先ほどまでとは僅かにニュアンスを異にした物に思われた。
躱し切れなかった剣風が腹部を抉り、血飛沫が少年の視界を覆った。
――問題無い。
この程度ならば1時間で治る事など、皇帝による連日の拷問を乗り切った少年は熟知している。
痛覚を無視しながら地を転がり、床を踏み抜いた少年は、男を睨みながら奥歯を鳴らした。

「白々しいんだよテメェはぁ！！
慣れたのがテメェだけだと思うんじゃねぇぞ！！」

勝負を決めようと、黙したままに剣を振る男。
眼前にて振るわれる白刃を映したまま、少年は激高しながら地を蹴り抜いた。

小さな身体が、垂直に跳ね上がる。
斬撃に靴の底を削られながら、しかし少年の身体は羽でも付いたかの様に空中へと舞い上がった。
それは、まるで重力を冒涜するかの様な天への飛翔。
男は飛んだ敵を目で追い、１０メートルを優に超える程の“上空”へと視線を向けた。
――星々の海を泳ぐかの様に、少年の身体が真夏の夜空に浮いている。
男の予想よりも遥かに緩やかな放物線を描きながら、少年の身体は確かに空へと浮いていた。
脚力のみで空を飛んだ少年の動きは、しかし魔術でも手品でもありはしない。
これこそが少年がこの世界に来た為に獲得した、男の身体能力と対極に位置するとも言える“性質”だ。

“アボガドロの法則”と呼ばれる物がある。
これは“同圧、同温、同体積の気体は同数の分子を含む”という化学の大原則であり、更に汎用的に解釈し直すのであれば、物質の質量とは即ちそれを構成する分子の質量の和に等しい、というあまりにも当たり前に過ぎるルールである。
具体例を出すのであれば、１ｍｏｌの酸素分子を集めたとすれば、我々の宇宙ではその総質量は常に約３２ｇになるという事だ。

だが。これはあくまでも我々の世界に於ける観察結果に他ならない。
宇宙より更に視野を広げ、異なる理が支配する異界へと目を向ければ、１ｍｏｌの酸素が常に３２ｇの質量を持っているとは限らない事に気づくだろう。
質量の発生機構については、まだハッキリとした証明が成されている訳では無いが――。

一説によると、我々の存在する空間は“ヒッグス粒子”という未発見の素粒子によって満たされており、それらから物質が受ける“湯川相互作用”と呼ばれる抵抗が物体の“動かしにくさ”として現れている物だ、とされている。

水を満たされたプールを歩く時を想像するとわかりやすい。

水中では陸上よりも身動きが取りにくいという事実は、誰しもが間違いなく知っている自明の事実だろう。

現代物理学に於いては、この“場に満たされたナニかから受ける抵抗”こそが質量なのだと解釈されている。

ここで重要な点が一つ、ある。

今我々は陸上と水中を比較して考えたが、条件はこれ以外にもまだ考え得るという事だ。

例えば陸上にしても、まだそこには空気があり、即ち空気抵抗が存在している。

もしも我々が真空中で行動すれば（生存できるなら）その方が遥かに身動きし易いだろうし、もしも水の代わりに蜂蜜でも満たしたプールで行動すれば、それは水中よりも遥かに行動しにくい場になるだろう。

そして幸か不幸か、全宇宙をヒッグス粒子に満たされた世界に生きる我々は、自分たちが居るのが水中なのか、空気中なのか、或いは真空中なのかを判断する術を持たない。

比較対象が存在しないからである。

だが。逆に言うと、それは我々よりも身動きがし易い宇宙に生きる生命体が存在しても何ら不思議は無い、という意味にはならないだろうか？

――結論を述べる。

少年・マルスが生まれ、育った世界とは、つまり“そういう世界”であったのだ。

ヒッグス場が物質に及ぼす抵抗がこの時空よりも弱く、全ての素粒子、ひいては彼を構成する全ての元素の質量までもが、この時空よりも遥かに小さな世界だったのである。
彼の世界に於いてあくまでも“当たり前”であったその事実は、しかし世界を渡り守護魔となった現在、差異が彼自身の常理を外れた身軽さという“性質”として現れるに至っていたのだ。
少年の体重は、この惑星上での重量に換算して５ｋｇも無い。

上空へと飛翔を果たした赤い少年は、男の頭上から最速の火炎弾を乱射した。
人間の体構造は、頭上に強い攻撃を放てる様には出来ていない。
少なくとも、剣でどうにかする方法など無い。
地上の身体能力では少々遅れを取ると認めざるを得ないが、しかし軽量によって制空権を抑えられる以上、勝負の分はまだ少年にあるだろう。
男は火炎弾を捌き、躱しながら、落下の瞬間を待ち構えている。
敵が攻撃の届かない、空を舞う小鳥であるのなら、地に落ちた瞬間にこそ仕留める機会を見出すのは道理だからである。
――７メートル。
――６メートル。
――５メートル。
如何に軽量と言えど、流石にその密度は大気を下回らない。
少年の身体は、着実に万有引力の法則による支配を受け落下を始める。
――４メートル。
――３メートル。
高度を下げる毎に銃口が近づき、弾丸の体感速度が増してゆくデスゲーム。
蒼赫の距離が５メートルを切った時点で、既に男は火炎弾を凌ぎ切れなくなっていた。

プラズマの飛沫が飛び、跳ね、男の顔を焦がしてゆく。
切り裂ききれなかった弾丸が腕に触れ、肉の焼けた匂いを夜のコロッセオに撒き散らした。
黒ずんだ額からは血が流れ、燃える様な赤い線を男の頬に描いている。

それでも、男は退かなかった。
例え少々の傷を負おうと、次瞬に敵を仕留め得るならば何ら鑑みるに値しない些末事であると、獣染みた彼の蒼眼が示唆している。
これは、言わばチキンレースだ。
先に退いた方が敗北する、命を張った度胸試し。
ならばここで退くなどと、仮にも“英雄”なんて大層な称号を貰った今、男にとっては有り得まい。
――2メートル。
少年が剣の間合いに捉えられる。
一太刀、その腹に男の剣戟が叩き込まれれば、勝負はそれで終わるだろう。
そして人体の構造上、空中から降ってきた少年にそれを回避する術など無い。
男の口元は、確信した勝利によって僅かに緩んだ。

それは、間違いの無い真理だったろう。

「誰が――」

標的が、この少年でさえなかったのなら――。

「落ちるかバカヤロォ！！」

男の表情が驚愕に歪んだ。

落下してきた少年が発した、破裂音と眩い閃光。

否。それは少年自身が発した物では無い。

少年の履いていた硬質の靴が火を吹いた事による爆発音とその光だった。

身体を男の剣に斬り裂かれようとしたその刹那、少年は靴に仕込んだ新たな“武器”を発動させ、再度その身体を空中に跳ね上げたのである。

「なんだそりゃ！？」

靴の底から噴出される、小さな炎。

その反動で再度天に飛翔し行く敵の姿を見送りながら、男は驚嘆の声を上げた。

少年の顔が満足げに緩み、してやったりとその瞳が歓喜に揺れる。

そう。この状況は、少年が既に想定していた物だったのだ。

自らが身軽さという性質を備えている事を一早く悟っていた少年は、この世界に召喚された極めて初期の段階から、既にその理を最大限に御する事を考えていたのである。

少年が僅か数日で生み出した兵器は、計４種。

プラズマの弾丸を射出する火炎小銃と、巨大火球を放つ火炎大砲。

この二つは少年の世界の武器をこの世界の理を用いて再現した物ではあったが、同時に他の兵器が使えないという弱点を補う為の苦肉の策でもあった。

作用反作用の法則が存在する以上、体重が僅か５ｋｇしか無い少

年は、実質的に“反動”が存在する武器を（実用的な範囲では）一切使用する事が出来なかったのである。
火炎という無反動の武器を選択したのは、半ば消去法による消極的な決定であったとも言える。

そして、彼が生み出した三つ目の武器。
性質が持つ弱点の克服では無く、寧ろ長所に焦点を当てて開発した道具こそが、この“火炎靴”であった。
自らの軽量から跳躍という長所に思い至った少年は、この世界に於ける自分の活路は空中戦にこそあると考えたのである。

５ｋｇｆの物体を１０メートル跳ねあげるのに必要なエネルギーは、（この星の重力加速度が地球と同じだとすれば）僅かに５００Ｊ。これは一般的なピストル弾薬の運動エネルギーにほぼ等しく、逆を言えば、仮にこの少年が我々の世界のピストルを地面に向けて撃ったとすれば、それだけで彼の身体は１０メートルの上空に跳ね上がる事を意味している。
少年の出自は、火炎や爆風に関する技術が発達した世界だった。
自らの体重が極端に軽減された事を悟るや否や、彼が即座に爆風による空中移動という思い付きに至ったのは道理と言えるだろう。
彼の開発したこの“火炎靴”は、彼の持つ火炎銃と同等の機構によってエネルギーを抽出する能力を有する。
違うのは、火炎銃が炎を遠方に射出するのを目的としているのに対して、火炎靴は靴底の内部に炎を維持し、空気を熱膨張させる事によって“爆風”を生み出す事を目的としているという点だろうか。
無論。それはこの世界の常人が使っても精々バランスを崩す程度の火力でしかない。
――だが。
しかし少年が空を舞う為には、それだけで十分に過ぎた。
事実。彼はこれを用いて銀の国の時計塔に窓から侵入している。

少年は、驚くべきバランス感覚でクルクルと宙を舞う。
火炎銃の銃口は男に向き、安全圏から必殺の機を伺っていた。
彼らの距離は、現在凡そ9メートル弱。
これだけ離れていれば、ネプトは無傷なままに火炎弾を切り裂いてしまうだろう。
それが分かったからだろうか。
マルスも銃を構えたまま、落下するに任せて時を待っている様であった。
炎の翼を得た敵を見据え、ネプトは小さく舌打ちをする。
――あの敵は落ちてこない。
ネプトは黙したままに、敵が二度と自分の攻撃圏内には踏み込まない事を悟った。
ならばこの先は、敵の空爆に晒されながらジリ貧になるしかあるまい。
空を舞う翼を持たない以上、彼にとってそれは確定した未来である。
そう。
それが、彼でさえ無かったのなら――。
男は素早く剣を鞘に納めると、右手を強く握って拳を作った。
上空に大きく振りかぶり、まるで瓦割りの名人の様に強く、鈍い音を響かせる様に、チェス盤模様の舞台を殴りつける。
守護魔の怪力で殴られた舞台は陥没し、太い幹の様な彼の腕はそ

の根元までが大地に飲み込まれた。
次いで、左腕を振りかぶった青い守護魔。
現象は繰り返され、ネプトの両腕は完全に舞台に埋まり込んだ。

その行動を上空から眺めていた、赤い守護魔。
マルスは幼さの残る顔立ちに凶悪な笑みを張り付けた。
――床板でも投げるつもりか。
悪くは無い手だろう。
否。この状況では、もうそのくらいしかネプトに有効打は無いのである。
無論、マルスとてみすみすソレを食らう様なバカでは無い。
この距離からの、しかも重力に逆らった上方への投合など火炎靴の空中移動で十分に躱し得るだろうし、そもそも投げられた床板を打ち抜けば済む話である。
少年は火炎銃の引き金を引こうと狙いを定め――。
完全に、思考を凍りつかせた。

「は――――――？」

轟音と共に、揺らめく大地。
空間がねじ切られたかの様な、或いは歪んだかの様な違和感が視界に生じ、不快感を覚えた少年は咄嗟に目を擦った。
――それは、果たしてどんな錯覚だったのか。
１０メートルもの上空から見下ろしていると、少年にはコロッセオのステージが半分、まるで生き物の様に脈を打っている様に見えたのである。
少年の困惑が強まる。
夜景にボンヤリと輝くその景色に、彼の背筋には確かな悪寒が這い回る。
そして、次瞬。それは決して見間違いなんかでは無かった事を理

解した。

舞台が、割れた。

直径にして１００メートルを超えようかという、コロッセオの舞台。

何の冗談か。石造りの筈のそれが男の両腕だけで十分の一程も砕かれ、直径１０メートルに迫る巨大な瓦礫板と化して動いていたのである。

パキパキという、軽い音。

ゴリゴリという、鈍い音が響く。

闇夜に蠢く魔獣を思わせる巨大な瓦礫は、その頭を大男の腕に抱えられ、燭台を倒しながら脈動してゆく。

「うぉぉぉおおおおおおおおお！！！！」

雄叫ぶ様な、力強い咆哮。

ソレが闇夜に響いた瞬間。

――舞台は、持ち上がった。

直径１０メートルの石板は男の腕にその土台を掴まれ、まるで聳え立つ塔の様に少年の隣にまでその射程を延ばしていたのである。

無論、男にはそんな物は振れない筈だ。

仮に持ち上げる事が出来たとしても、“反作用”が存在する以上、本質的に人は自分よりも重い物を振る事など出来ないのである。

だが。男とてそれは感覚として理解していたらしい。

驚くべき事ではあるが。男は瓦礫を右腕一本だけで持ち上げていた。

左手は足元の舞台を掴み、身体を固定する事で支点を作っている。

――これならば。力さえ足りるのなら、十分に振れる。

空を飛びまわる少年を、十分に叩き落とす事が出来る。

青い英雄は、まるで世界の物理法則そのものをねじ伏せるかの様

に、悪魔の様な力で右腕に掴まれた巨塔を振り回し、舞台に足をめり込ませながら空中に舞う少年へとそれを振り下ろした。

「って、んだそりゃぁぁぁぁあああ！！」

左下から迫り来る石の大剣。

舞台は風鳴りの音を高く鳴らしながら、少年を粉砕しようと空を切った。

――回避は、無理だろう。

火炎靴で避けるには、対象があまりにも大きすぎる。

津波を横に走って避ける様な物だ。避けられない。

ならば――。

「嘗めんなッ！！」

マルスはその背に担いだ身の丈程もある大筒を取り出した。

――火炎大砲。

彼が生み出した中で、現在最大の瞬間破壊力を誇る“兵器”である。

ベルトを外して肩に担ぎ、セーフティを外す。

カバーを空け、左手をトリガーに装填し、迫る瓦礫へとその標準を向ける。

頭程も口径のある砲身が禍々しい輝きを放ち、数秒後に約束された破壊に向けて歓喜した。

「のやろぉぉおおおおおお！！！！」

絶叫と共に解き放たれる、災禍の巨大火球。

嘗て銀の国の時計塔に引導を渡した炎の鉄槌が、男の振り翳した石剣に向かって振り下ろされ、爆風と衝撃波が伝播して標的を内部

から崩壊させてゆく。
　砕かれた石柱は細かな瓦礫となって飛び散り、マルスの身体に軽い打撲を残しながらその役目を終えた。
　生まれた大量の瓦礫は空中で拡散し、石礫の雨となってコロッセオに降り注いでゆく。
　――これほど障害物が多い中では、火炎靴による跳躍は危険だろう。
　そう判断した少年は、大きめの瓦礫を蹴って男と距離を取りながら、猫科の小動物の様な俊敏さで舞台の上へと舞い降りた。

自らの怪力によって地に叩き落とした敵を見据えつつ、ネプトは再び小刀を構えた。
粉砕された舞台の上には、未だに瓦礫の雨が降り続けている。
否。その光景は、寧ろ時期外れの雹とでも形容した方が正しいか。
石から生まれた大粒の雹達は、バラバラという鈍い音を響かせながら、舞台に立つ二人の役者の上へと容赦なく降り注ぎ続ける。
打撲以上の負傷など与え得ないそんな些末事は思考から排除し、燻し銀の切っ先は静かに雹の向こうの赤髪へと向けられていた。

「武器、無くなっちまったな」

ニヤリ、という声。
ネプトは獰猛な眼光で目前の敵を射抜きつつ、まるで揶揄するようにそう告げた。
マルスは、その幼い貌を憎々しげに顰めながら舌打ちしている。
背負い直そうとしていた火炎大砲を思い直したかの様に右手で掴むと、忌々しげに舞台の上へと投げ捨てた。

「いつ気付きやがった！？」

「ま。怪しいと思ったのは、ウェヌスから話聞いた時だな。
てめぇ、ソレであの塔を半分吹っ飛ばしたそうじゃねぇか。
おかしいと思ってたぜ。そんだけの威力がある武器なら、何で俺には撃たなかったのかってなぁ」

歯を鳴らす少年。
ネプトはフッと口元を緩めてから、続けた。

「使わなかったんじゃねぇ。
使いたくても使えなかったんだろ？
そいつはおそらく単発だ。
そりゃ、敵陣じゃ最後まで取っときてぇよな」

それは、どこか確信を帯びた様な声だった。
誤魔化せないと思ったのか、或いは初めからそのつもりも無かったのか。
少年の瞳は、ただ烈火に染まっている。

「ご名答だ！！　ゴリラのクセに知恵回らぁな！！」

マルスは男の推測を肯定すると、八つ当たりする様に火炎大砲を蹴り飛ばした。
既に役目を果たした以上、最早抱え込んでいても重石にしかならないからである。
金属の抜け殻は瓦礫塗れのコロッセオをカランコロンと転がり、寂しい音を鳴らしながら舞台から転がり落ちた。
未練は無い。
連発を前提として作成した火炎小銃と違い、大威力のみを突き詰めた火炎大砲は、一発の火球を撃つだけのエネルギーを蓄積するのに一晩掛かるのだ。
今役に立つ見込みが無い以上、足元に転がっているだけ邪魔だろう。
少年は、そう考えた。

相当高くまで跳ね上がった物もあったのか。
礫の雨は未だ止む気配が無かった。
コツコツという鈍い雨音が響く戦場跡で、二体の魔人は向かい合

っている。
お互いに小さな傷は幾つも見られるものの、致命的な変化は戦闘開始時から然程見られない。
――男の身体能力が急上昇し、少年が最大火力の手札を失った事以外は、だが。
自らの不利を悟ったのだろう。
少年は忌々しげに舌打ちし――。

「……しゃあない。遂にコイツのお披露目か」

ニヤリ、と。
腰のホルスターから、４種目の武器を取り出した。

「なんだそりゃ？」

男が疑問符を浮かべた。
少年が抜き出し、男の瞳に映った武器。
それは、ナイフだったのである。
黒光りする刃が、不気味な光沢を放ちつつ四方の燭炎に揺らめいている。
全長にして少年の橈骨程も無いそれは、男の持つ刀に比べれば玩具にも等しい程度の殺傷力しか無いだろう。
只でさえ文字どおりに大人と子供程も体格差がある両者にして、この刺殺武器としての性能差。
冗談の様にリーチの違う現状を鑑みれば、男の疑問符も当然の物だったに違いない。
だが。そんな彼の分析に気を配る事すらも無く、少年は左手で刃を構えたまま、男に向かって一気に踏み込みを掛けた。

――鋼の音が反響した。

男の頸動脈へと振り抜かれた少年のナイフが、上段に構えられた男の小刀に易々と阻まれる。
狩猟時の肉食獣の如き俊敏さで放たれた一撃には、しかし少年の性質上全く重さが伴っていなかった。
突進の勢いを得て尚、ナイフを止めた男の剣はピクリとも動かない。

「なんのマネだ？」

「さぁな、っと！！」

鍔迫り合いにすらならない刃の会合を軽く流し、少年は再度身体を流動させた。
少年の刃が夜気に霞み、男が追撃を放つに先んじて鎧の隙間を穿たんと振るわれる。
少年の利はその身軽さだ。
慣性の法則に従い、最高速はともかく“初速”は男のそれを上回る。
不意を突かれない限り、懐の内の超近距離であれば、少年とてそうそう男の剣に捉えられる事は無いのだ。

だが。
それはあくまでも少年が男の攻撃を躱すという行為について述べた話に過ぎない。
如何に少年が速かろうと、それは彼らの有り余る体格差を覆すだけの要素（ファクター）に成り得る事象では無かった。
疾風の如く切り返される少年のナイフは、しかし正面から合わせられる男の短刀をピクリとも揺らせず、小さな火花を散らせるだけに終わっている。

――男は、その瞳に宿る猜疑を尚深めた。
少年が振るい始めた、小さな刃。
火炎銃を破られ、大砲を失った今、少年が取りだした、新たな武器。
ここまでは、まだ解せるだろう。距離を取って戦う事を危険と判断した敵が、接近戦にこそ活路を見出すのはある意味では道理だからである。
だが。それにしても、これはあまりにも下策に過ぎはしまいか？

少年の振るう刃は、男にとって何の脅威でもありはしなかった。
世界を渡る以前より、数え切れぬ程の猛者達と刃を合わせてきた彼である。
“斬り合い”という行為に関して言えば、彼には刃渡りに関わらずありとあらゆる種類の武器と渡り合ってきた経験がある。
そして。それ故に彼には、この少年の技量では自分に傷を付ける事は出来ないとハッキリと分かってしまった。
この少年は、確かに速い。
慣性を無視した様な足運びで縦横無尽に飛び回り、五月雨の様に剣戟を浴びせてくるその身のこなしは、確かに体術としてある種完成した物なのだろう。
先手必勝の理に適った、軽快にして鋭利な殺陣だと評せる。
――だが。言ってしまえばそれだけなのだ。
軽量故の速さとは、裏を返せば一撃毎の重さがまるで無いということ。
文字通りに子供程度の力しか感じない敵の、斬撃と言っていいのか分からない威力の斬撃など、男は何度捌いてもまるで疲労を感じない。
この程度では、上手く隙間を突かない限り、男の纏う鎧を貫くことなど出来ない。
そして、おそらく。この少年にとって、これはあくまでも全力な

のである。
男の見る限り、敵の斬撃は飛び跳ねる足運びと共に、全身の力を振り絞って放たれていた。
これでは、いずれ少年がスタミナを使い果たして足を止めるのは道理だろう。
先の火炎銃の方が、男が経験という観点から見て遥かに与し難かっただろうに――。

「づ！？」

男が剣を合わせつつ、そう分析した時。
不意に、苦悶の声が漏れた。
十数合目の打ち合いを終えた瞬間、突如として響いた苦痛の表れ。
疲労が限界を超えた少年の物では無い。
驚くべき事に、ソレは男の口から漏れた物だった。
ニヤリ、と少年が嗤った。
それは自らの武器が用を成した事を確信し、口端を吊り上げた悪鬼の笑みだ。
再度。少年は男の頸動脈に向けて、黒光りするナイフの刃を振り下ろした。

「アア〝ァ！！」

再度、そして今回はよりハッキリと、男の口から苦悶が漏れた。
斬られてはいない。男は少年の刃をしっかりと受け太刀している。
接触自体も、傍目にはコツン、という形容詞が似合いそうな程度の、本当に軽いものだった。
しかし。それにも関わらず、少年の刃を受け止めた瞬間、男は確かに呻き声を上げていたのである。
ジリジリという、耳障りな音。

苦痛に歪んだ彼の目が見据える先。
彼の持つ剣からは、何故か陽炎が立ち上っていた。
少年は、尚も満足気に破顔する。

――電気メスという道具がある。
人体に高周波電流を流し、人体そのものを抵抗とする事によって電熱を生み出し患部を切除する医療器具であり、タンパク質の変性によって切断と同時に毛細血管の止血も行える優れ物だ。
コレは、対象を加熱するという点で少年の振るうナイフに共通している。
しかしその性質は救命と殺傷という相反する目的が示す様に真逆の物であった。
少年のナイフは電熱を発するのでも無ければ、電流を流して対象物に熱を発させるのでも無い。
もっとシンプルで、彼の持つ理の根源に関わる現象。
純粋に“熱”のみを放出するのである。
少年が振るう黒塗りのサバイバル・ナイフの柄には、彼が扱う他の武器と同様の機構が組み込まれ、刃に鋼鉄の融点を超える程の熱を帯びさせていた。
――その温度、最高値にして実に摂氏２０００度。
これも耐熱性能に優れた氷の国謹製の“ルシフェル鋼”の刃だからこそ形状を維持可能な数値であって、武の国の剣に広く使用されている“アッシュ鋼”では刃を合わせ続けるだけで易々と変形を起こす熱量だ。
否。剣の形状以前の問題として、刃から柄に伝わる熱量に、持ち手の皮膚が耐えられない。
――高熱ナイフ。
剣技で圧さずとも剣士を仕留め得る、近接戦闘用刀剣殺し。

前回の戦闘より敵の性質を理解した少年・マルスがその対策として編み出した回答がそれだった。

「の野郎。次から次へと――！！」

熱伝導によって既に１００℃を超えた柄を気力で握り、ネプトは苦々しげに歯を鳴らした。

その間も、高熱ナイフは休む間も無く振るわれる。

初撃よりも熱量を増した黒塗りの刀身は最高値に近づき、今では赤熱すらも始めていた。

黒塗りの刃がコロナを纏い、燭台に照らされたコロッセオの夜気を斬り裂く。

――鋼の音が鳴る。

――鋼の会合の度に、火花が散る。

小刀の柄に近い部分に刃を合わせ、形だけの鍔迫り合いを演じつつ、男は少年が溜飲を下げた様な笑みを浮かべているのを見つけた。

「バーカ。おれっちを誰だと思ってんだ」

悪鬼の口が、言葉を紡ぐ。

「武器商人（アームズ・ディーラー）・マルスっていや、地元じゃチィと有名だったんだぜ！？」

小刀から白煙が燻った。

男の掌から煙が上がり、肉の焼ける臭いが立ち込める。

胼胝（たこ）に覆われて厚くなった皮膚が焼け爛れ、男の貌が苦痛に歪んだ。

「チッ！！」

ネプトは反射的に脚を振りだした。
幹の様な脚が振るわれ、マルスの横腹目掛けて致命的な威力を伴った蹴りとなる。
――少年の身体が飛んだ。
蹴りを受けたから、では無い。
男の蹴りを予期し、回避する為に背後へと自ら飛んだ結果であった。
同時に、男の手からは小刀が落ちた。
彼の繰り出した蹴りは、剣を握っていられなくなったが故の苦し紛れである。
嗤ったのは少年だ。
敵が武器を手放すこの瞬間こそ、彼がナイフを抜いた瞬間より待ち続けていた好機だったのだから――。
虚空に身を躍らせつつ、少年はナイフを右手に持ち替え、左手で火炎小銃を抜いた。
狙いは刀剣。
男が手放し、今地面に落ちようとしている敵の牙だ。
最速弾として放たれた火球は刃の側面を貫き、鋼の持った熱を更に上昇させた。
――刃が、砕ける。
蓄積された熱量に耐えられず、半ばから折れて砕け散る。
少年が5メートル程の距離を跳躍し、着地した瞬間、残ったのは右腕を抑えて苦痛を堪える男と、その足元に散らばる用を成さない鉄くずだけとなった。
「武器、無くなっちまったなぁ！！」

先の意趣返しの様に、少年はそう嘯いた。
火炎銃の銃口が、再度5メートルの距離を隔てて男へと向けられる。
右手には高熱ナイフ。
どのような原理なのか。
右手に移された瞬間から徐々に赤熱を弱めているそれは、しかし依然として刃物としての役割を果たすだろう。
――対する、男の装備。
剣を折られた今となっては、男が所持しているのは総身に纏う鎧のみである。
それは一般的な矢程度ならば弾き返す程に上等な代物ではあるが、しかし少年の火炎銃に対して効果があるかと聞かれれば首を傾げざるを得ないだろう。２０００℃の刃を受け続ければ、熔解は免れまい。
今度こそ、決まりだろう。
少年の弾丸は、今度こそ男の身体に致命傷を与えるに違いない。
それは、最早確定した未来である。
少年がそう確信した瞬間――。
男は半身の姿勢を取りながら、その重心を深く下げた。
「あん？　何してんの？　てめ」
少年の顔に疑問符が浮かんだ。
恐らく、男の行動の意味が本当に分からなかったのだろう。
男はただ、フッと口元を緩めていた。
「ちぃと昔の話だけどよ。
俺の生まれた島じゃ、中々良い鉄が採れなくてな。
あんま良い刀が作れなかったんだわ」

少年が首を傾げた。
男の独白の意図が分からず、少年は只々戸惑いの色を深めた。
男は、静かに静かに呼吸を落ちつけながら、続ける。

「お陰様で、武器の不利を補う為に剣術が発達したらしいけどよぉ。
それでも、流石に限界があってな。
まあ。言っちまえば、駄目なモンは駄目なんだわ。
とんでもなく硬ぇ鎧が自慢の“クソッたれ帝国”が攻めて来た事があってなぁ。
ドンパチやったあの日にゃ、そりゃぁ酷ぇ目に会ったもんだ。
……百人斬り程度で剣が折られるんだもんな。ありゃ反則だ」

断片的な史実に、少年の頭は追いつかない。
男が語る歴史の真偽も、意味も、意図すらも分からない。
困惑する少年を余所に、男は只々、懐かしむ様にフッと笑っていた。

「だからよ。剣が折れた後にゃなぁ。
こうやって、拳で鎧をぶん殴ったもんだぜ!!」

「ア・リ・エ・ネ・エ・だろぉがっ!!」

少年のツッコミがコロッセオに響いた。
男は首を傾げている。
――何故、そこで首を傾げるのか。
少年は犬歯を?きだしにしながら、ビシッとナイフを男に向けた。

「バカかテメェは!!　ど~考えてもオカシイだろ!!
剣が作れねーのに何で剣技が発達すんだよ!?

１人で１００人斬らなきゃなんねぇとか、そんなに戦力差あんなら剣使うな！！
そんで殴んなや！！
普通に大砲とか榴弾とか他に手ぇあんだろ！？」

「タイホウ？　ああ、“大陸”の新兵器だっけか？
は。あんなちゃちな道具で“南方”の鎧がどうにかなるかよ」

「どんな鎧だぁっ！！
ってか、待て！！
大砲が効かねえ鎧を殴った！？
そんなモンどうやって――」

「お前こそバカか？　そんなモン、内功練って鎧の内側で共鳴させりゃ一発で――」

「どうにかなって堪るかバッキャロォォオオオ！！！！」

――守護魔。
彼らの戦闘とは、即ち常識破りを競う戦いである。
この世界の常識からすれば考えられない様な常識の下で生まれ育った彼らは、この世界では考えられない様な理を当たり前の事象として持ち合わせる。
そして、それは各守護魔間の常識の差異についても同義であり、今回はそれが最も分かりやすい状態で現れた一例だと言えよう。
……えーと、つまりナニが言いたいのかというと。
武器商人（アームズ・ディーラー）なんていう肩書きを誇った少年にしてみれば、剣の不利を覆す為の剣技だの大砲を跳ね返す鎧だの、剰（あまつさ）えソレを殴ってどうにかするだのという無茶苦茶は商売上がったりというかブッチャケ悪夢でしか無かったワケである。

発狂しかけた精神を保護するかの様に、少年は火炎銃の引き金を引いた。

３０００℃を超える熱プラズマにて形成された最速弾である。

カルチャーショックどころか触れただけで精神が汚染されるレベルで男と前定条件を異にする少年は、目の前の“ヘンな生き物”を一刻も早くこの世界から消し去りたかったのだろう。

火球は、少年の嫌悪を代弁するかの様に空を切った。

「らぁぁぁあああ！！」

だが。

雄叫びと共に振り出された男の手刀は、まるでそんな少年の気持ちを嘲笑うかの様に紅球を切り裂いてしまった。

熱プラズマに触れた男の手は一瞬で炙られ、表面が炭化する程の重度の火傷を負う。

効いている。焼けただれた男の皮膚は、確かに効果があった事の証明だ。

しかし少年にとって、そんな事実は何の気休めにもなりはしなかった。

――敵は、生き延びた。

プラズマの弾丸を向けられて、しかし素手で生き延びた。

その事実が、彼の心に焦りを生んだ。

「って！！　テメェ本当（マジ）で人間かぁ！？」

「その形（なり）で言えたセリフか犬っコロッ！！」

炎を素手で掻き消した魔人が、踏み込みを掛けようと両の脚に為を作る。

少年は動転しながらも、小脳に記録された日常動作として銃を構

え、引き金を引いた。
振るわれる手刀に斬られる火球。
プラズマが一撃触れる毎に男の手からは白煙が燻り、目を覆いたくなる程に酷い火傷を負っていく。
傍目に見れば、遠距離から放たれる少年の火炎に男が一方的に嬲られているだけの虐殺。
だが、男の怪力を知る少年にすれば、火球を斬り裂きながらも男がジリジリと距離を詰めてくるという事実に追いつめられずにはいられなかっただろう。
――それもその筈。
少年にしてみれば、これで男を殺せなければ、残るは切り札の“狂炎結界（ダインスレフ）”しか打つ手が無いのである。
まだ全ての守護魔が存命し、しかも内3体とは出会ってもいない現状、切り札出すのはあまりにも早計に過ぎる。
そうなった場合、損害が大きいのは少年の方だ。

瓦礫の雨は既に止んでいた。
身軽さを頼みにステップを踏み、火炎靴の加速跳躍を駆使しつつ、マルスはネプトから距離を取る。
左手の魔法円は燐光を吐き出し、火炎銃は無限に弾幕を吐き出し続ける。
ネプトは迫る炎を躱し、負傷を顧みずに手刀で斬り裂きながら、青い弾丸と化してマルスへと猛進を繰り返す。
――男の手が焼き尽くされるのが先か、少年の身体が捉えられるのが先か。
二人の魔人の戦闘が、終局に向けて静かに終息してゆく。

男が拳を振りだした。
怪力を用いて放たれた正拳は空を切り、しかし少年の眼前１０センチを掠める。

拳圧だけで少年の眼に風がぶち当たり、眼球が乾いたかの様な錯覚を味わわされた。
――当たっていれば、少年の頭蓋はスイカの様に砕かれていただろう。
背筋に這う冷や汗を抑え、鼻腔にこびりついた焼けた肉の臭いを擦り落としつつ、少年は火炎靴を駆使して距離を取る。

「クソが！！」

少年の口から怨嗟が漏れた。
右手はナイフをホルスターにしまい、左手の魔法円へと添えられる。
鋭い視線が男を射抜いた。

「おれっちが。
切り札を、こんなトコで――！！」

少年の周囲に、禍々しい光が渦を巻く。
火炎銃を握る手の周囲では世界が歪み、限度を超えたナニカによって時空が悲鳴を上げている様がまざまざと見て取れた。
――本能的な危険を感じ取ったのは男だ。
アレだけは使わせてはならないと、男の脳は理性よりも遥かに深いところでそう理解した。
だからこそ、男は踏み込んだ。
危険を感じたからこそ、それに先んじて敵を仕留めるべく、男の両脚はコロッセオの舞台を強く踏み砕いた。
跳ね上がる瓦礫と共に、男の身体が弾丸へと変わる。
否。その様は寧ろ多段式ミサイルとでも表現した方が正確か。
一段目に当たる男の身体から、二段目に当たる爆弾を搭載した弾頭が放たれ、少年の身体を破砕せんと駆け抜ける。

――そして。
男の貌が驚愕に歪んだ。

殴りつけようとしたその刹那、目の前の少年が消えたのだ。
標的を失った弾頭は虚しく空を切り、空を切る音だけを残響として役目を終えた。
――これが少年の仕掛けた切り札か？
――だとしたら、一刻も早く少年の姿を捉えなくては命が無い。
男は今、真に絶望すべき立場にあっただろう。

否、である。
男が驚愕したのは、少年が消えた、などという、そんな事実が理由では決して無かった。
……何故ならば。男の眼球が捉えた少年の最後の姿は、その顔を男自身を遥かに上回る程の驚愕に染め、「ヒャベバァ！！」なんて叫びながら顔面にヒールを食わされた状態だったからである。
そう。敵は、消えてなどいない。
何者かに横っ面を蹴り抜かれて、左に大きく吹き飛ばされただけだったのである。
そして、だからこそ、そんな訳のわからない事態が発生しているという事実こそが、男から驚愕を引き出したのであった。
男は、チラリと少年の飛んだ方を見る。

「無礼者！！　貴様のせいで予のマントが汚れたではないか！！」

青髪の皇帝はそんな理不尽な事を言いながら、少年の口にヒールの脚をゴリゴリと押し込んでいた。

豊満な身体を包む赤マントの裾には、薄っすらと埃の様な物が着いている。
成程。どうやら、先に降った瓦礫の雨がお気に召さなかったらしい。
一度件の魔術でコロッセオを離れ、埃が治まったのを確認して戻ってきた、というところだろうか。
皇帝に顔を踏まれる少年の口からは、「が…ゴ…」という切ない呻きが漏れ続けていた。
電気を流されたカエルの様に、手足がビクンッ、ビクンッと痙攣を繰り返している。
……先の禍々しい光は、一体どこに行ってしまったのだろうか。
涙目で許しを乞うている少年を複雑な面持ちで見据えつつ。
男は、それが他人事では無いという事を思い出した。

「……」

背後を、振り返る。
男の背後には、武装姫・ウェヌスが佇んでいた。
無論、彼女が纏うのは最強の魔法金属で編まれた総鎧である。
あんな瓦礫の雨どころか、矢や鉄球が降ってきても平然と無傷を通す事だろう。
――だが、埃や衝撃はそうはいくまい。
事実ウェヌスは不快そうに眉を潜めながら、髪や鎧に纏わりつく埃を溜息交じりに払っていた。
主人を埃塗れにしてしまうなどと、従者としては不手際どころでは無い程の大失態である。

「気にしないでください」

「……」

粉塵をモロに吸い込んだのだろう。
美貌の王女は少々掠れた声で、しかし言葉を失っている男に向けて言った。

「気にしないで下さい。
悪いのは、壊れる様な舞台しか作れなかった職人です」

白薔薇の様な笑みを浮かべつつ、王女は男に向かってそう言い切った。

注）武の国王女、ウェヌサリア・クリスティーの思考
争い事は、負けた方が悪い。
→だから、破損物が発生した場合、壊れた(負けた)物の方が悪い。
→即ち、壊れる(負ける)様な物しか作れない職人が悪い。

「……いや。それもどうかと思うけどよ」

武の国の流儀に、改めて頭痛を抑えきれない男であった。

武の国主従がそんなやり取りを終えた頃、皇帝の拷問劇も一段落を迎えたらしい。
漸く解放された少年の口から、ヒューッ、ヒューッという可哀想な音が響いている。
かなり憔悴の色が濃い少年ではあったものの、青い皇帝が熱っぽい目で「立て」と命令した瞬間、バネ仕掛けの様に飛び起きた。

少年は、犬歯を剥いてニッと笑った。

「やるじゃね～か青ゴリラ！！
まさかおれっちをここまで追い詰めるとはなぁ！！
でもここまでだ！！　おれっちを本気にさせた事後悔させてやるぜぇ！！」

「……」

……どうやら少年は、今の一幕を無かった事にしたいらしかった。
火炎銃を握り、鋭く睨みつけてくる少年の目は、清々しいまでに先刻の色を再現しようと努力している。
文字通りに涙ぐましい努力だったので、男は敢えてスルーする事にした。
わざわざ触れる程の事でも無いし、
それに、状況はそんな物に触れていられる程余裕のある物では無いからである。

「チ、またか――！！」

男が視線の温度を下げた。
彼の双眸が見つめる、その先。
少年の左手からは、再度光が漏れ始めていた。
あの禍々しい燐光が、グニャリと空間を曲げてゆく。

「……マルスよ。
“ソレ”の采配は予が振る、と言った筈だが？」

「ケケケ！！　時化（しけ）たコト言うなや！！」

渋る様な皇帝の声。
左手に何かを集束させ続ける少年は、しかし軽薄に嗤い、嘯いた。
「見たヤツが全員死ねば同じコトだろ！！」
少年の殺意に呼応するかの様に、空間の悲鳴は高く響く。
「ネプト、アレは何ですか！？」
「分からねぇが見るからにヤバい。
ウェヌス！！　武器をくれ！！」
男の声に瞬時に応え、ウェヌスは足元に散らばる金属片を掻き集めると瞬時に太刀へと加工して男へ投げ渡した。
再度、先よりも遥かに上等な牙を得た青い従者が、少年の下へと踏み込みを掛ける。
――届くか？
敵の隠し持つ、謎の手札。
その正体も脅威も釈然とせぬまま、男は悲鳴を上げる空間へとその身を投じ――。
「およ？　お仲間さん発見～！！
ただいま目下戦闘中でありま～す！！」
遥か上空より響いたその声に、その場の全員が意識を凍らされた。
「「「「な――――――！！」」」」

４つの声が重なった。
突如として上から振ってきた、この場の誰の物とも似つかない、新たな声。
あまりにも緊張感に欠けた様な、凡そ戦場には似つかわしく無い様なその声は、事実年端も往かぬか弱い少女を思わせる。
――否。あまりにもこの場に似合わぬからこそ、その声が存在するという事実が、彼らの動きを停止させるに足るだけの奇妙さを備えていたのだろう。

４人の、色彩様々な８つの眼が、空を仰ぐ。
空には、月。
燭炎に照らされたコロッセオを覆う漆黒のカーテンに、キラキラと煌めく白金の星。
風が速いのか。
上空では、朝霧の様な白雲が、忙しく月の周りで渦巻いている。
――その中心。
紅く輝く月をバックに踊る、一つの影。
小さな家屋程もある葉が、何の冗談なのか、まるで天駆けるグリフォンの如くそのシルエットを浮かべている。
月明かりの中に、ライトグリーンの髪を靡かせて。
新たなる闖入者は、葉の上から頭だけを出し、コロッセオで繰り広げられる異能の死闘を観賞していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9729u/

朝日真也の魔導科学入門

2012年1月14日23時34分発行